THE CENTRAL REVIEW

中央公論

八月號

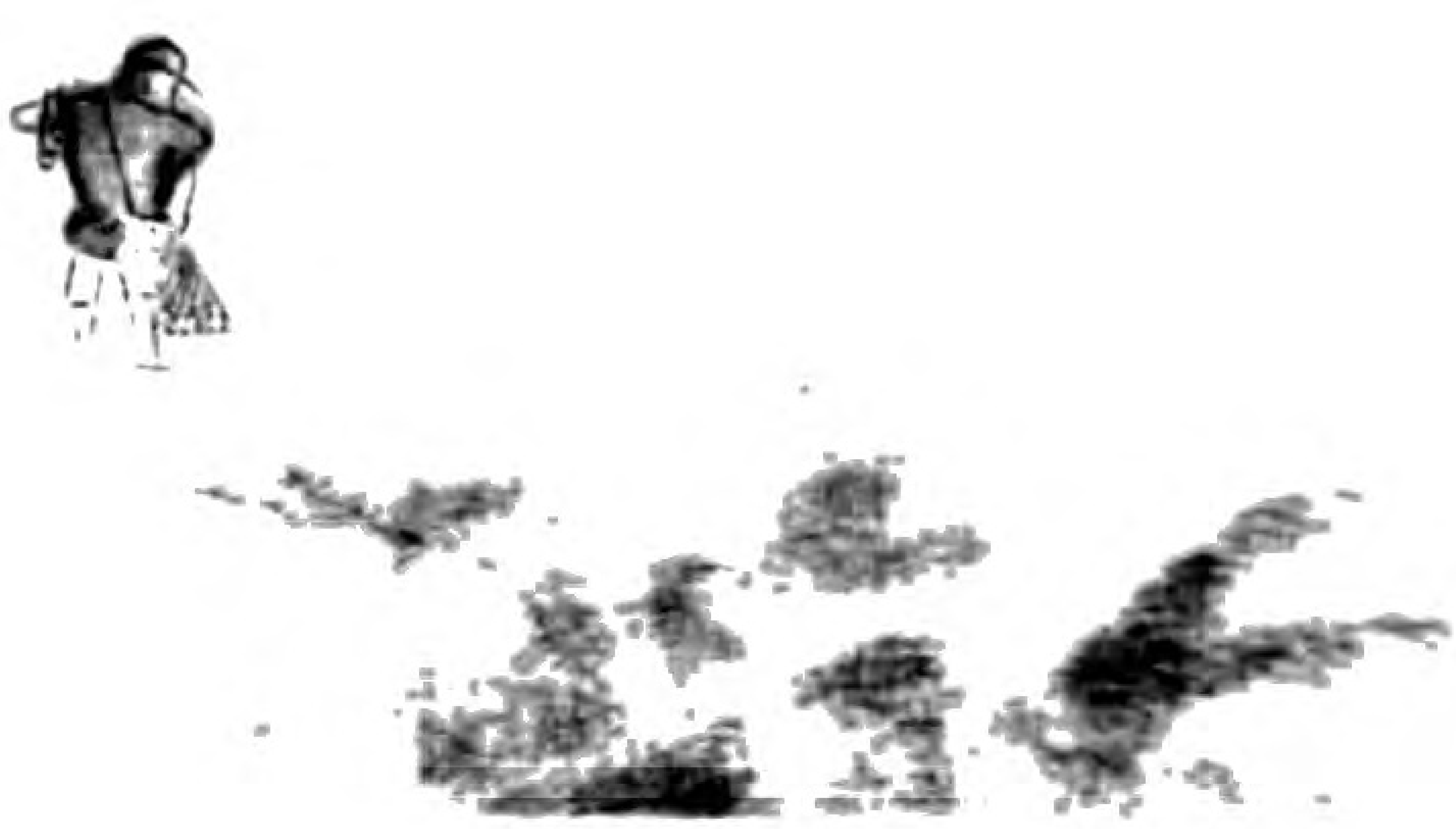
第四十一年 第八號 第四百六十三號


御買物は
松屋呉服店
東京銀座

▼想華


クラブ煉歯磨
朝と晩
食後にも怠らず
クラブ歯磨を使
へば使ふ程歯は
強くなる白くなる
保健衛生上
一番よいチ
ューブ入の
クラブ歯磨
耐久力三倍以上
クラブ歯刷子
セルロイド製





夏川　森田恒友筆

經濟學古典叢書

慶大教授 法學博士 氣賀勘重譯

スミス國富論

〔上卷〕

菊大判九六四頁 背革表裝函入

◆定價六圓八拾錢
◆送料書留卅六錢

アダム・スミスをして近世經濟學建設者なる絶大の榮譽を擔はしめたるものは此不朽の名著「國富論」なり。本書一度出でゝ獨立の學としての經濟學體系は初めて樹立せられしなり。獨逸歷史學派の大家ロッシエルも評してスミス以前に公にされたる一般問題に關するあらゆる著書は彼の意見に歸着するものと云ふ可く又その後に著されし著述は總て彼の開示せる道を辿るものと云ふ可しと。眞に本書は斯學今日の發達の源たると共に實際社會に及ぼせる甚大なる影響に至りては文明諸國の經濟的諸施設の上に今尚その跡を認め得べし。慶大經濟學部教授間に經濟學名著の標準的飜譯刊行の計畫成るや本書がその第一に擧げられたるは當然の事と謂ふ可く、而も飜譯は斯學の權威にして譯筆の流麗平易適確なること學界に定評ある氣賀博士の擔當せられしものなるが故に玆に贅言を要せざるべし。加ふるに卷頭附するに經濟學史研究の第一人者高橋教授の詳細なる解題並に傳記(百三十餘頁)を以てす。又必讀の文字たるなり。敢て經濟學に興味を有せらるゝ人士の書架に缺く可からざる書として薦むる次第なり。

第貳編 セイ經濟學 增井幸雄譯

日下印刷中
近日發行

發兌 東京神田南神保町 岩波書店

電話四谷 五八七〇番 七一六七番
振替東京二六二四〇


そゝるよ
そゝるよ
食慾を！
生のセロリと
よきパンと
グラスに光るよきビール
良きビールはサクラ
の名に選べ！

大正十五年

中央公論

八月一日發行

八月號

第四十一年　第八號

第四百六十三號

教養擴大の好機

所謂神宮競技問題で文部省と内務省とが醜い喧嘩をやる。之を實際問題としてどう裁くべきかに付ては吾人に一種の意見があるが、如何に體育奬勵の特效があるからとて、あの爲に學校教育の大切な時期を犠牲にしてもいいとする内務省の施設には、どの點から觀ても全然感服することが出來ない。競技に依て運動熱が盛になり、爲に青年の元氣が勃興し、體育の上にも喜ばしい結果をもたらすことは認める。それだから大抵の不便不利は忍べといふのは、所謂鹿を追ふ獵師山を見ざるもの、折角の妙案も却て思はざる弊害を流さぬとも限らぬ。どんな良い事でも、その事の伸張の爲に他の犠牲を要求する場合には、一應も再應も退いて愼重の考慮を廻らすの必要があると思ふ。

一體夏休みは何の爲めにある。運動競技など夏休みの利用の爲めに第一に擇ばれて然るべきものではないか。餘計なことは云はぬ。睡眠は必要だからとて、日中の一番いゝ時間を之に充てねばならぬ必要は毫頭ない。

鹿を追ふ獵師山を見ずと古人も鄭寧に誡へた通り、此類の過誤は昔から屢々繰り返されたものと見へる。今日でもそれ〴〵の專門家の中には、其の專門の仕事に熱心であればある程、自家の主張が何事を差措いても第一の請求權を有つやうに思ひ込むものが多い。軍人は軍備に缺くる所があつたらどうすると云ふ。醫者は醫學が發達しなかつたら安心が出來るかと云ふ。實業家は産業が萎靡したら國が立ち行くかと云ふ。裁判官は權利義務のけぢめを紛亂さしたら吾人の生活は一日も安全なるを得るかと力む。果ては南無妙法蓮華經を唱へさへすれば直に國家は匡はれると云つたりする者も現れる。云ふ所の主張には固より一應の理窟はあらう。何れの一つとして之をその弛緩するに委せんか、即ち國家の到底立ち行き得ないことは明瞭だ。併し師なくて人間の生活なきも師さへあれば他はどうでもいゝと云ふわけには行かないと同様に、自分の云ひ分を立てる爲に他の讓歩犠牲を要求するの權利は、常に何人にも與へられて居るのではない。專門家といふものは、是非無くてならぬものだけれども、同時に往々厄介千萬なものでもある。熱心なる專門家程この感が深い。

凡そ專門家の活動なるものは、それが一般との關係に於てその本來の立場を守り、節度を保つて居る時に　よくはたらく限りに於て、有用なものである。釣り合を外れた或る一事の特殊なる發達は、結局に於て大局を失ふに終るものなるは多言を要せずして明であらう。軍備の過大な膨脹、產業の偏頗な本位主義的な經營、此等の問題は今更說明するまでもあるまいが、神宮競技問題の爭論の如きに至ても、其事自身は固より瑣細な事柄だが、他面に於ては是亦從來の通弊の一顯現に外ならず、此意味に於てこの際嚴しい慨歎を之に加へて置くのも無意義ではないやうに思ふ。何か一事に氣を入れ出すと、兎角圖に乘つて傍若無人に振舞ひたがる。斯くて何時の間にか他に犧牲を强ゆるといふ退ツ引ならぬ破目に陷るなどは、本當に大に愼んで貰はないと困る。

斯うした通弊を防ぐ方法としては、社會的見地からすれば(一)自由批評を盛ならしむることが必要であり、(二)殊に局外の批判を歡迎することが大切であるが、退いて考ふるに、もと是れ國民思想上の缺陷に基するもの、故に吾人は寧ろ根本的の對策として、吾々國民が自分自身の修養として自家の識見をもツと廣き基礎の上に築く様心掛くべき旨を提唱したいと思ふ。よしの髓から天井のぞくといふも、畢竟は我々の教養の基礎が偏狹に失するからのことではないか。廣く世間を見透す能力(ちから)のある者は、決して自分だけを言ひ張つて他の迷惑を顧みぬといふやうなことはせぬものだ。偉い司法官に頭の化石せるの譏りが向けられ、卓拔な軍人に驚くべき頑迷蒙昧の徒が多いと難ぜらるるが如きも、實は皆教養の擴大に依て救はるべき缺點だ。この事殊に今日の我國に最も必要であるやに考へられる。

而して吾人が特に今日之を云々する所以は、斯種修養の機會として今が最も適當な時期だと思ふからである。夏休みは我々に許すに暫く專門の仕事から離れることを以てする。變つた運動に心身の鍛練を試みるも一策だが、また斯んな時にでもなければ得られない變つた修養に心氣を轉換するも妙ではないか。而して斯の如きは、單に吾人の趣味を滿足さするだけには留らぬ、多數國民のこの方面への多少の努力は、期せずして如何に大なる社會的効果を將來にもたらすか分らない。夏季大學だ何々講習會だと幸にして世間に修養の設備は多い。玉石混淆の嫌はあらんも、適當に之を取捨選擇するに大した面倒もあるまいと思ふ。固より之に限つたことはないが、折角與へられたこの好機會だ。お互に十分有要に之を利用しやうではないか。

中央公論



第四十一年第八號
八月號
第四百六十三號

政治的反動と藝術の逆轉

長谷川如是閑

一　日本の反動政治の特性

政治的壓迫が最も强烈に行はれるのは、階級的對立が何等かの形で鮮明となつた時である。歴史が展開して新たな政治組織が成立つた際は、社會の意識がその歴史的事實に刺戟されてそれに統一される傾向をもち、從つて一般の意識はその政治組織に集注されるために階級意識は勢ひ稀薄となり、少くとも潛在的となる。我が維新の當時にも、一般の人心が舊政治の破壞と新政治の建設とに集注され、すべての階級がその新政治に對する興味によつて統一された形を示したの

である。此場合の政治狀態はその時代の人心の統一と一致する形をとるが故に、それは多少壓迫的であつても、壓迫を感ずることが少ない。反之、既に久しく成り立つてゐた政治組織が、社會事實の進化に伴つて沈滯狀態を呈し――所謂組織の硬化を生じ――その機能の衰頽を招くに至つた時には、社會意識はその政治的統一に興味を失ひ、言ひ換れば、政治組織が意識の統一を支へる力を失つて、各階級はその割據的利害をより強く支持せねばならなくなり、そこに階級的反抗が起る。そこで階級意識は潜在的から顯在的に變じ、階級的對立が鮮明となる。而してその際に、先づ階級意識の積極的に働く側は、必ず壓迫された階級である。優越階級は自己の階級の利害に基く統一が一定の期間有力に働いてゐたといふ事實によつて、階級的錯覺を持つに至り、その統一が階級的であることを忘れて、必然な社會的統一であるかのやうに妄想する。而してそれが歴史の展開によつて崩壞すべきものであることを認めず、却つて自己の階級的統一が恒久不變にして絶對のものであることを高調する哲學を造る。彼等の階級的存在が困難とすればそれによる統一も崩れるのである。が、彼等の錯覺は、その統一が彼等の階級の存立と必然の關係にあるものであるといふ事實を見ないで、それが抽象的に先天的に、絶對不動の統一であると妄想する。されば彼等がその統一意識によつて強制を加へる時にも、彼等の意識自體は極めて道德的であり時には宗教的でもある。所謂『王道』の理論は、一面に社會的要素を含んでもゐるが、他の一面には、より多くこの錯覺を含んでゐるのである。故に政治的統一が動搖を感じて、階級的反感が顯著となつた時に、『王道』の支持者は、自己の階級的意識による強制を、道德的であり合理的であり公正であり正義人道に據つたものであると意識することが出來る。從つて此階級は、所謂『階級的反感』を否定し、自己の階級がさういふ『反社會的』感情から超越してゐるといふことを宣言する。事實は、彼等の階級的存立が反社會的存在となるに及んで、それと對立する、より社會的の階級の發生を促がし、そこから行動及び感情の階級的對立を生ずるのであるが、その事實を先づ認識するものは、硬化した組織によりて利得してゐる――從つてその組織の支持者たる――階級ではな

く、その硬化によつて殘されてゐる階級である。

然し政治的壓迫は、必ずしも『王道』的のものではない。王道建設以前の軍國的掠奪狀態の下に於ける所謂『戰國』的國家の壓迫は、甚しく社會的要素を失つた暴力的、物理的のものであつた。その時期に於ては、所謂權力の作用が道德的乃至法的の『醇化』を經ないで、暴力のまゝの形をとつたのである。それはプラトーや孔孟やが盛に攻擊し否定したものであつて、權力關係がまだ物理的關係を脫却し切らなかつた時である。而かも、その物理的の力に、合理的根據を與へたものが、そのプラトー式乃至孔孟式の國家哲學であつた。それは軍國組織が、一定の文化社會を構成するに至つて發生した階級的觀念の精華であつて、近代の軍國々家も亦その思想體系を繼承して、『文化價値』の哲學を完成せしめたのである。然し、さういふ文化的な觀念も畢竟は、『政治的壓迫』の一つの形式であつて、特に文化に浴する特權をもつ階級の存立を條件とし、その階級の、物質的精神的支配を主張するものに外ならない。

然かも、この文化觀念を伴ふ壓迫に先つて、必ず同じ階級的構造をもち、しかも『文化的』でなく、單純に『物理的』の壓迫の行はれた時代があつたことは前述の通りである。即ちそれは文化的觀念の未だ完成されない時期の物理的壓迫であつたが、同じ意味で、更らに、その觀念の崩れて、しかも同じ階級的機構が働いてゐる時期がある。わが中世の初めに、中央集權的貴族の支配が崩れて地方豪族の支配と變つた當時に於ては、その地方豪族は、何等の觀念形態をもたずに、前に文化的觀念形態をもつて成立してゐた軍國貴族のそれと同じ軍國的支配を、單純な物理的權力鬪爭によつて行つてゐたのである。即ち同じ軍國的支配でも、王政時代の中央貴族のそれは、一定の文化形式とそれを意識づける觀念とをもつて成立してゐたが、それに代つた武門貴族の軍國的支配は、物理的であつて、『觀念的』根柢をもち得なかつた。德川氏の壓迫政治に至つて、漸く朱子學を借りて一種の觀念的支配を構成せしめたが、それまでの武門貴族の壓迫は物理的であつた。

されば政治的壓迫には、一定の階級的文化觀念構成を伴ふものと然らざるもの、——或は觀念の成立以前のそれ、或はその崩壞後のそれ——とがある譯である。

現在の日本の反動的傾向——即ち政治的壓迫——は、敢て我國特有の現象ではなく、世界の一般傾向を承け繼いだものに過ぎないが、唯然し現在の世界の文明國の反動的傾向とは、稍性質を異にするもの〻あることを忘れてはならぬ。それを上述の事情に基いて觀察すると、今日の歐米の反動的傾向は、『物理的』のそれであり、我邦のそれは『觀念的』である。前者は、觀念形態の崩壞に次ぐ現象であり、我國のそれは、なほ壓迫が觀念形態を伴ふ時期にある。

歐米の狀態は、我邦のそれに比すればその階級的對立に於て甚だ鮮明であり、階級意識は潛在的にも顯在的にも一層深刻であることは誰れもいふ通りであるが、從つて在來の權力階級圈内に於ける鬪爭は、階級的對立のために、兄弟墻に鬩ぐも外其侮を防ぐ必要から、自由主義も保守主義も一つの坩堝に熔け合つて、無産階級に對抗する統一的勢力となつてゐる。さうして彼等が現に爭つてゐるものは、元のやうな個人個人の超社會的或は反社會的利害ではなく、支持防禦すべきものは、彼等の階級の存在である。自由主義が、保守主義の貴族的統一即ち傳統的軍國國家の統一に對し、市民個人の利害を爭つた時代に於ては、保守主義の側は、その傳統による觀念形態を宗教・哲學・道德の形で具へてゐたが、市民の側は之に對してその統一意識の破壞作用を主として働く所の科學的意識を振り翳して戰つた。萬一統一があるならば、それは物理的方則の統一であつた。さればこの時期に於ては、市民階級はたゞ科學をもち、宗教、哲學、道德をもたないと批評された。事實彼等の階級は宗教とか哲學とか道德とかいふものを、傳來のもののやうに『統一する目的』によつてもつてはゐなかつた。彼等はその反對に、その統一を『分解する目的』をもつた科學に立ち籠つた。たとへそれが宗教的・哲學的・道德的意識にまで發展しても、その種の宗教・哲學・道德の實證的性質のために、丁度懷疑が宗教的意識を構成せしむることの出來ないと同じやうな意味で、特殊の觀念的形態を成立せしめることは出來なかつたのであ

る。個人主義的アナアキイが彼等の社會的構造を支配してゐると同じやうに彼等の意識を支配してゐたのである。然し、市民階級はその分解的、個人的社會構成を極端まで押進めて行くうちに、そこに物理的勢力が廣大な社會圏に於て統一的に作用する一つの大きな經濟的社會を成立せしめるに至り、その結果、彼等の個人的存在はその全體の經濟社會の關係によつて支持されねばならぬやうになり、自然、その個人的孤立性を失つて、大々的の經濟的合同の社會を必要とするに至つた。それが資本主義時代の社會的特徴である。そこでは封建奴隷であつた市民が、新たな社會に於ける主人となつて、資本主義奴隷の集團を使役する階級的地位を取つてゐるのである。彼等はそこでは個人的自由人ではなく、一個の階級人である。市民階級は、全く貴族階級を征服して終つた時に、彼等自身の自由主義と個人主義とを失つて、一つの大きい新らな階級的存在となつたのである。彼等はその市民的反抗を試むべき相手方――貴族――を失ふと同時に、それと戰ふ場合の武器――個人と自由と――を棄ててしまつたのである。之は他方に於て、新らたに發生した資本主義奴隷が、市民階級に對立する一つの大きい階級的存在となつた爲めである。さうして階級が、武力的要素によつてゞなく、經濟的要素によつて區分され、武力はその昔の主動的地位を失つて、全く從屬的地位となつたのである。從つて階級意識は經濟的生活の分野によつて極めて判然と、行動と意識とを基礎づけるに至つた。この事實の確立した爲めに市民階級は、自己の階級を支持し防禦する爲めの政治的壓迫の對象を明かに見極めることが出來るやうになつた。上に向つて戰つた態度を一轉して、下に向つて戰はねばならぬ事實を認識し、上に向つて戰ふ武器たる自由を棄て、自由主義者は一變して階級戰に於ける壓迫者となつたのである。從つて今日の歐米の政治的壓迫は昔の軍國的『王道』の宗教的立場をもたないと同時に、市民的の哲學的意識――個人的自由主義――に據ることも出來ない。故に歐米に於ける今日の反動政治は、昔の國家の觀念形態をもたないと同時に、市民階級の懷疑的觀念をも捨て去つたもので、謂はゞ超越的根柢をも亦合理的根柢をも持たないものである。それは即ち觀念崩壞後の物理的壓迫に外ならない。往々超越的根柢を非常

した形で顯はれるが——ファッショのやうに——、然しそれは所謂借り物であつて、彼等の神秘的、不合理的、盲目的壓迫を飾る白粉に過ぎない。今日の歐米に於ける反動主義は全く單純に物理的である。迷信的宗教主義もないと同時に懷疑的乃至現實的な意識もなく、唯自然の經濟過程の潟動を物理的に行動してゐるのである。

この意味で自由主義を失つた市民階級の壓迫は、王道を失つた軍國階級の壓迫と同じやうに、一つの政治組織の末期を示してゐるものである。如何なる意識の作爲もこの末期的現象を觀念化することは出來ない。それは自家憧着に滿ちたものである。

日本の現時の反動的傾向はやゝそれと性質を異にする。日本の現在の反動は、歐米のそれと關聯して世界の經濟的共通に伴ふ一致點をもつたものに相違ないが、然し、日本は國內の歴史がヨオロッパの歴史の進化の段階に達する前に、その世界的傾向に捲き込まれた形であつて、ヨオロッパに於ける過去の歴史的特徵が尙ほ今日の日本の現在のうちに働いてゐるのである。それは或る特別の事情の爲めに、日本に於ける市民階級の進化はヨオロッパの民主國に於けるそれのやうに完成されなかつた爲めである。日本の人民はまだ市民的優越を完全に握るに至らない。日本の歴史では、自由主義と放任主義の物理が、即ちヨオロッパの市民階級を完成せしめた歴史の運動が、完成されてゐない。さういふ狀態の下に於ては社會的特權の根柢が、軍國的傳統から全く經濟的優越に移つてはゐないと見なければならぬ。其處では市民階級は、一方では過去の軍國的傳統に抑えられながら、他方では資本主義社會の主人公として、無產階級に對する市民的支配を行つてゐる。市民階級は日本に於ても事實上軍國貴族の巢窟を經濟的に征服してゐることは確かであつて、軍國貴族はその市民階級の經濟的優越に依賴することなしに社會的にその存在を續けることが全く不可能となつてゐるのであるが、それにも拘らず市民的自由が完全に成立しなかつたのは、そこに特殊の歴史的理由があるからである。

世界の經濟的共通に入り込むことの遲くれたことが第一の理由であるが、然し唯それだけではない。のみならず中立

こそ遅れたが、その急劇の發達は殆んど西洋の資本組織と足並を揃へるに足る程であつた。地方にそれを妨げる事情がなかつたならば、市民階級の社會的形態もヨオロッパのそれに追ひ付いたに相違ない。而かもそれを妨げた事情が幾つかある。第一には單に封建國家の崩壊が後れたのみではなく、封建的地方分權の崩壊が、十分に國家的統一によつて崩れないで、それが地方的政治鬪爭の形に變化しつゝ立憲政治に移つたことが我が日本特有の事情である。封建的地方分權主義は貴族の割據的勢力であつて、それが崩れない限り、地方貴族の勢力は破れない。各國に於ける封建制度の崩壊は、先づ王權の恢復を持ち來し、絶對君主の勢力が地方貴族を壓迫する實力を回復して封建的地方主義を打破し、同時に地方貴族を打ちのめしたのであつた。この統一的王權は次で起る市民階級によつて壓迫されることとなり、それによつて、絶對的王權が完全に抑へられたのである。この二つの前代的權力——絶對的王權と小貴族の權力——を壓迫することによつて市民的自由を持ち來たし、立憲政治を持ち來したのである。

然るに日本の場合はやや經過を異にして、ある一部の地方貴族の連合が一般の地方貴族の割據的勢力を統一する働きを遂げると同時に、王權の恢復を持ち來たしたものである爲めに、其處では王權は統一の實力をもつたものとして回復されずに、二三の地方貴族の連合的勢力が有力にそれに作用したといふ事實が鮮明に現はれた。さうして、地方貴族の勢力が壓迫されると同時に、それを壓迫した事實上の統一者たる貴族の連合は、半ば彼等に傳來の分權主義の影響の下に、半ばヨオロッパの革命の歴史の影響により、王權に對して近代的制限を加へたのである。王權の絶對的統一は、日本の近代史に於ては遂ひに成立しなかつた。それは、封建的分權を統一したものが、日本に於ては或る貴族の連合的勢力であり、さうして次の時代がその一部の封建貴族の連合的勢力によつて持ち來たされた爲めである。

而かも日本の立憲政治は名目上王權に對する制限のやうになつてゐるが、事實に於ては封建制を破壊した貴族連合の絶對專制を、當時のインテリゲンチャ——封建破壊の貴族連合を支持した中間階級——が制限したものであつた。封建

制度に代るに所謂藩閥政治なるものが起ることは、既に徳川政府の崩壊に方つて撲滅されたことであつて、一種の封建貴族——徳川氏——の支配に代はるに薩長土等の連合貴族の支配を以つてするに過ぎないといふことは、早くから盛んに訴へられたのであつた。故にこの訴へを緩和する最も好い口實は、敢て二三の貴族連合が政治するのではなく、『萬機公論に決する』のであると主張することであつた。つまり薩長等が皇室を擁して專制を働くものではないといふことを釋明したのが、つひに、日本の立憲政治の起りとなつたのである。その頃の日本人は決して王權の絶對專制を拒むやうな心的傾向乃至實際的要求をもつてはゐなかつた。從つて若し事實の上で王權が恢復されたのであつたら、日本人はそれが絶對專制に陷る恐れのあることを豫め危惧するやうな心理狀態をもち得る筈がない。當時の王權制限は、實は、代つて起つた地方貴族の連合的勢力に對する制限を意味してゐたのである。彼等はさう釋明することによつてのみ統一事業を圓滿に進轉せしめ得ることを感じたのは賢明であつた故でもあらうが、又事實上の必要にも迫られたのである。當時の『輿論』は、今日の支那の輿論と同じく、支配階級内の對立的勢力の間の輿論であつて、それを緩和せずに集權的の政治を成立せしめることは不可能だつたのである。

後年に至つてこの貴族連合が内訌を生ずるに及んで、排斥された閥族の一派は政權を握つてゐる閥族に對して盛んに立憲代議制の速行を迫つたが、それは即ち前約の履行を連合貴族に對して迫つた譯である。それに對する事實上の防禦者は、政權を握つてゐた藩閥であつた。

されば日本に於ては、その後も、他の王權國家やそれが轉覆した立憲國家に於て見ることの出來ない地方的勢力をもつて政權が爭はれたのである。その形勢が連綿として半世紀後の今日まで續いてゐる。それが爲めに日本の市民階級は自己の權力が資本主義經濟の發達に伴つて發展し、社會的に亦政治的に確乎たる地歩を握るに至つても、ヨオロッパのそれのやうに、市民階級の個人主義的自由とそれに關聯する組織とを完成せしむることが出來なかつた。地方的勢力は

封建制度のそれのやうに、市民階級の間に於ても、それ〴〵顯著に成立し、最近まで日本の資本家階級は、封建貴族の地方的乃至政治的色彩を帶びてゐた。即ち所謂御用商人のやうな封建商人の色彩を失ふことが出來なかつた。さういふ形勢に於ては、ヨオロツパとは反對に、支配の形式に於て貴族主義が主動的地位を占め、從つて市民的自由及び資本主義的個人主義は、一貫して壓迫されて來たのである。無論貴族は資本主義經濟の發達に伴ひ、その在來の特權は失はれ、その財政的狀態は一個の大地主であり得る外、何等の利益をその在來の特權から得ることの出來る見込みもなくなつた。されば資本主義化しない貴族は、生活にすら困難を感ずるのであつた。けれども政治の根本が封建的特權の延長であつたが爲めに、閥族の勢力と同じやうな形の勢力を、貴族階級の連合によつて立憲政治の上に形造るに至つた。市民階級の職業政治家が衆議院に立籠るやうに、浮浪貴族の政治家が貴族院に立籠つて、現在までその得體の知れぬ政治的特權を濫用してゐるのである。立憲政治において封建的特權の延長が成立してゐるのだから、全く得體の知れない特權なのである。が、この形勢は市民階級の自由主義の社會の成立を妨げる効果をもつてゐた。日本の立憲政治は早くから政黨化したが、その政黨が封建的地方分權主義の延長であつたが故に、初は特殊の地方貴族それ自體を中心としてゐたが、明かに政黨の色彩を帶ぶるに至つて、その延長たる政治的集團の割據狀態を表現するものとなり、それを根據とした變質狀態によつて發展して來た。即ち封建貴族の勢力を全く離れ切るに長い年月を要した。さうして、結局その封建的勢力によつて成長した政黨が市民階級の機關となつたのは最近のことである。

かやうな形勢の下に於いて、市民階級はその個人的自由が完成される階段に達しない前に、個人と自由とを失つた資本的合同の所謂物理的集團を形造つて、無產階級の擡頭に備へる必要を感じる時代に到達した。所謂實業家が國家から獨立し、國家に對立し、國家を支配する自主的資本家階級の意識をもつに至つたのはこの二三年來のことであるが、さういふ意識が我が資本家階級から發生した時には、もはや彼等の階級は國家を離れるどころか、國家に立て籠つて個人

主義と自由主義とを忘却して、壓迫政治を行はなければならない時期に到達したのであるが、[illegible]の渦中に投げ込まれたのである。

そこがヨオロッパの現狀と異る點である。ヨオロッパは完全に封建主義を失ひ、傳來的超越主義の統一意識を失ひ、その傳來の宗教・哲學・道德は、既に幻滅に歸したのであつた。それは今日は只借り物として或る一部に借用されてゐるに過がないものであるが、之に反して日本に於ては、それ等の傳來の信仰と理性とは、尙ほその生命の繼續を絕たれてはゐないのであつた。封建的勢力が最近までその命脈を絕たなかつた爲めに、從つて恢復された王權に對する市民的征服が完成しなかつたと共に、傳統的の宗教・哲學・道德等の外部構造も尙ほその外觀を保つてゐるのである。そこで日本に於ける現在の反動的傾向は、その意識內容が丁度滅亡前のドイツ帝國に於けるが如く、特殊の觀念形態を具へてゐるのである。その統一も資本主義の物理的統一ではなく、或は民族意識を帶び、又軍國的國家意識を帶び、決して單なる資本主義的統一の物理的特性をもつたものではない。大震災で暴露したやうな軍國的民族意識の變質した統一意識が、資本主義的の物理的統一に並んで支配的勢力を保つてゐるのである。それは資本主義的無觀念ではなく傳統的觀念の形をもつた迷信的意識である。

日本の現在の反動的政治は、この迷信的統一意識の爲めに寧ろ圓滿に行はれてゐる形である。支配階級はこの場合傳統的の敎化を新たな文化意識の形で構成せしめ、同時に傳來の軍國國家の統一方法であつた民族宗敎の高調によつて、壓迫政治を裏付けることが出來る。さうして現にさうやつてゐる。市民階級がその個人的自由主義の完成されなかつた事情の爲めに、彼等の階級的支配に於て、軍國貴族の傳統と、その宗敎・哲學とを利用して、今の反動的形勢を形作つてゐるのである。この形勢は丁度戰前のドイツ帝國がその末期に於いて取つた所の態度と似通つてゐる。當時のドイツも日本と多少類似點をもつた歷史的經過を取つたのである。ドイツ聯邦がそのうちのプロイセンによつて統一されてゐた

といふ事情は、我國に於ける有力なる閥族の政權統一と似通つた點を含んでゐた。ドイツ帝國に於いてはいかに資本主義的勢力が發達しても、この地方的分權を統一する勢力が帝國に取つて必要であつた。ドイツ帝國に於ける市民階級の發達は、イギリスやフランスに於けるそれのやうに、封建的分權主義を打のめして、自由の原野に横行濶歩することを得るものではなかつた。地方分權を統一した帝國は、市民階級の自由な運動を壓迫してそれを變質せしむる働きをもつてゐた。さればドイツの市民階級は、日本の市民階級が軍國貴族の傳統的勢力に依頼し、又それを利用したと同じやうな關係を、帝國的勢力に對してもつてゐた。ドイツの資本主義の發達に伴つて發達した特殊のクルツルは、イギリスやアメリカに於けるそれのやうに、市民階級自身のものではなく、傳統的貴族主義と結びついて『帝國』を支持するそれであつた。ドイツ式文化主義なるものは、貴族の舊傳統と市民的個人主義乃至自由主義との間に出來た觀念的私生兒であつた。それは日本の今日の市民階級のクルツルが、日本の傳統的觀念と資本主義的自由主義との私生兒であるのと異らない。

日本では、國家主義が市民階級の間から見失はれる前に、反動期に入つた爲めに、原形のまゝで復活し得たのである。資本主義の發達が後れた國々は、今日の反動期に於ては恐らく日本と同じやうな形勢の下にあることゝ思はれる。イタリイのファシストがヨオロッパの各地に、亦巴爾幹の地方に所謂ファッショ革命を煽動する陰謀を國際的に企てたといふ事實が發露したが、それはそれらの諸國に於て、丁度前に述べた日本の場合のやうに、舊傳統の殘壘が資本主義的反動に利用されてゐるのに乘じて企てられたものに外ならないのである。日本の反動期に於ける政治的壓迫は、新たな資本主義國家の要求に基いたものであるに拘らず、云ひ換れば、無產者の階級的對立によつて刺戟されたものであるに拘らず、それが舊傳統の衣を着て顯はれてゐるのは、恐らく後れた資本主義國に共通の特徵であらう。

二　生活の分化と藝術的感情

この現在の世界的反動傾向は、昔の王權の神聖同盟と以通つた資本主義の神聖同盟であつて、やはり前者と同じく一時的性質のものであるが、さういふ短期的の現象も必らずそれに伴ふ社會的反映をもつものである。最近日本に於けるいろいろの社會傾向は凡べてこの反動政治の特徴と關聯してゐる。凡そ社會の諸傾向は、社會組織の正統的地位を表現する方面と、それに對して破壞的作用をもつ異端的地位を表現する方面との二面がある。如何なる社會的潮流も、全く一つの傾向のみで流れて行く程機械的に統一されてゐるものはない。互に矛盾した諸傾向が、丁度今の東京の街を行くいろいろの風俗の群集の流れのやうに、複雜な混線狀態をもつて進むのが社會の常態である。しかもこの複雜な群衆のいろいろの色彩はそれぞれそれを裏付ける生活圈をもつたものである、そこに或る色なり線なりがあれば、必ずそれを生む生活があると考へて間違ひない。さうしてその生活は單獨な個人の孤立的性格の現はれではなく、必ず群的な勢力として社會に對抗的存在を保つてゐる生活圈の現れである。宗教・法律・道德・藝術等はこの生活の分裂的な存在を代表して、それぞれ特殊の色と線とで表はされてゐるのである。宗教・道德・藝術等は決して自分丈けがそれをもつと唱へてゐる人々のみが有つてゐるものではなく、あらゆる分裂的の生活群は各自の形態に於て、宗教をもち道德をもち藝術をもつのである。古代の社會のやうに全社會群の生活圈が全く統一されて、分裂的の割據狀態の絕えてない場合に於ては、宗教も道德も哲學も藝術も、社會的に渾然たる唯一の形式として顯はれるが、發達した社會に於ては、生活群はいくつもの生活圈に分裂して、その各の圈内に、それぞれ彼自らの宗教・道德・藝術等をもつてゐるのである。いろいろの集團はそれぞれ特別の風俗習慣をもち、禮儀作法をもち又特別の容貌風釆をさへ備へてゐるのであるが、それと同じやうに、特別の宗教・法律・道德・藝術がそれぞれその各の生活圈に於て成立する。彼等のどれ一つもが、自分の勢力で社會を統一する力をも

つてゐないために、その宗教道徳などが、全體の社會群を統一することの出來ないだけである。が何等かの機會に於いて一つの生活圏が一般の生活形態を決定する力をもつた場合には、その或る特定の生活圏の宗教・法律・道徳等一般を支配することを得るに至るのである。薩摩の貴族が東京で政權を握つた時に、彼等の地方的な風俗習慣が東京の社會に影響し、その地方的の言語、作法、風俗が一般に支配したことがある。書生と云へばすべて衣は肝に至るといふやうな特徴を具へたものと考へられたのは、或る特殊の生活圏が何等かの意味の支配的勢力を得た場合に、その特殊の生活形式から生れた宗教・道徳・風俗等が、一般を支配し得ることを示してゐる事實である。それは人間に模倣乃至服從の本能があるからであると云ふのであるが、然し模倣や服從が單純な本能的のものであるや否やは問題であつて、少くとも現在の社會に於ける宗教・道徳・風俗の支配に對する模倣服從は本能の爲めであるよりは寧ろ經驗的性質の動機をもつたものである。それは寧ろ無意識的乃至意識的撰擇の作用によつてゐるのである。流行の如きも本能のやうな無意識的反復ではなく、もつと叡智的の行動であつて、それによつてある一定の生活圏の關係に意識的の入込まうとする努力を含でんゐる。それは兎に角、或る時期に於ける社會的傾向は、文明の發達した社會に於ては、必ず分裂的であり、矛盾的であり、擴著的であり、混線的である。

社會に流れてゐる諸傾向は大體その時代の階級的分裂に從つて分れるが、一般を支配する傾向は支配階級の生活傾向が主潮となつて時代の流を導いて行くところから成立するのである。いろいろの分裂的傾向は、その間に、管弦樂に於ける各種の樂器のやうに、それぞれ異つた波動を起してゐるのであるが、それを統一する主たる傾向と雖も亦要するに一つの部分的樂器の波動に過ぎない。支配的の傾向のみが他の傾向を離れて特殊の形や地位を保つてゐるのではない。さればその一つの樂器が支配的地位を占める理由は何處にあるだらうか。

宗教、道徳、法律、藝術等から風俗、習慣、禮儀、作法の末に至るまで、それぞれ異なる社會圏に於て制約して成立

する傾向があるといふに拘らず、それらのものが、一定の統一的傾向をもつて表はれるのを常態とし、そしてそれらのうちの或るものが正統的地位を要求し、その他の分裂的生活圏の所産を凡べて異端邪道として排斥し壓迫するに至るのである。宗教以下道德・藝術等の諸制度程社會的のものはないと考へられてゐるが、それが支配的勢力を擅にするには必らず强制壓迫排斥等が或る程度まで――又は盛んに――行はれるのを常とする。場合によつては支那の清朝に於ける辮髪、日本の明治政府の散髪のやうな、强制手段又は准强制手段さへ行はれるのである。宗教・道德それ自體は社會的であるが、或る特定の宗教・道德等が正統的地位を占むるには、『社會的』以外の種々なる手續きを必要とするのである。社會的潮流の主流は決してそれ程自然的のものではなく、それが主と爲るための作爲を必要とするのである。この作爲が即ちいろいろの分裂的生活圏のうちの或る一つの制度的傾向をもつて、一般を支配するに至らしめるものである。

作爲といふが、然しそれは辮髪や斷髪のやうな强制的性質をもつものとは限らない。或る帝王が痩せた女を好んだが爲めに多くの宮女が餓死したと云ふのは、支那の歷史家の誇張であるにしても、或る制度が社會的に支配するに就いては、そこに一定の生活圏を中心として一般の社會的利害が成立するのである。本能ではなく、生活利害の中心に向つて求心的に運動する經驗的行動である。その制度の性質が特に本能的に又直覺的に一般社會の人間的性質に叶つてゐるといふのでも何でもなく、その時々の生活關係がその去從を決定するのである。四億の支那人が悉く辮髪となつたのは、辮髪が人間の本能的傾向と一致するのでもなければ、又清の政府が各人を捉へてそれを强制したのでもなく、又各人の因襲的趣味により、或ひは新規を好む傾向によつたものでもなく、更に理性や信仰が辮髪を道理づけたのでもなく、要するに本能でも自然の要求でもないが、辮髪制度を强制した軍國政府の支配が、社會的利害の中心たる地位を占めたが爲めである。故にその軍國政府の中心が崩壞すれば、辮髪も忽ちのうちに四億の支那人の頭から消え去つてしまふのである。若し辮髪の宗教・道德・科學といふものが有り得るならば、それも辮髪と共に生じ辮髪

と共に消え去るのである。而かも凡べての宗教・道德・法律等の制度の生命も皆この辯髪的の生命と同じものに外ならない。その制度を支持する中心の生活圏が鞏固に成立する間だけ、それらの諸制度の統一が保たれる。從つて種々なる分裂的生活圏の割據的諸制度——中心勢力に對して反抗的に存在する諸制度——は、統一勢力の鞏固な間は極めて微弱なる社會的表現を取り、中心勢力の動搖に比例して、顯著な色彩を顯はすに至るのである。

いろいろの文化的形式はそれぞれの生活圏に於て發生するものであるが、それを生んだ生活圏の社會的勢力の大小に比例してそれが社會に支配的勢力を占めることが出來る。この場合の社會的勢力には、靜的のそれと動的のそれとある。前者は一定の組織が造り上げた特權的地位を保つてゐる階級の支配に伴ふものであるが、後者はその組織の動搖に應じて、いろいろの分裂的生活圏が活躍し、互の生存と優越とを爭ふところから生れる支配的勢力である、之を具體的に云へば、前者は政治的勢力であり、後者は社會的勢力である。政治的勢力は必ずある一定の階級的構造を保つことによつて支持されるものであり、いろいろの進步變化が有機的にその內部に行はれるが、それはその階級的構造に根本的變化を持ち來たさない程度に止まらなければならぬ。故に政治的勢力は社會に於ける靜的勢力として作用するのである。その場合には一定の階級的構造に適應するやうに、社會的生存過程が特殊の典型に作り上げられ、そこに一つの文化的典型が生み出される。然も、社會は一個の有機的存在であるが故に、統一的支配の生んだ典型に對し、分裂的のいろいろな社會圏から產れた異端的の文化典型が破壞的作用を營むのである。それらの分化的典型は宗教・藝術等の形で、政治的支配に對立して、社會的支配を打ち立てるのである。

今日の反動的日本に於ては、正統的傾向が極めて有力な一時的支配を行つてゐることを認めるが、それは前に云つた如く、日本の資本主義的社會の成立の裡に、前代の國家的傳統が可なり有力に働いてゐるといふ特殊の狀態によるのである。英米のやうな資本主義國家に於ては、現にその政策が極めて反動的であるに拘らず、そこにはもう正統的の傳統の

社會的勢力は失はれてゐて、實質的にも形式的にも甚だ影の薄いものになつてゐる。彼等は今日の反動日本に於て[illegible]けるに只單純に資本社會の階級的存立を信條としてゐるのであつて、民族的傳統とか家族的國家理想とかいふやうなものに立て籠つてはゐない。我が邦の反動思想は、鐵砲を防ぐに緋威の鎧を以てするやうな恰好をしてゐる傾向があるが、英米のそれは物理的勢力に對する物理的勢力の維持、物質に對する物質の闘ひといふ風に、たゞ經濟力を以てする支配、經濟力で支持しようとする奮闘である。そうしてそれが資本主義的階級社會の闘爭心理である。假民族的又は國家的傳統を支持しようとする宗教的運動やK・K・Kの運動のやうなもの又はイギリス貴族の愛國運動の如きやは、時代後れとして資本家階級からも、排斥されないまでも冷眼視されてゐる。彼等は道德の爲めに又宗教の爲めに、言ひ換へれば傳統的觀念を支持する爲めに、階級戰を戰つてゐるのではないといふことを可なり判然と自覺してゐる。彼等は宗教とか道德といふやうなものを口實として利用するには餘りに自から懷疑的になつてゐる。それ等のものは、彼等に取つては結婚と葬式との飾りであるとしか考へられない。反之、日本の反動期は濃厚な傳統的色彩で表はれてゐる。無論その傳統が社會的勢力を盛り返したといふ事實があるのではない。それはたゞ口實であり利用であり借物であるが、それにしても彼等の勢力を、傳統的觀念に結びつけることによつて、十分利得する餘地がある程、今尚ほその傳統が社會の一部に實用的價値をもつて存在してゐるのである。

　そのことを最も能く證明してゐるのが、反動的日本に於ける藝術的傾向である。現時の日本の一般民衆に現はれてゐる藝術的心境が何んなものであるかを見ると、私達は如何に日本人が藝術を淺薄な一時的な享樂財として取扱つてゐるかといふことがわかる。

　如何にも藝術は、一面に於いて享樂である。そしてそれが享樂として發達すればする程、『高級』的となり、所謂『藝術それ自體』といふ性質をもつに至るのである。社會は藝術をさういふ性質に於いてもつことが、最も藝術的に惠まれた

ことであるとも考へることが出來る。然しさういふ意味に於いて徹底的に幸福である爲めには、その藝術的享樂が、現在の社會生活の創造的機能に觸れたものでなければならぬ。それは反復された模倣的享樂や、末梢的な感覺的嗜好をみたす模倣的行動であつてはならぬ。

然し藝術は享樂であるとしても決して享樂それ自體ではない。藝術的行動乃至藝術作品は、それを全く生活の目的から引き離し、單純に、純粹に、藝術的情緒の對象として成立せしめた時に始めて藝術的であり得るといふ美學者の見解は、唯藝術の一面を説明してゐるに過ぎない。又藝術品は、現實の生活の複雜な形態又は感情をさながらに再現するものではなく、それらのものが生活に於いて決して表はれることの出來ない、所謂純粹形態を表現するものであるといふやうな見地も、一面的である。藝術が表現する形態は現實の生活に於けるそれと必ずしも一致するものではないが、それがよび起す感情生活は、現實の生活感情の活躍であらねばならぬ。誰れでも生きた感情をもつたものは、藝術を鑒賞する素地をもつものである。しかもさういふ感情の對象が『純粹』といふやうな、抽象的な、超越的なものであり得る筈がないと同じく、『純粹』形態なるものはあり得ない。人間的生活に於いて『純粹』なるものがあり得たとしても、それは水の純粹なるものと同じく、人間を生かす働きをもつたものではあるまい。さういふものが、よし複雜な人間によつて創造されるにしても、それは人間の生活感情を生かす力があらうとは思へぬ。

藝術に於ける『純粹』は、實は特殊の生活組織に於いて、それと必然な關係から人間の内に生れた、特殊な感情形態である。從つてそれはやはり一つの典型であつて、決して絶對のものではない。勿論その生活の條件を超越したものではない。されば藝術的感情は、その所謂純粹形式に伴つて恒久的であり不變的であり絶對的であると稱するのも、宗教家が自己の神だけが絶對であると信ずるのと同じく、特殊の組織の下に於ける生活典型をその組織に於て絶對とするに外ならない。成程、人間は本能的に赤い色に快感を感じ、綠色に憂欝を感じるといふやうな傾向はある。さういふ極めて單

純な色や線の如きものは、人間の感情生活に對し、時代と人種を超越して恒久不變の性質をもつと云ひ得るが、苟くも藝術的と稱せられる程複雜な如何なる色彩、如何なる形態も、絕對的恒久の性質をもつたものはない。抽象觀念といふものは、もともと絕對を組立てる爲めに作り上げた意識の構造であるが故に、それこそ絕對であり得る。「善」が道德的絕對であると考へるのは決して間違ひではない。然しさういふ概念的意識が人間の道德的行動に何等の影響を與へることとの出來ないは、それが具體的の生活感情を刺戟する働きをもつたものでないからである。藝術はさういふ抽象ではない。藝術は抽象觀念を組立てるものではなく、具體的な生活感情を具體的な生活行動によつて刺戟するものである。故に藝術的表現は必ず具體的な生活目的をもつ。目的をもたないものが藝術であると云ふ美學は、目的を直接の實用といふやうな意味に解すれば成り立つに相違ないが、然し人間の目的はそんな風にのみ解することは出來ない。庖丁はその切れ味即ち、それを生活に利用する關係に於て見、ストーブはそれが人體を暖める關係に於て見るが、ストーヴや庖丁やが、切れ味とか放熱作用とか云ふものを離れて一つの美的形態となつた時に藝術となる、即ち目的を離れた時に藝術となるといふのである。美的形態はそれ自から重大なる生活目的をもつといつて何處に不都合があるだらうか。感覺的な藝術は赤色が一種の快感をよび起すのと同じやうに、單純な感覺的生活の感情それ自體を享樂するに止まるものでもあり得るが、苟くも複雜な生活再現であるところの藝術は、それが何等生活の行動並に意識と關係なしに生れるやうなことがあり得ないと同時に、その藝術が生活の行動並に意識に何の効果も與へないといふこともあり得ない。その効果は藝術的價値とは別なものであるといふが、その効果を除外して藝術品の効果を考へることが何うして出來よう。人間の感情は、他の動物のそれと同じく、感情それ自體の感情といふことはあり得ない。人間の感情は人間的生活行動の內的部分である。それは生活行動の直覺的選擇である。情緒は感情が生活に於いて特に選擇したものを、選び取つた心の狀態である。その心の狀態は實は行動を選擇してゐるのである。さればその行動の發動によつて初めて感情の過程

が終了する。憤怒の感情な相手方を毆りつけることによつて終了する。生きた感情がさういふ性質のものであるが、藝術的感情だけはそんなものでないといふことが何うしてあり得よう。藝術的感情が特に感情の享樂であるといふ形を取るのは、恐らく遊戯の生活に於ける關係と似たものである。人間が何故に遊戯するかといふの問題は甚だ難解な問題とされてゐるが、然し生活が遊戯から初まるといふ事實、即ち赤子の第一の行動は遊戯的であるといふ事實を見ても、生活と遊戯との關係の極めて密接であることが考へられる。この遊戯と生活との密接な關係を求めるに、遊戯は生活を離れて遊戯自體を絶對とし終局とするといふやうなことを唱へるのは――今の運動家の常套であるが――少くともその行動並に心理の、正しい理解を求める方法ではない。藝術に於いても亦然りである。藝術は藝術自體として取扱はれることによつて發達するものであることは分業の經濟が説明した通りであるが、それは生活との一致に於て意味をもつてあることも亦分業の經濟の説明する通りである。從つて藝術は一定の生活組織の精華であつて、超生活的の『純粹』ではない。又從つて生活と共に興亡する。エヂプトの生活組織なしにエヂプトの藝術は決し産れないと共に、その組織なしには保存もされない。つまり組織の變化は感情の變化を、感情の變化は行動の變化を生ずるものだからである。從つてそれ等の藝術を存在せしむることの出來ない組織の下に於いて創造し享樂しようとする人々は、實は單なる模倣的創造、模倣的享樂を繰返してゐるに過ぎないのである。藝術の情緒が生活の目的に協同してゐることは疑問の餘地がない。元來生活の組織は一定の生活目的を完成しようとする意識的乃至無意識的努力に外ならないのであつて、藝術もその努力の結果として産れるものである。

右の事情は藝術が單に感覺的效果を發揮する場合に於ては甚だ明かでない。前述のやうな生活目的をもつた藝術も、それが一定の感覺的形態として完成を遂げると、所謂『純粹形式』となつて、生活を離れて、感情の享樂としての藝術となる。過去の藝術が現代人に鑑賞される場合の多くはそれである。藝術はこの意味の感覺的效果に於ては生活目的と

離れることになるといへる。しかし實は一つの目的を離れて他の目的に移るのである。全體としては生活目的を離れてゐるのではない。殊に單純に感覺的でなく、複雜な生活感情を表現する藝術は、その色彩や曲線が感覺的生活の上でもつ效果以外に、もつと生活的な目的をもつてゐるのであるが、然しそれも過去的となれば、その感覺的效果だけが鑑賞されるに至る。又藝術的創造自體が主としてさういふ感覺的效果だけを覘ふものとなることもある。藝術が一般にさういふ傾向をもつに至るのは、文化の最盛期に於いてである。奈良朝の文化や元祿の文化やは藝術それ自體の藝術即ち最も藝術らしい藝術を產んだと認められてゐるが、それは時代の文化の感覺的方面を最も完全に表現した藝術が産れたことをいふのである。反之、藝術が感覺や感情の『純粹形式』たることを失つて、生活の現實に密接する形で表はれ、それが一定の社會的效果をもつに至るのは、文化の末期即ち革命期の藝術である。

文化の最盛期に於いても、特權的な文化階級に反抗する分化的の生活圏があり得る限り、その部分的の社會生活からもつと生活的な藝術が産れるのである。さうしてそれが異端的の地位を占める。更に革命期に於いては、文化の崩壞の爲めに、文化的感情の藝術が現實的な生活的藝術によつて取つて代はれる。がその時代に於ても尚ほその文化的殘骸を支持する藝術的傾向の存在し得ることは無論である。然し革命期の藝術は文化時代のそれと主客顚倒して、異端的のものが主潮をなすに至るのである。それにも拘らず、革命期に於いて、傳統的勢力の防禦の爲めに行はるゝ、傳統の支持並に政治的壓迫に順應して、文化感情の享樂的藝術が一般を支配するやうな狀態があつたとすれば、その時代の人間の藝術的心境の曖昧と墮落とを認めない譯に行かない。それは德川末期の軍閥階級の崩壞を暴露した藝術の現實的傾向に對して、元祿の流れを汲んだ享樂的藝術心境に溺れる者のあつたのと同じやうに、所謂時代錯誤であらねばならぬ。

現在の反動的日本に於ける藝術的傾向は、その意味で、甚だ錯誤的であるといはねばならぬ。今日の藝術的傾向は全く藝術の感覺的意義に沒頭すると同時に、その現代的生活の意義は全然藝術から忘れられたかのやうな狀態にある。而

かもその藝術は文化の盛期に於ける『純粋』な藝術的感情の享樂であるといふ譯にも行かないで、たゞ過去の藝術的感情の模倣的享樂を主としてゐるのは、全く驚ろかされざるを得ない。極端に云へば、現在の日本の藝術（？）は安價な模倣的耽溺である。それについて試みに考へて見やう。

三　反動的日本に於ける藝術的傾向

反動的日本に於ける藝術的傾向は、高級（？）の階級生活者のそれも、一般民衆のそれも、共に過去の幻像を追ふてゐるといふ點に於て變りはない。凡てが典型的な過去の感情形態を襲つてゐて、何等現代的の意義を求められない。强ひていへば反動期の心理をもつてゐる點に於て『今日主義』的であるといひ得るのみである。然し反動期といふのは、一時の政治的狀態であつて、日本人の大部分が、生存の氣力に於て、生活の機能に於て、潛在的の力を內藏するものとすれば、必ずそこにその現代的の生活感情の表現が藝術の形で一般を支配しない譯には行かないのである。然るに現在一般に存在する藝術的感情は必ずしもその所謂『大衆文藝』なるものに止めを刺してゐるとは云ひ得ないにしても、要するにそれが豫期してゐる封建的ロマン主義に逆轉してゐるのである。今その心境を解剖して見ても、そこに過去の時代の生活の幻像を發見するのみで、何等現代の生活感情に觸れたものを見出し得ない。封建末期のロマン主義が、しかも現代的衣裳をすら纒はずに、昔の儘の袴姿で表はれてゐるといふ形である。少くとも、過去のものは、それが何んなものであるにもせよ、その過去の時代に生れただけの意義はある。然しそれが現代人によつて反復享樂される場合には、それによつて活躍する感情內容は、その人間が現代放れをする程完全なものになる道理である。現代人は過去の人間の幻像にまで自分自身を逆轉させることによつて、初めて今の文藝の要求する感情生活を活躍せしむることが出來るのである。

従つて今の文藝は現代人を過去の人間の幻像に順應せしむる凡ゆる手段を取つてゐる。徳川末期又は明治初年の文藝の模倣をしてゐるのもそれであり、徳川末期の舞臺を摸ぶのもそれであり、封建的葛藤の翻案或は原物が、そのテーマであり、さもなければ、西洋式の前代的な社會葛藤をアメリカのフイルムが現代的に作りかへてゐるのと反對に、現代的葛藤をさへ前代的の形式に造りかへる。映畫の多くがその手段を慣用してゐる。劇に於ても、新劇の原物の反復は別として、新らたな劇も、右にいつたやうな逆轉方法が巧みに利用されてゐる者が喝采される。さうして驚くべきことには、それ等の藝術的（?）創作に從ふものが決して十年前の歴史物の作家のやうな過去的な教養を受けた人々ではなく、何れも現代的教養をうけた現代人であることである。これ等の現代人は十年前の歴史小説の作家と違つて、過去の生活について體驗も研究もしてゐるのではないが、たゞ過去の世界の外部構造の引寫しによつて、その表面に沿ふて模倣的感情を走らしてゐるのである。

何うして現代人の間にかういふ藝術的傾向が發生したかに就ては、極めて深刻な理由と、また極めて淺薄な理由との二つがある。深刻な理由とは一種の社會的自暴自棄である。又無頓着である。更に又別な意味に於いては、彼等自身の社會的地位の誤解である。淺薄な理由とは、資本主義的商業主義である。先づ前の理由を考へて見やう。

自由主義が我國の新時代を持ち來す爲めに最も強く戰つたのは、明治十年代であつたが、それによつて持ち來たされた組織の變化は、遂に資本主義並に自由主義制度の成立となつた。然し初めに云つたやうな理由で、日本の自由主義は、まだその政治的終點に十分に到着せず普通選擧をさへ持ち來たさないうちに反動期に入つたのである。しかも終點がまだ向ふにある間に既に自由主義の懷疑時代に入つてしまつた。市民階級は三十年前には血を以つて贖はれねばならぬと考へて、實際血を流して爭つた自由主義を、今日に於ては甚だ悲觀的に考へねばならぬ地位に立たせられた。彼等は自由主義を捨てることによつて今日の階級戰を勝たねばならぬ地位に置かれたのである。政治的興味の中心が、市民階級の貴族へ

する自由の奪ひ合ひから無產階級に對する階級戰に移らなければならなくなつた。そこで市民階級の支配的地位は、自由主義の上から舊傳統の上へと移つた。それは過去の幻影を以つて近代的市民的理想に代へたのである。それに追隨するのが今日の一部の智識階級の態度である。所謂知識階級は常に支配階級の社會的地位に追隨する運命をもつ者であるが、明治の初めの智識階級は、それがために自由政治の使徒として戰つたのである。今日の知識階級は、支配階級の今のやうな逆轉的地位に追隨するには餘りに近代的であり、又餘りに懷疑的である。と云つて知識階級の社會的地位は決して時代の支配的勢力に決定的の力を及ぼすものではなく、却つて支配的勢力によつて決定されるものであるから、その近代的懷疑的の地位をもつて、今の反動的形勢に叛逆するよりは、それに追隨する地位を取り易い。知識階級は、さういふ性質をもつが、然し今日の場合、右に云つた如く傳統的勢力の支配に追隨するには餘りに破壞的であり、餘りに懷疑的である彼等は、昔自由の使徒となつたやうに今反動の使徒となることは出來ない。しかもこの懷疑的意識を以つて追隨すべき現勢力は、目下の反動政治によつて極端に壓迫されてゐて、知識階級はそれに追隨すれば直ちに生活の壓迫を感じねばならぬ。そこで丁度德川末期のインテリゲンチヤが封建を謳歌する學者詩人とも成り得ず、それを破壞する側に廻ることも出來ず、つひに變挺な一個の嘲世的通人として特殊の集團を形造つたやうに、今日の知識階級は、右へも左へも行けない身體を、過去の幻像に投げ入れることによつて自ら免れて居るのである。が、彼等はさうすることによつて實は無意識に傳統的勢力に加擔してゐるものである。在來の講談物の類が大震災に際して表はれた民族的反感の涵養に加擔してゐたやうに、今の時代錯誤的藝術は、たゞ過去の感情生活を模倣反復することによつて反動政治の目的に適つてゐるのである。更らにこの種の藝術家が過去の幻像に耽ることによつて、彼等の感情的生活の滿足を求めるといふことは、實は自個の社會的地位の正しい認識を缺いてゐるといふことである。自己の社會的地位の正しい認識から出立しない藝術は、假りに藝術的と云へるにしても、藝術の意義を完全に持ち得ることは望まれないのである。藝術は異なる

感情の享樂にしても、現代的感情の創造であらねばならぬことは前にもいつたが、過去の組織に於て發達した生活感情を今日に活躍せしめるには、今日其現在の組織に於て、同じ感情を生み出すやうな機構と作用とが存在し居らねばならぬ。現代人が古代思想を研究するのは、老人が骨董物を鑑賞するのとは異つて、過去のものを鑑賞することに依つて過去の意識に耽溺しようとするのではなく、その古代思想が現代の生活組織に於ける生活意識を組成する歴史的要素であるからである。死體を解剖するのは、その死んだ人間に就て知らうとするのではなく、それによつて現に生きてゐる人間の生理狀態を知らうとするのである。死體がその現在の生活者の生理組織を說明することが出來ないとすれば、それを解剖する必要もなければ要求もない譯である。過去の感情を喚び起す藝術的要求は、それが今日の組織に於ける生活感情の動的狀態に刺戟を與へるからでなければならぬ。現在を殺す爲めに過去にひたるといふことは、生活力を失つた者の厭世的態度である。知識階級がさういふ過去の感情的生活の享樂に於て自己の生活の享樂が求められると考へるのは、その現在の環境を度外視して、それと沒交涉な觀念的境地に遁避するのである。而かも知識階級の現在の環境は決してさういふ遁避によつて救はるべきものではない。彼等はいつの場合も、必らず、傳統的特權を恃む側に立つか、それと戰ふ側に立つか、その一つを選ぶことを餘儀なくせられる地位に置かれてゐるのである。彼は右でも左でもない彼れ自からの地位といふものをもつとは出來ない、而かも過去の感情に耽溺するその態度は、右へもつかず左へも行かず、上へも下へも行かないで、自分だけの想像地位に居らうとするのである。それは幕末の通人武士が封建主義でもなければ、王權主義でもないと云ふ地位をその嘲世的通人の地位に於て占めやうとしたやうなものであるが、さういふ地位は全く想像的で、現實の社會には存在しない。それは社會を遁れることである。藝術家の超越的態度は、自己を有り得べからざる地位に置かうとしてゐるものである。黑か白かを決定すべき討議の票決に於て何れへも投票せさらんがために浪花節を唄つてゐるといふやうな態度は、眞面目とはいはれない。無論藝術的ともいはれない。藝術的態

度は決して遁避ではなく、何等かの意味の前進である。彼等は藝術家としては無論のこと智識階級としても、自己のさうした地位が保たれると考へてゐるのは迷妄である。

更に斯くの如き一般藝術の傾向を持ち來たした淺薄な理由としては、藝術にも亦資本主義的コンマアシヤリズムの働いてゐることである。それは藝術の商品價値が藝術を決定してゐるのであつて、頗る知れ渡つた事情である。このことはそれが、淺薄であるといふだけで甚しく非難されるべきことはない。生活が物質的條件に支配さるゝことは、決して攻撃すべき事情ではなく、攻撃したところで何うにもなることでもない。生活の要求が商品を生み、それが經濟的法則によつて社會的に取扱はれることは、今日の組織に於ては必然である。藝術家自身は、さういふコンマアシヤリズムから超越すべきものであるには相違ないが、その藝術品が一方で生活の物質的條件であるが故に、藝術家も商品價値について考へることのあるのは脫れない。學說等さへも商品價値をもつのは、この時代に於て已むを得ないことである。而して藝術の商品價値がその社會的性質に於て決定されないことも、亦良い品物が必ずしも能く賣れないのと同じことであつて、資本主義組織の一つの特徵である。然しコンマアシヤリズムなる言葉は、通常、商品が社會的價値に據らずに特殊の資本主義的政略によつて頒布されることを意味するやうになつてゐるのであるが、反動期の藝術的傾向も亦その普及に於てコンマアシヤリズムの働いてゐることは事實である。一般を作爲的に刺戟するコンマアシヤリズムはこゝにも能く作用してゐるのである。深刻な意義に於て社會に食ひ込む藝術も、場合によつてはさういふ淺薄な作爲によつて社會に食ひ込むことを得るのである。無意味な藝術も資本主義機構のために社會に食ひ込むのである。殊に劇のやうに、事業として資本の勢力の必要なものには、コンマアシヤリズムによらなければ成立しない狀態にある。民衆の間に如何なる要求があらうとも、文化者の間にどんな要求があらうとも、それが一定の商業主義と一致しなければ、永く抑へつけられることを免かれない。同時に過去の感情の模倣的事業が資本主義と結び付くことによつて永く一般に強ひられる。

四　變動時代の藝術的傾向

反動の日本はその現在の藝術的境地として、無論前述のやうに過去的のものばかりを持つてゐるのではない。反動は過渡期に於ける一時的逆轉である。安政の大獄は封建政府がその過渡期に入つた時にその間に起つた一時的の反動政治の紀念であつた。故に反動傾向の露骨な表れは、他方に於て社會的變化に急激な進行が起つてゐる事を證據立てるものである。時代は何等かの方向に急激に進展しつゝあるのだが、そのある時期に反動が律動的に繰り返されるのである。それは即ち有機的進化の常態である。イギリス流にさういふ有機的進化を『革命』と呼び得るならば、さういふ變動時代は一つの革命時代である。それは急激に起る突變に較ぶれば、極めて平和的であるが、その期間の長い丈けその變化は寧ろ徹底的である。産業革命が長い間に産業組織を徹底的に取替へたやうな仕事は、所謂『革命』即ち政治的激變によつて遂げることは出來ない。强いてそれをすれば或る程度まで必ず逆轉する。有機的進化はその變化が一般的の大衝撃を與へないが、しかし大いなる衝撃を伴ふ突變よりも、變化が大きい。殊にさういふ進化過程の産物としてそれこそ生活的意義をもつたといへる藝術の世界が展開する。所謂革命期の藝術なるものが特に生活的に深刻な意味をもち、表現をもち、形式をもち得るのは、眞に藝術的なるものは、社會の進化過程に於ける生活悲劇の感情に根柢するものに外ならないものだからである。

この時期に於ける藝術は、大體に於て三つの傾向を取る。即ち現實的傾向がその一であり、浪漫的傾向がその二であり、象徴的傾向がその三である。

現實的傾向は、傳統的迷妄がその宗教的乃至形而上學的作用を失つた所から、社會が正しい認識に入ることによつて、生活の現實を取戻す態度をとる場合のそれである。所謂科學的態度と稱せられるものが先づ正確の認識から出發すると

同じやうに、迷妄の生活から現實の生活に轉じる時に、人間は先づ正しい認識を要求する。藝術がこの生活態度の一般的傾向に伴つて現實を直視する正しい感覺と、それに基いた、他の事情によつて押し歪められない眞直な感情とを根柢として生れ出でた時にリアリズムとして成立するのである。多くの高級な藝術がこの現實を直視する態度を離れた感情生活から生れ出づることのあるのは云ふ迄もないが、それは前にいつた如く文化の盛期に於ける感覺的傾向の藝術である。さうして生活が現實を見ることによつて取返される場合と、現實を離れることによつて完成される場合とは、全然その時代を異にするのである。所謂革命期は感情の超越的昂奮に耽溺するやうな文化組織の崩壞しつゝある時である。それは社會が凡ゆる超越的昂奮から醒めて現實に蘇る時である。如何なる社會も全然超越的感情によつて生れることは出來ないが、社會の一部にさういふ超越的生活を成立せしめる階級生活が豐かに成立つてゐる時に――即ち文化社會の出來上つた時に、豐かな超越的藝術感情が享樂されるのである。革命期はさういふ階級の崩れる時であるが故に、その時期に於て藝術的意識も科學的意識と共に正しい感情に根柢した感情生活を作り上げるのである。

それと同時に、崩壞する階級は制度的粉飾を以て自分を糊塗する作爲的威嚴を失つて崩壞的現實を暴露するに至つて、自暴自棄的自由を憧憬するに至るものである。それはタブウを離れて本能の奔放に任せるのである。そこに頽廢主義が生れる。デカダンの生活意識が、制度的粉飾によつて威嚴を保つ傳統的意識よりは道德的であると考へられるのは、同じ實質が虛飾されずに表はれてゐるからである。そこに頽廢主義の消極的道德が存する。それは革命期の藝術的傾向として必ず存在しない譯に行かないもので、かなり重大な作用を働くものであることは、私が外の機會に屢々說述したところである。

次に象徵主義は社會組織のいろいろの性質に從つて異なる内容を持つことを得るが、革命期の藝術としての象徵主義は、實は觀念に隱れる哲學的態度と或る共通點をもつものである。組織の崩壞は必ず壓迫する階級の生活要求の行動的

發動によつて持ち來たされるものであつて、制度が行動を拘束する作用を失ひ、行動が制度を破壞する力をもつに至る所から、組織は崩れるのである。この破壞的行動の意識は、それが現實の行動に即して組立てられる時は、必ず科學的意識として現はれる。何となれば現實の行動は破壞に於ても建設に於ても、それが科學的であることによつて最も確實に成つたものだからである。けれどもそれが行動の具體的の過程を離れて、それを押し進める衝動が感情的に特殊の心像として表はれるのが人間的心理の普通である。象徴主義はその心像自體に於て終了する感情生活の表現である。生活要求がそれに伴ふ感情内容をもつことは必然であり、その感情内容は前述の如く、その生活要求を滿す行動となつて現はれることによつて終了するものであるが、象徴主義に於ては、その感情内容は行動に行かずに感情自體の特殊の形態に終始し、その感情自體の藝術的表現が最終の目的となるのである。

何故に感情がさういふ自己滿足に終始するかと云へば、それは要するに行動を以つて要求を滿たす生活力の缺乏に伴ふ現象であると見る外はない。既に要求があれば、生活はその方向に向つて進む——行動として——のが必然であるに拘らず、それを内攻的に自己の感情生活に向け、そこで終了せしめることは、一方に於て、生活要求がそれ程適切でないためであるといふともいへるが、又行動的勢力の足りないためともいへる。少くともその何れかであらねばならぬ。しかしそれに關する生活要求の象徴化が起ることは、藝術家が鋭敏な感覺の生活に於て生活要求を直覺する働きをもつ故であるともいへる。即ち彼等は敏感な階級ではあるが、頑强な行動的階級ではないのである。それは即ち知識階級の特徴である。その意味で、象徴的態度は知識階級が行動の滿足を避けて感情の滿足に立籠る階級的習癖を代表してゐるものであるとも考へられる。象徴主義の藝術はそれ故に革命期に於ける生活要求を間接的にではあるが具象的感情として表現するものである。それはその象徴を最終とするものであるから、彼等自らに取つては回避的であり、自己滿足的であるが、併しその象徴的な感情形態は、それによつて同じ感情内容を社會的に喚び起す効果を有つてゐる點に於て、

その程度で革命的である。十字架を本體とする信仰的態度は、自己滿足的である外意味を成さないが、その十字架が生きた宗教感情を呼び起す効果をもち得るならば、その象徴が一種の宗教的意義をもつと云ひ得られるやうに、象徴主義の藝術は、それが自己滿足を誘致する場合とそれによつて現代的な生活感情を刺戟する場合とによつて、その社會的効果を異にするのである。

革命期に於ける藝術的諸傾向は、革命期の一時的逆轉であるところの反動期に於ても、有力な存在を保つてゐることを普通とする。反動的日本の現在に於ても同じである。そしてその時期に於て、眞に藝術的であり得るものは、この三つの傾向である。が反動政治の一般影響は、多くの藝術的生活者をこの革命期の藝術的境地からさへ引離して、上述の如く反動への順應者たらしめるのである。それは日本の資本主義が鮮明な階級的對立を構成する歴史的過程を十分に經過しない内に、反動期に入つたことが重大な原因をなしてゐる。その歴史的過程を經なかつた事は、即ちその民衆に彼等の階級的地位に對する明かな意識をもたせ得ない原因ともなつたのである。事實に於ては、日本も階級的對立に入つてゐるが、舊傳統の持續が、双方の階級者に意識的錯誤を起さしめてゐるのである。支配階級等は失はれた傳統によつて今も尙ほ階級を超越した統一を持ち來し得ると錯覺し、知識階級は、その無關心の藝術的境地に於て超越的地位を保つてゐると錯覺してゐる。事實は共に階級戰を爭つてゐるのである。彼等の藝術的心境に於て、過去の幻像に耽溺するやうな長閑な地位に置かれてゐる者は無い筈である。反動政治の下に於ける藝術の逆轉は、反動政治そのものがさうである如く、確かに社會的錯覺の所産である。

誤正　前號所載新村博士の「呂宋の眞壺」中納屋助右衛門（說苑二二九頁八行目）は助左衛の誤につき訂正す

英國に於ける勞資闘爭機關の展開

小島精一

（第一）資本家軍の陣營

一

言ふ迄もなく今日の爭闘はすべて團體間の爭闘である。

凡そ、資本家側の團體には少くも三種の異つた組織が發達して居る。

第一は例へば日本の經濟聯盟とか工業俱樂部とか言ふ樣な極く緩い協會であつて、之は單に意見書や訴願を政府に提出したり、一般的の共通問題（例へば規格の決定や關稅の改正等の如き）に關する。調査や研究をしたりするに止まつて居る。之は包擁する範圍は廣いが直接爭闘の矢面てに立つものではないから、茲では論及しない。

第二は主として勞働者の運動に對抗するのを表面の目的として双互に連絡をとる結合である。之は假に「勞働」を一種の商品だと考へると、なるべく安く之を購入しやうとする點で一般の消費者組合と同じ種類の結合に屬するものである。だから、此の發展は其性質上受身のものであるとも言はれやう。

英國の炭坑業に勞働者の團結が發達し賃銀の値上げの要求が強固な實勢力を背景として行はれるやうになつてくるにつれて、此の雇主側の結合も、次第に其組織を擴大し、完備して來た。

然し、其の全國的組織として大英國炭坑主協會（Mining Association of Great Britain）が始めて創立されたのは、もう久しい前のことで一八五四年であつた。これより先き、及び此以後にも多數の地方的結合が創立されたが、今日では大體それは此全國的協會の支部となつてしまひ、此中央機關の決定する政策に從つて行動する次第である。

此の全國的協會は二十四個の地方的協會を包含し、七百以上の炭坑會社から成つて居る。會社の數から言ふとまだ三百以上の獨立會社もある筈だが、それは何れも、小規模のもの許りだから、生産量から言ふと殆ど全部が此協會に屬すると言つても差支へない。

此協會は直接には價格や生産の規律を行はないのであるから、獨逸のカルテル等とは全く其機能を異にするが、炭坑業の趨勢に及ぼす影響に到つては極めて重大なるものがある。

具體的に此結合の職能を擧げると、炭坑主の産業政策の決定、勞働者の要求に對する組織的反對、立法府に代表者の選出、及び特に爭議の危機に臨んでは大々的宣傳法によつて輿論を身方につけること等が其主なものであらう。例へば一九年のサンキイ報告が炭坑國有案を提出した際など實に猛烈な反對宣傳をやつたものである。

地方協會も大體同じ職能を持つ。そして各地方で勞資協調的の調停機關や交渉機關に代表者を送るのは此協會を通じてである。

是等は前述の如く表面的には價格上の協定に關係しないが、暗默裡に種々の協働的關係を促進することは言ふ迄もない。

さて、第三の種類の結合は合同、聯合、又は利害協約とも名付けらるべきものであつて、之は第二種の結合が購買者としての立場のものであるに反し、生産者乃至販賣者としての立場からする結合である。それ故其目的も積極的に生産能率を高めるとか、價格を釣上げるとかして利潤の增加を計るにある。

獨逸では早くから世界無比と言はれるカルテルが發達し、米國でも立派なトラストが出現したのに反して、英國炭坑業では比較的に其發達は遲れて居た。此事は私も既に別著で詳しく論じて置いたから茲で夫れを叙べやうとは思はぬが、只だ注意して置き度いのは大戰後は英國でも著しい合同運動が發展したと言ふことだ。他の多くの重要な現象と同じく此企業集中の機運も戰爭によつて、全く劃期的躍進をしたやうに思はれる。

此最近の狀勢は物語り度いのだが、それには先づ大戰中の管理政策を知つて置く必要があるから、私はそれを叙べる際に此問題に論及することにする。

では、此合同運動は勞働爭議にどんな關係を持つかと言ふと、やはり資本家の立場を非常に力強いものにするのである。常て此運動を研究した米國の産業調査委員の報告によると英國の合同運動には普通他國の場合の目的丈りでなく、勞働者に對抗せんとする意圖が多分に含まれて居るやうに思はれるさうだ。

同じ此問題の研究家なるカァタァも其れを注意して居るが、殊に勞働運動の過激な南ウェルス炭坑業では資本家は合同による此方面の利益をも決して看過しなかつた。一九一一年の彼の有名な爭鬪の際、此地方の大合同體なるキャムブリア・トラストは甚だ有力なる立場を支持することが出來た。それが此地方の炭坑主の間に充分認識されて此合同運動を促進する一因をなしたことは疑ひない。

英國の炭坑業は最近では特に鐵鋼業其他の重工業と結合する傾向を明瞭に示して居る。

此所謂縱斷的合同は勞働運動の上にも新しい波紋を投げずには居なかつた。大戰中に出來た三角同盟が、最近では又所謂產業同盟に迄擴大されんとする如きは、かゝる資本家側の結合運動に刺戟される處が多かつたらうと思はれる。

二

何と言つても直接に炭坑爭議の矢面に立つて應戰するものは全國炭坑主協會であるが、實を言ふと其協會も背後には英國產業聯盟（Federation of British industries）と言ふ全資本家的の爭鬪團體を負ふて居り、それが直接にも間接にも勞働軍の粉碎に盡力して居るのである。

炭坑業は常に爭議の關ヶ原であるから、炭坑主協會と產業聯盟（F・B・I・）との連絡は、とりわけ密接ならざるを得ないのである。

そこで、私は此團體の模樣を少しく物語らう。

此聯盟は一九一六年に成立したもので、從來織物業者を中心として組織されて居た雇主議會協會を擴張し、新しく金屬及冶金、機械等の諸重工業家が參加して組織された大同團結である。其會員は製造工業家を中心とするのであるが、其利害は前述の如く直接に炭坑業と融合して居るのであるから、炭坑業の問題にも重要な干渉をなすのである。

聯盟自らの宣言によると其目的は大約して次の四項に括ることが出來る。

（一）國の內、外に於ける製造家及び生產者の利益の擁護及促進

（二）政府及び公、私の諸團體と工業上の諸問題に關する意見の交換、及び其集中を計ること

（三）立法の際工業の利益を擁護し、促進すること

（四）會員に報道、勸告、援助等をなす中央機關となること

これ丈けでは一寸其具體的の內容が曖昧だが、其實際やつてる仕事の內部の仕組を見ると、海外市場の開拓や報道の頒佈、

査研究、交通、産業組織、立法、其他に關する約十個の部課に分れて居り、其内には勞働問題に關する内外の諸報道を供給し、必要ある時は全國雇主組合聯合（National Confederation of Employers' Organisations）を通じて、實際活動を行ふ等の一部課もあるのを見出す。

だから、聯盟自らは勞資間の交渉には干與しないものであると明言して居るが、實際上の闘爭的立場から見ると全國工業家を糾合して勞働軍に對抗すると同時に政府を鞭撻して諸種の資本家的施設を行はしめるものだと考へても差支へないやうだ。けだし、表面的には此問題は夫々の産業的雇主協會に托されて居るが、是等は多くは此聯盟の會員ではあるし、産業間の聯絡も此聯盟を指導者として協定されるのであるから、實際は之が全資本家の中央指導機關になつて居るのである。此點は次第に詳しく說明しやうと思ふ。

此團體は創立以來急速に發展して、一九二三年の六月には千八百の會社と百七十の協會とを包擁し、之に所屬する産業の部門は二十三種、下院に議員を送ること六十六人、上院の議席は七十を占めて居る。

とりわけ、目醒しき膨脹をしたのは一九二〇年の中頃から翌二十一年中頃迄の一ケ年間だが、其膨脹の前、一九年末の大會での報告によつても所屬會社數は總體で一萬八千、其資本額五十億磅、使用勞働者は約四百萬人に達して居たさうである。

其機關としては大會議と執行委員とがあつて、夫々産業的に、又地域的に分割された支部の代表者から成つてるのは勿論である。

基金としては所屬會社は其規模（使用する勞働者數に從ふ）によつて年金二十磅乃至二百磅を支拂ひ、所屬協會は一率に年金百磅宛支拂ふことになつて居る。正確な收入額は分らぬが恐らく年々二十五萬磅見當であらう。

大體かうして全資本家を網羅するものであるから此聯盟の勢力が强大な事は容易に想像出來るが、それに就ては「もし、聯盟が重大問題につき意見を出すと、政府及新聞が相當の敬意を拂つて之を聞く」とさへ言はれて居る程だ。事實に就ても之を立證する材料は多數あるが、今は夫れを語る場合ではない。ただ一つ、炭坑業の問題に直接重大な影響を與へた運動の一例證として其の反國有的運動の狀況を敍べて置かう。

サンキイ報告が發表されると直ぐ此の聯盟は反對運動を始めた。先づ直接に、及び英帝國同盟（ブリチツシユ・コンモンウエス・ユニオン）（之も保守的の反動團體である）を通じて其所屬議員に國有案反對宣言に署名させ之を流布

する勞、一方、大會は[illegible]

決議をし、特別委員會を設けて、其意見を政府に提出させた。其積極的意見としては、利潤の分配をも、勞働者の經營參加をも、排斥し、ホイツトレイ式の勞資協調委員會と出來高拂賃銀制の採用とを勸告して居るものである。

新聞紙其他の發表機關によつて此宣傳が有效に流布され、輿論の空氣を資本主義化するに力あつたことは勿論だが、聯盟の運動はかゝる口舌の宣傳に止まるものではなかつた。

嘗てサンキイ報告を「精神通り、文字通り」採擇すると迄誓約した政府を動かして、之を屑紙の如く破棄させると、聯盟は次には一般に產業公有的傾向を持つ總ゆる政策の放棄を强要した。其結果一九一九年の電力供給法案が骨拔きになり、交通省法案の强制徵集權が削られ、又二一年の鐵道法案にも重大な干涉を加へて效果を收めた。

尙ほ此種の、及び、價格、貿易其他の各種の運動を敍べることは差控へて、私は再び此聯盟の對勞働者運動に立ち歸り、其領域には一見無關係だと稱れさる此聯盟が實は如何に重要な指導的行動をとつて居るかを物語らう。

三

[illegible]

に當らないが、此方面でも資本家の立場を擁護するためには仲々活動をして居る。それで、直接此目的を擔任させるためには二つの專門的機關を設けて、聯盟自ら之を統制して居るのだ。其一つは全國勞資同盟（National Alliance of Employers & Employed）で、之は勞資双方の立場は反噬的ではなく融合的であり、協調的であることを吹き込む處の謂ゆる懷柔機關である。

第二は、全國雇主組合聯合（National Confederation of Employers' Organisations）で、之こそ直接に勞働者と對抗して雇主の利益を擁護する全國的戰鬪本部である。

私は先づ全國勞資同盟（N・A・E・E・）から說明しやう。此協調機關は一九一六年十二月に產業聯盟によつて創立されたものだと言ふこと、及び戰後の產業復興には絕對に緊要な勞資間の親密なる協調を促進せんとするものだと言ふことを當時のタイムス紙が傳へて居る。又此機關と產業聯盟との關係に就ては後者の機關誌「バレツチン」も同じやうな報道をして居るから双方に親族的提携が存することは疑ふ餘地がない。

事實に就て見ても此協調會の資本家側の會員としては產業聯盟の最も有力な會員が牛耳を取つて居るのである。

勞資同盟は其後に其機能を擴大し一般に階級鬪爭を排斥して、「勞資双方の圓滿な提携によつてのみ國民的繁榮を期待することが出來る」と言ふ主義を宣傳し、其實現に努力することになつた。其運動は次第に奏效して一八年末には倘ほ十三地方にしかなかつた協調團體が二〇年には六十地方に普及し「非政治的な公平な立場にあつて、生產增加、失業、暴利、國有、機械使用、出來高拂賃銀制、勞働組合權改正等の諸問題」を研究するやうになつた。

一九二三年四月に此同盟の催した或る會合の席上で有名な勞働組合の首領なるジエ・エイチ・トーマスは次のやうな協調主義を叙べて居る。

「罷業を欲する勞働組合の指導者は其仕事に適して居ないものだ。……階級鬪爭を云々するは只だ勞働者を地獄に導く丈けのことだ」。

出來、英國資本家の懷柔政策が勞働軍の鋭鋒を鈍化させて來たことは周く知られて居る事實だが、一寸かうした一例からも其勞働軍の内的分裂を覗ふことが出來るやうに思はれはしないか。

勿論聰明なる英國の資本家は勞働組合を表面から法律的に禁壓するやうな方法は寧ろ時代遲れであることを熟知して居る。だから、彼等は之を軟化すべき適當の機關を作り出したのである。

此協調機關が資本家側から幾何の財政的援助をうけて居るかに就ては何等公表された材料がないが、一九二二年度では寄附金九千五百磅、掛金一千六百磅に上つたと云ふこと丈けが分つて居る。

四

大戰後一般に社會不安の昂揚した時、此の善後策として勞資協調會議を設くべしと云ふ議論が沸騰し遂に一九一九年二月に全國產業會議が召集されたのは周知の事實である。其會議から政府へ提出した議案は結局有邪無邪に握りつぶされてしまつたが、此時、產業聯盟は從來久しく渴望してゐた雇主組合の總聯合組織を設立する機運を逸しなかつたのである。此前後の事情に就ては當時聯盟の機關誌（二〇年三月一日）が次のやうに明白な報道を傳へて居る。

「產業聯盟が自分から進んで賃銀及勞働條件の交渉に參加することは從來の慣例上差控へて來たものであるが、久しい前から、此問題に就て諸種の雇主組合の協働を計るべき或る中央機關の必要なことは痛切に考へられて居た事である。

聯盟は此計畫を色々とやつて見たが、全國產業會議のあつた後で、やつと始めて、その設立に成功し、之をば全國雇主組合聯合と名付けたのである。此新機關は同時に產業聯盟の會員たる多數の雇主組合を包擁し、產業聯盟の姉妹機關であるが、專ら勞働問題を取扱ふものなのである。

一九年九月の鐵道大罷業の濟んだ時、此兩機關の双互關係に就て議論があつたが、時の產業聯盟會長サア・ヴインセント・セイラアドは時勢に鑑み、此兩機關の協働會議を開く必要のある事を勸告し、遂に之が採用されて其融合關係が正式に明示されるに到つたのである。」

此時から雇主組合聯合は產業聯盟の執行委員中に其代表者を送り、又兩者の協同委員會議が聯盟の本部で開かれた。試みに其第一回會合の議題を見ると此會合がどんな性質のものかを端的に知ることが出來る。夫れは次の通りである。

運搬勞働者賃銀の研究。失業保險法案。勞働者賠償。鑄物業罷業——鑄型工を機械會社以外で使用する件。

だから此兩團體の融合關係に就ても疑問の餘地はない。

因に、此雇主組合聯合の執行委員には一九二二年の機械工罷業を擊破して名聲を走せたサア・エレン・スミスも居れば、常に戰後の炭坑爭議の矢面に立つて奮鬪して居る大英炭坑主協會長エヴアン・ウイリアムスも居るし、造船業主協會のサア・アンドリユー・ダンカン等の猛將も居る。

大體こんな譯で、英國炭坑爭議に於ける雇主側の陣營は全國炭坑主協會から全國雇主組合聯合へと連絡し、更に全產業聯盟とも緊密に結び付けられて居る。では、此の資本家軍の總本部が戰後の勞働不安期に於て如何なる實際的活動によつて其一體不可分なる各部門的利益の擁護に貢獻したか、それを簡單に敍べて資本家側の考察を終へ度いと思ふ。

五

大戰後英國の經濟界は一時變態的の好景氣に見舞はれたが、一九二〇年に入ると既に產業不振の兆が表はれて來た。產業聯盟では早くも此時其會員を召集して善後策を考究し、其結果として一刻も速に政府の管理及び干渉を廢止し、企業家の自由なる活動を阻害する諸種の束縛を除く事を要求し、一方には其會員に向つて大戰期以來の利潤を生產力の增進のために使用するやうに勸告したが、其內に不景氣が愈々深化して來ると、此聯盟の指導の下に全資本家の斷乎たる賃銀切下げ運動が展開し始めたのである。

大戰後歐洲革命熱の昂揚期に、しばらく後退するやうに思

れた資本家の戰法はかうして一九二〇年の後半期に入ると、一變して積極的攻擊に移つたのであるが、一時はさしもに切り崩されるかとさへ見えた。資本家の陣營が機を見てかく迄迅速に其備へを立て直したことは此産業聯盟の力が與つて大なるものがあつた。

一九二〇年十月産業聯盟は物價の騰貴と賃銀との關係に就て次の如き主旨を中心とする其意見書を發表した。（十月十一日の機關誌バレッチン）

（一）賃銀を一般的に引上げることは、夫れにつれて物價をも高める許りである。眞に物價を引下げ、之によつて又眞實の賃銀をも改善するには生産を增加せねばならない。

（二）今日の狀態に就て資本家に責を歸するは全く見當違ひである。假令、（其個人的消費に向けられる部分は別として）現に資本家の手中にある購買力を勞働者に移したとしても、狀態は決して大差を生じまい。けだし、資本へ支拂はれた金額は工場、機械、鐵道等に投下されるのだが、勞働賃銀は主として現前の必要を滿足するために消費されるからである。

（三）現狀を改善せんとして現存の富の分配を仕直すのは解決の途ではない。

（四）今日の産業不振は勞働者が其生産量とは無關係に只だ賃銀額の增加によつてのみ國富の分配上の分前を一層大ならしめやうと計つた政策の直接の、且つ必然の結果である。

（五）勞働賃銀の引上げのため生産費は高まり、其ため産業は一般に需要者が肯んじない程度の高價でなくては其製品を提供し得なくなつてしまつたのである。

之は實に産業聯盟が戰後の攻擊に打ち出でる際高く掲げたる其旗幟に外ならなかつた。

此の論法は終始一貫、折にふれ事にのぞんでは繰り返へし、蒸し返へされて輿論に訴へられた。例へば一九二二年の初めに發表された有名な「生産費の低下と産業恢復」と題する覺書きの主旨も全く此の繰返へしに過ぎない。

其覺書には大戰開始當時からの賃銀の趨勢を研究し、夫れが今日生産費の暴騰の主因だとなし、更に之を戰後の不景氣と結び付け、進んでは、價格の下落が急務であることから、生産費の低下を要求し、結局賃銀の引下げか、一人當生産量の增加か何れか其一を以て産業恢復の絕對要件として居る。而して、雇主側は既に此不況期を切り拔けるためには其報酬の一時的減退を充分堪へ忍んで來るのであるから、勞働者も亦場合によつては生計の一時的低下を忍ばねばならない。要するに勞資双方の犧

此によつてのみ此難局を打開することが出來るのだと主張して居る。

では、かゝる旗幟を立てゝ、此產業聯盟は自ら資本家軍の總本部として如何なる活動をなしたか。

六

產業聯盟の活動は自ら標傍する如く單に間接的のものに止つて居たか。否。私は其決して然らざりしを例示するために、一九年の鐵道罷業と二一年の炭坑爭議とに於ける其活動振りを語らう。

鐵道罷業の際產業聯盟は其全活動力を政府の援助のために提供して勞働軍を粉碎するに努めた。同年十月六日の機關誌は之を次の如く報道して居る。

「本聯盟は其會長と熟議の結果、此の廣汎なる全組織を政府に提供して、自由に使用せしめることに決定した。……聯盟の職員は直ちに地方官廳の役員や地方交通機關の職員や全國交通關係の諸員と接觸して協働的動作をとるやうに命ぜられた」

此罷業が濟んだ時、同じ機關誌は誇り顏に其秩序恢復に偉大な貢獻をなした事を報告し、政府自らは氣の付かぬやうな各方面の重大な報道を蒐集することが出來たのは此組織の力による處が多いと敍べ、或るは自ら其聯盟へ衷心からの感謝を寄せ、其行動の迅速で機宜に適せるを賞讃したと述へて居る。直接には爭議に干涉しないと標傍し乍ら、何故こんな活動をなしたかと問ふ者があると彼等はすましてから答へた。

「一個の聯盟としては勞資間の爭議に干與しないのが方針である。が英國產業の福祉を擁護すべき代表的機關としては、此產業組織を擁護し、それが爭鬪の結果恢復し難き傷手を受けぬやうにするために、其全力を盡すことは當然なさねばならぬ明白なる義務である」と。

一九二一年の炭坑爭議の例が又同じ活動を傳へて居る。其の三月、產業聯盟の石炭部委員會と石炭消費業者協會との聯合委員會は炭坑國有及び全國劃一賃銀制に反對する決議をなしたが、超えて四月、愈々三角同盟が働き出す形勢となると、此聯盟も亦再び其活動を開始し其本部は直に、危機に直面せる政府の諸機關と周到なる聯絡をとることになつたのである。

私は此論文で戰後の勞働運動の史的展開を敍べんと欲するのではない。だから、此の資本家軍の攻勢のために漸次壓迫されて來た勞働勢が一九二三年に入つてから如何に最後の死活戰を試みて其頽勢を挽回せんと努めたか、而して其抵抗をも更に

碎し盡さんがために資本家軍が政府の機關と結束して如何に高壓的手段をとつたか、其際此產業聯盟が如何に有力なる活動をなしたか、是等の問題は今は割愛する。

言ふ迄もなく今日の炭坑爭議は英國全產業の爭議である。其勞働軍の陣營が單に炭坑夫組合だけではなく全勞働者組合の聯合から成り立つてゐるやうに、資本家軍の陣營も亦單に一炭坑主協會だけではなく全產業聯盟から成り立つて居るのである。否、勞働者の陣營が進んで國際的組合によつて支持されてるやうに資本家の陣營も亦緊密なる國際資本網で護られて居るのである。以上の概觀によつて一應それを說明し得たこととして、私は筆を轉じて勞働軍の陣營を觀はう。

(第二)　勞働軍の陣營

一

炭坑夫側の戰陣は言ふ迄もなく大英國炭坑夫同盟(以下單に坑夫組合とも言ふ)を其中堅とする。

之は全國に亘つて約八十萬人の炭坑夫を糾合するものであり、全英諸產業中でも其規模は最も大に、其團結力は最も整備して居り、其の戰鬪精神も亦最も强烈なのである。謂はゞ總ゆる點から見て、全勞働運動の中樞機關と見るべきものであらう。

此組合に就ては既に本邦でも多數の說明が行はれて居るやうだから、私は單に簡單に數言するに止めやう。

先づ組合の構成から言ふと、之は十數個の、形式上は獨立して居る地方的炭坑夫組合の聯合體であつて、未だ一個の完全なる合同體ではない。では、全國的組織が如何なる諸機關によつて統制的に仕組まれて居るかと言ふと、先づ結合の自然的單位は各鑛坑の炭坑夫から成る坑會(ロッヂ)である。其上は區會(ヂストリクト)である。然し之は廣い區域を管理する場合の外は一個の組織上の段階とはなつて居ないで大抵は坑會から直ぐ一州又は數州を包擁する地方組合(アッソシエーション)となつて居る。此地方組合こそは其管轄地域内の一切の問題をば自主的に處理するもので、事實上、獨立的組合たる面目を多分に備へて居る。そして、地方的の炭坑主協會と交涉を行ふものである。從て此組合には執行委員もあれば、諸職員もあり、又其所屬坑會の代表員から成る評議會もある。大きな組合になると此評議會には數百名の代表者が集る程である。組合政策上の大問題に就ては先づ坑頭集會で各坑の方針がきめられ、其決議を齎らして坑會代表者が評議會に臨むのである。

地方組合の上に立つ、大英國炭坑夫同盟も亦其執行委員會と全國會議とによつて仕事を行ふ。後者は毎年一回定期會合を開

く外、重要問題のある毎に臨時召集される、各組合の代表委員は此種の事項に就ては豫め夫々の坑頭集會で其方針を議決して居るのであるから、全炭坑夫の意思はかくて最低級の機關から漸次最高級の全國會議に迄一貫する仕組みなのである。

かゝる簡單な仕組みで此尨大な組織が緊密に統治されるのは一つには會員が地域的に集中されて居るのと、二つには各坑が自然に好都合な單位となるためださうである。

資本家側の場合と違つて勞働軍の頭痛の種子(たね)は何と言つても財政上の問題だ。此大同盟の欠點も亦たそこにある。殊に、まだ完全な合同體ではないがために、中央金庫の財源は極めて貧弱である。然し、必要の場合には、臨時各組合から特別基金を徴集することにはなつてゐる。

二

炭坑經營の職能は内部的には多數の專門に分割されて居り、夫れが各自獨立した職業を構成して居る。それ故、廣く炭坑從業員と概括的に呼ばれる者の間には多數の職業上の差別がある、若し、此職業毎に獨立した組合を作るとすれば、一炭坑業にも多數の別個な職業的組合が分立しなければならない筈だ。處が職業は一方では夫々獨自の特殊的立場もあるが、對資本家の交渉には自ら共通な利害關係を持つものである。だから、對資本家戰を行ふ上にはなるべく職業的なる偏狹な立場を棄てゝ産業的なる統一的立場から團結するに若くはない。

英國勞働組合の發達を見ると始めは主として熟練工のみの職業的組合が双互に孤立的に組織されて居たものであるが、前世紀の末頃から一方には不熟練工の組合も出來、次第に此兩者が融合して廣い範圍の産業別組合が發達して來たことが分る。

今産業によつて其産業的組合發達の狀勢を比較して見るに、色々な事情から其程度にはかなりの相違がある。私の思ふ處では炭坑夫組合などは比較的に最もよく産業的組織が發達したものと言へるだらう。之は一つは、産業内に戰鬪的精神が充分目醒めて居ることと、二つには職業間の障壁が比較的低いからである。

第二の原因は、即ち熟練工と不熟練工との間の技術上の差異が餘り著しくないことで、言ひ換へればお互に、むきになつて其特殊的位置を爭奪し合ふ必要もないと言ふことである。

第一は言ふ迄もなく反資本家的思想が浸透してゐることである。

抑も炭坑夫組合が政治的に自由黨を見棄てゝ勞働黨を支持するに到つたのは一九一〇年頃からであるが、此前後に於て、

れは又サンヂカリズム乃至組合合同運動の過激なる思想を吸收した。殊に南ウエルス及びスコットランドの連中は其急先鋒となつた。それで既に大戰前から炭坑夫の間には産業の平和を攪亂し勝ちな傾向が强く動いて居たが、此運動にとつて重大な影響を與へたものは、かの最低賃銀法を招來した一九一二年の大罷業であつた。

此罷業は炭坑夫組合の結合を引き締める大切な試練的經驗を與へたと言はれるが、又一方此爭議を通じて精神的にはサンヂカリズムの思想が炭坑夫の血液中に現實的な力となつて融け込んだものだ。

此同じ一二年に南ウエルスの組合から發表された「炭坑夫の次の一步」と題するパンフレットは一般炭坑夫の間に廣く流布されて、非常な影響を及ぼしたものだが、其内容は明白なるサンヂカリズムの主張に外ならなかつた。

三

世界大戰を經て炭坑夫組合は如何なる變化を受けたか。夫れは數の上ではかなりの增大を來したが、內的組織には多少の集中的發展を見た外、これぞと言ふ程の變化はうけなかつた。それより、勞働軍の陣營にとつて、一大偉力を加へたものは一九一五年十二月に各關係組合から批准された彼の三角同盟の成立であつた。之れは炭坑夫組合と鐵道從業員組合と運搬業組合との三大組合の攻守同盟である。

炭坑夫組合で始めて此種の同盟を作るべき主旨の決議をなしたのは一二年の罷業の翌年の大會であつて、それは勿論此爭議の經驗が訓へた處に負ふものが少くない。一方、鐵道及運搬業の勞働者も其前年（一九一一年）には大罷業を行つて、つぶさに共同動作の必要を感じて居たのである。けだし、是等の組合は相互に極めて密接な作業上の依存關係を持つし、其の何れが罷業しても、夫れは直に他の組合に重大な利害を及ぼさずにはすまぬのであるから、共同動作をとるやうになつたのは全く自然の必要から促されたのである。一九一四年、當時の炭坑夫組合長スマイリイの發表した處によると、とり敢へず此三組合丈けの同盟を作るが、之は次第に擴張して、他の關係的諸組合をも包含するやうになるであらうと言つて居る。其後十年、今回の炭坑大爭議に際し、更に鐵鋼業、及び諸機械工業等の大組合をも糾合する運動の起つたのは決して偶然な突發的事件ではない。

此問題に就ても詳しき說明は他日に讓り、たゞ簡單に其經過を敘べやう。

先づ、此三角同盟が活動するためには如何なる條件と準備とが要るかと言ふと、其何れかの組合から、爭議の性質が全國的であり、三團體の共同動作を必要とする意見の下に共提案をする。次には此提案に就き各組合が別々に獨自の規定に從て可否を決する。最後に各組合の代表者から成る三角同盟の會議によつて實行の方策を決定する。

さつと此の三段の手續きが必要なのであるが、其ために整然たる共同動作を迅速に決行するにはまだ〲幾多の困難が伏在して居たのである。けだし、其規約にも明示されてゐるやうに、三團體は夫々自己のための行動に就ては完全な自主權を持つて居るからである。そして各團體の罷業決行の議決方法も大差があつて、例へばそのために疾風的な敏速な罷業を尊重する鐵道從業員にとつては、悠々たる炭坑夫の議決法は同情罷業の時機を失せしめる恨みが大きかつたのである。然るに戰鬪精神から言へば、鐵道及運搬業組合は到底炭坑夫組合の如き積極的なものではなかつたから、後者が切實に要求する場合にも前者は必ずしも之に滿足な共同動作をとらなかつたのである。

だから戰爭中から、其性體知れぬ怪物としての嚴存自體が既に資本家軍に偉大な威嚇となつた事は言ふ迄もないが、當初一部に熱狂的に期待された程有力なる實戰上の武器であるかは寧ろ疑問とされたものであつた。

此怪物が始めて動き出したのは一九二一年の炭坑罷業の際であるが、それも愈々實戰に移らうとする土壇場になると鐵道員組合のトーマスは或る些末的理由を楯にとつて其同情罷業を峻拒してしまつたのである。

かくて此三角同盟は初めの期待が大きかつただけに勞働者の失望を買ふことも強く、一時は崩壞して其儘消滅してしまふかと思はれたが、愈々强烈になつた資本家側の壓迫に伴ふ時勢の必要は遂に再び其復活を促したのみならず、今度は前より一層大規模な計畫となつて出現したのである。

四

とも角も三角同盟の擴張的復活運動が進捗したに就ては、炭坑夫其他の關係諸組合内に於ける左翼指導者の運動が奏效したには違ひないが、其の背後には各種産業が一様に沈衰し、資本家の壓迫に苦しんで居ることと、此炭坑爭議の結果が直に各種産業勞働者の位置に決定的の大影響を與へると言ふ差し迫つた共同利害が嚴存したことを忘れてはならない。或る左翼運動家が此運動は關係組合員の感情に訴へては成功するものではない、が、其明白なる共通の利害關係に目覺めしめれば成功する

ことが出來ぬだらうと言つて居たのは此邊の事情を道破したものだと思ふ。

始めて此運動が具體化したのは一九二五年六月四日の倫敦會議であつて、夫れに參加した組合は從來の三角同盟員の外に合同機械工組合及造船工組合等合計八組合であつた。其後加盟組合は鐵鋼業、電氣業、鑄物業、汽罐工等にも擴張され、七月上旬には規約の草案も出來て、之を關係組合に配布し、夫々其批准を得ることになつた。

今其規約草案の內容を見るに先づ其目的として掲げられて居る處は、團結によつて双互に互助機關を組織し、勞働者の利益を擁護し、之を改善するために加盟員の一部又は全部を援助し、必要と認める活動をなすにある。

其組織は毎年一回開かれる大會と執行委員會とから成り、後者は大會の決議事項を實施する外に、殊に、勞働組合會議と情報を交換し、運動上の連絡を充分に支持する任務がある。

罷業の際、此同盟の活動を求めるには先づ事情を具して執行委員に申し出で更に大會の召集となり、其可決を待つて再び執行委員の實際的指導となるのである。

同盟の援助は單純な交渉の代理から、完全な同情運動迄數種あるが、玆に問題となるのは加盟員は其組合の規約と此同盟の命ずる處と反する場合にも、絕對に此同盟の指揮に服從して行動すべきことである。此點こそは緊密な團體的活動を遂行するに必要な一條項と考へられた處であるが、正しく、又これによつて左右兩翼の一致が亂された點でもある。即ち此點では特殊組合の夫々の自主權を要求する右翼が、對資本家的團結のために之をも無視せんとする左翼と折合へなかつたのであつて、そのため此運動は結局具體化する迄には成功しなかつたけれど、私はそのために最近勞働運動の團結的傾向の發展を見逃がすことは出來ないと思ふ。

一九二一年の炭坑大罷業の慘敗を轉期として、それ以來、英主要國産業の勞働者は勢ひに乘つた資本家の追及戰によつて最後の死線近く迄追ひ込められて居た。彼等は今や死に者狂ひの狀態にあつた。又、そこに彼等の强味もあつた。此事に就ては私は、別にシトラインの明快な說明を紹介するから玆には語らぬが、かゝる死線を背後にして數年來口舌にのみ唱和されて居た「勞働者の大團結」が愈々實行上の痛切な要件となつて來たのである。

決して、左翼とは思はれない炭坑夫組合の會長、ヘアバアト・スミスが、此勞働者同盟運動の初期に次のやうな一句を公言して居るのは此狀勢の緊張を明白に傳へて居る。

「若しレフエレンダムを行つて、英國炭坑及諸機械工業勞働者の意見を徴したら、勿論、一般罷業を決行するに贊成するであらうことは私が、堅く、信ずる處である。」

一九二一年を繰り返すべからず！ブラック、フライディ（暗の金曜日）を忘るべからず！此の警語は決して、今では單純な形容句ではなくなつた。悲痛極まる腹からの叫びとなつたのである。

假令、勞働者同盟は成立しなかつたけれど、勞働者の間に炭坑夫を援けて共同の利益のために團結しやうと言ふ決心は堅く結ばれて居た。

一九二五年の夏、政府を屈服し得たのも此堅き團結力のためであつた。今度の總罷業の決行も其ために出來たのである。而して、かゝる團結的精神の發展を語るものは又次に述べる組合會議の改造である。

五

資本家側に於けると同樣に炭坑夫組合の背後には全勞働組合の統制者なる勞働組合會議（Trade Union Congress）があつて、之が專ら爭議の最高指導に當つて居る。

之は全組合員の五分の四を包含し、毎年一回及び必要ある場合に各組合の代表員の會合する、謂はゞ立法的機關である。其の行政的機關は組合會議の任命する一般評議員會（General Council）であつて、之は少くも毎月一回會合して、時事問題を處理する。之こそ全組合運動の中央執行管理者たる位置にあるのだが、從來、其權限は尙ほ不充分なものであつたため、事實上は有效な統率指導者たるを得なかつたのである。つまり、全組合のために色々の一般的問題に關する交渉に當り、政策はするが或る特殊の組合の爭議を責任を以て處理することも出來ず、之を援助するために全組合に一定の行動を命ずるやうな權限も持ち合せなかつたのである。

然し此一般評議會が出來たのは一九二一年の事であつて、夫れ迄その前身であつた「議會委員」に比べると中央集權的傾向の明かな發展をそこにも見出すことが出來るのである。けだし、此議會委員は其名の示す如く始め議會立法の促進を主たる目的とし、後ち多少產業行動にも干渉するやうになつたが、其權能は言ふに足らず、決して全組合運動の統率的機關と見ることは出來なかつた。三角同盟が出現したのも全く此欠陷を補し、有效な團結的行動を實行するために外ならなかつた。

大戰後、勞働爭議は愈々包括的になり、各組合間の共同動作が愈々緊要となつた。とりわけ一九一九年の鐵道罷業の經驗が

其必要と中央指導機関の命令とをますます〳〵と数へたる。其十二月、議会は労働組合会議の特別会議に報告を提出して、次ぎに記録の有力なる中央機関の組織の必要なるを闡明した。総評議会を中央機関として、其中運動が開化し、遂に一九二一年に全ての一般評議会組合が承認したのである。其れと同時に其権限が拡大され、其組織すら強調されたが、時には指導すら欠けた状態の政府、[illegible]されたのであり、一九二三年の[illegible]を手始めに、一九二四年の[illegible]を出し、及び[illegible]。一九二五年の[illegible]たる[illegible]。[illegible]斯くの如き各種の[illegible]たる[illegible]に各組合に行はれた。ここでもつと積極的に此の一般評議会の中央指導権を強化すること[illegible]的権力を[illegible]し、有效な[illegible]を行ふ上に望ましいとする[illegible]し、組合主義の[illegible]上しきりに其討論が開始した。一般に[illegible]と[illegible]は熱心な其主張者であつたが、之に反して[illegible]なる[illegible]の[illegible]者は、一方には其必要を認めながら、各自の自由を不用意に[illegible]の中央指導者に引渡すことを肯じなかつたから、此の[illegible]容易には進捗しなかつた。一九二[illegible]年のブリッジ[illegible]大会でも一般評議会の権限拡張は否決されてしまつた。それ[illegible]一般評議会の持つて居た表面上の権限といふと大体次の範囲に止まつて居た。

（一）賃銀及労働時間等の一般的問題に就て、其共同的の[illegible]運動を協調すること

（二）各加盟組合中其の根本原則に[illegible]政策を[illegible]たる組合を[illegible]すること

（三）組合双方の争議を円満に解決するに努めること

（四）国際労働の連帯と共同目的を促進するに努めること

然し、[illegible]を達する[illegible]必要は、[illegible]の[illegible]一時的の[illegible]必要な[illegible]権を行使せしめ[illegible]た例へば組合会議が一九二一年に[illegible]で[illegible]決議の[illegible]、[illegible]必要な事件を各組合、[illegible]したりしたのは、[illegible]は政府である[illegible]、事前の必要のために[illegible]に示した[illegible]である。又、[illegible]の[illegible]の機関[illegible]の[illegible]を[illegible]めたことは少くなかつたのである。

かうした[illegible]上の必要に[illegible]するために、一九二四年八月の大会では[illegible]を[illegible]したが、次の[illegible]必要なる[illegible]に決議されるに到つた。

其要旨は、先づ各組合は其[illegible]上の事件に就ては一般評議会に報告をする義務がある。殊に、これが多数労働者を包含する場合には、詳細な報告をする必要がある。

[illegible]が[illegible]し、然も多数の労働者が関係する場合には一般評議

會は此爭議に干涉する權能を持つ。又、賃銀や時間や作業條件等の諸標準が危殆に瀕する時も同じ權能を持つ。

かゝる場合には一般評議會は關係諸組合を召集して會議を開き、正當な解決をするやう其努力をなすべきである。然し一般に言ふと、圓滿な解決の見込みがある場合は評議會は之に干與しない。但し、組合から要請された際は勿論此限りではない。

評議會が干涉し、且つ其援助が承認された時、然も、評議會の努力にも拘らず、雇主側から閉め出しが敢行された場合には、評議會はあらゆる德義的及物質的援助を有効に組織して其爭議の事情が要求するやうな手段をとらねばならぬ。

それはざつとかう言ふものであつた。之に依て評議會の爭議干涉權は始めて正式に認められたが、まだ或組合を援助するために一般に他の組合員に罷業基金を負擔させたり、或は總罷業を命じたりする權能は原則としては認められては居なかつた。

一九二五年の夏、政府屈服の凱歌を耳にし乍ら開かれた、スカアボロの大會では此最後の二つの權限を一般評議會に與ふべしと言ふ提議があり、其討論が白熱したが、それは一般的原則としては尙ほ結實するに至らなかつた。然し乍ら、數ケ月後に再開さるべき、炭坑大爭議を眼前に見据ゑる時、此天下分け目の關ヶ原戰では總罷業も必要なら敢て辭するものではないと言ふ氣勢は各方面の代表者の言辭に表はれて居た。之を要するに原則として一般にかゝる中央集權を承認することには尙ほ熟慮研究の餘地があるとしても、此の炭坑爭議の場合には全組合員が團結して正當なる賃銀及時間の擁護戰に參加するであらうと言ふのであつた。炭坑爭議の齎らした、かゝる際關係に就いては別に述べることにする。

六

最後に炭坑夫國際に就て一言して置かう。夫れは一八九〇年の五月に白耳義で第一回會合を開いたもので其時の參加國は英、佛、白、獨、及墺洪の五ケ國、其代表者は百六名であつた。其總會員數は二十六萬五千人、其中英國のみで二十萬人を占めて居た。一九〇四年に米國が、翌年オランダが參加し、其後次第に擴張を續け戰爭を經て、一層其組織を完備した。一九二四年八月プレーグの大會には十三ケ國の代表者百二十三名が出席し、其會員數は百九十七萬人を超えた。一九二五年の五月には常設幹事局を設けて、其本部を倫敦に置いた。

此國際團結の主たる目的は各國組合の內最高水準に達した國の狀勢を標準として、他の諸國の賃銀、時間其他の條件をなるべく之に合致させやうとするにある。近い話が諸國の爭議でも坑

夫側の苦しむのは獨逸其他の大陸競爭國の賃銀其他が英國よりも低い標準にあると言ふことであつて、其ために此の差異を資本家側に利用されて、賃銀切下げの口實とされるとであつて此國際間の「開き」が嚴存する間は英國内の團結力が如何に强力になつても賃銀の切下げに最後迄の抵抗をするとは困難である。

之を除くためには進んで石炭の國際的分配をも規律的にし、亂雜になり勝ちな現今の國際競爭を整頓せねばならない。此見地から、此國際は石炭の國際的カルテルのやうな規律組織を促進しやうとするのも注目に價ひする。

然し此國際の行動は主として德義的、敎育的方面に注がれて居り、各關係國の自主權は强く擁護されて居るから、例へば今回の英國大罷業の際等でも之に對して締盟各國が一致した有效な經濟的援助をする迄には立ち到らないのである。

されば、左翼殊に共產系の勞働者は此緩き統制力を嘲笑し、國際的團結の欠乏から各國の炭坑夫が夫々別々に相繼いで其資本家に壓迫され、其抵抗が皆惨めな敗北に終つて居る不甲斐なさを指摘して居る。否、左翼の論法によれば、此の國際は名丈けで實がない計りではなく、即ち單に其各締盟國が英國の炭坑夫の苦悶を見殺しにするばかりではなく、秘に、實は英國炭坑主に好都合な糧食をさへ送つてゐるのである。

參考文獻

1) D. J. Williams: Capitalist Combination in the Coal Industry, 1924
2) G. R. Carter: Tendency towards Industrial Combination, 1913
3) Labour Research Department: Federation of British Industries, 1923
4) R. P. Dutt: British Fascism (Labour Monthly, July 1925)
5) G. D. H. Cole: Organised Labour 1924
6) 細川嘉六：英國に於ける國家内の一國家(大原研究所パンフレット第十一號)
7) G. D. H. Cole: Labour in the Coal Mining Industry 1923
8) Constitution of the Industrial Alliance 1925
9) 勞資協調會：一九二五年炭坑爭議の顛末
10) G. C. T. U. C.: Story of the Trade Union Congress (Pamphlet NO. I.)
11) " : General Council of Trade Union Congress (NO. 2.)
12) F. Bramley: Scarborough Congress (Labour Magazine Jun, 1925)
13) F. Hodges: Aims & Ideals of the Miners' International (L. Magazine Jun. 1925)
14) National Miners' Minority Movement; Miners' Fight, (A Sequel to "Miners' Next Step") 1925
15) A. Losovsky: World's Trade Union Movement, 1925

我國社會思潮の黎明時代

——我國社會思想研究の一——

赤松克麿

一

日清戰爭が、我國社會の資本主義化した劃期的一轉機であつたことは、ひとしく史家の認むる所である。之を商工業の發達に就いて見るに、明治二十六年末に於ける合資會社の拂込資本金二億百二萬圓に過ぎなかつたのが、三十二年末には三倍して六億二千百六十七萬圓に上り、外國貿易は、二十六年末に於て輸出八千九百七十一萬圓、輸入八千八百二十五萬圓であつたが、三十二年末に於ては輸出二億一千四百七十餘萬圓、輸入二億二千二十五萬圓に上つた。內國鐵道の延長に就いて見るに、二十五年三月末にあつては、官私線を合して、千百十七哩であつたが、三十三年四月末には、實に三千六百三十四哩となつた。海運業にあつても、戰役前には內地沿海航路の外、僅かに露領浦鹽朝鮮北支沿海定期航路を有するに止まつたのであるが、三十三年度には、歐洲線、濠洲線、米國線の三大定期航路を開いて、太平洋、印度洋、地中海、大西洋の東海岸に至るまで、國旗を飜へす航路を開くに至つたのである。

日清戰爭によつて我國の產業革命は急速に促進され、社會形態は著しく資本主義化し、從つて勞働問題が釀成され、諸種の社會運動も勃興するに至つた。尤も既に戰役前にあつて、明治二十一年の九州高島炭坑に於ける坑夫虐待事件、翌二十二年の橫濱在住外人經營製茶工場に於ける締出事件、東洋自由黨其他二三の勞働組合の活動等によつて、世人は次第に社會問題に對して眼を拂ふ傾向にはあつた。社會問題に關する出版物も多少あつて、明治二十四年に濟世危言（城泉太郎著）、社會黨瑣聞（石谷齋藏著）明治二十五年に、社會問題（ヘンリー・ヂョ

ジ原著、江口三省譯）、國家社會制（ドウソン原著、光吉元次郎譯）、土地問題（ヘンリー・ヂョージ原著、角田剛一郎譯）明治二十六年に、現時の社會主義（民友社編）、最暗黑の東京（松原岩五郎著）等が出て居る。明治二十年二月に創刊した德富蘇峯氏主宰の「國民の友」は、當時新思想の急先鋒であつて、創刊號の誌上から、ヘンリー・ヂョージの論文を譯載し、其後に於て或は露國革命黨を論ずるの寄書を連載し、或は歐洲社會黨のメーデー示威運動の實況を詳細に報道し（報道者酒井雄三郎氏）、或は萬國社會黨大會に關する通信を掲げた。

「國民の友」の記事に於て、特に我々が興味を持つのは、「勞働者の聲」と題して、勞働組合主義を鼓吹した一文（明治二十三年九月）と、「社會問題の新潮」と題して、社會問題研究會を組織するの必要を提唱した一文（明治二十五年十月）とである。斯くの如き論旨を盛つた文章としては、いづれも我國最初の先覺的價値を有するものである。今、後者の「社會問題の新潮」について見るに當時東京府下に於て、石工並びに煉瓦積職工のストライキがあり、また全國の紡績會社が黑表制度を作つたのであるが、此の社會狀態を見て同文の筆者は「雨に先つて鏑潤ひ、春來らんとして鶯先づ出づ。若し微なる徴候も大體をトするに足れりとせば、是れ豈に社會問題の大潮流が、已に社會の底下を縱横に貫通せんとしつゝあるの證にあらずとせんや」と警告し、また「顧みて彼の學者縉紳なる者を見る。彼等は此の問題に對して何等の擧措をなしたる乎。彼等は猶ほ汲々として國富の製造法に熱中し、國富の分配法に注目せざる也。同盟罷工は經濟上の弊害なりといふが如き、陳腐論を主張し、一毫人情の主義を經濟問題に加入するを爲さゞる也」と述べて支配階級の困厄なる態度を攻擊し「社會問題は唯だ社會問題によりて解決し得ることを知らざる也。其の困厄は憐むべし。其の弊は救はざるべからず。如何にして之を救はん乎。宜しく新たに社會問題研究會を組織すべき也」と叫んで「社會問題研究會」の組織を提唱して居る。此の警拔なる文字が實に今より三十五年前に書かれたものであり、そして其の筆者が德富蘇峯氏なりしことを思ふとき、感慨しげきものがあるのである。

戰役前に於て、不完全ながらも二三の勞働組合は存在したが、社會問題研究會は組織を見なかつた。當時は何分にも近代產業の發達が幼稚であり、手工業の勢力が大であり、從つて近代的賃銀勞働者の數も至つて少數であり、社會問題を醸成すべき社會條件が未だ十分に備らなかつたのである。

二

日清戰爭後の社會的變化は、當然社會問題を誘起し、それと共に諸種の實際的並に思想的運動を發生せしめた。實際運動は、職工義友會（明治三十年四月、）勞働組合期成會（同三十年七月、）普通選擧期成同盟會（同三十年七月、）社會民主黨（同三十四年四月、）其他各種の勞働組合運動となつて現はれたが、社會問題を主眼とした思想運動も、いろ〳〵の形を取つて現はれた。今その重なるものを示せば次の如くである。

社會學會——明治二十八年三月創立
無名研究會（後に社會政策學會）
——明治二十九年四月創立
社會問題研究會——明治三十年二月創立
社會主義研究會——明治三十一年十一月創立
社會學研究會——明治三十一年十二月創立
社會問題講究會——明治三十四年五月創立

私が茲で語らうとするのは、主としてこれらの思想團體の活動である。戰役後の軍國主義又は官僚政治が、新しく勃興した多くの社會運動の順潮なる發達を許さなかつたと同様に、これらの思想運動も健實なる發達を遂げることは出來なかつた。唯だ今日まで繼續してゐるのは社會政策學會だけであつて、他のものは大抵日露戰爭以前に於て潰れてゐる。

當時の出版物に就いて見るに、「六合雜誌」や「國民之友」の如きは、以前から社會問題を論じてきたが、戰後新らたに社會問題を提唱して起つた雜誌の重なるものは次の如くである。

勞働世界——明治三十年十二月一日創刊、勞働組合期成會の機關誌、
社會雜誌——同三十年四月一日創刊、社會學會の機關誌、
社會——同三十二年一月一日創刊、社會學研究會の機關誌、
大阪週報——同三十二年十月一日創刊、大日本勞働協會の機關誌、

「勞働世界」は片山潛氏が主宰し、その立場は穩健なる勞働組合主義の鼓吹であつて、その創刊號に「勞働世界の目的は、勞働は神聖なり、組合は勢力なり、との金言を實行せんとするにあり、蓋し我勞働者の勞働をして神聖ならしめ、組合の勢力たる實を擧げしむるは、正しく日本工業の發達の基礎を安固するものなり」云々と宣言してゐる。「大阪週報」は柳内義之進氏を主筆としたところの社會主義雜誌であつて、その發刊の辭に「苟も救世濟民に志あるものは、先づ力を、今日の社會制度を改善し其組織を更新するに盡さゞるべからず、換言すれば、社

會の救濟は主として「社會主義」の實行に依らざるべからず」云々と説いてゐる。

當時、社會問題に同情ある新聞を擧ぐれば次の如きものであつた。

毎日新聞、當時の政治家中の進歩主義者であり、社會改良に熱心であつた島田三郎氏が主筆兼社長であつて、紙面には常に「社會改良」の文字が現はれた。

萬朝報、同社には幸徳秋水、河上清氏等があつて、常に勞働運動のために氣を吐いた。

社會新報、板垣退助氏一派の機關であつて、社會改良專門の新聞であつた。

平民新聞、社會主義を標榜して生れた新聞であつた。

二六新報、此の新聞は明治三十四年に入つてから勞働者の肩を持ち始め、紙上には絶えず「勞働者よりの手紙」を掲載し、同年四月三日には東京向島に於て盛大なる勞働者懇親會を開いた。

北海道毎日新聞、明治三十四年三月から「社會問題欄」を設けた。

社會問題を主題とする雜誌に就いては前に述べた通りであるが、社會問題に同情ある雜誌を擧ぐれば、「東京經濟雜誌」、「東京評論」、「天地人東洋經濟新報」等であつた。

次に當時に於ける社會問題關係の著書は次の如きものであつた。

日本現時の社會問題（三十年發行、田島錦治著）
勞働保護論（三十年發行、川上清著）
勞働者の心得（三十年發行、勞働文庫第一篇、鈴木純一郎著）
喇撒傳（ラサール）（三十年發行、片山潜著）
英國今日の社會（右同）
社會改良家列傳（三十年發行、松村介石著）
日本の下層社會（三十二年發行、横山源之助著）、
內地雜居後之日本（右同）
社會主義（三十二年發行、村井知至著）
近世社會主義（三十二年發行、福井準造著）
社會の進化（三十二年發行、キツド原著、角田柳作譯）
資本と勞働の調和（三十二年發行、豐原又男著）
歐洲勞働問題の大勢（三十二年發行、桑田熊藏著）
勞働法の要義（三十二年發行、横山正脩著）
單税經濟學（三十三年發行、ガルスト著）
近世社會主義評論（三十三年發行、久松義典著）

社會問題解釋法（三十四年發行、安部磯雄著）
日本の勞働運動（三十四年發行、片山潜西川光次郎共著）
社會黨（三十四年發行、西川光次郎著）。

三

社會學會は布川孫市氏によつて創立され、「社會學の原理、社會主義、社會問題等を攻究するを以て目的」としたものであつた。同會の賛成員の中には、田口卯吉、三宅雪嶺、吳文聰、加藤弘之、ガルスト氏等があつた。「社會雜誌」を機關とした。布川氏はクリスチヤンであり、社會改良家であつて、此の會の立場も自ら社會改良主義を離れなかつた。毎月研究會を開き、約二年間續いた。

無名研究會は、山崎覺次郎、桑田熊藏、高野岩三郎、小野塚喜平次、織田一、鈴木純太郎氏等の東京帝國大學關係者によつて組織され、最初は六氏だけか神田の甲午倶樂部に集合して社會政策を研究したのである。當時山崎氏は歐洲留學を終へて歸朝したばかりであつて、彼は獨逸社會民主黨鎭壓法が撤廢された後の社會狀態を具に見聞し、同國の社會政策に就いて研究する所があつた。故に同會の研究も、山崎氏を中心とする獨逸工場法の研究から始まつた。此の會は明治二十九年四月廿六日から始まつて居るが、九六回の研究會を經て、小野塚氏の發議により、門戸を開放する公的の會合にすることとし明治三十年に入つて、**社會政策學會**を成立せしめた。此の名稱は金井延氏のつけたものであつた。社會政策學會趣意書なるものを見るに、「近時我邦の實業は長足の進歩を爲し、國富の增進誠に著しきものあり。是れ余輩の大に悅ぶ所なり。然れども之が爲めに貧富の懸隔稍や其度を高め、隨て社會の調和次第に破れんとするの兆有り。殊に資本家と勞働者との衝突の如きは已に其萌芽を見る。余輩思て此に至る毎に未だ嘗て悚然たらずんばあらず」と述べて大いに時世を憂慮し、今にして救濟の策を講じなければ後日臍を噬むことになるから、同志相集つて、本會を組織し社會問題を研究するのだと云つてゐる。しかして彼等の立場を見るに「余輩は放任主義に反對す。何となれば極端なる利己心の發動と制限なき自由競爭とは貧富の懸隔を甚だしくすればなり。余輩は又社會主義に反對す。何となれば現在の經濟組織を破壞し資本家の絕滅を圖るは、國運の進歩に害あればなり」と主張して明白に社會改良主義を宣明して居る。彼等の志す所は「現在の私有的經濟組織を維持し、其範圍内に於て個人の活動と國家の權力とに依て階級の軋轢を防ぎ、社會の調和を期する」に在つた。同會は明治三十一年十月に東京神田青年會館に於

て第一回講演會を開き、其後社會政策に關する研究や講演を重ねて今日に及んだが、社會問題に興味を有するアカデミックの學者を殆んど網羅するに至つた。

社會學研究會は「社會學の原理、社會問題及び社會改善策を研究すること」を目的として組織されたものであつて、加藤弘之、元良勇次郎、高木正義、富尾木知住、岡百世、武井悌四郎、高桑駒吉氏等が發起人であるが、明治三十一年十二月十二日東京富士見軒に於て發會式を擧げたとき、加藤弘之氏が會長に、評議員には元良勇次郎、有賀長雄、小河滋次郎、戸水寛人、呉文聰、高木正義氏等、委員には武井悌四郎、岡百世、富尾木知住、布川孫市、木時猶、高桑駒吉、五來欣造氏等が推された。同會は雜誌「社會」を機關としたが、三十五年の第四卷から「社會學」と改稱した。此の會の構成分子は、會則によれば、第一、帝國大學々生生徒並に之れに關係ある者、第二、本會の目的を助成する者、とある。會員名簿を見ると、法科及び文科大學生が大分加つてゐて、法科大學生の中には、河津暹、松本烝治氏等の名前が見えてゐる。學生が團體的に社會問題研究に從事したのは之れが最初である。同會の研究方法は、談話會、研究會、講演會、雜誌發行等であつて、明治三十六年頃まで續いた。社會學研究會と社會政策學會とを對照するに、兩者は何れも赤門の產物ではあるが、前者は文科大學を中心とし、後者は法科大學を根城としている。そして前者が「社會學的」であるのに對して、後者は「實際的、政策的」であつた。しかしアカデミックであり講壇的であつたことは兩者共通の色彩であつた。

社會問題講究會は、矢野文雄、田川大吉郎、加藤時次郎、國木田獨歩氏等によつて組織され、明治三十四年五月に起されたが、同三十七年三月、即ち日露開戰後間もなく消滅した。演說會、出版(講演集)等を事業とした。安部磯雄、片山潛、幸德秋水氏等は此の會を援けた。

四

年代の順序は前後したが、次に社會問題研究會と社會主義研究會とに就いて語る。此の二者は相互に脈絡を有し、後者は前者の後身ともいふべきものである。しかして後者は我國最初の社會主義政黨たる社會民主黨の前身であり、且つその流派は今日に及んで、我國社會主義運動に大なる足跡を留めたのである。故に私は此の二者に就いて最も入念に語らんとするものである。

社會問題研究會は、明治三十年二月、樽井藤吉、中村太八郎、西村玄道氏等の主唱に由つて設立されたものであつて、その規

約第一條には「本會の目的は學理と實際とに據り社會問題を研究するに在り」とある。同會は役員として評議員三十名幹事三名とを置いたが、それらの氏名は左の通りである。

評議員

井上經重	嚴本善治	石川安次郎
入江錦五郎	稻垣示	原余三郎
鳩山和夫	波多野傳三郎	堀內賢郎
片山潛	吉田義靜	田口卯吉
高橋五郎	坪谷善四郎	中村彌六
陸實	安岡雄吉	松村介石
福本誠	小島龍太郎	天野爲之
佐治實然	酒井雄三郎	佐久間貞一
三宅雄二郎	シー、ガルスト	人見一太郎
元田作之進	尺秀三郎	鈴木重遠

幹事

中村太八郎	樽井藤吉	西村玄道

社會問題研究會は毎月一回東京新橋新肴町の開化亭に會合し、毎會約三十名位の來會者があつた。會員は各方面から募り、會員名簿には約二百名の人士が數へられた。子爵品川彌次郎氏の如きも、此の集會には出席しなかつたけれども、會員たることには承諾した。品川氏は獨逸公使であつた時から既に國家社會主義の何ものたるかを解し、勞働者保護、信用組合等に就いて深い興味を有し、日本は歐米とは國體を異にするが故に、社會政策も亦日本の國情に從つて變通する所が無ければならぬと考へた。そして國家は固より人民の物質的要求を度外視するを得ず、父母の子を愛育するが如く之を愛育すべき義務ありといへども、人民より之を論ずれば、徒らに國家の援助に依賴して、其の恩惠に甘えるが如きは、卑屈の甚しいものだとの意見を有して居つた。和田垣謙三氏も品川氏の如く出席はしなかつたけれども、やはり會員であつた。當時氏は、獨逸には國家主義といふものはない、日本の政治家が獨逸から輸入した國家主義といふものは、即ち國家社會主義である、日本の政治家は社會主義の名を忌むが故に事さらに國家主義と唱ふるに過ぎないなどと訪客に語つたことがあつたといふ。

當時政界に於て所謂民黨の長老株であつた鈴木重遠氏は時々出席して座長の役を勤めた。會員田口卯吉氏は、地租は增加しなければならぬ、單稅論は原理として非難すべきものでないと語つた。會員松村介石氏は、屢々集會に於て恰も救世軍の說教のやうな調子で、人間には獨り靈魂の糧を與ふるのみにては足りない、必ず同時に肉の糧を與へなければならぬと論じた。

宅雄三郎氏、陸實氏も亦會員であつて、殊に陸氏の如きは社會主義に深い興味を有し、其の主宰する日本新聞に於て、人間は自然の狀態に滿足して已むべきものにあらず、弱肉强食の自然的狀態を脫し、强も亦食はず、弱も亦食はざる一視同仁の人道を立てゝ、自然の運行以外に別に人間の天地を開くは是れ則ち社會主義の極意なるべしとの意を述べた。安岡雄吉氏も出席したが、氏は雜誌太陽誌上に土地國有論を揭げた。根本正氏、單稅論者ガルスト氏、久秀三郎氏、國民新聞記者人見一太郎氏等も出席した。人見氏は多くの人を勸誘して會員たらしめ、元田作之進氏の如きも其の一人であつた。中央新聞記者石川安次郎氏は、此會の發起者の一人であつたが、同氏の紹介によつて幸德傳次郎氏が入會した。幸德氏は當時の會員としては別段注目される程の人物ではなかつた。高橋五郎氏、中井喜太郎氏、田島錦治氏、長田偶得氏、佐治實然氏、岩本善治氏、宮崎湖處子氏等も出席した。田島氏はワグネルの經濟學などに就いて語る所があつた。岩本氏は婦人問題、白痴教育などに就いて論じた。宮崎氏は、余は日本の田舍に於て財產を其長子のみ相續し、次男三男以下をして立錐の地を得さらしむるは封建主義の遺物である、余は之に對して深き不平を懷くものである、余は此の點に於て社會主義者に同情なき能はずと述べたことがあつた。

會員中に於て、社會問題に最も深い興味を有し、若くは社會主義に就いて相當の知識を有した者を擧ぐれば、城泉太郎、吉田義靜、小島龍太郎、酒井雄三郎、佐久間貞一、片山潛の諸氏であつた。吉田義靜氏は熊本の人であつて、かつて島田重禮氏の塾長たりしことがあつた。氏の語る所によると、細川護久侯に從ふて佛蘭西に行き、八年間の在學中、五年間は社會主義の書を涉獵した。氏は佛蘭西在學中に護久侯と別れ、歸朝して外國語學校及び高等學校の佛語教師となつた。一時は外國語學校に於て佛語の主任教師となり、また故あつて雇となつた。氏は當時年齡四十歲位であつて、武術も柔術も出來、一見武人の如き人品であつた。併し氏の磊落にして拘束なき擧動は、往々人の誤解を生ずるを免れなかつた。氏は自ら言ふが如く社會主義に關しては多少の造詣があり、屢々社會主義の何ものたるかを語り、會員に新しい知識を與へた。氏の說く所によれば、社會主義は、人間は生活すべき天然の權利ありといふ思想を出發點とするものであつて、其の精神に至つては、漢人の王道論と相似たものである。而して社會主義の教ふる所と雖も、必しも直ちに人生を幸福にすべきものなりと臆斷すべきではない。加之社會主義者の說く所も、必しも一致して居ない。唯だ其中に就

き「彼の是より善きものある」を取つて、次第に人間の狀態を改むべきのみである。是れ則ち社會主義たるに外ならずと言ふにあつたやうである。

小島龍太郎氏は佛蘭西學者で西園寺侯の友人であつた。氏はかつて農商務省の書記官から轉じて衆議院の書記官たりしことがあつたが、人となりが風流洒落であつて、長く官界の人たることが出來なかつた。西園寺侯が佛蘭西に在る時、社會主義及び社會問題に注意し、將來日本にも此種の議論の發生すべきを豫想し、多くの社會主義の書を買ひ來つて、彼に與へたので、彼は之れによつて早くから社會主義の知識を有したといふ說がある。其の眞僞の程は解らないが、當時彼は社會主義の知識に於て會員中に卓越し、ラサールの國民的社會主義とマルクスの世界的社會主義との相違の如きは、彼の屢々會員に語つた所であつて、當時の會員は必しも悉く彼の說を了解することは出來なかつたやうである。氏自身が如何なる程度まで社會主義を信じて居たかは不明であるが、兎に角彼が當時に於て社會主義の新知識であつたことは確かであつた。

酒井雄三郎氏も佛蘭西に遊學した佛蘭西學者であつて、會員中の議論家であつた。しば／＼サンシモン、フーリエ等の名を口にし、佛蘭西の社會主義に關して頗る通曉して居るやうであつた。氏に、社會主義の書と自由主義の書とを並べて讀んで其の議論を比較するに、社會主義の議論には比較的無理が多いやうだと語つた。されば彼は社會主義の新知識ではあつたが、純然たる社會主義の信者ではなかつた。

佐久間貞一氏が日本のロバート・オーエンと云はるゝ程、我國に於ける勞働問題の先覺者であつたことは人の知る如くである。彼は天成の俠骨兒であつて、秀英舍主の位地にありながら、早くから勞働問題に就いて思を及ぼし、黎明期に於ける勞働組合の助成發達に貢獻する所が多かつた。また明治二十四年に農商務大臣陸奥宗光伯が職工條例制定の可否を各地の商業會議所に諮問した時、當時の商工業者等が馬耳東風を以て之を迎へ、殆んど念頭に置くものがなかつたのに對し、佐久間氏獨りは東京商業會議所にあつて、熱心に其の制定の必要を論じた。彼は肺結核の大患を抱いて居つたけれども、大抵此の會に出席して意見を述べ、主として勞働者の境遇を改良すべき方法を說き、聽く者をして其の熱心さに感動せしめた。

片山潛氏が我國勞働運動の一先驅者であつて、現在第三インタナショナルの幹部として活躍しつゝあることは、茲に詳說する必要もないことであるが、彼は當時米國より歸朝して間もない時であつて、市政問題に深い興味を抱き、東京に住して

の改良に從事するを以て其の生涯の事業としやうと欲して居たといふことである。

五

次に社會問題研究會の創立者の一人である樽井藤吉氏に就いて語らねばならぬ。彼は大和の產であつて、始め材木商人であつたが、後に心機一轉して社會運動者となつた。彼は獨創力を有する一種の天才であつて、獨得の思索により、歐米の社會主義に接觸するに先立つて、一種の社會主義思想に到達した人である。山路愛山氏は「夫れ日本の思想史に於てコレクチビズムを唱道したるものは必しも珍らしからず。荻生徂徠の學流の如きは明かに個人主義を排斥したるものにして、一國を擧げて家人父子の如くならしめんとしたるものなり」と述べてゐるが、樽井氏の如きは、東洋主義に立脚して社會主義者となつた一人である。彼は明治十五年肥前島原に於て東洋社會黨を組織したが、此の社會黨は歐洲の社會黨と異るものであつて、たゞ彼が長崎に行つて洋行歸りの友人に會し、自分の宿志を語つた所が、友人が、君の思想は歐洲で社會主義といふものに暗合してゐると敎へたので、そこで始めて東洋社會黨の名稱を標榜するに至つたのである。

岩倉具視公を特命全權大使とした一行が、明治六年九月、歐洲締盟列國を歷訪して歸朝した後、樽井氏が岩倉公を訪ねて獨創の意見を開陳したことがある。彼は云つた。。國民生活に必要なる物資の製造は、商人の手に委すべきにあらずして、政府自ら之に當り、且つ其の製品の配給は商人の仲介を經ずして直接國民に致すべきであると。彼の自信と熱心とは、岩倉公をして之れに傾聽せざる能はざらしめた。しかし岩倉公は答へた。自分が見聞した所によると、歐洲先進國に於ては、物資の生產分配は「自由競爭」といふ原則に立つて行はれて居る。此の方法が最も良ささうだ。卿の云ふ所は文明の主義に反して居ると。歐洲に於ける自由放任主義の全盛時代を目擊し感歎してきた老練なる此の政治家は、獨得の思索で築き上げた青年社會主義者の主張を輕く一蹴したのであつた。樽井氏は自己の建言が容れられなかつたにしても、その素志を翻す譯には行かないので、あくまで其の理想を實現せんが爲めに、無人島を求めて之に植民しやうと欲し、朝鮮の多島海を乘り廻り、濟洲島にも行つて見たが、志を遂ぐることが出來ないで、遂に肥前の島原に歸つて東洋社會黨を組織するに至つたのである。

樽井氏に就いて面白い一事は、彼が我國に於ける最初の社會主義代議士だつたことである。明治二十五年の有名な選擧大干

渉のあつたとき、彼は偶然の結果によつて、大和から代議士として選出された。世間には社會主義者が議院に入つたといつて眉をひそめるものもあつた。彼の當選事情を見るに、初期の議員選擧に於て、大和の土豪であつた土倉庄三郎氏は其の郷黨の勢力を自負して、當然自分が選出せられるだらうと豫期したところ、櫻井徳太郎氏の激烈な競爭に遭つて脆くも敗軍した。土倉氏は心中頗る平かならざるものがあつて、二十五年の總選擧には、自らは起つて櫻井氏と競爭しないが、當時貧人を以て聞えた樽井氏を促して候補者たらしめた。そして土倉氏は心惡い政敵櫻井氏を敗るために、極力樽井氏を支持し、熾んな選擧運動を行ふた結果、遂に樽井氏の當選を見るに至つた。樽井氏は議員として東京に出發するとき、土倉氏は金數百圓を贈つて其の行を壯んにした。しかし乍ら彼の議員生活は何等の異彩を放たなかつた。そして議員としての生涯は短く平凡に終つた。當時彼は鐵道を國有にし、製鐵所、製鋼所、造船所は之を政府事業として、歐洲品の輸入を防がねばならぬ、銀行も國家事業とし、病院も官立にせよとの意見を有し、雜誌「太陽」に國有鐵道論を掲載したけれども、世人は彼の所説を月世界の物語を聞くやうな態度を以て扱つたのであつた。

、之を要するに、社會問題研究會は極めて雜駁なものであつて、會員の種類も種々であつた。多數の會員は社會主義に對して殆んど正確な知識を有せず、唯だ少數の學問界者たる會員及び米國より歸朝した會員だけが、社會主義なるものに就いて知る所があつたのであるが、此等の人々と雖も唯だ知つて居ると云ふだけで、其の完全なる信奉者ではなかつた。故に會員の社會主義に對する態度は、其の會名の示す如く單なる研究に過ぎなかつた。從つて此の種の會合から社會運動が生れる筈もなく、また運動を起すことは、始より會員の希望する所でなかつた。即ち此の會は、社會問題に興味を有する學者及紳士の研究的集會であつた。併し社會問題の名は、此の會の存在したがために頗る世人の注意を引き、社會運動の實行を目的とする團體の發生を促すに至つた。協同親和會の如きは其の一例であつた。其後此の會は次第に振はなくなり、加ふるに幹事たりし中村太八郎氏は郷里の選擧問題に引つ懸つて獄中の人となり、樽井藤吉氏は歸國し、西村玄道氏は死亡したがために、會員の間を幹旋し、集會を維持する者が無くなり、會は一年有餘にして自然消滅の形となつた。

六

前記の社會問題研究會員の一部の間に於て、元來同會員の種

類が餘りに雜駁であつたか爲めに永續が困難であつたのだから、今度は會員の範圍を狹くし、稍々同臭味の人を以て一つの會を組織すべきだといふ議が起り、明治三十一年十月に社會主義研究會なるものを組織し、東京市三田四國町の惟一館（ユニテリアン）の會堂を借りて之を開くこととなつた。惟一館の會堂を借りた緣故によつて、當時惟一館の說教者であつた安部磯雄、村井知至の諸氏が會員となつたのは、此の會に新勢力を加へたものであつた。此の會の會則は左の如くであつた。

社會主義研究會の會則

第一條　名稱

本會ハ社會主義研究會ト稱ス

第二條　目的

本會ハ社會主義ノ原理ト之ヲ日本ニ應用スルノ可否ヲ究スヲ目的トス

第三條　役員

本會ハ會長一名ヲ置キ會務ヲ總理シ、幹事一名ヲ置キ庶務ヲ處理セシム、但シ各任期ハ一個年トス

第四條　會員

社會主義ニ對スル贊否ヲ論ゼズ本會ノ目的ヲ贊スルモノハ會員タルコトヲ得

第五條　例會

本會ハ每月一回例會ヲ開キ會員各自研究ノ結果ヲ講說シ若クハ討論ス、但シ時ニ名士ヲ聘シテ社會主義ニ關スル講演ヲ開クコトアルベシ

第六條　公會

本會ハ時々公會ヲ開キ一般公衆ニ演說ス

第七條　會費

會員ハ會費トシテ每月金貳拾錢ヲ收ムベシ

第八條　會場

本會ハ東京芝區三田四國町惟一館ヲ以テ會場ト定ム

會員は左の諸氏であつた。

片山潛、佐治實然、中村太八郎、幸德秋水（以上の四氏は社會問題研究會の會員であつた）高木正義、河上清、豐崎善之助、岸本能武太、新原俊秀、神田佐一郎、金子喜一、安倍磯雄、村井知至、北川筌因、櫻井一義、綾部竹次郎、木下尙江、杉山重義、杉村廣太郎、平井金三。

社會主義研究會は、研究例會と公開演說會を催したが、其の例會は次の如く運ばれた。

第一回

十月十八日午後二時より開かれ、先づ村井知至氏が社會主義

綱要を講演し、次いで高木正義氏が社會主義研究に要する參考書を紹介し、研究の方針を論じた。今後の研究の順序に就いては、先づ高木氏より社會主義者の系統圖を製し、社會主義の歷史的發達を示さるゝことに一決して散會した。

第二回

十一月二十日午後二時より開かれ、先づ本會概則（前揭の會則）を議定し、村井知至氏を會長に、豐崎善之助氏を幹事に擧げ、次いで河上清氏の「英國の地主制度」に關する講演があり、それに就いて互に討論があつた。

第三回

明治三十二年一月十五日午後二時より開かれ、岸本能武太氏が「サン・シモンの社會主義」に關して講演した。終つて二三の討論があつた。

第四回

二月十九日午後一時より開かれ、河上清氏の「フーリエの社會主義」豐崎善之助氏の「ルイブラント及びプルードンの社會主義」の講演があつた。

第五回

三月十九日午後二時より開かれ、片山潛氏が「フェルヂナンド・ラサルの社會主義」の講演をした。

第六回

四月十六日午後一時より開かれ、村井知至氏の「カール・マルクスの社會主義」の講演があり、終つて之れに對する二三の批評が試みられ、更に會員諸氏の質問や議論があつて、緊張裡に閉會した。

第七回

五月二十八日午後一時より開かれ、安部磯雄氏の「ヘンリージョーヂの社會主義」の講演があつた。

第八回

六月二十五日午後一時より開かれ、幸德傳次郎氏が「現今の政治社會と社會主義」と題して講演し、我國政治社會の腐敗墮落を痛嘆し、諸政黨を「彼等は實に政黨と名づくべきにあらずして、一種の朋黨たるに過ぎず。野武士山賊の集合、長脇差の徒黨たるに過ぎず」と攻擊し、此の腐敗墮落の救治は「眞に國家民人を憂ふるの人、社會主義的精神理想を抱持するの志士」が一致團結して、天下に呼號するの外なきことを主張した。

第九回

研究會は七月以來暑中休會をして居つたが、十月二十二日更に開會し、之れから毎月第四日曜日に開くことゝなつた。研究會

は前回までの處で、大略社會主義の歴史的研究を終へたので、之れからは社會主義の各部に就いて實際的研究の必要を感じて來た。當日は其の手始めとして安部磯雄氏が實際的研究方法に就いて講演し、就いで河上清氏が、市街鐵道問題に就いて講演した。安部は其の研究の順序として、第一、獨占的事業の公有、第二、生産、第三、配財となし、「社會主義の適用を講ずるには、成るべく先づ都會を眼目として都會の諸事業に之を應用するの方法を研究すること」を特に希望した。

第十回

十一月二十六日午後一時より開かれ、安部磯雄氏は「ニュージーランドの土地制度」に就き講演し、片山潜氏は北海道に於ける土地制度の弊害に就き二三の所感を述べた。

第十一回

明治三十三年一月二十八日午後一時より開かれ、北川筌因氏は普通選擧に就いて講演し、續いて安部氏村井氏小野瀨氏等が其の意見を陳述した。講演の後、會員一同の賛成によつて、社會主義研究會の名稱を社會主義協會と改むることに決定し、且つ本年巴里に開かるべき萬國社會主義者の大會に、本會の代表者として村井知至氏を出席せしむることをも可決した。

第十二回

二月二十五日午後一時より開かれ、片山潜氏が都市問題に就いて講演し、次いで杉山重義氏も同問題に就いて講演した。聽衆は平常よりも多く頗る盛會であつた。同會も隆盛になつたので、會員一同の便利を圖り、會場を神田區三崎町三丁目一番地キングスレー館（片山潜氏經營）に移し、毎月第四土曜日午後五時より開會することになつた。

第十三回

三月二十四日午後五時より開かれ、杉山重義氏の三級選擧法に就いて講演があり、終つて會員相互に懇談を交へた。

第十四回

四月廿八日午後五時より開かれ、安部磯雄氏のビスマークの強制保險法に就いての講演があつた。

第十五回

五月廿七日午後五時より開かれ、安部、櫻井、西川、片山、豐崎、河上の六氏が出席し、當時の一問題たりし工場法制定に就いて討議した。川上氏は其の發議者として、政府の工場調査の極めて緩漫なるを述べ、若し此の儘にて打ち過ぎれば次の議會に於ても、工場法の提出を見ることが出來ないから、此際我協會は率先して、工場法制定の急務なるを唱道し、先づ會の私案を作つて、之を當局者に提出し、且つ一方に於ては社會政

衆學會等と交渉して一致の運動を爲し、あくまでも政府に迫つて次の議會に工場法案を提出せしむるの運動を爲すべく、若し政府にして自ら進んで之を議會に提出の決心が無ければ、代議士等を說いて、議員より之を提出せしむべしと說いて、全員の贊成を得た。氏は更に進んで工場法の內容の重なる點に就き討議を希望し、工場勞働の禁ずべき兒童の年齡に關して、歐洲各國の規定を列擧した。終つて會員は之れに關する討論を行ひ、少年勞働及び婦人勞働に關する法案を作製した。

第十六回

明治三十四年一月二十七日午後一時半より惟一館に於て開かれ、安部磯雄氏はルボンの近著「社會主義の心理學」の概略を述べて其の批評を試みた。講演の終つた後、社會主義大演說會を開催することに就き相談し、會員は何れも贊成した。演說會を開く主意は、社會主義なるものが未だ公に社會に唱へられたことが無いから、世人に之を知らない者が多く、中にはまた誤解せる者もあるやうだから、充分此の會の精神を披瀝して社會公衆に訴へて見やうといふに在つた。

第十七回

三月二十四日午後一時から惟一館に於て開かれ、田口卯吉氏のヘンリー・ヂョーヂの立場を支持する講演があつた。

七

次に協會の公開演說會に就いて述べんに、かねての相談に基いて、三月二日夜　神田青年會館に於て「社會主義學術大演說會」が催ふされた。始めて社會に訴へるのであるから、演題や辯士の選擇に注意し、豫め演題を定めて各辯士に用意せしめ、尙ほ相互に打合せをせしめて、主張の貫通するやうにし、主催者は中々苦心を拂つた。演說會は聽衆堂に滿ち、盛會であつた。辯士及演題は左の如くである。

社會主義の本領　川上清
社會主義と現社會制度　安部磯雄
社會主義の實行　木下尚江
社會主義と都市問題　杉山重義
社會主義の大勢　片山潜

第二回の公開演說會は十月十二日午後六時より、神田青年會館に於て開かれ、西川光次郎、木下尚江、幸德傳次郎、片山潜安部磯雄の五氏が演說（演題不明）した。聽衆は八百餘名に上り、其の大部分は學生であつた。彼等は何れも熱心に演說を聽き、散會後直ちに入會を申込む者も多數あつた。當夜、協會は左の如き檄文を聽衆に配布した。

社會主義協會擴張の檄

來れ、正義を愛し、人道を重んじ、文明進歩を希ふの志士は來れ、來つて吾人と共倶に社會主義の弘通を力めよ。

夫れ學術日に進んで徳義の日に頽るゝは何ぞや、生産益々多くして、萬民益々貧しきは何ぞや教育愈々盛にして、罪惡愈よ多きは何ぞや、國威大いに發揚して、民力却て衰弊するは何ぞや、嗚呼是れ一に現時の生産機關私有の制度、之れをして然らしむるに非ずや、生産機關私有の制度は即ち分配の不公となれり、分配の不公は即ち多數の貧困と少數資本家の暴富となれり、暴富なるものは則ち驕奢となり、腐敗となり、貧困なる者は則ち墮落となり罪惡となる、而して貧富益々懸隔して道義愈よ頽廢し、國力益す衰弊に赴くは固に自然の勢のみ。

故に今日の社會を救ふ、貧富の懸隔を防止するより急なるはなし、之を防止する富の分配を公平にするより急なるはなし、之を公平にする生産機關の私有を禁じて、社會公共の手に移し、以て萬民をして經濟的に平等の權利を確保せしむるより急なるはなし、之を名けて社會主義の實行といふ、ゾーラの所謂「社會主義は懸唉すべき救世の教義」の謂、豈に我を欺かんや。

本會の始めて設立せられてより茲に四年、時勢の推移する江河の日に下るが如し、近日其の擴張の急要を感ずる切なるものあり、即ち普く同志を天下に求めんとす、來れ、正義を愛し、人道を重んじ、文明進歩を希ふの志士は來れ、來つて吾人と倶に大に社會主義の弘通に力めよ。

八

此の會に於て、社會主義に對する一定の成見を有し、そして最も多く之に關する講義をしたものは、安部、村井、片山、川上の四氏であつた。就中、安部、村井の二氏は新歸朝者であつて、學殖も深く且つ雄辯であつたから、聽衆の心を捉へた。川上清氏は萬朝社員であつて、幸徳氏が同社員であつた縁故から其の入會を紹介したのであつた。彼は田島錦治氏の著述を助けたのを機會として、獨逸の科學的經濟學、講壇社會主義等に就いて造詣があつた。片山氏の專攻する所は、勞働問題及び都市改良問題であつた。木下尚江氏は中村太八郎氏の紹介に依り入會し、其の明斷なる頭腦と犀利なる辯舌に於て、既に一頭地を拔いて居たけれども、社會主義の知識に關しては、當時は猶ほいろはの生徒であつた。幸徳傳次郎氏も多く沈默を守り、殆ど平凡なる一會員たるに過ぎなかつた。

以上述べた所によつて示されて居る如く、社會主義研究會の

研究內容は、純理的より實際的となり、會の性質も研究團體より宣傳教育の團體に近いて行つた。それは此の會の中心人物等の性格が、單なる學究では收まり切れないで、浡勃たる行動慾を有したことを語るものである。社會主義研究會が社會主義協會となり、事務所が芝區の惟一館より神田區のキングスレー館に移され、更に公開演說會が開かれるに至つたことは、其の傾向の現はれであつた。然るに會の中心人物等の實際運動に對する意欲は更に一段の步を進めて、社會主義政黨の組織を企つるに至つた。明治三十四年の四月、安部磯雄、片山潜、幸德傳次郎、木下尚江、河上淸、西川光次郎の六氏に依つて組織された社會民主黨が即ち之れである。

社會政策學會が大學教授を主たる構成分子として、あくまで講壇的態度を持し、今日に至るまで之れを一貫しているのに對して、社會主義研究會は學園外の社會主義者を多く包容し、研究的態度に止まり切れないで遂に街頭に出るに至つた。しかして此の一團及び其の流れを汲む人々は、明治時代に於ける社會主義運動の中心勢力となつた。堺利彥氏は云ふに及ばず、山川均、高畠素之、大杉榮、荒畑勝三の諸氏は、いづれも此の流派に屬する人々であつた。後に此の一派の間に、いくつもの潮流を生じ、紛爭をしげくしたが、その中の堺山川氏等の一派は、現代に於て左翼社會主義運動の指導勢力となつてゐる。日清戰爭後に於ける各種の社會思想團體の中、社會主義研究會は最も急進的であり且つ實行的であつて、その傳統は我國の社會主義運動史の上に沒すべからざる功績を刻んだのである。

九

社會政策學會と社會主義研究會とは、當時の社會思想界に於て好對照をなすものであつて、前者の奉ずる協調主義又は改良主義と後者の奉ずる社會主義との二潮流は、しば／＼衝突を見たのであつた。その最も顯著なる現れは、明治三十二年七月九日神田青年會館に於ける活版工組合懇和會主催の演說會と明治三十四年五月社會民主黨禁止直後とに於て示された。今前者に就て語れば、當日の辯士及び演題は、桑田熊藏（改良主義）高野房太郎（日本の勞働運動の方針）片山潜（調和主義と社會主義）金井延（社會主義を駁す）島田三郎（工業家の責任）神保院長（勞働と赤痢）等であつたが、この中で注目すべきものは桑田、片山、金井等三氏の演說であつた。

桑田氏の所說の要點を紹介すると次の如くである。

勞働者と資本家とが、經濟の進步のために互ひに調和し相扶け合つて行かねばならぬといふことは、經濟上の自然法

り、經濟上の原則であると思ふ。故に社會主義一派の勞働運動をなす人は、資本と勞働との關係について甚だ間違つた考へを持つてゐる。資本家は無用の長物である。資本家を絶滅せしめて一國の資本を國家の所有に歸し、生産は凡て國家事業となして共産的國家を作るべきであつて、從つて現在の經濟組織を打破るべしといふのが、社會主義者が勞働問題を說く唯一の方法であつて、此の方法に依らずんば、勞働問題を說く事は出來ぬと彼等は考へて居るが、然し私は此の問題に關し、又此の主義に就き只今學理上の缺點論理上の缺點を指摘はしないが、唯だか〻る主義の人に向つてお尋ねしたいのは、斯くの如く資本を絶滅して、天下の人民を取つて悉く勞働者にするところの國家が實行される事であらうかどうか、これまで社會主義の論者が色々の說を吐き且つ各種の設計を樹てたが、然し一つも適切なる設計はない。（中略）。然し株式會社に於ては、株主は唯だ利益配當の多からんことを望み、是れを監督する管理者も成るべく利益配當の多きやう株主の觀心を買ふことを望むから、株主や管理者に向つて職工に充分の保護を與へ慈愛を施すことを望むことは到底實行されない。故に進歩したる工業國に於ては、勞働者が自己の地位を改良するためには、資本家に依賴することを止めねばならぬ。勞働者が互ひに組合を結んで、艱難相救ひ、品行を矯正して倶に立派な人となり、資本家に對抗しなければならぬ。

片山氏の所說の要點は次の如くである。

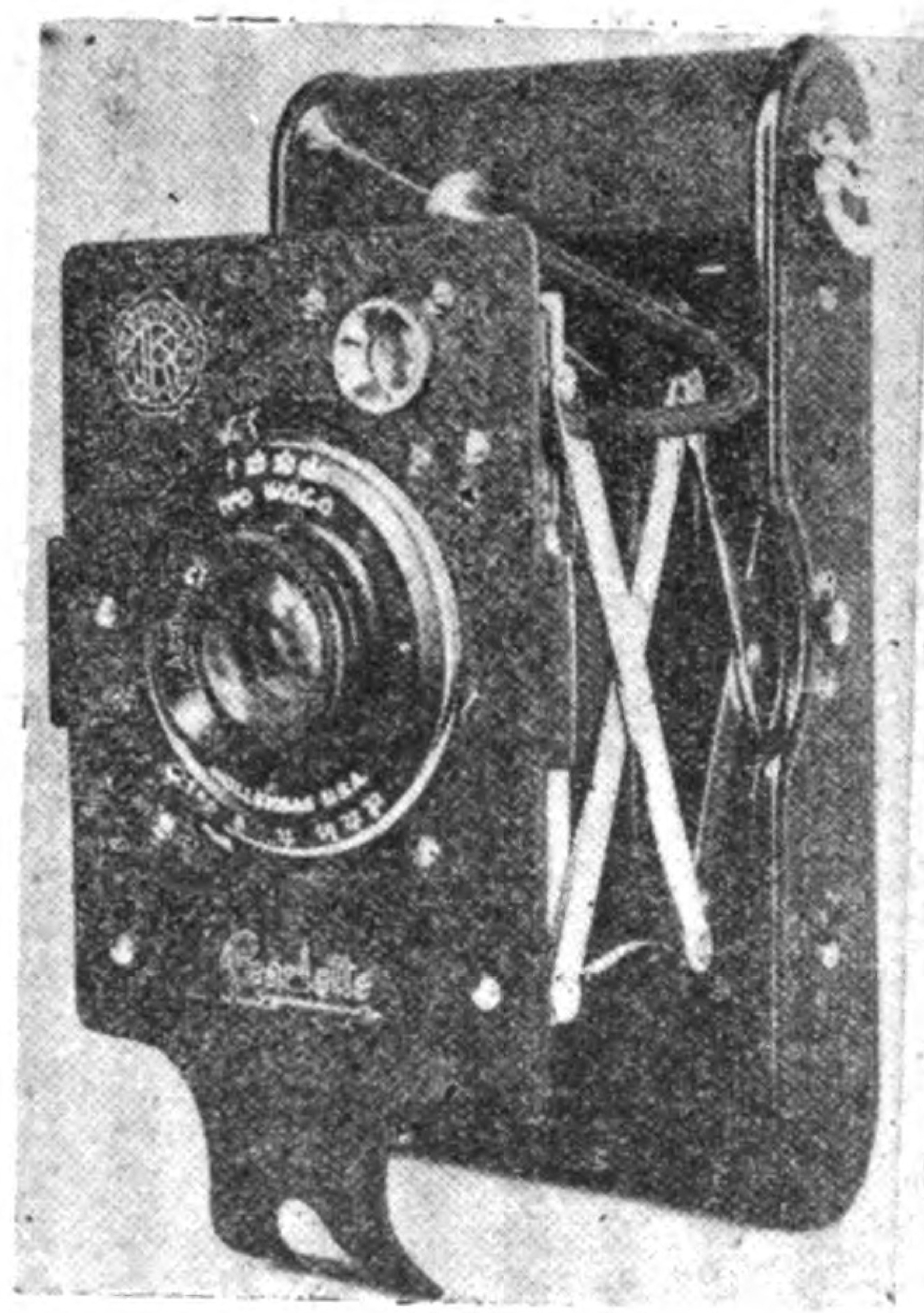
勞働と資本との調和は必要である。併しながら今日の有樣では勞働者と資本家との調和といふことは出來ない。今日の有樣では兩者の關係は主人と家來との關係否主人と奴隷との關係だ。神聖なる調和をするにはどうしても我々は勞働者に旗をあげさせなければならぬ。資本家と勞働者の間に波瀾があつてはいけぬ、成るたけ穩かにしなければならぬ、などといふことは、神聖の調和といふものではない。そんなことでは日本の工業を進めることは出來ない。だから組合は必要である、同盟罷行も必要である。（中略）。然し私は此の資本を管理してゐるところの人間が、今日の如き有樣ではいけないと思ふ。此の資本が、働いてゐる勞働者に不便を與へるやうではいけない。それで私は佐久間さんの意見が大いに善いと思ふ。佐久間さんが秀英舍に於て採られた方針は、成るたけ勞働者に資本を持たせるといふ方針である。一會社に於て幾分の資本を勞働者が持つたならば、自然その事業に心がはいる。さういふ所から佐久間さんは勞働者にも資本を持たし權力を持たすといふ意見であつた。しかしながら私は一歩を進

めて、資本といふものを凡て勞働者が持つことが出來ればよいではないかといふのである。此れに就いては歐米の勞働者は種々經驗をしてゐる。そして隨分好結果を得てゐる。かの英國の共働店組合の如きは、年々數億萬弗の商賣をしてゐる。

次に金井氏は片山氏の所說を攻擊して次の如く述べた。

職工組合は穩かに平和的に發達しなければならぬ。職工組合が第一に勉むべきは、組合員が互ひに奬勵し相進み合つてその地位を向上し、その理想を高くすることである。而して組合は、純然たる經濟學上の目的を以て進むべきであつて、政治に關らざることを要する。私は何故社會主義が大嫌ひであるか、社會主義といへば甚だ漠然として居るが、その歸するところは、社會主義なるものは、現今の國家組織を破壞しなければ止まないものであるといはなければならぬ。私有財産制を根本的に破壞して共有財産の制度にしやうといふのが、社會主義の歸着するところだといふが、果して然らば此の主義は、到底今日の國家組織を打破するに非れば實行すべからざることである。私は日本國民の一人として之に贊成することは出來ない。

懇和會は協調主義の上に立つてゐたので、桑田金井氏等の所說に贊成を表した。改良主義と社會主義との兩派した他の一つの例は後に述べることにする。



完全なベストカメラ

パーレット

M・A附　十七圓

デルタスF六・八附　廿五圓

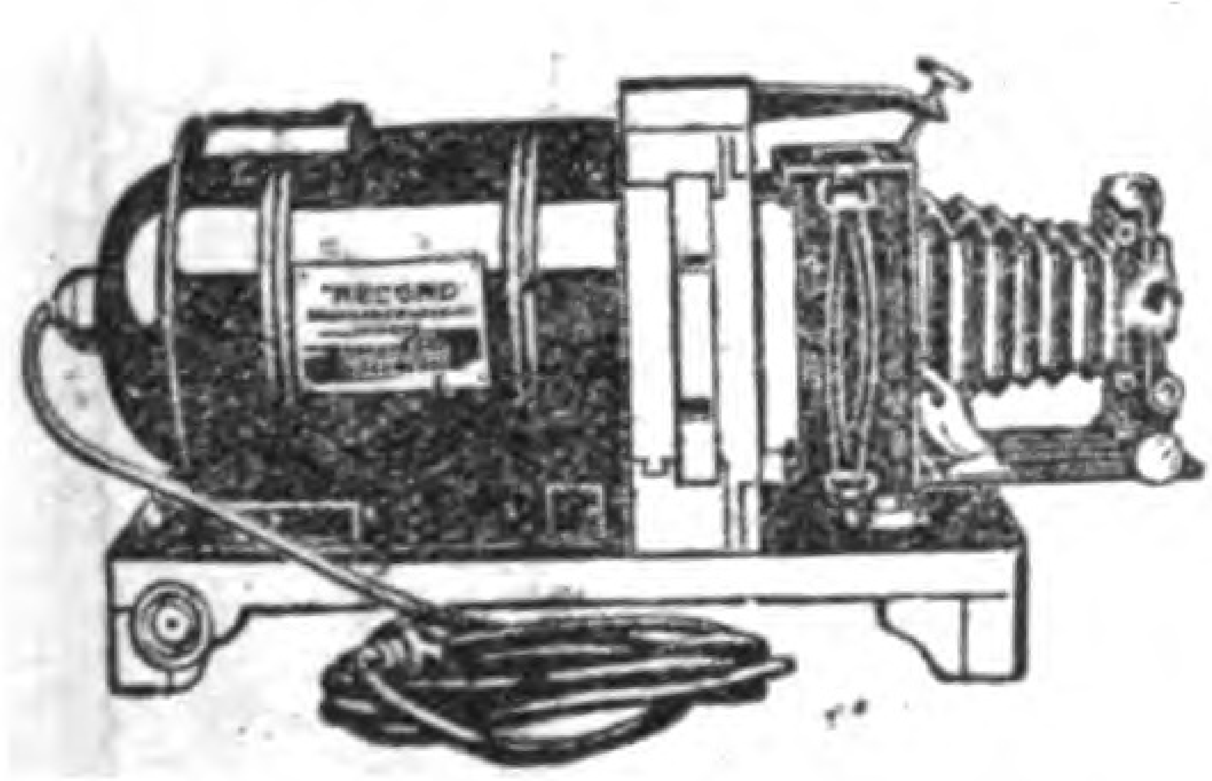
完全な引伸器

レコード

パーレット用　二十三圓

名刺用　四十五圓

手札用　五十五圓



小西六本店

東京本町二丁目

支店　大阪長堀橋

行動形態としての社會群

市村今朝藏

一　社會群の認識とその把握

近代人の生活から、群の生活を除いては、外に何も殘らない。少くとも、群を通じての生存表現及び群との密着や共感がない個人と云ふものは、社會生活上に於て極少の役目をつとめるにすぎない。そうした人々は機能的群の成員でないから、社會過程の上に直接の意義をもつことなく、從つて社會的に重要なものではない。現在の社會生活上に於て各種の地位を占めてゐる人々について考へれば、その事實は明瞭になるだらう。M・P・フオレツトは『私は常に社會とではなく、或る具體的な群に關係してゐる。實際に社會は、吾々の誰れにとつても、諸社會群の一ツの總計であるだけだ。從つて社會は多くの社會心をもつてゐる多くの群の一つの複合である。結合に對する私達の願望は群生活に於て滿足させられてゐる。……世の中と個人との關係は、彼の群を通じてあるのであつて、群は私達の生活を形ち作る有力なる要素である』と云つてゐる（新國家論、二〇頁）。群の生活から離れてゐると普通思はれてゐる藝術家でさへ、或る流派に屬してゐると云ふことだけで既に、その生活が群のそれに織り込まれてゐることを示してゐる。『全く藝術上、美の感知は、美の創造と同樣に、根本的には社會的なものである樣に思はれる。何故と云ふに、藝術の高潮期は正確に、その社會意識が最も高く展開した時期に相當してゐるからである』と云つてゐる人もある（バーンス、心意の接觸）。

現代生活に於ては、個人が社會群によつて自己を表現し、又群が個人に取つて利害を追及して行く手段の一つとして持つ意義が、全く過去の何づれの時代に於ても未だ曾て見られなかつた程度に進展して來てゐるのである。

我々は群と呼ばれる所の諸關係の産物であり、又その諸關係の連鎖でもある。群を離れての個人は只の有機的生物を意味するに過ぎない。個人と云ふ言葉は何時でもそれの社會との聯絡

に於て解せらるべきものである。所謂『純粹個人』といふやうなものは思辯的哲學者の概念以外の世界には絶對に存在しない。個人を、群の機能から引き離して考へるのは、合理主義的主知思潮の妄想である。そしてそれは言ふまでもなく、現代の科學的社會思想に於て既に根本的に覆滅されてゐるのである。

更らに別の一方面では、群の存在を認識しながら、それの形態、及び機能を誤り傳へてゐるものもある。病理學的基礎の上に立脚せしめられた暴徒心理や、群衆心理などの諸文獻は、それである。それ等は、誤つた先入主によつて、社會群の理解に障碍を爲してゐる。例へば個人が群の統制から自由にされた時に、ノーマルな、望ましい人間になると云ふ樣な説明は、その適例である。ル・ボンやその他の群衆心理の專門家は、群のノーマルな諸機能から注意を反らして、アブノーマルな方面だけを强調してゐる。勿論、現在、群の關係が病理學的に解釋せられ得る點も相應にはあるが、然し一般原則の基調となるものが病理學的のものではない事は、常識でもわかる通りに、學術的にも論證されてゐる。

社會群の觀察を、さうした合理主義的主知的思潮や、病理學的に樹立された暴徒心理や、群衆心理やの誤謬の多い、或ひは錯綜してゐる解釋から引き離して、それのありのまゝの姿即ちそれの現象形態を正確に把握しやうとする努力が、最近の社會學、特に現實主義的傾向をもつたそれの間に現はれて來てゐる。然しそれは多くの場合に『外觀世界』の局限内に止まつてゐる。外觀世界に局限された、社會群の現象形態の把握を企ててゐる社會學は、現象の内的聯絡に的確にふれてゐない。だが、現象形態と事物の本質とが直接に一致してゐるならば、一切の科學は贅物であらう（マルクス）。現象形態の事物の本質に對する正しい關係を樹立することのそれが、科學の切實な要求である。私はここでは、先づ社會群を一般の社會學者の提供する現象形態の上から觀察することから出發し、同時にそれを本質と現象の聯絡または統一、言葉を換へて云ふとそれをそれの行動形態に於て把握しやうと試みるものである。そのために私が當然、現實的に、群の現象を形成してゐると見られてゐる社會過程、及び群の行動に關聯して居る社會的進展の上に働く階級の問題に觸れようとしてゐることは、誰れにも豫測されるであらう。

二　社會群と個人との交互作用

諸社會科學の對象は、關係に於ける人間である、と多くの社會學者たちは云ふ。左樣な關係が先づ形式的に認められた時に

は、その結果の組織が群と呼ばれる。群と云ふ言葉は機能に關聯して使用されるものであり、又從つて組織されてゐる諸個人の間の諸關係に就て使用されるものである。從來に於ては此の『社會群』を神秘的な本體を表はす言葉として記述し、群の過程を記述するのに非社會學的カテゴリーを用ひる傾向があつた。即ち類推的な論究の種々な形式が社會群の研究の上に試みられ又社會群を特種な思想家の個人的空想の創造物として、且つそれの便宜的な貼紙として考へられてゐたが、その事が、その形態と機能との研究を妨げた最大の要因となつて居たものである。

科學としての社會學は、事實を蒐集し、分析する以前に一つの見界をもつたり、或る種の概念に左右されたり、又理論的問題の解決を急いだりすることをしない。社會學者は社會群を社會學研究の對象としての地位に置く。

社會群の生活——ここで生活と云ふのは、社會群の生活を時間的意義に於て見てゐるものである——は、人心の上にすべての社會的刺戟の因つて起るところの媒介物として作用するものである。人性、態度、社會的價値と云ふ種類のものは、只群の生活を通じてのみ現はれるのである。

群を起點として考察する場合には、すべての社會過程(即ち社會的接觸や幾個かの相互作用などの)は、群によつて支給されてゐる様に見へる。人間の出生と社會群の關係はこの間の消息をよく物語つてゐる。

生れたばかりの幼兒は、衝動、反應——單純な刺戟に對する反應——の不完全なるカタマリである。彼は物的にも心的にも、又社會的にも、全くヘルプレスである。そうして助けなくしては永く生きてゐられない狀態にある。適當な溫度及び單純な食物によつて、その生命が支へられてゐる。這ふことも出來ない。彼こそヘルプレスネスの典型そのものである。一方又彼がどう云ふ所へ生れ出て來たかを考へて見やう。そこには家族といふ群がある。それは既成の言葉をもち、發達した信念、嚴格な行爲の規則、宗教的因襲、等、等をもつてゐるのである。又それ等のものは、近隣、民族、人種、文化的遺傳等の幾千年幾萬年もの時代のついたもの〻裡から生れ出てゐるものである。遺傳的傾向も、大部分は群によつて存續が決定せられる。祖先は代々群を背景としてゐた。群の一員として生き、群の統制の下に生き、群の存續の間に存續して來た。こうした祖先の群の中に、幼兒は生れ出て來るのである。

群の外に幼兒が生きることが出來るとすると、心的に、社會的に、個人的に、どの位まで發達するだらうか。どう云ふ言葉を語るだらうか。何を着るだらうか。何を料理するだらうか。

又家に住むだらうか。どう云ふ種類のことを考へるだらうか。群を通じて言葉、信念、意識、各種の發見、等、等が、漸次に時代から時代へと傳へられ、つけ加へられ、擴められるのである。斯うした社會的環境の中へ個人は生れて來るのである。此れだけの、出生と社會群との關係を考へて見ても、斯う云ふ風に社會群は個人の母體であることが知れる。

社會學は上述の如く、吾々が四圍の情況の産物であり、又諸社會關係の總體であると云ふ事を教へる。それは如何にも尤もなことであるが、然し、そこには尚ほ充たされない或る部分が殘されてゐる。なるほど四圍の情況及び諸社會關係が人々へ投げ掛ける影響は無視出來ないものではあるが、しかしその四圍の情況及び諸社會關係はまた、人間によつて變化されて來たし、又變化されつつあると云ふ點も、見落したり、忘却したりしてはならない事柄である。更らに一層重大な事は、現象としての社會群の發生、及びそれの推移の究極の原因とも云ふべきものは、人間の經濟生活に於ける生産及び交換の運動の裡に求めらるべきだと云ふ事である。これに關しては次の説明は幾分か理解を助けるであらう。

三　生産關係に立脚した社會群の發生の解釋

先づ社會群を發生的に考へて見やう。我々は、人類が或る種の器具を使ひ初めた時代に遡る。人間社會に器具の發明があつてより以來、一つの社會の中に於ては、或る種の人々は或る種の器具を使用し、或ひは使用せしめられて、他の人々に比べて特に其の使用に熟達する樣になる。ここから人間社會に分勞が起る。分勞が進むに從つて個人の獨立が少くなる。分勞が進めば進むほど、自己の衣食を求めたり、其の生活を維持したりする爲めに使用する社會の諸器官が其の數を增して來る。必要な器官の數が增せば增す程、或る人の使用する或は使用せしめられる器官が社會から不獨立になつて來る。故に生産上分勞が進めば進むだけ、それだけ又社會を離れた個人の力は比例的に減少して來る。そして究極に於て個人は全然社會に依存することになる。即ち人間の個體は分勞の發達以來、社會を離れて只獨り生活する事が出來ないことになる。何等の機關設備なしに、一切の物を獨りで作つたロビンソン・クルーソーの生活は、お伽噺の世界にあるばかしでである。

生産過程の上に分勞が現はれて來て以來、人間は自然界の外に社會をもつことになり、又その分勞樣式に應じて諸社會關係が新しく生れて來る。言葉を換へと云ふと、人間社會は、其の所有する生産機關（器具）と、之を使用する人々との結合に基

じて其の形態を異にし、それ等の人々の社會的關係は其の生產關係に基づいて形成される。

生產方法の發達によつて分勞が現はれ、各個人が全然獨立に生存することが出來なくなつて來てからは、そこに人々の間に相互作用が必然的に發生し、增進し、そしてまた、その相互作用の媒介物が必然的に現はれて來た。即ち生產過程の補助としての言語の任務が考へられる樣になつて來た。(カウツキー、倫理と唯物史觀九一頁以下)。

言語が愈々發達して來ると、是が更らに社會的結合の力となつて、社會的本能ともいふべきものを進展させたり、又それを明かに自覺させる樣になる。言語の發達の結果は、智識の保存、傳播を容易にする。又言語は單純に相互交通の機關であるばかりでなく、思索の機關ともなつて來る。私達は人と語らずに只獨り物を考る時にも、その考へは矢張り言語の形を取らなくてはならない。ここでは言語の發生を研究しやうとしてゐるのではない事は言ふをまたないが、我々が自然界の認識の外に社會の認識が生れて來た事を考へるに際しては、我々はその時の社會過程としての相互作用の上に言語が著しく作用し出したと云ふ事實を、全然無視してしまふわけにゆかないのである。

上述の如く生產過程に於て、ごく初期的な分勞と云ふ、生產形態が表はれた時に始めて、社會的依存が增進し、又意識される樣になり、それにつれて、その相互作用の機關としての言語が發達して來たのである。分勞の結果として現はれて來た協同作用と言語とは、共に社會的結合を强めることに貢獻したが、カウツキーによれば又、戰爭の出現も同樣の效果を來したものである。

戰爭は一方に於て殺伐殘忍の風を養成したけれども、同時に又、族內、氏內、一社會內の結合を鞏固ならしめるところの道具ともなつた。個人に對する外部の危險が多ければ多いほど、個人は自己の社會からの、自己の家族からの、自己の階級からの協同の力の庇護の下に集るやうになり、從つて自己を防衛して現れる者に依存する樣になる。この事實も又社會的結合を增す一つの役目をつとめてゐたものと見做される。そうした種類の戰爭は、私有財產が生れる前の原始共產社會に於ては、即ちその種族の財產が主として共有である間は、社會的本能を强大にする役をつとめる。然し共有財產制度が私有財產制度に變遷して來ると、戰爭はそうした效果を失つてしまひ、そうして全然異つた種類の社會的結合を誘引するやうになる。

分勞により社會的結合が形成されると云ふことは、又多數の社會群への分岐的傾向を內在的に意味してゐる。即ち分勞の進むに從つて全體としての社會的依存（これは分勞からばかしで

はなく、戰爭からも來る）が增して來るが、又その社會的依存を反映する社會的結合の內部に於て、部分的の諸集團が次第に多く形成されて來ることになる。他方全體としての社會的結合は、一つの社會內での依存關係ではあるが、これは直ちに他の社會に對する結束狀態ともなり得る。卽ちそれは、他の社會群の存在の意識を必然的に含んでゐるのである。

原始的共產制は、分勞が發達して來たので崩壞し、分勞の進步は富の所有と云ふ現象を產み出した。此の富の所有は、原始共產制が覆された後には、生產者の側に屬するものではない。と云ふのは、私有財產制の下では戰爭を專門とする一つの社會群が現はれて來て、經濟的に搾取を初め、又その量及び範圍を擴めることを目的とする樣になるからである。この戰爭を專門とする一つの社會群は、政治上支配階級と呼ばれるものである。この階級の出現は不可避的に被搾取階級、被支配階級を伴ふものである。かくの如く、原始共產制の下に於ける戰爭は、社會的結合を促したものであるが、私有財產制の下では、それの階級化を惹き起すやうになつたものである。

四　社會群分類の諸型

從來農業の副業であつた諸種の手工業が農業と分離し、それ等が漸次相互的に獨立するに從つて、更らにそれに伴つて幾つかの部門が出現し、かくてそこにも幾つかの社會群が生れる素地が作られた。又私有財產制が現はれてから、搾取階級と被搾取階級とが必然に岐れて來た。斯う云ふ風に、分勞と搾取とが社會生活の上に現はれて來たことは、社會群及び階級の發生の由來を物語つてゐる。（勿論分勞により生產關係が變化し、搾取が現はれたのであるから、この意味に於て分勞も階級の起因であると解することは出來る）

かくの如くに社會群は生產關係を基調として現はれた現象であるが、それは、單にその發生を物語るだけの事ではなしに、社會群の成育、崩壞もまた、無論この關係が種々なる他の現象によつて屢々根本原因が稀薄にされがちではあるが、常に、如何なる場合でも、生產關係に還元せしめられることが出來るものである。

社會群の發生を、人間の群本能、或ひは社會的本能に求める人達も往々あるが、そうした本能は人間のもつ本源的なものであると云ふよりも、社會生活、群生活の中から生れたものと見るべきだ。『太初に生活ありき』と云ふのが我々の可能なる出發點である。社會的本能や群本能が社會群の密度に關係をもつものであつたり、その創生の意義をもつものであること

は勿論だが、そのものは發生的には社會生活の中から生れたものであることは、見落してならない。

上述の社會群の發生學的考察の次に問題となるのは現在の社會群及び階級の諸型である。ル・ボンは社會群を不正確な群衆と云ふ名をもつて呼んでゐる。そうして次の諸型に分類してゐる。

A　異質的群衆
　1　匿名的（街上の群衆）
　2　非匿名的（議會）
B　同質的群衆
　1　セクト（政治的、宗教的）
　2　カースト（軍隊的、祭祀的）
　3　階級（資本家階級。無產者階級）

ル・ボンが社會群を群衆と呼んでゐることに對する批難は別としても、同質と異質との分類は根本的なものではない。特にセクトを同質的群衆に、議會的集合を異質的群衆に、分けたのは甚しく理解に苦しむ。

尚、社會群をそれの機能の上から分類したものもある——。（スネーデン）。又存續時間の上から暫時的群、持續的群に分けてゐるものもある——（ボガーダス）。接近の密度から第一次的群と第二次的群に區別してゐるものもある——（クーリー）。更らに社會的統制の上から本能的、習慣的、同共的、合理的群に分類してゐるものもある。此等の分類は主として社會學者及び心理學者によつて試みられたものであつて、「群」を客體として、若しくは現象としての形態に於て社會群を把握することを、その特徴としてゐる。その結果、實踐形態としての社會群、即ち階級を、主體的に把握することに失敗してゐる。彼等は一様に、構成及び機能に於て諸社會群の中で特殊的地位に立つてゐる階級を、他のものと同列に配置して居る。

社會群と階級との兩概念を明確に區別して居る一派がある。これはマルクスとエンゲルスによつて代表されてゐる社會主義者の一派である。マルクスは「醫者と官吏とは、異なつた二つの群を造つてゐるが而も彼等はそれぞれ二つの階級を造るものではない」と云つてゐる（資本論第三卷、四二二頁）。この意味は、社會の階級組織は社會的分業と全然異つたものであることを告げてゐるものである。原始社會にあつても職業の分化の曙光を認めることは出來るが、そこには階級的社會は決してない。又更らに未來社會に階級が廢止される時に分業が消去するものとは考へられないからである。我々は先に、發生的に社會群を考察した時に、分業が社會群の素地を作り、搾取が階級を生むと云ふ事を暗示の形で告げて置いた。これを現實の社會の

上にマルクスとエンゲルスとは認めてゐるのである。

社會學者等が社會群の中に階級を包含するのは、それは主として現象の記述を、唯一の科學的生命だとする考に起因するものと見受けられる。―― 此の見界が不充分、不完全なものであることは前に既に述べて置いた通りである。社會學者は一般には『群は同一利害關係の上に價値を置く他の個人との結合を含む所の個人の利害を增大する方法であつて、二人或ひはより以上の人が相互に利害を進める目的で意識的に活動を一緒にするものである』といふ風に定義してゐる。そして、彼等は多くの場合、利害とは何ぞやと云ふ基本的問題をそのまゝに殘して置いて、只その現象、(勿論現象は本體と辯證法的統一の上に立つものではあるが、)を容體として取り扱つて、その中に群の性質及びそれ等の機能的屬性を發見しやうとして居るのである。マルクスとエンゲルスとは一般諸社會群の中から現象の內的聯絡を取り出し、『成立及び滅亡の過程』を示すものとして階級を特別に取り扱つてゐるのである。即ち一般社會學者は社會群を現象形態として『社會過程』の上から、マルクス及びエンゲルスとその學派は階級を實踐的形態として『社會的進展』の上から見てゐるのである。此處に注意すべきは、社會群と階級とが全然別々なカテゴリーの上に立つてゐるものでも、相互的に對立したものでもなく社會的進展の上に直接に行動するものは一般社會群ではなくして、階級だと云ふ點である。又、現象形態としての諸社會群は、それの構成的及び機能的基準を爲してゐる利害そのものを考察すればその行動は階級に存し又階級に統一されてゐるものであつて、階級の實踐的行動の一部表現に外ならないものであると云ふ結論に到着する。言葉を換へて云ふと、社會的進展の上では、階級は主動的地位に立ち諸社會群は何れかの階級の利害の假裝、變裝的表現であると見られる。

五 社會的過程と本能とから見た社會群の創生

社會學では、社會群は社會的過程の產物だと云ふ。然し社會過程そのものは群の生活に起る變化と見做されるべきすべての變化の事であり、また群の關係の動的方面を現はすカテゴリーでもある。社會學では社會過程は、歷史的のもの、敎化的のもの、政治的のもの、經濟的のものの四つの種類に分けて考へることが出來る。

1 一ツの世代から次の世代へ集積され遺傳されるものである所の社會的因襲(それは永續する社會群の遺傳である)を歷史的な社會過程とする。

2 社會的經驗と云ふ共有品を集積し、保持することが歷史

的過程の機能だとすると、前の時代が後繼者の上に遺した所の社會的形式及び社會的型範を形ち作り、又限定するものは教化的過程の機能である。

3 政治的過程は教化的過程と違つた過程——普通に『支配』と呼ばれるそれ——によつて、他の各種の社會過程の間に於ける均勢を維持したり、展開せしめたりする機能をもつ。政治的過程によつて社會及び社會群がその願望を提出し、又それ等を強行するから、政治的過程は、一切の社會過程の交互作用の裡から釀成され蓄積されたところの、一定時に於ける社會的規律によつて制約される。殊にいはゆる輿論とか法律とかが、そのために最も強く働く。

4 經濟的過程とは生産、交換、及び分配に關係する過程を云ふのである

此等の社會過程の類別はその主たる機能によつたものであつて、上述の諸過程に對應するものと見られる社會群は、第一に對しては人種、民族、第二に對しては朋友的グループ、學派、黨派、教派、諸イズムの群、第三に對しては、村落社會、都市、國家、聯邦、第四に對しては勞働組合、消費組合、農民組合、資本家聯合、地主聯合、などがある。

社會群は社會的過程の産物であると云ふ説明は更らに不充分

ながらもロスによつて次の如く試みられてゐる。

支配と云ふ社會的過程は大きな聯合、例へば「帝國」の如き社會群を作る。搾取と云ふ社會過程は搾取者と被搾取者とを一緒に一定の繼續的關係に結びつける。反對と云ふ過程はセクト、黨派、階級が、國家の間に於ては同一側の人々が同情と相互扶助の實際的動機から兩者の各々の側を結びつけて立たせる。順應は群の形成に對する防害を除去し、或ひは同一群の内にある協和を増大する。成層は同一狀態の人々の間に吾々の感じを強める。社會化は人々が、それ自身結合する機會を與へられた時に群の中へ直ちに溶け込み得る様に、彼等を育化する。又職業化は同一職業の中にある人々が仲間の行動に標準を作り、それを遵奉しないものを摘發、賞罰若しくは除斥する爲めに、一つの結合(社會群)を必然的に生ぜしめる。(ロス社會學原論、五七五頁)

斯う云ふ風に、ロスは支配、搾取、反對、成層、社會化、職業化などの諸社會過程が群を形成する徑路を示してゐるが、其の他、競爭、鬪爭、同化、適應などの諸相互作用及び、社會的統制、教育などの諸社會過程も、又群の創生に參加してゐる。

社會學では群の創生を上述の如く社會過程の上からなくつ然し、社會過程はそれの唯一の創造者ではない。人間の群生活を

營む根柢に潛む本能を、私達は見落してはならない。本能は人間の生物的及び心理的組織に貫通する進化的過程の一つの產物であつて、それは個人の生存を可能にする――もしくはそれに有利な――自然的反應に基づく選擇を通じて出來したものと考へられる。機能をつづけてゐる本能は、個人及び人種を滅亡から保存し、繼續せしめる。人間は誰れも、一般的に、直接に社會を通じて存續したものはない。然し彼は常に直接に或る特殊的な群もしくは諸群に屬し、それの一つの全き分子を構成し、更らにそれから彼の社會的性格を引き出す。個人は群への、又は群と彼自身とを同一するところの、一つの素因をもつてゐる。又彼の上への群の影響は、彼自身の性質から起る。結果から云ふと個人は群の中に沒入してゐる。

歷史上のどの個人も、群の一員として以外には生存してゐなかつた。事實上に於て、個人の生存は群の生存に、個人が彼だけの努力によりも、より多く倚つてゐる。此の結果、個人的存續の上によりも、群の存續の上に、より多くの價値が無意識的に置かれるやうになつた。祖國の爲めに討死すると云ふ事や、又自己の階級の爲めに犧性になると云ふことは、それぞれの群の存續を、個人の生存の上に置かしめた主動的感情である。何れもの個人は、無意識的に、彼の群の存續の中に彼自身の生存を持つことを希望する。それは生存競爭に於て、他の方法で生き殘る可能性がないからである。

一つの本能は、單に一般的傾向に於て滿たされる所の衝動か或ひは傾向かである。食欲の本能は個人が生存して行くことの上に、交友の本能は友人を得ることによつて、各々その充足が得られる。又群の本能は、群の一定時に於ける存續を可能とすることを目的としてゐる。食物や、交友の本能は決定的のものであるが、群の本能はさうではない。此れは變化して行く狀態によつて異る。さうしてそれには感覺の助けを通じての認識が作ふ。感覺のうち、視覺は個人と群とを同視するのに最も意義あるものである。更らに嗅覺、聽覺、觸覺なども、群の認識に欠くべからざるものだ。ロイド、モルガンの示す所によれば、蟻は自分達の巢に屬するものと、他のものとの區別を、その香ひできめる。感覺に對してのナジミの程度は一定してゐないので、多くの場合に象徵主義がその制限を充たす爲めに使用される。旗、マーク、スローガン、制服、制帽などは、さうした意味に於ける象徵である。古代に於て敵と旅人（ストレンジャ）とは同意義であつたと云ふのは、群の中の人でないところの何人に對しても防禦を必要としたからである。『同類意識』の樣なものも、個人が彼の群を同體であると見る象徵的一認識である。何れの狀態

に於ても、個人は群の中に彼自身の存續を維持してゐるのであつて、群なしには滅亡して行く。彼自身を一つの群と同一視する本能をもたないすべての個人は、自然的選擇の單純な過程によつて消去する。群の中に働く本能は、何れの場合に於ても、直接の自己よりも、より大きな價値と彼れ自身とを判然と同一視する所に見出せる。群の本能を離れては個人は無力な野性の動物にすぎないのである。

社會過程及び人間の社會的本能が群の構成の上に重要な働きを爲してゐると云ふ事は、上述の説明で知ることが出來る。次に、形成された社會群の行動、即ち社會群の機能の考察に移るのが順序だらう。けれども、その前に上述した樣な社會學や社會心理學の解釋には、補はれなければならない重大な部分がある事を告げて置かねばならない。若し社會學が、社會過程——ここでは社會群の構成に關係を持つ社會過程——は各々が同じ程度に我々の社會生活の現實的基調となつてゐると解してゐるものとするならば、そうした見方は、樹を見て森を見ない種類の誤ちに陥ち入つてゐるものである。それの説明は、歴史的發展のあらゆる『法則』の前に目を覆ふてゐるものに外ならない。上述した樣な社會學の社會過程の四つの分類、——歴史的、教化的、政治的、經濟的過程——は法則を現象或ひは事實から引き離し、理論を現實から引き離さうとした企てであるものが多く見受けられる。經濟的過程即ち生産關係の過程から離れて、社會關係と云ふ樣なものがあり得るだらうか、あるとするならば、それは社會生活から游離した、何等生活の上に機能をもたない假定的構想にすぎないものである。マルクスの言葉を借りて、我々は『物質的生活の生産方法は、生活の社會的、政治的及び精神的過程を制約してゐる』と云ふ事が出來る。幾多の社會過程が群の生活即ち現在の社會生活の動的方面を表はすものであると見るならば、それ等はすべて經濟的過程に基礎を置くものでなくてはならない。特に群を利害の代表者として見る立場は（これは後に説明する）、あらゆる利害はたとひその表現形式がどうであらうとも、生産關係の上に還元せしめられるべきものであるから、つまり經濟的過程がその主要素となつてゐるのである。

更らに、社會的本能も、前に説明して置いた樣に、社會生活の中から生れて來たものであつて、生産關係によつて社會的依存と云ふ傾向と衝動が強くなつた事に由來してゐるものである。社會的本能や群の本能も生産關係から引き離して考へられないものである。

であるから、社會學者及び社會心理學者の云ふ社會過程及び

社會的本能も、それによつて社會群を説明する場合には此等の點を補つて、又補ふことだけによつて、正當に理解されるべきである。事實上に於て、現象形態としての諸社會群は、その行動に於てはまた生産關係と結びついてゐるものだといふことは、かくして知ることが出來るのである。

六　『群先在』と機能としての群

社會群を社會學の對象に置く社會學者は、社會群の機能を明瞭にする必要上、群と個人々々との關係を明かにしてゐる。即ち群が個人の目的であるか、手段であるか、と云ふ點を明かにしてゐる。

生活上に於ける――若しくは生活する――個人は、群との關係から引離して觀察されるときには、單純な生物學上の存在にすぎぬものになる、と云ふ見方は、『群の先在』を前提としてゐるものである。群の先在とは、當該群がその起源的意味で個人よりも先在してゐると云ふのではなく、群――類名として見たる――が現在のどの人間よりも先在してゐると云ふ意味なのである。群生活はタルドの云ふ樣に、模倣から生れ出たものではなくして、逆に模倣が群生活から生み出されたのである。個人は同一群から受ける遺傳をもつてゐる結果として模倣するのであつて、模倣によつて群生活が營まれるのではない。又ギッディングスの云ふ『同一心意』は、それが部分的に個人心意であること、及び、それが同一刺戟に對し同じ反應をもつ、と云ふことを意味してゐるのであるが、此れもまた、群を先在するものとしてのみ解釋すべきである。それは即ち、すべての心的相互作用と同じ樣に、個人的差異及び類似も、共に群を背景として生れ出るものだ、といふことを前提としてゐるものである。

一般に群は個人に先在すると云ふ意味は、個人の成育は群生活の中に起るとする解釋から來る。然も此れは『群決定』を意味するものではない。又群の自目的としての存在を説くのでもない。群は個人の母體でありながら、又方法でもある。即ち社會群を同一利害關係の上に價値を置く他の個人との結合を含む所の個人の利害或ひは全體としての群の利害（これ等は多くの場合に分けて考へられるものであるか）から見るのが群の機能的觀察である。

群が機能すると云ふことは、群の何れもの個人が、或る共同目的――これは利害關係から生れる場合が多いが、種々に假裝し變裝されてゐることもある――の達成の爲めに行動することから生ずるものである。

群の行動は、その『本質』への聯絡と統一を意味してゐるものである。即ち一つの活動する、機能する群は、それの本質への調整を爲すものである。フロイドの云ふ「行動は外部的要素の機能か、メカニズムへ解放される所の解放の過程である」と云ふ定義は、僅かの修正を加へただけで、それを群の行動へも適用することが出來る。即ち群の行動は、それの本質への一つの機能である。

我々が群の實際的機能に我々の注意を向けるならば、群は特定の利害を代表し、進捗し、増殖して行く立場に立つてゐるものだといふことが、直ちにわかる。遲かれ早かれ、此の利害は、他の群によつて支持されてゐる、或ひは同じ群の中に起つた他の利害と牴觸する。そこで鬪爭（種々な形式での）はさけられない。漠然とした「正義」のかはりに、永久的紛爭は特種利害を支持する鬪爭である様に見へる。正義は評價する利害の過程に結びついてだけ述べられるものである。利害は群の動力であつて、力は群の機能を爲し、鬪爭は群の調整を爲してゐる。

群の機能的考察は、群を利害の代表であると見る。一つの群は、すべての成員が分擔してゐる所の一定の利害を代表してゐる。群が目的でなく、方法であると云ふのは、群が利害を代表して、その機能をつとめる、と云ふ意味である。個人が利他的目的の爲めに群に加盟して居り、すべての外部的表徴は、結合が利得よりも寧ろ犠牲を現はしてゐる様に見へる場合でさへ、精密な視察は、それは單に表面的にさう見えるにすぎないもので、あつて、實は群へ屬することによつて保護されてゐる所の利害がその根柢に潜んでゐるものであることを見出すことを困難としない。

我々は屢々利害と云ふ言葉を使つて來た。我々の使つて來た『利害』といふことを個人的なものと誤解してはならない。即ちそれは一般社會的若しくは社會群的利害、――勿論かうした利害は階級の利害の直接の或ひは間接の反映に外ならないものである――と解さなければならない。人々が自己の個人的利害に從つて行動すると云ふのは、エルヴエシスやジエレミー・ベンザムの如き過去の倫理學者の教理である。個人的利害一般は、歴史上には殆んど重要な役目をしてない。社會的生産の集合的利害のみが、社會生活の上に重要なものである。社會的生産の集合的利害のみが精神的、政治的の所謂上部構造組織を決定するものだと考へられる。即ち群構造の上に、又その行動の上に働くものは、社會的生産的利害である。

勿論經濟過程の上からではなく、他の社會過程の中からも利害が生れて來る。然し分離した利害などと云ふものは、分離し

た自我と同じ樣に、我々の知ることが出來ないものであつて、種々なる社會過程から種々なる利害が作り出されるとしても、その種々なる社會過程が經濟的過程から全然游離してゐないのであるから、何れの利害も、實際上では生產關係の中から湧き出たものか、或ひはそれを反映し、假裝し、變裝したものかだとを見ることが出來る。

又、我々は群の條件に反應し、常にそれに反映するものとして理解されなければならない。救世軍はそれ自體を、最廣汎の意味に於ける宗教的群と同一體と感じて、罪人を地獄から救助してやらうとする。愛國者と自稱する人々は、祖國を最高價値にまで高める。すべての群に於て、それに屬する特定個人に對して、或る優先的價値を先見する人があることを、我々は想定することが出來る。それがその狀態に應じて豫言者となり、運動者となるのである。英國人が煽動者がなければアイルランド問題はないと云ふ時、或ひは資本家が、もし職業的組織者がなければ勞働者は滿足してゐると云ふ時、彼等は一つの出來事だけをながめてゐて、その主潮を見てゐないのだ。運動者が彼が影響を與へやうとしてゐる群を眞正に代表してゐる場合は、彼等自身に、現實事相の意義に對する意識を自然に起してゐる時なのである。即ち彼等が群と相互的に反應してゐる時なのである。個人は、縱し彼が指導者として、立つてゐる場合にもせよ、彼の上に群によつて課せられた影響の受動的納入者である。最もヒロイツクの人と雖も、社會發達の創造者でもなければ、又最高の立法者でもなくて、只單に其の執行機關たるにすぎないのである。彼等は唯に、社會の生產關係によつて決定された傾向及び潮流を指導するにすぎないものである。

七　近代生活の上に現はれた群意識

社會科學の上で最も重要なことは、特殊的歷史的狀勢の具體的分析を試みることでなくてはならない。で我々は、近代生活に於ける社會群の觀察に移らなくてはならない。近代生活に於ては、社會群は新しい本體であると云ふよりも、寧ろ、新しい關係を意味してゐるものである。產業革命の後、商業資本主義より工業資本主義へ、又それから金融資本主義への進轉の間に、商業、工業、農業、及び一言にして云ふならば全社會構成とその機能の上に、大きな變化が起つた。此の處に云ふ變化とは、社會生活の總ての雜多なる形の中に社會群の基礎的性質がめざめて來たことを云ふのである。先づ第一に私達は經濟的社會の過程に起つた諸變化、即ち特に產業及び此等の過程の上に於ける雇主と被雇人の別々の集團組織の上に注意を向けるのが

順序だらう。產業過程に於ける發明の適用、屢々なる恐慌のあとに起つた產業の擴大が私達の生活を變へて來た。斯うした經濟生活の變化は、結合の種々なる形相を生み出した。資本家側に於ては金融を中心とした事業網がそこに一つの社會群を生み出した。勞働者側では勞働組合及び產業組合の形をもつた社會群の形成へ進んで來た。即ち實際の重要と必要とから『群の連帶性』が現はれ、集合の新しい關係が生れたのである。ここに於て單一社會と云ふ樣な神學的意識は殺されてしまひ、個人主義は又、公私の事務管理の上に、社會生活の上に、行政司法の上に、及び其の他のすべての型の社會組織の上に、破られかゝつて來たのである。

交通と運輸との發達は事業の結合を生み、資本の合同併合はやがては產業上の獨占へと進み、この過程に於に產業生活の上に、資本主義的連帶と云ふ新しい群意識が成長して來たのである。他方勞働者側に於ては、彼等の群意識は、多くの場合階級意識の形式で現はれてるやうになつて來てゐる。この二つの群意識がそれぞれ、一方は資本の攻勢へ、他方は產業の統制へ、向つて集中されてゐる。

產業生活の上に起つたこの變化は、社會的因襲、教化的經驗政治的態度の上に根本的變化を呼び起し、諸相互作用の上にも新しい活動を惹き起し、それ等の複合が更らに社會群の新しい諸關係の均勢を刻々に促進する役目を演じてゐるのである。

更らにまた、右の產業上の變化が喚び起した社會群の新しい關係は、曾ては神が定めた制度だとか、本能的結合――兩性間の最も自然な――の形態だとか思はれてゐた『家族』の上にも現はれてゐる。家族は血統的社會群の一つであつて　現在は一夫一婦の家庭、家政的家庭を意味してゐる。此の家庭の基調を爲す現在の一夫一婦制は、比較的大きな富が一人の手に――特に一人の男性の手に――集中した事實と、この富をこの男性の子に相續せしめて他の何人にも相續せしめたくないと云ふ欲求とが、近代的個人主義を喚びさました諸現象と結び附いて產んだところのものだと一般に解されてゐる。即ち現在の一夫一妻の家族は、私有財產制、男子支配、及び幾分緩和されてゐながら事實上尙ほ存續する女子隸屬を特徵としてゐる。

財產の管理と相續の必要はない、即ち何等の財產をもたない、從つて男性支配を行はうとする何等の術策をも持ち合はせない人々が、產業上の變遷の爲めに、社會の大多數を占めるやうな時代が現はれたとしたら、家族と云ふ社會群に於ける各員の地位は變化するだらう。特に大規模の產業が女性を家庭から引き出して、勞働市場に立たしめ、婦女が家族の扶養者となり

得る時代が到來しても、男性支配の根據は動かないで居られやうか。エンゲルスは此れに對して正當に次の樣に答へてゐる。「無産者の家庭内では、假令夫婦の最も熱烈な戀愛と最も堅固な貞操とが存在してゐやうが、また何等かの宗教上、古俗上、その夫婦關係を確認し祝福する一切の儀式があらうが、それは最早や嚴密の意味での一夫一婦（エンゲルスがその言葉を歴史的見地から皮肉な意味に用ひてゐることが、次ぎに續く說明によつてもわかる）ではない。それ故一夫一婦制の永遠の同伴者である所の娼女制及び姦通は、この場合殆ど影を潜めてし、まふ。妻は事實上再び離婚權を回收した。……」と。（エンゲルス、家族私有財產及び、國家の起源、五十九頁。）即ち產業上の變化は家族內の財產と相續との上に立つ男子支配を除去して、新しい關係をもつてそれに置き換へ、或ひは置き換へようとしてゐる。近代生活は、この一つの例の中に於ても覗ひ知ることが出來る樣に、產業上の變化の生み出した諸社會關係の上に立つてゐる。

我々は今迄に於て、社會學者の試みた社會群の解釋を、重要な點に於て補ふことによつて、その現象形態の中に、その本體を見出し、又その行動の基準を生產關係の中に發見した。そして近代生活の分析にまでたどりついた。我々は更らに社會的進展の上に行動する實踐的形態である階級の觀察に移らねばならない。それは行動に於ける社會群はすべて階級に統一されてゐるからである。

八　階級の實踐的意義及び社會群の行動の階級への統一（上）

現實は決して何等かの完成されるものではない。それはまた封鎖的なものとして與へられたものでもない。現實は諸對立からなる一個の發展過程を表現するものであると、唯物的辯證法は教へる。

マルクスは「近代の特徵は階級の反對を簡單化した點にある。全社會は次第々々に相敵視する二大陣營、直接相互に對立する、二大階級に分裂しつつある。即ちブルジョアジーとプロレタリアートとはそれである。」とし、この狀態の下に於て社會進展の上に歷史的使命を遂行する立場におかれてゐるものはプロレタリヤであるとしてゐる。またそれに關聯して、彼にあつては、階級の概念は鬪爭の概念を離れてない。此の鬪爭は社會的進展の過程を現はしてゐるものである。カウツキーはレーニンから『安樂椅子の上の博學なる馬鹿』と云ふ稱號（？）をもちはなかつた時代即ち『如何にカウツキーの偉大であつたことよ』

と前提された若き彼であつた時代に、他の社會群から其れを區別する特徴は、經濟的利害の必然的反對(從つて同一の階級の成員のみに就て見る時にはその階級内の必然的一致)にあると見、他の種々な社會群にあつてはそれ等の間に利害の一致を見出すことが出來る事があるけれども、階級にあつては絶對そうしたものはないと云つてゐる(ノイエ・ツアイト第三十一卷二號二四一頁)。此の避くべからざる利害の對立は、社會内の一部により他のものの餘剩勞働が搾取されることによつて成り立つところの近世社會の根本的對立に外ならないのである。であるから、社會の階級的組織は現に行はれつつある對立的生産方法の社會的表現である。支拂はれない餘剩勞働の存在する限り階級對立は持續されて行く。

現在の社會は相對立してゐると言ふ、然も一定の相互關係により相互に聯絡されてゐると言ふ、二つの階級に分かれてゐると見られる。プロレタリアートなくんばブルジョアジーなく、ブルジョアジーなくんばプロレタリアートも又ないのである。斯う云ふ風に社會が根本的に對立してゐる二大階級に分立してゐると云ふ事實は、社會群の現象形態はどうであるとも、その本質は階級對立の中に制約されゐるといふ事實を指示する。『經濟的關係は最初に人々の大衆を勞働者にした。資本の支配は此の大衆に共同の位置、共同の利益を與へた。かくして此の大衆は既に資本に對して一の階級である。然しそれ自體に於てはまだ階級ではない』。(マルクス、哲學の貧困、五五頁)斯うした、まだ構成されない階級は、その階級利害の意識を、換言すれば、自分達の利害が他の階級の利害に對立すると云ふ意識を、欠いてゐるのである。此の階級意識は別々に人々の中に湧いて來るものと見るよりも、資本主義生産組織と云ふ實在の中に現存してゐる『階級の意識』である。この點については、修正派のツガン・バラノウスキーも、次の樣に述べてゐる。『階級意識は同一階級の代表者の連帶感情の中にのみ存するものではない。何故ならば、類似した生活條件の下に在る仲間同志の同情感は、總ての常人の持つ自然の感情であつて、なか／＼階級意識を作り出すものではないから。階級意識に取つては、其れよりも大きなものがある。即ち當該階級の生活條件は、此の階級が現行の經濟秩序に於て占める所の地位によつて、從つて現在の經濟方法によつて直接に決定され、且つ支配されてゐるものだと云ふことの認識がそれである。で無産者の階級意識に取つて必要なのは、無産者は啻に連帶的に感ずるのみではなく、更らに又資本によつて搾取されてゐると云ふ事を認識することである。だから階級意識は、階級對立の意識又は階級闘爭の不

可避性の意識と同意義となる』。(ツガン・バラノウスキー『マルクス主義の理論的基礎』。水谷長三郎氏譯『唯物史觀批判』四十六頁。)

階級に形成された大衆、即ち階級意識をもつた階級は社會的推移の原動力であると見られる。

かく、階級は社會進展の上に行動してゐる。又階級の行動は現行の生産關係によつて直接に決定されてゐるのである。此生産關係を反映してゐる諸社會群も、その機能に於て完全に階級の行動に統一されてゐるものであると見るより外ないのである。

九　階級の實踐的意義及び社會群の行動の階級への統一(下)

社會學者が、社會過程の上から試みた社會群の研究は　マルクスの言葉をかりて云ふと、『世界を色々に解釋しただけである』と云へる。即ち社會生活を解明し、その機能を明かにしただけであると云へやう。それによつては、『たが肝心な問題は世界を變更する事である』と云ふ――その肝心な問題にはふれてゐないのである。然し我々は不充分にも社會群はその行動に於ては階級に統一されてゐると云ふ説明にまで到達し、社會的推移の原動力である階級の考察にうつり、『肝心な問題』を解かうとしてゐるのである。ここに於て、社會的進展の上からの階級、即ち『成立及滅亡の過程』を指示するものとしての階級の考察が必要になつて來る。特に生産階級の、若しくは其の本質の上からは實踐階級であるものの確識が缺くべからざるものとなつて來る。

現實の説明は、人間社會の支配、その改造、その原動力の認識へまで押し進められなければならない。客觀的現實の説明は、その變動及び發展の理解へ、と移らなければならないのである。諸社會群は社會的形態であつて、社會的內容ではない。社會的內容は、その社會の經濟的構造である。この經濟的構造はそれ自身の法則を有する所の、歴史的に一定してゐる生産關係の一體系を表現してゐる。その生産關係の一體系の內に二つの對立階級がある。この二大陣營に對立する階級のうち、社會的進展の上に行動するものは生産階級であり、實踐階級である所のプロレタリアートに外ならない。『肝心な問題即ち世界を變更する事に』關係するものとしての階級の考察は、必然的にプロレタリアートに向けられるのである。

プロレタリアートと云ふ言葉は、一般人の常識的解釋に於ては一般に最低、最貧の階級の人々を名づけたものとされてゐる。然し、マルクス等の使用してゐる意味は、それ程漠然としたものではない。彼は近代的資本主義社會に於て、彼自身の資本を

持たず、賃銀と資本家の利益の爲めに働く人々を、特にプロレタリアーと名づけてゐる。何がプロレタリヤかと云ふ問題に對して最も明細でもあり、參考にもなる答は、ロシヤ社會主義ソヴエツト共和國聯邦の憲法の中に見出せる。それは一九一七年の革命のあとで、ボルシエヴヰーキの手によつて作られたものである。『公に生産的であり、社會に有用であると見做される勞働によつて生活手段を得てゐる人々、及びそれ等の勞働に從事する人々が彼等の仕事を爲すことが出來る樣に家政を取つてゐる人人。言葉を換へて云ふと産業、商業及び農業に從事するあらゆる程度の勞働者、及び利益を目的として勞働を雇ひ入れない農民と彼等の妻、小供、親、その他の自然的に相倚つてゐる人々の全部、ソヴイエツト政府の武裝してゐる陸海軍人はすべてプロレタリアーなのである。利益を增殖する爲めに勞働を雇ふ人々、利子地代等の不勞所得を受けてゐる人々、商人、仲買人、各種の僧、牧師、帝政時代の官吏と警官及び前朝廷の人々は絶對にプロレタリアートから除外されてゐる。』（條文四部十三章）。

プロレタリアートとブルジョアジーとの間の差は、正確に論理的であるよりも、經驗的であると云へやう。革命によつて政權を得たロシヤの共産主義政治家は、直接の政治的目的の爲めに、プロレタリアーとは何を意味するかを上述の如く理解してゐる。けれどもプロレタリアーの各員の充分なる客觀的テストは、民族性のテストと同じ樣に、極めて達成しがたいものである。

マルクスは『資本の支配は大衆に共同の地位、共同の利益を與へた。かくして大衆は資本に對して一つの階級であるけれどもまだそれ自身に於て階級ではない。一階級鬪爭に於て此の大衆は相結合し、それ自體の爲めの階級を形成する。彼等が擁護するところの利益は階級的利益となる』（マルクス、哲學の貧困、一八〇頁）と云つてゐる。此の資本に對して一つの階級であると云ふ事、即ち他に對して階級であると云ふ事は、プロレタリアートの存在の現實である。ブルジョア社會に於ける上述の列擧したプロレタリアートは、資本に對しての階級と見られやう。階級鬪爭に於て、それ自身の階級を形成すると云ふ事、即ちそれ自身の爲めの階級とは、階級意識に到達した階級の事である。此の後者の意味での階級が、政治鬪爭の本體となるものであると見られる。階級意識に醒めた階級は、政治鬪爭を離れては考へられない。この政治鬪爭こそ『肝心な問題』を解く鍵である。

總人間的實踐から生ずる經驗を認識の基礎としてゐる唯物的辯證法の立場は『現實は諸對立からなる一個の統一體、ならびに一個の發展過程を表現するもの』である事を示す。此處では發展過程を現はす階級が諸對立の上に如何なる統一關係を示してゐるかを階級と民族との關係——この關係は明瞭に觀取される——から考察することにする。

民族を行動形態としての社會群として取り扱ふ場合には、民族運動とは何であるかと云ふ問題が重要なものとなる。現在の

民族運動には、一つの國家の下に包括されてゐる異民族がその支配から脫出しやうとする獨立運動と、幾つかの國家に分屬してゐる一つの民族が政治的に統一體にならうとする解放の運動との二つの民族國家形成の運動がある。その他、民族間に於けるあらゆる種類の結び目が發達し、增加し、民族的障壁が崩壞し、國際的統一の形成への傾向も起つてゐる。民族國家の形成は、ジョン・スチアート・ミルの『政府の界標は主として民族の境界と一致すべきだと云ふことは、自由的制度の必然的狀態である』(代議政府の考察、第十六章)と云ふ思想に出發した資本主義發達の初期から表はれた運動である。勿論その淵源をたどればマキアベリーの伊太利民族國家の幻想や、英國のプラアミユニール法のパアカシーの纂奪に抗し、生國の支配を確立しようとした規定や、又宗教改革の時代に宗教上の自治權をもつてゐる民族が政治上にも民族的自治を得やうとした要求などにさかのぼることが出來やう。然し現在、意義のある民族運動は此れとは全く趣きを異にするゐものとせられてゐる。現在の從屬民族——印度及び支那、エヂプト、等の不獨立國としての、又殖民地としての——は金融資本を擁してゐる小數の文明民族の貯藏庫である。不獨立國及び殖民地の被壓迫民族が獨立民族國家を形成するには、帝國主義——領土併合と植民地化との兩手段によつて他の民族と結合してゐる帝國主義——から政治的に解放されなければならない立場にゐる。即ち民族解放運動は、プロレタリアー運動との共同戰線を要求してゐるのである。

、他の民族運動の傾向である國際的統一の形成も、プロレタリアーの物質的基礎を單一世界經濟組織の上に立てやうとする計畫と又一致してゐる。斯う云ふ風に實踐形態である階級は現實の諸對立を階級に統一してゐるものである。

× × ×

我々は我々を神、運命、或ひは內的力の憐れな生贄だと考へない以上、又私達の生活が單なる形式だけであると見ない限りは、魔術的な思想や、形式的思索から離れなければならない。

社會と云ふ漠然としてゐて、又概念として抽象的であり、微的目的に、又概括的記述にだけ有用である言葉の外に、私達は社會群と云ふテクニックを見出し、又社會生活の基調的地位に立つ階級を認識した。社會に於ける個人の關係及び群と群との關係は單なる形式ではなく、その本質に於ては、生產關係に結びついてゐると、又行動に於ては階級に統一されてゐる事を認めた。

行動形態としての社會群とは、その現象形態がその本質の上に正當に立脚し、階級に統一されてゐる社會群の事である。機能してゐる何れの社會群も、その行動は總て、生產關係を反映するものか、或ひはそれを變裝し、假裝するものかである。從つて機能してゐる社會群は、すべて、行動形態に於ける社會群である。又階級は直接に生產關係を標識してゐる居るから、その階級の實踐的行動に、社會群の行動は統一されてゐるのである。行動形態としての社會群は、階級に統一されることによつて、社會的進展に參加する。

支那の關稅會議に就いて

小村俊三郎

一

昨年の十月廿六日、ワシントン會議の引續きとして、世界注視の中に開會された北京の關稅會議は、劈頭第一支那の大膽な自主權要求に對し、日本が單獨に敏速な贊成を與へたことによつて、英米諸國を瞠若たらしめ、支那も日本もその既往の外交に、全く前例のない歷史的劃期的な見事のスタートを切つた。然るに八ケ月間に亙り、多事多難な運命をたどつた揚句の本年七月三日には、支那を除いた列國全權の會議において、いよいよその關稅會議を中止せんとする英國の提議に、米佛諸國が贊成し、日本はつひに孤立となりて、今度は反對に列國に引摺られ、事實においては、打切同然の共同聲明が決議せられた。支那は遽かに驚き忙て、失望し、不平と反感とを昂めつゝある。世界において重要問題の一つであり、支那の爲には勿論、わが日本に取つても、共に國家の名譽と利益を賭したこの關稅會議も、かくして生死不明の哀れな狀態に置かるゝこととなつた。

英米に中止の口實を與へ、かゝる形勢となつた當面の理由は、いふまでもなく、支那の時局の爲、何時までたつても政權の確立を見ず、內閣總理も、外交總長も、正式の任命を得ず、關稅會議の委員も一人二人減つて、外國の全權や委員を相手に、最後の調印は愚か、會議の開催をさへ不可能ならしめたことにある。さればその責任は勿論支那に在る。支那自ら求めた禍であつてその失望も反感も、皆な自業自得である。しかし、これを列國についていへば、支那時局の紊亂は、決して今日に始まつた譯ではないが、最初に會議の相手とした段祺瑞の政府も、勿論正式なものでもなく、また勿論堅固なものでは、猶更なかつた。今日の時局は、その繼續的發展の當然な結果に外ならぬ。吳佩孚張作霖の頭腦や手腕では、最初から正式堅固な政府の出來やうとは、われ等は豫期しなかつたが、今更これに失望した國は、寧ろ赤化防止の吳張聯盟を後押した力ではなかつたか。

今に至つて吳張にあきれたでは、寧ろ吳張があきれやう。列國としては吳張馮段の代りに、民衆を代表し得る外交家を相手とし、彼等を通じて民衆の合意を得ればよいのである。しかし、民衆は彼等に印璽を授ける政府の出來るのを待てばよく、その政府の何であるかは、強いてこれを問ふ必要もなく、またこれを問ふとも出來ない。もしその政府も出來なければ、たゞ全會議の議決を記錄に上せ、そして退いてこれを民衆に示めすと共に、次の政府の出來るの待てばよい。しかし、彼等の本心は、たゞ時局を口實として、自己に不利益な會議の中止に横車を押し、支那の國民的熱望を抑ゆると共に、日本の小股をすくつて、これに背負投げをくわせんとするのに過ぎぬから、今更理窟を並べても、追付くまい。

二

が、肝腎な日本は、折角支那を後見し、英米を指導して行く積りでかゝつたものが、あべこべに英米に引摺られ、このまゝその支那と共に、泣寝入りに終るのか。折角支那の感謝を博し、自國に取つても大なる利益となり、自主的外交と、日支經濟提携の爲に、劃時代的な決心と努力とを以て、こゝまで來たものを、このまゝ中途で腰を折り、日本の面目をも、その利益をも、失墜せしめても構はぬのか。乃至その失敗も成功も、皆な政府だけの仕事であつて、國民自身は關せぬといふのか。政府の失敗は、掩ふべからざる事實だが、さりとて、我國民の全體は、甚だ不熱心で、そしてその意見は餘りに不統一である。政府の仕事に不贊成であつたら、最初にその聲を擧げねばならぬ。最初には反對であつたが、途中で贊成に傾いたといふなら、政府と共にその處置を講ぜねばならぬ。贊成も反對もしかねるといふなら、先づその問題に眞面目な研究を重ね、正當な理解を得ねばならぬ。そして、プロスかコンスかの態度を定め、これを輿論の上に反映せしめ、政府をしてその向背を決せしむると共に、これを相手國にも反響せしめねばならぬ。それが即ち所謂國民外交であらうが、事實は果してどうであるか、われ等はこれに迷はざるを得ぬ。

會議中止の報が、東京に傳はつてから、今日まで尚ほ日が淺いから、今後尚ほ種々の意見も現はれ出づるであらう。現在まで現はれた議論だけでは、會議中止は、支那の責任で、自業自得であるといふ外に、英米の陰謀を咎むるものもあるが、さればこれをいかにすべきやの意見については、不幸にして未だ多くこれを聞くとを得ない。中には、そら見たとかといはぬばかりに、政府の失敗を當然とし、日本が英米に引ら摺れるのをも、

同じく當然とするものすらある。その人々も、成程最初には反對であり、不安であつたかも知れぬが、しかし、中頃會議の進行が、日本に利益であるとを見て、一旦は贊成に變じてゐた人もあるから、その自信もなく定見もないのに驚かされざるを得ぬ。政友會のごときも、どうやらその仲間のやうであつたが、今や彼等は開き直つて、政府の失敗を攻撃せんとしてをる。しかし、それが所謂國民外交ではなく、黨人外交であるなら、それはわれ等の關するところではない。

政府は勿論失敗である。さりながら、對外問題には、政府の失敗は、即ち國民の失敗である。尤も政黨政治議會政治の國に在つては、政府は、言を、外交に托して、その責任を遁るゝことは出來ぬ。從つて政府は、堂々として、これを攻撃すべきである。しかし、その政黨は、事前にその反對の理由を、明かにして置かねばならぬ。また事後において、これに處するの態度をも、決めてかゝらねばならぬ。然らざれば、即ち所謂攻撃せんが爲の攻撃にしか過ぎぬ。それでは、國民の政黨ではなく、寧ろ國家の害敵であらう。

三

然らば政府は何が故に失敗したか。主な理由は、矢張り支那の政局そのものゝ爲である。支那さへしつかりしてゐて呉れたら、英米は寧ろ支那と日本に引摺られ、會議中止の口實を得るとも出來なかつた筈である。北京に於ける議會中止の聲は、今日には始まらなかつた。郭松齡の擧兵、段祺瑞の沒落等、幾たびか風雨飄搖の變目に遇つた。そのたび毎に、主として日本の力により、これを支持して今日に至つた。そしてその時局の困難を排しながらにも、會議の困難をも切拔けて來た。會議劈頭からのプランや、プロポーザルは悉くわが政府當局の創意と自信とに出でたか、乃至一部の意見や、最後の輿論に動かされたか、否かは問はず、そのプロシーディングやトランサクションに對しては、彼等は善く準備し、善く揣案し、努力し奮鬪した。大體においては、頗る支那と日本との利益を一致せしむるやうに、その議事を進めて今日に及んだ。英國の反對は、それが餘りに自國の利益に反するやうな窮地に陷しいれられて來た爲に、時局を口實に遁げを張つたのに過ぎない。しかもそのデリケートな外交戰を戰ひつゝ、却つて相手の英米諸國をして困難な日本の立場を諒解せしめたともある。一例を言へば、モラトラリアム案は、たとへこれを撤回しても、代りに差等税率において、却つてわれに有利の地歩を占めつゝあつた。支那に政變さへ起らずば、わが政府わが國民は、支那のそれと共に、

初から最後まで會議の成功者、優勝者であつた筈である。

されば、支那の時局は、われに取つても、不可抗的な困難であつた。されどその困難も、決して踰越すべからざる程の障礙物ではなかつた。換言すれば、その爲に、會議を中止する程のものではなかつた。それは後にこれを再說するが、わが政府の失敗は、これを豫見し、これに準備し、その餘地を取り置く用意のなかつたことに存する。論理的法理的の頭腦で堅まつた幣原外相は、その程度範圍だけの理想家でもあり、主義に忠實な人でもあるが、何れかと言へば、事務家肌の人である。その上、出先きの全權や委員は、たゞ會議の事務を中心に、エキスパートとしディプロマツトとしては割合に善く働いても、肝腎な時局の爲に、會議のテーブルが、ひつくり返へさるゝことには、氣のつかなんだ節もある。會議は固より時局を當てとすべきでないが、たゞし、時局に圍まれた會議は、勿論その影響を免れぬ。彼等がこれを頭に置いて、外は列國にも對し、また內は國民にも對してゐたなら、今度のやうな失敗は見なかつた筈である。取り分け、その對內政策の方が拙かつた。幣原外相が、これを勘定に入れて、議會に對してゐたならば、今日政友會の問責をば免れ得たかも知れぬ。殊に外務省の對內政策中、最も拙づかつたのは、その新聞政策である。その當局者は、特に利害關係のある實業家や、何でも口を出したがる貴族院連中等には、時々說明を試みても來たが、一般國民の耳目である新聞記者には、その理解を求むることが頗る足りなかつた。見よ、東京の新聞記事や、その社說中、終始一貫政府の態度を援助して、これを內外に紹介したものが、果して幾何あるか。寧ろ國民の意嚮を反映して、政府を後援すべき肝腎な新聞紙に、打切當然の論調が、多きを占める位ゐではないか。政府の失敗は、要するに、餘りにお人好しな獨り善がりの樂觀主義と、國民と沒交涉な溫室外交との弊である。

四

然らば、關稅會議はつひにこれを救ふことが出來ぬのか、これを見殺しにしてよいのか、折角見事なスタートを切つたものを、中途で挫折するのか、支那を助け英米を率ゐる積りでかゝつたものを、支那を棄て英米に屈するのか、支那と日本の面目利益を踏み付けられ、再び白人の優越と橫暴とに、極東の天地を一任するのか、日本の自主的外交と、支那との經濟提携は、これを一場の夢と觀ずるのか、これわれ等がこゝにわが國民に問はんと欲する要點である。それには、わが日本は何が故に支那の關稅會議に對し、今度のやうな態度を執つたか、如何なる提

實を爲し、如何なる經過を經て來たか、それが果して日本と支那との爲に、利益であり成功であつたか、利益であり成功であつたとしても、一たび英米の爲に中止の厄に遇ふたその會議は、再び復活を圖るとは出來ぬのか、復活を圖るには、支那も日本も果して如何なる決心と覺悟とを要するか等の諸點を明にせねばなるまいと考へる。それにはまた先づその根本大局から、說き起して來るのを順序としやうが、われ等は今更その順序を倒まにして、會議復活が可能か不可能かから、倒序的方法を採り、順次根本に溯つて行き、最後にこれに必要な決心と覺悟とを論じて見ることにする。

それは、會議の復活が到底不可能ならば、總べての議論は無益に歸する。しかし、復活はよし困難だとしても、會議の經過が果して支那にも日本にも、利益であり成功であつたとしたら、日本は如何なる努力を拂つても、これを復活させねばならぬ。もしまた今度その復活が到底不可能でありとするなら、別にその目的を逹する方法を求めねばなるまいと思ふからである。

五

そこで第一會議の復活は果して不可能であるのかどうか。

それにはまづ關係各國の全權會議で、中止の聲明をした其會議について、その討議を進めて行くことが、至當の順序であるが、その共同聲明には、『支那政府の全權委員が、諸外國の全權と共に、諸種の問題を再び討議し得るに至らば、遲滯なく會議を進行せしむる誠實な希望を、全員の一致により表明す』とある。それが振出手形の券面である。その券面だけによつて見れば、たゞ全權委員の顏を揃へて、會議の事務を進捗して行かれさへすれば、直ちに再開されねばならぬことになつてをる。さればこそ、これに狼狽した支那政府は、代理總理の据置きや、外交總長の新任や、首席その他の全權の更任等を行ひ、聲明の文句を正面から楯に取り、列國にその再開を逼らんとしてをる。しかし、英米諸國は、そのまゝこれに應じて、容易すく會議を再開するか、それがそも〳〵の問題である。

列國就中英國の本意は、會議の進行が自國に不利益である爲に、口實を支那政局の不安定に求めて、中止以上にこれを打切らんとするのである。英國は既に本年四月段祺瑞失脚後の沒落の時から、その決心を固め、全權ヒールもスチニアードも本國に歸還し、六月十日の列國會議にも、その意見を發表し、會議は一旦こゝに危機に陷つた。七月三日の會議で前述の聲明をなすに至

つた理由は、勿論英國の打切提議が、その主なる動機であつた。日本は勿論、支那と自國の利益に基づき、終始一貫した維持論で、たゞ夏期休暇を中に挾んで、十月一日再開との主張をしたのである。日本のこの主張を明白に聲明書の上に書き入れることさへ出來てゐたら、議論はないのであつたが、それが出來ずに無期限の振出手形となつたについは、何故日本の意見と訓令とが行はれなかつたか、それがそもそも一つの疑問である。その代り、日本の努力によつて、前述のやうた聲明書が出來、公然たる打切りとならなかつただけは、確かに日本の成功であるが、お人好し揃ひのわが外務省は、例によつて樂觀を極め、その再開は容易に出來るものと信じてゐる。しかし、われ等にはさやうに受取れぬ。

英米の兩全權は、表面右の聲明書に署名して置きながら、即日新聞記者に對する會見談においては、口を揃へて支那に正式の政府、確實な政府の出來ることを、會議再開の先決條件だといつてをる。それが即ち手形の券面を裏切つた彼等の本音である。正式の政府といひ、確實な政府といひ、如何やうな解釋も出來る抽象的の言葉で、且支那の現狀では當分その實現は不可能である。われ等は支那政府が考ゆるやうに、單に全權の顏觸れを揃へただけで、英米がその聲明通りに、直ちに再開の要求に應ずるものとは、容易に信ずることが出來ぬ。わが政府は、列國を阻止して、右の聲明に止めしめた關係からいつても、單獨でも支那の要求に應ぜねばならぬ義理合であり、支那は必ず先づこれを日本に求めて來やうが、さてわが政府はどうするか、協調と自主との分れ目は既にこゝにも始つて來るのである。

六

次ぎに英米がその振出手形の手前、支那側全權の出揃ひだけで、已むを得ずその再開に應ずるものとしたところで、その會議は果して圓滿な進行を見ることが出來るか、これはまた第二の難關である。英米就中英國は、會議の劈頭支那が自主權を持出し、日本がこれを援助した時から、非常に不愉快な感じを持ち種々の陰謀を回らして、その自主權問題を葬らんとした。それも失敗に歸し、表面からこれを遮ぎることの爲、ワシントン協定の二分五厘乃至五分の附加税問題なら、本國の許可を要せずして、これを討議することは出來るけれども、それ以上は討議の自由を有せずとし、常にワシントン協定以外の會議進行を覆へし得る餘地を暗に保留して今日に至つて居る。その後議事の進行が、增收支途の保管問題等から、香港の次には上海の租界と共に、英國の對支勢力第二の城壁である海關組織の根本に觸れ

て行くやうになり、支那もまたいよ／＼稅關の權利回收を企つるに至つてから、ます／＼口實を時局の如何に求めて、これを打切る決心を固むるに至つた。

米國はワシントン會議の結果、今度の會議もその範圍に止むる考へを以て、これに臨んだのであるから、自主權問題の提議せらるゝに及び、英國と同じ内心の不愉快をば免れなかつたが、しかし、支那に對する年來の主張上、公然これに反對する譯には行かず、且英國の手先きに使はれ、排英の道連れにされることを恐れ、中頃は寧ろ日本と接近して、會議の進行とその維持とを圖つて來た。たゞし、最近支那に愛憎をつかし、その對支觀念に一大變化のあつた米國は、これまた支那の時局を口實にし、何時のまにか英國と一緒になり、公然ワシントン協定の附加稅を議了して、關稅會議を中止する考へとなつてゐた。

外交問題には、その保守主義たるとにおいて、何れの國にも劣らぬ佛國は、主として奢侈品稅が、最も自國に不利益な結果から、最初からの中止論者であつた。それ等の關係から、日本側の奮鬪努力に拘らず、たとへその打切說はこれを喰ひ止めても、明白にその再開を約束せしむるとが出來なかつた譯である。さてそれが萬一再開を見たところで、その議事が圓滿に行くものであるや否やの問題に至つては、前述の如く、日本を除く諸國は、日本に出し拔れた感があり、その後の者には、甚だ極めて支那と日本とにのみ利益であつて、彼等には利益を餘り感ぜぬのみならず、支那を排斥し、現狀維持を利益とするものと、支那を援助して生面を打開せんとするものとの間に、利害感情の差が、その根本に横はつてゐる。それ故にまた會議進行中に、幾多の反對や妨害が行はれ、將來に調和も解決も共に困難な問題が、未決のまゝに取殘されてゐる。

ゆゑにたとひ會議が再開されても、列國と圓滿な協調を保ち、これを進行させて行くとは、今から至難なとが豫想される。その上に、ワシントン協定の附加稅問題も、尚最後の決定を見ぬまゝに、會議は中止された。英米もこれを再議するとだけなら、勿論異存はない筈であるが、それにしても尚ほ支途と保管について、解決不能の困難が殘されてある。それ以上再びその他の諸問題を議するについては、更に別箇の困難が横はつてゐる。それは前にも述べた通り、少くとも英國は、明白にワシントン協定以外の問題は、これを議すべき任務を帶びてゐないとを、繰返し聲明してゐるとである。現に駐支公使のマツクレーは、本月四日、即ち中止聲明の翌日、特に英國の立場につき辯明書を公表した。それは同公使が會議打切の首謀者である爲、支那輿論の攻擊を避くる目的を以て、乃至反對にその責任

を日本になすりつけんとする下心を以て、『英國は支那最近の政局によつて中止された關税會議を停止し、若くはこれを斷絶せしむる意思はない』といふことを、辯護する爲のものであつた。そしてその冒頭には、特に『英國政府は遲滞なく、ワシントン協定を履行し、同協定に基く附加税承認を切望し、また同協定による合理的提議の討議に應ずる用意を持つてゐる』といふことを、反覆丁寧に説述してをる。それは即ち、たとひ會議を再開しても、その議題はワシントン協定の範圍内に屬するものに限ることを明言し、且それを特に合理的提議でなければならぬことを斷つたものである。これを見ても、われ等は明かに英國の底意が何れに存するかを知り、再開された會議では、再び議題の範圍について、可分不可分のやうな根本的に困難な問題が起り、これをその初めに戻すことすら、容易なことではなく、たとひその全問題を再議したところで、その調和一致を得ることは、更に容易でないことを豫見し置き、支那は勿論、わが外務省のいふやうな樂觀的なものでないことを、承知して置かねばならぬと思はざるを得ぬのである。

七

然らばわが日本は、これが容易でなく、困難であるが故に、このまゝ折角の主張を抛ち、支那を見棄てゝ、英米に降參し、協調主義の美名を借つて自己を欺き、再び追隨外交奴隸外交の昔に戻り、支那に恨まれ、世界の物笑となつてもよいか。この一大疑問に答ふるには、即ち先づわが國が會議において、如何なる提案をし、如何なる經過を經、それが果して利益であつたか、不利益であつたかの實際の利害から、明らかにするがよからう。蓋し如何なる大局論も、利害の打算と一致せぬ限り、勿論何の價値もないからである。

大體において、日本の立場から見た關税會議の經過は、最初の一ケ月だけは、最も光輝ある時代であつた。それはいふまでもなく、開會劈頭に支那が自主權の回復を提唱したのに對し、日本は直ちにこれに贊成して、支那の好感を博すると共に、列國の意表に出で、翌十一月の十九日に自主權決議案の提議に際しても、英佛諸國は極力妨害運動を試みたに拘らず、日本はまた極力支那を援助して列國に周旋し、見事にその通過を見、事實において會議をリードし得たからである。その以後約二ケ月の間は、その光輝を失して困難の時代であつた。十一月の末郭松齡の擧兵について、日本の一部では、張作霖を援助せんとする企てがあつて、著しく支那の疑惑と反感を買ひ、會議に對する日本の立場も、非常に不利益の影響を受け、折角博し得た支

那の折衝も、これが爲多大の打撃を蒙むつた。それに、日本自ら招いた會議外界からの打撃と影響とであつたが、この内部における日本の立場も、本質的に種々の弱點と短所とをもつてゐた。

第一はその過渡的中間税率の問題に對し、支那は收入本位により、普通品に五分の附加税、即ち現行率五分並びに子口半税の二分五厘を加へ、併せて一割二分五厘、酒煙草を除く一般奢侈品に二割、即ち同上併せて二割七分五厘の高率を主張した。これに對する日本の弱點と短所とは、所謂わが産業貿易に急激な變化を受くることを懼るゝ爲、最低二分五厘と最高五分の附加税、即ちワシントン協定と同樣の税率を維持せざるを得なかつた。一方には自主權を最先に贊成し、一方にはワシントン協定を維持することは、勿論大なる自家撞着である。それ故、折角自主權を率先贊成しても、支那からは非常の疑惑と非難とを被むつた。日本はまたその一面において、支那が自主權を回復し、國定税率を實行し得る以後に、わが産業貿易に與ふる危險防止の爲互惠税率の協定を提議したのであるが、それも自主權容認の代償的形式であつた爲、同じく支那の疑惑と非難とを免れず、幸ひに公文の交換は了しても、實際の進行には、最善の機會を逸することとなつた。

第二に於ては[illegible]中、その債務整理に熱心でであつた。日本はこれが爲、同時モラトリアム案を提議し、自國の利益を犠牲にしても、支那の財政を整理し、その政府の信用を確立してやらうといふその動機も精神も、誠に立派なものであつた。しかし、その裏面には、支那の無擔保不確實の外債四億萬圓中、日本のそれは約二億六千萬圓、即ち半額以上に達し、その中には、かの西原借款の如き政治的性質の不良借款をも含有してをる。一方には、財政上よりかく多額の借款支拂を要求し、一方には前述の如く經濟上より税率の引上げには反對せざることを得ぬ立場に在つたわが日本が、折角案出したモラトリアム案は、勘定も合はねば顏も足らず、これもまた甚だ不評判であつた。

八

以上は主として支那に對する日本の立場であつたが、この日本の弱點と短所とは、英米其他に取つては、唯一の強味と長所とであつた。自主權を除いた附加税率問題の關する限り、彼等はわが日本と對支貿易上の利害を異にし、隨て日本で心配してゐた通り、自國に取つては餘り痛痒を感ぜず、そして支利益になるやうな税率案を提議した。即ち英國は過渡期

加稅として、普通品五分、即ち本稅五分、子口半稅二分五厘を併せて一割二分五厘、酒煙草以外の一般奢侈品に七分五厘、即ち同上併せて一割五分を課せんとする腹案をもつてゐた。米國は平均一割二分五厘以下即ち同上併せて二割の差等稅率案を提議し、佛國も大體これに贊成であつた。右英米二案は支那案と共に、わが對支貿易上死活の關係ある普通品にも、致命的打擊を與ふる性質のものであつた。英米はよし自主權には反對しても、ワシントン協定以上の稅率を提案し、支那の歡心を迎ゆると共に、日本の利益を抑へんとするであらうとの豫想が、前以て識者に憂慮せられてゐた通りであつた。

かくして日本の立場は、附加稅率問題も、債務整理問題も、著しく不利の境遇に立たされて、自主權贊成によつて折角支那の好感を博し得たものが、今度は却つて寄菜に蠅のやうな苦悶を味はされた。先きの光輝ある時代に反し、暗憺たる時代に陷つた。それは昨年の十一月十九日に、自主權決議案が通過してから、會議の議事が稅率とその用途の問題に這入つてから、わが佐分利委員が一時歸朝し、案を構へて、再び會議に臨んだ本年の二月中旬までのことである。然らば、わが國は何故かく窮境に陷つたか。

そもそも、ワシントン協定の範圍を脫出する支那の自主權回收を、日本が最先に贊成して置きながら、たとひ中間稅率でも、尙該協定の附加稅率を固執せんとするとは、自家撞着であるが、それは已むを得ぬ苦衷からであつたとしても、日本はその困難を脫却する爲にも、最初から差等稅率と互惠協定とを、同時に併行して提議すべきであつた。わが日置全權は、會議の劈頭成程互惠協定と、差等稅率とを提議はしたが、それはその何れかを撰擇せしめんとするオルタネティーヴのものであり、且その差等稅率も、平均一割二分五厘を越えずとの姑息な提案であつた。われ等は、會議開催以前から、自主權容認に伴ふ右の二原則を、熱心に主張したものであつたが、わが外務省の見るところは、そこに及ばなかつたらしい。それには、所謂わが產業貿易に與ふる急激の變化を恐るゝといふ上に、餘りその頭腦を固着せしめ、さなきだにその融通力を失つてゐた爲に、差等稅率の階級範圍を思ひ切つて廣くし、上の方では、高率な奢侈品の課稅を重くし、下の方では、低率な普通品の負擔を輕くし、日本の貿易に有利な地步を占むると共に、支那の關稅收入をも增加してやるといふ極めて見易き道理にも、考へ及ぶ餘裕がなかつたものであらう。

そしてその外務省と對峙して、所謂出納に吝なる大藏省の有司があつた。彼等は常にわが產業經濟のあらゆる國家政策を、

主としてたゞ國庫會計のフヰスカルの見地だけからの外、見ることを知らぬ連中である。從つてたゞわが對支借款就中所謂西原借款の回收にのみ、その頭腦を集中し、支那の債務整理案には、一歩もその主張を讓らなかつた。こゝにおいて、稅率の增加には困るといふ外務省と、借款は取立てるといふ大藏省と、內部では互ひに相爭つてゐながら、その双方共に、外部の支那と列國とに對しては、日本の主張は、結局勘定も足らなければ、錢も足らずといふ內外二重のヂレンマに立たされた譯である。

九

然らば、その對內對外の救濟策は、如何にして講ぜられたか。この日本の窮境、即ち會議の難局は、前述の廣義な差等稅率案と、その稅額の按排によつて得た增收を、債務整理に振向けて、その困難を救濟しやうといふ腹案が、何處からとなく案出された。それが即ち後に支那から提出の形ちを以て現はれた七級制の差等稅率案である。その案出は、自主權決議案の議定されてから、この問題の爲に會議が行惱んだ後の年末年始の頃であらう。その前にも、先きに述べた英國案のやうな三級制のものもあつたが、右の支那案七級制によれば、即ち最高の(甲)二割七分五厘、(乙)二割二分五厘、(丙)一割七分五厘、(丁)一割二分五厘、(戊)七分五厘、(己)五分、(庚)二分五厘として、品目を百三十八項目に分つものである。これによれば、後に詳細を再述する如く、わが對支貿易品、就中その重要商品たる綿製品の如きは、大體二分五厘の增率に止まり、即ちワシントン協定の適用と同律なことになり、其他は一部の雜貨品、水產品等が、五分乃至それ以上の增率となるだけであつて、それも品目の分類と、互惠條約の訂立とによつて、幾分その不利益を調節することも出來るのである。そして一方には、主として外國品によつて負擔さるべきそれ以上の稅收とを合せて、債務の整理に向け、最多額を占むるわが對支債權も確保され得ることになる。日本は元來自ら進んでそれ等の提案をすればよかつたのであるが、會議根本の重要條件たる自主權の認容に伴ふ差等稅率、互惠條約、債務整理の原則だけは、不徹底ながらにも、兎に角日本のデヴァイズと、そのイニシエティブとによつて、支那と列國とを動かし、日本もまたこれによつて、自らを救濟し得ることとなつた。この原則を横へ得ただけでも、支那の爲日本の爲劃時代的に根本重要の一大成功であるが、それには外務省も大藏省も、商工その他の各方面も、勿論その功勞を認められねばならぬ。殊にわが出先きの全權や委員が、その調査立案において、常に各國に先んじ、啻にこれに敬服し指導されてゐたことと共

に、同時にわが特殊困難な立場に同情し諒解せしめ、寧ろ頗る有利にその局面を轉回し得たとは、正直にいふて、我が國民において、これを多としてやらねばならぬところである。

一月中旬わが佐分利委員が、北京を離れて一時歸朝の途についたのは、右の轉換策が外務省關係者と、大藏省その他との間に、出先きだけでは久しい間、到底圓滿な協定を得なかつた爲、特に本國政府に復命し、その最高決定を仰ぐ爲であつた。この出先きの確執と本國の過怠の爲、前後二ケ月に亘つて會議の進行を鈍らし、その間にも戰局政局の影響を受け、つひに四月十日段祺瑞最後の失脚によつて、會議もまた最後の行詰りとなつたのであるが、二月中旬佐分利委員の北京歸着後一時の間は、右の轉換策によつて、暫らくまた晦暝の時代から、たとひ暫らくでも、稍や光明の時代に立返りつゝあつた。

十

けだし、日本のいはゆるモラトリアム案なるものは、これまで述べて來たやうに、一面においては、わが貿易に急激な變化を避くる爲、中間稅率にはワシントン協定の二分五厘と五分の附稅を維持し、それによつて四億萬圓以上に上る支那の外債を整理してやる爲に、最初六年間の元金据置と、利息の遞増により、約二十年間に償却を了する方法を提議したのであつた。しかし、附加稅増收の用途は、支那側の要求では、厘金廢止、外債整理、中央政費、鐵道その他の建設費等約一億萬圓を要する勘定であつた。その中建設費だけは、列國もこれを認めてやらぬにしても、日本案の二分五厘及び五分の増收だけでは、僅かに三千數百萬圓にしか達せぬ豫算であるから、勘定の合はぬ譯である。日本が何故かゝる提案を携へて、會議に臨み且これを固執したかは、前段所述の理由以外、全く不可解な謎である。

佐分利委員が北京に携へ歸つた修正案は、即ち二分五厘と五分の附加稅は、中間稅率適用に至る迄の暫々行稅率として、別にこれを認め、その中間稅率は改めて七階級の差等稅率案に贊成することとしこれによつて、年額約七千萬元を増加せしめ、その內譯を內外債不確實債務の整理、厘金の廢止及び中央政費に振向けることとし、その結果は當然にモラトリアム案を撤回するといふのであつた。これによつて、久しく行詰り同然であつた會議も再開され、日本の立場が救濟されたと共に、會議もまた同時に救濟された。しかし、それも僅に一時のとで、それから主として英國と日本との對抗時代に入り、自來その對抗が持續して、その間隙が擴大され、つひに今日の會議中止となつたのであるが、その日英の不一致は、主としてわが佐分利委員歸任の時期を以て、その分水嶺として始まつた。

同委員が歸任以後の一月十八日に、會議は再開されたが、この時支那は過渡期間の附加税、即ち七階級の差等税收入見積表を提出しその收入合計約九千萬圓を計上した。その税率は後に至り、日英米三國委員の手で、多少の修正を加へられ、結果は著しく日本の利益となつたが、それは後にこれを說明することとし、兎に角、その差等税率案も、大體において支那と列國とで、その原則を承認することとなつただけは、こゝにこれを特筆して置かねばならぬ。またそれによる收入の約九千萬圓も、これを以て略ぼ厘金廢止、債務整理及び中央政費の基準とすることに決定し、日本もその七千萬圓說を讓歩して、これに同意した。その九千萬圓說は、最初から英國の主張するところであつたが、日英の對抗も、結局この九千萬圓の用途問題が、その原因となつて、つひに決裂を見る譯となつたのである。

十一

二月十八日の會議においては、支那は別にワシントン協定による普通品二分五厘、及び奢侈品五分の附加税實施に關する要求を提出した。支那としてこの要求を提出したことは、既にワシントン協定の範圍を脫出した自主權回復を主張して置きながら、今また同協定による附加税の實施を要求することは、主義に於いて一大矛盾であるが、しかし、自主權回復に伴ふ國定税率、及び中間税率の實施には、列國政府の批准を要し、ワシントン協定には、各國全權の調印のみにて批准を要せぬことになつてをる。もし批准を待てば、その實施は一年先きか、二年先きかも豫期することが出來ぬと共に、二分五厘と五分の增收をも得ることが不可能となり、それだけ支那の損失となる爲に、實際上已むをを得ぬ關係から、かゝる窮策に出でたものである。そうして、その事がたま〳〵、英國に好個の口實を與へつひに同國全權は、このワシントン協定だけに、關税會議の議事を止め、これによつて自主權問題の討議を打切らんとする手段に供せしむることともなつた。それがそも〳〵日英對抗戰の新たな原因であるが、その對抗戰を助けたものに、尙關税用途の問題とその保管の問題とがある。その用途の問題も、國定税率施行に至るまでの過渡的中間税率の收入用途と、ワシントン協定の附加税による收入用途の二ツがあり、保管問題も同様に二つがあり、そのおの〳〵が一緒になつて、更にます〳〵その對抗戰を紛糾せしめ、深酷ならしむるに至つた。

用途即ち附加税の增收を、厘金廢止及び中央政費に振向くる外、その一部を債務整理に充當するについては、日本と英國との間には、その順位論について、根本に意見の相違があつた。

日本の意見としては、支那及び列國の間に一致した内外債總額約八億萬元、その内外債約三億萬元中の無擔保借款については、日本は一切平等にこれを支拂はしむる主張を以て、一貫してゐる。それは、日本の對支借款は、外債總額中の約半額以上を占めてゐる、そして、その中には所謂西原借款のやうな不良性の政治借款を含む弱點を有するからである。これもわが大藏省が、その財政的見地からの主張であつて、外務省も勢ひこれを支持して行かねばならなかつた。然るに英國はその無擔保借款中、第一に鐵道材料の如き賣掛代金、第二に鐵道借款のやうな經濟借款、第三に西原借款のやうな政治借款を償還せしむる順序を主張してゐる。しかも、それは先づ關税總收入中から、(一)關税徴收費用を差引き、(二)義和團賠償金の樣な關税を第一擔保とする借款(三)、厘金を第一擔保とし、關税を第二擔保とする津浦滬杭鐵道借款のやうなものを支拂はしめたその最後に、前記の無擔保借款を償還せしむる順序とするのであるから、わが西原借款のやうなものが仕拂はるゝとは、二十年先きか、三十年先きか分らぬことになる。これ少くともわが大藏省の堪へ得るところではない。」

十二

この關税用途の問題は、昨年開會の間もなく、既に英國の意見が、さうであることが知れ將來に紛爭の種となるものとせられてゐた。然るに前記の二月十八日、支那からの提案があつた後、英國は果して用途問題につき、難題を持出した。それは(一)津浦、滬寧兩鐵借款は、厘金が廢止されたら、關税收入から支拂ふ契約であるから、附加税收入から約一千萬元をこれに充つると(二)その他の鐵道借款は、普通借款と切離し、別にこれを償却せしむる爲、更に一千萬元をこれに充つること。(三)厘金廢止には、一般附加税の上に、その四分の一に當る特別附加税を課するとの三ケ條を提出した。前の二ケ條は、英國從來の意見を、公然提議したものであるが、その結果新たに二千萬元を要することとなるから、附加税增收による九千萬元の用途が、それだけの違算を生ずることになるから、新たに附加税の上に特別附加税を課するといふのである。それでは日本の平等無差別主義が、根本的に破壊さるゝ上に、七階級の差等税率も、互惠税率も、皆な四分の一、例へば七分五厘の最低率も、特別税二分五厘を課せられて、併せて一割となることになる。これ日本のやうな支那に最多額の貿易品を輸出するものに、その負擔を轉嫁して、英國の借款を支拂はしむると同然な結果となる。會議以前から、日本と利害を異にする英國は、税率の引上げをば餘

り意とせず、鐵道の建設、若くは借款の取立てに重きを置き、その結果、日本は不利益の位置に立たしめられるだらうとの懸念があつたが、事實その通りになつて來た。しかして、英國の主張には、その他の諸國も大體これに贊成であつた。

上に述べた英國の提議の內、鐵道借款にして、厘金を擔保とするものは、その廢止によつて保障を失ふから、關税收入を以て、その優先權を與ふると共に、日本も已むを得ず讓歩したとも傳ふる。しかし、その他の債還順位については、日本は容易に妥協の道はあるまい。その用途の問題は、獨り中間税率だけでなく、前述の如く、ワシントン協定の一時的附加税の上にも、同樣の關係をもつてをる。そして、もし英國の底意の通り、ワシントン協定だけで、この會議を打切ることになれば、その增收支途の問題は、その現狀維持の協定と共に永續し、またもし、自主權回復による差等税率が行はるゝやうになつても、果して厘金廢止が行はれず、從つて國定税率も行はれぬ場合には、少くとも英國は、その差等税率を永續さする考へでをるから、何れにしても、その用途の問題中、債務整理の順位に關する日英兩國の紛爭は、ます／＼その重大性と深酷味とを帶びて行くことになるのである。

會議はかくして日本と英國その他との間隔が、漸次擴大されつゝある間に、ワシントン協定による附[illegible]、ここで良[illegible]期日を[illegible]主義にするか、到着主義にするかについて、比較的重要でない問題にも、支那を中心に、近い日本と遠い歐米との間に、その利害を爭つて、火花を散らしてゐたが、こゝに英國に取つて、重大な問題が起つて來た。それは即ち關税保管の問題である。支那はその關税收入を、自國の中國交通の兩銀行に預け入れ、しかしてその保管を債權國の銀行に托する提案をした。その上に尙ほ漸次税關の監督權を回復する爲、關税務司以下に支那人を採用せんとする意見をも公にした。これ英國に取つては、その税關のストロング・ホールドを、根柢から搖撼せんとするものもあるから、かねて豫期したことではあるが、今更の如くに、その警戒を促がし、ます／＼自主權回復の爲の關税會議を打切つて、ワシントン協定に止むる考へを固めさした。

この關税保管問題については、日本はワシントン會議以來、貿易額によつて、關税を保管すべき希望をもつてをり、國論もそれに一致してをるのであるから、新たに支那と英國との外に、日米佛白伊荷の各國銀行をして、その債權額に應じ、これを預かり且保管すべき提案をした。關税會議打切りについては漸次英國と同樣の底意をもつて來た各國も、この問題は各自利害の關するところであるから、英國自身の反對があつたに拘

ず、その非公式委員會で贊成した。

十三

この日本の提議は、支那の提案より後のことであるが、これより先き四月十日、永らく動揺不定の間にあつた段祺瑞の政府は、國民軍のクーデターによつて、段自身の沒落より、ついにその政府の倒壊となつた。その前から黄郛、王正廷の兩委員は、既に北京を去つて、支那側との會議を開くことも出來ず、列國だけの非公式會議をつゞけて來たのであるが、英國は時こそ來れと、その前日の列國會議において、いよ／＼打切りの口吻をもらした。同時に英國全權のピール、スチュアード等からも、支那の政局が今日の狀態では、非公式會議を重ねても、結局徒勞に歸するから、大綱だけを列國間で協定し、新政府樹立の上、その同意を得ればよし、さもなければ、寧ろこれを中止したしとの意嚮を暗示し、彼等はそろ／＼歸り仕度を始めた。日本政府の意見は、政局の困難は、如何ともすることが出來ぬにしても、會議は飽迄これを繼續し、單なる夏期休暇はしても、秋冷を待つて再開し、先づ列國側にて全部の議案を議定し、支那の成行を見ることとし、會議の打切りは勿論、その中止にも絶對反對である旨の訓令を、わが全權に與へた筈である。

然るに、その後國民軍は北京を退却しても、吳佩孚張作霖は容易に入京せず、內閣の總理も極らなければ、顏惠慶は、總理辭職と共に、委員の地位も去留さへ明かならず、たゞ一人の委員となつてゐた蔡廷幹の如きも、同樣の狀態である爲、ますます英國の口實を强からしめ、つひに米國その他も、英國に引摺られて、日本は漸次孤立とならしめられた。その後五月廿九日、六月十日にも、列國會議を開いたが、休暇か中止か打切りが、その主なる問題であつた。そして英國側のワシントン協定と、自主權回復に伴ふ諸問題とを分離し、今回はこれを前者に止むる說に對し、日本はその總べてを、一體不可分のものとして、正面衝突をするやうになつた。

英國の可分說は、少くとも、自主權回復に伴ふ附加稅の用途決定と、更にこれに伴ふ關稅保管問題により、稅關の獨占權を犯さるゝことを防ぐ爲、今回の會議をワシントン協定に止めて、これを打切らんとするについて、その口實とするものである。これに反し、日本としては、差等稅率の創始と、その收入による債務整理、及び國定稅率實施の爲に備ふる互惠條約等は、これをワシントン協定に止めては、全部わが根本の主張を覆へされ、その成功を害はるることとなるのであり、且つワシント

ン協定の議決も、自然これと相關聯し、これを以て一箇の基礎となすものとあるから、勢ひその不可分說を以て、死活の爭ひをせねばならぬことになるのである。從つてまた一たびその會議を中止してしまつたら、いつまたこれを再開することが出來るやら分らず、九仞の功を一簣にかぐこととなるから、打切りは愚か、中止でも、死力を盡してこれを爭はねばならなかつた譯であるが、七月三日最後の會合で、打切りも同然である中止の共同聲明に、わが兩全權が署名するに至つたのは、果して如何なるいきさつからであつたか、われ等に分らぬのみならず、わが外務省にも善くは分らぬやうであるから、これ程不思議なことはあるまい。

十四

成程われ等も英國その他の立場を理解せぬでもない。たとへば、ワシントン協定にしたところで、これを列國限りの會議で議決し、支那に押付けて見たところで、これに調印する政府もない。さりながら、この會議は元々ワシントン協定の爲に集まり、また英國がそれ以上の協議には、あづかりたくない留歩をしてゐても、現に英國の三全權は、その以外の自主權決議案にも署名をし、今日までこれに伴ふ諸問題にも參與して來てゐるではないか。これを自國に[illegible]譯とは拘束にも程がある。[illegible]三全權[illegible]後の行動を分離することが出來るか。且最後に批准するとせぬとは、本國政府の勝手である。全權として會議に臨み、既にその議事に參與した以上は全部の議を纏めて、相手の出來るのを待てばよいのである。それも見込がないといふなら、全部の議決を記錄に上せ、これを將來に殘せばよい。また支那の政府が、正式であらうがなからうが、確實であらうがなからうが、それは今更問題とはならぬ。段政府は始めから正式でもなく、確實でもなかつた。まして吳佩孚や張作霖は、軍閥の巨頭ではあるが、政府當面の責任者ではない。萬一傳へらるゝ如くに、吳張の兩人が各公使館を歷訪して挨拶もせず、依賴もしなかつたといふことが、急に會議中止の共同聲明となつたとすれば、これ程間違つた馬鹿げたことはあるまい。わが兩全權は、何故これを以て爭はなかつたか。

しかし今更これを咎めても及ばぬが、兎に角全部の經過は、從來發表された報告により、略ぼ以上詳しく述べた通りであらう。これによつて見ても分る通り、今後の復活は、決して外務省のいふが如く容易なものではあるまいと、われ等は思ふ。それは少くとも英國が、始めから自主權問題に觸れたのを喜ばず、そしてその結果、稅關の獨占權を犯さるゝことを恐れ、殊更

會議の事項に難題をもちかけて、わが日本を困らせやうとした上に、つひに口實を支那の時局に借つて、中止の宣言をした位であるから、その再開は容易でない。殊に彼等は、聲明の表面は兎も角も、特に正式の政府や堅固な政府の樹立を以て、所謂時局の安定を見るのであるから、かゝる時局の安定は、當分の支那に望まれぬと共に、彼等が再び支那に歸るとも、また當分はこれを望まぬ譯である。よしまたその再開が出來たとしても、日英意見の差は、既に根本的本質的のものであつて、その利害感情は、直角的に相容れぬものであるから、その圓滿な進行と解決とは、容易に期待し難い譯であるとが、十分明白になつたらうと信ずる。

十五

然らば、日本としては、今後果してこれをどうすればよいか。このまゝ泣寢入りに終るか。それとも別に方法を講ずるか。それには先づ大體會議の結果が、われに利益であつたか、不利益であつたかを見ねばならぬ。それも上述したところによつて知らるゝ通り、支那の次ぎには、最もわれに利益であつた。支那の利益は、殆どわれと一致した。それゆへにこそ、列國の反對である。列國の反對は日本の勝利と見てもよい。支那と日本の利益の第一は、兎に角支那に自主權の回復と、これに必要な原則を、日本の手によつて教へ、しかしてまたこれに伴ふ手段を、會議の上において、日本にも教へられたことである。由來對支貿易の關稅問題は、總べて國際團體の會議によつて決定せられ、就中先進國としての英國の獨占であつたから、わが國は肝心なその智識と經驗とを得ることが少なかつた。然るに今度は、自主權の回復以下の諸原則は、主としてわが自身の工夫發明に係り、これに必要な諸種の考案と材料とは、多くわれにおいて準備し、しかしてその實際においては、各國との折衝によつて、その缺陷を補ふところが多かつたから、政治の大局においては、所謂自主的外交より專門の技術においては、稅則の決定に至るまで、わが政府と委員とに對し、眞に偉大なる教訓と體驗を與へた。

それは主として間接的抽象的の利益であるが、われ等はこゝにその最も重要なる直接的實際的の利益を擧げねばならぬ。日本が支那の關稅會議に對し、提議した三大原則は、自立權の回復と、これに伴ふ差等稅率、互惠條約及び財務整理であつた。その外厘の廢止は、日本の必須條件ではなかつたから、こゝにこれを省くが、兎に角それを併せたものが、即ち關稅會議の最重要なバックボーンであつた。會議の全構設は、これによつて樹立され、維持され、しかしてその基礎をなしたものは、また

わが自主權の確認が成つてをつた。支那も日本によつて支持され、列國も何といつてもまた日本によつて指導された。世界に對する自主外交も、支那に對する經濟提携も、共にその礎石をこゝに横へ、よし會議は中止され、失敗に終らうとも、この顯著なる事實は、永久に消滅する筈はない。

次に差等税率の設定は、數十年の傳統たる支那の均一的税則を破つて、差等的税率を採りその必要なる普通品には、最低の税率を課し、然らざる奢侈品には、高率の負擔を命じ、支那の國民生活の爲、政府收入の爲、無限の功德を垂れた。同時に日本の爲には、その對支貿易品が、多く日用の必要品に止まる爲、これまたわが國のみが主として莫大の利益を受くることとなつた。この見易き道理で、しかして行はれ難かつた事實が行はれんとしたるも、またわが日本の力である。殊に七階級制の附加税率案出の爲、將來もしその實行を見ば、日本の主要産業たる綿布綿絲類を始め、輸出價額の最も大なるものは、大體最低率二分五厘、即ちワシントン協定の場合と同じく、正税と共に七分五厘に止まり、日本の總貿易額中の約六割を占むる勘定である。就中綿製品は、昨年度の對支總輸出額五億八千萬圓に對し、二億五千萬圓、即四割三分占めつゝあるのであるが、上等品を除く外、皆なこれに包含されることになつてゐる。その他附加[illegible]何れにも包含されるものにて、[illegible]は最低率を課せられ、たゞ一部の高等雜貨等が、已むを得ず一割以上を課せられることとなるのであるが、兎に角この税率が採用せられたら、わが國の受くる利益は、何れの國よりも大きい譯である。この差等税率は、支那の提案を日英米三國委員の手で協議決定し、たゞ日本と餘り關係のない最高税率を少し引下げただけで、その他に前提案通りで、目殆ど確定的のものであつた。

十六

次には互惠協定のことであるが、これは將來支那が前記の差等的附加税を廢し、いよく國定税率を行ふ場合、工業國たるわが商品に高率の課税を受くる危險を保障し、農産國たる支那よりは食料原料の輸入を容易にして、相互の利益を圖り、所謂經濟提携の實を擧げんとするものであつて、わが國ですら、眞の意味におけるかゝる互惠條約は、未だ何れの國とも締結したことがなく、それが今度われと死活の關係に在る支那との間に行はれんとするのである。これ全く日本が單獨に自ら進んで支那の自主權回復に同情しこれを援助したが爲であつて、支那の全權委員は昨年の十一月十七日、自主權決議案に關する列國との委員會において、一旦これを承認し、その後本年の一月廿七日、外

交部とわが全權との間に、これに關する公文の交換を了し、ただ細目の協定に至らざるのみである。列國もその原則を認めこれに均霑せんとしてをるが、大體において各々支那向商品を異にすると、更にその品種を細別することになつて、均霑の損失を防ぐことが出來やう。この互惠協定に含まする日本の商品は、未だ正確なことを知ることが出來ぬが、品種は多くすることが出來ぬとも、主要なる商品に對して課税を低率にし、しかしてその税率は、ワシントン協定の二分五厘の普通品と五分の奢侈品、並びに過渡的附加税の差等税率及びその分類を、その基準とするものであるから、この點からいつても、次の債務整理と同じく、おの〳〵不可分の關係をもつ理由となるのである。

次にはまたその債務整理の問題であるが、これは既に前段でその數字等をも擧げて置いたが、原則としては、特に貿易品に對する税率を引上げ、そして、政府軍閥の不良借款や、資本家の不鮮な借款を整理してやることは、即ち製造貿易業者と、一般國民の負擔となり、且寧ろ前者の過失を助長する結果となり、借手たる支那に對しても同樣であつて、元來われ等は餘りそれに賛成が出來ず、その點だけは寧ろ英國にも理屈があると思ふ。しかし、支那の事は、總理ばかりも行はれず、その政府の爲には、それによつて財政の根本を立てゝ、その信用を回復してやり、同時に列國の民間金融をも救濟し、善良なる投資企業を奬勵してやることも、結局彼我の爲であらう。就中わが國は、政府民間共その最多額を占むるから、債務整理の實行により、同時に最大の利益を占むることになる。これ即ち英國等の反對があるゆえんであるが、同時に日本はその最多額の貿易に課せられた關税を以て、少額の英國對支債務を拂つてやることにもなる。支那に對しても、西原借款兵器借款の如きものを、その性質を分たず、全部の返還を求めることは、わが國民においては、尙考慮の餘地があらうと思ふが、しかし、それによつて、一時に其元利は返却されずとも、二十年か三十年の長期に亘り、漸次に償還され、その間は支那政府公債の發行により、これを資金化する利益もあるのである。

最後に厘金廢止のことは、これも會議の重要問題ではある。もう、この義務を支那が實行せぬ場合は、列國中國家税律の實施、即ち自主權の回復を認めぬといふ解釋を取らんとするものもなる程の重大關係である。わが國は最初から、これを必要條件とせず、且厘金撤廢の利益は、支那と列國の爲に利益であるとは勿論であるが、同時にその弊害中、税率の多寡の如きは、裏一般に想像せられる程、苛酷なものであるかといふ疑問もあるから、われ等には、これも債務整理と同じく、特に税率を引上げ

て、その撤廢の費用を負擔する必要と利益とがあるかを疑つてゐる一人である。兎に角、大きな疑問ではあるが、その廢止實行が出來たら、勿論それもこの會議の與ゆる一大功績である。

十七

以上は勿論一つとして最後確定を經たものはないが、しかし、英國の反對した債務整理や、關稅問題、庫金問題等の外、中には支那と列國、乃至列國間だけの協議と、その大體の決定を經たものもある。會議がその全部に亘つて、無事なる進行を遂げさへすれば、同時にその大部分は實行の可能性をもつたものである。殊に支那と日本に取つて、特に有利な條件が多いのであるから、われ等は會議今日の運命を痛惜してやむことが出來ない。第三國の人ならいざ知らず、苟くもわが國において、この會議のことを評論せんとする人は、たとひ反對論者でも、先づ如上の經過をたどり、更にその精細詳確なる智識の上に、その基礎をおいて、その評論を進めてもらひたい。それが如何なる場合にも、評論家たるものゝ義務と責任とであらう。

勿論問題はまだこゝに盡きず、われ等の知るところ、言ふところにも、限りがある。會議の問題中、例へば外人の課稅、沿岸貿易稅、及び內地輸出稅の廢止、從量稅率の改定、並びにわが國に直接の關係ある大陸關稅割一、即ち安東縣等の三分一減稅の廢止等の問題が、尙ほそのまゝに殘されてをり、その內には、日本及列國に取り、不利の影響を受くるものも勿論少くはない。わが國にも、この不利をたゞ[illegible]のみを見て、[illegible]な考へをもつ人は、勿論少くない。或は支那內狀の混亂と、わが政府の失敗を爭ひとし、殊に自主權の贊成に、不平と反感とをもち、會議の中止乃至その打切りを當然だとして、公然これを愉快に思ふ人もあらう。それはその人々の自由であるが、たゞ一言をしたいのは、然らばその人々が、どれだけ事前において、この會議を中心として、總べての問題にあらゆる考察を加へ、そしてその具體的な反對意見の發表をしたかといふことである。最初か中程にか贊成し、そして今頃に至つて反對する人があれば、それは問題の外である。

また中には、全くまじめに、支那の內亂と英國の陰謀の爲、わが政府が失敗して、關稅會議が中止になり、一層そのまゝ打切りとなつて、その結果ワシントン會議の協定も行はれず、現狀維持の上、現在の現實五分で、何時までも行けるものなら、それにこしたことはないと思ふ人々もあらう。それは寧ろ罪のない方の部で、上方商人にありそうな考へである。しかし、その現狀維持が、果して何時行はれるか。一たび支那の民衆運動に火がついたら、何もかも燒き盡され、万惡も差等もない時の來ることをも考へて置かずばなるまい。

十八

以上で略ぼ會議の經過と、その結果とを、大體盡し得たと思ふ。經過においては、後半はわれに不利益で、英國其他の反對

は、甚だ根強いから、會議再會は思束なく、再會しても日本の成功は、これまた覺束なからうと思はるゝ。これに反し、結果においては、今迄のところ、大體非常に有利であることを斷言し得る。さて最後の問題は、その有利な立場を棄てて、泣寢入りとなり、支那には恨まれ、英米には笑はれたまゝですますかの問題である。實際を離れた大局について言へば、自主か追隨か勇猛か卑屈かによつて、東か西か血か水かを極め、進んで隣國と握手して、日支親善經濟提携の、後頭に毛なく前額にのみそれがある機會を捉ゆるか、それとも孤立無援、イソップ物語りの孔雀の眞似をし損つた鳥同樣、世界の物笑ひとなるかの分水嶺、十字街頭に、わが日本の大衆は立たされてをるものと、われ等は思ふ。その運命を決するには、自らその道もあらう。支那としては、國際關係で法權稅權の改廢を議することを罷めて、これを國別談判に移し、日本としては、當然な問題に對し、誤まつて國際協調の傳統に、捕はれることなく、自國の踏んだ道を隣國に踏ませ、同じく國際談判で、支那と新たな交渉に入ることである。支那にこの覺悟が出來るか否か先決問題だが、支那のことは、こゝに論ずる暇がない。日本としてこの重大な問題を決するには、始めに斷つたやうに、何が故にわが日本は支那の關稅會議に對し、今度のやうな態度を以て臨んだかの、根本大局に溯り、支那と日本とに、新たな勇氣と覺悟をもつ必要から說いて來る必要もあらうが、こゝにはもはやその大局論はやめる。昨年の三四月、上海に起つた事件以後、全國に蔓延した、排外運

動は、今度の會議に支那が自主權を提議した一の動機である。が、自分はそれについて、本誌の九月秋季號に、支那民衆の對外的思想を述べたことがある。それを前提として、日本が自主權を單獨賛成すべき經濟的方面の理由を　翌月の本誌に執筆する約束であつたが、それと同樣のものは、既に九月初旬の東京日々新聞に連載したから、これを斷つた。そしてこれと大體――符合したやうな論旨は、經濟學博士太田正孝氏によつて、同じく本誌の十月號かに揭載されたことがあつたから、自分は內地經濟を何にも知らぬ自分の論旨を、經濟學博士の太田氏によつて、替されたも同然な結果となつた爲、非常にこれを喜んだことがある。で、政治上經濟上から見たわれ等の論旨は略ぼ既にそれ等の文章につくされてあるから、再びこれを繰返すまでもないと思ふ。これを要するに、われ等はわれ等の論旨の幾分かゞ今度の關稅會議に問題として提議されたことを喜び、それがたとひ今直ちに事實として實現されなくとも、また成文の記錄を得てこれを將來に傳へなかつたにせよ、その新原則の力によつて、日支兩國を導びき、その名を『亞細亞』といふ久遠な理想の一大船に上せて、これを太洋に放つた以上、たとひ中途、如何なる風波の難に逢つても、最早や決して後進逆退を許さず、共にその艱難を同くして、何れの日にか、必ず彼岸に達するものであることを信ずる。同時にこの光輝ある出發そのものが、日支兩國と關稅會議の爲に、既に大なる成功であつたと思ふ。

一九一六、七、一二

時評

大都市に於ける選擧

―東京市會議員選擧の跡を顧みて―

吉野作造

去る六月はじめに行はれた東京市會議員選擧の結果に付ては、いろ〳〵の事を考へさせられる。其の一つ二つは既に先きに述べたこともあるが、玆にモ一つ大都市の選擧といふことに就て少し考へて見たいと思ふ。

理想選擧運動の失敗

第一に考へて見たいのは、理想選擧運動の失敗といふことである。今度の選擧は結果から見ると憲政會派の大勝利だが、この事自身の利害得失は姑く別論として、市政に政黨勢力の侵入を許す可らずとする議論のあれ程强かつたのに比して斯の結果を見たのは、餘りに意外な皮肉であつた。政黨勢力の排斥を假りに有識市民の輿論と觀れば、選擧の結果はこの輿論の全然顧みられなかつたことを立證するものだ。よし之を輿論と云ふ能はざりしとするも、兎も角もあれ丈けに强調力說されたことが少しも實際の結果の上に現れなかつたといふことは、到底常識を以て判じ得ざる所である。而も政黨排斥論は一片の議論として唱へられたばかりではない、現に之を目的とした實際運動(即ち土方渡邊兩博士等の主催に成れる)もあつたのだ。それにも拘らずあの結果はどうしたものだらう。理想選擧論の微力なること餘りといへば呆るるの外はない。

元來議論の强く叫ばれた程度から云へば理想選擧運動はもつと盛に各方面に起つても然るべきであつた。況んやその正面の敵たる政黨が臆面もなく堂々の陣を張つて乘り込んで來たに於

てをやり始るに所謂理想選擧論者は八釜しい議論だけで、一向實際運動に乗り出して來ない。斯く實際運動の起りさうで起らないといふことも亦實に理想選擧そのものに取ては一つの失敗と觀るべきものではなからうか。それでも實際に起つた理想選擧運動が一つ位多少の成功を收めたのならまだ諦められる。所がそれがまた散々の失敗ではないか。此前の選擧には投票日の五六日前俄に五人の候補者を立てて二人の當選を見、他の三人も極めて少數の差で落選したのであつた。その成績に鑑み、今度のにはモ少し多くの期待を繫けて居つたのに、未だ陣形をだに整へぬうちに我から倭落してしまつたのは、遺憾を通り越して甚だ見苦しい次第であつた。

何故にあの理想選擧運動は失敗したか。第一には政黨方面から來る流言蜚語に對して其の防衞策を怠つたからである。併し根本の原因は、何と謂つても過分の目標を立ててからだと思ふ。理想選擧とはいふものの、今の所では矢張り相當の金が要る。所がさう無限に金の集まる道理もないから、自然澤山の候補者を擧げるわけには行かぬといふことになる。且つ少い金で出來るだけ多くの投票を集めんとには、餘程人物を選擇することが肝要だ。而して斯う云ふ優れた人物で且市會議員たることを納得するやうな人は、さう澤山あるものではない。此前の理想選擧が存外成功したのは、金も比較的豐富であり、擧ぐる所の人物も擇り拔きの少數であつたからだ。今度は何の見る所あつてかこの方法を採らなかつた。これが實に失敗の大原因であつたらうと思ふ。

斯く云ふと、五人三人の新しい市會議員を送つたツて何になると抗辯されるかも知れない。今日の腐敗し切つた市會の空氣を一新する目的からいへば、五人三人の淸新分子を送るは正に燒石に水だ。併し乍ら效を一時に擧げんと欲せば、所謂毒を以て毒を制するの方法に出づるの外途はあるまい。さうすれば所謂理想選擧も結局三木武吉君あたりのやり口と餘り變らないことにならう。而して吾人の理想選擧を主張する趣意は之とは全く違ふ。すべての道德運動は一步一步を正しく踏みかためて成功を遠き將來に期するものなる如く、一時に實效の擧げ難きは初めから覺悟の前だ。道德運動に在て近視的性急は何よりの禁物と云はれる。今次の理想選擧運動は、この點に於てすでに第一步を踏み誤つたものと私は思ふ。

加之五人三人を出すことを無效だと云ふのも、理想主義者らしくない考方だと思ふ。機械的に觀れば五人三人は物の數にも足りない。併し其人の識見才能次第では、遠からず暗々裏に一種の威力を占め、それが何かの機會にあらはれぬとも限らな

い。況んやこの五人三人の選擧成功の市民一般に及ぼす精神的影響に至つては、實に測る可らざるものあるべきに於てをや。

故に私は思ふ。今次の理想選擧運動に在ても、前回の如く少數の人の間に金を集め少數の候補者を擧げて其の選出に全力を傾投したのなら、前回にまさる見事な成功を收め得たであらう。政黨者流などから惡辣な流言を放たれても、十分に之に應ずる餘裕もあつたらう。而してその成功は一般市民の心理上にまた偉大なる影響を與へたのであらうと。事の茲處に出でなかつたのは、返す〳〵も私の遺憾とする所である。

大都市に於ける選擧の特質

然らば次に問題となるのは、今次の理想選擧運動の樣なやり方は何故失敗すべき運命にあるのかといふ點である。之を精密に考へると、こゝに私は圖らずも大都市に於ける選擧に一の特異なる性質のあることを發見せざるを得ない。

一體今次の理想選擧運動のやり方は、（一）全市に亘りて普ねく理想候補者を立てること（但し既に立候補せる者の中然るべき人物ある場合は之を助くる）、（二）之に必要なる資金はまた普ねく全市の有志家より醵出すること、の二つの基礎の上に立つものであつた。此目的を以て發起人は各區より代表的人物とも見るべき者數十名を招いで相談を持ちかけたのであつたが、結局議論倒れとなつて未だ成立せざるに見苦しき往生を遂げたことは、人の知る通りである。一寸聞くと筋は通つて居る。心ある市民は誰一人として市政の現狀に滿足して居ない。之を郭淸しやうといふ運動に異議のあらう筈はない。之が爲に若干の費用が要るのは勿論で、之を出し惜むやうな人はあの腐爛れの中に一人もなかるべきことと亦疑を容れぬ。さすれば發起人の提案はわけもなく採用される道理だのに、事實筋書通りに運ばなかつたのはどう云ふわけか。こゝを我々は能く考へて見る必要があると思ふのである。

此點を吟味するに當て我々の特に注意すべきは、其場で反對を唱へた人々の議論が直に本當の理由だなどと速斷してはならぬことである。固より之を無視すべきではないが、人にはよく自分の腹に思ふことを表面は他の言葉を以て說明するといふこともある。識て之を云ふ場合も少くはないが、識らずして之を僞す場合はとくに多い。蟲齒やみは恐しい痛みに苦みながらも、どの齒が惡いのか一寸自分では分らぬといふこともある。そこで今度の理想選擧の場合でも、其處に集つた個々の人の說明ばかりに賴つてはいけない。その外全體の事態を通視して、なぜあれ程切實な理想選擧の提唱が實際に物になり得なかつたのかを、冷靜に考ふる必要があると思ふのである。

そこで私の考はどうかと云ふに、列席した人のすべては、主意には誠に賛成だが、さて自分の區に歸つて之を區民に徹底させる見込はあるかといふに恐らく全くないと考へたであらうと思ふ。この悲觀的潛在意識が實に熱情を以て發起人の提案を迎へ得なかつた根本の理由ではあるまいか。考へて見れば、相當に顏の賣れて居る且つ共通の敎養と誠意とを有する紳士を會してすらが議論は紛々だ。平素顏を突き合はしたこともない目敎養も利害も懸け離れた多數の區民を雜然と集めたところで――實は集めやうもなかりさうだが――何と話の纏めやうがあらう。是れ大都會と田舍などとの生活關係の全然異る所より來る當然の結果で、如何とも致し方はない。田舍などで始めて出來ることを共儘大都市に持ち込まうとする所に、實は根本的のあやまりがあるのだと思ふのである

地域代表主義は大都市の選擧には駄目　一體今日の選擧には、國會議員でも市會議員でも、選擧區を小さく分て居る。即ち市會議員は東京全市を代表する者だけれども、便宜上各選擧區に於て之を選ばしめる。即ち各區何人の選出といふことになつて居るが、併し理屈は、或る區から選れた人は區だけを代表するのではないといふことになつて居る。そんなら全市を代表すべき者をばなぜ小さい區を限つて選擧させるのかといふに、餘り廣く區切つては人物の選擇が出來ないからである。固より例外はあるが、大體どんな人物が適當かは、日夕交通する人の間でなければ能くは分らぬものだ。日本橋にも適當な人は居らう。が、深川にも居ないとは限らぬ。併し深川の人のことは日本橋の人には分らぬ。能く知り合つた同士で日本橋から何人深川から何人と區を分つて選ばした方が、結局人才を得る所以であるといふのである。之を地域を基礎とする選擧主義といふ。即ちどんな基礎の上に選擧民を分けるのが一番選擧の目的を達するかといふに、そは土地に依つて分けるのが一番いゝと云ふのである。併し乍ら之は、人間の生活が最も深く土地に繋つて居た時代には都合がいゝが、人間の生活が、土地を離れて來ると、少くとも土地との緣が段々薄くなつて來ると、それは漸次妙なことになる。尤も我々の生活は絕對に土地を離れることはない。けれども土地が私共の生活に對して有つ重要さから云ふと、今と昔と大に異り、又現に田舍と都會とで大に異る所がある。昔のことは暫く措く。今日田舍の生活は、土地との關係は可なり深い。從て同じ土地の住民だといふことは相當强い共通利害の紐帶になる。そこで土地を同うする住民は、互に相往來し互に能く相知り合ふから、選擧も地緣代表主義に基いて結構なのである。所が都會となるとさうは行かぬ。勞働者區域

（若しさう云ふものがあるとすれば）などは幾分田舎と趣を同うする點もあるが、私共などの場合では、土地は眞に足を停める丈の場所に過ぎず、その勤める同じ役所の役人とか又は同業者とかに却て多分の親しみをもち、また共通の利害をも感ずるのである。而も内に歸つて隣りの人がどんな商賣の人かなどは頓と知らずに濟む場合が多い。孰れしにても、今日大都市の生活に在ては、土地を區劃しては、その中の住民に何等共通の感念を有たすことは出來ないのである。從てその中にどんな人物があるかなども皆目分らぬといふわけである。そこで選擧の區域が若し果して人物選擇の便宜に出でたものとせば、少くとも大都市に在ては、最早地緣代表主義では選擧の目的に協はぬのである。そんなら何か之に代る良法があるかといふに、土地よりもモッと密接に關係する「職能」といふものを區劃の標準とした方がいゝといふ説がある。所謂職能代表主義といふのが之れだ。尤も人に依ては、地域主義と職能主義とに別個の意味を附するものもあるが、私は之を選擧の目的を達する便宜に出づるものと視て居る。孰れにしても、大都市に在ては、地緣代表主義のみではもう駄目だ。職能代表を以て之に代へるか、少くとも大に之を加味する必要がある。職能代表の例は現に既に商業會議所などに於て行はれて居る。理想選擧運動の相談の場合でも、各區の代表者といふことに着眼せず、各職能代表者といふを主なる標準として人を集めたのなら、或はモ少し纏つた結果を得たかも知れないとさへ思はれる。

要するに大都市の選擧に在ては、地緣代表主義では駄目だ。その駄目な地緣代表主義を基本として案を立てた所に、理想選擧運動の失敗の主因が伏在すると考へる。尤も地緣主義の現行法は俄に改め難いだらう。俄に改め難しとすれば、實際駄目な緣地主義が不幸にして現行の制規なのだといふ前提の下に、別に之に應ずる良策を講ずべきではなかつたらうか。

猶ほ地緣主義と職能主義とのことは、私は曾て「現代政治講話」に於て論じたこともある（同書五三〇―五三六頁）。就て參照せられんことを希望する。

選擧に現はるる結果

右述ぶるが如き結果として大都市の選擧に現はるる著しい現象の一つは、市民の意思を組織する方法の殆んどないといふことである。例へば新聞では盛に政黨の市政侵入を排斥する。之には私も大に共鳴した。外にも澤山の共鳴者は到る處にあつたやうだ。併し同感だ同感だといふ丈で、之を一個現實の力に組織する方法が丸でなかつたではないか。蓋しこれ私共が自分の住區に歸つて隣り近所と斯うした問題を協議する機會が全くないからである。私共は

同うする友達と之を談じて實は大に慷慨もしたのだ。若し職能團體が、一選擧區を爲して居るのであつたら、知己學友を說き廻つてすぐ樣纏つた一團體を作り、思ふ人を市會に送るべく努力したであらう。けれども現行制度の下に於ては、本郷の人間が麻布の人間と意氣投合したといふのでは、國會議員の選擧に於ける北海道と九州の人間の意見の合致といふと同樣、その爲し得る仕事は精々宣傳位が關の山だ。どう工夫を凝らしたとて、其處から組織された現實の勢力の出現しやうがない。尤も昨今は各區内に町會なんどいふものが流行し出した。之がうまく行けば一つの弊風緩和劑にならうとは思ふが、併し聞く所によれば、中には没儺な顏役が始めから自分の便宜に惡用する目的を以て作つたのもあるとやら。よしさうでなくとも、東京市民なるものは、大多數が本來皆浮き腰なのである。いゝ處があれば何時何處へでも移々する。從てその現に住んでゐる處に左程の執着を有たない。だから町會などが段々盛々なつた所が、之を以て地緣主義を駄目だと云ふ主張を覆へす根據とは到底なり得ないのである。

市民の意思を組織する方法がないことの結果として、次に看逃すことの出來ない現象は、何の基礎に立つものであれ、兎に角組織された力として現れ來るものは、常に必ず優勝の地位を占むるといふことである。私共には市政に對しても多少の意見はある。併し之を現實の力とする方法が與へられてゐない。我我に提供されるのはただ他人の提示するものを取捨選擇することだけに過ぎぬ。固より之れを取ると否とは私共の自由ではある。名乘りを擧げた候補者のすべてが氣に入らねば、殘念だが棄權するといふも一策だ。與へられた權利を何とかして利用しやうとすれば、下らぬと思ひながらも候補者のどれかに投票するの外はない。之はと思ふ人があつても立候補もしてゐないのでは投票したとて何の役にも立たぬ。斯う云ふことの結果として、一面には名乘りを擧げただけが得だといふことになる。詰りその人自身の內面的價値は何であれ、纏つた力を背景にして出さへすれば、結局天下は彼等のものになるといふ次第である。是れ東京市政が、常に健全なる輿論を裏切つて、下らぬ小人に壟斷されて居る所以であらう。

さうすると東京の市政には立派な人物は影を潜め下らぬ者のみが横行するといふことになる。下らぬ者でも斯く乘り出すには金も要れば自分を後援する組織も必要だ。そこで何等かその裏面に働くものがなくてはならぬ。そは何かといへば、一つは政黨で他は貪慾なる有產階級である。後者はその慾望を滿足しその利益を防守擴張する爲に、又前者は將來に於ける地盤開拓

の爲に、共に市政を壟斷することの上に重大なる關係を有つ。斯くして市政を動かすものは、結局市民の健全なる良心でなくして一部階級の利害だといふことになる。この結論には今日何人も異議はあるまい。而して讀者は、之に對する私の解釋を讀まれて、斯くなる事の根柢の案外に深いものあるに驚かれるだらう。

對應策　以上の弊害を矯正すべき根本的對策は何か。それはいふまでもなく地縁代表主義に基く現行選擧法規の改正に外ならない。併し之が實現はなか／＼容易ではない。そこで少くともその改正を見るまでの間、我々市民は現に何の對策を以て之に應ずべきやといふに、矢張り不十分ながらも我々の力の組織を促進する方法をとるの外はなからう。而してその基礎を地縁主義に置く可らざるは論を待たぬ所だから、組織の基礎は是非とも機能主義に持つて行きたいと思ふ。この點からいへば、勞働組合の自治的訓練の如き最も有望なるものと考へる。之に次ではソチ・ブルジョアジーの自治聯合なども大に奬勵するの價値はある。斯らいふものが東京全市の圈内に澤山出來、いざといふ場合各區に分れて活躍するやうになつたら、可なり面白い結果を得られやうかと思ふ。今度の選擧に於て、市電車掌某君の立候補の如き、不幸にして落選を見たが、あゝした團體が前以て意識した目的の下に訓練されて居つたら、乾度美事な成績を擧げたに相違ない。但だ假作りは面白くない。健實なる基礎の上に恒久的の組織を有する斯種の團體の成立には、私共も大に助力を惜まない積りで居る。

之に關連して一言したいのは、能く市役所邊の肝煎で開かるる自治講習會の効果のことである。市民に缺如せる自治的訓練を與ふる爲めとて、莫大の費用をかけて市民の啓蒙につとむるは誠に結構なことだ。併し前にも述べた如く、今日東京市民に最も缺けてゐるのは、自治に關する知識ではない。心ある者が共の意思を具體的の力とする機會が乏しいのである。現にその催しの講師となつて居る程の人達が、如何とも手の下し樣のないのに困つて居るのではないか。自治の知識を與ふることも頗る必要ではある。併し生徒が講師以上の物識りになつたとて、東京市政はその儘では改善される見込はない。故に直に市政改善の目的を達せんとならば、講習と共に、こゝに聽講に來た程のものを何等かの形に組織する工夫をも講ぜなくては駄目だ。尤も迂つかり之をやつたら、頭の古い連中から故障の持ち込まれる恐れは十分にある。その邊に多少の理由なしともいへぬが、現に市政改善の目的を達したいといふ點から觀て、講義の仕放しは確に龍を畫いて睛を點ぜざるの譏りを免れない。

どういふものか我國の先輩は、何事に依らず下層階級の團結を嫌ふ。彼等の力を結束せしめずしては、何を救ふたッて役に立つものではない。先輩の態度は、正に害を爲すべきを説いて之を爲すの機會を作るものに外ならない。この運動を打破することが、或は何よりの急務かも分らぬ。

評論界に於ける浪曼主義の排斥

一

私は前月の本欄に於て、所謂自治體の如き智的作業が判斷は、市政府などといふが如き現實的目的を從とするから觀て必しも適切でないといふことを述べた。善良なる市民として之れ之が位のことは知られはならぬ。これだけのことを心得て居る以上彼は必ずや市政判斷の際に迷つたらう。斷らいへば一ト通りの判斷は出る積だが、實際の結果は更に豫期の通りには行かぬ。第一にこれだけ分つて現れた以上必ず困つに相違ないとされた人が、困つたノヽといふだけで一向判斷爲能する氣色がないではないか。して見ると、智識を詰め込んだばかりではいかぬものと見える。知と行とは本來別のものかどうかは能く分らぬが、少くとも從來の所論は、知的に頭を整備することだけでは何の役にも立たぬことを教へて居る。然るに我々の先輩は、今なほ知らしめることに骨折りさへすれば行はしめることも容易に出來るものと考へて居るらしい。夫れに困つたことには近頃の若い人達は亦、行ふことよりも知ることの上に多分の興味を有つて居る樣に思ふ。

如何にして睡眠になるかを一心不亂に研究し、一室に閉ぢ籠り寢食を忘れてこの一事の工夫に沒頭した結果、それが因でとうとう死んでしまつたといふ話がある。現實を離れ知識にとれ解る智識の役に立たぬこと、此の一例を以ても知るべきである。之れなどは所謂研究だけで丸で實行の域に這入つて來ないのだから未だ罪がない。中には想像に依て描いた自己の計畫に我から陶醉し、多大の期望を以て乘り出しては來たが、さて實社會の有樣のかねて豫想せる所とは全然趣を異にせるに驚

して、早々旗をまいて逃げるといふ有樣なのもある。貴族院方の懸案事變などにこの種の例頗る多しと聞いて居る。つまり讀書や想像に由て得た智識を實際運動の指導方針たらしむ爲には、更に其間に別個の工夫が必要なのである。

要するにいろ〳〵の事を知つたといふだけでは足りぬ。況んやその知り得た事柄が、直にその儘實際に適用が出來ると限らぬに於てをや。想像も必要だ。讀書は殊にも過去の經驗を參照する方便として最も必要だ。併し何よりも大切なるは、先づ以て自分自身を省みることであらう。その實際の環境と沒交涉に、ひたすら抽象的智識の整備をはからんとするは、何の實益もないことである。

二

私は平素、斯うした實際を離れた空論がことに政界に於て橫行して居るのを歯痒く思つて居る。曰く理想的政治は斯の如くあらざる可らず。曰く議會の討論は斯の如くあらざる可らず。曰く外交財政は斯の如くあらざる可らず。「斯くあらねばならぬ狀態」の研究はなか〳〵盛だ。併し乍らそれ等の要求は實際政治の上に少しでも具現されたことがあるか。私はよく云ふ、我が日本では、西洋なら數十年の昔に疾くに行はれた筈の初步のイロハの稽古すらが未だなれずに居ると。そこで我國の政治を論ずるに當つては、「斯くあれかし」とする理想的狀態を討論することは實は第二の問題で、第一には先づ如何にして初步のイロハを實現せしむべきかを攻究せねばならぬのである。之を實現する方法を考へずしては、實現すべき綱目を幾ら完全にならべても何にもならぬからである。然るに我が同胞は斯ういふ方面には頓と興味を感ぜぬのである。よし感じても、其現在の政治家の腑甲斐なきを罵倒するが關の山で、進んで之を改むるには如何の實際的方法を以てすべきやを講ずるものがない。是れ我國の政論が、毫も現實に立脚せず、今なほ抽象的空論を弄ぶの域を脫せざるの證據ではないか。

例へば若槻内閣は憲本提携に十分なる成功を收め得ずして逸早く貴族院の研究會に秋波を寄せたといふ。研究會の好感を買ふ爲に必要のあつたのか、公私兩面に亙つて餘りに評判の香しからぬ井上匡四郎氏に鐵道大臣の椅子を與へたといふ。斯うした事態は、立憲政治の本筋から觀て誠に見苦しい事に相違ない。從て道の見地から若槻内閣を攻擊するは一向差支ないが、實際問題としては實は若槻内閣をして斯かる態度を取らざるを得ざらしめた所以を考へねばならぬ。換言すれば、若槻内閣は一體あんな見つともない事をせず、所謂立憲の常道をなせ堂々

と通らなかつたかを考へねばならぬと思ふ。呑まなくともいゝ酒を呑んで醜態を演じて居る者に向つては、成る程その不しだらを罵倒し、嚴しく其の過を咎めてもいゝ。併し全然酒をやめては活きて居れぬといふ樣な中毒患者であつたら、一概に常道を以て之に臨むわけにも行くまい。之と同じ樣に、我國今日の政界は、若槻に代ゆるに他の何人を持つて來ても、全然貴族院を無視し得ないといふ特殊の變態狀態に陷つて居るのではあるまいか。少くとも最近數年の政情に通ずるものから觀れば、問題となつて居る研究會抱込一件の如きは、實は何の不思議もないのである。敢て若槻內閣に限るのでない、誰が內閣に立つたツて必ず同じ事をするに相違ないのである。果して然らば、實際問題としては、一方に歷代の內閣と同樣の過誤を繰り返せることを若槻內閣に責むると同時に、他方我々は、我國變態政情の根源を剔抉し、その一主因たる研究會の橫暴といふ特別の問題に對しても鋒先を向ける必要があらう。斯く考へると、問題は決して單純ではない。此類のことは猶ほ外にも多いと思ふ。

孰れにしても、我國の政論は足を地につけて居ない、概して想像の上に築かれて居るといへる。從て時としては、ひとり日本だけに適用あるに非ず、支那にも印度にも適用し得るといふ樣な議論もある。所謂抽象的空論たるを免れずといふ所以である。

三

政論の中でも近頃流行の社會改造論などになると、この點一層甚しい。即ち如何にして日本今日の社會を一歩〳〵改善すべきやの具體案は殆んど顧みられずして、專ら「凡そ理想的社會は本來如何にあらねばならぬか」の點のみに攻究の熱情が傾倒されて居るやうに見へる。見よ、知名の人の社會改造論にさへ、マルクスなりレーニンなりの論策がその儘鵜呑みにされて居るのがあるでないか。あゝだ、かうだと綱目の列擧は誠に立派だけれども、どれから順を追うて、實行に上ぼすべきやは頓と關心されて居ない。強て之を訊ぬれば、皆一時に實現されることを要するなどと云ふ。斯くては到底實現さるゝ見込はない。それでは折角の妙案も下宿屋の二階で健康法を考へて死んでしまつたといふ話と同じ運命に墮するの外はあるまい。

今日の社會改造論者の多くは、全然現實の方策に無關心であるのみならず、眞の意味に於ける實際運動にまだ本當の興味を有つにさへ至らないやうに思はれる。成る程彼等の或る者は一種の運動に熱中しては居る。併し私の觀る所では、それは理想の

實現を直接の目的とする運動ではなくして、單純なる宣傳に外ならぬ。宣傳に依て多數の同志を作ること亦間接に理想實現の一方法たるを失はないが、併し所謂運動が宣傳に止まる間は、そこにはまだ現實の影響を捲き起すべき力は現はれて來ない。單に宣傳だけなら、一杯機嫌で禁酒の勸誘も出來るのである。

四

言葉が適當でないかも知れぬが、現實を離れた抽象的空論を弄ぶを浪曼主義的傾向といふべくんば、今日我國の社會改造論者の調子は、丁度古典主義に反抗して浪曼主義が起り、やがて自然主義に散々粉粹さるべき運命の瀬戸際に立つて居ると謂つてい丶。例へば資本主義は社會問題に於ける古典主義だ。この古典主義に反抗して浪曼主義は、自由奔放の想像を逞うしてあらゆる理想的情形を描きもすれば述べもする。而して彼等共通の特徵にして又缺點とする所は、之等の空中樓閣は一擧にして實現が出來ると信ずることである。斯く盲信する所から一種の熱情も湧くが、又事實意の如くならざるを見て徒らに煩悶するといふこともある。その反動は即ち自然主義の勃興であるが、日本の現狀はまだ彼處までは來てゐない。それは一つには、日本の社會改造論は多くは書生の思想的遊戯の範圍を脫せず、まだ實に汗と血とを以て自己の運命を苦み拔きつゝある人達の切實な問題とならないからであらう。併し社會改造の本當の仕事からいへば、もう大抵にして浪曼主義から脫却して貰はなくては困るのだ。文藝界などは、浪曼時代をはるか三四十年の前に送り、今日は自然主義をさへ打ち超えて、次ぎの又その次ぎの時代にと進んで居るではないか。社會改造に關する實行方針の如きは何處の國でも遲れ勝ちのものであるが、それにしても日本の遲れ樣は餘りにひどい。

三

社會改造論に於ける浪漫主義の不當な跋扈は、一つには政界に於けるそれの影響と見ることも出來る。何となれば、政界に於ける浪曼主義は、明治十年代以來依然として舊態を改めず、自然そこから社會や政治の問題の論議は斯うした形式に依るべきものとの一種の約束(コンヴェンション)が成り立つて居るかに思はるゝからである。

明治維新に依て始めて西洋流の新式政治は布かれた。少くともその布かれる端緒が開かれた。とはいへ、永き封建制度の下に教養を受けたこととて、政治家の頭には矢張り一種の專制思想がこびりついてなか〳〵に脫け切れない。彼等は表面世界、

大勢には盲目でないやうな顏をする。けれども古典的專制思想は時の進むと共に段々と廟堂の政治家達を支配する。この勢は政界の落ち付くと共に益々甚しくなる。之と戰ふ爲に當時の所謂自由民權家が如何に慘憺たる辛苦を嘗めたかは、詳しく語るの必要はなからう。從て當時民間の政論が私の所謂浪漫主義の色彩を濃厚にするものなることも言ふを待つまい。之等の點に付ては、語るべきなほ多くのものがあるのだが、話を簡短にする爲に今は略しておく。只特に讀者の注意を促したいのは、其後政界の模樣は表面大に變つた樣ではあるが、能く觀ると專制的政治主義の支持の仕方が變つたので、古典的政治思想そのものに至ては今日尚依然として殘存を續けて居ることである。成る程藩閥の專制はなくなつた。けれどもその昔藩閥は威力を押して其意思を强行せんとした如く、今日は政黨が金や利權を以て地方有志家の良心を買收し、同じく其の獨自の意思を强行するに成功して居るではないか。趣こそ違へ、藩閥も政黨も同じ樣な方法を以て所謂民意の暢達を無視して居るのである。今日は所謂政黨は藩閥に代つて政權を握つて居る。表面の形は民權の伸張たるが如きも、その實一般民衆の利福は依然として更に顧みられず、政界を支配するものは昔ながらの古典的な少數專制の思想ではないか。是れ今日の政論が仍ほ浪漫主義時代を脫し得ずと私の主張する所以である。

尤もこの三四十年間に政界の問題は大いに變つた。最も顯著なるものを謂ふなら、日露戰爭頃までの二十餘年は帝國主義の謳歌であつたのに、それより後殊に歐洲大戰前後になると、國際平和の思想が大いに頭を擡げ出した。其他各般の方面に問題の種類乃至內容の變つたことは非常なものである。けれども一度之等の問題を取扱ふ現實の態度を見ると、數十年一日の如く、謂はゞ狙ひを外れた空砲の連發ではないか。だからその主張に毫も現實に足を着けた本當の强味がない。別の言葉でいへば、何か議論をするといふ段になると、直に對象を抽象化し、その理想的形體を描いて其儘現實を之に移らしめよとあせるのである。而もその即時の實現を可能だと妄信するのだから堪らない。例を貴族院改革問題に取らんか、何かの動因で改革の必要が叫ばれると、論客は直にその權限は斯くあらざる可らず、その組織は當に斯くの如くあるべしと、序次整然たる大議論を發表する。差當り腹が痛いと訴ふる者に、肺も强くなくてはいかぬ、腸も斯くある方がいゝと、凡ゆる藥を一度に服用しろと云ふのでは堪つたものでない。だから議論倒れで、いつも實現は不可能にをはるのだ。浪曼主義の空想論は、古典主義と戰ふだけの時代には大に用を爲す。更に進んで具體的改革を必要とす

る時代になると、時として却て厄介な邪魔ものとなることが多い。

猶ほ我國の政界にはその外に二つの理由があつて時代遅れの浪曼的傾向の横行を助けて居る。一つは内心改革を悦ばぬ古典的政治主義者が、反對側の主張を巧に失敗せしむる爲に、浪曼主義的政論を煽ることである。例へば貴族院改革論の起つた時、貴族院の之を悦ばぬ連中も、流石に大勢に抗するを得ず、表面その要求を絶對に拒むことはしなかつた。さればとて世論に同じて肝腎の急所を改革されるのも困る。斯う云ふ場合に彼等の採る一番賢明な方法は、改革には贊成だ、併し改革するなら根本的に何も彼も一所に改めた方がいゝと説き廻ることである。肝腎の改革要求は、之を部分的な姑息的なやり方だと罵倒し、ついでに此點も改めろ彼點も直せといへば（又世間には之を尤もと信じ、まんまと此狡計に乘るものも多い）、結局議論倒れになり泣寢入りに終つてしまう。この方法を用ゐられたので、貴族院改革は現に見るが如く骨抜に了つたのではないか。浪曼的空想の陶醉から醒め切らない所へこの狡計で煽られるので、益々以て浪曼的傾向が増長するのである。次には多數の實際政治家は、敵味方を通じ共に甚しく自然主義的見地の政論を畏怖することである。藩閥といはず政黨といはず、今日の政治家の頼る所の主義が所謂古典的專制思想なることは先にも述べた。この專制思想を何とかして無理にも押し通して行きたいといふのが、また今日の政治家の一つの重要な仕事でもある。之が爲に彼等が如何なる方法をとつてゐるか。妥協といひ、買收といひ、欺瞞といひ、威壓といひ、吾人の目して以て所謂政界の腐敗手段を爲すものは、悉くこの爲に採用さるるのではないか。政界を廓清し之を正しきに復さんとには、是非とも之等の事實に先づ國民の耳目を開かねばならぬ。漫然として政界は斯くあるべしと長嘯する丈けでは何にもならぬ。現在の政界は如何の狀にあるかを能く心得ておいてこそ、改革の實際案も立てられるのだ。其處で所謂政界の現實暴露が必要となるのだが斯くては自家の舊惡が明るみに出されるといふ樣なわけで、政客達は敵味方の別なく誰も彼もが等しく皆之には反對する。時としてはまた壓迫をさへも加へる。私は不肖ながら多年この見地から政界の評論を試み來つたのであるが、之が爲に直接間接の威嚇を蒙つた經驗は澤山ある。而して斯種の經驗は亦私共をして、自然主義的見地で我々の論鋒を一貫することの非常に困難なることを思はしむる。是れ即ち當然來るべき筈の自然主義時代の到來が意外に遲延し、從てまた間接に浪曼時代の不當に永き盛運を維持せしめる一つの理由であらう。

斯くして我國の政論界は、今尙浪漫主義の全盛である。殊に所謂思想家などに依て取扱はるる政治論策の型は、云ひ合はしたやうに之にきまつて居る。而してこの同じ人達がまた轉じて社會改造を論ずるのだから、そがまた浪漫主義の型を脱せないのも怪むに足らぬのである。

六

明治十七八年代の政論界に於てなら、浪漫主義の流行もいゝが、憲法の布かれ、議會の設けられての後までそれが續いて行くのは困る。之にも増して、普選の實施され無産階級も政權の運用に參與し得るに至つた今日、なほ自然主義的な更に進んでポジチーヴな政治論策の起らないのは實に堪へられぬ。之と同じく、社會問題などに付ても、勞働組合も認められぬとか、所有權萬能で小作人や雇職工などは何の權利も認められなかつた時代なら、浪漫主義的な改造論を以て古典主義と戰ふのもいゝが、今や之等の點についても、遲ればせながら我國の情況は少しづゝ變りかけてゐる。所謂古典主義がこの方面に於てことに政界以上に跋扈して居るの事實は認めねばならぬが、それでも改造の實行に容喙する道徳的權利は、既に幾分無產階級の人達にも認められかけて居る。此際に於て我々の最も戒心すべきは、抽象的な浪漫主義的空論の陶醉から一刻も早く醒めることではないか。頑強にその態度を改むるを肯ぜず、却て現實に覺醒せる者を斥むるが如きものあらば、そは却て社會改造運動の獅子身中の蟲といふべきである。少くともそは眞に無產階級を愛するものゝ態度ではない。

小題雜感數則

自由主義提唱の辨

私が先達上田貞次郎博士の「新自由主義」の提唱に賛意を表したとき、或る友人から下らぬことに感心するとの罵倒の書信に接した。一々彼の說を引ツ張つて反駁するも面倒だから、玆には只我國の現狀に於て所謂新自由主義の如何に重要なる意義

を有するかを一言するにとどめたい。

豫め念を押して置くが、私の議論は我國の現狀に即しての立言である。所謂近代國家を抽象し、殊にその產業發達に動されたる方面を概念化し、其の進化發展の跡を公式的にきめての空論ではない。

× × × ×

分り易い爲に私の專門の政治論の方面から說を起して見る。政治の方面から觀て、我國今日の大通弊の一つは、政權を掌握することに依て政黨は始めて黨勢を張り得るといふことである。立憲の常道からいへば、黨勢が張つた結果として政權を獲得することが出來るといふのでなくてはならぬ。それが逆になつて居るのがいけないといふのだ。政權を握つてからも無論黨勢の張ることはあらう。併しそは廟堂に立て善政を布き眞に民間の信望を博した結果でなければならない。單に政府を乘取つただけで直に勢力を增し得るといふのではいかぬ。つまり臺閣に立つて勢力を加へるのも、又總選擧で見事な勝利を占むるのも、共に基く所は一に民間信望の歸着せる結果だといふのでなければならぬ。民間の信望が或は政權を握らしめ或は之に離れしむるもとだといふのでなければ、立憲政治の有り難味はない。何故なれば、斯くしてこそ始めて各政黨は眞に民間の要求[illegible]に就き、平素からその信望を博せんと之を爲すに努力奮發すべきを以てである。

之に反し、若し政權を握ることに依つて始めて勢力を張るといふことであると、その勢力を張る所以の最捷徑は、善を爲すに努めて民間の信望を博することではなくして、如何なる方法を以てしても先づ政權を獲得するといふことになつて來る。於是政黨者流は、政權を獲得する爲には凡ゆる手段を取て憚らない。陰謀もやる、讒誣もする、中傷誘拐亦固より辭する所にあらず。是れ既に吾人の見聞する通りではないか。且つ又政權を獲て後勢力の振張があるといふの事實は、一面に於て民間の良心が政黨者流を十分に監督し得ないといふ證據であつて、謂はば選擧民猶未だ事理にくらく、常に代議士等に籠絡さるることを語るものである。而して政黨者流が選擧民の良心を左右する爲に慣用する所の便宜は、實に政權を獲得することに依て益々豐富となるべきを以て、一旦政權を握つた政黨が、將來に之を持續せんが爲め凡ゆる不正手段を執つて悔ゐざるべきも、亦想像に餘りある。政權を握ることに依て勢力を張るといふ斯の政情は、實に我國政界最大痛弊の現はれで、之が革らぬ限り、政界の腐敗は到底我々の耳目から消えるものではない。

尚其上に、斯うした事態が討議機關の空氣を極度に[illegible]

にすることも看過してはならぬ。多數少數の別は始めからきまつてゐる。が、多數が多數を恃んで暴威を振へば此次の選擧に失敗するかも知れず、又少數者はどうせ負けるときまつて居ても、自暴自棄せず正々堂々の陣を張れば陰に民間の信頼を博して次期の選擧に主客顚倒の成功を收めぬと限らぬ。そこで彼等は始めからきまつた勝負と諦めながらも、事を鄭重に審議して無責任な妄動を愼むのである。蓋し彼等のねらう所は民間の信望である。さればこそ彼等の爭は堂々たる君子の爭にもなるのだ。之れが本當の立憲政治に於ける討議機關の當然の姿なのである。然るに事之に反し、所謂民望なるものは常にならず、否勝手に此方から左右が出來る。只勝ちさへすればいゝといふのでは、勝て横暴に流れ、負けて自暴自棄に陷るのは、當然でないか。我國の討議機關が、上は國會より下は市町村會にいたるまで、常に多數横暴と反對の爲の反對とに惱まされるのは、畢竟之が爲ではないか。

要するに、我國の立憲政治は常道を辿つてゐない。正に冠履顚倒である。こゝから來る弊害は、ひとり政界其自身を毒してゐるばかりではない、一般社會におのづから及ぼす所の悪影響も決して鮮少ではない。この事はまた何人にも異議のない所だらうと信ずる。

× × × ×

そこで政界廓清の根本策は右の現象を正しきに復へすことの外にないことも明であらう。どうして之を革正するか。それにはその原因を突きとめて之が剿滅を謀らなければならぬ。この點に就ては更に詳細に亘つて細叙せねば十分その意をつくすことは出來ぬが、結論だけを簡單に述ぶると、我々の特に注意を要する點が二つある。(一)は政府の直接間接の干渉で、(二)は都市實業家の政府迎合である。

政府が選擧の度毎にその官權的地位を巧に利用して事實上の干渉を試みることは周知の事實である。之に依てどれだけ選擧權者の良心が誘惑さるるか分らない。勿論これなくとも今日の選擧民は、概して十分その良心の自由を保持し得る程、選擧道徳にめざめては居ない。それでも政府が徹頭徹尾公平に彼等の良心を保護する方針で進むなら、曲りなりにも民衆の自由なる判斷を選擧の結果に現はし得たであらうと思ふ。所が、政府が先に立つて陰陽兩面の巧妙な干渉をやるのだから堪らない。併しこの點は今問題外だから餘り立ち入つては論じまい。只こゝには、之は政府の方針を立て直しさへすればどうにでもなる事柄だ、又民衆に對する組織的啓蒙運動に由ても相當の效果を擧得げるものだといふことを一言しておくにとゞめる。

只困るのは都市實業家の政府迎合である。無論多少の例外はある。又人に依ては政府の積極的勸誘があるからだともいふ。併し之にも拘らず、都市の實業家は、何の內閣の下に在ても、きまつて政府側の味方だとは、我國政界に於ける久しい間の信念である。嘗て或る老政治家から斯う云ふ話を聞いた。何んな內閣でも、政府お味方の中立議員六七十名を作ることは困難でないと。而してその大部分は大都市に於ける實業家だといふ。向ふから勸められもせぬのに、我から必ず進んで政府に忠勤を擢んずるといふは、政界の爲に決して喜ぶべき現象ではない。而して斯の如きは一體どういふ所から起るのか。玆に私は所謂新自由主義提唱の徒輩ならざるを認むるものである。

× × × ×

大都市實業家の政府に迎合するは、單純なる阿諛からではない。彼等の重大なる利益が死活問題として實は之を促がすのではあるまいか。何に依て斯くいふかといふに、即ち上田博士の說くが如く、我國の產業が徹頭徹尾政府の保護に依て立つて居るからである。我國の產業が政府の保護に依て立つことになつたその沿革に就ては今は說くまい。因習の久しき、實業家は遂に國家の保護を受くるを當然とし、政府も亦自家監視の外に產業の興立するを不便として、我から强て直接間接の保護を與へんとする。固より保護の形式にはいろ／＼あるが中には巧に保護の形をくらましてるのもあらう。要するに今日我國の產業中、僅に紡績業を除いては、眞に何等の保護を國家に求むることなくして獨立經營して行けるものが絕無だといふではないか。之れが果して產業そのものの爲にもいゝかどうかは大なる問題であらう。

具體的に個々の事業に就て云へば、無論政府の保護に浴するあり、浴せざるあり、又は先きに甲黨と餘りに深き關係ありし結果乙黨全盛の今日漸く逼塞して居るといふもあらう。併し概していふに、我國の一般產業は、ともかく、政府より厚き保護をうけて始めて成立し且繁昌して居るのである。この結果、我國の實業界が、自ら政治問題について、自主獨立の風氣を失ひ、所謂事大主義に墮して偏に無事を冀ふのは、怪むに足らぬのである。西洋の本を讀んで資本主義が政界を左右するなどいふは、我國には全く當らない。我國の產業は完全に政權の奴隸たることを見誤つてはいけない。

以上は主として大都會の實業家について謂つたが、特にその弊の著しきを大都市と爲し、田舍だとて全然この弊より免れてゐるのではない。要するに、產業に對する直接間接の傳統的保護政策が如何に政界の事大主義を培養して居るかといふことに

讀者の注意を促したいと思ふのである。

× × × ×

政界に於ける事大主義の原因は、無論一つには政府の巧妙なる干渉もある、又官尊民卑の陋習の脱け切らないといふ點もあらう。併し乍ら何よりも大きな原因を爲すものは、產業保護の政策に外ならない。保護政策の利害得失については、主として經濟上より論ぜらるべき事柄だけれども、政界の方面から觀ても、それの影響としての弊害は頗る大きいのである。この意味に於て、新自由主義の提唱は、實に一部有產階級の政界に於ける良心の自由を解放せしむるものなのである。眞に自由なる判斷に立脚せしめ厭ふべき常習的政府黨たる陋態より彼等を救ふ點に於て、是亦我國當面の一緊要事項たるを失はぬと信ずるのである。

支那の五大軍閥

支那の五大軍閥といふことが昨今ちよい／＼新聞に見える。云ふまでもなく張作霖と吳佩孚を筆頭とし孫傳芳・閻錫山・唐繼堯を意味するものであらう。之れ丈けが現今の支那に於て先づ確乎不動の勢力を有するものと觀ることが出來る。そこで此五大軍閥を代表するものを採て北京に鞏固なる聯合內閣を作り以て政界の安定をはからんとする計劃も起るのだが、只漫然たる機械的聯合では、所謂鞏固なる政府の出來るや否やは覺束ない。

支那の今日を或る意味に於て我國の幕末に譬ふることが出來る。北京政府の威令の衰へたるは幕府の滅亡に瀕せるに比すべく、天下の大事が雄藩の料理を待つて決せられんとする運命は、丁度政界の安定を冀ふ隣邦の人心が暗に五大軍閥などを念頭に置くと似て居る。さうすると、差し詰め張作霖と吳佩孚とがわが薩長であつて、孫と閻と唐とは土肥越等に比し得るわけだが、協力一致すべき必然の要求に直面し乍ら、各々利害を異にする所から互に陰險な暗鬪に浮身をやつして居る點も亦甚だよく似て居る。所で我が日本では結局國家の統一に成功した。然らば支那は如何。尤も日本のやうな統一を支那も必要とするかに付ては隣邦靑年の間に色々議論もある樣だが、假りに之を必要すと前提して、さて昨今の形勢を見るに、その實現は頗る困難らしく思ふ。何となれば支那には不幸にしてわが西鄕隆盛・木戶孝允の如き卓識の士がないからである。

幕末に於ける日本の軍閥は、今日から考へると、實に不思議な代表者を有つて居た。例へば西鄕にしても木戶にしても、彼等は强大なる藩の勢力を背景として中央に活躍し又重きをもなしたのだが、同時に彼等の眼中には大日本ありて鄕藩がなかつ

た。大なる日本の爲には時として藩の利害などは、どうでもいいといふ意氣込である。斯ういふ人物が集つて天下の大問題の評議に牛耳を執つたのだからこそ、國家の統一も遂に美事に出來たのである。而して今日の支那に斯う云ふ人物があるか。ない。否、ないばかりではない、實に有り得ないのである。そは自家軍閥の利害を國家全體のそれの爲に賣る樣な奴があつたら、彼は一日も其の生存を許されぬからである。然らば支那に有り得ないものが日本の昔にあり得たのは何故かといふ疑問が起る。それは一に封建制度のお蔭に外ならぬ。三百年の封建制度は所謂君臣の間に一種云ふ可らざる情誼を作つた。故に代表者が藩の利害を度外したとて、藩公に於て必しも其忠誠を疑ふことをせぬ。即ち一場の意見の相違に由て直に猜忌嫉視を釀すといふやうなことはないのである。さればこそ薩摩の久光は西郷を怪しからぬ奴だと憤慨しつゝも彼の薩藩代表としての活動を永い間默認したのであつた。支那には斯うした歴史的の情誼はない。意見の相違は直に一轉して反目嫉視の勢と爲らざるを得ぬ。故に各軍閥の首腦は到底代表者を信頼してその自由手腕に事を托し得ないのである。のみならず、重大な事項になると大將自ら出馬せずしては安んぜられない。是れ私が支那では到底幕末の日本に見たやうな統一は出來まいと觀る所以である。

× × × ×

無勢力の者が集つたのでは天下の大問題はきまらない。之を決定し得る實力の所有者は、併し乍らその各々の地位を保持するに急にして天下の問題に本氣の力を注ぎ得ない。封建的基礎なき彼等は、迂つかり餘計な事に手を出せば、直に空き巣を奪はるる危險がある。即ち支那は、差迫つた天下の問題の決定をば私利私慾を離れて天下の公に殉ずることの絶對に出來ない人々に托せねばならぬといふヂレンマにかゝつて居るのである。所謂支那政界の行詰りなるものの根本の原因は實に玆にあるのだ。

軍閥自身の爲からいふと、中央政界などに手を出さぬ方が得策だ。さればこそ張作霖の友人たる我が同胞の誰れ彼れは、頻りに彼の安全の爲に滿洲以外に手を出さぬ樣にとすゝめたとか。この點からいへば、唐繼堯や閻錫山などのやり口は頗る利口だと謂はねばならぬ。併し之はその地位の僻遠なる、一寸中央に手の出せぬ爲に已むなく愼んで居るのかも知れぬ。而しても一つ吾人の忘れてならぬことは、今日の支那に於て、中央政府は實にまた各軍閥に取て大なる誘惑であることである。何となれば、對外關係上中央政府が即ち支那全體の代表だといふ理窟から、之を乘取ることに依て對外關係に基く幾多の利便を獨占することが出來るからである。例へば北淸事件賠償金を

するといふ。誰が之を受取るか。また之は純然たる對外事項ではないけれども、稅關の收入や鹽稅剩餘金を交附するといふ。誰が之を受取るか。中央政府を作ることの利益は之を推しても知るべきである。而して中央政府が一旦出來れば、諸外國は概して之を熱心に支持する。之れ無ければ、いろ〳〵の談判を持ち込むにも其處がないからである。而して諸外國は昨今殊に支那の義務を責むる方面には割合に寛大だから、大體に於て中央政府を作る方が支那側に取て利益だといふわけになつて居る。そこで各軍閥が危險を冒してまで之に手を染め、從つて亦各派の間に暗鬪が絕へないのである。若し斯うした外國の關係がなかつたら、支那は中央政府なくしても我慢が出來たかも知れぬ。一時分裂して多數の獨立政治團體の對立となり、やがてそれが聯邦の形に纏まるやうなことになつたかも知れぬ。之等の點は別に私に考もあるが、今の所北京政界のあの泥沌たる形勢は、容易に收まるべくもないといふことだけは疑を容れぬ。

段汝耕君等の脫出亡命

去年暮郭松齡軍の敗北以來、我が新民屯領事館內に潛伏してゐた段汝耕君の一味は、七月上旬密に同館を脫出し、一部は滿洲の安全地帶に入り、一部は日本に亡命したといふ。之に對して支那官憲は日本領事館の態度に憤慨してゐるといふが、此種のことは今後もあり得ることと思ふから、玆に卑見の一端を洩しておくことにする。

×　　×　　×　　×

段汝耕君等の脫出が果して新聞傳ふる所の如くんば、何と謂ても日本官憲の事實之を幇助したるべきは疑を容れない。固より之を外務省の意思に出でたとは考へられぬも、其の監督の下にある役人の仕事たる以上、全然その責任を遁るる事は出來まい。この事だけは始めより之を明白にしておくの必要がある。

さうすれば日本政府は支那側に對してどれ丈の又如何なる性質の責任を負はねばならぬか。この事を明にする前に、我々は先づ次の二點に注意しておくの必要がある。

(1)段汝耕君等は一體普通犯人か又は政治犯人か。支那側は前前から之を反逆罪と觀て居るやうだ。而して日本側は始めより政治犯人として取扱つて居る。從て支那側より若し何等かの交涉に接するに當ては、先づ此點に關する我方の見解を彼に承認して貰ふの必要がある。之が先決問題だ。之がきまらねばその次ぎの問題に入ることが出來ぬと主張していゝ。

(2)又この事に付ての交涉の相手は北京政府であつて滿洲官憲ではない。事實上この問題に多大の關心を有つものは滿洲であ

る。從て非公式に滿洲官憲の言ひ分を聞くは從來の行掛り上致方はあるまいが、併し正式の交渉としては、滿洲官憲は日本政府の交渉の對手たる資格はないのである。

×　×　×　×

今度の事件と同じ樣なことは、曾て徐樹錚の脫出亡命を助けた時にも起つた。日本公使館にかくれてゐた彼れは、駐在武官の幇助に依て巧に同館を脫出し、日本に亡命したのであつた。當時日本官憲は知らぬ存ぜぬで押し通しはしたが、事實は遂に掩ふ能はず、公使館としては全く知らなかつたとしても、武官連が彼を援助したものと認められて、少からず日本の信用を傷けたのであつた。今度の場合も、形の上では徐樹錚の場合と異る所はない。而して私は今度も亦知らぬ存ぜぬとしらつぱくれず、立派に事實を承認して、其上で當然執るべき處置は忌避する所なく執つて貰ひたいものと思ふ。

但し徐樹錚の場合と異り、今度の事件に就ては我に於て謝すべきを謝する前に、次の二點に支那側の注意を喚起することがまた必要だと思ふ。

（一）段汝耕君達は政治犯人なるに、支那側では之を反逆罪と目做して極刑に處せんとして居るやに見へる。而も正當の手續に依らず輕々に斷罪處刑するの恐れは十分にある。之に對し日本は相當の保障を求むるの必要があらう。

（二）郭松齡處刑當時の例を以てするに、法律上その權限なきものが、敗者に對して不法の慘殺を行つて居る。是れ跋扈せる戰將の私刑を認むるものではないか。この點に十分文明的な手續を盡すの保障なき以上、日本のみ文明國共通の制規慣例に從ひ難き旨を通告すべきだと思ふ。

この點を支那に責めても、日本の立場はそれで無害になるといふのではない。尤も日本で、此上領事館内に滯留せしめ得ないといふ極めて明白な具體的の證據を示せば、上述の二點を根據として、脫出亡命を積極的に幇助したことを是認せしめ得るかも知れない。否らざる以上、本人達には氣の毒だが、引續き館内に掩留せしめ置くのが本當であつたかも知れない。一番正しい處置は、何等かの方法で張作霖を說き、その了解の下に一行を安全の地に移すことであつた。張の憤慨はなほやまず、之をなだめることは頗る困難ではあらう。併し日本の側で本氣に之を說いたなら、敢て聽かれぬこともなかつたらう。是れ段君等個人の問題に非ず、人道問題としても重大な意義を有するもの、我に於て熱心に骨折るだけの値打は十分にある。斯うした堂々たる方法を取らずして例に依て小刀細工を弄したのは、結果に於て良い事であつても、私共は之を大なる遺憾と感ぜずには居れぬ。併し支那が之に苦情をいふのは、日本側の小刀細工にまして一層下らぬ空騷ぎであることは言ふまでもない。

婦人

八月號

◆四大特別讀物◆

■明治から大正への遺書と絕筆……山名正太郎

■下獄者の手紙……猪俣津南雄

■賣られる前後……照葉

■膿傷を抉る（妻に棄られた男の手記）……倉若梅二郎

■家庭論斷片……生田長江

■女子教育に於る「好奇心」と「劬り心」の交錯……二階堂招久

■（插畫小說）太陽に憑かれた女……畑耕一作　中川紀元畫

■毎日の新聞から……吉野作造

■臺所の科學（献立に最も必要な注意）……越智眞逸

■法廷便り

脚

◇女性の進行……片岡鐵兵

◇獨逸の足……村山知義

◇足と小柴恒……室生犀星

◇靴下の下……ささきふさ

◇足の文明……石井漠

避暑池の戀

◇ユニホーム……木内高音

◇見知らぬ東京人……朝野諄

◇大洗通信……富田正文

◇城ヶ島の女……坂本義雄

◇原の温泉にて……宮川人

公論

宵話

聲

◇街の聲……鈴木[illegible]郎
◇罪の恐怖……江戸川亂歩
◇桃色の手詮……水木京太
◇知音……伊藤貴麿
◇聲十題……今東光

上野の憶ひ出……下田將美

公娼廢止善後策……片山哲

呉病院で生れたと云ふ赤ん坊の蠟人形……井伊よしを
慘忍極まる甥姪殺し事件の眞相……木庭魁夫
娼妓が解放されかゝつて來た最近の實例……水村龜三
答案に女優の名を書いて出した花巻高女事件……伊達清
故郷の老父に送る盗みの金……佳登坂吟一郎

◈(創作欄)◈

濤聲……加藤武雄
三年の後……水守龜之助
大道無門……里見弴
白い木柵の家……宇野千代
金襴戰……白井喬二

◆定價七拾錢◆送料貳錢◆

中央公論社（振替東京三四）

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき「カロット」の効力

昨年三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ樣になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絕對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない所が、茲に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き淸涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまずくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此効力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら乾度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵の大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。



見世物研究

—技術篇—

朝倉無聲

第一　緒言

見世物は際物だけに新陳代謝も亦激甚であつたが、自から三種類に分れてゐたやうである。即ち第一に手品、輕業、力曲持等の技術類、第二に畸人、珍禽獸、異蟲魚等の天然奇物類、第三に機關や生人形から籠貝菊等の諸細工物類である。

室町時代には未だ見世物の名目は無く唯奈良朝時代に支那から傳來した散樂雜戲の流れを汲んだ幻術を初め、放下や蜘舞が時に勸進せらるゝに過ぎなかつたのであるが、江戸時代となつて香具職頭家に天然奇物類の觀場設置を許可せられ、初めて見世物小芝居の名目が生じたのは、實に寛永年代の事である。かくて放下や蜘舞の一轉した手品輕業等の技術類から、開帳奉納物の影響を受けて勃興した諸細工物類も、亦香具師によつて興行せられ、終に江戸時代に於ける民衆娯樂の第一位を占めるやうになつたのである。

第二　幻術

室町時代に行はれた幻術は、奈良朝時代に呪師（ノロンジ）、平安時代に外術（ゲジユツ）と呼ばれ、時代によつて名目を異にしてゐるが、其實質は觀者の心膽を寒からしむるやうな變幻不測の妖術であつた。

かゝる妖術は我が國に發生したものではない、「文獻通考」に、大抵散樂雜戲は幻術多し、皆西域より出づとのやうに、もと印度に起つて支那に移り、漢武帝の時に散樂の雜戲として演ぜられたが其散樂雜戲の本邦に傳來したのは、聖武天皇の御代天平

年代の事である。

散樂の雜戲は一に百戲とも呼んで、『三才圖會』に、百戲は秦漢に起り、弄碗、呑劍、走火、緣竿、鞦韆、如くは高絙等の類あり、枚擧すべからず、今宮中の戲も亦此の如し、大率其術は皆西域より來るのみとのやうに、其種類は頗る多いのであるが、中に就いて劍を呑み火上を走るやうな奇術を、奈良朝時代には呪師と稱してゐた。

呪師とは呪文を誦へて人目を眩惑せしめ、其術を行ふところから發した名目で、當時和漢ともに朝廷公宴の餘興として演ぜられたのである。されば演伎の狀態も亦和漢共通であつたに相違はないが、惜い哉本邦の歷史や記錄には、具體的に記載されてゐないから、止むを得ず漢籍に據つて、左に述べる事としやう。

『漢書』の張騫傳に、漢は趙破奴等を遣はして車師を破る、大宛は梨軒と云ふ眩人を以て朝に獻ずとあつて、是に唐の顏師古は、眩は幻と同じく、今の刀を呑み火を履み、瓜を種き樹を植ゑ、人を屠り馬を戮すの術是也と註をしてゐる。是等は孰れも唐朝の公宴に演ぜられた散樂の雜戲であるが、右の註だけでは靴を隔てゝ痒きを搔くの感があらう、依て聊か說明を加へる事とした。

第一の呑刀履火は、漢武帝の時に印度から傳來したもので、呑刀は『五雜俎』に、利刄二尺許りを以て、口に挿入し復抽出すとあるのに當り、履火は走火と異名同物で、所謂火渡り術である。第二の種瓜植樹は、一に生花術とも呼んで、呑刀履火術と同時に傳はつたが、是も『五雜俎』に、蓮子を以て溫湯の中に投ず、食刻（しばらく）して即ち芽を生じて葉を舒べ、又食刻して蓮花を生ずる事酒盞の大きさの如し云々、小兒の腹を割き瓜を種く、頃刻して小瓜を結ぶ、之を割きて皆食ふべしとあるのを、其註釋と見る事が出來る。第三の屠人戮馬は、唐高宗の時に印度から獻じたもので、屠人は『文獻通考』に、唐高宗の時に天竺伎を獻ず、能く自から手足を斷ち、腸胃を刳剔すとあるが、戮馬は殺馬又は剝驢との註があるのみで、其說明は無いものゝ、恐らく驢馬の皮を剝ぎ又は馬の頭を打落して、呪文を誦へると故の如くになるの術であらうと思はれる。尙ほ此の外に『唐會要』の畫地成川術を初め、『法苑珠林』の能く舌を截り斷たるを續ぎ火を吐くの術や、『文獻通考』の激水化して比目魚と成りて跳躍し、嗽水霧を作り日に翳じて化して黃龍と成る、長さ八丈、水を出でて遊戲すなどの類は、枚擧に堪へないから省く事とした。

かく奈良朝時代の呪師は、朝廷公宴の餘興として演じたに過ぎなかつたが爲か、國史や記錄には唯名目を載せたのみで、演伎の狀態を記したものは、殆んど絕無であつた。然るに平安朝時代に至り、支那傳來の散樂は、其內容の本邦化すると同時に

猿楽と呼ばれ、呪師を初め其他の雜伎を副藝として、猿楽の[illegible]街に於て演ずるやうになつた。この前後から呪師の多くは、猿楽から分離獨立して、其術を行ふやうになつたのは、畢竟前藝とされた屈辱に甘んじなかつたが爲であらう。この獨立した呪師を當時外術と稱してゐた。是恐らく三寶即ち佛法に外れた術であるとの意で、かく名付けられたものであらう。

平安朝時代に於て外術を行つた狀態は、先づ『今昔物語』に、今は昔、京に外術と云ふ事を好みて役とする下衆法師有りけり、履きたる足駄尻切などを忽と犬の子などに成して這はせ、又懐より狐を鳴かせて出し、又馬牛の立てる尻より入りて、口より出でなど爲る事をぞしけるとあるのを初め、陽成天皇の御世に道範と云ふ瀧口が、信濃國の郡司が家の女房に、外術によつて閇（陰莖）を取られたので、後に禮を厚うして郡司から外術を習つて歸京したが、瀧口の陣で古藁沓を三尺許りの



（馬腹術）

藝と成し、[illegible]

北に、成らぬ柿と云ふ大木があつた。大和國から馬に瓜の籠を負はせて京上りの下衆共は、其木蔭に思ひながら、携へて來た私物の瓜を食つて居た。折柄翁の來かゝつて、我にも瓜を一つ給はれと乞ふたところ、下衆答へて、此の瓜は人の京へ遣はす物であるから與へ難しといふ。さらば我瓜を作つて食はんと云ひながら、翁は地を掘つて畠のやうにしたが、其所に下衆共の食散らした瓜の核を植ゑた。すると忽ち二葉生えて、見る〳〵中に這廣がり、花咲くかと思ふ間もなく早數多の瓜實つて、然かも見事に熟したのである。そこで翁は其瓜を取つて食ひ、又下衆共や道行く人々にも食はせた上、何處ともなく立去つて了つた。さて下衆共もいざ行かんとて籠を見ると、こは如何に瓜一つも無いのに呆れ果て、空しく國へ引歸したとある。

右に述べた外術の中で、足駄を犬に爲す術は變屁化

魚術と稱へ、牛馬の尻から口へ出る術は馬腹術と呼んで、ともに唐朝の散樂雜戲の一種であるが、又即時に瓜を實らす術も、前に述べた『漢書』張騫傳の註にある生花術であるから、孰れも印度の道法に據つて行つた事が知れる。

當時陰陽家で外術を行つた者も多かつたが、中に就て安倍晴明は其尤なる者であつた。『右記』道滿法師を搦捕るの條に、晴明が紙に畫いた鷺を空中へ飛ばし、其畫鷺の落ちた三條大宮で、道滿法師を捕へた事を載せ、又池の邊りを步む數疋の蝦蟆の上へ、晴明が呪文を誦へて草の葉を投遣ると、蝦蟆は大石に壓せられたやうに、眞平になつて死んだ事が、『今昔物語』に見えてゐる。

かく平安朝時代に盛んに行はれた外術も、鎌倉時代には中絕したものか、其名目すら絕えて文獻に見えない。併しそれも一時の事で、室町時代に至つて復活してからは世に幻術と呼ばれ、其術を行ふ者を遁師と稱してゐた。遁師中最も傑出した者は、南都の住人果心居士で、觀者を震駭せしむるやうな奇怪の幻術を行つた事が、近畿の傳說や江戶時代開版の怪異談に記されてゐる。依て以下傳說と怪異談とを取捨して、當時代に行はれた幻術の光景を述べやう。

或時元興寺の塔へ如何して登つたのであらう、果心居士が其九輪の頂上に立つて、衣服を脫いで振ひ、又打着て帶をしめ、頂上に腰懸けて世上を眺望してゐたといふ。其頃松永彈正久秀が多門城に居たので、閑暇の時には果心居士を招いて語り慰んでゐた。或夜彈正戲れに、我れ戰場に臨んで白刃を交へても、終に恐ろしとも覺えなんだ、汝試みに幻術を行つて、我れを恐れしめよと云ふた。居士承知して、さらば刀劍の類と近習を遠ざけ、又燈火も消し給へといふので、そのやうにして唯二人閑座してゐた。やがて居士ツと立つて、廣椽を步んで前栽へ行くと見えたが、俄に月暗くなるや、風は蕭々と雨そぼ降つて、何となく味氣なさの身に染込むやうに、今迄には覺えぬ程心細くなつたので、これは又如何した事かと外を見やると、廣椽に人の佇んでゐるやうである。よく見ると瘦せた女の髮を長くさげたのが、する〳〵と步み寄つて、彈正に對つて坐つた。何者ぞと問ふとさも苦げな聲で、今夜はさぞ徒然におはしましやう、御前に人さへもなくてと云ふのを聞くと、正しく五年以前に病死した亡き妻の聲に違はないので、流石の彈正も餘りの凄じさに堪兼ねたものか、果心居士止めよと呼ばゝると、件の女は忽ち男の聲となつて、これに侍ると云ふのを見ると居士であつた。

右は奈良の遺老が談話を聞書きしたといふ中山三柳の『醍醐隨筆』に據つて記したのであるが、林文會堂の『玉箒木』にも亦右の一條を載せて、更に左の幻術を附記してゐる。

或時果心居士が猿澤の池の邊りを通りかゝると、其所に居合はせた人々から、幻術を懇望された。そこで居士は汀の篠の葉をとつて、呪文を誦へて池の面へ散らすと、それが悉く大魚に成つて、尾を振り鰭をあげて游ぐ見事さに、觀る者共思はず感歎の聲をあげたといふ。又或夜手飼町の某家で、數名の客を招いて酒宴を催したが、其客の中で果心居士と懇意の者があつて、奇怪極まる幻術の話を初めた。滿坐耳を傾けて且つ怪み且驚いて聞惚れてゐた。やがて話が終ると一人の客疑はしげな顏で、其居士を此坐へ迎へて幻術をさせたいものである、よもや話ほどの奇特はあるまいといふ。居士と懇意の客打頷いて、見ないうちはさういふ疑ひの起るのも道理である。幸ひ居士は今宵この近所の家に居るから、一ツ賴んで見やうと云ひながら出て行つたが、間も無く居士と同道して來た。皆々悅んで出迎へると、居士は靜に坐敷へなほつて、何にても御望あれ、慰みに御目にかけやうと云ふ。先に幻術の話を疑つた客進み出て、拙者は小智偏見の者で、未だ神變不可思議の事を見知らない、何ぞ拙者の身に就いて、奇特を示し給へと望んだ。居士打笑つて、自分が見ないからとて、他の奇特を疑ひ給ふなと云ひ乍ら、其座に在つた楊枝を取つて、彼客の上齒を左から右へさら〳〵と撫でると、忽ち上齒殘らずふらふらと浮出して、今にも脫落ちさうになつた。此時彼客は恐れと悲みの聲をあげて、何卒御慈悲を以て故のやうになし給はれと、涙ながらに詫言をしたので、居士は是に懲り給へと云ひながら、又以前の楊枝で今度は右から左へ一撫ですると、浮き齒はひし〳〵と固つて故のやうになつた。此奇特を目のあたりに見た人々は、迚もの事に此座敷の眞中で、何ぞ凄じい幻術を見せ給はれと所望した。居士はそれこそ易き事であると、何やらん呪文を誦へ、扇を以て奧の方を麾くと、忽ち座敷は一面の洪水となつて、渦卷く水に諸道具が流れ出した。是はと驚く中に水嵩まさつて、早人々の胸を



『元祿版 玉箒木』所載

浸す程になつた。是だけでも恐ろしいのに、更に大浪の打重なると同時に、奥の方から十丈餘りの大蛇が角を振り大口を開いて、人々を目懸け浪を蹴立てゝ出て來た。其凄じさに人々は魂も消ゆる計り、逃出さうと踠く刹那、大浪に押されて倒れたと迄は覺えたが、其後は孰れも人心地を失つて了つた。翌朝隣人に呼起されて心付くと、座敷の體は昨夜のまゝで、道具の置き所などは、少しの變りも無かつた。

近畿の傳說にも亦右の二條と大同小異のものがある。其他『義殘後覺』を初め、『御伽人形』や『古今堪忍記』にも、前に述べた生花術や居人術に類似した幻術談を載せてゐるが、然迄はと思つて玆に省く事とした。

果心居士の最後に就いては、恕翁の『虚實雜談集』に、豐太閤或時果心居士を召されて、不思議の術を見せよとの仰せに、ハツとの答へと同時に、白晝忽ち闇夜となつた。これは可笑しとも思ひ給ふ所へ女現はれて、太閤に向つて切りに恨み託つのである。それは太閤が未だ藤吉郎といつた時に、或女と契つたが間も無く病死した。この飽かぬ別れを胸に祕めて、終に何人にも語つた事が無かつたに、今正しく爰に現はれて、藤吉郎が昔に咄した事をまさ／＼と述べるのである。是を聞いて太閤の思ふやうは、我が胸中の祕事をかく知つてゐるといふのは曲事である。かゝる者を生かし置いては、後に如何なる災禍を惹起すやも知れないと、近習を呼んで居士を縛らせ、磔刑に行へと命じた。居士は刑場で役人にいふには、我れ今まで樣々の術を行つたが、未だ鼠に成らなかつたのは遺憾である。願くば少し繩を緩め給へと乞ふた。役人は何心なく繩を少し緩めると、忽ち鼠と成つて磔柱を攀登つたが、折しも空から鳶舞下つて、其鼠を掴んだまゝ飛去つて了つたと記してゐる。この一條は異聞といふのみで、傍證の無き限り信を措くに足らないのは、其書名を見ても知れる事であるが、それは兎に角述師としては、實に恰當の最後といふべきである。

かく幻術は奇怪極まるものであるから、桃山時代に耶蘇教徒の魔法と同一視されて、共に嚴禁せられてからは、術中の平凡なものゝみが、放下師に傳はつて演ぜられたが、是ぞ後世に所謂手品の濫觴をなすものである。併しながら妖幻術は全く絕えたのでは無い、元祿年間三都の觀場で、觀客を驚殺せしめた放下師鹽屋長次郎の呑馬術の如きは、恐らく述師の遺法に據つて演じたものであらう。

第三　放下

奈良朝時代に支那から傳來した散樂雜戲中で、一足や高足を

初め、刀玉、品玉、輪鼓等は、前に述べた呪師と同じ理由で、平安朝時代に田樂と結合して、猿樂から分離したものであるが、北條高時や足利尊氏の弄ぶところとなつて、猿樂を壓倒するの流行を極めたのである。されど滿つれば虧くる世の習ひで、室町時代中期に至り、能樂勃興の爲に衰微して了つた。そこで田樂の雜伎中輪鼓と品玉を演じた法師は獨立して、更に手鞠や筑子の二曲と述師から傳はつた幻戯とを加へ、洛京寺社の境内や巷衢の所々で勸進興行をしたのである。世俗是を放下僧と呼んだが、後其業の俗人に移つてからは、放下師と稱するやうになつた。

放下の名義に就いては、『心眼錄』に、禪家の語錄に放下といふ事が往々に見えてゐる。即ち諸緣を放擲して無我に入るの意である。其やうに伎藝を行ふ時には、一切の妄念を放擲して無障無礙になす故に、放下と名付けたとあるので、其意義はいと明かである。

當時放下が民間で盛んに行はれた事は、謡曲の『放下僧』に


『七十一番職人盡歌合』所載

胴色まれて、其案じ出したる事の餘、この比人の翫び餘は放下にて候程に、某は放下になり候べしとあるのを見ても、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。かく放下は室町時代に於ける民衆藝術であつたが、其流行の極は、『看聞日記』嘉吉元年四月の條に

放下參る、手鞠、龍子、品玉等藝を施す、甚だ興有り、細美布一ツ給ふ、リウゴ甚だ上手なり。

とのやうに、將軍家の上覽ともなつて、大いに面目を施したのである。

室町時代の民衆藝術家ともいふべき放下師の演じた曲名は既に記したが、たゞ曲名のみでは、如何なる伎を演じたのであるか、解せ兼ねやうとの老婆心から、左に聊か説明を加へる事とした。

輪鼓は「リウゴ」と訓み、龍子は其當字である。『和名類聚抄』に、輪鼓を弄する者一人なり、但し其形細腰鼓の如し、而して絲上に輪鼓す、故に以て名とすと見え、其形狀及び方法は、十數年前英國式玩具と稱して、一部に行はれた「ヂアボロ」

酷似したものである。されば此曲を演ずる放下師は二人相對して、甲は先づ輪鼓を絲の上で少しづつ投上げながら廻はすと、終に勢ひ強くなる所を、高く向ふへ投遣るのであるが、乙はそれを巧みに絲で受止め、更に前のやうにして、種々の曲を盡したものと思はれる。『七十一番職人盡歌合』所載放下師の圖に據れば、放下師が此輪鼓を衣服の模樣として、己が家業の象徴としたところから見ると、當時輪鼓は放下師所演の雜伎中、最も重きを置いた事が知れる。

筑子は「コギリコ」と訓み、小切子の字を當てたものもあるが、其形狀は凡そ直徑五分長さ一尺計りの竹である。放下師は夫を挿圖のやうに指頭で弄び、或は打鳴らしたり又は曲取り等をしたのである。『七十一番職人盡歌合』に

月見つゝうたふ放下のこきりこの竹の夜聲のすみ渡るかな。

とあれば、打鳴らすと微妙の音を發したものであらう。後の綾織は此伎の一變したものである。

幻戯は「メクラマシ」と訓んで、人目を眩惑して其術を行ふところから發した名目である。例へば刀を呑み火上を歩き、又は底無しの空桶から種々の品を取出すなどの伎である。この桶は多く績んだ苧を盛る器を用ゐたので、後に此伎を緒小桶（ヲゴケ）と稱するやうになつた。

手鞠は手鞠の曲取りであるが、品玉は「ツナダマ」と訓み、唐朝散樂雜戯の一種弄丸の和名である。畢竟種々の品を手玉にとるところから名付けられたものであらう。當時曲手鞠と品玉とを演じた光景は、『看聞日記』永享八年正月二十八日の條に

藤壽石阿召されて參る、石阿手鞠つき名人なり、藤壽先づ藝を施す、次に石阿手鞠をつく、三を以て之をつく、茶碗器々手鞠取合はせつく、其打合ふ聲キン〳〵と鳴る、捷斎斎等出され之をつく、手鞠を以て天井のふちに次第につきあつ、敢て落る事なし、神變奇特の事なり、兩人の藝目を驚かす、希代の見物なり。

又『建内記』文安四年三月二十二日の條に

石阿彌藝能を施す、其儀各拳の如き石二つと手鞠を突く、又茶碗と石と之を突く、又豆と石と、茶碗と豆と又天目と石と程々之を突く、其體希代の壯觀、未曾有の風情なり、普廣院殿（足利六代將軍義教）の御時、用介より唐人來朝の時彼の藝能を見す、異朝に於て等類無きの儀の由讃嘆す。

とあるので、其一斑を知る事が出來やう。後世豆藏が大道で豆と石と徳利との曲取りに喝采を博したのは、恐らく此遺風であらう。かくて江戸時代となつて、放下を業とする者門から一派に分

かれ、一は辻放下師即ち後に豆藏と呼ばれた大道藝人となり、一は『京都御役所向大概覺書』四條芝居間數併に名代の事の條に

一　放下師物眞似　豐後屋四右衛門

寛文九酉年正月八日、宮崎若狹守在役の節名代赦免。

とのやうに、見世物小芝居となつたが、放下の名目廢れた後は、世俗に手妻又は手品と呼ばるゝやうになつた。

第四　手品

放下を手品又は手妻と呼んだのは、延寶天和の頃からで、延寶元年吟『宗因千句』に「茶碗の露は何にたとへん・品玉の手品はとかう申されず」とあり、又天和二年作『天和笑委集』に、鉄鍬刀の手妻事とあるのが、恐らく最古のものであらう。其後手品は都鄙を通じて大いに行はれたものであるが、當時の記錄や隨筆などには、何年何月から某の手品興行とのやうに、唯名目を揭げたのみで、明細に記したものは極めて稀である。是恐らく名人の輩出しなかつた結果、多く在來りの曲を演じて、新機軸を出す者が尠かつた[illegible]一見世物の番繪やビラや引札等にも、亦手品に關するものは實に稀有である。されば見世物中手品の記述が、他に比して貧弱なのも亦止むを得ざる所である。



上圖『寛永年代辻放下圖』下圖『年中行事繪卷』所載

一　品玉

品玉の曲が室町時代から引續いて世に行はれてゐた事は、寛永十年選『狗獨集』に宇治にてとの題で「手柄の弄玉にとる蛍かな、」寛永二十年版本『あぶらかす』に「にぎりこぶしにちかきたつふり・品玉もをとなの目には人やらで」慶安二年版本『吾吟我集』に放下するを見てとの題で「品玉か何ぞと人の問ひし時とこたへん消へてなければ、」萬治三年版本『懐子』に魂祭との題で「まつるたまを見する放下の品もがな」寛文二年版本『江戸名所記』禰宜町見世物の條に、其外術品玉いろ〳〵見物する事どもありて、鼠戸をならべ太鼓をうつ。寛文四年作『出來

宝暦時 四谷門口見世蔵の中に店を出したといふので知れるもの
の、孰れも名目のみで、両者の名はもとより、更に明細の記述
は無いのは遺憾である。かくて天和年代に至り、武蔵に長之丞
江戸に山本山彦太夫といふ名人出現はれて、大いに行はれたの
である。長之丞の事は天和三年版本『[illegible]一時[illegible]』に
[illegible]に今年何の[illegible]とか、[illegible]の[illegible]あり、一ッ二ッ三ッ[illegible]
のうちに[illegible]の[illegible]を入れまぜ、小黒[illegible]の[illegible]を[illegible]し、
後には[illegible]の術とて、[illegible]を[illegible]ってあたりに[illegible]して、小
刀を二ッも三ッも入れまじへ、一ッも崩れずあやまつ事なく[illegible]を
出す。
とあり、又彦太夫に就いては、元禄[illegible]年作『大和[illegible]』に
曲独楽八ッ搦、是げあげを取加へ、ほか刀の手妻事
とある八ッ搦は、八本の搦にたく、[illegible]の[illegible]で、細工物の
事なる事を云ふのであるが、是には数本の搦をなげて[illegible]を加へ
一、独楽即ち上下に曲取りをする事である。又[illegible]刀とあるの
も、竹と同様[illegible]品の曲取りであるが、孰れも刃物であるから、
観客の手に汗を握らせ[illegible]、喝采を博したものであらう。

二　綾織

綾織は[illegible]に[illegible]ともいへ、蹴子の一変したもので[illegible]の一種
である。其名目は元禄[illegible]年版本『人倫訓蒙図彙』文綾の條に
かれが名を云ふにはあらず、二ッ三ッ四ッの竹を以て、上下
へ上げ上下品をいふなり。其品は[illegible]を綴るには緒の糸を通
す時、緒の糸上下をたすなり。是綾手の足の[illegible]やうなり。
今[illegible]よく似たるを以て文綾といふなり。
とある[illegible]したものであるが、其竹は[illegible]で[illegible]いた[illegible]な物[illegible]
あつた事と、後には品玉と同じく[illegible]物をも取雑ぜて曲取りした
事は、正徳年間版本『和漢三才図会』独楽の條に
[illegible]に[illegible]き、尺[illegible]り、形は[illegible]いた[illegible]の如くたるものを以て七八
本、之に[illegible]る[illegible]は[illegible]、或は[illegible]、或は小[illegible]、或は[illegible]、或は[illegible]
[illegible]を空に投じて、[illegible]を[illegible]して之を[illegible]す。[illegible]に[illegible]も又は
[illegible]、又は竹の頭に付け、竹の[illegible]に[illegible]せて亦能く之を[illegible]す。
とあるので何たるかと同時に、其演伎の光景も亦明かである。元禄
年代には京都で[illegible]と云ふ名人で[illegible]名であつたものか、元禄
十[illegible]年版本『[illegible]』[illegible]の[illegible]を評した條に
其[illegible]も[illegible]めし[illegible]り、[illegible]はさもなくて、後[illegible]あつて、[illegible]
に[illegible]之助も及ばぬ曲[illegible]に[illegible]はり。
又元禄十五年版本『役者[illegible]』坂田藤十郎を評した條に
田舎家には坂田氏の[illegible]よりに、[illegible]之助が綾織があらう。
と見えてゐる。

三　長柄杓

手鞠の曲は、江戸時代に品玉や綾織の伎中に取雜ぜて演ぜらるるやうになつてからは、長柄杓と號けた新曲が現はれた。それは長さ二間計りの柄の付いた杓を左手に持ち、右手で手鞠四五個を杓の中へ投込むや否や、柄を斜にすると、手鞠は順々に柄を傳つて、手許へ轉がつて來るのを茶碗で受けては、又杓の中へ投遣る曲である。天和貞享年代斯道の達人ともいふべきは、江戸の出來山初太夫と大坂の長崎長左衛門とで、天和二年作『天和笑委集』に、爰に出來山長びしやくとあり、又貞享二年版本『近年諸國咄』に、長崎半左衛門が柄杓の曲を名譽と思へばと見えてゐる。併し手鞠の曲は全く絕えたのではない、『正德日記』正德六年の條に

二月四日、堺町小芝居大阪三國小太夫手まりの曲見物、十文づつにて見せ申候。

とあるから、緒に興行されたものであらう

四　緒小桶

緒小桶は放下の條に述べたやうに、底無しの空桶から種々の品を取り出す手品であるが、『玉露叢』所載延寶八年四月十八日、千代田城二の丸で都右近の放下上覽の番組中に、「ヲゴケの放下と見え、又天和二年作『天和笑委集』に、底無き緒小桶に見えつ隱れつ様様の作り物あり、貞享三年版本『雍州府志』京都四條川原見世物の條に緒小桶とあるのみで、未だ明細に記したものを見ないのは遺憾である。後に辻放下師の演じたオデテコは、この伎の一變したものである。



正德版『和漢三才圖會』所載

以上五種の曲は、寶永正德以後專ら辻放下師即ち豆藏によつて演ぜられ、名人輩出して大いに行はれたがため、觀場では稀に興行するに過ぎなかつた。又手鞠の曲も後に輕業の附屬となつて、綱渡りなどの前藝として演ぜられたのである。

五 曲鞠

蹴鞠は支那で蹋鞠戯又は蹵鞠戯とも呼んで、散樂雜戯の一種であるが、本邦に傳來したのは、奈良朝時代の事である。この蹴鞠に種々の曲を盡した始めは詳でないが、『今昔物語』に、今は昔、右近の陣に春近といふ舍人有りけり、鞠をなむ微妙に蹴けるとあり、又『古今著聞集』侍從大納言成通曲鞠の條に、鞠を足に載せて、山雀のもどりうつやうに飛返られたりとあるのが、最古の記錄ではなからうか。室町時代に蜘舞の法師が、奈良で曲鞠を演じた事は、南都興福寺什物『大般若經』奧書天文十八年己酉霜月二十二日の條に、

高さ十丈計り、横一町計りに繩一筋張りて、其上を片足鞠をして行く。

とある。是恐らく曲鞠勸進の始めであらう。

江戸時代となつて曲鞠を三都で興行したのは、京都の人外良右近で、寛永正保の頃である。『卜養狂歌集』に

外良右近といふ者、曲鞠を蹴る名人なり、或人の所にて興行ありしに、色々の曲を盡し侍りければ、歌鞠といへば歌にも曲をよめと所望せられて

楊貴妃の時にはじまりけるものはよそやげいしやうういらうの曲。

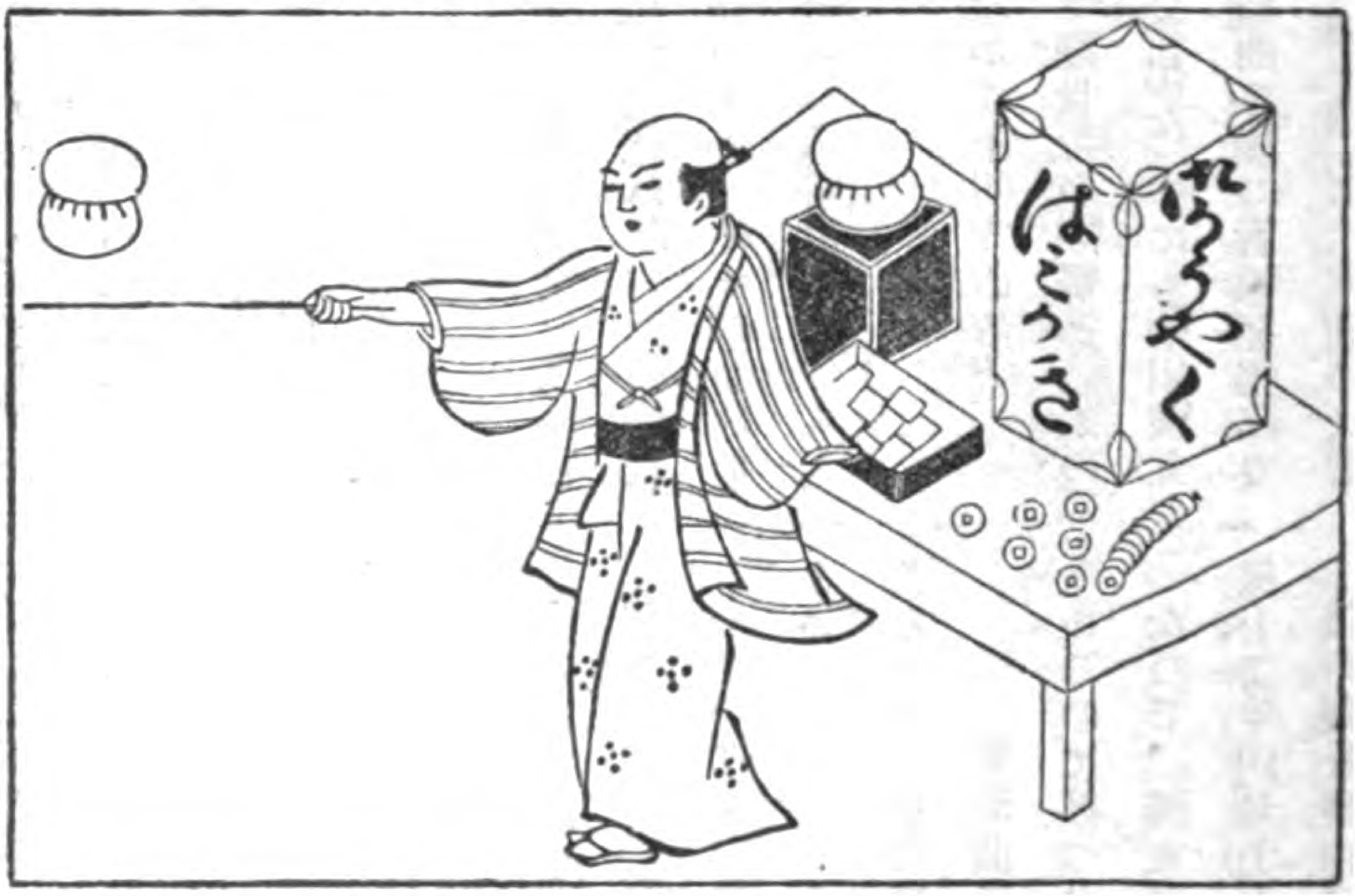


正徳版『和漢三才圖會』所載

とあるから、羽衣霓裳の曲を初め、種々の曲を盡したものであらう。一體蹴鞠は中古以來專ら堂上の藝となつて、和歌と蹴鞠を兩道と稱する程尊重されたものである。されば外良右近が蹴鞠の師範家をも憚らず、我意に任せて三都で興行し、卑賤の町人共にも見せたといふので、飛鳥井家から御咎めがあつて、右近が儀を江戸幕府へ訴へられた。そこで右近を召捕つて御僉議となつたが、終に伊豆の大島へ遠流された事が、『玉滴隱見』に見えてゐる。延寶八年版本『阿蘭陀丸二番船』に、「すこすこと舟の舳板に立上り・身は外良が蹴たる曲まり」とあるのは、右近が大島へ流される時、見送りの人

人と名殘を惜むの餘り、船の舳先で曲鞠を蹴つたといふ傳説に據つて吟じたものである。右近の子政光も亦曲鞠に堪能であつたから、元祿初年江戸滯在中は、日々諸侯へ招かれて其妙伎を演じた事が、元祿年間版本『蹴鞠指南大成』序に記されてゐる。

外良右近と殆んど同時に、京都の松下主殿は、代々露柳役を勤めた家柄だけに曲鞠の名人で、住吉の反橋を蹴渡らん稽古に、鞠を蹴けながら屋根を上り又下つたといふ。更に妙顯寺では、仁王門から鞠を蹴つて諸堂に上がり、椽を廻つても遂に鞠を落さなかつたと、灰屋紹益が目撃のまゝを、其著『賑草』に記してゐる。尤も是は興行したのではない。見世物としては延寶の都右近、天和の出來山初太夫が斯道の達人で、孰れも江戸で興行したのであるが、惜い哉名目を掲げたのみで、明細の記錄が無い。殊に都右近は、延寶八年四月十八日、千代田城二の丸で曲鞠を上覧に供したが、如何なる曲を演じたか、絶えて知るに由もないのは、返す〴〵も遺憾である。



寶暦版『風姿紀文』所載

元祿の頃から芝神明社地で、膏藥と齒磨を賣る御愛敬に、曲鞠を演じて名高かつた三條小六は、外良政光が江戸滯在中に習つたのであるが、享保年代には既に江戸の一名物として取囃されてゐた事は享保十八年版本『江戸名物鹿子』に三條小六との題で、「しの竹の雪に釣合ふけしき哉」とあるので知れる。この小六は竹一本で種々の曲を盡したのであつた。寶暦三年版本『風姿紀文』芝神明社地の大道藝商人を記せる條に、手で人を呼ぶ放下、足で往來を招く曲鞠、又安永六年版本『土地萬兩』齒磨の條に、堪能・三條小六・芝・其名は高くのぼる曲まりとあるのは二代目であるが、是も亦竹一本で、寛政十年版本『快談文草』明和年代葭蕩島新地繁華の條に、鞠の小六が山雀の輪抜けに衣紋流しまで見倒しとのやうな曲を演じたのである。この二代目小六の弟子で小かんといふ

女太夫が、安永五年六月から中洲新地で曲鞠を見世物として興行した。安永九年版本『當世阿多福面』見世物評判の條に、中より下の手へ落ちては、小かんが鞠友世が力とのやうに、妙手ではなかつたものの、女ならでは夜の明けぬ國、小かんが曲まり評判夥敷く、見る人いづれも涎を流すと『當風見聞草』に記してあるから、當時江戸の人氣を呼んだ事が知れる。因みに前記友世が力とあるのは、柳川ともよといふ力持の女太夫で、是亦世評の高かつたものである。

文化度では、橘菊丸が大阪の難波新地や天滿天神社内で、曲鞠を興行して大當をとつた事は、『攝陽年鑑』文化八年六月の條に

難波新地夕涼みにて、橘菊丸といふ鞠の上手、種々の曲鞠を蹴て、諸人の目を驚かし大當り、其後天滿天神社内にても大當り。

とあるもの〻、當時如何なる曲を演じたかは不明である。

天保十二年三月二十八日から、淺草寺觀世音の開帳といふので、參詣人を目當に奥山へ種々の見世物が出た。中にも菊川國丸の曲鞠は、飛鳥井家を憚つたものか、表面曲手鞠の看板を掲げてゐたが、頗る名人で十九通りの飛離れた曲を演じて、空前の大當りを取つた。其曲名は天保十二年一枚摺物『菊川曲手鞠報條』に

○亂杭渡り○中づり○文字書き○梯子登り○八ツ橋○延付け○摘み鞠○襷がけ○指廻し○下り藤○八重櫻○足袋脱ぎ○負ひ鞠○扇子どめ○平た鞠○煙草呑み○瀧流し○花生○高鞠。

とある。國丸は京都の御鞠師竹の屋の倅で、通稱を田中太一郎といひ、飛鳥井家へ入門して、紫裙濟まで許された程の者であるが、放蕩の爲に破門されてからは、江戸へ下つて淺草田町の藥種屋に滞在してゐた。それを香具師が勸誘した結果、奥山で曲鞠の興行となつたのである。當時曲鞠の流行につれ

めりやすへまりの曲、硯の海に筆そへて、かくことぶきのすへぞめでたき。

獨吟へ青柳の鞠にはあらで難波江の、合へあしの下より出る月
合へかげなつかしく夜半も過ぎ、合へあくる間惜き鐘の音。

といふメリヤスの獨吟が遊里でうたはれたが、歌中に難波江とあるのは、觀場の看板に

風流曲手鞠　大坂下り太夫　菊川國丸

とあるのに據つたものであらう。かく曲鞠は連日の大入りをとつたので、國丸の給金も一日五兩といふ大金であつた事は、天保十二年四月十九日に、曲亭馬琴から殿村篠齋に宛た手簡に

淺草觀音奥山に此節多く見世物出候内、曲鞠甚敷大入にて、見物日に五六千人宛も入候て、鞠師の給金一日に五兩宛の由、餘程手を放れ候事を致候由、見候者の咄に御座候、鞠の

見世物は珍敷候上、此者大名人にて餘程意外の藝を盡し、目を驚かし候由に御座候、只今の風聞は唯是のみに候

と見えてゐる。當時國丸の寄寓してゐた家は田町で惡所へ近く、然も遊び盛りの年であるが叱る者はなし、其上日々大金を得るといふ三拍子が揃つてゐたから無事に濟まう筈はない、夜毎に吉原へ通つては、豪遊を極めたのである。此豪遊の取沙汰から、曲鞠興行の停止となつて、終に歸國を命ぜられたのは、若氣の至りとは云へ笑止の事である。『藤岡屋日記』天保十二年の條に

三月より淺草觀音開帳の砌、奥山に於て曲鞠大評判にて、見物群集致し大錢儲けにて、毎夜吉原へ遊びに行きし故に、大盜人なり又は公家の二男なりとの評判故に、寺社奉行松平伊賀守召捕り吟味之あり候へ共、左樣の儀も之なき故に、寺社奉行も詮方なく落着す、淺草奥山に於て鞠興行の儀御差留めにて、國許へ歸るべき由仰渡さる。



天保版『菊川內手鞠引札』所載

とある寺社奉行所の判決は、實に矛盾を極めたもので、左樣の儀もこれなき故に無事落着すなら能く分つてゐるが、詮方なく落着すとあるのが可笑しい。殊に詮方なくも兎に角落着した以上、曲鞠興行を差留める理由は毫もないのに、歸國まで命じたのは、何か裏面で寺社奉行を操る者があつた證據である。是畢竟飛鳥井家から、舊門人國丸の曲鞠興行に就いて、江戸幕府へ訴へられたので、寺社奉行所では夫を表面へ出さず、たゞ大盜人なりとの評判を口實に召捕つた結果、かく矛盾した申渡しとなつたものと思はれる。

見世物界の曲鞠も、此國丸を掉尾の流行として廢絶したのは、例へ名人が現はれやうとも、香具師の方で飛鳥井家からの苦情を恐れ、興行する者が無かつた爲であらう。併し此因襲の打破された明治維新後に、曲鞠が東京で興行された事は、『武江年表』明治四年三月の條に

二十日より六十日の願ひにて、本所回向院に於て相州鬮本扱

勝寺道了菩薩開帳あり境内に蹴鞠曲まりの見世物出る。

と見えてゐる。

六　枕返し

枕返しは支那で弄枕と稱して、散樂雜戲の一種であつたことは、『唐會要』散樂雜戲の條に、弄枕珠とあるので知らるるものの、當時本邦に傳來しなかつたものか、江戸時代以前の典籍に其名目すら見えない。されば本邦の枕返しは、寛永年代に京都で善次郎と武藏が演じたのに始まつたが正保年間江戸へ下つて、堺町の見世物小芝居で興行したのである。枕返しの方法は、正德年間版本『和漢三才圖會』弄丸の條に

一種弄枕あり、木枕十個を以つて竪に相重ねて之を捧ぐ、恰も一柱の如し、中に好む所の枕を拔去る、數次皆然り、數品の弄枕あり。

とあるもので、當時町家の若者などが、此伎を眞似て遊戲した事は、正保二年版本『ひそめ草』に

若き人達寄合ひ遊ぶ中に、一人木枕多く集めて重ねあげ、手に握へ左右へ渡す、人の好む所により切る、又二つ手に握る、いか樣にも自由になす、拳一つを動かし、肱屈くだりきり／＼と廻はしなどして、色々の戲れをする。

とあるので知れる。寛文から延寶へかけて三都を通じて行はれた事は、寛文四年作『出來齋京土產』四條川原見世物の條に枕返しとあり、寛文十二年版本『後撰夷曲集』に芝居にて枕返しの曲を見てとの題で、「肱をまげ枕がへしをする人の樂みはその腕にありなん」と見え、又寛文十二年吟『季吟二十會集』に、「花筵しきりに枕返しゝて・腕金剛やあかぬ永き日」とあるを初め、延寶八年版本『山の端千句』に、「前髮は枕返しの間なり・戀草をはむ鼠戸の月」、延寶年間版本『芝肴』に、「枕反悟一生一錢財拋鼠戸」、延寶八年版本『江戸向の岡』に、「ほとゝぎす枕返しを玉之助」とあるから、延寶度には江戸で玉之助といふ者が有名であつたものと思はれる。かくて貞享元祿年代には、放下師で芝居の座元を兼ねた古へ傳内が、斯道の名人であつた事は、元祿元年版本『日本永代藏』京都町人の悴が多藝を賞する條に、枕返しなどは古へ傳内に橫手をうたせと見へてゐる此傳内を師匠としたものか、元祿十四年版本『傾城色三味線』に、宮川町の子供屋の亭主、不斷常香盤なる舞臺藝不器用で際の多い若衆に枕返し舞の曲とのやうに、子供屋の亭主申合せ、抱への若衆即ち賓介郎に枕返しを練習させて、招かれた酒宴席上の一興として演ずる事が大いに行はれたのである。この流行は寶永二年興行『傾城反魂香』大津繪の精靈現はれて敵を防ぐ條に

二八ばかりの小人、枕返しの曲枕をつとりく、ぱちりく、ばらく、うつ波枕散枕、枕重ねに打うたれ、ちりくにこそ引きにけれ。

このやうに大津繪の畫材ともなつたのである。かく流行した枕返しも、寶永度以後廢れた者か、絶えて文籍に見えない。唯文化二年の春江戸東兩國で興行した大阪下り女輕業太夫玉本小金の繪番附中に、枕返しを演じてゐる圖を載せてゐるのみであるが、其小金が上下を着て額に野良帽子をあてたさまに畫かれてゐるは の、恐らく元祿寶永度に於ける若衆姿に倣つた者であらう。



寶永頃版『枕返繪番附』所載

七　幻戯

江戸時代初期に演ぜられた幻戯は、繩たらしと繩切りとである。繩たらしは、慶安元年版本『不可徳物語』京都四條川原見世物小芝居の條に

瞬は繩たらし、自業自縛の過去の惡因縁脱れがたし、朝より暮に及び高手小手に度々縛められ云々

とあるもので、舞臺へ盗賊と役人とに扮裝した者が二人現はれて、役人は盗賊を繩で嚴重に縛ると、やがてハッと掛聲して、其繩自から解ける伎である。故に盗人繩たらしとも呼んだが、たらしは子供たらしのたらしと同じく欺す意である。寛文六年版本『俳諧洗濯物』に、「鵜遣ひの呑ませぬ魚や繩たらし、」又寛文十一年版本『俳諧落花集』に、「方引に勝つや盗人繩たらし」ともあるから、正保から寛文へかけて專ら行はれたものである。

繩切りは、長い繩を尺餘に束ねて、刀を以て幾筋にも切り、更に其切り口と切り口とを結び合はせ、其繩を見物人の方へ投げると、何時か切り口の結び目が無くなつて、原の長い繩となるの曲である。寛文元年選『糸瓜草』に、「切つてつぐや放下のやうな糸櫻、」天和三年版本『俳諧空林風葉』に、「懸鯛や繩切り曲あり場のけさ」とあり、又貞享四年版本『江戸鹿子』に

堺町ふきや町の二丁は、古へよりあやつり見世物又は狂言盡し、或は放下の品玉繩切りの曲を業とする者ども寄集り、

とあれば、萬治から貞享へかけて、三都の觀場で演ぜられてゐた事が知れる。この細切りの曲は支那で續斷と云つて、晋時代既に行はれてゐた事は、『法苑珠林』に、晋の永嘉中に天竺國人が江南に渡來した、其人數術あつて能く舌を截り斷を續ぎ火を吐くの變化をするので、所在の士女聚つて共に觀試した。其術中の續斷とは、絹布を人に與へ、各一頭を執つて對し、夫を剪斷して了ふ、而して更に兩段を取つて合はせ、持つて之を視すると、則ちまた還連して舊と異る所が無いとあるので知れると同時に、もと印度に發した幻戯である事も亦明かである。

幻戯が德川四代將軍の上覽となつたのは、延寶八年四月十八日で、當時名人と云はれた都右近が、千代田城二の丸で演じたのである。其番組は『玉露叢』に

一、活鴨を三ツ籠より出す、一、山雀鼬になる所、一、籠より小鳥の出る所、一、玉子の曲、一、綸が雀になる所。

とあるが、右の五番は恐らく當時世に行はれた幻戯中の粹を拔いたものと思はれる。かくて元祿年代に至り、鹽屋長次郎が三都の觀場で呑馬術を演じて、觀客を驚殺せしめ、異常の人氣を呼んだのである。元祿十六年版本『寶船』に「曲りくねつたものでこそあれ・劍を呑む不動鹽屋の長次郎」元祿年間版本『輕口幾世餅』に

江戸堺町にて今度上方より罷り下りました鹽屋長次郎、根本は是ぢや〳〵、馬を呑みます牛を呑みますと、木戸で呼ばれど、鹽竇長次郎とある芝居四五軒もあれば、孰れが正眞ならんと、這入りかねて木戸口より覗く。

寶永四年版本『晝夜用心記』に

鹽の長次郎が馬を呑み牛をしな玉の曲。

とあるに據ると、劍は素より馬や牛を呑む奇怪の幻戯を演じて大いに行はれたが、江戸で興行の時には、紛らはしい名を附けた贋者も現はれる程の大當りを取つた事が知れる。かく長次郎の幻戯が大評判なので、元祿十七年版本『落葉集』に

三上り
へ鹽屋長次郎はこいさばにのせてのふさ、おきにやどん〳〵どんどろめけば、夜の目もよ寢られず、あさせうがいな。

又『寄木』に

へこゝに中頃ふどの吉三と申す人、酒をよう飲む、膳飲み椀のみかなだらひ、鹽屋の長次郎も我を折りやれ。

とのやうな流行小唄にまで謠はれた程である。當時此種の幻戯を他に演じた者があつたと見え正德年間版本『和漢三才圖會』に

按に幻戯は他の眼を眩ますなり、本朝にも亦間々これあり、或は座中忽ち水溢れ、以爲らく深淵に溺るゝが如くす、又磁器に水あり、忽然として生る鮒數十游ぎ走る、人四方に在つて其去來を視るに、敢て識る者なし

とある。蓋し呑牛馬術や出水術のやうな奇怪極まる幻戯は、練磨の結果演ずる手品と全く趣きを異にしてゐる。是れ恐らく室町時代に幻術を行つた遠師の遺法に據つて演じたものと思はれる。江戸時代中期以後かゝる幻戯を演じたものが絶えて無いのは、明和の頃京都二條の川端に住む生田中務が、奇怪の妖術を行つて刑に處せられたので、其後はかゝる術を演ずる者が絶えたと『よしあし草』に記してゐる。

化政度に於ける手品の名人は、江戸の芳川春藏と名古屋の佐竹仙太郎とである。春藏の事は『江戸沿革』に

文化度放下師に芳川春藏といふ者出て、人の手に碁石を握らする時、握らする如く思はせて、外し取る事幻術の如し、よりて其他にも奇をなし大に評を得る。

とあり、又仙太郎は政吉や新造などの子役を遣つて、葛籠の中へ子役を入れ、細引で堅く引くゝつて置くのであるが、太夫の掛け聲とともに、其の子役が忽然と出入口から現はれるといふ曲を初め、次に茶碗に水を入れて二ツ並べ、其茶碗の上へ横に差渡し五六寸の杉丸太を載せ、棒で其杉丸太を打つと、丸太は二つに打れても茶碗が損じない曲や、最後に火を喰いて更に口から火を吹出すの術を演じた事は、『猿猴庵日記』や『見世物雜誌』に記されてゐる。



『牛百人一句』所載

うかれの蝶の曲で名高い柳川一蝶齋が、江戸の觀場や寄席へ出演したのも亦文政度からであつた。うかれの蝶の曲とは、『江戸沿革』に

文政度は一蝶齋といふ者、紙の蝶を生けるが如くつかふ。

とあるもので、當時大いに持囃された曲である。併し此曲は一蝶齋が案出した新曲で無い事は、『誠垓只錄』に

文政二年の冬、葺屋町河岸に大阪下り谷川定吉の手品興行、うかれの蝶とて扇子にて紙の蝶をつかふ、柳川一蝶齋は是を學びしなり。

とあるので知れやう。當時江戸で定吉の新曲うかれの蝶は大評

制で、文政七年版本『茶番早合點』一編正月誂羽根突きの條に

羽根突きいつとなく葺屋町河岸にて見せたる蝶遣ひの仕打ちになる、扨蝶遣ひの仕打ち十分あつて、右の羽根は誠の羽根とかはり升ト吹替への羽根を見物中へ投げる、是を切つ掛けに下座は見世物打出しの太鼓となる、此時廻し枕を十出して、初めに出せし塗り枕を一ツづつ引替へながら、「先のは替り替り〳〵〳〵〇此頃大阪より谷川定吉同じくしげ野といふ者下り、葺屋町川岸にて紙の蝶を遣ひ、大當りしたり。

とのやうに、茶番にまで脚色まれた程であつた。この定吉のうかれの蝶に倣つて演じた柳川一蝶齋は、弘化四年に豐後大掾を受領すると同時に剃髮し、悴に一蝶齋の名を讓つたが、其改襲名の披露興行をしたのは、同年三月十八日から淺草寺觀世音開帳の時であつた。其節うかれの蝶とゝもに演じたのは、龍宮浦島の曲と妖怪人形手品の曲とである。それは機關仕掛の道具を利用して、人形を操つて早替りをするのであつたが、是だけでは物足らないやうであるから、更に古老の談話に據つて、演伎の光景を左に述べやう。

舞臺は龍宮城門外の背景で、浦島に豐後大掾、乙姫に一蝶齋が扮裝つてゐる。折しも下座の彈出す水調子に合はせて、歸心矢のやうな浦島も、是が最後の別れかと思ふと、流石に名殘が惜まれるといふやうな所作がある。やがて乙姫はしほ〳〵と上手へ這入ると、入違ひにゼンマイ仕掛の大蛸が、玉手箱を戴いたまゝ不恰好に這つて來る。浦島は其玉手箱を取上げて舞臺中央の前面に置くと、大蛸も亦上手へ這入る。浦島は懷しげに玉手箱を眺めて居たが、思ひ切つたといふ風で、紐を解き蓋を開けるや否や、箱から濛々と煙が立昇ると同時に、浦島の姿は消えたかと思ふ間もなく、蝶模樣の派手な衣服に同じ模樣の袴と早替りした豐後大掾が、迫上げ仕掛けで悠々と現はれる。そこで一禮の後大扇子を開いて、紙の蝶を宛然生てゐるやうに遣ふので、それが濟むのを一切として幕になる。是が龍宮浦島の曲の梗概であるが、妖怪人形手品の曲は、小幡小平次蒸籠拔けと題して、小平次に扮した豐後大掾が、舞臺に積重ねた大蒸籠を出沒して、妖怪人形を生あるものゝやうに遣ひ、或は幽靈に早替りなどをするので、ドド光線の利用で骸骨を踊らせて打出すのである。當時の世評に柳川の手品は、新奇の趣向であるといふ所から連日大入りで、錦繪として數種出版された程である。この豐後大掾の弟子で蝶十郎といふ者が、慶應二年に同業隅田川浪五郎一家とゝもに、米國人ベンコツに傭はれて洋行した。今其番組を見ると、幕末に於ける手品の一斑を知るに足ると思ふので、左に記す事とした。

〇三番叟株消人形、後に替り二間四面の幕に相成申候〇替り

人形乙姫、後に替り籠燈（）叶福助人形、同じく替り高さ五尺おかめ人形〇武樂の舞、同じく花車高さ二尺の造り物に相成申候（）ぜんまいから傀儡子人形〇ぜんまいからくり鶏卵比翼がへし〇大和錦籠小鳥の嫁入〇千壽萬壽の玉水からくり〇淀川瀧水からくり〇蝶の曲。

右の番組中蝶の曲は、柳川蝶十郎が演ずるので、其他は隅田川一家の手品である。替り人形を初めゼンマイや水からくりといひ、孰れも機械を利用したものばかりで、奇怪を極めた幻戯は素より、練磨の功を積まなければ、演ずる事の出來ない手品の類は、殆んど絶無である。是畢竟目先を替へやうとして、新奇新奇へと奔つたがために、終に行詰つたものでもあらうが、又當時の藝人は往年のそれのやうに、藝道を磨く名人氣質の者が稀なからで、其結果は興味豐富の藝術であつた手品も、無趣味の機械利用本位に墮落したのは實に遺憾である。



かくて手品界の行詰つてゐた所へ、明治九年に英國人ジョン・マルコム、同十二年に清國人張世存が渡來して、精新奇抜の西洋手品や南京手品を興行したので大いに行はれ、其爲に本邦の手品は、益々衰微を來したのである。當時外國手品と日本手品との特長を渾化せんと試みたのは歸天齋正一で、後松旭齋天一によつて大成されてからは、奇術又は魔術と稱するやうになつた。

されば本邦固有の手品は、柳川一派の者が偶々寄席で演ずる外、無名の大道藝人に其餘波を止めてゐたが、それも何時とはなしに絶えた後は、天一の門人天勝が歌劇應用の奇術と一變したのである。

第五　辻放下と豆藏

辻放下師は、巷衢の辻で其伎を演ずる所から發した名目で、無論小屋などは懸けず、唯莚二三枚を敷いた上で、竪物、輪鼓、品玉、綾織等の曲を演じ、一曲終る每に見物人から投錢を乞ふた非人である。辻放下の最も古いものと思はれるのは、寛永年代所畫の『辻放下之圖』で、圖上に「つぢはうかあぶないぞ〳〵」とあつて、辻放下師が竪物の曲

演じてゐる光景を畫き、其前に輪皷や綾竹や品玉に用ゐる器物が置かれてゐる。梁物とは梯子の一角を上顎部に立て、更に其梯子をくる〳〵と廻はしなどする曲である。この辻放下師を豆藏と呼ぶやうになつたのは、貞享元祿の頃大阪に豆藏といふ非人があつて、正徳年間版本『和漢三才圖會』に

按に貞享元祿の頃乞士有り、豆藏と名づく、市衢に立て毎に重き物を捧げて錢を貰ふ、兒をして梯に登らしめ、楊枝を嚙へ、其梯を楊枝の端に立て、起居行止意に任す、兒も亦常と爲して怖れず、或は長鎗を用ゐて倒に立て、鋒を鼻の尖に中て丶行き、或は桿心一條を用ゐて鼻の尖に立つ、而して桿心顚倒せず、蓋し輕重懸隔ともに奇異なり、然も練磨のみ。

とのやうな妙伎を演じて世に持囃され、其名聲四方に喧傳された結果、何時しか辻放下師の異名となつたものであらう。

當時辻放下師中、綾織、皿廻し、金輪遣ひ、オデテコ等の曲を演じた事は、元祿三年版本『人倫訓蒙圖彙』綾織の條に、綾竹と手鞠と鎌の曲取りの圖を載せ、又放下の條には皿廻しの態を畫いて、其傍に金輪が置かれてゐる。皿廻しは今も手品師の演ずるものと大同小異であるが、其秘曲に夕立の曲といふのがあつた。それは大皿へ水を入れたのを、竹の先に載せて廻はすのであるが、皿の廻はるに從つて勢ひが強くなると、水が四方へ飛散するので、多く旱天の時に演じて、降雨を待つ市民の喝采を博したのである。金輪遣ひの金輪は、直徑一尺計りの鐵の輪で、見た所繼ぎ目もないが、其輪を兩手に持つて、ヤツとの聲と丶もに打付けると、音もせず見事に繋がるのである。扨其繋がつた輪を鼻の油を付けると脱けるなどと戯言をいつて、鼻の尖へ擦付けると、原のやうに二ツの輪となる。これは前の繋で、更に奇妙なのは一ツの輪を空中へ投げ、落ちる所を手に持つた輪で受留めると、見事に輪が繋がるので、それを幾度か繰返して、繋がつた五六の輪を兩手で揉むやうにすると、悉く輪が離れてバラ〳〵と地に落ちるのである。法眼春卜撰の『半百人一句』に「ひづみあり輪にはでめあり後の月」とあるのは、金輪遣ひを吟じたものであるが、尙ほ『同書』にオデテコとの題で「味噌こしのはれする場所や芋の月」とあるオデテコは、手品の條に述べた緒小桶の一變したもので、布袋人形を笊で伏せ、オデテコ〳〵と囃して笊をとるとお龜人形に變り、又卵を伏せて矮雞に變はらすの類である。かくオデテコは囃しから發した名目であるが、其囃しも後にオデテコデンステテコデンと一變すると同時に、機關人形となつて大いに行はれた事は、後章機關の條下に述べる事とする。

寶永年間版本『今様踊くどき』中將姫開帳の節見世物の條

に、「富士の大雪もうちがりでけしの介」とある芥子の介に、元祿寶永の頃京都で名高い辻放下師で、豆と德利の曲取りに妙を得た者であつたが、後に江戸へ下り淺草寺境内で其曲を演じてゐた。寶曆十三年版本『根なし草』に

就中聖觀音は、餓鬼道にての化主之助と呼ばれ、衆生濟度の方便には、豆と德利の妙をやらかし。

又明和五年版本『禁古良探』に

大切なる主人の御道具を、芥子の介が德利投げるごとく、空へ力一杯。

とあるのは、京都から下つた元祖ではなく、二代目であつた事は、『街談錄』明和六年淺草寺名物見世物の條に

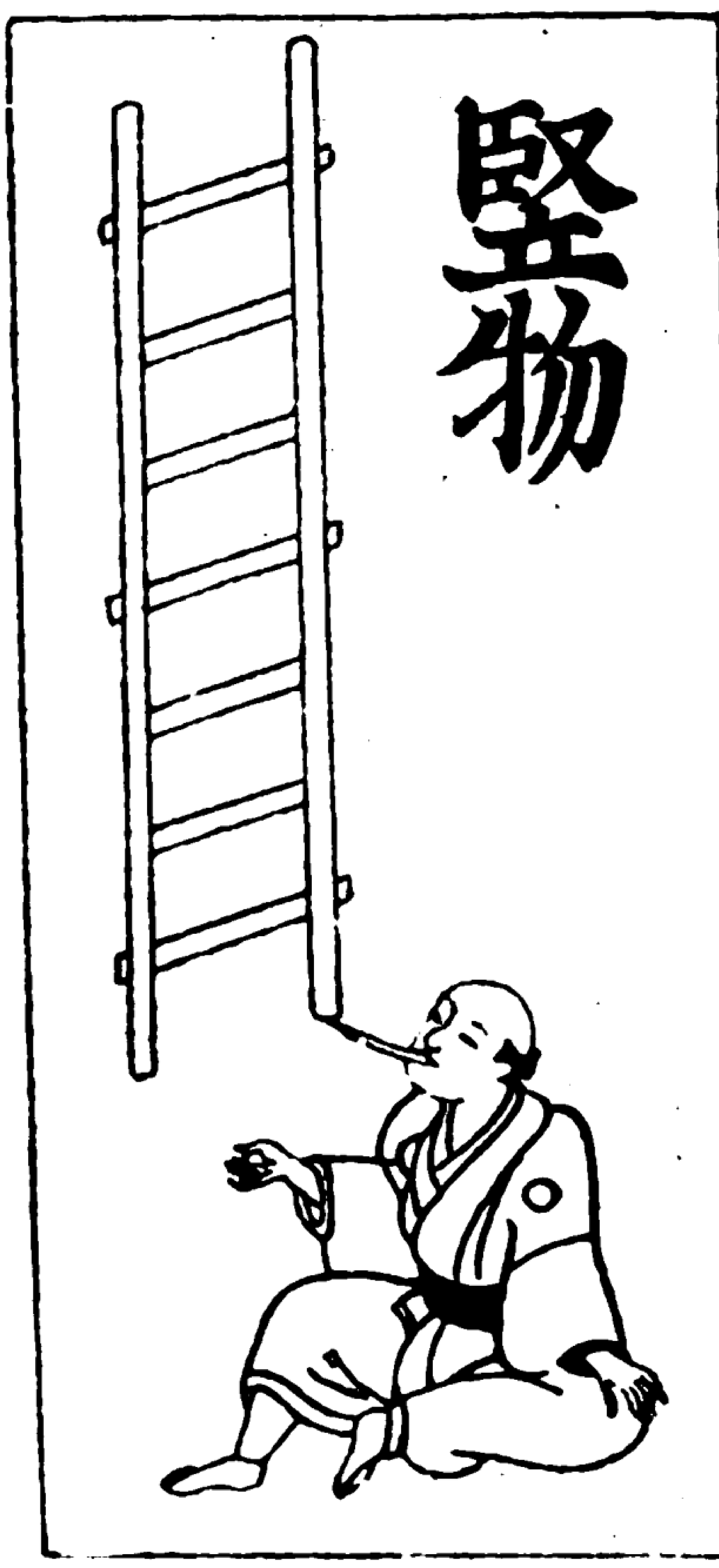
罌粟之介・品玉・今は二代目なり。

とあるので知れると同時に、元祖と同樣豆と德利の品玉を演じた事も亦明かである。

二代目芥子の介に對抗して、上野山下へ現はれたのは鶴吉である。鶴吉は尾州名古屋の者で、同地柳藥師前で聲色物眞似品玉等を演じて有名の者であつたが、明和末年江戸へ下り、山下の遊觀場で豆と德利の曲を初め、千代の玉手箱の唄、瓜を瓶に化す曲等を演じて喝采を博した。當時の世評に二者の伎倆は、兄たり難く弟たり難しと云つたが、芥子の介は安永五年版本『當世爰かしこ』に

芥子の介は露と消へて、鶴吉は横平に羽をのし。

とのやうに、安永四年頃に歿した後は、鶴吉に比肩する者なく、ひとり全盛を恣にしたがために、當時の詩歌や稗史に彼を當込んだものが頗る多かつたことは、安永三年版本『江戸名所道の記』に、鶴吉は口には大豆と德利を飾り、安永七年版本『鬼娘傳』に、鶴吉が手妻にぬかゝる盲千人、安永年間版本『世說新語茶』に、千年の鶴吉が品玉に足をとめ、天明二年版本『山下珍作』に、武者修行の講釋は、頭の禿るまでしやべれども、鶴吉が千代の玉手箱の五色のきれにしかず、天明四年版本『新壽武子』山下八景中鶴吉晴嵐に、山下行人北又南、暫看二鶴吉一興將レ酣、豆象二德利一錢如レ山、颯々散爲二比叡嵐一、天明六年版本『繪本江戸爵』に上野山下との題で、萬年の龜屋に千代の鶴吉はげに蓬萊の山下ぞかしなどとあつて、終には大



正德版『和漢三才圖會』所載

明七年版本戀川好町畫作の黃表紙『鳩八幡豆徳利』の如き、全部鶴吉の手品を脚色んだものさへ現はれたのを見ても彼が如何に滿都の人氣を集めたかを知る事が出來やう。當時鶴吉が喝采を博した演伎の光景は、安永八年版本『喚子鳥』山下八景の條に

馬士「見さつしやい、もう御山下へ來たこんだア、老婆「こちらの三味をひいてゐるのは、あれはなんだ、馬士「あれは鶴吉といふお乞食さまだは、老婆「あに鶴吉とは中からつるくつてあるこんだアかよ、馬士「とんだ事べ云ふ人だ、鶴吉「そう〳〵、どんな野郎だ、もらへ〳〵胸へおつゝけて貰へ、胸苦しがつてよこすは、源八初まつたア、逃げるとうしろへ石をぶつゝけるぞ、御愛敬に投げまするは、豆と徳利でござい、豆は輕し徳利は重い、釣合はぬところ、又石がはいります、こいつ重たいやつでござい、間を見合はせてふうわりと受ける、間を見合はせて投げまする、こいつこわいやつでござい、所をふうわりと受ける、とう〳〵〳〵、さて有難い仕合はせ、鳥目のお願ひ申上げましたれば、鳥目が四ぶ六八十ござりまする、これを後程十六文に百にしておやりなさい、それに三味線ひいたりよウ。

とあるのが前藝で、「右の豆と石と徳利との曲取りの中へ「豆をぶつ切つて參るでござい」との懸聲とゝもに、用意の鎌を投げ上げると、空中で見事に豆を二つ切りにするのである。次に千代玉手箱と號けた小箱の蓋を開けて、中に何物もない事を觀客に示して蓋をするのであるが、更に蓋を開けると直徑三分位の小さい玉が現はれる。それを取り出して左の手に揉みながら、右の手に鶴の一字を大書した扇子でそろ〳〵とあふぐと、其玉は見る〳〵うちに、長さ二間餘の五色のきれとなり、風に靡くさまは實に奇麗で、觀客の目を悅ばしめたのである。最後に地を堀つて瓜の種を蒔き、其周圍へ障子屛風を立て、屛風の上へ風呂敷を被せ、なつたり〳〵と手をたゝいて、風呂敷と屛風を取ると、蒔いた種から生えたもののやうに、一面に蔓が廣がつて、それに見事な瓜が實つてゐる。更に其中へ卵一つ入れて、又前のやうに障子屛風で圍ひ風呂敷を被せ、手をたゝいて風呂敷を取ると、鳩一羽飛出し、障子屛風を取ると、蔓と瓜とが何時しか十數疋の泥鰌と化してゐる曲で、一日千秋樂としたのである。蓋し是等の曲は、往古呪師が行つた生花術や化魚術とは違つて、孰れも種はあつたが、唯練磨の極敏捷に振舞つて、觀客に其種を知らしめぬやうに演じたものである。されば既に大川南畝も其著『南畝文集』に鶴吉の伎術を叙した末に、但し捷のみ幻に非らざるなりと評してゐる。斯く練磨の妙伎を演じて流行を極めた鶴吉も、寄る年浪を防ぐ術は無く、老眼のため失敗を演じ

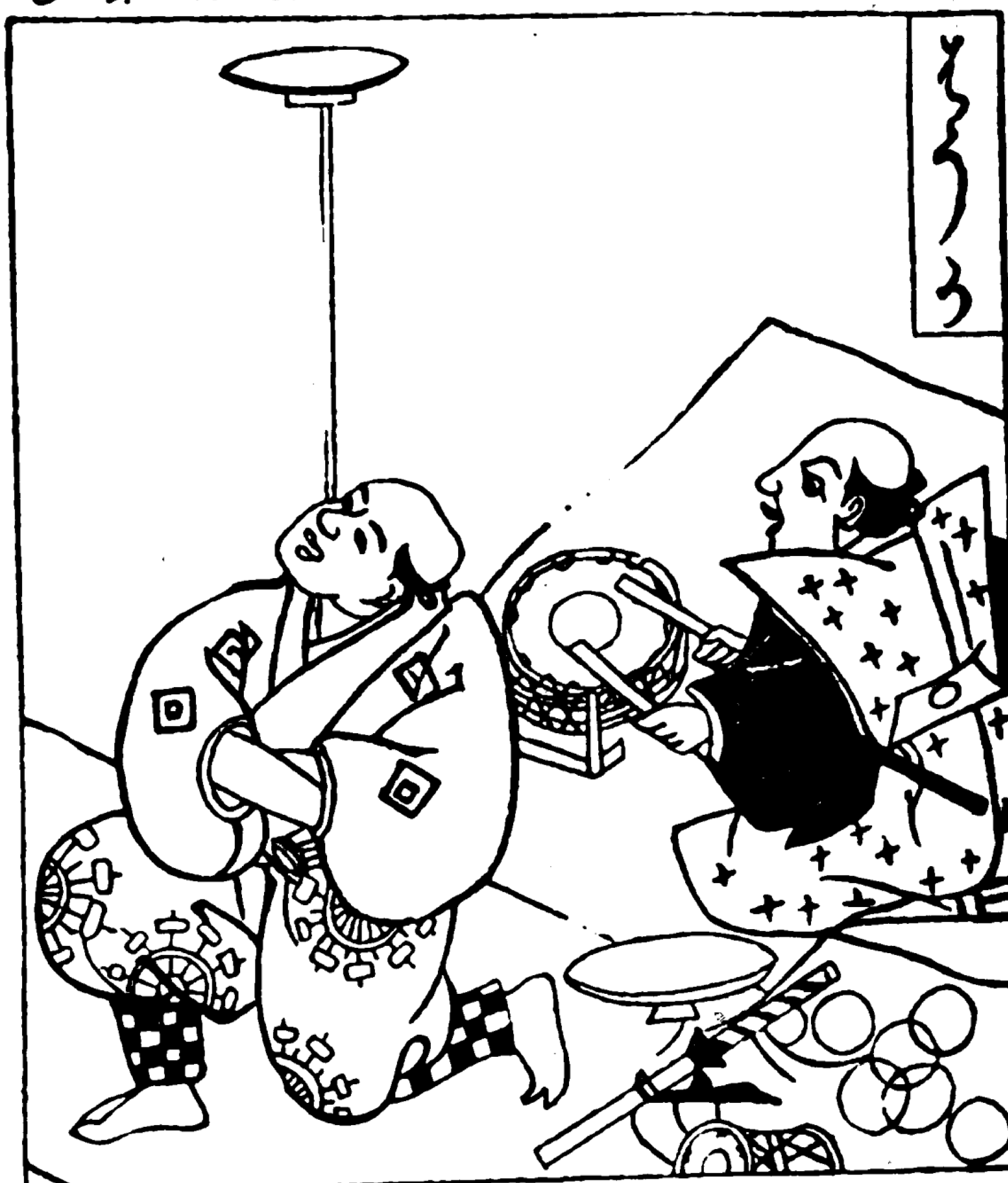
て物笑ひにならうよりはと、天明末年に郷里名古屋に引退して、其名聲を傷けなかつたのは、流石に名人の心懸け天晴といふべきである。併し名人には附き物の蓄財の道に疎かつたと見え、晩年悲慘を極めた事は、『名陽舊覽圖誌』鶴吉の條に

　再び此地に歸りて、老後剃髪して、其子なる者が車に乘せ町々を引き歩きて物を乞ふ。

とあり、又『蓬佐藝者傳』にも、寛政の頃半身の自由を失ひ、間もなく歿せりと聞くとあるから、寛政の末年頃に陋巷で窮死したと思はれる。

　鶴吉の引退後に上野山下へ二人の鶴吉が現はれた。一は文化二年版本『舊觀帖』山下の條に、鶴吉が煙管を呑む曲を演じてゐる光景を記したのと、二は『近世百物語』に

　嘉永の初年より、上野山下へ鶴吉とて、同技（放下物眞似）をなす者出しが、物眞似は能くせず、しかも齒力の業も猫八に劣れりと聞えしに、同四亥年死せりと聞く。


元祿版『人倫訓蒙圖彙』所載

と記された者とである。是等は芥子の介のやうに、其悴や弟子が相續したのでは無く、鶴吉の引退後世人の愛惜して措かなかつたに附込んで、拙技を省みず恣に彼が名を犯したものであつた。

　安永度に二代目芥子の介が歿した後は、其悴が父の業を繼いで三代目となり、淺草奥山で鶴吉と類似の曲を演じた事は、天明八年版本『無駄砂子』淺草の條に

　（奥山村）此處に眞桑瓜が斛にいけしの介、豆と德利の名物。

　寛政十年版本『百化帖準擬本草』に

　にとつく瓜の花は豆粒にひとしく、玉のおふくろに似たり、葉は芥の如く人是を見ると逃げるといふ、風呂敷を被つて障子屏風の中へ種を蒔けば、見るうちに芽ゐる、甚だ奇草なり、豆まはしは藪中より出づる鳩の種類にて、手妻の泥鰌を餌食とし、小刀を鵜呑みにす、常に奥山の銀杏の木に棲んで、人を呼ぶ鳥なり、

　いいい芥子の介「豆と德利、鉢で切つて参るでございさい、見物いい……兵衞芥をまはしたら逃げやう。

とあるので知れるものゝ、前者は江戸砂子、後者は本草に擬して、芥子の介が演伎の態を記したものであるから、聊か說明を加へやう。

前者の奥山村云々とは、淺草の奥山で芥子の介が眞桑瓜を泥鰌に變はらせ、又豆と徳利の曲取りを地誌に見立てたものであるが、後者のとつく瓜の花は豆粒にひとしくとは、徳利と豆の曲を利かしたので、其豆を投げた鎌で切る伎であるから、芥子の介の言葉にも、鎌で切つて參るでございと記したのである。○玉のおふくろとは、拳大の一面に毛の生えたもので、當時手品に用ゐる丸い石を玉と呼んだのに對して、其毛の白茶色である所から、斯く號けられたものであらう。是は玉を笊で伏せて、生えたり〳〵と手をたゝいて笊をとると、玉のお袋に變はる場合に用ゐたものである。○葉は笊の如く人是を見れば逃げるとは、見物の言葉に、太郎兵衛笊をまはしたら早く逃げやうとあるもので、豆藏が一曲終ると、手下の者が笊を持ち、觀客の前をまはつて錢を乞ふのであるが、吝嗇な人は笊がまはつて來ると逃げ足になる所を、豆藏はすかさず大聲で、太郎兵衛初まつたア、逃げると石をぶつつけるぞといつて、足留めの策としたのである。○風呂敷を被つて障子屏風の中へ種を蒔けば、見るうちに實るとは、鶴吉の條下で述べたやうに、蒔いた種から生えたものゝやうに、一面に蔓延つて、それに瓜が實つてゐるの曲を指すので、○豆まはしは懷中から出づる鳩の種類にことは、豆まはし即ち豆藏が卵一つ懷中に入れ、此卵を暖めまして、鳩に孵らして御覽に入れますと云ひながら、やがて胸をはだけると、一羽の鳩が飛出す曲である。○手妻の泥鰌を餌食にしとは、是も鶴吉の條下で述べたやうに、眞桑瓜を泥鰌に化する曲をいふので、○小刀を鵜呑みにすとは、小刀を呑む手品である。常に奥山の銀杏の木に棲んで、人を呼ぶ鳥なりとは、淺草奥山の銀杏の木附近に場を構へ、人を呼集めては演伎するのに擬へたのである。

この三代目芥子の介の弟子に、東徳藏といふ者があつた。徳藏は房州磯村の產で、芥子の介から秘術を傳授されたが、若氣の至りから金輪を盜んで、上方へ出奔したのである。かくて同地に滯在する事數年、修業を積んで江戸へ歸つたが、師匠の歿後は、淺草の奥山や湯島天神社地で、其伎を演じたと『豐亭芥子記』に見えてゐる。されば幕末から明治年代へかけて、淺草の豆藏とて名高かつたのは、恐らく此徳藏か其門人であらう

第六　蜘舞

蜘舞は、奈良朝時代に支那から傳來した散樂雜戲の中で、高

紐（本邦の所謂綱渡り、）都盧（本邦の所謂竿登り）、擲倒（本邦の所謂トンボガへり）、拗腰（本邦の所謂無骨、即ち角兵衛獅子の出に似たもの）等諸伎の特長を渾化した一新伎で、室町時代から江戸時代の中期に至るまで、三都に於て大いに行はれたものである。蜘舞の名目に就いては、元祿年間版本『好色由來揃』に

蜘巢をかけて、心やすく軒より軒につたふ如く輕き業をなす故に、蜘舞と名づけしなり。

との理由から、命名されたものであらう。

蜘舞演伎の光景を記したもので、最も古いと思はれるのは、南都興福寺什物『大般若經』の奥書であらう。一體この經は賢忍房良尊の書寫で、毎巻末に寫し畢つた時の感想から、當時世上の珍事奇談を記したものであるが、其第七十三巻の奥書、天文十八年己酉霜月二十二日の條に



【嶋八幡豆錄德利】所載

二昨日より五本松にてクモ舞勧進これあり、五日の間人別六文宛なり云々、五本松の上を一二三尺沒し、夫より繩を引き、一方には灯呂木を二本上へ繼ぎて夫へ控へたり、其間一町計りと云々、繩一筋の上に自在に働くこと、クモの家などを作り置きて、走り歩くよりも自在なり、足にて取付きて頭を下へ逆さまになして、又元の如く上へ起上り、或は繩に腰を懸けて居、又はとんぼかへりをし、或は無骨を立て、種々無盡に狂ふこと、人の陸地にて働き、猿の木枝にて飛跳るなどは、中々物の數にもあらず、或は地に供御を十計り並べ、其間二間計りづつ置きて、供御の上を一足飛びに、一方の端より飛出す、或は上へ十計り重ね上げて、其上にて踊り、又無骨を立てなんどすれども、供御少しも損せず、身の輕き事限りなし、力は三人計りの程ありと見えたり、小法師なり云々、見物として毎日五千人六千人づつ程は相寄る云云、彼法師の所作、常途の人の分にはあらず、不思議なり、昔も後も斯様の事はあるべからずの由風聞候、或時彼法師を

天狗攫みて、年久しく見えず、今又歸り畢る、其時天狗斯樣の事を教へたりとぞ日記せしむ、何れも人の口傳習ひなどの分にては、成るべからざる所作なり云々、奇特なり云々、又其後來て語り畢る、高さ十丈計り横一町計りに綱を一筋張りて、其上を片足輪をして行くと云々、又或時は灯呂木を二本上へ繼ぎて、其頂上に腹を押當てゝ、俯伏に寢て居て、くるり〳〵と身を廻す事風車の如し、見物の人々危く思ひ手に汗を握り、心弱き者は側にて目を廻し畢る云々、

又第百六卷の奥書、天文十九年庚戌三月二日の條に

去年五本松にて勸進せるクモ舞、天王に於て昨日より三ケ日の間勸進沙汰これあり、クモ舞或は猿樂などは、常樣世上に多き間珍らしからず、かやうの所作は稽古にても又は習ひ口傳でも成らず、先代未聞の奇特なり、初め百内八の軼の第三に註し畢る、仍て後の物語にとて、自類衆も老若共に各見物せられ畢る云々。

とあるのに據ると、室町時代末期の天文頃には、既に蜘舞が近畿の所々で勸進興行せられて、左程に珍らしくも無かつたらしい。唯五本松と天王で興行した法師は稀代の名人で、人間業とも覺えぬやうな飛離れた伎を演じたから、當時天狗に習つたとの噂が高かつたものと思はれる。かく蜘舞の演者も亦放下のそれのやうに、法師である所から考へると、或は田樂法師が數伎を兼ねて練磨した結果、この新伎を創始したのではなからうか、果してさうだとすれば、室町時代に於ける雜伎演者の殆んど法師に限られたがやうに觀えるのも、恐らく其黨に屬さなければ、演伎する事が出來なかつたからでもあらう。當時の俳倡は衣食足つて閑暇でもあり、かゝる伎術を練習するのに最も適當の環境に在つたから、自から斯道の名人も輩出したものであらう。

右のやうに蜘舞は法師の專業であつたが、江戸時代に入るや俗人の手に移つて、見世物小芝居で興行された事は、寛永廿年版本『あぶらかす』に

あぶなくもありめでたくもあり・蜘舞の芝居で金や拾ふらん。

又『京都御役所向大概覺書』四條芝居間數並に名代の事の條に

一　蜘舞物眞似　　早雲長太夫

寛文九酉年十二月二十八日、雨宮對馬守在役の節、早雲長吉と申す名代赦免、其後長太夫と改め申し度旨、元祿四未年十二月二十五日相願ひ、小出淡路守在役の節赦免。

とあるのは、恐らく蜘舞名代の濫觴であらう。其の後蜘舞は絕

ゑず三都の觀場で興行されて、大いに行はれたから、元祿六年版本『西鶴置土産』に、渡世悲く毎夜蛛舞の人形拵へとのやうに、翫具にまで模造さるゝ程の流行を極めたのである。然るに寶永年代から世に飽かれたがためか、次第に衰微しつゝあつたが、正德享保の頃に其名代斷絕してからは、享保年間版本『本朝文鑑』所載酣德頌に

されど蜘舞の節を和らげて、都に輕業の鶯之助は、女とも見えつ男なりけり。

とのやうに、輕業に一變したのである。

第七　蓮飛

蓮飛は一に連飛とも書いて、田樂に附屬した高足伎の一轉したものである。延寶八年版本『洛陽集』に「輕藝（かるわざ）は蓮の實より事起れり」とあるから、演者は挿圖のやうな高足に乘つて、飛跳ねる敏捷の光景は、宛然蓮の實の飛ぶがやうであるとの意か、さなくば連けて飛ぶといふ所から、命名されたものであらう。元祿年間版本『好色由來揃』に

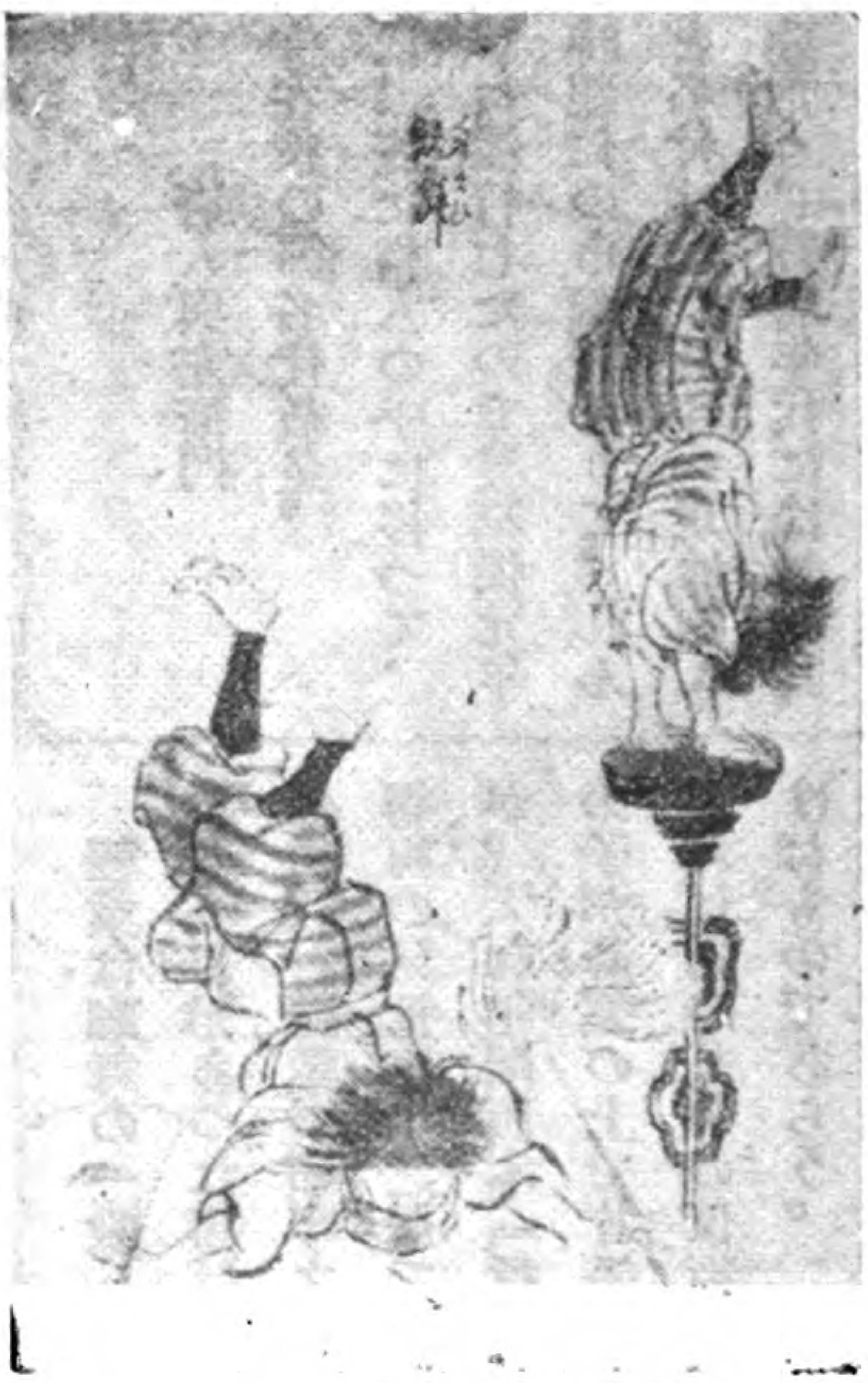
蜘巣をかけて、心やすく軒より軒につたふ如く、輕き業をなす故に、蜘舞と名づけしなり、それよりして竹の獅子、れんとび、籠ぬけなんどと其品をわけて、飛鳥の如く自由をなしけり。

とあるので、蓮飛は蜘舞から出たものゝやうであるが、享保二十年版本『本朝世事談』に

田樂法師は、七尺ばかりの細き棒に、下より三寸上に小き貫を通し、この小貫を足がかりにして兩足を載せ、兩手にて棒の上を握り、棒の先にて飛ぶ曲あり。

又享和元年版本『閑田耕筆』に

田樂法師の態、昔は盛なりし旨は太平記に見ゆ、今は豆腐の串に貫きしが、彼が木を登りてれん飛とやらんいふ事するに似たれば、田樂と名付くるのみ世に知る事とはなりぬ、纔に春日祭の時かたばかりをまねぶ。



「一蝶畫稿」所載

とあるのに據つて、この伎はもと田樂に附屬した高足伎の一したものである事が知れやう。元來高足伎は、放下の條

べたやうに、奈良朝時代に支那から傳來した散樂雜戲の一種であつたが、平安朝時代に田樂の附屬となつたものである。されば蓮飛は蜘舞から出たものではなく、蜘舞とゝもに田樂法師が練磨した結果、田樂から分離獨立して、勸進興行したものであらう。萬治年間版本『野良蟲』京都吉良兵衛座の條に、れんとび權之助内加川右近とあり、又『京都御役所向大概覺書』四條芝居間數並に名代の事の條に

一　れんとび　唐人與左衛門

寛文九酉年九月七日、雨宮對馬守在役の節名代赦免。

ともあるから、萬治寛文年代には、既に俗人の手に移つて、見世物小芝居で興行されたが、大いに流行したので、享保元年版本『世間娘氣質』に、ちいさい時親仁の巾着錢とりて、れんとび買ひしとのやうに、蓮飛人形と名付けた玩具さへ現はるゝに至つたのである。かく流行した蓮飛も、寶暦年代には既に其名代の斷絕した事は、寶暦十二年版本『歌舞妓事始』に、蓮飛唐人與左衛門今は無しと見えてゐる。元祿十六年版本『夢の浮橋』に、亭主は雲舞くわしやがれんとびとあるのは、京都島原揚屋の亭主や花車が敏捷に立振舞ふて、大盡を歡待する態を、蜘舞や蓮飛伎のそれに擬したのであるが、天和二年版本『好色一代男』江戸色茶屋の條に、品川のれんとびとあり、又寶永七年版本『寛濶平家物語』江戸色茶屋の條に、目黑の茶屋女品川のれんとびとあるのは私娼の異名で、所謂一寸間遊びの氣忙しくて、切時刻の迅速な事が、蓮飛伎に似た所から、名付けられたものであらう。

第八　輕業

輕業は蜘舞の一變したものであるが、蜘舞の全盛時代既に輕業の名目があつた事は、『飛花落葉』延寶七八年頃落首百物頭の條に、一輕業の頭琴之介とあるので知れる。この琴之介は江戸堺町の見世物小芝居で、籠拔を興行してゐた龍馬琴之介であるが、天和年間版本『役者綱盡』に、琴之介が籠拔する所や、其弟子が碁盤の上で片手の逆立ちをしてゐる光景を畫いてゐる。されば當時是等の伎術を蜘舞と區別せんがために、輕業と名付けたものであらう。

琴之介と同時に連之丞といふ籠拔師があつて、是亦堺町で興行してゐた。『飛花落葉』延寶六七年頃江戸の流行物を記した條に

扨又花の堺町、たけ七尺の大女、連之丞が籠ぬけス、ろくろ首の女あり。

とあるから、當時世評の高かつた事が知れる。この連之丞は、

延寶年間江戸堺町芝居見世物番附に、日下開山かごぬけ師龍王連之丞とある者で、天和年間版本『役者繪盡』にも、連之丞と其弟子林之丞とが、逆立ちをしてゐる態を書いてゐるのに據ると、琴之介と連之丞とは、江戸に於ける輕業師の元祖とも稱すべき者であるが、其出生に就いては、未だ確證を得ない。併し常例から推すと、恐らく寛文年代に上方で興行してゐたが、後江戸へ下つたものと思はれる。


貞享版『和國諸職繪盡』所載 蓮飛

當時京阪では、長崎から上つた小鷹和泉と唐崎龍之助とが、大阪の道頓堀や京都の四條川原で、籠拔や輪拔の妙伎を演じて、大いに行はれてゐた。正德年間版本『和漢三才圖會』に左圖を載せて

按に籠脱は、古へは未だ之を聞かず、近年の練磨なり、もと高絙より出づ、甚だ輕捷なり、延寶年中長崎より來る、小鷹和泉唐崎龍之助といふ者あり、二人始めて大阪に於て此技を爲す、見る者驚感せずといふ事なし、竹籠口の徑し尺半、長さ七八尺を用ゐ、棖の上に横たふ、高さ五六尺、而して菅笠を被き、走跳して籠の中を潜り出て地に立つ、其笠は籠の口より大なる事二寸餘り、又輪を空に釣り、輪の中に蠟燭を燃し、人其輪を潜りて火滅せず、或は刀鉾を輪の中に樹て、其輪飄風く、定まるを待て輪と鉾との間を潜る、或は輪五六個を以て空に懸く、相去る事各尺許り、高低等しからず、形嬌龍の如くにして、走跳して悉く之を拔く、其後輕業の人亦乏しからず。

とあるから、琴之介や連之丞の伎よりも更に精妙を極め、觀客を驚殺せしめたので、市中到る所籠拔の噂ならざるはなく、從つて延寶八年版本『雌物語』に

長崎より名譽の輕業上りて、四條川原に芝居を構へ、さまざま藝を盡しけり、中にもちやるめらとかや云ふ鳴物吹立て、太鼓鉦を打ちて、長さ八尺の籠の中を走りかゝつて拔けゝるが、身の輕き鳥の飛ぶ如し、見物の貴賤群集しけり。

延寶九年版本『大矢數』に

時の聲上を下へとかへしけり・それ籠ぬけのてん〱てれつく。

貞享四年版本『男色大鑑』に

或時木隱れの遊び寺に、若衆友達あまた集り、住持の留守を

うれしく、今日こそしたい事して樂げとて、俄に瓢ひ出して

小幡相泉が輕業籠拔、鉦鐃鉢を打鳴らし、本堂客殿驚かし。

とのやうに、噺本を初め俳書や浮世草紙にも當込まれたのである。

一體籠拔は、正德年間版本『和漢三才圖會』に、もと高絙より出づとあるが、高絙は本邦の所謂綱渡りであるから、籠拔と何等の關係は無い。支那では籠拔を衝狹戲又は透劍門戲とも呼んで、『文獻通考』散樂雜戲の條に

漢の世に單席を卷き、矛を以て其中に挿み、伎兒身を以て投じて中より之を過ぐ、張衡が所謂狹を衝きて燕濯し、胸は鋒鋩を突くなり、後世鍛を攢して門を爲し、伎者裸體にして擲度し、往復傷つかず、亦衝狹の變か。

とのやうに、早く漢代から行はれてゐた散樂の雜戲であるから、奈良朝時代に本邦へ傳來したものであらうが、何時しか中絕したゝめに、江戶時代となつて更に支那から長崎に傳はつたものであらう。

延寶年代の輕業師龍馬琴之介の門人中、出藍の譽のあつたのは琴之丞で、天和年代から江戶堺町で、龍馬一流の籠拔を初め張良がねやの術外十數曲の輕業を演じて、滿都の人氣を集めてゐた。天和二年作『天和笑委集』江戶堺町葺屋町の條に

日本國中は云ふに及ばず、朝鮮國迄も專らはやる籠拔け龍馬琴之丞云々、爰に中村勘三郎に木戶を向へて、龍馬琴之丞が芝居を構へ、表の看板に一世一代と大文字にて印し置きたり、或夕暮一人のおどけ者來て、つく〴〵と看板をまもり居けるが、いかゞ思ひけん芝居の男を近づけ、三國開山とはいかゞ仔細ありやと問ふ、答へていへる、野暮らしくも尋ね給へる愚かさよ、來る正月二日より、たけ四間の籠の內に、燭數十丁とぼし、大き成る菅笠を被り、其火の消えざるやうに拔出でけると云ふ、太夫は龍馬一流の達者、籠は四間、口一尺、アウといふ言葉の內に妙あり術あり、別けて飛せる輕業には、張良がねやの術、千里一刎虎の子渡し、鴨の入首水車、鴫の羽がへし、鵲の渡せる橋、一來法師が兎はね、猿猴の梢づたひ、猿の岩飛び、鷲の伸し羽、山雀の逆こもり、天狗の飛行、蛙の一足、其外黑白無窮の秘曲あり。

とある十數曲の輕業は、恐らく琴之丞が創始した新伎であるとともに、輕業に曲名を附けた始めであらう。

元祿年代に京都の金吹屋多兵衞の悴數馬が江戶に下つて、馬術家佐々木平馬の門人となつたが、馬術に據つて案出したものか、人馬と號けた新伎を創始した。そこで寶永の初年から盛り場で其伎を演じて、大いに行はれたが、寶永四年四月に至り、

町奉行所から人馬と輕業興行の停止を命ぜられた事は、『正寶録』寶永四年四月の條に

一、近來人馬と申し樣々曲致し、人を集め候に付、眞似候者多く、確成らざる儀も出來申すべくに付、向後人馬其外輕業の曲致し候儀、停止申付候事。

と見えてゐる。

一體人馬とは、己が肩に人を立たせ、馬も三舍を避ける程に疾駈するのであるが、肩上の人は其勢ひで身を跳らすと、何の苦もなく三丈餘の障碍物を飛越すの伎である。されば人馬の流行につれ、惡漢が斯術を練習し、良からぬ事に應用してはといふ懸念から、終に興行の停止となつたのである。併し在來の輕業には、かゝる弊害もなかつたが、唯果を及ぼして、共に興行を禁ぜられたものと思はれる。

寶永正徳の頃から三都の觀場で、長崎人が綱渡りを興行して、大いに喝采を博したのである。



正德版『和漢三才圖會』所載

綱渡りは支那で高絙又は戯縄と稱して、漢代から行はれてゐた事は、『事物紀原』に

漢の天子正旦賀を受くる時、大縄を以て兩の柱に繋け、相去る事數丈、兩の倡女對し舞ふて、縄の上を行きて相逢ふ、肩を比べて傾けず。

とあるので知れるもの丶、又『法苑珠林』に

顯慶已來、王玄策等數々使人有りて五印度に向ふ、西國の大王漢使の爲に樂を設く、或は空に騰り索を走り、屐を履きて縄行す、男女相避け歌戯常の如し、或は女人有り、手に三仗を弄し、刀矛槍等を空に擲ちて手接し、縄を走つて落ちず。

とあるのに據ると、この伎もと印度に起つて支那に傳へ、漢代には散樂雜戲の一種となつたが、唐朝の時更に本邦へ傳へたのである。それが室町時代になつて、都鄙、擲倒、拗腰等諸伎の特長と渾化され、蜘舞といふ一新伎となつたのである。其蜘舞も寶永度から衰微しつゝ、正徳の頃には殆んど廢れたのを好機として、支那人から戯縄伎を習つた長崎の者が、人目の惹易い支那服を着て、三都で興行したのである。併し當時の綱渡り

は、後世のそれのやうな一本綱ではなく、正德年間版本『和漢三才圖會』に

近年長崎より彼輩京江戸大阪に來つて此技を爲す、苧縄兩條を以て兩竿の頭に懸け、拇に爽み立て行く事平地の如し、又縄に足を懸け、身を倒して振舞ひ、復起て故の如し、竿の高さ二三丈、其頭に方盞を設け、其上に箕居し、少頃して倒まに身を地に投ず。

とのやうに二本綱であつた。これが一本綱に進歩したのは、元文二年からである。

享保八年七月から、江戸芝神明社内の小屋で、梅ケ枝といふ女太夫が數名の若女太夫と〻もに輕業を興業した。從來輕業といへば男子に限られてゐたのに、是は又珍らしくも優美の女太夫が、觀客の手に汗を握らすやうな籠抜を初め、綱渡りや竿登りを演じたので、忽ち評判市中を動かして、日々大入大當りであつた。それが間もなく興行停止と云ふに、小屋を取拂はれた理由は、『享保見聞集』に據ると、

この時輕業の女太夫等は、幕府から禁止された金入りの華美な衣裳を着て居るとの噂が高かつたので、社寺奉行所の支配地なのにも拘らず、八月十五日に町奉行所付き同心の御手入れとなつて、女太夫等は召捕られ、小屋は打潰されたのである。かく禁止の衣裳を着た女太夫を、吟味もせずに捨て置いたのは、不届至極であるといふので、所謂三坊と呼ばれた神主の東西兩家と別當の金剛院は閉門仰付けられ、一件の落着したのは、九月二十八日であつた。是恐らく後に流行を極めた。女輕業の濫觴をなすものであらう。



寶曆版『俳諧東土產』所載

當時右の女輕業と〻もに、斯道に異彩を放つてゐたのは、大阪下り座頭の輕業である。何しろ行動の鈍い盲人が、向ふ見ずにも敏捷で危險の伴ふ輕業を演ずるといふ所が評判となつて、是亦大當りであつた。『よしあし草』に、

享保の初め座頭の輕業とて、道頓堀へ出たるは、まだ年若き座頭なるが、三寶の上にて逆立ちをなし、其外筋斗翻つたひ

など妙技を演し見物多し。

とあり、又享保四年版本『艶道通鑑』京都三條繩手宮川町夜見世の條に、足のはたらきは座頭の輕業とあるので、其演伎の一斑を知る事が出來るとゝもに、初め大阪で興行し、後京都を經て江戸へ下つた事も亦明かである。その後女輕業は益々世に行はれたが、是に反して座頭の輕業は、唯寛政十年版本『快談文草』に、近くは堺町の新道にて、座頭の輕捷の大當りとの外、絶えて文籍に見えないのは、畢竟ずるに不具の身では至難の業なので、演者の續出しなかつたが爲であらう。

正徳年代の綱渡りは二本綱であつたが、元文二年に大阪の道頓堀で、初めて一本綱渡りの興業があつた。これは大阪の輕業師糸之助が創始した所から、一ッ綱糸之助と名乘つて、一本綱の上で居合拔きの曲などを演じて大いに行はれてからは、二本綱は自から廢れて了つた。

人馬と輕業は、寛永四年四月に興行を停止されたが、其後輕業は前記のやうに興行しても、公儀から何等の沙汰もなかつたので、人馬も亦元文四年から再興したのである。『談海』卷十元文四年落首元文太平記卷第四目錄の中に

一、佐々木平馬樂之事附り人馬驚二人目一之事。

とのやうに、再興の時には人目を驚かすやうな奇曲を演じたので、公儀の默許する筈はない。果然翌閏五年七月二十四日に、再び人馬と輕業興業の停止となつたが、同月二十九日に至り

一、此間人馬輕業曲致し候儀、御停止の旨御觸これあり候、此儀は人馬に付き候輕業に限り御停止に候、前々より有來り候輕業致し候儀は、御構ひこれなく候間、此段寄々申通じ候樣に申渡さるべく候

との町觸があつたのは、在來の輕業には人馬のやうな弊害がないのを、公儀で認められた結果である。

人馬と類似の輕業を演じた麒麟之助が、寺社奉行所から興行停止を命ぜられ、淺草寺境内の輕業小屋を取拂はれたのは、寛保二年五月の事である。麒麟之助は長崎の輕業師であるが、元文の初年から京都四條川原に小屋を構へ、奇拔の新曲を演じた



正徳版『和漢三才圖繪』所載

ので、『繪本花の鏡』に

それ輕業は異國超飛燕に起り、上竿伎などいふも輕業の事なり、近年きりんといふ名人あり、それも名を同うして木戶を並べ、四條の川中島にて大入を爭ふ。

とのやうに、同名の賢者が現はれる程流行したのである。この麒麟之助が江戶へ下つたのは寛保二年の春で、淺草寺境內で興行したが、是亦大當りであつた。然るに同年五月十一日に、突然寺社奉行所から淺草寺別當へ、麒麟之助輕業の停止と、同小屋の取拂ひを命ぜられた。其始末は『淺草寺日並記』寛保二年五月十一日の條に

一、牧野越中守殿役人須藤文左衛門、新井伊左衛門、森又左衛門連名の手紙を以て、相違十儀これあり候間、只今罷越候樣に越中守申され候旨申來り候間、其意を得奉り候旨即答に及び、早速理乘院罷出候處、新井伊左衛門出會、先頃より觀音堂庭に於て、麒麟と申す者輕業致し、夥敷人寄せ仕り候由、右輕業の儀は、去々年申の七月、人馬輕業御停止の趣仰せられ、御觸もこれあり候儀に候間、早々相仕舞ひ、小屋早速取拂ひ候樣仰渡され、尙又取拂ひ跡明日見分を遣すべく旨仰渡さる。之に依て理乘院罷歸り、右の趣高橋八左衛門呼寄せ申渡し、明日中に小屋まで殘らず取拂ひ候樣に申渡す


享保版『おでてこでん變六』所載

とあるが、麒麟之助の輕業は在來のそれと異り、人馬類似の新曲である所から、人馬と同樣「宜しからざる者仕習ひ候はば、不埒成る儀も出來申すべくに付き」との理由で、停止を命ぜられたものであらう。

寶曆度から京都四條川原の觀場で、初めて二本竹輕業の興行があつた。これは京都の輕業師佐野川某が創始であると云傳へられてゐる。其演伎の光景は、寶曆四年版本『繪本艶庭訓』に「世を渡る身は輕業の二本竹さすかいなには酒手をはらひ」とある次頁の挿圖を一目すると瞭然であるから、爰で說明するまでもないが、何分兼合ひを主として、誤魔化しの出來ないだけに、夫だけ遣辛い曲であると、

曾て老輕業師から聞いた事があつた。

明和六年に淺草寺境内で、早川虎市、春山歌之助、嵐八重文等が輕業を興行した事は、『街談錄』に記されてゐるが、唯輕業とあるのみで、如何なる曲を演じたかは、知るに由もないのである。

大阪の女輕業師小櫻歌仙が、道頓堀で初めて紙渡りを演じたのも亦明和年代である。明和四年版本『風流狐夜話』大阪道頓堀見世物の條に、小櫻歌仙が紙渡りが奇妙じやと思ふ内に、小高菊松が上手をするとあるに據ると、紙渡りの輕業は歌仙の新案で、菊松が大成したものと思はれる。この歌仙の門人松江は、妙手といふ程でも無かつたが、美貌で評判の若女太夫であつた。

右の松江とゝもに安永五年江戸へ下つた早崎京之助は、二本竹輕業の名人であつたが、安永初年から京阪の觀場で、安永七年版本『太平遺響』に

觀二二本竹一一首

最初擧レ扇鶴餌呼。更見猿猴傳レ標斜。組レ足鶺レ眠何所レ稱。

達磨大士坐禪車。

魚虎吹貫大文字。頂上野中一本杉。偏感龍門懸水落。欲レ降猶滯手斧樫。



『諸本艶庭訓』所載

とのやうな種々の曲を盡して、市中の人氣を一身に集めてゐた。それが前記のやうに松江とゝもに江戸へ下り、當時隨一の盛り場である中洲新地の觀場で、輕業の名人唐崎新之助、早飛梅之丞、無三飛新藏等と對抗して、其伎を戰はせ大入りを爭ふたのである。其時朱樂管江は京之助を評して、うしろに見ゆる大幟は、大阪下り早崎京之助蜜柑といへる、人間か鳥かわからぬ上竿伎ありと、其著『大抵御覽』に賞してゐるが、松江が事は、風來山人が『放屁論後編』に、中にも險竿の大當り、小櫻松江が笑顏には、弘法大師筆を捨て、韓退之涎を流すと記した

のみで藝評の無いのは、畢竟其伎が容貌に比して、劣つてゐたがためであらう。又唐崎新之助外二名に就いては、安永六年版本『中洲雀』に

唐崎新之助が輕業、放れ業にして見るに危く、錢を出して氣を痛め、

とあり、又安永六年版本『放屁論後編』にも

新之助は一身に骨無く、どう突詰身は五臓金錢にや有らん、無三飛新藏が體は、龍骨車のめぐるが如く、早飛梅之丞が一本綱は、五體を天へ釣るかと疑ふ。

などゝあつて、各得意とする所の曲を演じたのである。中にも無三飛新藏の輕業は、桝の上の曲と號け、安永六年版本『糸櫻本町育』淡島を初め大黒舞や風の神を渡世とする非人寄合ひの條に

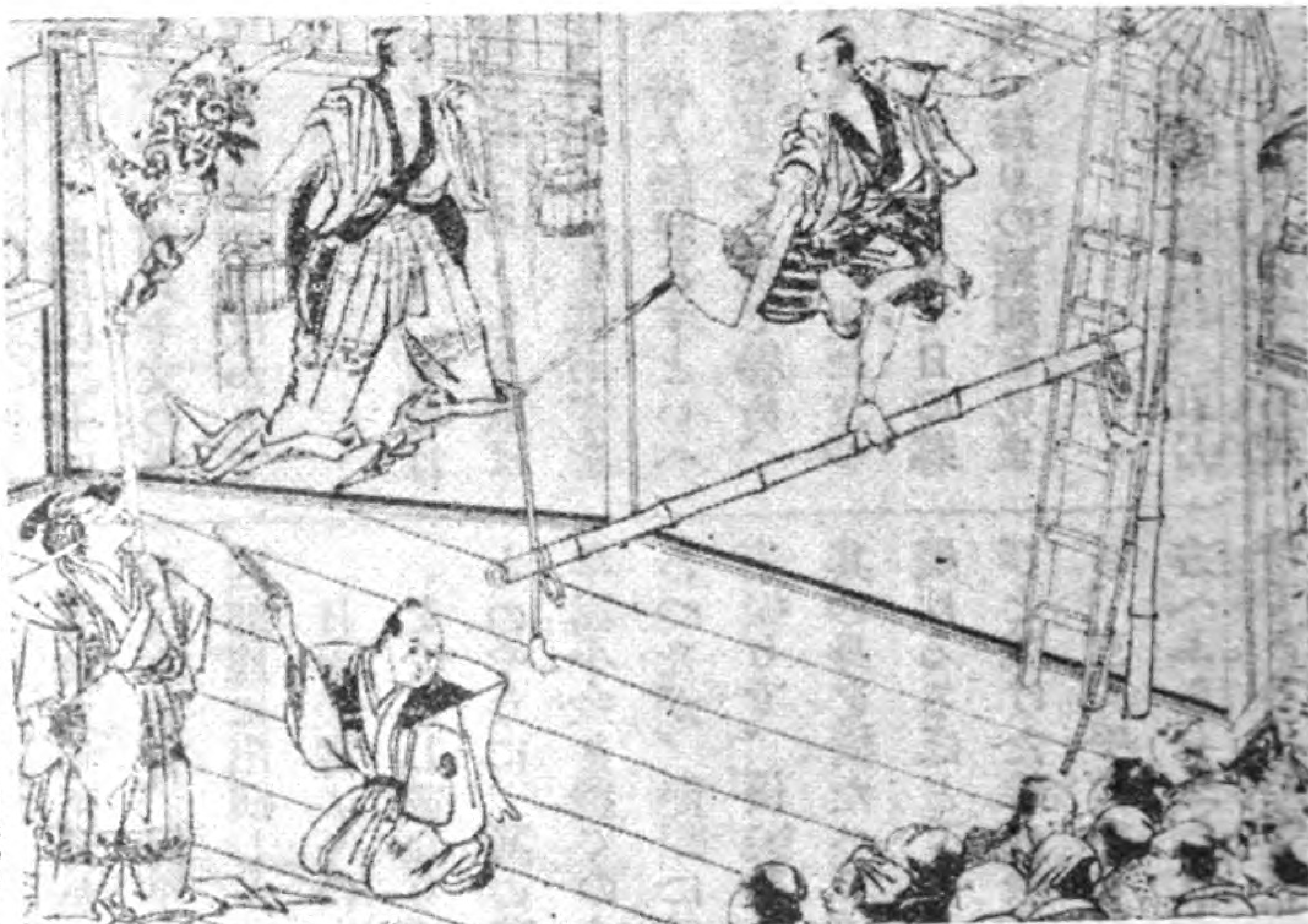
此間見て來た堺町で今流行る輕業無三飛をして見せやう、コレはよかろと相借家にのぼし立られ、淡島が着たる紙子の袖無し羽織、引くりかへす黃金裏、身拵へする其隙に、大黒舞が持て出る、爼板足次其上に、四方の柄桝を積重ね、風の神が口眞似の、出放題なる口上いひ、大黒三味線彈たく〳〵、借東西いよ〳〵御覧に入まするは、無三飛新藏升の上の輕身、發端が鯱立ち、足頭につきますれば、鶺鴒の水遊び、ハリトヲハリトヲ〳〵、足升へ移りますれば、香爐獅子、手を放して立上りますれば、野中の一本杉、其體逆に戻りますれば、元の香爐獅子と戻ります、ハリトヲ〳〵

とあるので、新藏は中洲新地興行以前、堺町に出演した事と、其曲は支那の拗腰戯即ち本邦の所謂無骨の流れを汲んだ事が知れる。其後新藏は大坂へ上つて、天明四年道頓堀の觀場に出演した事は、『浪華見世物年鑑』天明四年の條に、桝の上の輕業とあり、更に『同書』寛政元年の條に、無三飛新藏紙渡り元結渡り始むとあるのに據ると、此二曲は新藏が創始したやうであるが、前者は明和の歌仙、後者は天明の小金が既に演じたものであるから、新藏は唯それを模倣したものである。

二本竹輕業の名人早崎京之助は、中洲新地興行後歸坂したが、其後工夫と練磨を重ねて、案出したのが一本竹の曲である。そこで麒麟察藏や竹與八を初め、久吉、富吉、辰之助等の子役と一座を組織して、再び江戸へ下つたが、葺屋町河岸の觀場へ出演したのは、天明三年の春である。當時一座の演じた曲は、天明四年版本『野暮大臣南郭遊』に

今日しも日陰のどけしと、常々神明信仰なれば、參詣せんと出かけしに、序ながら葺屋町河岸の輕業を見物せんと、心がけ出かけゝる、木戸番をかはつしや「札い〳〵、札錢二十四

文、「さあ〳〵跡がつかへます、「太夫じゃ〳〵。
麒麟繁藏衣桁渡り、三間の竹を釣り渡る兼合ひ、中程にていろ〳〵の曲をする、大出來〳〵。麒麟繁藏登り綱の一曲、手桶に水を入れ、左右の手に提げ、網をのぼる兼合ひ、大當り〳〵。
太夫京之助一本柱片手さし、大當り大當り、早崎久吉猿の木登り、さまさまの藝をする、 口上「なづけて鯱立ちと申ます。
早崎久吉三寶の上に碁盤を置き、升を段々積重ね、上にて鯱立ちいろいろの輕業、大出來〳〵。
早崎富吉同久吉猿つなぎの曲、空に渡したる竹に足かけ、三人手をつぎいろ〳〵の曲をする兼合ひ、大當り大當り。
麒麟繁藏竹與八獅子の亂曲、梯子をあがり二本竹の上にていろ〳〵の輕業、目を驚かす離れ業、大出來〳〵。
太夫京之助祭り提灯の曲持、三味線彈きながら歩む、上の行


天明版『野若大臣南郭遊』所載

聲の内より早崎辰之助出で、笛を吹き曲乘りの所作、古今の大出來〳〵、口上「御褒美にどつとほめたり〳〵。
との樣な斬新奇拔の曲であつたから忽ち市中の評判となり連日大當であつた
此京之助に倍するの人氣を集めたのは、天明八年五月十二日から、葺屋町河岸の觀場で興行した、京下り輕業女太夫早雲小金である。小金は本名をのぶといつて、京都の四條川原早雲座々本長太夫に所緣のある所から、其世話で五歳の時に、四條川原や道頓堀で有名な輕業師に弟子入りをした。其體質が輕業に適したのと、日夜稽古に弛みなき出精とで、十歳には早一人前の輕業師となつて、四條川原を振出しに、道頓堀や白子や大須との旅興行に修行をして、天明八年に江戸へ下つた時には二十四歳であつた。然かも天稟の美貌に振袖姿のぼつとりとした態は、どう見ても十七八歳以上とは思へなかつた。此優しき女性の身として、力士を凌ぐの力業、曷布とはいへ十五

四の大幟を輕々との曲差しには、何處からそんな力が出るやらと觀客を驚かせ、或は傘と扇で兼合ひをとり、糸より細き元結の上を渡る危さには、見る物の膽を寒からしめたのである。されば上方興行の時には、八文の札錢であつたが、此度は二十四文と値をあげ、其上棧敷代一間に付十五匁、一人前五十文の高價に拘らず、日々見物の山をなしたのは、嘗に藝の力ばかりではなく、天明八年版本『鳴通力』に

元結渡りの輕捷には、脛の白きは見へぬといへども、見物は棧敷よりどつさり下へ落間の見物、腮のはづるゝをも厭はず悄然と口をあいて上を見れば、坊主も内儀も士も其わざを見ずして、只かんばせの美きに見とれ、皆人懸想なすといへども、まことに桜の下の力持なり、褒美にどつと現で譽め、先の方は御代りと、打出しの太鼓は耳にも入らず、更に立つ事を得ずして、瓜割の郎に頗る似たり、又跡札を買て日の暮るるも知らず、卒には君が舞臺を仕舞ひ、歸りの素顔を見まく欲す。

とあるのも亦一原因であらう。かく小金の輕業職差しは、五月十二日を初日に、日々大入りを續けたが、八月に入るや御名殘として、和藤内の荒事に市川流をこじつけた虎の竹渡りといふ新曲を演じたので、又々評判となつて二十八日まで興行したのである。かく長期の興行は、輕業としては實に空前ともいふべきで、當時小金の人氣が如何に素晴らしいものであつたかゞ知れる。

寛政九年正月から、大阪下り輕業女太夫玉本小新が、其一座の玉本與吉、同平七、早藤音五郎等を率ゐて、葺屋町河岸の兵四郎座に出演した。寛政十年版本『快談文草』に

日々榮當〳〵の大入は、全く小新が美しきかんばせに、色氣を含みし故なり。

とのやうに、其の美貌と艶姿には、江戸市民の血を沸かせて、早雲小金を凌ぐの人氣を呼んだのである。當時小新は十六歳であつたが、艶顔に愛敬のこぼるゝばかり、大振袖姿の初々しい素振りで、優美な手踊の一曲から、元結渡りの曲中、綱の上に其の身を横たへて肘枕する態は、さながら天人が天降つたかと疑はるるほどである。次に玉本與吉外二人の演ずる猿猴の樂遊びと號けた離れ業は、舞臺天井間際に筋違ひに組んだ大竹から、三人手に手を取つてぶら下り、樂屋の囃子に合はせて、四方へふらりふらりと身を動かす有樣は、丁度青柳の風に靡く風情である。是等の曲を説明する口上、半八の道化は、見物を笑はせながら反つて、輕業を引立て、太夫休息の間も可笑味たつぷりの身振りや輕口に、喝采を博したのである。されば當時世評

にも、玉本の軽業は小新の艶顔と半八の道化に落ちを取ると云はれたほどである。かく玉本一座は正月から開場したが、四月二十三日から新曲に取替へ、六月上旬まで日々繁昌〳〵の大入りは、實に女軽業として長期興行のレコードであつた。かくて七月吉原燈籠中は、揚屋町から招かれ、茶屋頭の桐屋を宿として、道成寺鐘入や金太郎熊の曲などを演じたが、八月から九月まで芝神明社内の觀場に出演し、十月に又々葺屋町河岸の兵四郎座へ戻つて興行したのである。寛政十年版行の春興摺物に

　玉本が玉のやうなる姿には一年中も見飽かざりけり。

とあるから、師走に打出して歸阪したものであらう。

享和三年九月に尾州大須で興行した大阪下り女太夫玉本小金は、右の小新と姉妹とも亦合弟子とも云傳へられてゐるが、是亦軽業の名人で、『猿猴庵日記』享和三年九月の條に

　大須門前にて玉本小金といふ女軽業至て上手にして、竹を下げ撞木に下りて、曲手鞠をつかふ。

とのやうな軽妙の曲を演じたのである。かくて大須を打出して江戸へ下つたが、文化元年の二月から、東兩國の觀場へ出演したのである。其番組は『大軽業玉本一座番附』に

〇紙渡り〇元結渡り〇猿猴の樂遊び〇枕返し〇曲手鞠〇葦渡り〇金太郎と熊の曲〇道成寺鐘入。

とある。中に就いて紙渡り外四曲は既に述べたが、葦渡りは片手で梯子を差しながら、細い葦の上を渡る兼合ひで、金太郎と熊の曲は、熊の縫包みを着た三人の者が、金太郎に扮した小金が鉞で合圖するにつれ、梯子の上で鯱立ちや、一本竹で吹貫きの曲をするのである。最後に演ずる道成寺鐘入りは、玉本一座の秘曲ともいふべきもので、舞臺の上手と下手に大木があつて、それには櫻の作り花が夥敷くさゝれたが、下手の枝には張抜きの大釣鐘を吊し、釣鐘から一間計り隔てゝ、尺餘の横木がぶら下つてゐる。又釣鐘の内から一本綱を上手の樹上に結び付



天明版『黄表紙外題』所載

け、下手に坊主に扮した三人の者が、各手に珠數を持つて控へてゐる。此體宜しく幕開くと、樂屋の囃子に合はせて、立烏帽子に水干を着た白拍子扮裝の小金は、中啓を手玉に取りつゝ、上手の樹上から綱渡りをして、釣鐘の中に其姿を消して了ふ。それを合圖に三人の坊主は、頭上高く珠數を揉んで呪文を唱へると、耳驚かす鐃鉢の音とゝもに、忽然釣鐘から飛出しさま身を横に、一間先の横木を左手に掴んだ者は、鬼面陀身の怪物で、身に鱗形模樣の廣袖を着て、朱色の扱帶を前結びにさげ、右手に撞木を持つてゐるが、蛇身は尙ほ釣鐘の中へと續いてゐるのであつた。そこで坊主の祈りは更に烈しくなると、ヤツとの掛聲とゝもに、横木から手を離すので、觀客の膽を冷させるが、太夫はグツと兩手を前に伸ばし、柳の風にもまるゝやうに、空中で身を左右にふら〳〵と動かす離れ業には、見物の人人か思はず知らずドツと擧げる褒め聲を機會に、先の方は御代り〳〵の一切となるのであつた。



寛政版『快談文草』所藏

小金は小新のやうに美艶でなかつたから、舞臺では多く縮帽子に上下の若衆姿であつた。それが當時の流行唄に

〽そのや向ふ河岸をば廻つて見たらば、玉本小きんにおさつのふかしたて、可樂に灸點沫雪回向院。

とうたはれる程の人氣を集めたのは、畢竟其妙伎に據つてゞある。『巷街贅說』に右の唄を載せて、玉本小きんは此頃名高き女輕業なり。可樂は此頃落し咄の上手なりと註をしてゐるが又向河岸は東兩國を指し、薩摩芋の蒸し立てと灸點は當時の流行物で、沫雪は東兩國の名代の飲食店である。

文化十三年の秋に、江戸で稚輕業と號け、六歲の小兒山本小島の綱渡りを興行した。舞臺には高さ七尺程に綱を渡し、小島は右手に傘左手に開いた扇子を持て、綱の上を行つ戻つするのであるが、口上が坂落しといふや、綱から舞臺へ飛下りて默禮をする。次には元結渡りで小島は三番叟の裝束で扇と鈴とを持ち、笛や太皷の囃子に合せ、元結の上で舞ふのである。別に珍奇の曲で

はないが、唯演者は六歳の小兒といふ所が興味を惹くので『文化街談』の著者も當時見物したと見え、其演伎の光景を述べた末に

其さま如何にも六歳の小兒とは見へず、誠に感心なる事なり、小兒の輕業いと不便なる事に見へにけり、併し是も世渡りなり、綱渡りより世渡り程苦しき事あらじと知るべし。

と記してゐる。

化政度には名古屋を中心地として、明和年代淺草で興行した早川虎市の悴二代目虎市一座の輕業や、玉本小金の門人小鶴一座の女輕業を數度興行した事は、『猿猴庵日記』に記してゐるが、ただ其藝名と女輕業の裝束見事なりとの外、如何なる曲を演じたかは明かでない。

天保十三年四月から、江戸深川八幡社内に成田不動尊の開帳があつて、參詣人が日々群集した。其時同境内に小屋懸けして、輕業を興行したのは、大坂下りの浪花龜吉、菊川傳吉、浪花松之助の三人一座で、前代未聞の亂杭渡りを初め、青竹切先渡りや提燈渡りと號けた危極の妙伎を演じて、觀客を驚殺せしめたのである。

亂杭渡りは、九尺から一丈二尺まで長短不同の杭の上下に四角の小板を打付け、それを十數本三尺程づつ隔てゝ舞臺に立てる。演者龜吉は、下手から走りさまに身を跳らせて、端の杭に飛乘るや否や、さながら飛鳥のやうに杭の上を渡るのであるが、渡るに從つて跡足で其杭を倒すの離れ業である。



文化版『玉本輕業番附』所載

青竹切先渡りは、一丈餘の青竹の上を竹槍のやうに殺いで、下に板を付けたのを十數本、二尺程づつ隔てゝ舞臺に立置く、演者傳吉は手に傘と扇子を持ち福草履を履いて、竹の上を悠々と渡るのであるが、是亦渡るに從ひ跡足で其竹を蹴倒すのである。

提燈渡りは、箱提燈十數箇を二尺餘りづつ隔てゝ並べた上を、演者松之助は足駄を履いて渡るのであるが、渡り終る度に足駄の齒で提燈の掛け金を外すと見え、提燈は自からたたまるのである。

最後に一丈二尺の杭を二本立て、演者龜吉は其上に兩足をなげて突立ちながら、世話役の差出す梯子を兩手で持上げ、更に片手で曲差しする冒險には、氣の弱い者は迚も見て居られない程で、この曲の終るのと同時に、打出し太鼓をたゝくのである。當時の狂歌に

菊川に浪打入りの見物はゆき渡りよき竹の切先き。

とのやうに、日々見物群集したので、六月から兩國回向院で和州法隆寺聖德太子の開帳を好機として、東兩國廣小路で興行した。此時には既に浪花菊川一座の評判が、江戸町々に廣まつてゐたし、又演伎の光景を畫いた錦繪も數種出版された上に、地の便が宜かつたので、連日立錐の地もない程の大入りであつた。天保十四年に町奉行になつた鍋島内匠頭も、この輕業を見物して、神通の妙伎に驚いたと見え

天保十三寅年、兩國廣小路へ神變不例の輕業出たり、通例に比するに樣々手を離れたる業をなしける、此輕業の如き學んで及ぶべき事に非ず、揚由弓を執れば白猿木を抱いて泣き、蒲且網を施せば飛鳥地に落つ、技術の妙神に通ずる事かくの如し、無益の薄技といへども此輕業など、其技の揚蒲とも云ひつべし。

と其著『近世百物語』に激賞してゐる。

文化十三年に江戸で稚輕業を演じた山本小島は、其後旅興行を續けてゐたが、弘化三年に久々で江戸へ歸り、五月から若太夫の梅吉とゝもに、淺草奥山で一世一代の輕業を興行した。中にも小島の狂ひ獅子の綱渡り、梅吉の胡蝶のはやぶさは高評で、當時國芳筆の錦繪として出版された程であつた。

嘉永から文久へかけては、輕業界の全盛期ともいふべきで、興行した者が頗る多かつたが、中に就いて山本、玉木、增鏡、早竹、櫻綱等の一座は、孰れも三都で評判の高かつたものである。尙ほ此期の特色ともいふべきは、衣裳が非常に華美になつたのと、力持、曲獨樂、曲搗、水機關等の他藝をも取入れて演じた事とである。以下右記の各座に就いて、聊か演伎の光景を述べやう。

弘化三年に淺草の奥山で、一世一代の輕業を興行した山本小島の若太夫梅吉は、其後師匠と別れて、富五郎や富吉とゝもに、山本豐吉を太夫本として一座を組織し、嘉永から安政へかけて、大阪の難波新地で興行した。其番組は

○一本竹○道成寺鐘入○石橋○五人松原。等である。一本竹と鐘入の曲は既に述べたが、石橋は赤頭の毛六尺程なのを、自由自在に巴卍と振るのである。又五人松原は、先づ豐吉が天井間近く渡した綱に、兩脚を折曲げてぶら下り、右の手に撞木を

兩端に付けた棒の眞中に握つてゐる。其撞木へ梅吉と富五郎とが、是亦兩脚を折曲げてぶら下り、各右の手に長い竿を持つてゐる。其竿へ子役二人が足をからませながら、曲手鞠をするのである。この新曲は奇抜なだけに世評も高く、當時江南の遊里で五人松原といふ流行唄が行はれた程であると、曾て古老から聞いた事があつた。

右山本一座の豐吉と富五郎とが、女綱渡りの增鏡一座、曲獨樂曲手鞠の竹之內一座、力持の八十島六助等と合同して、大坂の難波新地で興行したのは、安政元年の二月である。盛り澤山なので相應の入りはあつたが、大一座には附き物の紛擾を醸したものか、間もなく增鏡一座は脫退して、玉本小金門人小糸一座と提携の上江戸へ下り、安政二年二月から、淺草の奧山で興行した。其番組は

○三番叟○道成寺鐘入○權八傘渡り○龍宮浦島竹の切先き乙姬絹糸渡り○足柄山々姥金太郞天井綱渡り○障子渡り。

等である。

傘渡りの曲は、舞臺一面仲の町花盛りの背景であるが、上手見返り柳の下に誰哉行燈があつて、それから下手へかけて、蛇目の傘を開いたまゝ八九本、杖に釘を打付けたのに立てゝある。其傘の上を平井權八に扮した小糸が、右の手を懐中から出して、小紫から來た長い文を讀みながら、悠々と渡るのである。


『近世百物語』所載

龍宮の曲は、舞臺の下手に龍宮城門を見せ、其外は一面海の背景である。其城門から上手へかけて、一丈餘りの竹が切先きを揃へて、二尺程づつ隔てゝ立置き、其上横手には絹糸が渡されてゐる。扨浦島に扮した勝代は釣竿かつぎ、乙姬に扮した小糸は唐傘をさし、浦島は竹の切先き、乙姬は絹糸を渡りながら、下座の囃子に合はせて、種々の所作をするのである。

足柄山の曲は、舞臺の上手天井間近くに山頂を現はした外は一面雲の背景で、頂上から一本綱が次第下りに下手出入口の柱

に据ゑ付られてある。これを山姥に扮した小糸は、手にでんでん太鼓と撥とを持ち、金太郎に扮した小菊は、鉞に網を付けて竹川のやうに踊りながら、種々の所作をしてたへくと渡るのである。踊つて中程になると、二人が並みで網が今にも切れさうになる。殊に所作する時に網が左右へ揺くので、落ちるかと思はれるのを、巧みに釣合をとりつゝ、首尾よく山面に着いて、其奥へと姿を消すのである。

障子越しの曲は、舞臺に障子十枚を三尺餘の隔てゝ立並べ、所主の天上に扮した[illegible]は、手に[illegible]を持つて、ヤツとう掛け聲とゝもに身を躍らせ、向の障子へ飛び込むや否や、行つ足から障子に触るゝものないに、早くも六枚見て障子を後へ跳倒して渡る早業は、實に目を驚かすばかりであつた。されば[illegible]世間に安政二年[illegible]物に無しの体にものないものは、[illegible]の[illegible]、[illegible]山の[illegible]。

一月四日より[illegible]段の上下[illegible]代[illegible]川にて興行。

と記されたのが、[illegible]として[illegible]の[illegible]を[illegible]したのは、[illegible]ら〳〵誰の末本小金と此一座に止めを刺すものと云つても過言ではない。

當時に於ける二人の名人と呼ばれた早竹虎吉と松井菊治（後改め源水）とが、[illegible]の[illegible]を[illegible]して興行したのは[illegible]水年代である。この二名人が安政の年の様に、所替へして江戸へ下り、安政四年の春から兩者は西両國廣小路で、[illegible]は[illegible]と改めの上演京都山で興行して、大いに其技術を戦はしたのは、斯業界稀代の壯觀であつた。

兩者は常盤樹松の子役とゝもに出演した西両國廣小路の小屋は、素晴らしく大きなもので、入口には三番叟外四枚の大幟を[illegible]枚を掲げ、間口の太さ十間（[illegible]）の、正月十六日から華々しく開場したのである。其芸組は

一、三人三番叟、富士の裾野子の曲、日風車の曲、淺草少年[illegible]りの一曲、高砂見の一曲、淺草少年行燈渡り、[illegible]江戸の花大江渡り、一金面、獅子の遊び、[illegible]（[illegible]の仕掛）大瀑布の一曲。

の十三曲で、中にも於いて當時世評の高かつたのは、獅子の遊び、富士の裾野子の曲、日風車の曲等であつた。

獅子の遊びは深山の背景で、舞臺一面岩組みの中央に石橋がある。そこへ兩者は親獅子、子役二人は子獅子の縫包みを着て出るや否や、岩を飛廻り坂を走つて戯れ狂ふ敏捷さは、全然眞の獣と毛も異らない神である。かく戯れ狂ふ事やゝ暫くで、[illegible]日た獅子の子落しと聲を掛けると、親獅子は崖の所たから子獅子を蹴落すのであるが、落された子獅子は筋斗をうつて谷間

に取付くと同時に、又頂上へと跳登るのである。そこで口上の拍子木を合圖に、樂屋でチャルメラや太鼓を騒々しく鳴らすと、獅子は皆岩の蔭に身を隠したかと思ふ間もなく、虎吉は歌舞妓の石橋姿に早替りをして現はれる。そして橋の眞中で少し身を前へかがめ、長さ六尺に餘る白頭の毛を、自由自在に打振るのが、所謂石橋の曲である。

『流耳』に

先年大阪にて尾上多見藏、國姓爺の狂言に和藤内の役の折、虎吉を雇ひて虎とせり。

とあるから、猛獸に扮する事は彼が得意の伎であつた事が知れる。

富士の裾旗竿の曲は、富士の裾野牧狩の背景で、軍兵姿の虎吉は、長さ一丈餘の旗竿の上に、同じ姿の子役を乘せたのを右の肩に立て、三味線を彈くのである。其囃子につれ竿頭の子役は、先づ鯱立ちや吹貫きの曲を演じて、終には竿頭に左の足をかけてぶら下ると、其重みで竿が弓のやうに撓むのは、實に奇絕である。



風車の曲は、竹筒へ龜を載せたと同様に、長さ二間餘の竿頭に子役が腹をあてゝ、俯伏しについてゐるのを、虎吉が右の肩に立てゝ、三味線を彈くのである。其囃子につれ子役は手足を張つて、凧廻しの凧のやうにくる〱と廻はる態は、實に見事ではあるが、見事であればある程倚ほ危險なので、見物の手に汗を握らすのであつた。

虎吉の演じた曲は、孰れも右のやうな危極の新曲であつたから、江戸中の人氣を呼んで、木戸錢三十二文に中錢二十四文の高價にも拘らず、毎日早朝から見物人が押寄せて、前日に申込んで置かないと、迚も入場する事が出來ない程であつた。されば繪草紙問屋から、虎吉が演伎の態を畫いた錦繪を盛んに賣出したが、家藏の劇場畫譜に張込んだゞけでも二十三枚あるから、恐らく三十組以上出版されたものと思はれる。

早竹一座の開場と同時に、風邪が江戸町々に流行り出したが、誰云ひ出すともなく、早竹風と呼ぶやうになつた。それは

早竹一座の者が、大坂から風邪をひいて來て、江戸に傳染させたといふ噂が高かつたためである。三枚續きの錦繪に、湯屋と髮結が各得物を持つて、早竹の輕業小屋を壞さうとしてゐるのを、醫者を初め藥種屋や按摩が、それを止める態を畫いてゐるのは、この時出版されたものである。この諷刺畫といひ又右のやうな噂が高かつたにも拘らず、虎吉の人氣に障るどころか、風邪とゝもに益々流行して、金主から莫大の給金と衣裳代とを貰つた事は『藤岡屋日記』に

> 大坂下り早竹虎吉は、風邪とゝもに大流行大入にて、金主より給金毎日十兩、外に十貫文衣裳化粧代出候由

とあるので知れると同時に、虎吉の衣裳が華美を極めた事も亦明かである。かく風に緣のあつた早竹一座は、三月四日に風が原因となつて、終に閉場せざるを得ないといふ一大事が出來した。それは三月四日に行燈渡りを演じてゐた最中、一陣の疾風とゝもに行燈は殘らず倒れたが、深草の少將に扮裝つた虎吉の身體は、針金で釣つてあつたから、空中にぶら下るといふ間の拔けた醜態を晒したのである。それから俄に評判の惡くなるにつれて、客足も亦停つたから、間もなく閉場して歸坂したのである。

櫻綱駒壽が若太夫の幸吉と子役の福松や松之助とゝもに、淺草奥山の觀場に出演したのは、同年二月初旬であつた。其番組は

○三番叟元結渡り○梯子の曲○障子の上胡弓の曲○旗竿の曲○木枕渡り○蠟燭渡り○高砂足の曲○車輪渡り○笛の曲○曲獨樂。

の十種で、曲中に圈點を施したのは、虎吉のそれと同伎である。右の中で當時喝采を博したのは、木枕渡り、蠟燭渡り、梯子の曲等であつた。

木枕渡りの曲は、舞臺の下手から上手へかけ、幅二尺長さ三間半の板を六尺位の高さに釣り、其上へ赤黑塗りの木枕十數個積重ねたのを、三尺づつ隔てゝ七ヶ所に置かれてある。上下姿の駒壽は右手に傘を持ち、木枕の上を渡るのであるが、渡るに從ひ跡足で蹴るのであらう、木枕はばら／＼になつて、舞臺に落ちるのである。

蠟燭渡りの曲は、大燭臺十數本を三尺づつ隔てゝ舞臺に並べてあるが、孰れも點した大蠟燭がさゝれてゐる。其上を矢大臣に扮した若太夫の幸吉が、右手に弓左手に傘を持つて渡るのである。然るに蠟燭は少しも損ぜぬのみか、渡る時に踏付けて火の消えた燭蠟が、渡り終ると自然に火が點るのである。是は機關を應用したものであらうが、當時の見物人は、定めて奇異

の感に打たれた事であらう。

梯子の曲は、竹梯子の最上の段へ、横に同じ梯子の端を差入れ、其上に子役の福松と松之助を載せたのを、長上下姿の駒壽が右の肩に立て、三味線を彈きながら流行唄をうたふのである。其囃子に合はせて子役の松之助は、腰にさした蔦口を横梯子の眞中の段に、柄を下にして引懸け、其柄に片手をからませて放し鵆の曲をする。それと同時に福松は、片足に足駄を履いたまゝ、横梯子の段を渡りながら、曲手鞠をするのである。

當時の世評に虎吉と駒壽との技術は、殆んど伯仲の間と云はれたが、同じ木戸錢ながら駒壽の小屋は、大入場を狹くした爲か、棧敷が多過ぎる程で、其棧敷代も一間一貫六百文、一人前三百七十二文といふ空前の高價であつたから、大入の點では迚も虎吉に及ばなかつた。從つて駒壽が演伎の態



を錦繪に出版されたのも、亦十數種に過ぎなかつた。併し待てば海路の日和とやら、虎吉の閉場後は、連日高價の棧敷も賣切れて、前約者はプレミアム付きで、跡札を富家に賣つたといふ逸話さへ傳はつてゐる。かくて永當〱の大入りを續けたが、病氣のため一ケ月程休場したもの丶、七月十九日まで興行し、錦を着て故郷大坂へ歸つたのである。

曩に行燈渡りで醜態を演じた虎吉は、歸坂後其汚名を雪がんものと、日夜工夫に練習を重ねた上、再び江戸へ下つたのは文久二年で、三月から淺草奧山の觀場に出演したのである。其番組は『早竹輕業繪番附』に

○三番叟大盥の一曲○猿まはし肩の一曲○獨樂の曲○御殿女中行燈渡り○石橋曲持○鞍馬山杉亂杭渡り○知盛大物浦曲持○屛風の上にて皷弓の一曲○幟の上にて手踊○一本竹の梯

○鳥居早替り。

との十一曲であるが、其の多くは先年興行した時の蒸返し物に、少しの新案を加へたのに過ぎなかつた。右の曲中當時評判の宜かつたのは、杉亂杭渡り、大物浦曲持、一本竹の輕業等で、一梅齋芳春が此三曲の場面を畫いたのを、藤岡屋から錦繪として出版されてゐる。

杉亂杭渡りは、在來の亂杭渡りと同じ方法であるが、唯異つてゐるのは、僧正坊に扮した虎吉が、牛若に扮した子役米吉を肩に立たせたまゝ、杉丸太を渡るといふ點である、又大物浦曲持も、知盛に扮した虎吉が大碇を曲持して、其碇の上で安徳帝に扮した秀吉が、種々の曲をするので、是亦在來の曲持と大した變りはない。最後の一本竹輕業は、舞臺の中央に天井から一間餘の竹を釣下げる。赤褌袢に肉色股引姿の虎吉は、それに飛付き鯱立ちや吹貫の曲を初め、種々の曲を演じた後、ヤッとの掛け聲とゝもに、竹には唯兩足首をかけたゞけで、空中に其身を横へ浮かすのであるが、其機みに竹は大きく左右に揺らぐの離れ業である。

當時の見功者達は此曲を評して、是も針金で身體を吊したのであらうと貶したが、前回のやうな失策もなく、日々相應の入りがあつて、五月末日に目出度く打出して歸坂したのである。

明治維新後三都で興行した輕業師の多くは、この早竹一座の末流であつたが、名人が現はれなかつたので、嶄新奇拔の妙伎を演じなかつた結果世に飽かれ、其後は次第〳〵に衰微したのである。

附記、元治元年三月に横濱で興行した中天竺舶來輕業は、當時夥敷き評判で、數種の錦繪さへ版行された程である。併し其實は洋人の曲馬が主で、輕業はほんの附けたりであつた。それも器械體操のやゝ進歩したもので、迚も本邦のそれに及ぶべくもなかつたのである。

第九　刀の刃渡り

刀の刃渡りは、一に劍の刃渡りともいつて、輕業の一種であるが、古くは神社の境内で、緣日の參詣人を目當に、山伏や行人が身に白衣を着て、刃渡りを行つては、劍難除けの守札を出し、御初穗を乞ふたのである。この刃渡りを見世物として興行したのは、寛政十年版本『快談文草』明和年代莨蕩島新地見世物の條に、多三太が刀の刃渡り、女を見入れし馬の見世物とあるのが、恐らく文獻に見えた始めであらう。

刃渡りの曲は、梯子のやうな刀段を設け、演者は一々刀を手に取つては白紙を切り、其鋭利なのを見物に示してから刀段へかける。其刃の上を演者は杖をたよりに、素足で渡るのであるが、最後に地踏韛を踏んで段を動かし、或は兩足の裏に傷つか

さるを見せなどするのである。

天保三年七月に尾州大須で興行した見世物み いれ駒の前藝に、松本兼吉と同榮三郎が刃渡りを演じた。其時は扇子一本を握つたまゝ渡つたと、『見世物雜志』に記してゐる。

弘化三年五月に江戸兩國廣小路の觀場で、養老瀧五郎が演じた刃渡りは、聊か趣向を凝らしたものであつた。それは刀段を石橋の形にし、演者は歌舞伎の石橋姿で、手に牡丹の枝を持ち、下座の囃子に合はせて、種種の所作をしながら渡つたのである



刃渡りの種あかしとして、『萬重寶記』に、熊の油を刃に塗るなりとある。夫は兎に角其後三都の觀場で、刃渡り興行の沙汰がなかつたのは、既に古人の句にも、「刃渡りも見飽く社頭の日永哉」とのやうに、見世物中最も興味の少い上に、直ぐ見飽がするためであらう。

第十 玉乘

玉乘の曲も亦輕業の一種である。この曲を支那で踏毬戯と稱し、『文獻通考』散樂雜戲の條に、踏毬は木毬を用ゆ、高さ尺餘、伎者其上に立ち、圓轉して行くなりとのやうに、散樂雜戲の一種であつたが、奈良朝時代に支那から傳來したものであらう。同時代の物と推定される東寺什物辛櫃の散樂圖中に、其態が畫かれてゐる。併し傳來後間もなく廢れたもので、其後の文籍には、絶えて名目すら見えない。

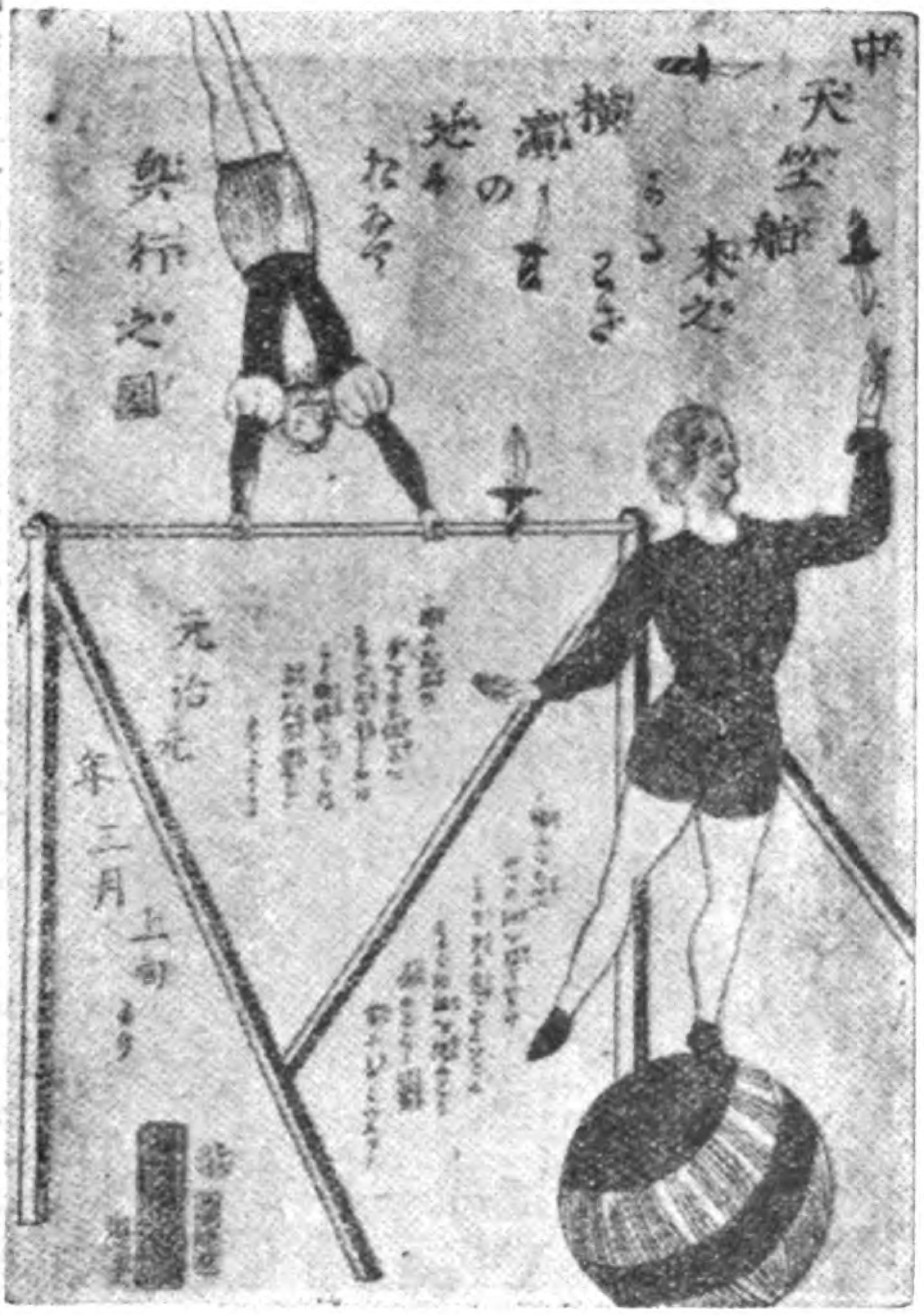
元治元年の三月から、中天竺舶來の輕業と號けて、橫濱で興行したのは、曲馬を主とした洋人の見世物團であるが、其中に玉乘の曲を演じた一洋人があつた。歌川芳虎筆『中天竺舶來輕業』に左圖（五二頁）を載せて毬に打乘り、四ツの劍を投げては受取る、足更に定まらずといへども、鋭き劍を扱ふ事龠の如し、此業實に奇といふべし。との說明を附記してゐる。

明治年代に淺草公園の六區で女太夫の玉乘を興行して、大いに喝采を博した江川一座は、右洋人のそれを模倣したのではない。江川玉乘の元祖作造は、幕末に輕業や曲持を演じてゐた者

であるが、慶應年代に弟子十數人を率ゐて、南洋へ渡つて興行したのである。それが明治初年に歸朝した時には僅に三人、他は風土病に罹つて、異境で客死したのである。玉乘の曲は南洋興行中に習つたもので、弟子の遺族に少女が多い所からの思ひ付きで、作造自から師匠となり、少女に玉乘を練習させた。其結果江川玉乘一座の組織となつて、六區の一號地大盛館で大震災前まで興行を續けてゐたが、それも今は名のみをとゞめて、活動寫眞の常設館となつて了つた。

第十一　筏乘と角乘

筏乘とは、池中に小形の筏を浮かべ、演者其上に乘り筏の角を踏むや、くるり〳〵と兩足で巧みに筏を旋轉しながら、池中を乘廻はすの曲をいふのである。『攝陽年鑑』延享四年の條に、道頓堀にて筏曲乘大當りとあるのが、恐らく文籍に見えた始めであらう。江戸では是を角乘と呼んで、本所深川邊の船頭や材木屋の若者などは、日常角乘を戯れとしてゐたので、江東の人々には珍らしくも無かつたのである。然るに文政三年の春から、角筈の熊野十二社權現開帳の時に、社內の池で角乘を見世物としたが、『雜談日記』文政三辰年夏流言七言律詩中に、本所の材乘（かくのり）山手に見ゆとのやうに、山の手の人々は終ぞ見た事もないので、取り取りに評判して、日々見物群集したのである。權現社內角乘の光景は、『遊歷雜記』や『江戸繁昌記』に據ると、權現社內の池には大きな帆掛船の造り物があつて、其附近に角材二三本を浮かべ、演者は裸で足駄を履き、船から身を跳らせて、角材に飛乘るのである。そこで足駄の齒で角材を踏み、水車のやうに廻すのが前藝である。次に角材の上に梯子を檣のやうに立て、演者は梯子の頂上に乘り、一本足で四方眺望の狀をなし、或は右手を梯子にからませて、大の字の形をなすかと思へば、忽ち身を翻して鯱立ちなどの輕業を演じたのである。其後大坂では文政七年と同十一年とに、難波新地で海人筏乘と號けて見せ、又江戸では天保九年閏四月に、回向院境內で角乘を興行したが、孰れも不評だつたので、續いて興行する者もなく、何時しか廢絶して了つた。



（つゞく）

勞農露西亞の新しき農村を見る

志垣寛

空氣枕

「君、荷物に氣を付け給へ。それから靴は穿いたまゝ寢た方がいゝよ。」

いく度かさうした注意をうけて、私達がモスクワのクールスキイ驛を發つたのは夜の十二時すぎであつた。時はことしの三月十五日。私達と云ふのはロシア文學研究のためモスクワに留學中の藏原君と私の二人である。

「今頃トルストイでもあるまいよ。」

私達がヤスナヤ・ポリヤナ行を企てた時、さういつて笑つた人もあつた。然しヤスナヤ・ポリヤナに行かうと云ふ事は私のロシアに出かけた有力な目的の一つであつた。私はそこに行く事によつて新らしいソベットの農村をみ、田舍の教育狀態をみようと云ふ希望をもつてゐた。

暗いプラットフォムに吹きさらされ乍ら、三十分もまつとやつとハリコフ行きの列車が來た。人々は雪崩れのやうに昇降口に押し寄せた。相手を呼ぶ聲、伴れを尋ぬる叫び、幼兒の喚めきなどが一齊に起つて、そこは忽ち修羅場の如くであつた。私達も乘り後れてはと頻りにあせつたが、てんでに小山のやうな荷物を背負つた乘客たちで容易に近づけない。どうせ切符に番號がついてゐるから、さうあせることもなからうよと、強いてあきらめ乍らくつろぐのをまつた。

乘込んでみると車室の中にはカンテラ一つついてゐず、人いきれと革の臭とがむせ返るやうに鼻を撲つ。全く身動きも出來ぬ人の塊りである。マッチを擦つてみる。もうその邊一つの空席もない。でも私達は根氣よくマッチをすつて自分の切符が示す座席を探した。やつとその席は分るには分つたが、そこにはズックの大袋を横たへた上に鬚の中から顏がのぞいてゐるやうな大の男が悠然とかまえてゐる。一夜の立往生はとても私には辛抱されさうになかつたので、私は勇を皷して云つた。

「タワリツシ、そこは僕の席だが……。」

「今に車掌が來てよくしてくれるよ。」

男はさう云つてぼろのやうな外套の裾をまくしあげた。まつ程もなくカンテラをさげた車掌らしい男がやつて來たが、元より一人だつて定つた自分の座席についてゐるものはゐない。まつ暗では座席の番號も分らう道理はなく、よしわかつたところで、彼等の大部は文盲なんだから世話はない。車掌はこの立ち往生をしてゐる遠來の客には目もくれず、勿論座席の整理どころの話でなく、慌たゞしく行つてしまつた。この樣子を目撃してゐた藏原君は、いち早く三階に一つの空席を發見して、敏捷にその上にとび上つた（ロシアの三等室には二つの棚があつて三段になつてゐる。その上に一人宛横になれるのがとりえである。）

「こゝに來ませんか。僕立つてゝもいゝんですよ。」

棚の上から首を伸ばして藏原君が氣の毒がる。生じつか研究のためだなんと力んで三等を選んだ事を心持悔い乍らも私は強がりを云つた。

「大丈夫ですよ。なに。」

間もなく列車は動きだした。とうとう席は空きさうにない。私はたまりかねて件の鬚の男に要求した。

「じや君、その荷物を少しどけてくれ給え。」

男は袋の中から出した頭のやうな黒パンを噛つてゐたが、僕の要求をきくと、その一塊をぱくりと口の中に放り込み樣、立ち上つて袋を床の上に下ろした。私はむつつりとふくれたまゝそこに腰を下ろしてから初めてやゝ落ついた氣もちであたりを見廻した。左手には夫婦であらうか、一つの席にまくり合つて長くなつてゐる男女があり、私のすぐ上の棚からは靴屋の看板にでも見ないやうな大きな長靴がによつきとたれ下つてゐる。向合つた二人のお客さんは何れも百姓らしい。人のよい鬚面の凹んだ眼。その人なづかしさをもつた四つの目が申合せたやうに私をみてゐる。そして今にも何か話しかけたいやうな口もとであつたがやがて一人が云つた。

「支那人（キタイツ）？日本人（ヤポーネツ）？」

「ヤポーネッ！」

日本人だと聞くと彼等は更に一しほの親しみと敬意とを表はして來た。そこで私は初めて三等を選んだ事の喜びをみ出し、すつかり和んで來たのであるが、殘念な事に私には會話の自由がない。話が餘り通じないとなると、彼等もつまらなくなり、だまりこくつてしまつた。そこで私は空氣枕をとり出して息を吹きこみ初めた、その物音に二人の男はもとより、棚の上から

も、左手の毛布の下からも、いくつかの頭が蛇の鎌首のやうに持上つて來た。私は何か得意になつて、張りちぎれるやうに膨んだ枕をぽんぽんと二つ三つ叩いてから、その上に頭をのせ、件の大男の尻に蝦のやうに凹つた。あたりから暫くさゞめきの聲が洩れてくる。

ロシアが物質文明に立ち後れてゐることは改めて云ふまでもない。殊に革命後は諸般の工業が未だ復舊せず、製產加工品は至るところ非常な缺乏を告げてゐる。たとへば萬年ペンとかエバーシャープのやうなものはモスクバでも滅多に見ず、萬年ペン用のインクは絶對にない。國際列車の一等室にだつて便所の紙はおろか、洗面所にタオルも石鹸もなく、寢具は軍隊のお古でも拂下げたやうな赤毛布、シーツは洗ひ晒しで穴があいてゐると云ふ狀態である。それかあらぬか、器械工業の獎勵には全力をあげてゐる。活動にも芝居にも、新聞にも雜誌にもいつも器械の事や工場のことが取扱はれ、學校へは大てい器械工場を設けてゐると云ふ有樣である。

ツウラ驛の壯觀

朝の五時頃私達の汽車はツウラ驛についた。その列車は急行であつた爲め餘程早かつたわけであるが、文豪ヤスナヤ・ポリヤナには停車しないので私達はこゝで乘り換へなければならぬ。

ツウラはツウラ縣廳の所在地で人口二十餘萬、古來サモワルの產地として有名な都會である。停車場の規模も隨分宏大なものであるが、私達は次の列車をまつ間の三時間をこゝで過した。食堂は一二等待合所を兼ねてゐるので、夜もすがら營業してゐる。朝飯には早すぎるが鷄の料理など有合せのものを食つてゐると、私共の隣の卓子に二人の紳士がやつて來た。二人ともふつくりとした毛皮の外套、襟には青狐の皮。指間にはダイヤとアレキサンドルが二つも三つも光つてゐる。所謂ネツプマンと云ふ連中だらう。

「雞とビールを。」

一人がボーイにさう命ずるとボーイが、時間前だからビールはいけないと云ふ

「いゝからもつて來い。」

「駄目です。」

「いゝつてば。氣がきかん男だな。」

「でも。」

すると今一人の男が立ち上つて番臺の處にゐる番頭らしい男

に何か小聲で云つた。私はどうするのかと思つてみてゐると、番頭はビールの栓をぬいて、それを紅茶々碗についだ。ボーイは紅茶よろしくそれを運んだ。二人は頻りに飲み且つしやぶる。そこへ妙な男が一人やつて來た。初め私どもの處へ來て云ふ事には、自分はこれからレニングラードまで行くのだが汽車賃がない。自分はレニングラードの精神病院にゐたものだ。どうか汽車賃のたしにこれを一つ……と云つて折カバンの中から何か出さうとする。私がわざと手と頭をふつて「分らん。分らん。」と云ふて取あはぬと、男はすぐ隣の兩紳士に同じ事をくり返し初めた。するとその內の一人はしやぶりかけの雞の骨のはいつた皿を、その男の前につき出した。男はさつそくその骨をとりあげて喰ひさしの肉を器樣に前齒でくいとり初めた。一皿が終ると彼は今一人の紳士の皿をじろりと睨んでその食ひ終るのをまつてゐる。

この淺ましい光景に、まづ驚かされた私は、更に三等待合室に行つてみてその壯觀に全く膽をつぶした。そこは東京驛の三等待合室よりもつと廣いだらうが、そこのベンチと云ふベンチにはたつた一つの空間もないまでにぎつしりと人々が倚つてゐる。その七八分はまだぐつすりと寢入つてゐるらしい。ベンチが手に入らず、石ばりの床の上に身を橫たへて安らかな眠りを貪ふてゐる者が更に幾十人と云ふ數に上つてゐる。その中には松葉杖を枕頭に置いてゐる者もある。ぼろの下に丸太のやうな義足がころがつてゐるのもある。こゝにもくるまつてゐる夫婦者がゐる。殊に私に强いショックを與へたのは放浪兒の一群だ。放浪兒は昔からロシアにはゐたやうであるが、大戰に續く革命、革命に續く飢饉、飢饉に伴ふ惡疫の流行等のため夥しく殖え今では其數百萬人に近いだらうと云はれてゐる。元よりたよるべき人もなく、休らう家のないもの許りで、また四五才位の頑是ない者から二十歲位までのものが多い。壁つきに折り重つてねてゐる彼等の一團は十歲から十四五才位までのもの許りであるが、たゞしるし許りに身にまとつたぼろの下に、腰や肩などを露出したまゝ平氣で鼾をかいてゐる。脚には藁をまいて紐でくゝり、靴とは名ばかりの革屑を足の先に結びつけてゐる。

更に便所にはいつてみる。そこの大便所には戶がなく、糞尿は溢れて足の踏み場もない。臭醜目を覆ひ鼻をつまんでも、尙身ぶるいを感ずる。しかもその壁ぎはに寄りかゝつてトランプを賭ける一團があり、其側のスチームの管にもたれて眠つてゐる幾人かゞある。然も平然としてその開けつ放しの大便所に、溢れ出でつゝある便器の上に尻をおろす勇敢なものもあるのである。これでも尙人間の生活であらうか。私は云はうやうなき

陰慘醜穢の感じで胸が一杯になるのであつた。

放浪兒

放浪兒の救濟に向つてはロシアの文部省が非常な努力を拂つて居るが、何にを云つてもこれは手に負へない。救濟の根本策をたてようとしても第一その數さへ幾十萬に及ぶのであるか分らない。統計などとれるものではない。對外文化聯絡局の云ふ所によると大ロシアだけでざつと三十萬は居らう。その中二十萬は子供の家と云ふ敎養機關に收容するが、後はもつと嚴重な機關に托さなければ駄目だと云つてゐる。然しこの數は餘程內場にみた數でとてもそんなものではあるまい。モスクワだけにでも廿萬はゐるだらう。最も多いのは飢饉の中心地サマルスカヤ、サラトフスカヤ兩縣及デニキン軍の被害を受けたスタルチポリスカヤ縣等である。西比利亞にも隨分多く、チタ驛でも私は驛のペチカにしがみついて重り合つたまま眠つてゐた多くの放浪兒をみた。

　これらの放浪兒がどうして出來たかと云ふ原因はさきにのべた。この夥しい數は何も自慢にはならぬが、それでもロシアでは云つてゐる。他のブルジョアの國では金があまりあまつて贅澤のはてに出來た不良少年といふものが隨分多いが、我國にはそんなものは一人もゐないと。何れにしても感心した事ではない。こゝに當局によつて示された統計についていかなる家庭から最も多くの放浪兒が出たかを一瞥しよう。

百姓の子弟	一一・四パーセント
工場勞働者の子弟	六・七パーセント
手職人の子弟	一三・〇パーセント
日傭人夫の子弟	一〇・七パーセント
家主の子弟	一〇・一パーセント
勤人階級の子弟	一一・一パーセント
小役人の子弟	二七・〇パーセント
商人の子弟	一〇・〇パーセント

ロシア人自身の云ふことによると、この夥しい放浪兒の中に猶太系統のものは殆んど見當らないさうである。

　これらの保護なき少年は、徒黨を組んで市場や停車場など人出の多い處に行つてかつぱらいをやり、甚しいのになると强奪、强姦などもやる。市場がへりの女をつきとばしその買物籠をひつたくつたり、街路で立ちうりをしてゐる手渡し商人の品物をかつぱらつて逃げたりするのは私も一二度目擊した事である。冬期は寒い爲にいくらか其の數も少ないが、夏になると彼等の跋扈は殊に甚しい。三十人も群つて來るのを

みると女子供は逃げかくれ、男でも恐ろしくなつて小さくなり、巡査も手の下しようがない。四五才位と思はるゝ小さな子でも、煙草をふかし乍ら、電車の後尾に腰打ちかけてどこへでもとんで行く。遠方への移動は大てい汽車の只のりをやるのであるが、日本あたりの不良少年のやうに車輛につかまつたりして雜行をやるのでなく、彼等は大つぴらで車室にもぐりこんでくる。

政府はその救恤策として所謂子供の家を拵へ、そこに收容して保護し、或は一般の學校に入れ寄宿舍で教養してゐるが、とても追ひつくものではない。學校の寄宿生活など設備も整ひ不自由のないやうになつてゐるけれども、いつの間にか彼等は逃亡して了ふ。一たん經驗した放縱自由の生活の味はとても忘られないらしい。これらの多くが大てい花柳病をもつてゐると云ふに至つては誠に氣の毒に堪へない。やゝ有効であらうと思へるのは一人宛地方の農家に依托し、自分の子のやうにして教養して貰ふと云ふやり方である。現に之を引きとつて保護してくれやうと云ふ農家が十萬戸もあると云ふ話であつた。若しこれが巧く行けば相當成功するだらう。近頃岡山孤兒院が解散した理由にもあつた如く、概して特殊教育の方法としては集合教育は面白くない。ロシアの當局もほとほと之れはもてあましてゐるらしく、一部には銃殺說さへ傳はる程である。何しろ寒暑飢餓に堪え、苦辛の限りを忍んで大きくなつて行く彼等だ。その體力意力の旺盛さに至つては恐るべきものがあらうし、之を放置すればどんな事をしでかすかも知れない。

トルストイの家

ツウラからヤスナヤ・ポリヤナまでは僅に一驛二十分間程だ。ヤスナヤ・ポリヤナ驛は朝夕二回位しか停車しないほどの小驛、その朝も私たちの外別にのる客も降りる客もなく、驛員らしい人の影さへ見えぬ。いゝ加減出口らしい方へ歩いてゐると、驛舍のドアを細目に押しあけてさしまねく男がある。

「あなた方はトルストイ博物館に行くのでせう。」

と云ふ。

「さうだ。君はアレキサンドル・リヴオフナの處から來たのかね。」

「さうです。どうぞこちらに。」

アレキサンドル・リヴオフナと云ふのはトルストイの末の娘でことし四十一二の老孃、現にヤスナヤ・ポリヤナのトルストイ博物館を管理し兼ねて村の小學校長をつとめてゐるのである

が、モスクワにも家があつて折々モスクワに來てゐる。私達が此の旅行を計畫した時も丁度モスクワに來てゐたのであつてその旨をつげると孃は大によろこんで、私たちより一日早く歸り、今迎への橇をよこしてくれた譯であつた。

「これを着て。」

男は抱へてゐた大きな外套を一着宛私たちに渡した。外套は裏に羊の毛皮を張つたもので、表は黑光りがしてゐる。一つでさへ馴れない內は肩が凝つて仕樣のなかつたシュウバーの上に、又それを着込んだ。襟は深く顏を埋め、裾はぞろ引き、手は全く出ない。私たちはよちよちところげるやうにして腹を抱へ乍ら迎への橇にのつた。橇の中には乾草がしいてある。

（このシュウバーは杜翁のものだつたかも知れないよ。）私はひとりでそんな事を思つてゐると、橇はするすると坂を下りきつてすぐ又のぼつて行く。のぼり行く坂道の左手、疎な白樺の林にとり圍まれて、幾棟かの瀟洒な別莊が見える。林の入り口に「休養の家」とある。

「休養の家」はそゔぇつとろしあが自慢にする施設の一つだ。勞働者たちは年に二週間の公休があり、その機會に「休養の家」に行つて大に靜養するわけである。即ちその間は御馳走をして、面白くすごさせるのである。その日課の中には體操、讀書、死の時間（每日一時間宛絕對沈默を守る。多くは寢てすごす。）などがある。この爲に政府は年々五百萬留を費してゐる。レニングラードの島々公園にある多くの別莊は皆休養の家となつてゐる。公休以外の時でも過勞のために疲れた人は醫師の診斷を經て許可されれば、いつでも行つて休める。その頃モスクバにあつた二つの休養の家には七十人の疲れたる人々が靜かに新しい勢力を養つてゐた。使へるだけこき使つて、使はれなくなればたゝきすてるブルジョア國の狀態とは流石にちがつたところがある。

坂をのぼりつめると、あとは平坦な雪の原、白く光る白樺の森を縫ふて一筋の逕が僅かに雪を踏み固めてゐる。蹄の足音につれて雪片が頻りにとんで來て顏を打つ。足尖がづくづくと冷えて來る。私は頻りに乾草を靴の上にかぶせるが何の利目もない。外套のお陰で體は少しも寒くはないが、足だけはとてもたまらない。橇の床をコツコツと蹴つてみたり、ゆすぶつてみたりしてもなかなか暖まらない。麗な陽光が林から野へ滿遍なくてり映えて氣は誠にすがすがしいが、足の冷たさにたぢろいだ私は、頻りにトルストイ家の近づくをまつた。

やがて左手になだらかな丘がみえ、丘の表に點々と人家が見え初めた、と思ふ間もなく、橇は濃綠にぬられた圓錐形の屋根

のある門をはいつた。ふりかへると門とは名のみ、煉瓦でたゝまれた古風な建物で、中には番人の一人や二人立てる位の大きさであるが、元より開け放されたまゝで何の遮るものもなく、傍の門番小屋にも人の氣さへない。この門こそ杜翁の母方の祖父ウオルコンスキイ公爵が立てられたもので、トルストイ家の盛時を偲ばする一つの名殘である。

左手には廻り四丁ばかりの池があり、氷結した上に雪深く積つてゐるが、その上に一筋の道路が出來てゐる。右手の低くなつた林の中にもやゝ小さい池があり、左の池の水は、道の下をくゞつて右の池へ瀧となつて落下するやうになつてゐる。池に續いて左手は林檎畑、右は洋杉、白樺、ぶななどの森、その間を途は心もち上りになつてゐる。門より一丁餘り、道へさし出た生垣の小枝に頭を撫でさせつゝ、眼の前に表はれた白壁二階作り、例の濃綠の屋根の一棟、それがわがトルストイの家であつた。

杜翁の末子アレキサンドル・リヴオフナ孃

橇は大きな榎（？）の下に駐つた。この榎こそ寫眞や繪でかねて見覺えのある貧者の木だ。手を伸ばすと屆く位の高さに一つの鐘がつるされてある。昔は折々この鐘が鳴らされた。鐘の音をきいて貧民たちが馳けつけると、翁は手づから物を惠んださうだ。モスクワのトルストイ博物館には、この鐘の下で群つて來る貧民たちに翁が何か與へてゐる繪があつた。德富健次郎氏が訪問された頃、この鐘は專ら食事の相圖に用ゐられたやうだ。今ではたへて用もなささうであるが、昔の名殘にとてか、そのまゝに淋しくつるされてゐる。

聲をきゝつけて、表の戸を排し、榎の下に人々が出て來た。アレキサンドラ孃はまつ先に立つてゐる。德富さんは孃を（その頃女學校を出た許り二十一二の妙齡であつた）二十貫もあらうとかいてゐるが、今ではまさに三十貫にも及ばうか。血色のいゝ赤い顏に質素な服裝、斑の鹿の毛皮で拵へた防寒靴を穿いてゐる。孃の後には幾人かの男や女が立つてゐたが、誰が誰であるか分らない。挨拶もそこそこにすぐと案内された室は、初めトルストイの書齋であつたと云ふ階下の一室。東に面して二つの窓があり、白ぬりの天井は低いが割に明るい室である。室には二つの寢臺、一つのソフア、二三脚の椅子と一脚のテーブルがあり、かぎのかゝつた硝子戸棚の中には東洋風の茶器と、菓子のやうな鑛石の幾塊かゞ鉢の中に盛られてあつた。

「お顏を洗ひなさい。

む十を越したらうと思はるゝ老媼が水を運んでくれたので、二人はそれで顔を洗つたり口を注いだりした。水の中には氷の塊りが交つてゐた。やがてお茶の案内があつたのですぐ食堂に行つた。食堂にはさつき迎へてくれた人たちが集つてゐる。私は改めて挨拶をした後モスクワから買つて行つた菓子箱をさしだした。するとアレキサンドラ孃は「部屋代をもつて來たんですか、はははゝゝゝ。」と大聲で笑つた。そしてすぐその菓子はみんなの前で開かれた。

「田舍にゐるとこんないゝ菓子は滅多に食べられないですよ。さあいかゞです。」

　さう云つて中ばは私たちに禮の意味をこめて、外の人々へすすめた。孃の紹介によるとそこにゐた五十近くの二人の女の人は、何れもこの村の藥局に勤めてゐる女醫であり、外の若いお母さんは杜翁の孫娘であると云ふことであつた。卓上にはパンの外にチース、バタ、ソーセージなどがあり、大きな銀のサモワルからは陽氣に湯氣が立ちのぼつてゐる。みんなは私たちにはかまはず、さつさと食事をするのであつた。

　その部屋はもと女中部屋だつたさうで、昇降口に近い粗末な室だ。壁にはいくつかの翁の寫眞がはつてあり、翁が夫人と共にベンチの上に腰をおろしてゐる靜な林の風景など、中々いゝものであつた。

「どうしてそんなにたべないの？」

　孃は日本の御飯茶碗より大きい茶碗で紅茶を三杯ものんだらうか。私が一杯をもてあましてゐると、さう云つて頻りにすゝめるのである。打ちみた通りの磊落さで何の屈托もないこのさつぱりした氣持につい私たちもいゝ氣になつて遠慮會釋もなく何かと尋ねた。

「つひこないだ、五ケ月餘り刑務所に行つて來た。」

　どうした話からであつたか、さうした話も出た。

「何故？どういふわけでです。」

「さあ、何故だか。私にも分らない。」

　孃は煙草の灰を落してすましこんでしまつた。

　ボルセビイキが舊貴族や資本家階級に對してとつた態度に就ては誰もが知つてゐる。果して幾人の貴族が今ロシア領内で生命を完うしてゐるだらうか。トルストイ家は實に幾百町歩の山林田畑を有する大地主であり、立派な貴族なのであつたが、翁の思想――それはボルセビイキとはかなり距離のあるものではあつたが、ともかくも民衆の心を心とするものであつたし、ボルセビイキも流石にこの一家に對してはさう亂暴な事もしたかつたとみえ、たとへ今ではアメリカに、フランスに兄弟たち

散り散りになつてはゐるが、みんな無事であると云ふ事である。そして杜翁に最も愛せられ、最もよく翁の氣持を受けついでゐると云はるゝアレキサンドラ嬢が、今この家に殘つて社會の爲に働いてゐる。その孃の入牢。私は何か知ら其の意味が分るやうな氣持がしたが、深く追究する無躾を控へた。

トルストイ博物館

この建物の二階の大部が所謂トルストイ博物館として開放されてゐる。開放されてゐると云つても、こんな田舍までさう再再晉のふ人もないであらう。國內の人より、外國の訪問者の方がむしろ多いかも知れない。吾らはアレキサンドラ嬢の後について二階へあがる。階段を上つて左にある三つの室の中、最も東に面せるものが夫人の室で、あとの二つは今寄寓の人たちが住つてゐる室、まづ吾等は右側のドアをあけてはいる。はいりかゝりの室は圖書館で、こゝに一萬五千部の書册があり一人の若い娘がカードの整理をやつてゐる。次は大廣間でこの家の南の一廓を占めてゐる。二つのピヤノがあり、ゲーや、レーピンなどのかいた世界的な名畫――主としてトルストイ家の人々をモデルにして描いたもの――が幾枚となく掲げてある。よくトルストイがさしたと云ふ西洋將棋も昔のまゝに殘つてゐる。隅の大きな卓子の上には、方々からの訪問者によつてかゝれた人名簿があり、試みに開いてみると次の一頁が目につく。

「千八百六十八年十月二十五日日本九州に生る。

德富　健次郎

トルストイの家庭とろしあに惠みあれ」

圖書室と背中合せになつて、東に面する三つの部屋は客室、書齋、寢室と云ふ順になつてゐる。客室にはトルストイ自身の選んだ「日々の修養」とでも云ふべき書册があり、毎日その日その日に頁をまくるカレンダー式になつてゐる。その日――三月十六日の條には、

「すべての勞働は人間を高貴にするが故に貴い。――タルムツト――」とある。壁間には翁が百姓してゐる繪がある。レーピンのかいたものだ。次の書齋に行くと翁が家出の瞬間まで讀んでゐたと云ふカラマゾフ兄弟の下卷百四十四頁が開いたまゝ硝子の箱で覆はれてゐる。翁は德富氏の問に對して、露國文學の中でカラマゾフを最も推賞してゐた。家出の最後まで彼をよんでゐた翁の氣持を思ふ。翁は家出するまでいろいろな書を漁つて毎日佳言名句を拾つてゐたらしく、その死んだ丁度一年前の日に選んだ言葉に「生は夢、死は目さめ也。」とあつた。トルストイがふだん用ゐたと云ふ小さな低い椅子の上には空氣枕

のやうなゴムの袋がのつかつたまゝ昔のまゝに殘されてゐる。彼はその椅子の上にあぐらをかいて原稿をかいたさうだ。その後の壁つきには、十幾人の子女が生れたと云ふ黑皮のソファがあつた。アレキサンドラ孃はそのソファの上をたゝいて云つた。

「私もこの上で生れたんですよ。」

窓ぎはにあるトルストイ夫人の机の上にはられた赤い羅紗は、黑インキのしみだらけで、夫人が翁の原稿を一々淨書したと云ふ話も改めてアレキサンドラ孃の口からきくと感慨が深い。寢室には漢法醫者の藥箱みたいなものがあり、翁は晩年その中にいろいろな藥をしまつてゐて、よく用ゐたさうだ。試みに一つの抽斗しを引出してみると、中には石鹸とブラシが出て來た。孃は說明を加へる。「これは父が家出する迄つかつてゐたものです。父は石鹸は必ず英國製のもので、植物性のもの許り使つてゐました。」と。

洗面所の側には、三脚になつてゐるステツキがぶらさげてあつた。晩年翁はよくそのステツキをついて散步に出かけ、疲れるとそれを立て、腰をおろしたさうである。

小さな戸をぬけると、そこは初の階段の上りたての所である。廊下をこえて夫人の寢室兼書齋にはいつてみる。こゝは流石にさつぱりとかたづいてゐる。鄕像がまづ目につく。ミシンや、化粧鏡や、衣類箱など女らしさが充ちてゐる。夫人は大變油繪がうまかつたさうで、その手になるものが幾枚かかゝつてゐる。古びた机の上には夫の品々が昔のまゝに殘されてゐた。アドレスブツク大小三冊、來信數通、眼鏡大小三個、トカゲの形をした金屬製の文鎭、頁きり二本。三角形の自然石に釉をかいた文鎭、陶器の筆立、古切手のはいつた小匣、吸墨紙二つの蠟燭たて、革製の古びた紙挾等。

一巡した後私たちは東の軒につき出されたバルコニイから、すぐ手近の森や、谷を越えて向ふにみえるヤスナヤ・ポリヤナの民家をながめた。このバルコニイこそよく杜翁が夕食後などに瞑想した處だそうだ。夫人の手によつて撮影された寫眞帖を見ると、翁が小學校の子供を集めて、このバルコニイでお話をしてゐるのが幾枚かある。――序だがその寫眞帖には翁がゴルキイと一しよに寫れるもの、チエホフと二人のもの、翁と德富氏とが馬車にのり、アレキサンドラ孃が馭してゐるものなどいろいろ面白いものがあつた。

トルストイの學校

晩年トルストイはその著作の印税も原稿料もとらなかつたし、自分の高大な所有にかゝる山林田畑土地を農民に分讓しよ

うとしたために、隠居せしめられて了つた事は有名な話である。德富氏が訪問した頃、即ち今から二十年も以前、既にこの寒村にも革命熱が高くトルストイ夫人は重要書類など常に一括して匣に納めてゐた程であると云ふが、間もなくあの大革亂だ。阻まれた翁の意志も十分に達せられた。その後トルストイ家の財産がどうなつたか。これは何人もが知らんと欲するところである。

翁の沒後千九百九年まではその財産はトルストイ未亡人によつて管理されたが、革命後千九百廿一年までは地方經濟團體の手に移つて了つた。その頃モスクワの中央政府ではヤスナヤ・ポリヤナの事に就て殆んど何の留意もしなかつたらしいが、最近になつて政府はこの土地に着目して來た。それは吾々のやうな翁を追慕する外國の旅人がこゝを訪れるであらうと云ふ事に想倒したからではないだらうか。ともかくもソベツト政府はこの地方を開發する爲にヤスナヤ・ポリヤナを中心としようと云ふ方針をたてた。それにはやはりトルストイにゆかりのある人をもりたてる必要があつた。丁度よくアレキサンドラ孃も亦社會教化に就て一つの理想があつたので、自ら孃がその中心となり、そこにトルストイアンのコンムナーが出來、その團體で、トルストイ家の財産であつたもの一切が管理されることになつた。その頃コムムナーは四十六人であつた。然し乍らこのトルストイアンの中にはさして經濟的手腕のあるものがなかつたか成績がだんだん悪くなつて來たために昨年即ち二十四年になつて、外から若干の人々を加へこゝに新な組合を作つて之を管理する事になつた。その結果はどうであらうか。土地の農民が幾分の潤ひを受けつゝあるだらうか。それとも村の社會事業のために有益に使はれつゝあるだらうか。

トルストイが若い時分に私立學校を建てゝ村童の教育を樂んだと云ふことは、少しく彼の傳記を讀んだ人の誰もが知つてゐる事である。私がわけて翁の跡を尋ねようと云ふ希望に燃えたつたのは、作家としての翁よりも、その教育家としての翁を懷しく思つたからであつた。否偉大なる作家であり、且つ美しい教育家であつたからである。トルストイの學校は無賞罰の自由教育場として教育史上にも謳はれてゐる。勿論今日のカントイズムで固つた所謂教育學と云ふものからは一も二もなく叩きつけられ、翁の教育は全然失敗であつたとされてゐるけれども、彼れの學校に於ける學童の生活狀況を寫したものを讀むとき、誰もがほゝえみを禁ずることが出來ない。そこに人間として力強い教育をみるのである。彼の學校には時間割とか教科書とか座席とか試驗とか云ふものゝ固定したものはなかつた。彼は徹底的に人間の上に宿る生命の純眞を信じきつてゐた。彼は云つてゐ

る。

「諸君は埃及の僧侶のやうに、神秘の外套の下に隠れてゐる。諸君は歴史によつて與へられた才能を地中に埋めてゐるのだ。恐るゝ勿れ、人間に有害な人間的なものはない。諸君はそれを疑ふか？感情を解放せよ少年の性質を信ぜよ。」

生命信順の教育思想こそはやがて新しい教育界に革新の火となつて燃え上つてきた。彼の思想は實に砂漠の中に棄てられた眞珠のやうに光つてゐる。然もわが教育界は尙も眞珠を踏みにぢつて徒らに砂塵を浴びてゐるのである。

いつの世、いかなる時にも正しい事は喜ばれない。トルストイの學校も亦間もなく當時の官憲によつて壓迫せられ千八百八十年頃にはとうとう閉鎖の止むなきに至つた。後世の史家は之を以て杜翁の學校教育が失敗であつた事に歸しようとしてゐる。人間に人間としての目ざめを示唆し誘導する事が、壓制を唯一の武器とする教會と政府の反感を買つたからとて、それが何で失敗であらうか。

見よ。トルストイの人道主義は共産黨の立場との間に多くの隔りを有つてゐるにも係らず、彼の學校で行はれた多くの事實がソベットの新しい學校に採用されつゝあるではないか。萬人勞働の教育思想を初めとして、無試驗、無賞罰、無教課、無時間割制、然して人生と直接への教育、これらは實にヤスナの新學校に於ける著しい特色であり、然も五十年前杜翁によつて一度行はれた事であるのだ。

杜翁の墓

「橇の仕度が出來ました。」

さきの老媼がさう云つて來た。私たちはこれから杜翁の墓に詣で、そして新しい村の學校をみに行かうといふのである。トルストイの學校が閉鎖された後一時教會所屬の學校が出來、ブルジョアジーの教育が行はれてゐたのであるが、革命と共に後方もなくなつて了つた。その後その建物を修築して新しい教育を初めたのであるが、何分にも金はなし、教師は腹が坐はらない爲にほんの名のみであつたさうだ。千九百二十三年になつて初めて新制による初級小學校が出來、翌二十四年大ロシアの指定實驗學校となり、今日の盛況を來してゐると云ふことであつた。實驗學校と云ふのは大ロシアだけで百五十校ほどあり、ツウラ縣には二校しかない。新しい學校の組織を實驗的にやつてみると云ふわけであるが、實はソベット政府の教育理想を實現する模範學校なのである。

白樺の林を洩れくる陽光にぎらぎらと輝く積雪の上を、橇は

輕く辷つてトルストイ家の邸を下りた。その邊一帶ぶなや白樺や菩提樹の森である。森の中を小逕がXになつたりYになつたりして走つてゐる。その岐れ路に墓への道しるべが立つてゐる。梢には一葉の枯葉さへなく、地上には一塊の土さへみえない。白く光る幹と、眩しい雪の原、小鳥もきかず、風のそゆらぎだにない。馬も心ありてかいとも輕ろげに音もなく歩く。ほしいまゝなる吾等の思は森の中をそゞろ歩く眼の凹んだ鬚の長い翁を描きだす。やがて馬は一人でに駐る。

「お墓です。」

馭者に云はれて下りたつ。はてしなく續く森の白樺の間に、僅かに盛られた一塊の土、形ばかりとり圍まれた木棚凡そ三十坪。棚の入り口に一台のベンチがあり、詣づる人の休らふに便する。墓木もなく勿論墓銘もあらう筈はない。傍なる白樺の小枝にぶらりとつるされた木札には僅に次の文字がよまるゝ。

――レフ、ニコライウッチが愛してゐた樹を可愛がつてやつて下さい。――

墓前に跪く事しばし、吾等は處女のやうなセンチメンタルな氣持になつて、嘗て翁が愛したと云ふそこらの木と云ふ木を撫でさすり、或は輕きキッスなどを與へたりして、しばし時のたつを忘れた。

故人の心を心とした後の人々の計らひ、この無造作な墳墓の懐しさよ。永遠にたゞ一人！さうだ翁は晩年いたく不和であつた賢夫人とも二露里も離れて眠つてゐるのである。

ロシアの新學校

森をぬけ、トルストイ家の林檎畑を横つて、高原のやうな雪の原を橇は一里あまりも駈けたらうか。學校についた時は授業中ばであつた。小使にその旨話しても一向要領を得ず、まごまごしてゐる所に、これも小使ではないかしらと思へる裝ひをした無性鬚の男が來たので、不安に思ひ乍ら「君はこゝの教師ですか。」と尋ねると「さうだ」と云ふ。でアレキサンドル孃の手紙を示すと、先生はすぐにもと來た方へ引き返した。代つて出て來たのは三十近くの斷髮女教師、そゝくさとはづんだ調子が、何かしら異常な感激を呼び起してゐるやうにみえた。彼女が私のそば近くよつて來て握手すべくさしのべたその手は、私の手の位置を通りぬけてX形に交錯してしまつた程だ。「まづ私の室から」といふので、最初に彼女の教室に行く。尋常四年位の子供たちが一齊に拍手して迎へる。そして代る代る立つて自分たちのやつてゐる仕事について説明を試みる。説明の材料は壁間にべたべたと貼りまはされたダイヤグラムの類だ。一體

ロシアの學校――といふよりも寧ろロシア一般にさうであるがダイヤグラムの流行は實に驚くべきものだ。凡そ研究調査と云つたらダイヤグラムを作ることだ。尋常一年の小さい子供から、ともかくも圖表を拵へることに教育されてゐる。恐らく蠅の活動すらもダイヤグラムで表はさうと努力してゐるだらう。だから麥の收穫などに就いても詳細を極めたものだ。例へば一段歩についてアメリカではいくら、獨逸ではいくら、ロシアではいくら。といふやうな事から、同じロシアでもウクライナではいく、、シベリアではいくら、我が村ではいくらと云ふ風に調べ上げられ、それが又年々歳々の統計を示し、何年後にはいくらいくらにしなければならぬといつたやうな具合に出來てゐる。その說明が頗る巧妙なのだ。それらの表圖は一寸位の金釘を以つて板壁に叩きつけてある。日本のやうな氣の利いた鋲がないのであらう。田舍を旅してみると恁うした工業製産品の欠乏は著しく目につく。次々に一通り各教室を見せて貰つた後で、この學校の主任の室に行く。さつきの斷髮女敎師は主任の夫人で、二人は共稼、そしてこの學校に寢泊りしてゐるのである。紅茶をすゝり乍ら主任の說明をきいたり、學校の研究物や、子供の作品を見たりする。流石に模範學校だけに、參觀者にみせるものゝ用意は相當に出來てゐる。子供の調査したものゝ中に

次のやうな統計がある。

私どもの村（戸數百六戸、人口六百二十二人）

一、家族の數

十三人あるもの　一戸　　七人あるもの　十八戸
十二人あるもの　一戸　　六人あるもの　十六戸
十一人あるもの　二戸　　五人あるもの　二十戸
十人あるもの　二戸　　四人あるもの　十四戸
九人あるもの　五戸　　三人あるもの　十二戸
八人あるもの　十一戸　　二人あるもの　四戸

（一戸平均五・八人强）

二、各家の部屋の數（いかに貧しきかをみよ。）

一室の家　八四戸、二室の家二十一戸、
三室の家　一戸、

三、清潔不潔（衞生敎育には非常に力を用ゐてゐる。）

清潔の家五十六戸、普通三十四戸、不潔の家二十四戸、

四、食事は上の部四十三戸、中二十三戸、下四十戸で、生水飲む家七十六戸、煮沸水をのむものが三十戸。

この二つの表について、私は樣々な事を語ることが出來るが、是非語りたい事は勞農ロシアの新敎育がいかに行はれつゝ

あるかと云ふことだ。即ち其の著しい特色の一つは、飽までも敎育を實際的ならしめ、實社會の生きた研究と云ふことに多くの努力を試みてゐると云ふことである。學校に於ける敎科の內容は個人、社會、勞働の三分野に分れ、ある題目について常にこの三分野から研究を進めると云ふやり口である。多くの文明國のやうに地理とか歷史とか算術讀方など云ふ各敎科分立の敎育をせず、社會は生ける一つの有機體であるから、この有機體を綜合的に活けるものとして研究しなければならぬ。部分の詮索よりも全體の機構をつかむことが大切であると云ふのである。この敎育のシステムを彼等はコムプレッキス、システムと稱してゐる。「わが村」は一つのコムプレッキスである。村を調べる事によつて子供たちは算術をやり讀方をやり、綴方を綴り、圖畫をかき、歷史——社會發達史を學び、地理——產業地理を研究することが出來ると云ふのである。故に一つのコムプレッキスには必ず勞働が伴ふ。一つの題目を完成する爲には多くの實地踏査を要する。そしてその結果がダイヤグラムとなつて表はされるのである。恁うした研究方法は日本の初等敎育界にもぽつぽつ行はれてゐるが、未だこれほど具案的系統的なものではない。

中食時に子供たちの食事の狀況をみる。中食は全部學校で供給する。その爲に學校には大きな炊事場があり、兒童の中から炊事委員が出來てゐる。獻立はいつも大同小異、ロシア人になくてはならぬスープと黑パンだ。炊事場から各敎員室へスープが配られる。子供たちは思ひ思ひの皿や茶碗、大小まちまちの器に、自分勝手に適量をすくつて座席につく。炊事の當番はスープの中からすくい上げた肉塊を一片づつ、一人一人のよごれた机の上に放り投げて行く。一片の分量凡そ十五匁。子供はそれをさもうまさうにかぢるのである。穢れた手、不潔な机上、衞生敎育の前途は尙遼遠である。これをモスクワの學校に比ぶると流石に都會と田舍の差はある。御馳走の質も量もモスクワの方はずつとよい。

學校給食は實驗學校に於ては總て行はれてゐるが、一般の學校ではまだなかなかである。この費用はその大半は國庫より出るが、約半分は父兄の負擔である。父兄はその富と階級によつて差等をつけて支出する。モスクワに於ては多きものは月十留、少きものは十五哥、全然負擔しないものも亦少くないと云ふ事であつた。こゝの狀況についてはきゝ洩した。尙中食の外におやつに牛乳を給する事になつてゐる。

別棟に學校工場がある。木工場二室、金工場一室だ。五六人

の學童が工作中である。彼等は自分たちの用ふる机や腰かけを作つてゐる。金工場はやゝ荒廢してみえた、が教師の説明するところによると、村人はこれまで器物の修繕の爲に一キッウラの町へ出かけて行つたのであるが、今日では皆こゝへもつて來る。大變便利になつたと云ふのである。この工場勞働を學校教育の中にとり入れた事も亦勞農ロシア新教育の一大特色である。既に周知の事であるが、ロシアの小學校は之を統一勞働學校と呼ばれる。勞働教育即ち普通教育なのである。勞働は國民道德なのである。普通教育即ち勞働教育の要旨は、完全なる勞働者を養成し以て階級戰の勇士たらしむるにある。然し乍ら統一勞働學校に於ける勞働教育は決して職業教育ではない。徒弟教育ではない。道德として勞働を學ぶのであつて、彼等によれば勞働人こそ立派なる人間なのである。だから勞働學校を卒業するまで學童は職業を決定することは許されないのである。この點わが國の小學校に於ける實業科の主旨とは聊か面目を異にする。

午後先刻の無性鬚の先生の唱歌教授をみた。十人ばかりの子供、しかも年齢のまちまちな子供たちが、机の上に腰打ちかけ、辻音樂師よろしくの體で奏づる無性鬚の先生のバイオリンに合せて、いかに巧みに歌ふことよ。その又バイオリンの巧みさよ。流石に音樂國たるを思はしめたのであるが、更に驚いた事には、この級の子供たちの身の上である。私はさきにツウラ驛の光景を叙するに際して放浪兒の事をのべたのであるが、今とこに收容されてゐる十人許りの子供たちは皆此の如き放浪兒であつたと云ふのである。あちこちより流れ來つたものをこゝに拾ひあつめて一つの級を作り、恁うして養育してゐるのである。故に年齢はまちまちであるし、教育もしにくいと云ふ事であつた。然し教師の云ふところによると、成績は中々よろしく、むしろ一般のものに勝つてゐると。

「逃げる子はゐませんか。」

私の質問に對して教師は答へた。

「逃げますね。ですが今こゝにゐるのは餘程小さい時に收容したものです。もう大丈夫です。落ちついてゐます。それに成績もいゝんですから。」

おゝ、孤兒の上に幸あれ!

杜翁百年祭の事業

その夜私たちはトルストイ家の食堂で、サモワルを圍み乍らおそくまで語り明した。座には今朝私たちを迎へてくれた人々

の外に、村の學校教師たちがあつた。話が杜翁の追憶から村の將來に及んだ時、上級勞働學校の敎頭は云つた。――上級勞働學校と云ふのは恰も中學に相當する。この村にはその上級勞働もあるのであり、校長はやはりアレキサンドラ孃である――。

「吾々はこの一年に於て隨分いろいろな事をやつた。國民の家＝クラブのやうなもの＝を作り、文庫を設け、消費組合、牛孔組合、蜜蜂組合を組織し、有志消防隊を編成し、更に育兒院と農村協同團體との創立をみるに及んだ。勿論成果を收むるのはこれからであるが、來年は杜翁の生誕一百年に相當するので紀念事業として次の事をやらうと計畫してゐる。

一、トルストイ博物館の建物の修繕及擴張、

二、勞働學校を石造に改築すること、

三、公園及池を昔のまゝに整理すること、

四、石造の病院をたてること。

この敎頭は嘗てシベリアで敎員をしてゐたと云ふ人で、モスクワの文科大學を卒へた人である。どうした緣故でこゝに來たのか、あなたもトルストイアンであるのかと云ふ無遠慮な私の質問に對して彼はトルストイアンではないが、翁の偉大な思想と人格とにひかれて來た。が自分は翁の宗敎に對する考へには贊成出來ないと云つてゐた。敎頭の說明の後でアレキサンドラ孃は云つた。

「モスクワでは父の全集の出版が計畫されてゐる。その事は政府でも承認してゐるが、何分にも百冊に近い大部のものでもあるし、果してうまく行くかどうかと案じてゐる。こちらの紀念事業の中でも既に一と二とは當局に於ても承認を與へてゐる事である。初め自分が恁うした社會事業へのりだして來た時、共産黨の人々は貴族の名殘に何が出來やうかと云つた氣持ちを持てゐたが、仕事は着々すゝんで來た。上級勞働學校設立についてはアメリカの特殊者から一萬弗送つて來た。自分はどんな事しても當初の計畫は完遂する。村人も自分に對して大に協力してくれる。現に上級勞働學校の如きも村人の勞力によつて出來たものである。明日案内するからよく分るが、あの學校を煉瓦作りにする爲に、今材料を集めてゐる。材料と云ふのは薪と土とである。この村では煉瓦がやけるので、農民たちがあそこで手づから煉瓦をやき、それで學校を改築して行く事になつてゐる云々と」。

讀者には聊か氣の毒であるが、私はこゝで今少しく學校の事を語らなければならぬ。敎頭の話でも分るやうに、ロシアでも日本と同樣小學校の先生がその地方敎化の中心となつてゐる。從つて隨分とその仕事は多い。それでゐて何處も同じ秋の夕

麻、彼等の俸給は極めて低く、下級勞働者にも及ばない。アレキサンドラ孃は全ロシア中で最高の俸給をとつてゐるのであるが、然も月給八十留にすぎない。その他に至つては知るべきのみ。モスクバで第一流の勞働學校（初級上級を併合せる。）の校長でも最高七十五留である。低い方は三十留にも充たぬ。とても食つていけませんとは折々私がきいた事である。それでゐて彼等は隨分働かねばならぬし、且つ又自分の勉强もしなければならぬ。彼等のかたるところによると、新學校のやり方、新しいプログラムの研究及、ソベットの政治組織等について是非とも一通りの了解をもたねばならんので、それらの著書を讀むのがせい一杯で外の本なんか殆んど讀む隙はないと云ふ事である。然し乍ら忠實にして順良なるわが教育者は、政府が教育を尊重し、教師を優遇せんとの意志あり、現に年々優遇して行きつゝあるの事實に徵してその分に安じてゐると云ふ事であつた。弱きものは必ずしも日本の教育家のみではない。

諸君は日本を知れりや

次の日、私たちはトルストイ家に程近い丘の上に上級勞働學校を訪ねた。こゝでは吾等は通り一片の學校參觀者としてゞなく、全く親戚のおぢさんとして迎へられた。教師も生徒も共に授業をよして了つて、吾等の周圍を去らない。あるものは日本文字を教へてくれと云ふし、あるものは唱歌を歌つてきかせるし、又あるものはダンスをやつてみせる。みんなのものが期せずして一つの室に集り、期せずして歡迎會が催されたのである。會がすんでも、生徒たちは私たちの周圍を去らない。

「日本にも子供がゐるの？」

「日本の學校ではどんな事をやるの。」

「日本の文字はむつかしいんですか。」

「日本にもピオネルがあるですか。」

「日本のボーイスカウトはファシストでせう。」

「日本にもコンミニストがゐますか。」

「日本の結婚式はどんな風にして行はれますか。」

これらの質問は今も尙鮮かに私の記憶に殘るところのものである。「日本のボーイスカウトはファシストではないか」と云ふ質問などはたしかに急所をついたものだ。「然らばロシアのピオネルは何であるか？」私はさう反問したいのであつたが相手は年少少年である。

ピオネルと云ふのは少年共產黨の事である。赤色ボーイスカウトの事である。赤木綿のネクタイを首にたれた少年、それはいたるところの學校でいく人か見られる。その少年少女は多く

の場合級の誇であり、學校の中堅であるとされる。學校の訓練はこのピオネルを中心にして行はれんとしてゐる。團體的協同、自治的活動それが訓練上の重大なる德目である。今やピオネルに參加せる兒童一百四十萬人を越え、日曜祭日等には太鼓をたたき、國旗を押したてゝ隊伍堂々、街頭を練り歩いてゐるのであるが、一見以てファシストのボーイスカウトと何の選ぶところもない。

私はピオネルについて一つの事を思ひ出す。それはある學校を訪問した折の事、その學校のピオネルが歡迎會をすると云ふので列席すると、私を前にして指導者たちは頻りに學童へ宣傳を初め、ある一人の如きは、

「こゝに日本の教育家がゐる。君等は日本と云ふ國を知れるか。それは資本主義の國である。然し乍らそこにも多くのプロレタリアが住つてゐる。彼等は君たちの來り援くるのを待つてゐるのだ。」

と眼光堂を壓するの慨を以て叫んだ。

「用意はよいか。」

突然さうした叫が洩れると、彼等の一團は鋭く「何時でも」と絶叫しつゝ、右手をあげ、右足を以て床板の上をトントンとふみならすのであつた。

だが然しピオネル運動は依然として學校教師にとつては厄介なものである。既に述べたやうに學校の仕事は實に多く、教師は奔命に疲れてゐる。尙その上の活動は決して彼等の堪ふる處ではない。私はモスクバに於てピオネル指導者と教師との協議會を傍聽した事があつたのであるが、指導者側の人々は多くは教師側がピオネルの爲に不熱心であるとをかたつてゐた。

さうした意味からであるかどうかは知らぬがヤスナヤ・ポリヤナの學校に於てもこの運動は餘り盛ではないと云ふ事であつた。然し乍ら何と云つても共產黨の天下である。大びらに之に逆ひうるものは、今の場合恐らく絶無であらう。

ヤスナヤ・ポリヤナの學校に於て最も私の嬉しく感じた事は、そこの教育があくまでもその土地を中心とし、物質的には農村經濟と云ふ事を研究の主眼とし、精神的にはトルストイの精神をくむと云ふ事になつてゐた一事である。學校の名も正しくは、トルストイの名による實驗學校と云ふのであつて、ロシアのあらゆる學校に於てみるやうな「レーニンの一隅」と云ふものもなく、その代りには杜翁の像や寫眞が飾られてゐるのである。

「今頃トルストイでもない」、と人は云ふが、人道主義のトルストイは教師としても、社會教化者としても尙立派にこの村によ

みがへつてゐるのであつた。

百姓の生活

私たちはそれから學童の一人に案内されて農家の實狀をみに行つた。丘陵と林との間に挾つた一部落、多くは木造の家屋で、二十年前德富氏が訪れた折には七十戸であつたと云ふが、今は既に百戸に越えてゐる。これは異常な現象であらう。日本の農村は二十年一日の如く殆んど戸數はふへないではないか。嘗てトルストイ家の農奴であつたと云ふ人々も、今では國の支配者である。「俺たちの天下」なのであるが、實は百姓は工業勞働者の道伴れにすぎず、依然として文盲無學、何人が天下をとらうと吾不關焉たる人々だ。その生活に如何なる光榮があらうか。

少年は私たちを上・中・下・最下の四つにわけて其の代表的な家を案内した。何れも豫めその旨通じてあつたとみえて、奇麗に掃き淸められ、吾等の來るを今や遲しとまつてゐた樣子であつた。即ちある家では新しい麻の卓子かけを卓子の上に覆い、又ある家では衣物を改めなどしてゐた。其の最も富めりと云ふ家こそ學童の調査による唯一戸の三間ある中なのであるが、其の家には古風な糸くり車があり、やはりキリストの像が安置され、壁には赤軍になつてゐる家族の寫眞があり、又レーニンの肖像があると云ふ狀況であつた。家の構造は戸をはいると土間があり、土間を堺に右と左に部屋がある。富める家ではその何れもが居室になつてゐるが、然らざる處では何れか一方は家畜若しくは穀倉、物置等に使用されてゐる。土間をつきぬけると裏口で、そこには家畜が飼はれてゐる。家畜の數を以て直ちに富の程度をトする事が出來る。一等貧しい家をみた時、私は眼の裏が熱くなるのをおぼえた。勿論その家は一間ぎりしかなく、その一間も中央から二分して、入口の方半分には二頭の羊が、じめじめと糞尿の堆い藁くづの上に寝ころんでゐた。居室と云つても床もなければ寝臺もない。寝臺どころではない、室の中には殆んど何一つない。衣類器物食器の類たゞ一つも見當らず、一隅に黑パンの一塊が新聞紙の上にころがつてゐるだけ、ペチカ（ロシア式の暖爐で一寸朝鮮の温突に似てゐる。農家では大きなペチカを拵へその上にねる。）の上にはぼろ屑をかぶつて赤坊と四つ位の子供がねてゐる。母親らしい女と姉娘らしい少女とは、黑パンの前に立ち防がつて、じつと私共を眺め、案内の少年がその理由を話し、私たちが「今日は！」と挨拶をしても啞のやうに默りこくつてゐる。勿論私にははつきりと彼たちの氣もちが讀め、とても永くゐるに堪へなかつたので

ある。一本の鎌さへなく、一個の茶椀さへもたぬ彼等の生活は、モスクワの街に道行く人の喜捨を乞ひつゝ、常に暖い肉パンに舌鼓を打つてゐる乞食群に劣ること幾千！長い雪の日が續けば續くだけ彼等は、その命の親たる二頭の羊へ與ふる一握の秣さへないではないか。

春よ！早くめぐれ！

私のセンチメンタルは、この薄幸の農民へ、せめてその少女の爲に一袋の菓子なりと與へよと命じたのであるが、彼等は私のこの感情を、そんな温情など入らないとこつぴどく斥けはしないだらうかと云ふ心配が伴つて來た。でも私は何とかしなければすまぬ氣がして、斷然少年に店のありかをきいた。然るに底事ぞ。新しい村には購買組合の外に店と云ふものはなく、然もその組合は「本日休業」で何にも買へないと云ふ事であつた。

一時土地の私有に就てはやかましい制限があり、人々は皆きまつただけの土地しかもてなかつた。しかし今では形式的な制限はあるがとにかく多くを耕すことも出來る。働けぬ人の土地をかりて一人で二人分耕すことも出來る。やはり日傭人夫もつかへばつかへる事になつてゐる。貧しきものは依然として貧しく富めるものは益々富みうる。商業にしろ既に個人資本の店が續々と出來た。國營商店の番頭が役人顔してゐる間に前垂掛の商人はどんどん顧客をふやして行く。工場も個人の經營が許される。職工二十五人までと云つたやうな制限はあるやうであるが、とにかく資本主義は肯定されてゐる。個人の貸家も許された。すべては國家産業の恢復へである。物資缺乏を救ふ道は資本主義を許容するより外に今の場合ありえない。共産主義有終の美をなす爲の名譽の退却である。

「どうです、コンミニユズムの天下になつてから餘程樂になつたでせう。」

愚かな質問とは知り乍ら、誰しもさうきゝたいのである。然し今のロシアの人々にはそれに對する忌憚ない答をするの自由がない。問はれた人がコンミニストであれば答は明瞭であるがさうでない場合はさう簡單には行かぬ。私は二三の人々に對して感想を叩いたのであるが、「云ひたい事は澤山あるが云へない」と云つて何事もよく語らなかつた。それを語らしめようと云ふのは無理である。然し乍ら一般の農民は日本の地方農民よりも更に更に智識も低く、殆んど文盲であり、加ふるに天性ののんきやである。諄朴そのものである。彼等にとつて土地の開放は

嬉しい事であつたかも知れないが、ザアの政治にしろ、レーニンの政治にせろ、それは誰であらうと一向差支はない。日本の百姓が政治に無趣味である以上、彼等は政治に無關心である。だからソベツト政府はこの農民たちにどうかして自分たちの政治を謳歌せしめようと骨折つてゐる。その爲の教育、その爲の宣傳は隨分と多い。文盲征伐と云ふことがその第一である。文字なき人々に文字を與ふるは誠に結構であるが、文盲教育の要旨には「ソベツト政府への能動的參加と階級的自覺の興味喚起」と云ふ個條が揭げられてゐる。その教育は完全に宣傳なのである。農民新聞がそれである。私の滯露中農民新聞は百萬に達したと云つてその祝賀會をやつたのであるが、それは殆んど農民へ義務講讀をさせてゐる。教育のためである。然して又宣傳である。キネマにパンフレツトに、ポスターに、講演に、學校に、劇に、あらゆる機會を利用して以て農民の自覺を促し、ソベツト政治の有難さを鼓吹してゐる。例へば私のやうな名もない一介の小學教師が訪れて行つたのにも拘らず、モスクワの國立活動寫眞館は私の動靜をフヰルムにとつて之を普く市民に公開し、次々に地方へ廻すと云ふ事をする。「日本の教育者來る。」と云ふタイトルは卒直に考へれば、たゞ時事報導の深切にすぎないが、以てソベツトの教育がいかに立派であるかを國民に告げようとする間接射撃であることも亦否まれない。

ロシアの農民は誠に諄朴であるが、所謂文明の程度は極めて低い。學校は文化の中心として農村開發の先驅をなしてゐる。こゝの學校でも單に生徒に敎へるのみではない。村人は誰でも學校へ種子ものを持つて行き、鹽水選をやつて貰ふことが出來る。「分らぬ事は何でも學校へきけ」と云はれてゐる。學童は自分の研究題目を村の生活に求め、研究と實用とを同時に充たして行く。政爭のはげしい日本などでは思ひもよらぬ事であらうが、ロシアの學童たちは大に選擧運動に參加する。選擧が迫ると彼たちはポスターを描いて方々へ貼る。印刷びらを拵へて戶每に配る。當日は又投票を誘ひに行く。かくて政治に冷淡な農民を導き、棄權者をなくしようと云ふのである。しかし農民は投票の文字さへかけないのである。

かくてソベツトの村は甦るであらうか？これは文明の前途に投げられた一つの大きな謎である。單にロシアのみのことではない。文字がよめるやうになり、知識の程度が高くなるにつれて若者は都會に走る。たとへ地租は免ぜられ、農民は保護せられても、商工プロレタリア本位の社會下に於て、農民に何の前途があらう。これは都會と農村との爭ひである。ソベツトの政

治家はこの問題に十分着目はしてゐる。學校の新しいプログラムはこの二つの關係について研究し改善して行く事に最も多くの力をつくすやうになつてゐる。農村と都會との相互依存、これが彼等の標語ではあるが、然し科學に憧れ、工業に焦り、文明を追つかけてゐる彼の現狀は所詮都會本位である。機械本位である。町は村を支配せねばやまぬ。これは世界共通の問題ではあるまいか。

私はソベット政府がいかに農村の爲につくしつゝあるかの一例として「農民の家」について語らう。「農民の家」と云ふのは農民の爲に設けられた倶樂部であり、合宿所であり、研究所である。各地方の都會を初めとしてモスクワにも設けられてゐるが、行く行くはそれを郡村の小都會にも設置したいと云ふ抱負である。モスクワの農民の家は、モスクワを訪ふ外國の視察者がいの一番に案内さるゝ所だけに、まづ模範的なものとみてよからう。二階建の立派な建物で、階下は食堂、事務室等にあてられ、階上には約二百名を收容しうる寢室、五百名を集めうる講堂、圖書室、娛樂室、農民博物館、その他いくつかの小室がある。地方の農民はこゝで一泊十五錢を以て泊る事が出來、定食も僅に一食廿五錢でたべさして貰へる。然もその食事は決して粗末なものではなく、普通一圓位の御馳走に相當し、夜具はシベリア鐵道の一等寢台車に使つてゐるものより却ていゝ。講堂では毎晩活動寫眞をみせ、時々農民劇を催し、又毎月所定のプログラムに依つて講話がある。これらの催しは勿論娛樂と修養とをかねた內容を有するものであるが、例の宣傳味たつぷりのものであることは云ふまでもない。圖書室には何も農業に關する書籍雜誌の類は悉く之れを網羅し、娛樂室には將棋や蓄音機や、ピアノなどが備付けてあつた。

尙圖書室の一隅に法律相談所があり、辯護士が毎日つめてゐて、無料で相談に應じてゐる。（係の云ふところによると最も多い問題は結婚に關する事で、次は土地の事件であるさうだ。）最近六ケ月間に於て一萬四千の質問に接し、毎日七十五人乃至百人の宿泊人があり、團體參觀者の數一日二百人に及ぶと云ふことであつた。私の行つた日にも田舍の人々が幾つれかぞろぞろとみ廻つてゐた。

農民の歡迎會

その日私たちは夕方の汽車でツウラへ行き、一泊しようと云ふ豫定であつたが、學校での歡迎がまだしたらなかつたと見え、教師を中心に學童たちは協議を重ねてゐたのであるが、とうとう「今夜歡迎會をやるからも一晩泊つて行つてほしい。」と

申し出て來た。アレキサンドラ嬢も亦、「農民踊りや、結婚式の歌なんどやつて見せるから、是非に」と云つて引きとめるので、夜の十時の汽車まで延す事にした。それまでにも一度杜翁の墓に參り、博物館を見せて貰ひ、嘗て翁がやつてゐたと云ふ小學校の跡などをみた。その校舍と云ふのは、今のトルストイ博物館と相まつてトルストイ家の廣壯なる建物の兩翼をなしてゐたもので、今はたゞその兩翼だけ殘り、中央部の本館は翁が壯年の折、かるたにまけて賣り拂つて了つたと云ふ事であつた。私はその學校であつたと云ふ、今は他人の住宅になつてゐる家のまはりをそゞろ歩き乍ら、五十年前の自由教育を追想せずには居れなかつた。

歡迎會は程近い「國民の家」で催された。こゝはかねては村のクラブにもなり、圖書室にもなつてゐる家で、大して廣い家ではないが、建物は丈夫に出來てゐる。トルストイの崇拜者某氏が住つてゐたと云ふ家である。私たちが行つた折、既に二百ばかりの村人が集つてゐたのであるが、引續いて續々とやつて來て、文字通り滿堂立錐の地もないやうになつた。劈頭は開會の挨拶をすると共に、その日が丁度巴里コンミユンの記念日だと云ふので、其の祝辭をのべた。それから學童たちが幾人か巴里コンミユンの事に關して語り、又自分たちの覺悟について論じ、あるものは詩を詠じたりした。その後で愈々餘興に移つた。五十に近いおばあさんが陽氣な顏して飛び出して來ては頻りに歌つてゐたが、とうとう指をパチパチならせ乍ら踊りだした。村の若い衆が大きな手風琴を汗だくだくになつて奏でて之に和した。若者たちは代る代る出て來て踊つた。あるものは長靴をはいてその踵で板張の上を調子よく叩き乍らはねまはつた。勞働學校の生徒も幾組か舞つてくれた。その中では昨日みた特殊學級の兒童即ち放浪兒上りの子が最も巧みであつた。彼等はウクライナの農民踊りと云ふのを頻りに踊つてみせた。私はその面白さにつり込まれて、自らも手をうごかし足拍子をとつてゐた。がふと氣がついてあたりをみ廻した。幸に誰も注意してゐなかつたのでほつとした。これは必ずしも自分のはしたない擧動をはぢたが故ではない。自分に踊りを要求されんことを恐れたが爲である。

私は、先頃日本に來てゐたロシアの文士ピリニヤークが日本に旅立つのを送る爲の會に招かれた事があり、その折の二次會にある畫家の家に行き、ルナチヤルスキイ夫人や、大劇場の女優で國民俳優の資格あるゲルチエル等と共に大に一夕の歡をつくしたのであつたが、その折頻りに「日本の客よ、踊れ。み國

ぶりでもいゝから踊れ—」と要求され、實はダンスのダも出來ぬ爲ほとほと閉口した事があつたので、今夜も亦その夜の二の舞をやるのではないかと內心大に恐れを抱いた譯であつたが幸にしてその事なくすんだので助かつたわけである。

トルストイ家に歸つて別れのお茶を喫する。アレキサンドラ孃は私のノートに次のやうにかいてくれた。

日本の教育界を代表する人たちが、はるばると吾等のところに來られ、私の父に興味をもたれ、父の作品を愛讀してゐられると云ふ事をきいて、私は強く感動してゐます。若しもあなた方が、父の晩年に編纂した文集クルノチエヘニア——賢明なる人々の思想、人生の道——を日本語に譯しになれば、あなた方は父が愛し學んでゐた處の東洋の叡智をごらんになるであらう。

アレキサンドラ・トルスターヤ

千九百二十五年三月十七日　ヤスナヤ・ポリヤナにて

荷物をさげて外に出ようとしてゐると、そこにゐた一人の女醫が藏原君を捕えて何か小聲で話してゐる。後できいた處によると彼女は革命に際して夫を亡ひ、一人の息子を失つたさうである。その息子は恐らく東洋に逃れてゐるだらうと思ふが、お互にどこにどうしてゐるか知らせ逢ふすべもない。どうかあなたがお國へ歸られたら、自分がこゝにゐるといふ事を何等かの方法を以て發表して、自分の子に通ずるやうにして下さい」と哀願したと云ふのであつた。

私たちが橇にのりこんでゐると、二人の學童があたふたとかけつけて來た。彼等は日本の小學兒童へと云つて一通の手紙を認めて來たのである。

さゞめき呼ぶ人々の聲を殘して、橇はほの白い雪の光を追ふて走る。くれ早きロシアの夜は、九時といふにもう眞夜中の思ひがする。今宵はツウラの町へ泊らう。

朝鮮そゞろあるき

笹川臨風

一　慶州

内地よりも日の長い夏の七ツ下りに、慶州をドライブしてゐると、一寸奈良の西の京あたりを逍遙つてゐるやうな氣分になる。唐招提寺や藥師寺や、法華寺、秋篠寺などは、いづれも木造の古びた寂びた建築であるが、此では石の塔や、石の天文臺や、石の氷室などが殘つてゐる。石の多い、木の少い朝鮮は、昔から石造建築であつた。そこに西の京と慶州とに著しいけぢめがあるが、皇龍寺の址やら、四天王寺の礎石やらを見ると、元興寺や大安寺やの址を弔ふやうな感じがする。新羅朝は盛んに寺刹を建てたものだ。芬皇寺の九層塔は今に其三重を殘してゐるし、皇福寺には三重の石塔が殘つてゐる。望德寺、黄龍寺、林泉寺、三郎寺、興輪寺、永敬寺、哀公寺、昌林寺、天官寺、栢栗寺、堀佛寺を始め、慶州を繞りて、今日猶殘礎遺墟を存するものが非常に數多くある。奈良を繞りて寺刹が林立してゐたと同じやうに、新羅朝は佛教中心の文化を作つてゐたのである。又詩人が十二帝陵と歌つた如く、奈良の附近には歴代の御陵墓其數は少くないが、慶州もまた到る處に歴朝の墳墓が累累としてゐる。規模はさして廣大でもないが、いづれも其初に於ては石人石獸を列べたのであらう。其代表としては、外東面掛陵里にある掛陵を擧ぐべきである。此では封墳の基石に十二神將を刻んだのが順序よく列べてあり、前方の左右には二對の石獅、一對の文武石人と、一對の石華表とが、儼然として立つてゐる。金庾信の墓も亦之と似たり寄つたりである。更に武烈王の陵になると、巨碑が聳えてゐたのである。今では碑身はないが、龜趺と螭首とだけが存在して、龜趺の礎石は廣さ八尺四寸で長さ十一尺あり、螭首は廣さ四尺八寸、高さ三尺六寸あるので、此碑の巨大なることが想像される。東京雜記にある梅溪曹の詩に「斷碣荒草に臥し、昂然龜首を見る」「摩挲碑文を讀む、缺落實に究め難し」とあるから、其頃には碑は倒れて存在

してゐたものと見える。武烈王陵と向き合つたところにある、神武王の功臣金陽の墓と傳へられてゐる墓前にも龜趺が夏華の茂きが中に横はつてゐる。して見ると、陵墓の前に其偉績功德を叙べた碑石の存在したものも少からずあつたらう。

青嵐が吹く中に、こんもりと一叢茂き森がある。槻の木や槐の樹やら、いづれも幹の蟠屈した、枝のうねりくねつた、葉の繁つたのが、欝然として林をなしてゐる。地域も狹くはない。國號の起つた傳說の鷄林はこゝである。鷄林のことは、東國通鑑脫解王九年の條に見えてゐるが、此森、其初は始林と呼んだのである。新羅王は或夜此のあたりで鷄の頻りに鳴くのを聞いて、不思議に思ひ、翌朝大輔の職にある瓠公を遣はして、之を見せしめると、梢に金色の小箱が懸つて、白色の鷄が其下に啼いてゐる。取下して開けて見ると、中に一人の男の子が目をぱちくりさせてゐた。容貌は如何にも氣高くして美しい。王はいたく喜んで、天から授かつた子であるとて、之を養つて閼智と呼び、金色の小箱から出たからとて金氏を稱せさせた。此子から七世、味鄒の時に立つて十三世の新羅王となつた、と云ふことであるが、或は案外脫解王が味な狂言をしたのかも知れぬなどと臆測するのは、後世のさかしらごとで、其所生を神秘にする一つの傳說に外ならない。

金氏は箱から飛出したが、新羅王の始祖朴赫居世は卵の中から生れてゐる。金氏の時は鷄が啼いたが、朴氏の折には馬が跪いて嘶いたとある。今も其卵があつたと云ふ、林間の古井戸が殘つて、之を蘿井と呼んでゐる。桃の中から桃太郎は生れ、飴の中から金太さんは飛んで出たが卵生の子供は珍しい。卵の大さ瓠の如く、辰韓の人は瓠を稱して朴と云ふ、故に朴を以て姓となすとのことである。高句麗の始祖朱蒙も卵生で、いづれも所生神秘說から胚胎した卵生傳說である。此卵や箱から生れた子供の子孫は朴氏昔氏金氏を合せて、千年に近いほど永く國を保つてゐたのである。

我國と新羅との交涉は夙くから開けてゐた。新羅の始祖朴赫居世の三年五月、倭國と好みを結び聘を交へたと、三國史記にある。神武紀元に換算して見ると、我が崇神天皇時代のことである。然し大和にある中央政府との交涉ではなくして、九州の土豪との交通であらう。「船出せし博多はいづこ、對馬には知らぬ新羅の山も見えけり」とは云ふもの丶、壹岐對馬は韓半島への飛石で、九州と新羅とは一帆相通ずるのであるから彼我の交通が早くから開けてゐたのは、當然過ぎるほど當然である。朴赫居世の大輔職であつた瓠公も邦人であつたと云はれてゐるが、いづれ九州邊の冒險兒であつたらう。

新羅の哀史を語る鮑石亭の遺址があるのは、征人をして轉た低回去る能はさらしむるものである。其形、鮑貝の如く、石渠がうねり〳〵と續いてゐる。溪流を此に受けて、曲水に擬したものと見える。規模は小いが、王の遊園地であつたのである。

高麗史を案づるに、第五十五代景哀王の時、後百濟の甄萱は近品城を燒き、新羅の高鬱府を襲ひ、郊畿に逼り、都城府に入つた。此時偶々景哀王は妃嬪宗戚等を引率して鮑石亭に出遊し、置酒娛樂してゐたが、人馬の音間近く聞えて、賊聲は山河を震はせたので、すはこそ敵兵到りたれと、周章ふためいて、夫人とともに城南の離宮へと逃げ匿れる。從臣伶官女は盡く敵の手中に陥ちる。勝に乘じた敵兵は到る處を剽掠し王を索め出して逼つて軍中に自盡せしめ、王妃を辱め、將士をして嬪妾を亂さしめ、王の弟孝廉宰臣英景等を虜にし、盡く子女、百工兵仗珍寶を取つて歸つた。滅亡史にはつきものの悲劇は此に演ぜられたのであつた。然し因果の小車は廻り〳〵て、久しからぬうちに、甄萱は、其子の神劍に金山佛宇に幽閉せられ、僅に子女嬖妾とともに高麗に奔り、神劍は高麗王に誅せられ、甄萱は憂懣、疽を發して黃山の佛舍に歿し、後百濟は亡んだ。後百濟滅亡の前年（我が醍醐天皇の延長五年）、新羅最後の王敬順王金傅は高麗に降り、國除かれて慶州となり、半島統一の大夢は一朝にして覺めたのである。

蚊川の北岸に半月の狀をなして、蜒蜿彎曲する小高い丘を月城と稱して、近く南山と相對峙して要害をなしてゐる。もとは瓠公の居城であつたのを脫王が詭計を以て讓受けて此を居城としたのださうだ。して見ると瓠公も付ては龍蟠虎踞してゐたので、後には脫解王の勢力に敵し兼ねて歸順したのかも知れぬ。月城の北にあるのが臨海殿で、殿は雁鴨池に臨んでゐる。漫々たる池水は渚に漣を寄せて、蘆葦の生ひ茂るところに半島が突出して得も云はれぬ風情をしてゐる。荒れ果ててはゐるものゝ、鋤かれて田ともならず、壞されて畑ともならず、今日迄林泉の俤を遺してゐるのはまことに珍なりと云はねばならぬ。文武王の朝とし云へば、我が齊明天皇の頃に當つてゐる。大化改新頃の林泉が甚しく其面目を改めずに現在するのは、朝鮮ならでは見られぬ奇蹟である。藤原時代に河原の左大臣が千賀の鹽釜を寫した林泉があつたことや、宮中の林泉の存在したことは物の本にも見えるが、龍頭鷁首の船を泛べたよすがもない。足利初世の林泉で多少其規模を小にしても殘存してゐるのが、我邦では最も古い林泉である。天龍寺、西芳寺の庭がそれである。然るに天智天皇御即位前の林泉が今以つて存在すると云ふのは、林泉史上に於ける一異例を開いてゐるもの

で、慶州の遺蹟が割合によく保存されてゐるのを證據立てゐる。井戸の中から天を覗くやうな瞻星臺や、横穴のやうな石氷庫や、慈母の諫に感憤し、乘馬を斬つて情人との愛を割いたと云ふ傳說のある天官寺址や、功臣碩學を祀つた西岳書院や、遺蹟は到る處に多い。時はもう七時を過ぎたが、朝鮮の日はまだ中中に暮れさうにもない。

今日は慶州の市日である。鹽漬の魚や金物や靴や、シャツ股引や紙や帽子やが雜然として路傍の左右に並んでゐて、其間を白衣の男女が往來してゐる。好文字を聯に書いた酒肆には烏帽長脊の客が漫然として座つてゐる。一通り遺蹟を巡覽したので、慶州の停車場へと戻つた。

釜山から大動脈である幹線を岐れて、大邱で輕便鐵道に乘ると、之は又如何にも小さい。其上動搖が激しくつて、やゝもすれば坐したまゝ倒れさうになる。それが慶州まで四時間もかゝるのであるから、うんざりする。隣宗隣車の客は皆白衣の人ばかりだ。田舍の小停車場につくと、どこでもいい年をした連中がたはいもなく汽車を眺めてゐる。如何にも天下は太平である。ところで慶州から佛國寺までは二哩場あるが、又此輕便に依らねばならぬ。時刻は八時となつたのに、靄然たる暮色は遠くより近くへ逼つて來た。汽車も來たので、案内された諸鹿さんや驛長に別れて汽車に乘る。今度は三等ばかりなので、白衣の連中と乘合になる。「あゝ佛國寺ホテルの女中が乘つてゐます」と、諸鹿さんが素早く暗い中の女を見て聲をかける。「お客様だから御案内するんだよ。」お陰で夜の佛國寺行きも、やゝ明るくなつた。

暗い佛國寺の停車場前からホテル行きの自動車に乘る。女中がゐるから萬事都合が善い。車は樹の間や畔道を走るやうだ。しばらく往くと、行く手にちら〳〵灯が見えて來た。ホテルから門前に迎ひに出てゐるのだ。ホテルの大廣間にぽつねんと獨りで陣取る。風呂場はばかに立派だ。珍らしいランプの下で夜食をしたゝめる。遲くまで支配人の杉山氏が話し込む。

翌る朝は空が紺碧に澄み渡つて、いはゆる日本晴である。ホテルのある處は高いので、眺望が遠くまできいて、晴々しい氣分になる。喜鵲がぎやつ〳〵と啼きながら、飛び交つてゐる。朝食の畢つた後石窟庵へと登る。

石窟庵へはホテルから二十餘町山を登つて行くのだ。溪流もなければ、深林もない。山の角を曲ると、海が見える。迎日灣であるさうな。あの先の方から神功皇后は御上陸なされたであらうなと、考へて見る。少しだら〳〵と下りて又少し登ると、行手に石窟庵、右に三重塔が見える。庵はもと石佛寺と

云ひ、新羅景德王の時に創建されたのだ。ちやうど我が天平時代に當つてゐる。周圍の石壁には觀音と羅漢菩薩とを浮彫にして、石窟の中央に丈六の釋迦牟尼の坐像が安置されてゐる。三十二相圓滿具足した立派な石佛で、窟中の彫刻とともにいづれも美しい手法から出來てゐる。

釋迦佛は東に向つて、端然として坐つておいでなされる。東は即ち日本で、日本調伏の爲めだと云ふ傳說もあるが事實は明かでない。新羅の文武王は遺言して、我死さば海中に其骸を投ぜよ、龍神となりて、日本兵の攻め寄せるを防がうと云つたと傳へられてゐる。尤も掛陵は文武王の陵だとの說がある。掛陵の名に就いては、「水中に葬り、柩を石上に掛く、因りて土を築いて陵となす、故に名づく」との傳へもあるから、或は文武王の陵かも知れぬ。如何に遺言なればとて、王の屍を海中に投ずることはあるまい。でも遺言を無視するわけにもゆかぬから、水中の石上に柩を安置し、其上に陵を築いたかとも思はれる。

石佛の東面と云ひ、文武王の遺言と云ひ、日本を恐れた傳說の多いのも決して無理ではない。任那の日本府、神功皇后の御征韓を初め、倭國との交涉は頻繁であつた。東國通鑑、三國史記に載する所は頗る詳密で、好太王碑にも、「倭人其國境に滿ちて城池を潰破し云々」との新羅王の泣言が見えてゐる。新羅は位置でも最も我が封境と近いのであるから、百濟高麗にもまして內屬したこともあるし、背叛の常ない爲に攻伐を受けたことも少くなかつた。百濟阿莘王の時には太子を質としたこと、新羅王實聖尼師今の時には奈勿王子を質としたことなど三國史記にも見えてゐる。

佛國寺はホテルの前面にあつて、新羅の法興王の創建だと云ふ。我が安閑天皇の頃である。其後、我が天平勝寶年間には彼國の景德王が修築したので、石造の多寶塔、同じく釋迦塔、左右に石階各二を有する石橋等が、ありし時代の壯觀を雄辯に物語つてゐる。然し石窟庵の石佛石塔と云ひ、佛國寺の奇構と云ひ、概ね新羅人の手にならずに、唐人の作る所であつた。唐より遙々と其情夫の工匠を慕つて來た女が佛寺に登るを許されないので、無影塔（釋迦塔）の池水に映つるを見て僅に自ら慰めたと云ふ影池の傳說のあるのでも、此等の匠人が多く唐人であつたことが分る。新羅の文化は畢竟するに唐代の文化を輸入したのみで、千年の久しい間を經ても、新羅化した文化は遂に起らなかつたやうだ。

ポプラの並木街道を慶州までドライブした揚句、郡守の朴さんと慶州から十八里の道程を三時間ばかりに突破して大邱へ着く。釜山で出迎つた東京大相撲の一行と又此で逢ふ。櫓太鼓も

音が嫋々と響いてゐる。

二　開城

汽車の窓から開城に近づくと、茸のやうな朝鮮家屋が一面に高きより低きを塡めてゐる。其間に瓦葺のが折々ある。ところどころに、西洋建築も見える。開城はもと松都と云つて高麗の故都である。新羅が奈良なら、此と平壌とは、さしづめ京都の役目をつとむべきである。然し無論似ても似つかぬ處がある。

此へ來ると、女の被衣を着たのが目につく。平壌へ行くと、白い角隠しをしてゐるが、咸興あたりでは折々色ものの切れを頭に被つてゐる。平壌が一番優美で、女が綺麗だ。流石に妓生の本場だけある。開城では昔の我が繪卷物が展開されるやうで、何となく懐かしい。

高麗史は其開國發祥に就いて斯う書いてゐる。高麗の太祖王建は松嶽郡の人で、唐の乾符四年正月、松嶽の南第に生れた。是時新羅の政は衰へ、群賊は競ひ起り、甄萱は叛いて南州に據りて、後百濟と稱し、弓裔は高勾麗の地に據り、鐵圓に都して、國を泰封と號した。太祖の父は裔に歸順したので、裔は之を金城太守とした。一日太祖の父は裔に說いて曰く、大王若し朝鮮肅愼卞韓の地に王たんと欲さば、先づ松嶽に城き吾が長子を以て其主となすに如くはなしと。裔之に從ひて、太祖を城主としたが、太祖は此時二十歲であつた。其後、太祖王建は將士の推戴する所となり、弓裔を逐つて、國を高麗と號し、都を松嶽の陽に定め、宮闕を創め、三省六尚書官九寺を置き、市廛を立て、坊里を辨ち五部を分ち、六衞を置き、法王王輪寺の十寺を都内に創建した。

新羅は五十六代、九百九十二年、高勾麗は二十八代、七百五年で、高麗は三十四代、四百七十五年つゞいたのである。新羅の滅亡は我が醍醐天皇の御代に當り、高勾麗は天智天皇の朝に亡び、高麗は新羅の後を承けて後龜山天皇の世に李朝の滅ぼす所となつた。松嶽山の南麓にある開城の滿月臺は高麗朝王宮の遺址である。

崩れかゝつた石燈の、それも夏草に埋もれて、あたりはひつそりとしてゐる。神鳳門やら會慶殿らのあとには空しく礎石のみが横つて、松嶽山から一陣の凉風が其廢墟を吹いてゐる。春風秋雨もう五百餘年になる。老を啼く流鶯の聲がしきりに聞える滿月は闇の夜となつて、野狐のやうな李成桂に其城池は奪はれたのであつた。鄭夢周が極力其野狐を壓へつけようとしたが、大厦の覆へらんとするのであるから、一木では到底支へる力はない。夢周は善竹橋に殺されて、やがて社稷は血食しなかつた。

夢周に高麗朝随一の學者で、當時東方理學の祖と稱せられてゐた。其詩文は豪放峻深と云はれ、其集を圃隱集と稱した。君に信にして、忠烈の臣なる夢周は野心滿々たる李成桂に取りて隱然一敵國であつた。そこで高麗最後の君なる恭讓王の四年四月四日、卑怯なる李成桂黨の為に善竹橋で暗殺されたのであつた。

善竹橋は細流に架つた石橋の、それも四五歩に過ぎない小さなものである。後人其周圍に石欄を設けて之を保護し、別に其傍に石橋を架してゐる。橋上に、暗紅色の斑點があるのは、夢血の凝つたものだと云ふが、固より石質で、太古以來自然の色である。流の縁には白衣の女が、洗濯に忙しい。あたりの景色は朝鮮と云はんよりも寧ろ支那らしく、それも支那の文章に現はれてゐるやうな、雅致のある野趣のあるものであつた。橋前には門構への碑亭があつて、夢周頌徳の二大碑が屹立してゐる。いづれも李朝王者から、追頌したもので、聊か此忠臣を殺した罪滅しをしてゐるのである。

夢周の邸址は書院となつて、崧陽書院と稱し、崖の半腹に堂を建てゝ夢周の肖像を安置してゐる。其下が書院で、年老つた村夫子が子供を教へてゐた。五十人ばかりの子供はわい〱云ひながら、本を讀んでゐる。どんな本かと覗いて見ると、小學らしい。いかにも此處にふさはしい光景である。

開城の南大門は、樓上の梵鐘で名高いが、元代の工匠の手に成つたものである。城の崩つた小山の上に觀德亭と云ふのがある。眺望がいゝ、白衣の若者が弓を射つてゐる。弓は半弓で、空に向つて射ると、半圓狀に矢は空を掠めて、的に中るのである。何となく長閑で、どこかに大陸らしい氣分がある。取別け此地で面白いと思つたのは、彩霞洞である。

洞は巌石重疊として、一渓に沿うて登るのである。一言にして盡くせば、清麗の境である。泉あり、池あり、花木あり、亭榭あり、清冽の水は、繞曲して流れて行く。幽邃で、しかも雅致に富んでゐる。朝鮮の景色と云はんよりは、寧ろ我邦の風景である。自然の境致でなくして、人工の林泉である。高士と對座するよりは、寧ろ美人と逍遙すべきところである。淺緋の衣をつけた妓生よりは、團扇片手に秋草でも染めた羅衣を纏ふ內地美人の徘徊する方がふさはしい處である。個人の所有地であるが、公開してゐるのだと聞いたが、如何にも別莊らしい氣分のする處だ。

高麗朝の文化は割合に觀るべきものがあつた。畫家としては李寧を推すべきであらう。寧は第十七代仁宗朝の人で嘗て樞密使李資德に隨つて宋に入つた。宋では恰も藝術天子徽宗が君臨して、畫院及院外に名匠の雲集してゐた時であつた。寧は勅を

奉じて禮成江の圖を描いたところが、徽宗は之を嗟賞して、此頃高麗の畫工にして使に隨つて至るものは多いが、唯だ寧のみが妙手であると酒食錦綺綾絹を賜はつた。其子の光弼も亦畫を以て第十九代明宗に寵せられた。明宗は圖畫に巧みで、尤も山水に長じてゐた。光弼、高惟訪等と物像を繪畫し、軍國の事は慢りて意を加へないほどの藝術好きであつた。光弼の子が西征の功を以て隊正に補せられんとしたので、正言の職にある崔基厚は之を議して、此子は當今二十歳であるから、西征の時は僅に十歳である、十歳の童子が軍に從ふことがあらうかとて堅く執つて反對した。すると王は基厚を召して之を責め、爾獨り光弼の吾國を榮するを念はざるか、光弼なかりせば三韓の圖畫は殆んど絶えんと仰せられたので、基厚も已むを得ず、之に署したと云ふほどに王の繪畫熱は熾んであつた。

高麗は高麗靑磁高麗燒を殘すほどに窯業に於ては觀るべきものを産したのであつた。李朝の初めには、藝術も工藝も之を傳承してゐたが、其後朝鮮に於ては其傳統を失つてゐる。高麗の文化も固より支那文化の移植であつた。新羅や高勾麗が唐の文化を輸入したが如く、高麗は宋元の文化を承けたのである。然し其文化は一時の文化に止つて、永く朝鮮化した文化を半島に留めて之を發達せしめなかつた。然し朝鮮の文化は高麗に於て其高潮を示したと云つてもよからう。

開城は人蔘の本場で、專賣支局出張所所在地である。紅蔘は支那にのみ輸出されて、內地へは白蔘のみが販賣されるのである。紅蔘は皮のまゝで茹でたのであるさうな。皮があるのとないのと、どれほど功驗に違ひがあるか知らないが、支那人には紅蔘が高く購はれると云ふことである。支那の文化は人蔘の力で朝鮮に輸入されたのも多からう。人蔘は藥劑であるが、どこかに享樂的氣分がしてゐる。同じ藥にしても愛嬌がある。

大同江を控へた平壤の風光は明るいが、岩石のみ重つた開城は、どこかに薄暗い感じがする。開城は到る處に遊園地を持つてゐて、其風景はいづれも可愛らしい。觀德亭にしても、善竹橋にしても、彩霞洞にしても、鐵道公園にしても、庭のやうで、自然の大觀はない。高麗の文化も其氣を享けて、小さく纏つてゐたやうだ。然し朝鮮の平山凡水の中で開城は一風變つてゐるところがある。高麗文化が特殊の文化を形づくつたのも亦之に同じい。

三　平壤

朝鮮でどこがいゝかと聞かれたなら、躊躇はずに平壤と答へよう。平壤は形勝の地であり、山潤で、風光明媚の都である。

牡丹臺から大同江を俯瞰する景色は又なく好い。婦人は美しいばかりでなく、風俗が如何にも優雅である。大同江では鰉が取れる。鰉は江州琵琶湖の特產と思つてゐたのに、お牧の茶屋の膳に上つてゐる。聞けば江州から取寄せて放卵したものであるさうな。山端の平八や石山の柳屋を思ひ出して、之も亦善い。

江州で好物は此鰉と鮒の卵つけ膾とである。鰉の缺點は骨の硬いのであるが、脂があつて、小さた魚ではあるものゝ、濃厚の味を持つてゐる。やまめやあまごのやうな淡泊ではなくて、こつてりしたところに、よい味がある。鮒は源五郎、ぴち〳〵として見るからに、肉がはちけさうだ。粟粒のやうな卵でまぶしたのを、酢味噌で食べると、鯉のやうなくせのある味と違つて、まことにほろりとした淡素の妙味がある。江州にはまだ瀬田の蜆といふやつがあるが、味噌がまづい。ありや八丁味噌に限るやうだ。ところが盛子君得意のお牧の茶屋で東道主人たる中學校長の鳥飼さんと大同江を觀ながら對酌すると、鰉ばかりか、鮒の膾が出て來た。尤も卵でまぶしてはなかつた。お牧女將の話を聞くと、卵つけ膾にしたところが、無粋の連中に顏を顰められたので、卵つけをよしましたと云ふことだ。それや顏を顰める方が惡い。卵の有無は姑く措いて、鰉や鮒の膾で、陶然として江州氣分になるところは嬉しかつた。

朝鮮には餘り旨いものがないやうだ。ある時大きた鰒を買つたところが、其不味さは言語道斷であつた。之は內地で姑らく飼つてから食べなくてはいけない。鷄も生で買つたことがあつたが、大久保彥左衛門がやかましく云ふほどのものではなかつた。鹽漬なんかはてんで問題にならぬ。唯旨いと思つたのは野猪の肉だけであつた。朝鮮通の加藤灌覺さんが、そんなら一つうち虎の肉をお贈りしませうと云つた。七十五日長生きする點から、それも結構と思つたが、虎も不味いに相違ない。朝鮮料理は到底支那料理の足元にも及ぶまい。小田さんや田中さんを初め文科出身諸君によばれた京城の食道園のは純粹の朝鮮料理でなく、云はゞ偕樂園の支那料理見當であるさうなが、神仙爐が一番內地人向きと思つた。平壤の女子高等普通學校でも神仙爐の御馳走になつたが、やはり內地人向きたるにかはりはない。よせ鍋のぐの多いものだ。朝鮮の料理屋を片ッぱしから食べ歩いたのでないから、とかくの評は無論出來ないが、記憶に上るやうなものは一つもなかつた。一體に魚類は大味で、野菜にも珍味がない。其中で平壤の鮒と鰉とだけを懷しいものと賞んだのもあながち無理ではあるまい。

然し鮒と鰉とは樂浪郡時代にはなかつた。高句麗時代にもなかつた。恐らく日韓合一後の產物であらう。して見れば鮒と鰉

とは、朝鮮の古文化と何等の關係のないものだ。けれど鮒と鱧とだけではない。朝鮮の文化はいつも其時代限りで、あとには何の關係のないのを常とする。樂浪郡は樂浪郡だけの文化、高勾麗は高勾麗だけの文化、新羅高麗の文化は新羅高麗だけの文化で、之を傳承し、之を發展させ、舊文化の上に新文化を築き上げると云ふやうな器用なことは一向やつてゐない。然も其文化は支那からの輸入品移植品で、更に朝鮮化した立派なものを作つてゐない。鮒と鱧とは江州から輸入されて放卵されたのだが、依然として江州の味を有して、朝鮮化してゐない。二千年の後には朝鮮化するかも知れないが、其うちには無くなつてしまふかも知れぬ。朝鮮はいつも文化の取次所で、文化の販賣店ではない。尤も此頃朝鮮には文化政治と云ふ看板がぶらさがつてゐる。

大同江の向岸を半里ばかり行くと、樂浪郡治の舊蹟がある。一帶にやゝ小高くなつた畑地であるが、[redacted]ゐる。此あたりには古墳の數が夥しく、千百三十ばかりと算せられる。此から出た銅器や陶器、漆器、武器や玉石器、古錢の類はいづれも漢時代の文化を語るもので、四百二十年間の郡治が此に殘し置いた遺物である。漢の樂浪郡治の勢力を逐退けて、鴨綠江のほとりなる丸都から、都を平壤に移したのが、扶餘族の別部なる高勾麗であつた。高勾麗が漢の勢力を半島から驅逐したのは其第十五代美川王の時で、丸都即ち國內城から平壤に移つたのは、第二十代長壽王の時である。唐書東夷傳に「其君、平壤城に居る、亦長安城と謂ふ、漢の樂浪郡なり、京師を去ること五千里にして贏(つよ)し、山に隨ひ屈繚して郛をつくり、南浿水に涯し、王宮を其左に築く」とあるが、當時の王城は樂浪郡治の所在地とは違つて平壤の東北四里ばかりの安鶴宮址だらうと云はれてゐる。

高勾麗の勢力は、支那を統一した隋の遠征軍を破ること、再三に及んでゐる。然し唐の第三回遠征ありて、國亡び、平壤には唐の安東都護府が置かれた。高勾麗の古文化は江西面の遇賢里墳墓に依りて僅に其俤を髣髴すべきである。遇賢里三墓中の二墓には壁畫を有する石室がある。

梅山里の四神塚を初め、此あたりには壁畫を有する墳墓が少[redacted]北にある大城山麓には古墳が多いから、若し發掘したならば、或は稍多くの壁畫を發見するだらう。遇賢里の大中二墓中の石室には四壁に蒼龍、白虎、朱雀、玄武の四神を描き、其上に天人の飛揚、忍冬等の唐草模樣、天井に雲龍文樣をいづれも單純なる彩色で畫いてある。石面には膠のやうなものが塗つてあるが、やはり密陀僧であらう

か。其線の優婉にして、圖案の卓拔なる、眞に驚歎すべき價がある。恐らく朝鮮に於ける古藝術品中それほど優秀なものは他にあるまい。時代は高勾麗の季世に近いもので、高勾麗文化の絶頂期であらうが、其の果して支那人の手に成つたか、支那人の子孫か、或は朝鮮人の作る所かは固より明かでない。

高勾麗古文化の遺物は勝ち誇つた唐兵の剽掠する所となりて壁畫以外に何物をも留めないと云ふことである。それにしても遺蹟の多數に殘つて保存されてゐるのは幽州である。高勾麗だとて、寺刹もあつたらうが、其礎石さへも不明である。唯々壁畫のみが光つてゐる。

牡丹臺の下に箕子の陵と稱するものがあり、平壤の停車場前に箕子の井と云ふものがある。箕子が果して平壤にゐたかどうかは問題であるが、箕子より四十餘世の孫箕準を逐うて朝鮮を奪つた衛滿は王險城即ち平壤に都したのであつた。箕子の前に朝鮮の開祖檀君も此に都したと云はれてゐるが、檀君は傳說人物であるから、平壤に都したと云ふのも傳說に過ぎない。よし傳說にしろ、虛托にしろ、檀君も箕子も平壤に緣故があると云はれるだけ、平壤は都城として恰好なところであつた。

平壤に遊んだ翌日、江西の壁畫を觀に行く。今日は端午で、都鄙の女が盛裝して嬉々としてゐる。其歸るさに牡丹臺の盛況を見んと又々立寄る。白衣の女で臺の上も下も埋まつてゐる。日課の洗濯も今日は休業である。老松の梢高く太い綱を懸けて鞦韆を吊し、新造や年增が二人づつ向き合つて乘つて、白い裳がひら〳〵と舞つてゐる。何と云ふ情趣であらう。支那の小說や戲曲でよく見てゐた鞦韆の遊を面のあたり見て愉快に禁へない。其翌る日安東縣へ向つた途中、汽車の窓から牡丹臺を見ると、やはり白衣の女が絡繹としてつゞいてゐた。端午の三日間は女が開放されて自由に遊ぶ日であるさうな。然も女の本場である平壤は端午で最も賑ふのである。京城あたりから妓生を連れて乘り込むのも少からずあつた。新調の衣服を見せ見よがしに、三日間遊び步るく女の天下である。平壤はまことに長閑な都である。

大同の長江が緩く流れて、樓や臺や亭などが其川べりを彩つてゐる長閑な都も、屢々兵馬倥偬の地であつた。特に我が國威發展史は此地を舞臺としたことが多かつた。小西行長が狡奴沈惟敬に欺かれて平壤の險を棄つるに至つたのは、文祿戰史の一大恨事であつたが、懸軍長驅、氣宇八道を吞んだ概は洵に壯とせねばならぬ。玄武門の開門を以て名ある平壤占領は二十七八年戰史中の光彩陸離たるものであつた。今では遠く大同江の彼方には陸軍航空隊の飛行場が展開されて見える。旅團所在地で

ある此地は、今も今後も朝鮮中樞の要害であるから、是非とも師團の建設地であらねばなるまい。

四　咸　興

安東縣まで出かける。鴨綠江を渡りたいためである。神功皇后征韓の時に、新羅王は阿利那禮河返て以て逆流し云々と云つてゐる。此阿利那禮河に鴨綠江の字をあてたのは、後世のさかしらごとに違ひない。鴨綠江では餘りに縁が遠過ぎて新羅王の誓言としては甚だ當らない。好太王碑に、奄利大水とあるのは、どうやら鴨綠江らしく思はれるが、新羅王の言ふ阿利那禮は他の川がなくてはならない。或は閼川であらうと云ふ說もあるし、又はアリは下、ナレは津の義で、唯下流が上流とある意味に使はれたと云ふ說もあつて、定說はない。然し新羅王のお蔭で鴨綠江の名は古くから邦人に親みがあつた。とにかく滿洲と朝鮮とを境する朝鮮第一の大河である。[redacted]鴨綠江節で殊に親みを持つやうになつた。鴨綠江節は安東縣が發祥地である。縣の妓菊乃なるものが鴨綠江を下る邦人の役師の哀音喞々たる歌を聞いて、それから工夫して、此節を作り上げたと云ふことである。亡國の哀調はあるが、郷土歌謠としては相當によく出來てゐる。郷土歌謠で最も優れたものは追分節を推すべきである。然しそれも正調とか馬追とか、本手端手とか分類するのは餘りに煩しい。江刺追分よりか私は新潟の鍋茶屋あたりで聲の善い妓が唄ふ方が好きだ。安東節だの、おばこ節だのは到底選に入るべきものではない。鴨綠江節は此種の民謠中確に出色のものである。

安東縣に往つたのは、何も本家本元の鴨綠江節を聽かんがためではない。尤も餘程以前に出雲の安來に泊つて、わざ〳〵本元の安來節を聞いたこともあつたが、やはり宍道湖の眞中で舟中歌つてゐるのを聞いた方がよいと思つた。新しい此民謠の鴨綠江節を何もわざ〳〵安東縣まで聞きに行く必要はない。鴨綠江を見て安東縣に一泊した其翌る日はすぐ京城まで引返し、其夜元山に向つて金剛山へと出立した。金剛山の登臨をすませて、元山に泊つた夜はあはたゞしく明けて、其翌日午前十時過には咸興の客となつてゐた。

[redacted]祖以前は多く咸興南道の德源郡赤田面湧珠里に住んで時に咸興にも往來してゐたが、太祖の父李子春は咸興に移住して、其後、李成桂即ち太祖を生んだのである。咸興から里餘雲田面宮西里に本宮がある。太祖と王后、父祖四世と其后妃とを祀つた李朝の太廟である。門外には柳の大樹が枝を垂れて、傍近く野水が潺湲として流れてゐる。

門庭は滑らかに掃き淨められて、老松が盤桓として蟠る。正殿には神位を配して、其側には太祖の遺物が數點保存されてゐる。弓箭笠嚢の類である。前庭に一字の樓がある。蓮池に臨んで遠く平野を一望の裡に收める。樓に榻して豐沛樓と云ふ。大風起りて雲飛揚するの概がある。李太祖も一種の英雄兒であるから、漢高祖に擬したのも無理はなからう。然し高祖は鄕里の沛に歸りて、其父老と置酒高會するの情愛があつた。太祖は其出身地の咸鏡南北道と、平壤を中心とした平安南北道の民衆を高壓したと云ふことである。憎むよりも、寧ろ恐れたのであらう。故に此等諸道の人民は政治上に立身出世するの途を全く塞がれたのみならず、苛税を收斂せられて、李朝五百餘年の間は相當に苦しめられたのであつた。太祖は己に代らんとするやうな人物の出ることをいたく警戒したと見える。されば此等諸道の民衆が李朝を憎むことは甚しく、機を得れば、李朝を倒さんと望んだことは久しかつた。太廟を存する發祥地方の民が其社稷を呪咀すると云ふのは不思議な現象と云はねばならぬ。此日東道主人の勞を取られた某君は私の爲に大に李朝が此地方を虐待してゐたことを力說してゐた。

高きに登つて遠村近郊を望むと、城川江は帶の如く繞り廻つて、沃野遠く開け、汝消川、瑚璉江の流域とともにいはゆる咸興平野を作つてゐる。高麗と女眞との戰は曾て此平野に於て開かれたのであつた。高麗叡宗の二年閏十月、王は順天館の南門に御して、親しく閱兵式を行ひ、銀布酒食を分賜し、尹瓘を元帥とし吳延寵を副元帥として征女眞軍を出發させた。十二月尹瓘は女眞を擊ちて大に之を破り、諸將を遣はして地界を定めしめ、雄英福吉四州の城を築き、翌三年二月、女眞を平定し、新に六城を築き、碑を公嶮鎭に立てゝ、以て界至となし、四月凱旋したが、女眞は雄折城に入寇したので、吳延寵を將として之を擊たせ、七月には尹瓘また將となりて、女眞を征し、翌年五月、吳延寵は吉折に大敗し、六月、王は「近日邊患寖迫し、軍民勞苦す、君臣同じく至誠の誓を發し、天に告げて祖宗訓誡の事を行はん」と制を發してゐるのでも、一方ならぬ苦惱のことが思ひやられる。其七月九城を女眞に還附して、僅に和を結んだのが、此戰爭の終局であつた。一たび高麗の手に歸した咸南一帶の地も、女眞に復歸したのであつた。

曾ては漢の勢力範圍に歸し、或は高勾麗の領となり、或は唐の安東都護府に屬し、渤海領となり、女眞と高麗との爭奪地となり、蒙古に統せられ、遂に高麗の版圖に歸して、李朝建國の源を開いた咸興一帶は、まことに多事の地域であつた。朝鮮半島の一地方とは云ふものゝ、離合集散が常ならないので、李

障も自づから、高壓手段を取つて之に臨んだと見える。開基の故國ではあるもの丶之に都せず、高麗に代つても其舊都開城に據らず、遂に漢陽を都城としたのである。漢陽は今の京城である。

京城の地は漢江を帶び、南山と北漢山とを負うて、要害の地ではあるが、文祿の役を見ると、四月十三日釜山に上陸した小西行長は五月二日東大門を破つて入城し、加藤清正は翌日南大門から進入してゐる。尤も日本軍が破竹の勢を以て沿道の諸城を陷れたと聞いて、早くも軍兵搖々として北走したのであるから、必らずしも守り難い地とは云へない。文祿の役は單に朝鮮に道を假りるに過ぎなかつた筈だが、道を假りられた朝鮮が兵馬の蹂躙する所となつたのは、いろ／＼のゆきさつのあつたためではあるが、つまらないことであつたと思ふ。遠征將士の勇猛なるうちにわけても加藤清正が遠く北韓地方まで馬を進めた其行動に至つては、頗る壯烈と云はねばならぬ。其行路を案ずると、彼は人間以外にあらゆる自然の苦艱と闘つてゐる。

文祿慶長役の結果として、歴史は朝鮮の窯業工が多く九州に拉致されて、我が窯業界の發達を促したと記載してゐる。李朝文化の我に益した所は恐らく此點だけに止るであらう。江戸時代に朝鮮使節の來聘はあつたが、當時文質彬々たる我に在りて彼より得る所は殆んど無かつたと云つて善い。李朝も高麗の文化をつぎ、又明より多少移植する所はあつたが、朝鮮文化として特殊に十分の發達をしなかつた。唯奎章閣に於ける國朝實錄を始め、典籍の立派なものはあつても、それは單に宮中秘府の文化に止まつて、一般民衆の文化は一向に發展して居らぬ。

京城で一日、特に請うて李王家の雅樂を聽かせてもらつた。此等の音樂は既に新羅高麗の時代に支那から傳來したもので、李朝の時にも大に振興の運に向ひ、第九代成宗の世には樂學軌範の述作さへにあつた。其樂器はもと六十六種であつたが、現今では金のものが十種、石が二種、絲が十種、竹が十一種、匏が一種、土のものが三種、革が十三種、木が四種、併せて五十四種ある。いづれも支那から傳つた形式のものである。嘗ては七百七十餘人の職員があつたが、今では辛うじて五十七人だけ殘つてゐる。此日、私の爲に正装して演奏されたものは二十名足らずであつたが、其曲目は次の通りである。

宗廟祭禮樂
　與民樂　（合樂）四百七十年前、李朝世祖樂
文廟祭禮樂
　迎神樂　（合樂）四百九十年前、李朝世宗樂
宴禮樂

長春不老之曲（合樂）四百七十年前、李朝世祖時代
壽齊天之曲（管樂）千三百年前、新羅朝樂
堯大舜日之曲（絃樂）六百年前、高麗朝樂
萬波停息之曲（管樂）同
萬年長歡之曲（歌曲）同

新羅のものが一曲、高麗のものが三曲、李朝のものが三曲。其中には管樂も絃樂もあり合樂もあり、當年取つて八十三の老齢なる樂長の明完璧さんが私の爲に歌曲を歌つてくれたのは特に嬉しかつた。

宗廟のお祭に奏するもの、孔子廟の祭典に奏するもの、それに王庭の饗宴に奏するもの、盡く其代表樂である。宗廟祭禮樂を聽いてゐると、私は思はず漢の安世房中歌や樂府歌辭やを思ひ出さずにはゐられなかつた。「大孝備はれり、休德照明にして、高く張り四に懸り、樂は宮庭に充つ」だの、「練時日、靑陽、米明、西顥、玄貢、惟泰元の歌章だのが、髣髴として胸中に徂徠する。いろ／＼の絲竹管絃が切々嘈々として旋律をなして響く。いづれも之れ洋々たる大雅の音である。千三百年前の新羅朝樂は何と云ふ美しさであらう。高麗樂、李朝樂は何と云ふ莊重さであらう。曲訖んで餘韻嫋々として、縷の如く猶耳朶に響くのであつた。

目の前には赤い袍を着けた樂人が琴瑟、琵琶、箏に向つてゐる。さま／＼の笛を手にしてゐる。拍子の木がばち／＼と鳴る。一齊に絲の音が微妙の音を立てる。笛の音が高きより低きに、低きより高きに鳴る。さゝらのやうなもので、虎の恰好した木器の背中を彈く。石で作つた磬がかん／＼と調子の高い音を發する。缶や塤と云ふ土の樂器がいゝ聲を出す。それが旨く巧に調子を合せて、合奏されるのである。唐の音樂はまことに洋々たる春の海のやうなものであつた。然も其大雅の餘響は獨り朝鮮の李王家雅樂寮に殘つてゐる。

食道園で妓生の舞を觀た。僧舞と劍舞とであつたが、壬生狂言の、もつと面白くないものであつた。同じ食道園や京菊で妓生の歌を聽いた。立膝して胡座をかきながら酒を侑める歌だの其他一つ二つ朝鮮の歌を唄つたが、少しも興味を感じなかつた。すぐに鴨綠江を唄ひたがるので、いよ／＼お坐が醒める。東萊溫泉の旅館で、庭を隔てた向ふの室で、琴を彈きながら盛に朝鮮歌を唄つてゐる妓生があつた。何となく悲哀の調があつて、雲急に月を鎖す其夜には寧ろふさはしく思はれた。平壤の妓生學校を訪問して朝鮮の俗樂稽古を聞きたかつたが、折惡しく端午でお休みであつたので、それを果すことが出來なかつたが、とにかく雅樂の莊重典雅なるに反して、朝鮮民衆の俗樂は

頗る發達しないものである。朝鮮の文化は萬事が此通りである。

朝鮮には劇と云ふものがない。私は支那劇が好きだ。あの音樂につれて、所作をしながら美い聲で歌ふ支那劇を見てゐると、うつとりとなる。支那の文化を輸入しながら劇が朝鮮に起らなかつたのは、劇それ自分が民衆のものであるがためだ。元明の文化を輸入した朝鮮であるから、當然元明時代に發達した支那劇は輸入されるべき筈であつたのに、それが輸入されずに濟んだのは、貴族階級の文化だけ輸入されて、民衆文化が輸入されず、又發達しなかつた證據である。朝鮮の文化は唯特殊階級だけの文化で、民衆とは沒交渉であつたのだ。

古い話だが、斯う云ふことがある。朝鮮の渡守に霍里子高と云ふのがあつて、朝早く船を漕いでゐると、一人の白髪の氣違ひが、髪をおどろに振り亂し、壺を提げながら、川をどんぶとばかり渡つてゐる。あら危いわね、およしなさいと、聲高々に其あとから止めようとしてゐるのは、其妻であつた。ところが妻が追ひつかぬうちに男は水に流されて死んでしまつた。妻は悲嘆にくれ、箜篌を把りて之を鼓し、「君よ河を渡り給ふな」(公無渡河)の曲を歌つた、其聲は如何にも淋しく憐れであつたが、歌ひ畢ると、身を投げて夫に殉した。子高は家に歸つて、其事の仔細を妻の麗玉に話すと、麗玉は同情に堪へず、其曲を寫して箜篌引を作つた。「公河を渡るなかれ、公ついに河を渉り、河に墮ちて死す、當に公を奈何すべき」と云ふのがそれである。箜篌引は支那に於ける一の歌曲となつて、陳思王曹植の「置酒す高殿の上、親友我に從つて遊ぶ」の篇を初め、歴代の詩人が幾多の名篇を遺してゐる。朝鮮に起つたと云はれた悲劇は、却つて支那で詩化されたが、朝鮮には何等の反響もなかつた。此等の説話は十分に劇化されるべきものであるが、劇のない、民衆詩の乏しい朝鮮では閑却せられてゐたのだ。朝鮮の使節は白樂天の詩をわざ／＼求めて、之を本國へ持ち還つたさうであるが、劇は朝鮮に輸入されなかつた。

咸興は李朝の興起したところであるが、其民衆は非常に壓迫されて、李朝を呪つてゐたと云ふ。然し積極と消極との差こそあれ、朝鮮の文化が一般民衆に及ばなかつたのは、咸興と他地方も同樣であつた。

五　金剛山

維れ昔し、五十三佛、遠く月氏國より磐石の船に乘じて朝鮮に漂着し、船を永郎湖畔に繫いで陸に上り、獰猛兇暴の九龍を追ひて、之を八潭に幽し、跡を金剛山に垂れたと云ひ傳へら

てゐる。一種の英雄傳說が抹香臭を帶びてゐるものだ。されば其古へは內外金剛に百八ヶ寺あつたと云はれてゐるが、今では山中に觀るべき寺が甚だ少い。然も其の多くは內金剛に在りて、外金剛には僅に神溪寺一刹を留めてゐるに過ぎない。

內外金剛の外に海金剛があつて、叢石亭を其門口とする。高城地方を繞つて海にも陸にも奇勝が累々としてゐるのを總稱して海金剛と云ふ。北に三日浦、南に赤壁江、江を渡ると永郎湖もあり、懸鐘岩も船巖もある。高城を海へと出ると、小川があつて、渡れば、立石里。岸には佛岩あり、正面に松島、沙巖、瀛洲、七星巖。海萬物相は遠く水源端に連つてゐる。然し海金剛は遠く瀨戶內海に及ばず、松島に及ばず、鳥羽に及ばない。巖上に、松の翠を戴いてゐるのは松島ぐらゐ、其他は嵯峨たる巖石のみで、他の奇がなく、何となく物足らぬ感じがする。

遮莫れ、海金剛の美は島嶼巖石の奇に非ずして他に存する。一葉の扁舟を海波に托して沖の島々の間を巡つて見よ。而して靜に水底を俯瞰して見るがよい。海は凪いで、水は平かである。日は麗かに、萬象は透徹して其影を水に焦してゐる。そよそよと吹く微風につれて、漣猗が渚に寄せるのみである。舟はゆつたりと島の前から後へ、左から右へ、岸から沖へ、沖から磯邊へと巡り巡りて行く。水は透き通つて澄み切つてゐる。手を伸さば海草を摑むことが出來よう。海底には磐石起伏して、山を作り丘を作り、谷を作り峽間を作つてゐる。暗夜の星の如く海膽は點々として其の高い低い磐石の上に散在してゐる。森林をなすやうに、草莽をなすやうに、海草は一面に生ひ茂つて、見るからに靑々としてゐる。其間を無數の大小の鱗（うろこ）が翕忽として徂徠する。方に是れ一大水族館で、見ぬ世界の龍宮を髣髴させる。

海金剛は仰いで觀るべきものでなくして、俯して觀るべきである。自然の祕庫で、造化の寶藏である。鏡のやうな水底は平和の樂境である。そこには漁る人も釣する舟も見えない。日は長閑にして、雲は無心に流れて行く。

佛教傳說を所在に有する海金剛は、又神仙傳說にも豐かである。四仙亭、九仙峯などがそれである。赤壁江は一葦空を凌ぐの大江でなくして、桃花浪暖なる潭水である。山は紫に、夕日は渡頭に明るい。懸鐘岩に踞して、萬里の長風に吹かれてゐると、近くは船巖、鵲島、遠くは渺茫たる日本海の大觀が双眸の裡に收まる。日の長い夏の朝鮮は溫井里に着いても、まだ暮れさうにない。

金剛一萬二千峰、其の最も高きを毘盧峰とする。玉筍橫出して玉女峰となり、奇峰亂出して集仙峰となる。神劍鬼削して成

れるは世尊峰、巨巖劈割して兀たるものは觀音峰。文殊峰は孤峰天に參り、水晶峰は嵯峨窓を壓し、朝には白雲飛揚し、夕には嵐氣浮動する。路は羊腸九折して、斷崖絶壁、或は密林を分け、或は幽徑を攀ぢ、天梯石棧、時に鐵鎖に縋り、時に藤葛を捫み、其間に飛泉空に懸り、奔湍巖に激し、雪を噴くものは水簾、藍を溶かすものは深潭。涓々淙々、水は翡翠の色を湛へ、流は白練の光を浮べ、峯巒萬狀、溪壑千態、雲烟の出沒變幻其妙を極めて、造化自然の奇文は連綴して此に展開されてゐる。

内金剛は知らず、人は外金剛に於て萬物相の奇を說くものが多い。妙義、鋸山の如きものを幾百と無ね列ねた大觀はまことに天下の奇勝たるに背かぬ。金剛第一關の狹い石門を潛り、千仭の切つ立てた斷崖の下に天女の化粧水を俯瞰し、突き出た大磐石に取りすがつて、おのゝく足を踏みしめながら見る目危き棧（かけはし）を渡つて天仙臺に躊躇し、百千の高峰を脚下に眺めたならば、誰しも羽化登仙の思を起さぬものはなからう。舊萬物相の近くは三仙巖鬼面岩から、遠く五峰山、勢至峰に至るまでの景色も、奇勝たるに於て敢て異議はないが、新萬物相の天仙臺は、流石に他の追隨を容るさぬ、天地の奇觀を極めたものである。

然し私は玉流溪の壯麗を愛するものである。溪は清麗と稱さんには、餘りに壯觀に過ぎてゐる。溪の窮る所は九龍淵で、そこには百七十有餘尺の大瀑布九龍瀑が懸つてゐる。如何にも巨大ではあるが、一枚の大磐石に沿うて、深さ三十餘尺の瀧壺に轟々轆々落下するのであるから、綿をちぎつて投げつけるやうな日光華嚴の雄壯なるには及ばない。木の根岩角にすがつて、僅に攀ぢ上り、遙かに高く九龍淵の上に出て、瀑の源なる八潭を谷底深く眺めるのは、寧ろ勞が功に酬ひない感じがする。それよりも九龍淵に行く途すがらの碧潭飛泉に得も云はれぬ勝景がある。水簾瀑と云ひ、連珠潭と云ひ、眞珠潭と云ひ、舞鳳瀑と云ひ、いづれもとり／＼に趣はあるが、私は最も玉流洞と飛鳳瀑とに愛惜の念が深い。

一溪の水は白練の如く一枚の巖の上を流れ流れて、碧潭の中に落ち込むのである。潭を繞りて盡く一枚の巖である。碧琅玕のやうな水は、又潭から碎けて下へと流れ行く。巖の白いと、水の青いとが快い諧調を保つて、幽邃限りない。玉流洞は金剛諸勝中の清麗境である。

仰いで見る目も遙かな大磐石の危峰より落ち來る飛泉は、風につれて狹霧となり、細雨となり、其末、淙々として、屈折し、溪中に珠を躍らせ雪を噴いて瀉下するのである。呼んで飛鳳瀑と云ふのは即ちそれである。蓋し飛泉中の最も奇なるもの

で、又と得難い勝景である。

温泉水滑らかな温井里は、山嵐の氣が通つて、夏の暑も涼秋の感じがする。地は人間界を離れて遠く神仙佛陀の靈境に入るやうではあるものゝ、玉流溪には妓生と朝鮮齒科醫とが醉つて溪中に溺れたと云ふ物語を傳へてゐるし、萬物相への途すがらなる青山白水の寒霞溪には金剛山ホテルの給仕と長箭の娼妓とが情死した其跡が道行く人に語られてゐる。斯う云ふ里にも、戀草は芽を吹き、花を開落させてゐる。

六 碧蹄館

文祿二年正月、明將李如松は平壤に勝ちて、進んで諸將を開城に會し、京城總攻擊の策を議し、是月二十五日、自ら兵二萬人を率ゐて城州に至り、翌二十六日昧爽、京城に向つた。斯くと聞いた京城にある我が遠征軍は、小早川隆景を先鋒とし、立花宗茂・小早川秀包・高橋直正・吉川廣家等之に從ひ、曉の霧を冒して礪石嶺に至り、宗茂の軍は先づ出で逢ふ敵と渡り合せ、北ぐるを追うて望客峴を過ぎた。敵は新手を代へて之を拒がうとする。宗茂等とも擬議せず、此を先途と鎬を削つたが、敵は大勢、味方は小勢、戰難儀と見て、先づ峴下に退いたが、多勢を賴みとした明軍は、頻りに新手を加へて追擊益々急とこそは見えた。斯くと見るより小早川の部下に[illegible]粟屋四郎兵衞景雄、井上五郎兵衞景貞は、立花勢の脇を通つて備へを立てる。敵軍は間近くなる儘に、拍子を揃へて太鼓を鳴らし、天地に轟く大筒の音、黑烟ぱつと四方を籠めて物凄く見えた。粟屋勢は左に、井上勢は右に開いて、敵勢ごさんなれと待ち受ける。明軍は先づ粟屋勢に打つてかゝり、息をもつかせず攻め寄すれば、流石に猛き粟屋勢も拒ぎ兼ねて、少しくうしろに退軍する。得たりや應とおめき叫んで追擊する明軍は恰も大河の決して、一時に瀉ぎ來るやうであつた。斯くと見たる井上勢はわつとばかりにおめき叫んで、高きより低きに向つて雪崩の如く殺到する。粟屋勢も取つて返す。小早川隆景は一段小高きところより此體を見てゐたが、今や戰機熟せりと、采配取つて、かゝれやかゝれと下知する。右手の方からは小早川秀包・毛利秀元・筑紫廣門、左手の方からは立花宗茂・高橋直正、隆景自らは粟屋・井上の二勢に繼いで、疾風迅雷の勢に、さしもの明軍ぱつとばかりに靡いて、大勢は總退却を始めた。

是日の曉、大霧徂徠の裡に隱見した北漢山の嶺を見て、京城我手に落つと傲語した李如松も味方の不利と見て、氣色ばんでぞあつたが、揚元の一隊が新手の勢にて來援するに力を得て、滿面喜色を帶び、勇氣を恢復して、奮戰することやゝしばし。

然し我軍は鐵砲隊の釣瓶打ち、明軍には大砲があつて鐵砲がなかつた。味方は多く歩行であつたが、明軍は小さな支那馬に乘つてゐた。處は丘陵起伏して、地域は狹く、馬を水田に乘り入れて自由に馳驅することが出來ない。前より左より右より一つになつてえい／＼聲して攻め來る日軍に敵しかねて、明軍はしどろもどろ、全軍總崩れとなつては收拾するに道がない。李如松は馬腹を蹴つて、一條の血路を開き、遁れようとして、眞つ逆さまに轉げ落ちる。すはこそ敵の大將なれ、首引きちぎつて土產にしようと、井上五郎兵衞馬を驅け寄せて槍にて突かうとするを、さはさせじと、李如松の下部が大手を開いて其前に突立つ。えい邪魔いたすなと、五郎兵衞は槍を擧げてぐさと刺す、其ひまに如松は他の馬に搔き抱がれる如く乘せられて、一目散に逃げ出した。井上は齒がみをして悔しがつたが、大敵は失つて、其後影は次第に小さい。李如柏、李如梅、李寧、李有昇なんど屈指の大將ども、一命を惜まず、劍を拔いて味方を勵まし、崩れし勢を盛り返さうとしたが、逃足立つた味方を如何ともすることは難くあつた。勝ちに勝ちたる日軍は進擊して惠陰嶺まで進んだ。文祿の朝鮮戰史に名高い碧蹄館は、明軍の鼻先を挫いた殊功戰であつた。

碧蹄館は京城より五里、一路坦々としてゐる。右に北漢山を仰ぎながら、石碣嶺の切り通しを過ぎ、望客峴の下から高陽へ出ると、門があつて碧蹄館の三大字を題し、其中に古い建築が現存してゐる。館はもと左方の小高い丘の上にあつたさうな。然し其建物は昔の儘で今の所へ移されたのである。

碧蹄は朝鮮語の地名を綺麗な同音の字に改めて館の名に冠したと云ふことである。支那使節の爲に設けられた客館で、正面の一室は正使、左右の兩室は隨行員を入れたのである。官妓などが出張してゐて、歡待是れ力めたものである。此に宿泊して禮裝に改め、それから京城へ乘り込むと云ふ段取になる。望客峴は使節の出發を望見して京城へ報ずる地點であつた。日明兩軍の衝突は碧蹄館附近に行はれたので、我邦では碧蹄館の戰として名高い。今の碧蹄館は高陽郵便局と隣接して、郵便局長が保管の任に當つてゐる。

館後の小山に上つて、眼前に展開される狹い地域を見下すと、望客峴の左は小早川隆景や井上勢のゐたところで、右は立花宗茂、粟屋勢の占めた地點である。朝から正午にかけての戰は高陽に間近い處で決せられた。此戰勝の結果は、李如松をして開城を棄てゝ平壤へ退却せしめしほどに有効であつた。

四百年前の古戰場も今は長閑で平和である。田植の囃子や歌やらがそこここに聞える。京城を去る最後の半日は、碧蹄館で懷古の思に耽りながら過ごした。

案內の勞や歡待の情を盡された諸君に感謝の意を寄せながら、其翌る夜は釜に近い東萊溫泉で。のび／＼と旅の汗を洗ひ落したのであつた

高麗新羅箕子や
衛滿と明け易き

（大正十四九月）

彼等の自然觀と我等の自然觀

——滯歐雜感——

堀口九萬一

長い間歐米諸國に滯在して居たから、其間に各國の外交官や、學者、藝術家、新聞記者、其他各種階級の人々と隨分親密に交際して、隨て胸襟を開いて腹藏なく話し合ふ機會も多かつた。それ等の會話の度毎に東西風俗習慣の相異、特に家族、宗教、名譽などに關する觀念の大に異なるものがあるのには屢々驚いたものであるが、就中最も深く私を驚かしめたのは、西洋人の自然（ナチュール）に對する鈍感又は無趣味な事であつた。曾て白耳義に居た頃雪見に出掛けて氣狂扱にせられた事があり、和蘭では深更迄公園の橋の上で故友高橋作衞君と月見をして居て大に笑はれた事がある。夏目漱石も或時英國の知人に何故庭へ石を据へないのかと尋ねた處、据て吳れる人があつても直に庭外へ運び棄てる覺悟だと返答されたには驚いたと云ふて居た事がある。

一寸した此等の例に依て見ても如何に西洋人が自然に對して鈍感で、無頓着で、無趣味であるかゞ窺はれる。

東洋人と西洋人との自然に對する趣味嗜好の此の如き相違が、自から又た文學藝術の上のみならず一般の風俗習慣の上に迄及ぼして居る事は仔細に見ると、實に面白い現象である。

支那や日本の詩歌俳句等に於て其題材は重に自然の風物から取て居る。これ等の書物の部門分けを一見した丈けでも明かにそれが分かる位である。開卷第一の天文の部には雨露霜雪などを始めとして、時候の部には春夏秋冬の風景其他山岳河川禽獸蟲魚花木と云ふ具合で、題材の九分通りは自然の風物のみと云うてもよい。勿論人事の冠婚葬祭又は戀の部などと云ふ部門もあるにはあるが、それ等は天文地理四季の部門に較ぶれば極めて小部分を占めて居るに過ぎぬ。

自然趣味を發揮して居るのは啻に詩歌俳句に於てのみではなく、繪畫の方でも亦た昔から東洋畫の大部分は風景又は花鳥から成り立て居て、其の逸品と目さるゝものゝ多くは題材を山水

花鳥に取つたものであるのも、西洋とは正反對である。西洋では畫でも詩でも其の取材は多くは「人」又は「人生」から取つて居て其の逸品も亦た大抵人物畫か又は「人生」を描寫し詠歌したものゝ中に存する。日本の現今でも矢張り、日本畫は勿論西洋畫の側でも、風景花鳥を描いたものゝ方が、人物を描いたものよりは遙かに勝れて居て、風景及び花鳥の繪では西洋人などがとても氣の着かぬやうな點迄切り込んだものが少くない。故に西洋の展覧會に出品をしても引けを取らぬ處かイツモ西洋人を感嘆せしむるものは、山水畫の夏山雨後とか、秋天曉霽とか雲煙縹緲見るからに胸のすく様なのや、又は風前の花とか、柳に翔ける燕と云ふ如き類で、早取り寫眞でも寫すことの出來ぬ様な鳥や獸の姿勢をシツカリ捕まへて之を畫面に生動せしむる技倆には、彼等西洋人が常時も感嘆措く能はざる處である。

これ等の賞讃は我田引水でもなく又好む處に阿ねるのでもない。實際西洋人等が深く感嘆して居るのである。

佛國文部省監督總官 Emile Hovelaque 氏は東洋文藝通であるが、支那及び日本の山水畫を評して氏は左の如く言ふて居る。

『東洋の風景畫を見る時は丁度ウォズ・ウォルスの詩を讀む様な感じがする。觀る者をして其の畫中の人物と爲さずんば止まさる程の强い吸引力を感ぜしめる。これはその畫家が天地自然の母に飛び込んで自然と一體になつて而して後始めて出來る仕事である。これ則ち東洋畫家が西洋畫家より高きこと一等なる所以で、風景畫に於ては東洋の藝術は人間藝術の最高頂に達したものゝ一つである』と。

同じく佛國人 Paul Louis Couchoud 氏は日本俳句研究者として佛文壇に知名な人であるが、氏はその日本畫家評に於て左の如く言葉を極めて花鳥畫を賞讃して居る。

『一筆を以て善く動物を生動せしむる日本人の才能に就ては全く異論の無い處で、日本畫家を目して驚く可き動物畫家なりとなすは世界を通じての公論である。

『日本畫家の特技は、彼等が動物を觀察して其動物の動作性情の神髓を捕捉するに在る。彼等は非常な忍耐を以て觀察し動物の性情をスツカリ呑み込んで、然る後之を簡單化する眼識と之を飛動せしむる敏捷さとを有して居る。

『日本の額面や掛物や又日常の器物に於ても鶴や雁や鹿や猿や鯉などが極めて簡單な筆致を以て描かれ、而かも其の眞に逼ることは丁度 Pisanello（伊太利の有名なる畫家、一三八〇年—一四五六年）の繪を見るが如き觀を起さしむることは我々の驚嘆に堪えざる處である』と。

なる程よく西洋の食堂などに掛けてある額面の花鳥の畫を見るに花なぞは職業學校の生徒の拵へた造花のやうなのや、鳥や

魚や獸などは博物館に陳列してある剝製の寫眞かと思はれるのが多い。勿論中には生きて居るやうなのもあるが、それにした處で形似を事らとしたものが多い樣に思はれる。概して日本の花鳥畫には遠く及ばない。瑞典の畫家 Hil Hugue 氏は鳥を描く名人として知られて居る人であるが、この人ですらトテモ日本の畫家には及ばぬと屢々余に話された事がある。

× × ×

此の如く支那人や日本人が、山水花鳥に就いては特殊の技能を有す、と迄外人から賞讃せらるる程巧妙の域に達したのは、即ち東洋人には自然の風物に對する感覺が纖細であり趣味嗜好が强烈であるから、自から斯處に至つたのであらう。特に我々日本人が自然を好愛することは第二の天性かと思はれる程であつて、一言すれば日本人はありとあらゆるものを自然化して仕舞はないでは氣が濟まぬ國民であるかのやうに見える。

先づ日本人の姓名が殆んど自然の景物から成り立つて居る。例へば苗字では山川、澤村、太田、小池、大島、大浦、峯、園、谷、原、林、畑など云ふが如き、人の名前でも梅王、松王、櫻丸の昔より竹次郎、梅吉、松三、鹿太郎、鶴五郎、虎吉、稲次郎、女の方では初菊、初花、深雪の古い處からお花、お蝶、お梅、お杉、お藤、お竹、お梅などの無數[illegible]美人を形容するにも花の顏、月の眉、解語の花と云ふが如き。

尚ほ特色を發揮して居るのは、恐ろしい軍艦の名でも孰れも風流な名であつて、春日、八雲、宇治、嵯峨、堅田と云ひ、驅逐艦などになると宛然和歌の題の如き山風、浦風、秋風、夕風、より萩、薄、藤、蔦などと云ふのがある。先達て歐洲飛行で世界的に有名になつた飛行機の名もこれ亦「東風」と云ひ「初風」と云ふが如き、孰れも自然の景物を離れない。

社交娯樂の骨牌を見てもこれ亦明かにこの自然好愛の趣味が現はれて居る。西洋のハート、スペート、ダイヤ、クラブ。それぞれのキング、クイン、ジヤツク其他は點數と云ふが如き無趣味な且つ婆婆臭いものに反して、日本のは松、梅、櫻、山、雨、桐、紅葉、牡丹、菊、萩、藤、杜若と云ふ益々出でて益々風流瀟洒なもので、全く浮世離れがして居る。又たその繪を較べて見ても西洋のは俗悪な脂つこいものであるが、我が骨牌に至つては紅葉に鹿、藤に杜鵑、山に月、若しそれ雨の柳と蛙に至つては外人などの全く想ひ及ぶ處にあらず。

東洋に築山、林泉などと呼んで山水畫と同樣に鑑賞する庭園の發達した所以も、又た生け花や盆栽や盆石の發達した理由も、これ亦同じく自然を好愛し憧憬し一刻も山川、岩石、[illegible]

を見ないで居る事が出來ぬことからソコデ自然を縮寫して庭園に移し或は之を盆栽盆石として、床の間や机の上や椽側や火鉢の側、甚しきは大工などが其仕事場にさへ盆栽を並べて樂しんで居るやうになつた事だと思はれる。

要するに日本人は何んでもかんでも一切萬有を自然化しないでは夜も日も明けぬ國民である。自然化することが唯一の美化であるかの如くである。

全く世界文明史上に殆んど其類例を見ることさへも出來ない程此の如く、自然を好愛し憧憬し自然と人事とを面白く調和して居るのが東洋特に日本の特色である。喧嘩に花が咲き、火事は江戸の花などはまだしも、甚しきに至つては糞小便に至るまで之を詩材として美化してゐるなどは、古往今來何處へ行ても見られない圖である。

大徳の糞ひりおはす枯野哉　　蕪村

× × ×

西洋に較べて東洋が自然の描寫の大に發達したのは啻に繪畫に於てのみではない。詩や文に於ても亦同様であつた。さうして自然に關する鑑賞が東洋ではヅツト西洋に先だつて開けて居る。愛好するが故に早くその道が開け、その道が早く開けたが爲めに發達したといふ事が出來るのであらう

支那に於ては山水文學は魏晉六朝の頃から始まつて、晉末宋初（西暦四二〇年頃）には山水田園の風景を寫す詩文が大に發達した。其代表作者とも云ふべきものが謝靈運（康樂）（西暦三五八年—四三三年）である。康樂は陶淵明や、顔延之、鮑照等と相頡頏する作家である。而して其尤も有名なのが「山居賦」である。賦の初めに山居の大體の形勢を叙して

『其居や湖を左にし江を右にし、往には渚あり還には汀あり。山に面し阜を背にし、東は阻り西は傾き、抱含し吸吐し、欵跨し紆縈す。』

と云ひ、偖て本文に入て

『竹は浦に緣て以て綠を被ひ、石は澗を照して而して紅に映す。月は山に隱れて而して陰を成し、木は柯を鳴らして以て風を起こす。』

と云ひ、特に其南北兩居を寫した處などは一段の生彩あるを覺えるが、長いから略することにする（文學博士鈴木虎雄君著　支那文學研究參照）

謝康樂と同時代の人に陶淵明がある。この人は田園詩人として支那に於ける第一人者を以て目せらるゝ人である。その『田園の居に歸る』と云ふ詩は我國の人口にも膾炙して居る程の名吟である。

「少より適俗の韻無く
性もと丘山を愛す
誤て塵網の中に落ちて
一去す三十年
（中略）
曖々たり遠人の村
依々たり墟里の煙
狗は深巷の中に吠え
雞は桑樹の顚に鳴く
戸庭に塵雜なく
虛室に餘閑あり
久しく樊籠の裡にありしが
復た自然に反るを得たり」

この結句の『復た自然に反るを得たり』が非常に面白く感ぜられる。此の詩は淵明が東晉の義熙元年秋、彭澤の令となり其の冬、綬を解きて職を去る。時に四十一歲なり。とあるから西暦四百〇五年の作である。

然るに西洋に於ける自然研究の先驅者なるジャン・ジャック・ルウソーが始めて『自然に歸れ』を說き出して各種の著述を爲し、當時あの皮肉屋の親玉ヴォルテールをして、ルウソーの書いたものを讀むと四ツん這ひになつて歩いて見たくなる、と言はしめたのはルウソーが三十八歲以後即ち西暦一千七百五十年後の事である。

此の如く西洋では『自然歸還說』が一千七百五十年に始めて說き出され、茲に始めて自然に對する西洋人の目が覺めかかつて來たのである。然るに東洋では既に西暦四〇五年に於て陶淵明が『自然に反る』を詠じて居る處を見ると、自然鑑賞の目の覺め方に就ては我々東洋人は西洋人に先だつこと實に少くとも一千三百四十五年の先達者であるのだ。

東洋人は斯くも遠く西暦四〇五年頃既に自然を好愛し充分に之を鑑賞した。隨て其觀察も精到で且つ其文藻の秀麗なること、當時の西洋人などの夢想だも及ばぬ處である。

段々進んで唐代に至つては、古今の大家王摩詰が出て山水畫の妙致を發揮し山水訣や山水論を著はし、更に進んで宋に至り山水畫は愈々妙境に進んだ。郭熙の山水訓などを讀むと當時の山水畫の風尚が窺はれるから其大要を摘錄して見やう。

『君子の夫の山水を愛する所以のもの、其の旨いづくに在りや。丘園に素を養ふは其の常なる處なり。泉石に嘯傲するは常に樂しむ所なり。漁樵と隱逸とは常に適する所なり。猿鶴の飛鳴は常に親る所なり。塵囂と韁鎖とはこれ人情の

常に厭ふ所なり。煙霞と仙聖とはこれ人情の常に願ふて而かも見るを得ざる所なり。（中略）然れば則ち林泉の志と煙霞の侶とは夢寐に在ても耳目には斷絶す。今、妙手を得て鬱然として之を出せば、堂筵を下らず坐ながらにして泉壑を窮はめ、猿聲鳥啼依約として耳に在り。山光水色滉漾として目を奪ふ。これ豈に人意に快ならずや。實に我が心を獲たり。これ世の夫の畫山を貴ぶの本意なり。此れをこれ主とせずして輕心に之に臨む豈に神觀を蕪雜にし清風を溷濁せざらんや。』

繪畫計りでなく詩文の方に於ても唐の詩人には李、杜、王、孟、韋、柳、元、白。文には韓、柳の名家あり。偖て宋に至れば蘇東坡、王安石、陸放翁、黄庭堅等の諸大家が輩出して金玉の雄篇大作を出し、随て其中の山水詩の妙なるものは枚擧に遑ない程である。

唐時代の士大夫等の山水憧憬の情緒の如何計り强烈であつたかは、柳宗元が『始めて西山を得て宴游するの記』の中に『心凝し形釋け萬化と冥合す』、西人の所謂"La Communion avec la Nature"と云ふが如き、崇高玄妙なる境地に迄達したのである。思ふに自然に對するこの熱烈なる憧憬は柳々州一人のみではなく、當時文人畫家一般の齊しく抱懷して居た處であると思はれる。

芭蕉も吉野紀行の始めに下の如く云ふて居る。

『造化にしたがひて四時友をとす。見る處花にあらずと云ふ事なし。思ふ處月にあらずと云ふ事なし（中略）造化にしたがひ、造化にかへれとなり。』

これは芭蕉が四十四歳（貞享四年）の手記である。即ち西暦一千六百八十七年である。芭蕉にしてみてもルウソーに先つこと六十三年前に自然歸還を唱へて造化に返れと云ふて居るのである。

身も世も忘れる程の意氣込みと情熱とを注ぐのだから、其描いた畫や作つた詩が絶妙の域に達したのも無理からぬ次第である。例へば、

李白の『余に問ふ何事ぞ碧山に棲むかと
笑て答へず心自ら閑なり
桃花流水杳然として去り
別に天地の人間に非るあり』

賈島の『松下童子に問へば
言ふ師は藥を採り去ると
只だ此の山中に在り

[illegible]くして處を知らす

王維の「空山人を見す
　但だ人語の響を聞く
　返景深林に入りて
　復た靑苔の上を照らす

此の如く自然を好愛し之れに憧憬するの極、心凝し形釋け萬化と冥合する程になつて、其極端に達しては遂に泉石膏肓、煙霞痼疾となつて仕舞へば、丸で仙人と云ふ格である。偖てかうなると自から一方に於ては役人になつたり、商賣したりすることが嫌になるのみならず、凡て人間を忌避して所謂ミザントロープな獸人となつて仕舞ふ、

王維の「科頭箕踞す長松の下
　白眼して見る、他の世上の人

西行の「山里にこはまた誰をよぶこどり
　ひとりすまんとおもひしものを

去來の「知る人に逢はじ／＼と花見かな

蕪村の「なか／＼にひとりあわれす月を友

成る丈け人間を遠ざからんことを努めて居る。お互に書簡の往復の嫌ひなもの、外交官の無愛嬌で佛頂面なのも、夜會や倶樂部の西洋のやうに發達しないのも、又交際や會話の下手なのも、歸する處人間を忌み人間を嫌ひ出來る丈け人間に遠ざかりたい、何とか口實を見付けて人に會はない樣にしたいと努める。此の調子で學者や文人墨客は益々孤獨寂寞な世界を愛して獨善、靜觀を樂しむと云ふ案配である。それを又た世間では風流人だ高士だと賞めそやす。支那の詩や日本の和歌俳句に此の境涯を吟詠したものは實に數へ切れぬ程多い。寧ろ一種のマネリズムを生じたと思へるばかりである。

我々が東洋の山水畫又は田園詩の傑出したものに接すると、全く浮世離れがした樣な感じになるのは蓋しこれから來て居るのである。畫を描いた人も詩を作つた人も、又之を視、之を讀む人も、皆同じく自然好愛者だからなのである。

處が西洋のものとなると山水畫でも、花鳥畫でも又花や月を吟詠した詩歌などでも決して人間の臭味を脫却したものは無い。若しあつた處が所謂絕てなくして稀にあるものと云ふても

よい位である。

この人間離れをして自然と同化する程自然を好愛することと、どうしても人間の臭味を脱することの出來ぬ處と。ここに東洋と西洋との趣味上の大溝渠が横たはつて居るのだと予は思ふ。

× × ×

元來西洋の今日の文明の基礎を爲した「ルネッサンス」文明は「人」を基礎とした文明であつて、數百年以來文學にしろ美術にしろ其他百般の文物の研究が凡て「人」を中心として研究もて來つたものであるから、彼等の頭腦には「人間」と云ふものが到底拔く可からざる程深くしみ込んで居る。人生と云ふものは面白いもの、社交と云ふものは愉快なもの、一日も他人の顏を見なくては生きて居られぬと云ふ風になつて來たので、巴里のカツフエの賑ふのも、グラン、オペラの繁昌するのも、夜會や倶樂部が盛に利用せらるるのも、畢竟彼等が單に珈琲を飲み、オペラを觀、舞踊し會話せんが爲めのみに非ずして、已を見せ而して人を見んが爲めなのである。詩人ボードレイルが其感想錄中に『芝居を見るにしても、舞踊會を樂しむにしても各自は其處に居る總ての人から快樂を受けるのである』と云ひ又『群衆の中に在るの快さは數の增大を喜ぶ神祕な感情である』と云ふたのは、端的に彼等西洋人の感情を言現はした言葉である。東洋人がその趣味として孤獨閑寂を愛し成る可く人を避けんとするに反して、西洋人は一刻でも人と離れぬ樣に努力する。彼等に交際術の發達したのも會話の巧みなのも其根本は蓋し玆處から出て來て居るのである。

東洋では昔から餘り饒舌る事を賞めては居ない。孔子も巧言令色鮮矣仁との玉ひ、支那でも日本でも偉らい人の形容詞などに沈毅寡默とある。希臘羅馬などでは盛んに雄辯術が研究せられてデモステーヌの如きは非常の尊敬を受けて受るが東洋では蘇秦張儀を說客などと、輕蔑して居る。司馬溫公が修德の要を問はれた時に『先づ妄語せざるより始むべし』と答へて居る。

ナポレオン時代に佛蘭第一の女流と云はれたマダーム・ド・スタエルの書いた書物の中に斯ふ云ふ事が出て居る『佛蘭革命の時、多くの人々は亞米利加へ逃げて行て其處で土地を開墾して殖民地を作ることにした。處でこれ等の人々は時々開墾地の業務を拋棄して皆な都市へ出掛ける事がある。而して其都市と云ふのが彼等の住處から佛國里程の六百里を隔てて居る「ニユー・オルレアン」迄遙々出掛けたのであつた』と。更にド・スタエル夫人が附け加へて最も注意すべき事を言つてゐる『佛蘭西人

は如何なる階級に屬する人でも話し合ふことの必要を持つて居るので、話をしなくては生きて居られないのである。談話は他國に於ては思想、感情、又は用務を通信する方法であるが、佛國では談話は啻だに夫ればかりの爲めのみではない。佛蘭西人に取りては談話は精神を鼓舞する一の道具なのである。恰も或る國民には元氣を付ける爲めに音樂が必要であり、又他の國民には酒精が必要であるやうに』と。

斯の如く西洋人は人間が好きで、人生趣味に飽和されて居るから「人」とか「人生」とか云ふ方面の研究は繪畫でも文學でも我々東洋人の及ばぬ程精妙の境地に達して居る。であるから繪畫の有名な作品は宗教畫を除くの外、大概は「人」とか「人生」とか云ふものなのである。古い處では、チチヤン、チントレツト、ヴエロネース、ダヴヰンチー、又はラフアエル、アンドレ・デルサルトーでも西班牙派のヴエラスケス、ムリヨー、又たフラマン派のレンブラン、リユベンス等でも皆人物描きである。近代のブーゼン、ワツトー、ゲンスボロー、ドラクロワなぞもこれ亦同じく人物畫家である。

歐羅巴の博物館へ行て見て山水畫の非常に少いのには、我々東洋人に取つては最初は奇異な感じがする程である。アムステルダムの博物館で Van Ruisdael(ファン ルースダェル)(一六八二年に沒す)の描いた風車の繪を見たのが予が最初で風景畫を見た第一の機會であつたので、其繪は今でもまだ記憶に殘つて居る樣な次第である。其の後この同じ人の風景畫をルーブルでもドレスデンでも見たが仲々巧みなもので近代のコロを除くの外は他の追隨を許さぬ程だと云ふ評判であるが、我々が見ては何かしらまだ物足らぬ樣な氣がする。其他 Claude Lorrain(クロード ローレン)(一六〇〇—一六八二)及び Hobbema(ホッブマ) が風景畫家として知られて居る位のもので誠に僅かなものである。

且又風景畫と云ふても十八世紀の畫家等は自然の廣大なる風景よりも寧ろ田園の蕭散な風景を好んで描いて居た。自然歸還說の先達ルウソーやベルナルデン・ド・センピエールの說は、當時の藝術の上にはまだ何等の影響をも及ぼさなかつた。實際佛蘭西で自然畫を描き始めるやうになつたのは、一千八百二十五六年頃(王朝復興期)のサロンの展覽會に英國人 Bonington(ボニングトン)と Constable(コンステーブル) の二人の畫家が其作品を陳列したのが導火となつて以來、始めて佛國の畫家達が自然即ち林とか沼澤だとか岩石などを描くやうになつたので、それより以前は「自然」などと云ふことは佛國畫家等の全く知らなかつた天地であつた。其後コロやミレーなどが出て山水畫も田園畫も益々發達して來たのではあるが、要するに最も近代のことに屬するのである。

ジャン・ジャック・ルウソーの自然歸還說は一千七百五十年以後に唱導されたものであることは既に陳べたが、これが動機になつて「自然」の研究などと云ひ出したのだから、それが文學の上に現はれたのも改めて說くまでもなく極めて近代のことで、ルウソーやベルナルデン・ド・センピエール等が其の先導となつて漸く始り、其後ローマンチシズムのシヤトーブリヤンだのユーゴーなどを經て今日に至つたのである。それは佛蘭西の文藝界の事ではあるが、他の歐洲諸國も亦た大同小異と云ふても大なる間違は無いと思ふ。年月も極めて淺く隨て自然の研究に關しては東洋程行き屆いて居ないし、第一自然を好愛する趣味は我々から見ると彼等には先天的に缺けて居る樣に見る位である。其代り「人」とか「人生」とか云ふものゝ研究になつて來ると、これは又到底東洋人の遠く及ばぬ程の高手である。繪畫にせよ、詩文にせよ人間の喜怒哀樂の入り亂れた所謂人生の渦を描き現はすことになると其深刻精到實に人を感動させる樣な作品がいくらでもある。近頃日本に於ける人物畫を隨分數多く見たが、西洋ものに比べると全くお話にならぬ程で、今後幾年經つたら泰西畫家等と轡を並べて馳驅することが出來るか一寸明言し兼ねる次第である。

文壇方面を見ても最近「人生」の研究描寫が盛んに試みられて居るが、矢張り大陸ものと比較するとその觀察の方法も表現の仕方も全體にまだ幼稚な處があるやうに思はれる。これ等も矢張り好き嫌ひの趣味の影響であるかも知れぬが兎に角人間の研究に就ては西洋の方が一桁上のやうに思はれる樣な氣がする。僻見ではあるが。

× × ×

前に述べ來つた樣に東洋と西洋とは趣味が全く違つて居て東洋は自然憧憬、西洋は人生熱愛と旗色が鮮明に分かれて居る。其影響か知らぬが誠に面白い事には東洋は人間や人生の出來事を形容して之を自然化し、西洋は自然の現象を形容して之を人間化することである。實に面白い對照である。

例へば支那では、美人を形容するに

芙蓉の面色柳眉長く
滿面の春風頻りに笑を帶ぶ

とか又は

兩臉の天桃は鏡に從て發け
一眸の春水は人を照して寒し

と云ふが如く、芙蓉、柳、桃、春風、春水と自然の物象を持て來て形容する。

日本でも亦たこれと同じく義太夫の逆櫓阿古屋の形容でも『形は窶に氣は萎れ、筒に挿したる牡丹花の水上げ衰る風情なり』と云ひ又

『花の盛りの敦盛を討て無常を悟りしか』其他『胸は八千代の玉椿ちりてはかなき心根を』と云ふが如き此の種の形容は實に例示の煩に堪へない程多い。

その他漢楚軍談や三國志などには兩將相撃つ様を形容して龍騰虎搏などと云うて、虎や龍を持ち出して之を形容して居る。

最も一目瞭然一層面白い對照だと思はれる一例を擧げて見ると、佛蘭西近代詩の開祖の一人と云はるゝヴェルレーヌの秋の歌に

『秋の
ヴィオロンの
節ながき啜泣は
わが魂を
痛ましむ』

とあるに對して白樂天は其の有名な琵琶行の中に

『間關たる鶯語は花底に滑かに
幽咽たる泉流は水、灘を下る』

と歌て居る事である。

西洋風ではバイオリンの啜り泣きで秋風の哀音を人事化して居るのに、東洋流では琵琶の音色の和かさを間關たる鶯語の滑かさに比し、其幽咽をば水聲のかすかにむせぶに喩へて自然化して居ることに注目したいのである。

この一例でもわかるごとく西洋は東洋とは飽くまで反對で、自然の物象や自然の出來事を形容するのに「人」又は「人事」に用ゆべき言葉を以てするのである。枯葉の事を「死したる葉」と云ひ、泉が囁くと云ひ、風が溜息すると云ふが如きは普通である。又は「感動する小枝」「戰慄する木の葉」と云ふが如き、或は「林が海の如く悲嘆する」及び星が戰慄したなどと云ふて居る。

更に實例を擧げて見ると其ケジメが一層鮮明してベルレーヌと白樂天との修辭の相違が偶然でなかつたことを知るであらう。アルベール、サマンはかの有名なるパビロン懷古の詩に於て

死　市

果しなき沙原の奥にかくれて荒涼と
塔も砦もあらゆるそのかみの市は

散らばれる大理石の白き經帷子の陰に
過ぎし日のバビロンの最後の安息を眠るかな

と歌ひ出して居る。これを許渾の金陵懐古にくらべて見ると

金陵

玉樹の歌は殘つて王氣終り
景陽に兵は合して戍樓空し
楸梧は遠近に千官の塚
禾黍は高低す六代の宮
石燕は雲を拂ふ晴亦た雨
江豚は浪を吹く夜還た風
英雄一たび去て豪華盡き
惟た青山の洛中に似たるあり

と詠じて居る。

見較べてると面白いではないか。後者は自然の景物から懐古の情を遣り、前者は人事の「白き經帷子の陰や」「安息の眠り」を持ち出して其の情を盛り上げて居るのである。

× × ×

斯様に西洋の詩は自然をも人事化して表現するのであるから、東洋の詩と西洋の詩とは同じ材題でも其歌つて居る處の内容が自ら全く違ふのである。人口に膾炙して居るシャルル・ボードレールの信天翁の詩丼にその猫の詩の如きは其好例である。

信天翁

航海の無聊を慰めんとて船人達は
海に群れ住む信天翁を屢々生捕ることあり
旅の好侶伴なるこの鳥は
汐路遙かにすべり行く船に從ひ飛び集ふ

さて甲板に置かるれば
この蒼空の帝王も、足どりふらゝ拙なくて
眞白き大なる双翼は
櫂の如くに兩脚に垂るゝ姿のだらしなき

昨日の美容どこへやら今のだわけて醜くさよ
いたづら者は烟管もてその嘴をたゝくもあり
又其島の足つきの跛をまねて嘲笑ふ

曾ては暴風雨を嗤ひ獵夫の弓を嘲けりし
雲上の王のこの姿、世の詩人によく似たり
一度俗界に謫されて群衆喧囂の中にては
大なる双の翼さへ手足纒ひとなるばかり

猫、

美しき猫よ、私の戀の心臟の上へ來て
お前の足の爪を引きこめて
金屬と瑪瑙との混つたお前の美しい眼の中に
私を沈溺させておくれ

私の指がゆつくりとお前の頭と
お前の自在な背部を愛撫する時と
私の手が電氣のやうなお前の軀に觸れて
其の快さに醉ふ時に

私は妻の事が思ひ出されてあり〳〵と目に見える。彼女の
眼差は
愛らしいお前の眼なざしの樣に
奧深く冷やかに投槍のやうに人を切り人を刺し

さうして頭から足の先まで
微妙な空氣、危險な香が
彼女の褐色の軀の周圍に漂ふ

其他シュリー・プリュドンムの燕の詩、又はアンドレ・トウリエの雲雀の詩などでも皆人事と比較して居る。勿論何等の寄託のない純詠物の詩も少なくない。例へばユーゴーの牝牛の詩、ルコント・ド・リールの牡牛の詩及び象群の詩の如きが其一例である。がそれにしても東洋とは目の着け處が違ふのが矢張り趣味の違ふ處を隱すことが出來ない。ユーゴーの牝牛の詩にしても、牝牛が寢ころんで大きな乳房から仔牛共に乳をやつて居る處を詠じて居るし、ルコント・ド・リールの牡牛の詩も亦起句からして『これはゆつたりとして力ある牧場が原の王である』と歌ひ出し其の角や其咽喉の下にぶら下がつて居る袋の樣な皮や口邊の泡や恐ろしさうな目などを叙し來り『正午に

なると柳の樹の蔭に寢ころんで其目を半ば閉ざして靜かに反芻して居る』と結んで居る。象の詩でも象群の沙漠の旅を寫して居るのである。詠物ではあるが、それにしても東洋の詠物の詩とは似て非なるものであつて、西洋の詩はどうしても人生に似た或るものが目に浮かんで來る。之に反して東洋の詩は自然の景物そのままが心にしみる樣な感じがする。

放　牛　歌　　　唐　陸　龜　蒙

江草秋窮まつて秋半ばに似たり
十角の吳牛を江岸に放つ
肩を隣ね尾を抵て乍ち依偎し
橫さまに去り斜に奔て忽ち分散す
荒陂斷塹に端なく入り
背上時に孤鳥立つ
日暮れ相將て雨を帶て歸る
田家の煙火微茫として濕ふ

鷓鴣　　　唐　鄭　谷

暖かに煙蕪に戯れて錦翼齊し
品流は應さに山雞に近くことを得
雨昏うして青草湖邊を過ぎ
花落ちて黄陵廟裏に啼く
遊子乍ち聞て征袖濕ひ
佳人纔に唱て翠眉低し
相呼び相喚んで湘江闊く
苦竹の叢は深くして春日西す

東洋の詩は讀んで居て靜かな樣な氣がするが、西洋の詩は何となく騷がしい樣に感ずる者は予ひとりであらうか。

×　×　×　×

思ふに東洋は夙に「自然」に目覺めて之を鑑賞し好愛し憧憬するの極遂に之に同化するに至つた。其の結果かどうかは知らぬが東洋人は概して靜きを好む。之に反して西洋は「人生」の活動が好きで一日でも動いて居らねば生きて居る樣な氣がしないと云ふ塩梅である。約言すれば東洋は「靜」が其の趣味に叶ひ、西洋は「動」が其の生活の目的であるかの如く見える。

例へば日本人は人の住宅などを賞めるにしても「お靜かな好

い處で」と云ひ、下宿屋の招牌にも賣家賣地の廣告にも土地高燥、眺望絶佳、閑靜な處と云ふ。西洋では正反對に四通八達の便利な場處だとか賑やかな好い處だと云ふのが賣家の廣告にも貸家の招牌にも書いてある。又婦人や令孃の事を賞めるにしても日本では「靜かな好い方で」などと云ひ支那でも昔から靜淑とか靜好とかと女を賞める熟語は一定して居る程である。然るに西洋では「活溌で賑やかなお方」と云ふのが通常の賞め言葉になつて居て、東洋風の無口な、靜かなのは評判が餘り好くない。又繪畫などを賞める時でも西洋人は『丸で生きて居る樣だ』と云ふたり又は『この畫には「ライフ」がある』などと云ふことは屢々聞かされる言葉である。兎に角西洋人には動いて活動して居ないものは何でも氣に入らぬのである。これも慥に東西趣味を異にする點の一つだと思ふ。

動と靜とに就て思ひ出した事がある。アナトール・フランスが其の「文藝雜纂」の中に佛教批評を載せて居るが、これなどは最も簡明直截に東洋人と西洋人との性向の差異を言ひ現はしたものの樣に思はれるから、左に其大體を述べて見よう。

文の始めに先づ釋迦の小傳を掲げ、次に其教訓に入りて、五慾を去り七情を閉ざし傲慢なること勿れ、怨恨を懷くこと勿れ、僞善なること勿れ、柔和忍辱を主として寛大な[illegible]を[illegible]ひ、且つ常に他人が己れに加へんことを望むことを他人に施こし如何なるものに對しても惡を爲すこと勿れ、而して要は一切の希望を斷絶し以て解脱の境に入ることが佛教の主眼なりと述べ、偖て之を評してフランスは云ふ、

『嗚呼若し釋迦牟尼が眞に此世に存在したものならば(予は存在したものと信ず)彼は人間の中で最も善きものであつた(マルコ・ポロが彼の歴史を聞いて叫んだ如く「彼は誠に聖者であつた」)然り彼は聖人であり賢者であつた。併し彼の教訓は、生の所有に強烈な執着を持つて居て且つ活動の好きな歐羅巴人の爲めに作られたものでは無い。衆生濟度の爲めに彼が此の世に齎らした妙藥は歐羅巴人の性分に合はぬ。彼は遁世を勸めるのに、我々は活動して出世することを欲する。彼は一切の希望を拋棄せよと教ゆる。然るに希望は我々に在りては生命よりも尚ほ強いものである。最後に難業苦行の報酬として彼は我々に約束するに涅槃に到着し得ることを以てするのである。而して涅槃とは絶對の休息であると云ふ。嗚呼これ何事ぞ。絶對の休息と云ふことは我々には一寸それを考へる丈けでも戰慄とする程恐ろしい嫌な感じがするものである。畢竟するに釋迦牟尼は我々歐羅巴人の爲めに此の世へ來たのではない。彼の教訓を以てしては我々歐洲人を救ふことは出來ぬであらう』と。

これ等の言葉の佛教に對する批評としての當否は別問題であるから技處に彼れ是れ云ふ必要は無いが、兎に角、坐禪だとか靜寂だとか涅槃と云ふ樣な靜かなことは歐洲人の性分に合はぬものだと云ふことの明確な告白である。

これも亦或は「自然」が好きな東洋と「人性」が好きな西洋との必然の傾向かも知れぬ。特にアナトール・フランスは佛國近代第一流の哲學者、文學者として目せらるゝ人であり、且つ他の文學者などに比すれば寧ろ「靜」を好む人の側に屬するのであるに、而かも此の人にして尚ほ此の言を爲すより見れば東西性向の相異なる如何ともすべからざるものがあるのを感ずる。

× × ×

上に述べたやうに西洋人特に佛蘭西人が「自然」に目覺めて來たのは漸くルウツー以後のことであるが、偖てどうしてさうなつたのかと云ふ說明を試みたものもある。『十九世紀に於ける佛國の文運』の著者 Georges Pellissier 氏の說に從へば、——ローマンチシズム時代の人が自然を好愛するやうになつて來たのは、人間の哀愁から逃げ出て、自然の懷へ飛び込むことで人生の憂苦を忘れんとしたのに因る。ローマンチシズム以前のクラシツクの詩文には耶蘇教の感化が殆んど及ぼして居ないので否快活なものであつた。然るにシヤトウブリヤンが Genie de Christianisme（基督教の精華）を出して宗教感情を盛んに宣傳したので當時の若い詩人達は一人として其の感化を蒙らない者は無かつた。ビクトル・ユーゴーはローマンチシズム派の中で尤も健全な思想の持主であつたが、そのユーゴーですら『宗教は啻に詩のインスピラションに於ける最深な源泉であるのみならず、人類思索の最高形式である』と思つて居た。彼れの「オード」が全く「カトリツク」精神から浸漸されて居るのも蓋しこれが爲めである。それであるから彼の詩の奥底には人生のはかなさや、其の脆く哀れなものだと云ふ感情が流れて居る。其他ラマルチーヌ、ヴヰニー、ミユツセ等孰れも皆同じくメランコリツクな悲觀的な、憂愁、失望、悲哀の情のみ吟詠して當時の詩人等の心胸は全く愁雲悲雨の中に鎖じこめられて仕舞つたのであつた。

此の如く詩人達が厭世、落膽、悲哀に包まれて、約言すれば人間が嫌になつた時に彼等は一條の血路を「自然」の裡に見出し茲に始めて山だの川だの林泉などと云ふものゝ趣味を喚起して來たのである——とかういふのがペリシエ氏の說の大意である。

しかし人間の愁苦悲哀を忘るゝが爲めに「自然」の懷裡に逃げ込んだのだと云ふ此の說は、佛蘭西には當てはまるかも知ら

ぬが、東洋人が自然を好愛する所以の說明として果して能く當てはまるかどうかを予は疑ふ。

　別に又ルミー・ド・グールモンはペリシエ氏とは全く異つた方面から觀察して說を立てゝ居る。グールモン氏は云ふ『自然物に對する無感覺は文明建設の途中に於てのみ出逢すことである。文明の爲めの大障礙、大敵は自然それ自身であるから。詳しく言へば崇山峻嶺深林大澤は之を切り拔いたり埋めたり開拓した上でなければ文明の域に達する事が出來ぬ。此場合に在りては人は自然から苦しめられつゝあるのだから、自然を愛するの自然を樂しむのと云ふ感情は起り得べくもない。併し「自然」則ち其の居る處の土地に何等の利害關係を持たぬ通り一遍の旅行者例へば Humboldt（獨逸の有名なる博物學者、熱帶地旅行記の著者一七六九年—一八五九年）の如きはアマゾンの大深林の鬱蒼幽邃を心から鑑賞して居るが、之に反して每年その土地の一角を開墾してそこで生活を營なまなければならぬ殖民等は、鬱蒼幽邃なアマゾン地方よりも平原續きで何の奇景や風情もない佛蘭西の麥の産地ボース附近にこの殖民地があつたならば如何に幸福ならんと云ふて居るのである。して見れば「自然」を好愛する趣味は人が文明の域に達した時でなくては發達するものでない。言ひ換へて見れば人が地上を征服し又は征服したと信じた時から始めて發達するものである』と。

　併しこの說も亦東洋に於て古代から自然を好愛する趣味の發達して居た所以の說明には當てはまらぬと予には思はれる。如何となれば我々東洋人は西洋人の如く自然を征服するの何のと云ふタイソレた考を持たずに、自然を有りの儘に好愛することが出來るのであるから。現に日本や支那の山間幽谷の孤村に住んで居る者等は、其山や谷を文明の障礙物とも大敵とも思ふては居ないのみならず却て、其の孤峯や疊嶺や斷岸絕壁やを奇勝絕景として寧ろ鑑賞して居るではないか。東洋人は自然の美を其儘に直感することが出來るのである。其間に別に小むづかしい言說を要しないのである。それ程迄に自然に對して敏感である。以前箱根にまだ鐵道の通ぜざりし頃、外國人等は皆馬背や輿籠で箱根を越したものであるが、箱根山腹の絕景の處に到ると、輿夫馬丁等は突然步を止めてお客の外國人を顧みて『どうです、好い景色ではありませんか、マー御覽なさい』と云ふてお客の命令でも注文でもないのに止つて仕舞ふ。而して其時の輿夫馬丁の容子がお客に雇はれた輿夫馬丁であり、今、山上の輿籠を舁きつゝ苦んで居る者であることは全く忘れ切つて只だ、眼前の風景に身も心も吸ひ込まれた容子なのは、常に外國人等の驚異を惹いたものだと云ふ。この事は屢々聞きもしたり又外國人の書いた日本紀行などで讀んだ覺もある處である。而してこの自然好愛の趣味は、老若男女貴賤貧富の差別なく、日本人の皆ンなが持つて生れた直覺の如く思はれる。

　然るに西洋人には自然を其儘に直感することが出來ぬものと見えて、之を人事化し、物質化し、一々それを理屈で捏ねたり、分析したり、解剖したり、さて後に漸く其美を認めんとす

るのである。であるから自然の中の最も美なる部分は辨別され雲散霧飛して仕舞ふのである。老子が車を數ふるを致して車なしと云つたと同じ事で、これが輪であるの、これが輻であるの、これが車箱であるのと一々數へ立てて見たならば終に車と云ふものは無くなつて仕舞ふと同じことである。

莊子にも亦面白い事が云はれて居る『南海の帝を儵と云ひ、北海の帝を忽と云ひ、中央の帝を渾沌と云ふ。儵と忽とたまたま渾沌の地に於て相ひ遇へり。渾沌之を待つこと甚だ厚かりしかば儵と忽と相與に渾沌の德に報ひんことを謀りて曰く、人は皆耳目鼻口の七竅ありて以て或は視、或は聽き、或は食ひ或は息す。然るに渾沌のみ獨り此の七竅あることなし。試みに之を鑿りて以て其德に報ひんと。乃ち毎日一竅を鑿り、七日にして七竅備はるに至りて渾沌死す』と。

西洋人の自然に對する仕方は正に莊子の所謂七竅を鑿り終つて渾沌死すであつて、自然の渾沌を殺して仕舞ふのである。死んだ自然から美を感ぜんとする嗚呼亦た難い哉！

之を人事に飜譯して而して後にその美を感ずるのであるから、西洋人等の自然に對する美感は、東洋人の如く强烈であり得やうが無い道理である。其感じは間接であり所謂隔靴搔痒の感じにさへ過ぎぬので、自から之に對する趣味感興の痛切なものに觸れないと云ふ譯だらうと思はれる。

要するに趣味好惡の問題であるから、彼れ是れ議論すべき筈のものではないが、凡て東洋の所謂、雅致、雅趣、風流などと云ふ情致は西洋人にはまだ容易に解かる事の出來ぬものと思はれる。されば西洋人等は何時になつたら

林逋　韋應物

疎影横斜水淸淺、　暗香浮動月黃昏
怪來詩思淸二入骨一　門對二寒流一雪滿山

の淸興や將又、灞橋風雪の中、驢に乘りて詩を尋ぬる孟浩然の雅懷や、又は

（蕪村の　いさ雪見容す（かたちつくり）蓑と笠
尙白の　よろ〳〵と撫子殘る枯野哉

の眞趣を味ひ得るに到るか、實に一大疑問である。

そんな事を思ふと英國詩人キプリングが其名高き東西の歌 The Ballad of East and West に於て

Oh East is East, and West is West, and never the Twain
Shald meet,
Till Earath and sky stand presently at Gods great
judgement seat.

『東は東、西は西
天地今の如くある限り
此の双兒は斷じて合はじ
神の偉大なる審判の日まで』

と歌つて居るのもまんざら詩人の空談義（ぎ）計りでもない樣な氣がする。

想華

魂祭

近松秋江

今年のうら盆は、私の故郷では、亡き母の新盆である。

母のことを思ふと、あの人はもう現世に生存らへてゐるよりも佛になつた方が一入ふさはしく且つ懐しい人のやうな氣がする。

それでも、思へば、案外長壽を保つた人であつた。母には、たしか、自分とも五人の同胞があつた筈だ。そのことは、私も時々母から聞かされてゐた。そして五人の中で母が末子であつた。三人の姉と一人の兄とがあつた。その一人の兄は、たしか母のすぐ上で、同じ村で實家を相續してゐた農家であつた。その伯父は私も知つてゐたが、たしか三十幾年か昔に亡き數に入つた。三人の姉のうち一番上の伯母（私にとつて）が最も長命で、これは八十歳まで存へて、今から二十年ほど前に死んだ。一里ばかり離れた隣郡に嫁してゐたのであつたが、私の幼時に——今から四十年ばかり前——私の家に長く逗留して洗濯物の仕立て替へなどを引受けてしてゐたことを記憶してゐる。その伯母に、私の母

が、だん〳〵年を取るに從つて似て來るやうであつた。それは、優しい、靜かな伯母さんであつた。今、あんな伯母さんが此の世に居つたら、一も二もなく連れて來て私の家で老後を見てやりたいやうな氣がする。

母は生前屢々、一番上の姉が八十まで生きたから、私も八十までは生きられるかも知れぬといつてゐたが、遂に八十を越すこと尙ほ五歳にして、今年の四月七日の朝安らかに大往生を遂げたのであつた。

母の二人の姉も、他に嫁したが、いづれも若くして死んだらしい。

母は今春八十五歳で死ぬ十一年前の七十三歳の春突然中風症に罹り、その時もう死ぬかと思つたが、それから後、半身は不自由であつたが、間もなく回復して、もとのとほりの健康な身體になつた。それでも一旦蟲の入つた身體となつたので、先きもさう永くはないかと思つてゐたが、たうとう又十一年も生ひのびたのであつた。その間にも、もう今度こそ駄目だらうといふやうなことが幾度もあつて、そのたび毎に私は急遽として歸省したのであつたが、結局今度が最後になつた。私達は皆なで、いつてゐた。

同じ死ぬなら、どうか、農家の閑な時に死んでもらひたい。又夏の暑い盛りとか、冬の寒い最中に死ぬやうなことがあつては傍迷惑だから、なるべく櫻の花の咲く季節に死んでもらひたい。それが何となく、八十以上までも長壽した人の最後を見送るにふさはしい。

西行法師の、

　　ねがはくは花の下にて我れ死なんこのきさらぎの望月のころ

わが母も花の咲く頃に死なしたいと思つてゐたところ、その念願が叶つて、四月の七日にみまかつた。四月の八日は

卯月八日と申して恰も灌佛會の日である。母はその前の日に死んだ。

私は、父母ともに死に目には會はなかつた。母は生前、いつであつたか、もう三十年も昔にならう。近い處に住んでゐる、ある卑しい身分の、卜者に易を見てもらつたところ、私のことを卜つて、この人は、不思議に親兄弟の縁の薄い人ですといつたといふのを、時々繰返していつてゐた。母の心には、二百里も離れてゐる東京の方に行つてゐるのが、その實證であつたらしい。三十二年前父の死んだ年に、私ははじめて東京に來たので、その時も電報に接して歸國してみると、父は夙に死んでゐた。

今度の母の死もそのとほりであつた。最近十年間今にも死ぬやうな危篤の報に接して、二百里の長距離を汽車で驅けつけたことも一度や二度でなかつた。後には、さすがに私もやゝ奔命に疲れた體であつた。そして、どうかかうか病勢の衰ふるのを見とゞけて、母の顔に近く口を以て行き、

「おばあさん（私は自分の母であるが、後には他の幼い者の口吻にしたがひ、かく呼んでゐた。）私はもう歸東る。又そのうちに來るけれども、何分遠い處で、私も疲れたから、さう度々見舞はれん。それでも惡ければ何時でも來るぞ。」

と、慰めの言葉を殘して母の許を辭して歸るのであつた。

今年の一月の末極寒の最中になつて又危篤の報知があつた。その時は丁度私自身の子供が二人とも寒さ中りから胃腸を害して、ひどく衰弱してゐた時であつたし、自分も寒氣の爲に弱つてゐたので、今度は死なゝいかぎり急に見舞ひに行くことは出來ないといつてやつた。二月の中旬ごろにでもなつたら行けさうに思へたので、そのことも返事に書いてやつたが、やつぱりその時になつてみると、又いろ〳〵な用事で、とても行かれなかつた。そして、その頃になると、

長い間少しも食物の咽喉へ入らなかつたのが、この頃になつて蜜柑を五つも六つも食べることがある。併し醫者のいふのでは、それは本當に回復したのではないから、決して安心は出來ないといふ知らせがあつた。

とかくして二月も過ぎ、三月になり、既に又春が近づいて來たが、今年は何時までも寒さがとれなかつたり、生活に追はれたりしてゐるので、とても母の見舞ひに出掛ける餘裕はなかつた。もつと、ずつと本當の春にでもなつたら出掛けうと思つてゐた。そして四月の七日の午頃に、熱海にゐて受取つた電報は果して訃音であつた。かねて心に用意してゐたことゝはいひながら、一寸不意を打たれた感であつた。それといふのは、それより十日ばかり前三月の末に郷里の甥から受取つた手紙には、母の病が小康を得て居ることを書いてゐた。夏までは持つであらうといつてゐた。それならば緩々支度をして四月の末にでもなつたら一度見舞ふと思つてゐるところへ突然訃電に接したのであつた。

私はその晩早速熱海から終列車に乘つて國府津に出で、そこから急行列車に乘換へて郷里に向つた。

もう四月の七日といふのに、その日は夕方からかなり強い風が出て、國府津で、十一時に近い夜汽車を待つてゐる間にも顏を向けられぬやうな箱根颪しが、折柄改築中の落着きのない待合所の中に、さら／＼と土沙を捲き上げて吹込んで來た。八十五歳で死んだ人のことであるから、親の死であつても、それほど哀傷を感じないのであるが、それでも、落着きのない風が假設の待合所のガラス戸を搖りはためいたりするのを聞いてゐると、何となく佗しくてならぬ。私は午頃電報を受取つてから、ずつと、家を立ち出るまで、何かと獨りで用意に忙殺されてゐたので、愈々それ等の用事を形付けて此處まで乘り出して來ると、やつと解放されたやうになつたのであるが、又それとゝもに何となく寂しい旅情といふやうなものを覺えて來た。後に殘した子供のことが氣にかゝつて來た。私が家にゐないと、留守の間に如何なる珍事が子供の上に出來するか知れなかつた。彼等の母親は、少しも母親らしい注意が行き屆かなかつた。その意味に於

いて、私は常に後顧の憂に充ちてゐた。

ふと、茶の室の茶簞笥の棚に私が常用するカルモチンの散藥をそのまゝ忘れて來たのを、汽車に乘つてから思ひ出した。子供達は醫者の藥をよく服まされてゐたから大きい方の子供はよく自分で藥を取り出して嘗めたりしてゐた。もしカルモチンにでも手を出したら大變だといふやうなことが胸を突く如く氣に懸つて來た。それで汽車の中でデンポウを認めたりした。

私にも子供が二人も出來てから心に掛ることの中心點は何時も子供の上に集つて來た。子供の出來るまでは老母のことが絕えず氣にかゝつてゐたが、この二三年來中心點の處在が移動したのである。乍併これは止むを得ぬことである。自分の產んだ子供に對しては自分が全力を盡し責任を持たねばならぬ。母を見る者は他にその責任者があるのだ。それに、丁度私に子供が出來る時分から老母の生氣は大半亂れてゐて、眞面目な話は出來なかつた。

今から二十年も三十年も前に私の兄が二人亡くなつた時分には、母は彼等の死を哀悼するだけの氣力と體力とを持つてゐた。二番目の私の兄が四歲になる男の兒を一人遺して二十九で夭逝した時の母の痛哭哀傷は凄じいほどであつた。その後十年ばかりして又第三の兄が三十八歲で海外にいつて死んだ時には母も前から十年老いてゐた。その兄には十二才を頭に三人の男の子が遺つた。母はそれ等の、幼くして父に死なれた孫達に對して强い憐憫を加へた。それ等の孫達は祖母の慈愛を背景として生長したのであつた。俗に親はなくとも子は育つといふ諺のとほり、それから後日は思つたよりも早く立つた。それ等の孫は皆な大人になつた。

去年の春に見舞つた時に私の子供の話が出たけれども老衰した母にはもう、二十年三十年の昔のやうに孫といふものに對して殆ど興味も關心も持つことが出來なかつた。私は自分の子供を、どうしても自分で見なければならないと思つ

た。死んだ二人の兄のやうに、祖母があるからといふ譯にはいかなかつた。それは決して實利的に割り出された考ではなかつたが、自分に萬一のことがあつても、もう兄の死んだ場合のやうに、親の慈愛に代つてくれる祖母の愛に頼ることが不可能であることを思ふと、私は一人五十に近くなつて、はじめて持つた幼い子供のことを一生懸命に考へないでは居れないやうな緊張した氣持ちにならされるのであつた。

春の旅行季節であるので、無論汽車には寢臺車は賣切れてゐた。私は急いで母の死を見舞はなければならぬが、同時にまた、幼い子供達の爲に自分の身をも厭はねばならぬと思つた。これから明日の午後まで寢臺もない汽車に十七八時間も乘り通すことの身體の疲勞を考へると、一年に一度づつしか母を見舞に歸省しなかつたことも、必ずしも老母に對して不孝であつたとは思はれないやうな氣がした。

ともかくも京都まで白切符を買つてゐたので、ずつと後尾の車室に入つて、寢台の代りに、やゝ空席を求め、向うの席と自分の席との中間に大型のトランクを置いて、その上に尻のあたりを載せ、毛布を被いて身を横へ、漸くにして假睡を買ふことを得た。やがて尾濃のあたりで曉霧の中を走つて行く汽車の中で眼を覺まし、窓外の移りゆく景色に、暫く、熱海に居る子供のこと、郷里に死んでゐる母のことなどを忘れて、じつと春の朝の野邊を眺めてゐた。

京都で一時間ばかり下車して急しい用を足し、すぐ又汽車に乘つた。昨夕は函嶺の東はあんなにひどい風が吹荒んでゐたのに引換へ、流石に京阪地方から中國路は氣候が穏和で、殊にその日は今年の春中で一番好い日であつたやうだ。京都からの汽車は普通の汽車であつたので、神戸あたりから段々西に來て、姫路を過ぎる頃から二等車にはわづかに三四人の客しか乘つてゐなかつた。私は靴を脱いでクションの上に長く身を横へながら、無念無想に時を過してゐた。強ゐて母のことを思ふまいとした。親が死んで決して喜ばしいとは思はぬが、どうせ一度は死なねばならぬものならば、

八十五歳の長壽を保ち、そして灌佛會の日に近くみまかつたことを思ふと、好い死に時であつたやうな氣がして、八十五年の長い生涯を卒り、その人の生涯が何となく浄化されたやうにも思はれる。

やがて故郷の家に到着すると、一同たゞ私の歸着を待ちかねてゐた。兄の相續人である私の甥は、彼の二番目の女兒を抱いて、村はづれの田圃の畦に出で立つて、下りの汽車を眺めてゐた。たしかその汽車に私が乘つてゐると思つたのであつた。

私の歸り着くのを待つて、入棺をするところであつた。私は緩々旅の塵を拂つて、やおら亡き母の遺骸を置いた座敷に通り、北を枕に横つてゐる母の枕頭に坐して、心の中に念佛を唱しながら、嫂が向側にゐて、そつと取りのけた白布の下に永久に參つた亡母の面影を眺めた。嫂が、

「おばあさんも今度は小さうなられたぞな」

といつたとほりに、老木の枯るやうになつて死んだ母の面影は、さながら寂滅爲樂の相を具現してゐた。私には、近年の、生きてゐた時分の母の顏を見るよりも亡骸となつた人の面影を見る方が、こちらにとりて安らかなやうな氣がした。

「いゝ往生であつたぞな。」と、甥はいつた。

一月の末に危篤の報があつた時から半月ばかりの間湯も水も咽喉へは入らなかつた。その絶食の期間も縷の如き命を繋いだことを考へると、母の體の諸の機關は餘程完全に出來てゐたものと思はれる。

私は、せめて、その時分に一度來て見てやればよかつたと思つたが、やつぱり自分にも出掛けられない子供達の氣がかりがあつたり、用事に追はれたりしてゐた。

その夜は棺の前に私と、亡き姉には甥になる從兄の倅と二人枕を並べて寢た。從兄の倅は、五六里離れたところの[illegible]、

台宗のある寺の住職をしてゐた。從兄の僧は、その日私と前後して見舞ふた。彼は短冊に

　　梅は散り、さくらは咲いて一人旅西へ行くにはふさはしき頃

といふ一首を書いて持つて來た。

その翌日が野邊送りの日であつた。あんまり前日が好晴であつたので、明日の天氣がどうかと私は一人で氣づかつてゐた。皆なに訊くと、いづれも降りはせぬといつてゐたが、果して當日になると十時頃から、朝のうち晴れてゐた空に雲が出て、段々濕つぽくなつて來た。そして菩提寺の住職が見えて、讀經の初まる時分になると、糠のやうな春雨がしと／＼と降り出して來た。私は棺の方に向いて讀經に耳を澄ますよりも、幾度となく家の中から空を仰いで雨の降る具合を見てゐた。やがて讀經がはてゝいよ／＼出棺間際になると、不思議に、一時は本降りになりかけた春雨が止んでしまつた。そして空の一方には青いところさへ見えた。墓地は宅から三四丁も行かないところにあつた。そして野邊送りの滯りなく濟んだところで又春雨がしとしとと降つて來た。その夜はたうどう本降りになつた。母は後生が好いのだと私は思つた。

三晩泊つて、私は、十一日にはもう京都まで戻つて來た。もつとゆつくとして佛に務めたいと思つたが死んでいつた者よりも生きてゐる者の爲にまだ／＼私は働かねばならぬのであつた。そして、京都に一泊して寢臺のある汽車を待ち合はし、熱海に歸り着いたのは十三日の朝であつた。

私はずつと故鄕に居なくなつてから、やがて三十年に近くなる。勿論今でも一年に一度づゝは歸省するが、幼い時の思ひ出でになる田舍の年中行事には滅多に出會はさない。私の幼い時には盆と正月と氏神樣の祭とが一年の三大物日

であつた。私はそれがいづれも樂みであつたが、何故か、お正月をそれほど樂しいとは思はなかつたのに反して、不思議にお盆が樂しかつた。お祭も樂しかつたが、それでもまだお盆の方が餘計に〳〵樂しかつた。なぜかお盆といふことに對して懷しみが深かつた。大抵の場合子供は正月を悅ぶものであるが、私にも正月がいやではなかつたが、あんまり懷しいとも思はなかつた。

田舍の農家のことであるから、麥や黍があるので、正月にはお飾りを自家でこしらへる。そのお飾をこしらへるのが樂みの一つでもあつた。もう十二月の二十日を過ぎると、新藁を撰んでお飾りの支度をはじめる。それが出來上つて家の內外に飾りを張り、神棚に明々と燈明の輝くのも樂みでないことはなかつた。

お盆は舊曆に依つたから、七月の滿月とお盆とは離るべからざるものであつた。月といふものは春夏秋冬いづれの季節をとはず佳い景物であるが、殊に夏の夜の月は涼しい眺めである。誰れしも月を悅ばぬ者はあるまいと思ふ。太陽を難有がらぬ生物がないと等しく、月を愛でぬ人間はあるまい。私がお盆を懷しんだのも、一つは此の滿月に近い頃の夏の夜の自然の風趣を悅んだのであらうと思ふ。が、それと共に精靈といふものをも懷しんだ。私は曾てもある小品に物したことがあつたが、墓地といふものに對して趣味を持つてゐる。況んや先祖の代々の佛に對しても、ある空想的の懷しみを抱いてゐる。そしてお盆の季節になると、一入往にしことどもの懷しが增して來るのを覺えた。月と佛とは、科學者の眼から見れば本來何等の關係はないのであるが、不思議にお盆の頃になると、月と佛とが何等かの因緣あるものゝ如くに思ひなされるのも不思議であつた。私は年たけた今日でもその美しい空想を崩したくないのだ。

古來日本の歌人にして、凡そ西行上人ほど月に憧がれ月を愛でた人も少なからうと思ふ。

ともすれば月すむ空にあくがるゝ心のはてを知るよしもかな

この歌などは、西行上人の月の中でも、最も美しい、幻影を追ふ心をいつた歌であると思ふ。

　いかに西にかたぶく月影を常よりも消に君したふらん

又「見月思西といふことを」と題して

　山の端にかくるゝ月をながむれば我もこゝろの西に入るかな

といふ歌などを考へると、佛の敎に西へ行くといふことゝ月が西へ入るといふことゝを何等か關係のあることのやうに思つてゐたらしい。西方淨土へ參るといふやうなことから自ら西行と稱したのであらうと思ふが、西へ行くといふことは西行にとりて、月の入りを眺め慕ふことゝ諸共に心境の理想に憧れてゐたのであらう。

とにかくに月と佛の道とを因緣あるものゝやうに思ひ做するところに、私には何となく、ある傳習慣な思想がある。それは科學の理論に會つたら。曉の露の如く敢果なく消える幻影であるかも知れぬが、私には月と佛とを關係さして思つてゐたい。それは、一つの詩として考へる時に、吾々の理智に對して何等の損害を與へるものでないから、私はそのやうな幻影と迷信とを保存して置いても吾々の生活に一向差支へを生じないと思つてゐる。さういふ意味に於て、月夜は實に、惡氣ない、空想の揺籃であるのだ。

子供の頃、お盆の前布れとして七月の七日の七夕さまが先づ懷しい樂みであつた。それが段々に月が圓かになつて來て、お盆になる。

その頃母は古い佛檀の中から、いろんな佛具を取り出して眞鍮の輪燈だの、龜の甲の上に鶴の立つてゐる燭臺などを光々するやうに磨いたりしてゐた。淸めた金盥にお茶湯を汲みとつてそれで位牌を洗つたりしてゐた。そして、この人が何代前に本家からはじめて分れた人であるとか、この小さい位牌は曾祖父の弟であつたが、子供の時から氣狂じみた

潔癖の人であつたが、若くして死んだ人であるとか、そんな話をいろ〳〵して聞かせた。

十三日の晩にはお迎へといつて、樒殼を焚いて迎火といふことをする。その前からもう疾うに家々では、一年に一度の、墓地の掃除をして、塋域に敷いた沙を淨め又は新に沙を敷いたり、藪から太い竹を伐つて來て、それで花立てを拵へる。新しい、重要な墓碑の両には最も入念に手を入れた太い部分の竹でそれを造る。石燈籠の小障子を張り替へなどもする。

私には亡き數に入つた人を追慕するといふよりも、さうした年中行事に何となしに懐しみを感ずるのであつた。

十三日の夕方になると、その迎火をしたり佛檀の燈明皿に油を差したり、又はいろ〳〵な供物の上げ下ろしをしたり、とかく佛いじりにいそしみながら、母は口の中で、

「南無阿彌陀佛々々々々々々々」と誦へながら、

「南無義質德入様、南無常圓慈光さま遠方のところをようおいでなさつた。」と、祖母や父の改名を稱へて、生きたる人に挨拶するやうにいふのであつた。

「十萬億土の遠方から來るんぢやさうな。」母はそれを心に信ずるもの〻やうにいつた。「西方淨土といふところはそんなに遠い處にあるんぢやらうか。」ともいつてゐた。

佛檀には、おもに田畑から取つて來る茄子、生瓜、西瓜などの新鮮な野菜物が供へられた。蓮の花なども手に入れば供へた。そして處の習慣で十四日には家々銘々に手打ちのうどんを拵へて佛に供する。このうどんは法事には必ず附きものであつた。そしてうどんを打つて廣く展べたのを、細く長く紐の如く切つたのを位牌に一つひとつ打ち掛けるのであつた。母はそれを、佛様の荷物の紐だといつた。

「佛さまも急しいことぢや。十三日の晩に來られて、もう十四日には歸り支度をせられねばならん。」

そんなことをいふのを聞いてゐると、本當にお盆三日の間が過ぎて行くのが、私には殘り惜しくつてならなかつた。

それから、お盆の一番樂しいことは燈籠流しであつた。私の國ではそれを燈籠流しといはなかつた。盆送りとか、佛樣を送るのだとかいつた。その盆送りには又家々で、恰も正月のお飾りと同じやうに、今度は麥藁細工で以つて船を拵へるのであつた。通例舊佛のみの家では、そんな手の込んだことをせず、たゞ麥稈を以つて圓形の棧俵をこしらへ、それにくさ〲の佛への供物などを載せ松明に火を點じ、又は蠟燭を立てたりなどする。が、新佛のある家ではいろいろに趣巧を凝らして麥稈もて船の形を造るのである。死んだその佛に對する遺族の者の哀悼執着の深淺によつて、銘銘に心を籠めた船を造り、もつて死者の靈を慰めるのである。大きな念の入つたものを拵へるのだと、隣家の人手を賴んだりして、もうお盆の前からそれに取り掛つてゐる。千瓢で以つて帆綱をつくつたり、紅提燈をそれに吊したりして、三人ぐらゐかゝらねば持ち上げられぬやうなものを造る。たしかに人間が一人ぐらゐは結構それに乘つてゐても水に沈みはせぬと思はれる。

三日めの十五日はお盆の最後の日であつて、いづれの家でも佛を祭るにいそがしい。佛おくりの支度を方々の家でしてゐる。

いや、どこの、誰れの船は一番大きいとか、いやどこそこのが最もよく出來てゐるとかいふ噂が六十戶ばかり群がつた小さい部落の口から口に傳はる。子供達はそれに興がつて、夕方いよ〲それが出來上つて、灯の點る頃になると見て步くのも一つの夏の夜の興趣である。そして、それを、夜更けてから、村はづれを流れる川の洲に擔いでいつて流すのである。私はそれを流し、お盆が過ぎた後に幾日も幾日も、寂しさを感じてゐた。そのことさへも今はなつかしさを覺えるのである。私はまだ少年で鄕里の家に居つた時分に、三十七八年前に死んだ祖母の佛の乘つてゆく船を造つたのを知つてゐる。その後父が死んだり二番めの兄が死んだりしたが、それ等の魂祭りについては、はつきりした記憶がない。

今年は亡き母の爲に麥藁の船を造らねばならない。昔の人が死んだのであるから、母の佛を送るには、昔めかしい年中行事の習慣がふさはしく思はれるのである。

盆踊りも魂祭りにはつきものゝ一つであつた。いづこの家でも新佛のある家には、必ず家の前で踊りをおどつてもらつた。それも又死んだ佛に對する慰めの一つであつた。小さい村の若い娘子供などは新佛のある家を次から次へと踊つてまはつた。

私は今でも自分の故郷の方の盆踊りを懐しむ。郷里を去つてから殆ど三十年。偶に歸省することはあつても、丁度、その季節に出會はさないので、その踊を見ないことも幾久しいことである。盆踊りの歌の節があつて、はじめのうちはそれを歌つてゐるが、段々踊りが興に入つて、歩調の揃つたところで、いろんな文句を囃して歌ふ。それには大抵淨瑠璃の（義太夫）の文句を、普通の、義太夫節でなく、他の節を付けて囃すのである。「お俊傳兵衛」だとか「朝顔」であるとか「三勝半七」などがそれである。

十五夜の月はますく冴へて高く下界を照してゐる。足並をそろへて踊る娘子供の下駄の音が聞えて、踊つてはゐるが、古めかしい田園の興趣は、そゞろに私をして、昔を懐しむ情に堪えざらしめるのだ。

古めかしい盆おどりの鄙歌の音調と、淨瑠璃の囃しの音頭（おんど）との聯想は、私をして三十年も四十年もの昔しに係らしめるのである。西へにしへといさよふ月の夜頃の魂祭りの、ゆかしい思ひ出では、亡き母をまだ當存まで現實界の人として思つてゐたよりも、もう佛となつた人、亡き數に入つた人として思つてみる方が、いつそふさはしいことのやうに思はれるのである。今年のお盆の魂祭りには、私も故郷に歸つて亡き母の供養を營み、久しぶりの盆踊りの歌の調子や、燈籠流しの興に、過去を追憶してみようと思つてゐる。ウオーヴウースの「幼時を追憶して靈魂の不滅を思ふ」といふ詩の意味をもう一度讀み返へし、考へ直してみるのも、無意味なことではあるまい。

（七月五日）

文藝時評

正宗白鳥

古典を讀んで

私は「紅樓夢」と「源氏物語」とを讀みかけて、中途で止めた。他日餘程の閑日月が得られない限りは、この有名なる和漢の二大小說を讀續ける氣にはなれさうでない。

私は少年の頃、依田學海翁が「國民之友」誌上で、愛讀書十種を列擧したうちに、この二つの書名を並べて、その古今に傑れたる大文學である所以と、兩書の作意作風の酷似してゐることゝを說いてゐたのを讀んで以來、「源氏」は別として、「紅樓夢」は必ず讀みたいと思つてゐた。題目からして我等の鑑賞慾をそゝつてゐたのであつた。しかし、水滸傳や西遊記や三國志のやうに、日本譯が出來てゐるのではないし、原本は手易く手に入りさうでなかつたし、たとへ手に入つても私の學力ではとても讀みこなせさうでなかつたので、をり〳〵その書名を懷かしく記憶に浮べることのあるだけで今日に到つた。

それが今度、「國譯漢文大成」本のうちの「紅樓夢」三卷を、ある知人から借受けることが出來たので、これを機會に、「源氏物語」と幷せ讀まうと企てゝ、この二つの長編小說を、一ケ月半ばかり机の側に置いてゐた。東京へ携えて行つて、汽車の中やホテルの机の上で繙いたこともあつた。

この「紅樓夢」は、幸田露伴、平岡龍城の二氏によつて翻譯され註釋をも加へられてゐるのであるが、現在の私に

は、甚だしく讀みづらくて、しかも極めて興味の乏しい感じを起さゝれたのである。三十餘年前に學海翁に敎へられて以來、この書物について期待してゐたものは、全く裏切られた。我慢に我慢して、全篇の五分の一くらゐまで、牛歩遲々として讀み進めたのだが、今のところ、とても浩瀚なる全篇を讀通す氣にはなれない。

私は、信賴すべき鹽谷溫博士の「支那文學概論講話」によつて、豫め全篇の大意を心得、有難味をも敎へられて置いたのであるが、それも私の鑑賞を助ける足しにならなかつた。第一、この國譯紅樓夢が、忠實な直譯であるのが、私には感心出來ないのである。原文を讀みこなす素養のないものが、この直譯の大長編小說を全部讀了し得るであらうかと、私は疑つてゐる。また、たとへ私以上の忍耐力をもつて全部を讀通したにしても、果して文學的興味を感得するであらうかと私は疑つてゐる。西歐の名作にしても、直譯では語學の研究に役に立つだけで、興味は覺えられないに違ひない。從來日本に流布してゐる水滸傳や西遊記は、忠實な飜譯ではないが、我々にスラ／＼と樂しんで讀めるやうに出來てゐる。森槐南の「水滸後傳」の如きは、原文の妙味を充分に採入れた上に我々に面白く理解されるやうに日本化されてあつた。「水滸後傳」は、作品そのものは大したものではないが、槐南の譯文は、日本譯の支那小說中では、空前の名譯であると云つていゝ。

「國譯漢文大成」では、どの作品もすべてこの小說の如く、直譯されてゐるのであらうか。原文も轉載され、註釋も添つてゐるのだから、支那の俗文研究者には便利であるが、飜譯だけを味はうとするものは失望する外はない。語學者の直譯によつて、西洋文學を味ひ難いのと同樣である。

私はところ／＼原文について讀んだ。そして、かういふ文學は、それを味ふための環境を自分でつくつて、その境地に身を置いて味はゝなければならぬといふことを感じた。能樂の妙味を解するために下準備が入るのと同樣である。

私は「紅樓夢」の原文のところ〲を讀んで、多少の感興を覺えたのは、そこに用ひられてある文字についてである。詞句の音調が面白い。話の筋や人物の心理などの內容よりも、技巧を盡した用語が面白い。鹽谷博士の「概論」によつて、元明以來の代表的の戲曲や小說の大要を學んだ時にもさう思つた。元の戲曲中の最傑作と云はれる、「漢宮秋」のうち、漢の元帝が匈奴に嫁すべき王昭君を見送り、悄然として鸞を宮廷に廻はしたところに、

他他他傷心辭漢主。我我我攜手上河梁。他部從入窮荒。我鑾輿返咸陽。返咸陽過宮牆。過宮牆遶迴廊。遶迴廊近椒房。近椒房月昏黃。月昏黃夜生涼。夜生涼泣寒螿。泣寒螿綠紗窗。綠紗窗不思量。

と、情婦に一生の別れを告げて家へ歸つて來た男の哀切の感情を唄つてゐる。私が今こと更らしく云ふまでもなく、支那のかういふ文學の常として、私達は、音調の快感を覺えるのみならず、字面の美をも感じるのである。支那の文學は、人間通有の感情を、目に美しく耳に快い文字をもつて、讀者の心身に流れ込むやうに工夫されてゐる。これは支那ばかりに限らない。古來どこの文學でも、傑れた藝術家は文字を驅使する上に細心の注意を拂つて來たのであらう。ダンテの「地獄」のうちのある詞句は、葬式の鐘の音と同じ音調をもつてゐるさうだ。從つて形式過重の四六駢儷體のやうな文學の喜ばれる時代も現出して、文學史家の嘲りを買ふのであるが、私は、形式の美に凝り外面的技巧にのみ苦心するのを、一概に哂ふことは出來ないと思ふ。ある意味では、そこに文學の極致を見、人生の眞實を見られると思ふ。まだ形をなさないで、いろ〲な刺戟の下に動搖を續けてゐる新日本の文壇は、萬葉集の素朴と無邪氣とを喜んでゐるが、も少し進んだなら、新古今の人工美を喜ぶやうになるかも知れない。

ある意味とは何であるか。――いろ〲な人情を唄つても、何度繰返して唄つても同じことだ。直截に人情をうつ

したゞけでは物足りなくなる。それで自然に技巧を弄したくなつて來るのだ。素顔が天眞でいゝといふのも本當だが、粉飾を凝すのも人間の本能だ。文明の爛熟は人工の爛熟だ。文學だつて進んだらそこへ行くので、いつまでも、萬葉式兒童的無邪氣で、天眞素朴に安んじてはゐられないだらう。

自己の日常の見聞や經驗を有りのまゝに書くことを、文壇の目標として來た日本の文壇でも、この頃は、もつと技巧を凝らしたものが欲しくなつたのだ。戯曲の流行りだしたのも、自然の記錄よりも人工美を欲しくなつたのであらう。新古今のある種の和歌が形式美を心掛け、前に一例として擧げた元の戯曲が手のかゝつた技巧によつて哀切な思を觀客や讀者の心に傳へようとしたのと同じく、表現派なんか、ことに近代藝術家の人工慾技巧慾から發してゐるのである。六朝の四六騈儷體が陳腐になつて、韓退之などが新文章をはじめたり、形式美に活氣がなくなると、自然へ歸れの聲がどこの國でも起つたりするのだが、武者小路氏の文章だけでは、人間のもつてゐる人工慾が滿足されなくなるのである。

私などは生來最も無器用で、多年努力を積んで來たのに關はらず、書かうとしたことを餘蘊なく書き得たことは一度もない。理窟はどうにでも云へる。今日西洋の名論文を一冊讀めば、明日それを燒直して、一部の人々に感心させるくらゐの評論を書くくらゐは何でもない。あるひは今日の社會の缺陷を非難し、あるひは文壇や劇壇の沈滯を嘲り、あるひは農民藝術の必要を强說して、一通り分つた顏をする程度の論文なら、私にだつて雜作なく出來ると自信してゐる。しかし、一篇の小說一篇の戯曲を、自己の滿足するだけに創造することは、たび〳〵絕望しなければならぬほどに困難である。技巧はどうでもいいといふ評語を聞くたびに、私は常に不思議に思つてゐる。文學の一般論としては兎に角、私一箇の經驗から云へば、文學の上には技巧についてこそ、數十年來苦心を重ねて來たのである。それは無用な苦心だと云ふのも一理ないではないが、それなら、文學その者が無用な長物であると云つていゝのだ。技巧はどうでもいゝといふの

は、完全に技巧に熟達した人の言草か、陳腐な舊文藝を打破して新しいものを建設する時の方便に唱へることである。眞にさう思つて蕪雜な文章に滿足してゐる人は、文學的感覺の全く缺けてゐるのでないかと、私は疑つてゐる。「新潮」七月號に於て、生田長江氏が私の戲曲を批評したうちに、「積極的に劇的な、積極的に飛びつきたいやうな巧いところが何一つ書いてゐない」と云つてゐるが、それは、私が自分の作品を讀返して、いつも感じるところである。思想云々についての非難は、私の胸にはちつとも應へない。私がどんな思想を持つてゐたにしても、讀者や觀客をして、飛びついて來させるだけの巧さを私の筆が持つてゐないかぎりは、藝術品としては、その思想は死んだ思想である。

「紅樓夢」の直譯文に惱まされながら、傍ら源氏物語を讀んで、だら〳〵した締りのない文章にウンザリした。いくら千年も前に世に現はれた古典であるにしても、同じ國に生れて、少年時代から多少は古文を學んで來た私が、日本最大の傑作と折紙のついたこの物語に嫌惡を感じるのは不思議である。しかし、事實に於てこんな讀みづらいものに接したことはなかつた。西洋の大古典、イリアツドでもオデツセーでも、もつと感興を寄せて讀みつゞけ得る私が、自國の文學では國寶視されてゐる源氏は、讀みながらいく度叩きつけたい思ひをしたか知れなかつた。内容は兎に角、無類の惡文である。今時こんなものを學校の敎科書にする法はないと思ふ。源氏でも英譯で讀んだ方がもつと面白いに違ひない。

私は、學校で、畠山健氏の源氏の講義を、雨夜の品定めあたりまで聽いた。それから、萩原廣道の評釋によつて、數卷を讀んだ。古語の研究のために讀んだので、面白くもなかつたし、何も頭に殘つてゐなかつた。今度は、有朋堂文庫本で讀んだので、適當な頭註を手賴つて讀むと、文義はよく通つて、拙い直譯で紅樓夢を讀むとは違つて、原作に直ち

に接せられるのであつたが、私は、この時代の生活狀態風俗習慣などを知得するといふ歴史的興味以外の、藝術の味はひは殆んど感ぜられなかつた。私は幼少の頃から幾千の小說を讀んでゐるか知れないが、こんな讀みづらい讀み應へのしない退屈な書物に接したことがない。私は、牛歩遲々として「須磨」「明石」に辿りつき、「繪合」「松風」まで來て、卷を投じて、これで御免を蒙ることにした。昔から「須磨源氏」といふ言葉があつて、此處まで讀んで止めるといふことを意味してゐるらしいが、無理はないと私は思つた。

德川時代の草双紙や讀み本のやうな荒唐無稽の記事に滿ちてゐるのではなくつて、男女間のいろ〱な愛慾の姿が、稀薄ではあるが、當時の實際を寫したらしく書分けられてゐるが、海月の連續のやうな文章は、われ〱に人生の眞實を感銘させるのを全く妨げるのである。描寫の力は枕ノ艸紙の方が簡勁で印象的で遙かにすぐれてゐる。それに、源氏が物のあはれを基調としていろ〱な女の性情をかいてゐると、昔から云はれてゐるが、それは極めて皮相であると思ふ。嫉妬幽鬱喜悅の情がさま〲に現はれてゐるにしても、それ等がみな薄い影のやうだ。生活力精神力を缺いだ發育の足らない人間の動靜を果しなく見せられてゐるやうだ。當時の世相がさうであつたのだからさうでいゝ譯だが、しかし、繪畫に於ても、よぼ〱した老人をよぼ〱したまゝに書いただけではいゝ藝術ではない。彫刻に於ても、いゝものになると老衰した人間を題材としても、上べは衰弱の姿を如實に現はしながら、そこに人間に潜在した力を掴み出して、觀る人の目に感應させるのである。いくら紫式部が才女であつても、女は女である。人間を見る目が淺い。私が讀んだかぎりでは、源氏が藤壺に對する動作や思慕の情を描いたところに、人間の力がきらめき、「末摘花」に單調を破つた面白さのあるのを見たくらゐが、私の興味となつた。

德川時代にでも、「源氏物語」に對しては比較的多くの評論が出てゐるらしい。私も古文學研究の態度を採つて、下

準備をしてかゝつて、源氏の研究に沒頭したなら、さま〴〵な美所が發見され、理窟をつけてこの古典を推稱することが出來るかも知れないが、大正の現代に生きてゐる私が、無心にこの大長編を繙いて、一讀過した直後の感想は、甚だ面白くないのである。

私はここで源氏物語の評論を試みようとするのではない。古來、日本第一の文學とされて、後代の文學藝術に多大の感化を及ぼしたこの長編の文章を、讀みづらい思ひをして讀みながら、日本の文章について考へたのである。文章をよく讀通すと、その用語語調體裁などによつて、國民の性情氣槪好尙思想などが察せられるのであるが、前代の日本人はよくもかういふ文章を喜んだものだと、私には不思議に思はれる。源氏から脈を引いた文章こそ、純日本の文章となつてゐるのであるが、歳を取るにつれて思想が保守的になり日本の傳統的趣味を喜ぶやうになりつゝある私でさへ、かういふ文章には、自分の感情をも思想をも托することが出來なくなつてゐるのだ。前に擧げた「漢宮秋」の一節の如く、支那の古文學の方がまだしも私の心を動かす力をもつてゐるのである。

多少文學的教養を經てる現代の青年が、源氏のどのページでも開けて讀んで、自己の藝術慾を少しでも刺戟されるであらうか。繪畫や彫刻に於ては、日本は傑れたものに富んでゐるらしく思はれるのに、文學に於ては營養不良のやうな貧弱な經過を續けて來たやうに思はれる。

さき頃、江戸文學の豫約出版の內容見本を机上に擴げて熟覽したことがあつた。さま〴〵な部門さま〴〵な作者の作品の一班は、私もこれまでに讀んでゐるので、略々推察されるのであるが、近松西鶴芭蕉くらゐを除いたら、どこに、私などが敬意を寄せて讀返し得られる作家が存在してゐたのであらう。

露西亞は近代になつて急速に自國の文學が勃興したのであるが、過去につまらない傳統の重荷を背負つてゐるよりも

却つて、その方が幸福かも知れない。日本では、過去に傑れたる文學の天才はなかつた。

サツカレーは創作の筆を採る前に、毎日聖書を讀んでゐたさうだ。賴山陽は日本外史執筆中、文章の模範として史記を讀んでゐたさうだ。そして、紅葉山人は「不言不語」執筆中毎日源氏物語を讀んでゐたといふ噂を、私は聞いてゐる。馬琴や春水の文體に飽足なかつた明治初期の青年文人は、冗漫でも無氣力でも優美で多少の寫生味のある源氏などの古調を取らうとしたのであらう。それよりも簡勁な西鶴の文章が喜んで學ばれたのは當然である。私はこの間「古典全集」本によつて、久振に、「一代男」を通讀したのであるが、讀みながら、紅葉よりも露伴よりも、一葉が西鶴の文章をよく學んでゐることを感じた。彼女は源氏と西鶴とを一しよに學んで、自己の文章を磨いたらしい。西鶴も一代男一代女など初期の好色本の、未熟な、癖のある文章を學んだのである。西鶴でも、「胸算用」「萬の文反古」「置土產」など晩年の作品には、文章にケレンのあとが全くなくなり、平淡で含蓄があつて、日本古文學中類の無い名文章となつてゐるのである。

明治初期の文壇の秀才は、文體の模範を源氏系統の美文と西鶴特得の無學の名文に求めた。島崎藤村氏のやうな新人でも、年少にして放浪の旅を續けてゐた頃、石山寺へハムレツトを收めたりした。しかし、源氏や西鶴などの文章をお手本とする時代は永く續かなかつた。そして、新時代の新しい文學が起つた。日本在來の古典と緣を絕つた文章がはじめて現はれた。國木田獨步の文學がそれであつた。(彼れは西鶴をも近松をも蔑視してゐたらしかつた)武者小路實篤氏の文學がそれである。

しかし、私など、それ等の文學それ等の文章だけでは飽足りたく思つてゐる。人間の藝術慾はいつまでも簡素だけでは滿足してゐられなくなるのだ。強い力、美しい色、かんばしき匂ひ、物凄い響、我々の五官我々の心身に潛んでゐる

ものが、文字を傳つて現はれて來なければなるまい。

舊俳優の技藝なんか陳腐で見てゐられないといふのも本當だが、新劇團の芝居がまづくて薄汚くて見てゐられないといふのも本當だ。文章についても同じことだ。幾度讀返しても、ます〳〵味ひのあるやうな新時代の文學が現はれて來てもいゝ譯だ。

谷崎氏里見氏芥川氏など、德川文學や支那文學の古い臭ひがついてゐて、新時代の斬新な文章として親しむ譯には行かないが、それでも、筋だけ運んでゐるに過ぎない他の多くの作品よりも、私は愛好してゐる。

藤森氏の戯曲

この頃世評に上つてゐる「磔茂左衞門」と「犠牲」とを讀んだ。

藤森成吉氏の小說は、私は可成り讀んでゐる。そのうちでは、霞ヶ浦を船で渡つてゐる間に、乘合の青年が尺八を吹くのを聞いて感じて、いろ〳〵な話をする抒情味のあるものや、信州のある陰氣な商店の元氣のない雇人と、神經質な若主人とのいがみ合ひを書いた寫眞的のものを、愛讀したことを覺えてゐる。その後、氏はその銳敏な神經を現代の思潮である社會問題の方へ向け、小說の材料にも、いろ〳〵な勞働者に會つてその身の上話を聞いて同情して、現代の社會組織を憤慨する筋立のものが多くなつた。無論氏の態度は、小川未明氏などゝ同じく誠實であつて、自から仁者の風骨を具へてゐるのであるが、小說としては、初期の藝術味の豐かなものよりも面白くなかつた。「狼へ」も讀んで、私はいろ〳〵な事實を知つたのであるが、しかし、氏がその經驗から得て來た斷定にはたやすく雷同する譯には行かなかつた。

今度の二つの戯曲は、私はスラ／＼と讀むことが出來た。無論この頃の氏の小説よりはいゝ。初めて戯曲を作るためにこと更らしく身構へしたところがなくつて、筆が自由に延びてゐる。ギゴチないところがない。しかし「茂左衛門」は、分り過ぎるくらゐよく分るだけに、叙事的に過ぎる感じがする。序幕のはじめなどに、百姓どもの話のうちに、昔の彼等の云ひさうでない下刻上の口吻が多いのは、昔の義民傳とは違つて、作者の社會觀の一端を、昔の百姓の口を藉りて云はせたので、そこに新味がある譯なのだが、全體の結構には、私の目では戯曲としての新味は見出せなかつた。この作を讀みながら、私は菊池寛氏の「義民甚兵衛」を連想したが、私にはあの「甚兵衛」の方に一層心を動かされるのである。(必しも二つの作品の價値を上下しようとするのではない。)結末に、百姓の一人が「いつまでも今日のことを忘れちやいけねえ。……これをおれ達のクサビにするこんだ。おれ達あ、この後始終兄弟のやうに、一心同體に結び合つて生きて行かなきやいけねえ。……」などゝ云ふ人好きのする言葉を聽くよりも、磔上の甚兵衛が人間に向つてぶつ掛ける嘲笑の方に底づよい心魂の聲を聞く感じがする。

義民ものと云ひ、「犧牲」と云ひ、材料が通俗的興味を惹き易い。「犧牲」は、私だちに、モデルに對する豫備知識がなかつたら、感興が大分薄らいだであらう。作者は、世間が興味を有ちさうな材料を用ひたゝめ得をしてゐる譯だが、しかし、一方から云へば、知れ渡つてゐる事件であるため、作者の空想が束縛されて書きづらいところもあつたであらう。

兎に角、私も世間並に面白く讀んだ。「茂左衛門」より遥かにいゝものだ。上演しても成功しさうなものである。二幕目と四幕目はことに劇的價値をもつてゐる。讀んでゐても、人物の言葉が生動して胸に迫つて來る。

藤森氏の主觀も作品の底に流れてゐて、そのために通俗戯曲たることを免れてゐるのであるが、私がこの材料を取扱

つたらどうするだらうかと、私は讀終つてから考へた。私は石川の考へにも多少は共鳴し、その苦悶にも同感し、その陶醉的最後について羨望をさへ感じてゐるのであるが、片山といふ人物を、この作に取扱つてゐるやうには取扱はないに違ひないと思ふ。むしろ片山の方に自分の身を置いて創作的熱情を燃やして書いたかも知れない。そして、石川の如き、人がよくつて弱くつて、感傷的である空想家の遊戯的苦悶を罵殺し笑殺したかも知れない。

それから、この戯曲の上演が禁止されたことを、一概に當局者の無理解として責める譯には行かないと思ふ。見物は、作物の人物を一々モデルになつた人々と連關させて見るに極つてゐるのだ。そして、作中に陋劣卑俗な人物として現はされてゐる片山の實物は、劇場の建つてゐる都會にまだ生存を續けてゐる筈である。やうやく世間から忘れられてゐる今頃、數年前の事件を舞臺に再現されて、彼れは衆人環視のうちに侮辱を受けなければならない。………藤森氏は、氏の有つてゐる正義感や人類愛に刺戟されて、貧富の懸隔や社會生活の不公平を憤つて、弱者や貧人のために奮闘してゐる人であるが、さういふ人情に富んだ作者が、現存してゐる人の影である片山を舞臺に拉し來つてさらし物にして平氣でゐられるのであらうか。それが私には不思議でならないのだ。「氣の毒だから見合せたらよからう」といふ當局者の方に私は人情味を認めるのだ。「僕の戯曲的解釋に依つて、もし現實の人々に些少でも迷惑の及ぶやうなことがあつたらこんな遺憾はない」と、作者は言譯をしてゐるが、それだけの思遣りがあるのなら、せめて舞臺へ上すだけは作者の方で遠慮していいと思ふ。作者は人妻を奪つた石川の苦悶には萬斛の同情を濺ぎながら、妻を奪はれた片山の苦悶には一點の憫みさへ寄せてゐないのである。そこに作者の人生觀社會觀があつて、この戯曲を通俗離れさせてゐるのかも知れないが、世の弱者や貧人などのためにはヒステリックに近いと思はれるほど同感した小說や論文を書いてゐる人類愛に富んでゐる藤森氏が、不幸なる體驗を嘗めさゝれた片山といふ人間に對しては、人類愛の破片をも見せないのは不思

議だ。

世上の事實と舞臺に現はした藝術とを混合して見るのは見物が無理解なのだから、そんな低級な見物の頭を顧慮する必要はないといふのは、藝術尊重の立場から云つて正しいことであらう。モデルが困らうが困るまいが、そんな通俗的な配慮をするには及ばないといふ藝術家らしい意氣込みを私は敢て非難しない。私なども執筆に際し、そのくらゐな意氣込は持つてゐたいと思つてゐる。

しかし、築地小劇場がこの新作の上演を企てたのは、純藝術の立場から「犧牲」が近來の傑作であるのを認めたゝめだけで、これが例の事件を取扱つてゐるから、見物の好奇心を惹くであらうといふことは、少しも念頭に浮べてゐなかつたであらうか。私はそこに疑念を有つてゐる。

無論、劇場は、多數の見物を惹寄せなければ經濟上維持が出來ないのだから、藝術以外の事情を顧慮して、出し物を極めるのは止むを得ないので、私もそれを非難しようとは思はないが、それなら、警視廳などが世俗的見解をもつて、禁止を企てたのも止むを得ないのだ。

兎に角、私は片山が十數日間舞臺にさらされて、毎夜々々、作者と見物とから侮蔑される光景を想像すると忍びがたく思ふ。

この所感を書いてゐるうちに、讀賣新聞の文藝欄を見ると、作者は「あれ位所謂藝術的に書かれた戲曲が上演出來ないとなら、あまり日本は情なさ過ぎる。いつそ、藝術なぞは全部禁止するがいゝ」と昂奮して云つてゐるが、作者自身がさう一向きに感ずるのには私は同感しても、傍觀者として冷靜に見て、私は、日常好意を寄せてゐる小劇場や藤森氏に對し、この點では雷同し追隨し得ないのである。

斷片語

△六月號の「文藝春秋」に出てゐた加能作次郎氏の「子供のたより」はちよつと面白かつた。疲れた心の癒さるやうな作物だつたので、先月の時評に一言推稱の辭を呈して置かうと思ひながら、執筆の際に忘れてゐたのを七月の「新潮」の宇野氏の批評によつて思出した。大體宇野氏の說に贊成である。數年前加能氏は「凧」（？）といふ題で、爺さんと婆さんが凧を揚げることを書いたユーモアに充ちた短篇を「太陽」に出してゐたが、氏は輕い人情味のある穩かな小說を書くことが巧い。ことにこの頃の文壇では、戯曲などが流行して作爲を弄したものが頻りに現はれたり、階級意識の盛んになつたゝめに角目立つた爭鬪的のものが出たり、だらしのない身邊雜記小說が相變らず續出したりしてゐるので、加能氏の「子供のたより」などが珍らしく感ぜられる。強烈なる文學、戰鬪的の文學、濃艶なる文學など、讀み甲斐のある新作の現出を我々は渴望してゐるが、それとゝもに、邪氣のない、誰れでも微笑して讀まれるやうな輕い文學の缺乏してゐることを、私は感じてゐる。この點で生方敏郎氏のある小品も面白い。生方氏や加能氏のには、文學青年上りの臭みのない人情味世間味がある。……子供のない私が「子供のたより」を面白く讀んだのは變だが、子供がないために、かういふ一見平凡らしい小說にも興味を感じたのかも知れない。

△この頃、德川時代の切支丹迫害の文書が頻りに出版されるが、私は二三を讀んでウンザリした。この上讀むに忍びない感じがした。信者迫害の殘酷を思ふと、德川政府に對する憎惡の感に燃えるのであるが、信者どもの執拗さにも驚かされ、しまひには敬意よりも不快な思ひを起さゝれるのである。私から云へば彼等は、愚かなる妄信のために辛苦を嘗めてゐたので、無知の執念の恐ろしさを、あの史上の事實を例として私は考へてゐる。

△「劇と評論」誌上の永井荷風氏の「劇話」は、今月のは略々同感である。「眞面目に演劇を研究しようと云ふならば、青年作家は、興行的な脚本を書かうと思はない方がいゝ。四十歳位までは、文學的の脚本を書くことに努めなければならない」と云つてゐるが、これは今の若い戲曲家に對するいゝ訓戒である。殊に筆の廻らないくせに、はじめから上演慾を起して玄人氣取りで舞臺の遊びなどに氣を配つて戲曲をつくらうとするのは、淺はかな量見である。紙上戲曲と云はれるのが口惜しくて、はじめから舞臺巧者に見せようとすると、虻蜂取らずになつてしまふ。

△同誌上の岡田八千代女史の劇場觀察も面白い。私などが何十年芝居へ行つてゐても氣のつかないやうなことを、女の目でよく見てゐる。劇場と觀客の正體がかういふ風であるとすると、眞面目に演劇の向上を企てるのは張合ひのない譯であるが、しかし、現在の婦女子の娛樂場としての劇場の存在を呪ふ必要はない。どこの國でも、劇場の存在してゐる大なる理由はそこにあるのであらう。現在の日本の社會では、花柳界だの劇場だのが消滅したら、世の中が薄ら淋しくなるのであらう。

△「新潮」の「戲曲を書く私の氣持」といふ記者の質問に對する小說家諸氏の返答を讀むと、身邊雜記的の小說に飽いたゝめ戲曲に筆を染めたとか、小說だと事實に拘泥しなければならぬのに、戲曲だと自由に書けていゝといふ意味の返事をした作家が多かつた。私もさういふことをたび〳〵云つた。……しかし、文學について深く考へたなら、小說の形を取つても、瑣末な事實に筆を拘束されないで奔放自在に書いていゝ譯である。たゞ小說では、自然主義以來の不文律が我々の頭を支配して、それを脫却することが六ケしいのだ。

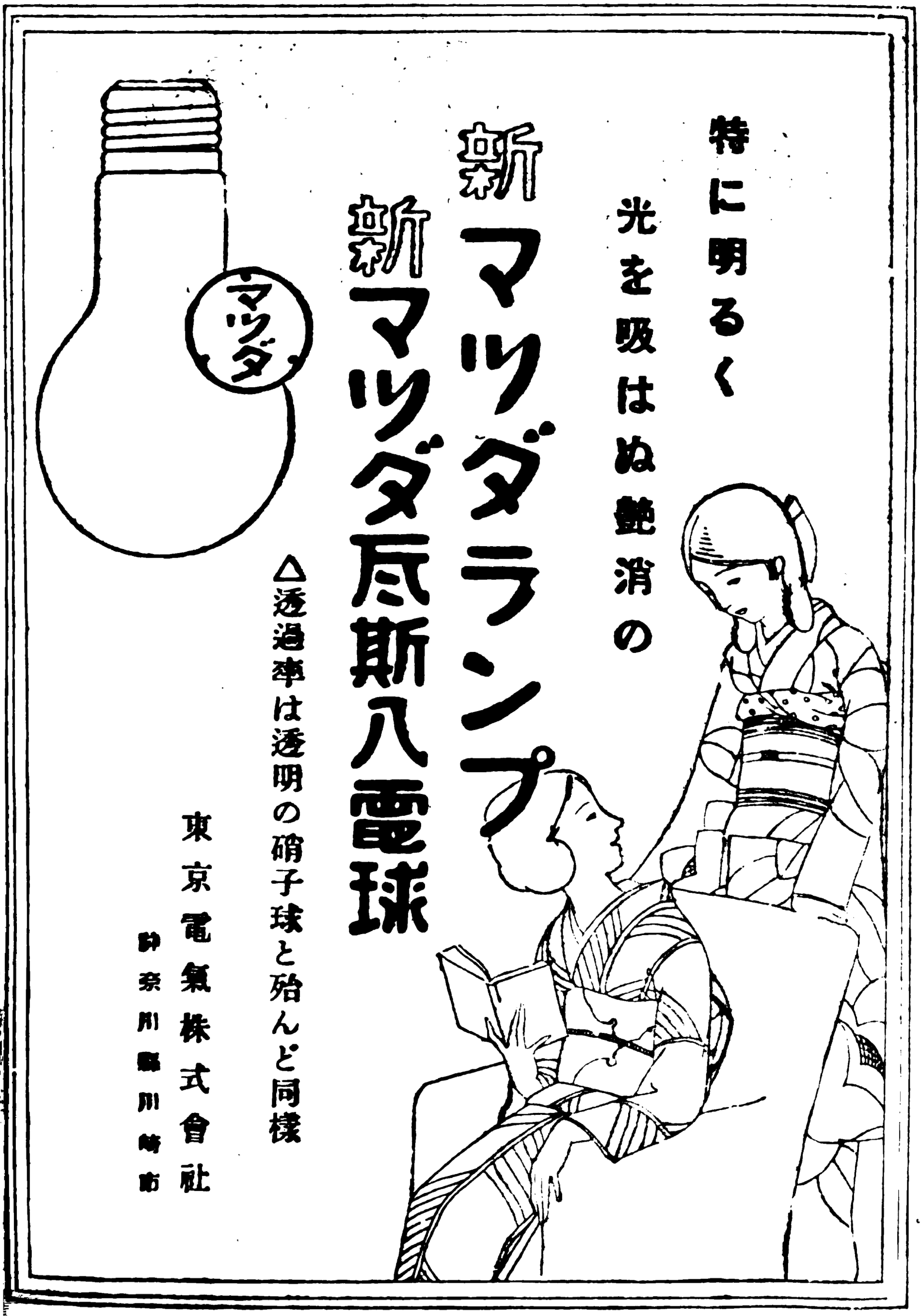
△「新潮」合評會の「社會思想家と文藝家の會談記」は、豫想したほど面白くなかつた。互ひに顏を突合せては、火花を散らすやうな激論は出來ないのであらう。それに私はかういふ議論のやり取りに興味をもたない。

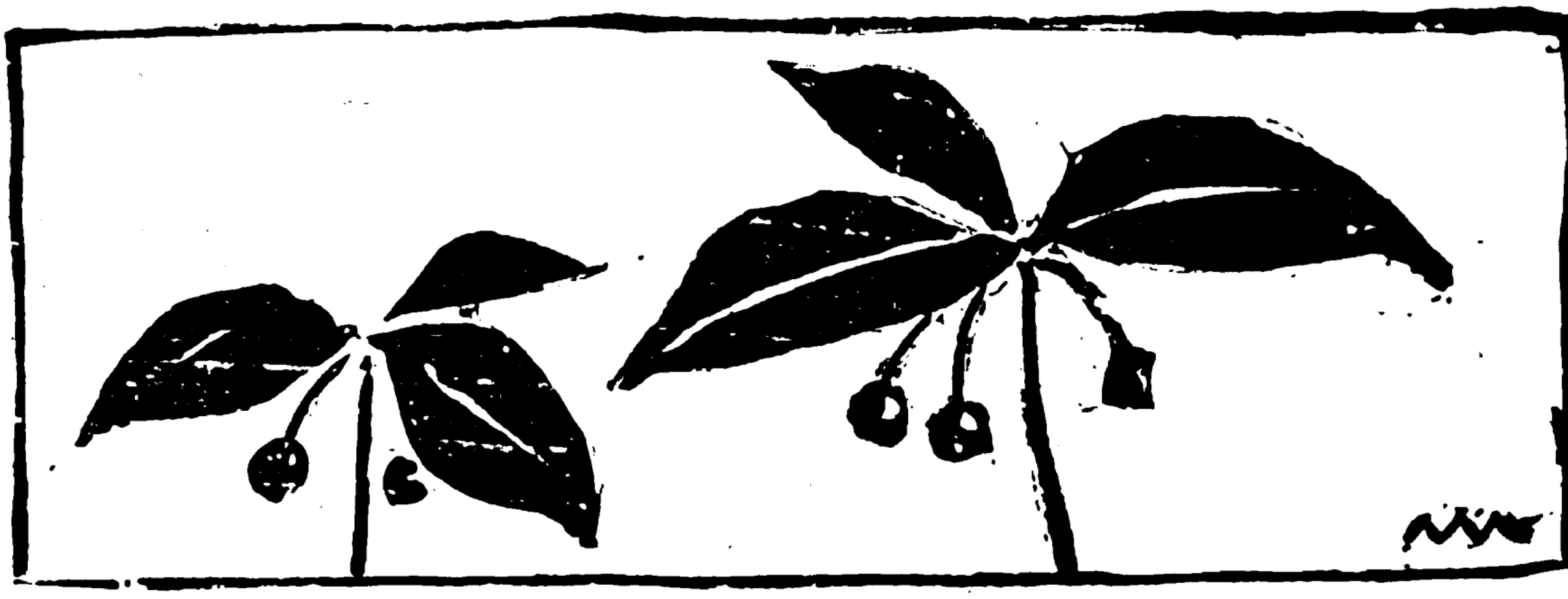
△「文藝時代」の新居格氏の「文藝と時代感覺」を偶然讀んで同感した。この人のものは今までに讀んだ經驗がないが、なか〳〵物分りのいゝ人である。私がかつて「時評」欄で云つたやうに、紅葉以來の作品にでも、時代の思潮や好尙くらゐは微弱ながらも反映されてゐるのだ。「金色夜叉でも、稍詳言すれば、今の法科大學生には失戀したとて高利貸にならないだらう。紅葉今世にあり今、貫一を描くなら貫一が失戀しても社會運動家にするかも知れない。そしてブルジョア富山を資本主義組織の害惡として描くかも知れない。……美人のアイスなんかは出て來ないで、赤樫滿枝なぞはヴアンプ型の女性になつてゐるし、荒尾讓介を官吏なぞにはしないこと請合ひである。今なら社會主義者か無政府主義者にしたかも知れない。その時代々々がその時世粧と價値觀念とを持つ。後になつて分ることだが、紅葉山人が金色夜叉を描いた時にはその意識下に時代が潛んでゐる。第一官尊民卑がその作に無意識に出てゐる。だからこの官吏の巢のやうになつてゐた大學生はよく作のヒーローになる特權階級になつてゐた。……天外には「新學士」といふ題目の小說さへあつた。一概に硯友社時代の文藝を從來の文藝論から戲作視するだけではいけない。一つの時代の文藝を見るには、そのころの社會狀態とそのころの習俗觀念とを見なければならぬ」云々と氏は云つて、過去の文學に、その時代々々の姿を氏は見てゐる。後になつて見ると、今日の小說も自から時代を反映してゐることが分るのだ。紅葉がプロレタリア思想を作中に高調しなかつたとか、紫式部が山川菊榮女史の叫びさうなことを叫ばなかつたと云つて侮蔑する譯に行かない。時代の思潮くらゐは自から文學には映じてゐるので、私などが紅葉や紫式部に飽足りないのは思想の點ではないのだ。どうせ今日の歐洲受賣りの新々思想だつて、五十年百年立つと陳腐になつてしまふに極つてゐる。

△私が毎日讀んでゐる新聞は、讀賣と中央とであるが、日課として風呂屋へ通つた折、そこの番臺に置かれてある報知新聞を取つて、湯上りに一服吸ひながら讀むことがある。さき頃その新聞に、米川正夫氏が、私のビリニヤークに對す

る小評について不滿を述べてゐた。ロシア文學通の米川氏の說だから、私も敎へられるところがあつた。ピリニヤークの著書は、飜譯があつたらもつと讀んで見たいと思ふ。しかし、私が、ロシアの地主が時世の變革に追はれたのを關ケ原の落武者に比したに對して、氏が、ロシア革命は大思想だが我國封建時代には思想なんかないではないかと云つたのには、私は得心出來ない。人間生活の存在するところに思想は喰つついてゐるもので、我封建時代には、ことに强烈に存在してゐたではないか。主君のために身命を擲打つ覺悟の如き、當時の社會生活を統一する上に必要な大思想であつたではないか。時代が變れば過去の思想が陳腐になるのはあたり前だが、あの場合に私が用ひた類例は思想の新舊に何の關係もないので、落伍者の氣持をたとへたのだ。人間生存上の本能は古今東西別がないと私は思つてゐるのである。……私も露西亞文學の愛好者であるが、この頃の一部の論客のロシヤ心醉には呆れる。これも現代の世相として、後世から顧みられるであらう。

△私は「評論」など執筆しながら、刻々に自己の心に浮ぶ思ひをそのまゝに表流することの困難にたび／＼氣づいてゐる。私は政治についてはさして興味を有してゐないから、自己の政治觀を存分に發表するのを憚る恐れはないが、文學藝術や、道德や、その他人生生存上のいろ／＼な問題について、自己の所感を思ふ存分に吐出すことをいつも躊躇してゐる。言論の絕對的自由はどんな國でもどんな社會でも許されないに極つてゐるが、傍から妨害されなくつても、當人自身が周圍と妥協し讓步すべく餘儀なくされる。赤裸々で銀座通りを步くことは出來ない。他の評論家諸氏はさういふことを全く感じないのであらうか。爲政者の壓迫のために自由に言論し得られない憾みがあるだけで、自己自からおのれの言論を束縛して、直截におのが思ひを云ひ切れないと氣づくことがないのであらうか……私は今度も時評の筆を動かしながら、本當の「私評論」の六ケしさをつく／＼感じた。（七月一日）


特に明るく
光を吸はぬ艶消の
新マツダランプ
新マツダ瓦斯入電球
マツダ
△透過率は透明の硝子球と殆んど同様
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市



溫泉きゆ

久保田万太郎

『そこにしますわ、いつそ。』

おみちは濱吉にいつた。『四時間も五時間も汽車に乘るのは、わたし……』

『しかし、そのくらゐは、お前、辛抱しなければ……』

『いゝえ、たか〴〵三時間。——その上かゝつちやア嫌ですわ。』

『ぢやア伊香保がいゝ。——伊香保なら……』

『でも、汽車を下りてまた外の乘ものにのるんぢやア。——それぢやアやつぱり同じですわ。』

『そんな贅澤をいつた日には……』

濱吉は苦笑をした。

『いゝえ、贅澤はいひませんわ。』おみちは押返して『贅澤をいふたら、わたし、湯河原でも、熱海でも、修善寺でも。——どこへでもあなたのいふ通りのところへ行

きますわ。』

『ぢやア行つたらいゝ。――それこそ同じことなら道中はすこし驍却でも、名の廣く聞えたところへ行つたはうが萬事にいゝ。――宿の扱ひだつて何だつて……』

『いゝえ、それが。――それがわたし嫌なんです。――汽車の時間の長いのばかり嫌なんぢやアありません。』

『だつて、お前……』

『いゝえ、湯河原だつて、熱海だつて、修善寺だつて。――そんな誰でも知つてるやうなところへ行つて、なまじそんな宿屋のいゝ扱ひなんぞされたら、氣が張つてしやうがありやアしません。――保養にも何にもなりやアしません。』

『お客ぢやアないか、此方は。』濱吉はもう一度わらつて『それだけのものをつかつて遊びに行くのに誰に氣兼が入る？』

『それは、あなたは。――あなたは男だからそれでいゝでせうけど。――さうは行きませんわ、わたしは……』

『どうして？』

『東京の人のおほく入込むところはどうしたつて土地柄が。――お喜美さんでもさういつてゐました。――馴れないものが行つて何も恥をかくことはありませんわ。』

『そんな詰らない……』

『それより、わたし。』おみちはかぶせて『あんまり人のゐない――ゐても東京の人のゐない、淋しい、山の中か何かへ行きたいと思つて。――不自由のない、にぎやかなところへ行く位なら東京にゐたつて。――東京にゐるはうがよつぽどようござんすわ。』

『そんなことをいつたつて磯部は山の中ぢやアないよ。』

『いゝえ、山の中でなくなつても。——山の中でなくなつてもさういふところなら。——話を聞いたゞけで、わたし、必とそこなら氣に入る。——自分の思つてゐるところのやうな氣がするんです。』

『みるものもたければ、遊びに行くすべもない、ほんたうに温泉だけの、これは退屈な、面白くも何ともないところだつていふぜ。』

『その代り閑靜でせう？』

『それはさういふところなら閑靜なわけさ。』

『そんなら、わたし。——構ひませんわ、面白くなんぞなくつても。』

『けど……』

『大丈夫。——自分でいふんだから大丈夫ですわ。』

『それはお前さへ好ければわたしはどこでもいゝ。——お前のために行くんだから……』

『えゝ、ですから。——ですから我儘をいひますわ。』

『…………』

『けど、あなたにも好いんですわ、磯部は。』おみちは言葉をつゞけて『胃腸にたいへん効くんですつてものね、そこのお湯……』

『それは聞いてゐる。』

『すれば、あながち、わたしのためばかりでもありませんわ。』

……古くから出入してゐる張屋にかぶ源といふ男がある。この男、若い時分から湯治場あるきが道樂で、忙しい

稼業のわづかな透きをみては、始終、骨やすめ（自分でかれはつねにさういつた）のさうした旅ばかりしてゐた。

で

『實は、へえ、二三日越後のはうへ行つて來たもんで……』

にやにや笑ひながら、誂へものの遲れた言譯をするのを聞けば、定まりでいつもさうしたことをかれはいつた。

『稼業の用で？』

『いゝえ、柏原まで一寸……』

『越後の柏原。——何だか聞いたことのある……？』

『へえ、有名な溫泉のあるところで。——いゝえ、そのさきに、そこからまた七八里入つたところに人のあんまり知らないところのあるのを聞いたもんで……』

『そんな遠くまでわざわざ。——御苦勞なこつたね、ほんたうに。』

『人間、しかし、たまには骨やすめをしないと……』

『始終ぢやァないか、お前さんのは。』

『へえ、しかし。——さう被仰つても、しかし、お内儀さんでも一度行つて御覽になれば……』

『眞つ平。——たのまれたつて嫌だ。』

『お内儀さんは喰はず嫌ひだから。——すこしは、あなた……』

『どこが面白いだらう、そんなに？』

『それは、あなた、面白いこともあれば辛いことも。——去年の夏、甲州のさきのある溫泉へ行つたときなんぞは、

身の丈より高い草の中を三里。――馬です。―馬しか通ひません。――あんな、まア、難儀な目に逢つたことは……』

ありやうは、温泉ゆきの話のいよ〳〵決つたとき、このかぶ源におみちは相談した。――遠くなくつて、閑靜で、景色がよくつて、喰べものにもそれほど事を缺かないところ。――さうした條件をまへにして言下にかぶ源はこたへた。――それが磯部だつた。――勿論、かぶ源は、おみちの兜をぬいでさうした料簡になつたことをどんなことでゝもあるやうに喜んだ。――いつもよりさらに輪をかけてその効能を説いた。

『いゝえ、わたしは自分ぢやアちつとも行きたかアないんだけど。――良人がいろ〳〵いふし、去年のやうに寢込んでもつまらないから。――つまり、まア、用心に……』

さういふいひ方はしながらも、決していつものやうに茶化さず、熱心におみちは耳を傾けた。

で、さて、いよ〳〵磯部と事決つたその日から仕度がはじめられた。そは〳〵、もう、おみちはお仲をつれて買物に出てあるいた。――いざとなると、實際、楊子歯みがきから揃へてかゝらなければならなかつた。――とき〴〵梅雨らしい雲のまはり方はするものゝ、矢つ張ふるまでに行かないですぐまた青空の撫る天氣。――さうした天氣のつゞく間に、町の上は、ゆきずりの凉傘のかげに、街路樹の眩しい照返しに、いつかもう「夏」は、濃く、あかるく、華しく、その雜ひを人々のまへに凝してゐた。

はじめての經驗のまへに浮立つたおみちの心もちは、すこしの無理もうそもなく、その身のまはりの力強い光景をそのまゝうけ入れることが出來た。

『あら、姉さん、ほんたうに？』

出たついでに、おみちは、お喜美のうちの門まで報告がてら寄つた。――お喜美はそれに全く意外らしい面色を見せ

ていつた。

『この間だつて、だから、湯河原だの熱海だのゝことをお前さんに聞いたぢやアないの？』

おみちは不足らしくいつた。

『えゝ、だけど……』

『可笑しい？』

『いゝえ、可笑しかアありませんけど。――よく、しかし、思ひ切つて……』

『自分だつてあんなに勧めたくせに？』

『えゝ、ですから。――でも、とても駄目だらうと思つてましたわ。』

『そんなみ捨てたもんぢやアないわ。――行かうと思へば、わたしだつて……』

『結構ですわ、だから。』お喜美はわらつて『行つて見れば、姉さんだつて、來年もまた……つてことに必となります。』

『ならないわね、それは。』おみちは外らして『大丈夫よ、それは……』

『いゝえ、大丈夫でないはうがいゝんですわ。――たまにはさうでもしなければ。――いつまで姉さんだつて若くちやア……』

『失禮ね。』

『いゝえ、ほんたうに。――さう／＼休みなしに働いてばかりゐられやアしませんわ。』

『でも、性分だから、わたしのは。――行つたつて、必と、三日と辛抱出來やアしないから。』

『けど、姉さん、行くからには十日と十五日は無理でもゐなくちやア……』

『それは我慢の出來るだけはするつもりだけれど。――とても、でも、所在がないだらうと思つてね。』
『わたし、磯部つてところは知らないから……』
『どう、一しよに行かない？』ふいとおみちはいつた。『二三日でも都合つかない？』
『いゝえ、行きたいんですのよ、わたし。』お喜美はかぶせるかたちに『姉さんがさういはなくつたつて、わたし……』
『ぢやア來ればいゝ。』
『それがさう行かないんですから情けないでせう。』
『どうして？』
『お浚があるんですの。』
『ここへ來て？』
『いいえね、それが、家元さんのはうの何か義理のある方が、今度名まへをとつたんですの。――で、その御披露。――
――といつた風の、まア……』
『やつぱり御師匠さんになる……？』
『いゝえ、いゝところの奥さんで。――もとはどこかの藝者衆らしかつたんですけど。――古いことはわたしなんかよりよつぽど……』
『で、いつなの、それは……』
『日はまださきなんです。――さきなんですけど それを控へてゐるんでいろいろ。――それこそいつお呼出しがあるか分らないんです。』

『ちやア仕方がない。』

『でも、姉さんはいつ……？』

『立つの？』

『え〻。』

『明後日頃立たうと思つて。』

『兄さんも？』

『でなくちやア、わたし一人ぢやアお前さん……』

『さうですわね。』

『けど、汽車に乘るまで。——乘つてしまへば一人だつて大丈夫よ。——乘換へる世話もなし、下りてすぐ俥に乘ればいいんだつていふから……』

『でも、それぢやア……』

『一しよだつてどうせお互に口をきくんぢやアなし。——いつそ一人のはうが暢氣かと思つて……』

さうはいつた。——が、心のどの隅にもさうした影はさしてゐなかつた。

『あんなことといつて。』

お喜美はわらつた。

『でもね、明後日立つ心算でも。』おみちはそれにこたへないで『降れば止すわ。——お天氣になるまで延すわ。』

『でも、この分ぢやア當分……』

お喜美は外のはうに眼を遣つた。

『心配はないと思ふけど。——でも、梅雨(つゆ)はまだ明けないんだからね。』

『けど、あの空のいろ。——氣(け)もありませんわ。』

『いくら空梅雨(からつゆ)といつてこんなこともめづらしい。』

『どうでせう、このまんまで熱くなつたら？』

『思ひやられる……』

さういつて、おみちは、急にいそがしく立上つた。

『お邪魔さま。』

『あら、おかへり？』

『まだ買物が殘つてゐるの。』

『立つとして、ぢやア、明後日(あさつて)何時の汽車で？』

『分らないの。——そこまでは、まだ……』

『どつちみち朝でせう？』

『だらうと思ふけど。——知らせるわ、決(き)まつたら。』

『さうして下さいな。——停車場まで行きます、わたし。』

『何しに？』

『いゝえ、送りに。』

『可笑しいわ、そんな。』おみちはわらつて『どんな遠くへでも行くやうに……』
『あら、姉さん、このごろはどこへ行くんだつてさうしますわ。』
『でも、お前さん。』
『さういつたつて、姉さんは、その味をまだ知らないんぢやアありませんか。』
『知らないつたつて、お前さん。――しやうがないぢやアないか、それは……』
ちやうどそこへ、多分には店の合間をみてゞも來るのだらう、二十四五の、前掛をかけた、どこか近所の息子株とみえる若い弟子が稽古に來た。――それをしほにおみちは格子の外に出た。
『どつちへ出よう？――やつぱり廣小路へ出ようか？』
涼傘を擴げて、おみちは、買物の包みをかゝへたお仲のはうをふり返つた。

……いつそ一人のはうが暢氣かと思つて。――さういつたのが、ゆくりなく、惡いことはいひあてたかたちになつた。
立つ朝、それも九時四十分の汽車に乘るつもりでうちを出ようとする際に、向島の病人の、拂曉急にへんの變つたといふ知らせが來た。――老年でもあり、半年あまりの長煩ひでもあつて、所詮もう助からないとはいはれてゐたが、この間見舞に行つたときの工合では、食もすゝめばいふこともハツキリしてゐた。微塵そんな氣色はみえなかつた。――まだ大丈夫。――さう思つて清吉はかへつて來た。――それからまだ十日經たない……
『どうします、あなた？』

ともゝゝ不意を喰つたおみちは濱吉の顏を見上げた。
『行かなければなるまい。』
店から來た立身のまゝ濱吉はいつた。
『行くんですか？』
『知らせて來られた以上知らない顏は出來ない。』
『さうですけど。』
『それは、まア、先方があゝ稼業を止めたんで世間ついとほりの附合でしかいまはなくなつたが、以前をいふと此奴、俺の死んだあと思案にあまることがあつたら近常へ相談に行け。――さうまでおぢいさんもいひゝゝした位だ。』
『それは知つてゐます。』
『先方もその交誼を思つたから知らせて來たんだらう。』
『さうでせうけど……』
おみちは胸に落ちないものがあるやうに『ぢやア、わたしの倅だけ返しませうか？』
『どうして？』
『わたしのは入りませんもの。――向島へ行くあなたのだけあれば……』
『何だ、行かないつもりか？』
『どこへです？』
『停車場へさ。』

『だつて、あなた。』

『お前を上野へ送つてそれから向島へまはる。——使の口ぶりでみてもゝう間に合はないことは分つてゐる……』

『でも、それぢやア。——どうするんです、あなたは。——乘らないんですか、汽車に？』

『乘るさ。』

『だつて……』

『あとから乘る。』

『あとから？』

『今日、顏を出して置けば、都合であとは代理でもいゝ。——だから、遲くも、明日の午後は乘る……』

……嫌も應もなかつた。——といふのは、平生無駄をいはないだけ濱吉は、いざとなると、ことを決めたりする上でわけもなく强かつた。强く、且、素早かつた。自分のかうと信じたことは、構はず自分の手で、自分だけで所理した。決して他人のさし出ることを許さなかつた。——始終その術に落ちて足搔のつかなくなるおみちは、このことについても、そんなはず、そんな約定ではありえないと思ひつゝ、納得させられるのに一ト言の異議もいへなかつた。——ぢやアわたしも延します。——明日の午後にします。——さうさへ、それだけさへいふことが出來なかつた。——さうするのを當りまへのやうにそのまゝおみちは俥に乘つた。

どつちかといふと濱吉も旅馴れないはうだつた。汽車に乘るのに、どこへ行くのでも、すくなくもその三十分まへ停車場へ行かなければ安心出來なかつた。——それがとんだ役に立つて、出際にさうしたさまたげのあつたに係らず、おみちの上野に着いたとき、發車までにはまだ十分あまり時間が殘つてゐた。切符はお仲とさきへ荷物を持つて出た店

の者が買つて置いた。——うけとつて、すぐ、おみちは歩廊に入つた。

『こゝ。——姉さん、こゝよ……』

呼ばれておみちは立留つた。——ずつと前方のはうにお喜美がお仲とならんで立つてゐた。

『待つた、随分?』

いそいで側へよつて袂からハンケチを出した。

『いゝえ、遅くなつたかと思つて大急ぎ。——出際に、また、人が來たもんですから。』

『此方もね、出際に、急に面倒なことが出來たもんだから……』

『さうですつてね。——聞きましたわ、いま、お仲さんに。』

『もう少し。——ほんとのもう少しで出てしまふところ……』

『よござんしたわ、出てしまはないうちで。——出たあとだつたら、姉さん……』

『行く、すぐまたかへる。——電報が來て大騒ぎ……』

『で、兄さんは?』

お喜美は帯の間から扇を抜いてあたりに眼を配つた。

『來るわ、いま、一と足おくれて……』

『いつ立つんです、兄さんは?』

『自分ぢやア明日といつてるけど、とても來られないと思ふわ、明日は。』

『さうですわね、さういふ御不幸ぢやア……』

『いゝわ、かうなれば一人でも。』
『そのはうが暢氣なんぢやアありませんか姉さんは。』
わらつてお喜美は扇を擴げた。
『だから、わたしは、わざと延さうといはなかつた。』
いひながらおみちも帶の間を探つた『あら、どうしたらう、わたし？』
『何です？』
『いゝえ、扇を。——たしかに持つて來たつもりなんだけれど。』お仲のはうを向いて『ねえ、お前にわたし出してもらつたね、抽斗から？』
『へえ。』
お仲はうなづいた。
『たしかに、わたし、こゝへ挿した覺えがあるんだけれど。——急いでおッことしたかしら？』
『お落しになるわけは……』
お仲はいつた。
『と思ふけど。——どうせ、いゝえ、大した扇だから構やアしないけれど』
『けど、困るでせう、姉さん？』お喜美はいつた。『惡いんでよければ、これ。——間に合せにわたしのこれをお持ちになつたら？』
『でも、困りやアしない、お前さん？』

『いゝえ、わたしは。――わたしはうちへ歸るんですもの。』

『ぢやア借りて行かうかしら?』

『その代り酷いんですのよ。』

『何だつて形(かたち)さへあれば。』おみちはうけとつて『上等だわ、これなら……』

『どこかゝらもらつたんですわ。』

『いゝ風が出る……』

　おみちはそれをつかつてみせた。

『何をしてゐるんだ、お前たちは。――早く乘らないと時間だぜ。』

　そのときうしろへ濱吉は來た。――いそいで、おみちは、お仲を連れて車輛(くるま)のなかに入つた。

『宿へいま電報はうたしたから……』

　濱吉はすぐ窓の側によつた。

『何てどす?』

『迎へに出るやうにさ。』

『分るでせうか、しかし?』

『何が?』

『わたしたちが?』

『先方は稼業(しやうばい)だ。』笑つて濱吉はお喜美をかへりみた。『ねえ、お喜美さん。』

『えゝ、それは……』

わらつてお喜美もうなづいた。

『どうだ、お喜美さん、一しよに行つちやア……?』

『いゝえ、行きたいんですの。――一昨日も姉さんにさういつたんです。』

『稼ぐばかり能ぢやアない。――たまには、お前……』

『いゝえ、それが。』お喜美は言譯するやうに『生憎なんですの、ほんとうに。』

『お浚があるんですつて。』

引取つておみちはいつた。

『でも、いゝえ、一ト晩ぐらゐどうにでもしますわ。』お喜美は言葉を繼いで『姉さんの行くのをみたら、急にわたし……』

『明日行かないか、いつそ?』

濱吉はいつた。

『えゝ……』

『わたしは行くんだ、明日。』

『さうですつてね。』

『行かうぢやアないか、一しよに。――一人より連のあるはうが張合があつていゝ。』

『行かうかしら、思ひ切つて?』

お喜美のさういつたとき發車のベルは響いた。——滑吉も、お喜美も、窓のそばを離れた。

『何にも忘れものは……？』

『なかつたと思ひますけれど……』

『あつたらあとから届ゐる。』

『えゝ。』

列車の動き出したとき、滑吉とお喜美と、二人ならんで立つたすがたのだん〳〵自分に遠ざかつて行くのを、おみちは、ありえない、いつそ不思議なことのやうに感じた。

●

『……お扇子、こんなところに入つてをりました。』

その夕方、磯部の古い大きな宿屋の二階の一室で篠の箱をあけて、手廻りのこま〳〵したものをいろ〳〵出してゐたお仲が急にかういつた。——あたりに人氣の全くないガランとしたなかに、湯に入つたあとの、疲れた、氣落ちのした體をおみちは廊下の近くに横へてゐた。

『どうしてそこへ入つたらう？』直ぐにおみちは體を起して『おみせ……』

『御覧下さい。』

お仲はおみちのまへに手を伸した。

『たしかに、これ、帯の間に挿したんだけれど。——思ひ違へかねえ？』

いひながらおみちはそれを擴げた『貸して御覧、そつちの。――お喜美さんの……』

お仲は、床の間の、みだれ箱のなかゝらまたそれを出した。――うけとつて、おみちは、擴げて兩方みくらべた。

『大へんな違ひだねえ。』

『何がでございます？』

『いゝえ、わたしのとお喜美さんのと。――背からしてお喜美さんのは華奢に出來てゐる。』

『色もまるで……』

媚びるやうにおみちはわらつた。

『さうさ、こんな派手な。――どうしたつて二十一二の人のもつ扇だね。』

『お内儀さんのは、また……』

『わたしのは、これは、お婆さんがもつんだよ。――年は、これで、わたしと三つしか違はないんだけど……』

『どなたでございます？』

『お喜美さんさ。』

『そんなお年なんでございますか、森田さんのお内儀さん？』

お仲はおみちの顔をみた。

『とてもみえないだらう、さうは？』

『と、三十……？』

『二一さ。』

『わたくしは、また、二十六かも。――そのくらゐとばかり思つてをりました。』
『誰でもさう思ふ。――だから綺麗に生れついた人は徳さ。』
『ほんたうでございますね。』
『それに、やつぱり、一人でゐて歌澤なんぞやつてゐると……』
いひかけて、おみちは、歩臺（プラットフォーム）に濱吉と二人ならんで立つたお喜美のすがたをはツきりおもひ浮べた。
さう思ふと一しよにカツと顔のほてるのを感じた。――さうした、はづかしい、端下（はした）ないことは、ついぞいまゝで、夢にも嘗て思つたことのないおみちだつたから……
『おみえになるでございませうかね、明日？』
何の氣なしお仲はいつた。
『さア……』
『おみえになると好うございますけど。』
『…………………』
おみちはそれにはこたへないで立上つた。廊下に出ると、中庭の、たもの梢が眉を壓して高々と曇り日の感じに茂つてゐた。――遠く河瀬の音が雨のやうに聞えた。
『隨分淋しいところでございますねえ。』
やがて籠の始末を終つてお仲もともゞ廊下に出た。

『田舍だもの、お前……』

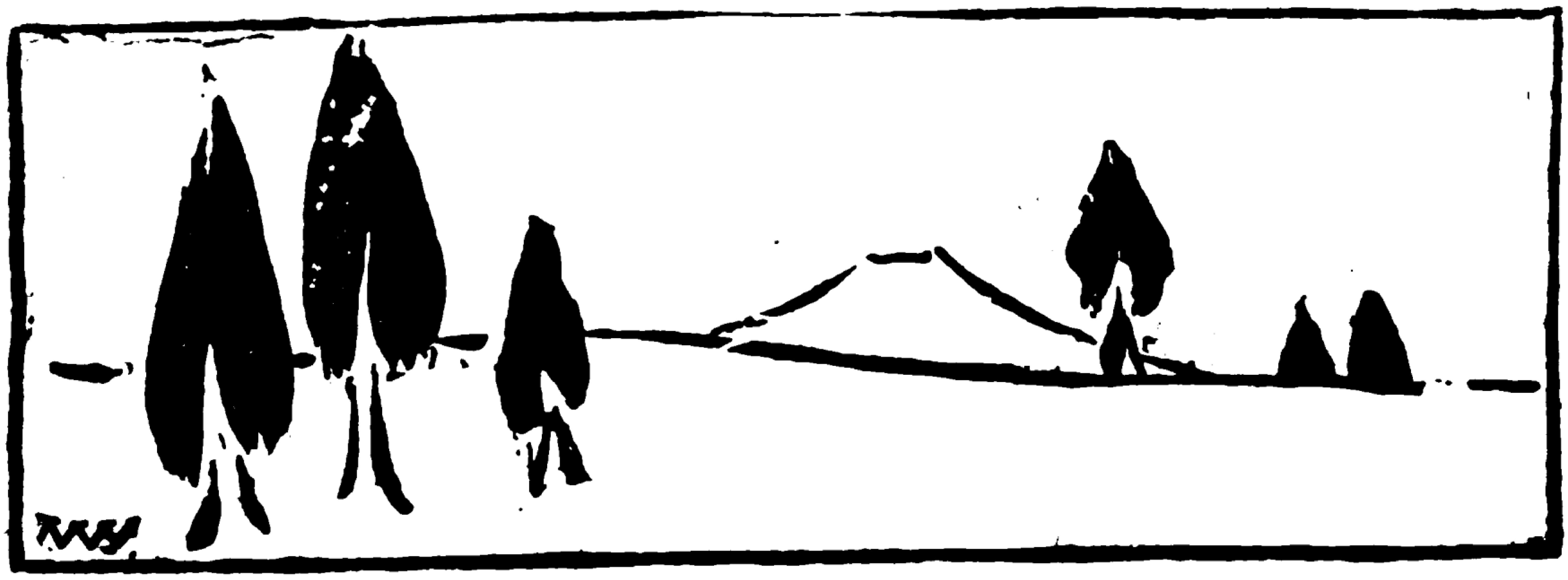
おみちは先刻俥で揺られて來た、こゝまでの、陰氣な、白ッちやけた、右ひだりに泥溝のやうな小流れをもつた石高道をいまさらのやうに心細く思ひ返した。

その晩、おみちは、夢でお直——死んだ義理の仲の母親に世にも優しい言葉をかけられた。

（「おみち後日」——十五年七月）

▽戲曲　**大鹽平八郎**　眞山青果

筆者努力して第三幕以下の稿を續けたれども、本號締切までに完結に至らざりし爲め、九月の特別號を俟つて後半全部を公にする事とせり。此段讀者の御諒解を乞ふ。



半生

明石敏夫

一

己は二十六で徴兵檢査を受けた。その春學校を終つて郷里に歸つたのであつたが生家にはゐにくい事情があつて叔母の所に身を寄せてゐたので檢査の日もそこから出かけた。

檢べは豫期してゐた通り近視眼のために不合格になつた。檢査場を出ると門の所に從弟の修二が迎ひに來てゐた。

「どげんぢやつた」と一緒に家の方に歩きながら訊ねた。不合格だつたと聞くと、「ほう」と己の體を見上げて、「やつぱり眼が不可んとばいな」と云つた。

叔父も叔母も待つてゐた。晝食には四人で形ばかりの祝盃が擧げられた。

「此つから本家に行かにやならんばい」

と己が食事を終つて立たうとした時に叔母が云つた。

檢査の結果を己自身で行つて父に報告しなくては惡からうと云ふのである。が、歸省つてから一ケ月以上になるけれ共ろくろく顏出ししてゐないので己は行き度くなかつた。己が默つてゐると叔母はまた、
「どうせ一ぺんは行かんぢや通らんこつぢやけん向うから呼びに來られん先きに行つた方が宜かろばい。先刻もお母さんから使が來て本家でも盃の用意して待つとる云うこつぢやけん」
「何なりばお前が一緒に行つてやりや宜かたい」
と叔父が云つた。結局叔母とつれ立つて出かけた。
「此つでやつと重荷を卸ろしたたい」と叔母は途々「男は檢査がすまん間は體がきまらん如つばかりあつて氣が落ちつかんけん」と安心したやうに云つた。
初夏の痛いやうな日ざしが眞上から照つてどこかで早い蟬が鳴いてゐた。己は默つてついて歩いた。
家には親類の者が集まつて座敷には膳が並んでゐた。己は行くと直ぐにみんなと一緒に席につかせられた。母が自分で銚子を持つて一同を取り持つた。己にも酌をしてくれながら、
「ほんに宜か都合ぢやつたな。何年もかゝつて學校を終うち、此つから云ふ時になつて又兵隊勤めをするのは大へんぢやけん」
と云つた。すると父が出し拔けに、
「不合格だつ云ふのに祝詞を云ふわけがあつか」と一旦口の所まで持つて行つた盃をおろして咎めた。「一人前の御奉公が出來んことを悔まにやならんぢやなつか」
己は思はず目を上げて父の顏を見た。己は何か冷たいもので首筋でも觸わられたやうな氣がした。左様する必要があ

るなしに拘らず一應自分の周圍の者を威壓しておかないではすまない父の氣象が十年前と少しも變つてゐないのを己は見た。一座は默つてしまつた。

「そつでも、まあ」と叔母が取り做した。「此つぱかりは何方を望んだけんち儘にならんこつぢやけん。どげんでもなつた方を良かこつにして悦ぶより外なかですたいな」と云つた。

己は皆から差される盃を一々受けた。醉つて來たので母にことわつて貰つて早く席を退いた。横になつて臥んだらどうかと云つて母は已を二階に連れて上つた。そこは以前己の書齋だつた所である。窓からは昔ながらの景色が見えた。人家のはづれに森が見えて町ぢゆうに時を知らせる寺の鐘樓が梢の上にその頭だけを露はしてゐる。室の中は己がゐなくなつてから誰れか入つたらしい樣子はなかつた。仔細に見れば壁や襖にも己の穢した痕がそのまゝ殘つてゐるやうであつた。母が延べて行つてくれた布團に横になつて見たけれ共心は落ちつかなかつた。

檢査後も依然叔母の家で暮した。一ケ月は瞬く間に過ぎた。

そこは町の山の手の古い石垣や門の多い士族町であつた。店は海岸に近い本通りにあるのだけれ共息子の修二に嫁が出來てからは若夫婦を店において叔父叔母はその靜かな住居に移つたのであつた。そして叔父は毎日晝間だけ店の方に監督かたがたの手助けに通つてゐた。

裏の畑に臨んだ二階に己は起臥した。町の背後を屏のやうな恰好に劃つた台地が向うに見えて濕つた南風が海岸の方から吹いて來る日には松並木が騷々しい音を立てた。

不自由勝ちに過ごして來た下宿生活や苦しかつた學校通ひの事を己は長い旅に疲れた人のやうなホツとした心持ちで

振り返つた。晝寢の夢によく東京のことを見た。目の悪い已を馬鹿にしては調弄つたり悪戯したりして悲みにしてゐた下宿のチビ婢が夢に出て來た。惱まされ通しであつた試驗の夢もよく見た。眼を醒ますと午下りの燒けつくやうな日が戸外に照つて屋敷町の午後は毎ものやうに極く靜かであつた。風向きによつては町の騷音がかすかに聞こえて來た。

「外に出て氷水でも飮んで來んか」

と叔母は已が家の中にばかり引込んでゐるのを氣にしては時々聲かけた。修二の店に遊びに行かないかとか海に浸つて來いとか云つて外出させようとするのだけれども誰れも知り人とてはない町に出て行くよりもそんなにして獨りきりでゐる方がよかつた。落ちついた家のまはりの空氣が已の心を暢々させた。少しも退屈なんぞは感じなかつた。

さて、已も將來の方針を定めねばならなかつた。

みんなは已が此のまゝ町に落ちついて父母と一緒になるものと決めてゐたらしい。たゞ叔母だけが、

「何も急ぐ事ではなし此れまでの勉强の骨休めにゆつくり遊んだら宜かたい。その上で此地にゐるのが厭やなりば他所に行つて月給取るなり何うするなり決めりや宜かぢやなつか」と云つて町に引き止めようとはしなかつた。叔父も同じ意見であつた。已が東京にゐる間に大そうな學問でもして來たやうに考へてゐるものだから何も此んな田舍にゐて、妙な關係になつてゐる父や繼母と一緒に暮らさなくとも何處ででも結構世渡りは出來るものと思つてゐたのであらう。所で已は他の者が三年かゝる所は四年も五年もかかつてやつと學校を出は出たけれ共世の中に出て一人で食つて行ける自信などはてんでなかつたのである。何方かに決めなければならないと思ひながらとうとうその夏ぢゆうぶらぶらして過ごした。

たまに生家に行くと、母は大そう喜んでいろいろにもてなした。父は自分が經營してゐる會社に出るので大がい留守であつた。母は二階を己のために手入れしたり、退屈だらうからと云ふので會社に不用な小舟があつたのを父に云つて家の近くの川に廻して貰つてくれたりした。行くたんびに己を少しでも永く引きとめようとして毎でも夕飯までは歸さない。着物や小遣錢の事にまで絶へず氣をつけてくれた。己には彼女が己を一日も早く自分等の所に引取り度がつてゐるのがよく分つてゐた。それでそんなに好意を見せられる事が却つて窮屈でならなかつた。で、すまないとは思ひ乍ら自然遠ざかり勝ちになつた。

しかし或る時とうとうその話が出た。何處か他處に行つて月給でも取るつもりかと訊くからそんな的はないと己が正直に云ふと彼女は、

「そつぢや何日までも叔母さんのとこに厄介になる云ふわけには行かんけん、家に來るごつしなはり。」

と云つた。さうなれば自分等も幾ら安心するか知れないからと云つて、

「お父さんも氣だけはあげん强かですばつてん、何云ふても既う歳ですもんな。さういつ迄も今んごつ一人で商賣をやつて行くわけにも行かんし、あゝたにでも側にゐて片腕になつて貰はにや心細かつですばい。」

などゝ云つた。己には母が好い加減なことを云つてゐるやうにしか思へなかつた。父が己を賴りにしてゐるなどゝ云ふのを信ずる事は出來なかつた。

(今後彼奴の身に關しては自分は一切構はないのだから然う思つてゐて貰い度い)と親戚の前に宣言して己を家から追ひ出したのは己が十八の時であつた。それも一時の激怒からと云ふのではなくそれまでには親類の手に餘るやうな衝突がずつとつゞいて來たのであつた。双方むきになつて啀み合つた揚句にとうとうそんな事になつたのである。今度歸つ

てからも己達はつい打ち解けた口を利き合つた事はなかつた。どちらも相手の心がよく分つてゐるから今更融和の機會を作らうとはしなかつたのであつた。だから母の言葉は餘りに見えすいてゐた。

それに何よりも叔父叔母に一應謀つてからでなくては決めるわけには行かないと思つた。己は瞭りした返答はせずに歸つた。

すると或る日、晝寢から起されて階下に降りて行くと茶の間に母が來てゐて叔母と話し込んでゐた。

「先日の事で來たつですばい」と己がそこに坐るのを待つて母が云つた。「叔母さんには私の方からお話ししましたけん、今夜からでも來て下はらんかな。お父さんもそのつもりで待つとんなはるんぢやけん」

己は叔母が何か云ふだらうと思つて默つてゐた。然し彼女はたゞ、

「無口な男ですもんな」と云つて笑つただけであつた。母はさつさと話を進めて叔母に「そつちや叔父さんが歸んなはつたなりばそげんお話しして今夜から遣つて下はるごつして下はり」と云つて歸つた。

二人きりになつても叔母は依然何も云はなかつた。己は彼女にすまないやうな氣がしてならなかつた。叔父は店から歸つてその話しを聞くとたゞ然うかと云つたゞけであつた。彼も別に何も意見は述べなかつた。そして、では今夜は修二もこゝに呼んで別れをしようと云つた。夕飯の時には酒も出た。

その晩から己は父母の許に移つた。間もなく父の酒精會社に通ふ事になつた。

會社は町はづれの海沿ひにあつた。事務所と工場とが同じ構内になつてゐた。父は事務所の一方の小さい室を一人で占めてゐたがその片隅の壁にくつつけて己の仕事卓はおかれた。

が。仕事と云つては書類の整理か手紙の代書位ゐであつた。いつ迄經つてもそれより外に寄合はれないので張合ひがなかつた。暇が多過ぎるのも困つたがそれよりも口一つ利くでない父と終日同じ室に暮らすのが息づまるやうであつた。己は母の好い加減な言葉に誑せられて彼女の云ひなりになつたことを後悔した。

もつとも父の無愛想は己にだけの事ではない。そしてみんなはそれを何うにもならない彼の性格だと決めてゐるのであつた。が、幼い時分から一諸に暮らして誰れよりも熟く彼を知つてゐる己の目には父が人に接する時には何處かに意識して相手を壓へつけようとするわざとらしさが見へた。それが己には不快であつた。

仕事らしい仕事もしないのに己は毎日非常に疲れたやうになつて家に歸つた。母はいつも好い機嫌で迎へて、今日はどうだつた。六ケしい仕事はなかつたかとか、慣れないのに大へんだらうとか云つた。己は心の内に彼女に對して腹立たしさをおさへる事が出來なかつた。

夕飯をそこそこに終ると己は毎晩用事もないのに戸外に出た。それがその時分の己の唯つた一つの樂しみになつてゐた。世間は秋の半ばを過ぎてゐた。家の前の往來を少し行くと道はそこから直角に曲つて海に面いてゐた。そこが町で一ばん賑やかな縣道沿ひの本通りであつた。心持ちなぞへになつた町並みの兩側に灯の點る頃の靜かな空氣が己の心を和らげた。己はいつも波止場まで歩いて暫らく海を眺めて引返した。

時には修二の店に立寄る事もあつた。修二もその時刻には店の仕事を片づけて奥に引込んで親爺に許されてゐる晩酌を若い妻君を相手に飲んでゐた。己が入つて行くと多分叔母にでも左樣云はれてゐるらしく直ぐに己の分も仕度してすすめる。修二は己より四つ年下であるがずつと世間なれてゐて怜悧であるばかりでなく人が良くて從順であつた。己達は子供の時分兄弟同樣にして叔母に育てられたことがあるので誰よりも隔てがなかつた。行くたびに氷遊ひして父が疑

てしまつた頃に家に歸つた。

不快な日はつゞいた。そこに持つて來て思ひ設けない問題が新しく湧いて來たのであつた。

父が商用で一夜泊りの旅に出た事があつた。その晩、母はいつになく己をおそく迄階下に引きとめて、いろいろの話しの末に結婚問題を持ち出した。

藪から棒の相談に、己は始めの間は母がどれ位ゐ本氣で云つてゐるのか分らなかつた。然し彼女は眞面目であつた。己の將來、一家の都合、自分の立場などから說いて己に妻帶をすゝめた。己は母が眞劍になればなるほど返答に窮した。今結婚するのが好いか惡いかよりも己は二十六になるその歲までついぞそんな事を考へた事はなかつたのであつた。自分と云ふ者を人並みの才能を持ち合せないで生れついた人間だと心に決めて來たせいか、又は此れ迄の生活にあまり餘裕がなさすぎたせいか結婚だの色戀だのと云ふ事は自分に取つて縁のない事のやうな氣ばかりされた。

母は己がいつ迄たつても口を利かないのを何と思つたのか何か他に考へた事でもあるのかと訊いた。己がまだどうしてもその氣にならないものだからと云つてことはると彼女は、でも自分がかうまで賴むのだから自分の望みを叶へてくれると思つてその氣になつて貰ひ度いとまで言つた。彼女の思ひ詰めた熱心さに己は腹を立てることも出來なかつた。あまり突然で今少し考へた上でなければ何と答へて好いか分らないからと云つてやつとその場を逃れた。

己は床に就いても眠らなかつた。此れまで受けて來た心づくしを思へばむげに拒むわけには行かなかつたが、それかと云つてこゝで承諾してしまへば己の體は今よりも一そう取り返へしのつかぬ深みに陷るのは分り切つてゐた。

次ぎの日己は會社の歸りに叔母の所に立ち寄つた。が生憎今日は店の方に手傳ひに行つたと云つて留守であつた。己

は家の中に寢そべつて永いこと待つた。日が暮れてやつと叔母は叔父と一緒に歸つて來た。よく訪ねて來たと云つて喜んだ。三人揃つて食事をして暫らくぶりで自分の家に歸つたやうなのんびりした氣分になつた。が云はうと思つて來た肝心の用件はどうしても口に出なかつた。今度母の云ひなりになつて生家に歸つたことが叔父叔母に何かの不快を殘してはゐないかと云ふ引け目が己の心にあつた。とうとうそのまゝ暇乞ひして家に向つたが母がいつもの通り無理に作つたやうな氣嫌の好い顔をして待ち構えてゐるだらうと思ふと入つて行く氣はしないので途中から道を更へて海岸の方に歩いた。波止場には人影はなかつた。海を覆ふた空に星が少く生温い晩であつた。石に腰を掛けて沖の漁火をぼんやり見詰めたまゝ己は途方に暮れた。此んな時に誰れ一人親身に話相手になつてくれるものゝゐないのが心細かつた。そのためか、既う夙うに忘れてしまつて此れまでついぞ考へた事のなかつた生母の事を今初めてのやうに思ひ出した。

二

生母を失つたのは七つの歲であつた。

町の中心から北にかたよつてもう少し行けば出はずれやうとする所に郡立病院があつた。その病院で己は永い間母と一緒に暮した。

そこは海岸からは可成り遠く町なかだのに樹が繁つて人家の騷ぎから全然はなれてゐた。木立ちの間から教會の白い屋根が見えた。風向きに依つてオルガンや唄聲がそこから聞えて來た。夜になると靜かすぎて寂しかつた。

病室は病院の敷地よりは一段低い所にある粗末な平屋で椽の曲り角の端の室に母は入つてゐた。室内は普通の住居と少しも變りなく疊も障子も古びてゐた。木立ちが近いので晝間も薄暗かつた。

母は何と云ふ病氣であつたのか毎も仰向けになつたきりで撃劍道具のやうなものを胸から背にかけて箝めてゐた。顔色が青く頬骨ばかり尖つてゐたが始終己を目の仇敵にして叱つてばかりゐた。十四五の小女が傭つてあつてそれが七輪で小さい賄をしたり使歩きをしたりした。他の病室は己達がゐる間にいろいろの人が出たり入つたりしたが母はその誰れとも懇意にしなかつた。そして偶に己が他室の人に何か貰つて歸つたりすると叱つた。見舞客が來て菓子を置いて行つても自分でそれを隱してしまつて己には滅多に呉れなかつた。着物を汚す草履を切つて歸ると云つては痩せた顔を情けなさゝうに顰めて何故病氣のお母さんを心配させるのか何故そんなに親不孝し度がるのかと詰つた。果ては己が聞き分けないのが歯痒いと云つて泣き出すのであつた。

己は狂氣じみた母の目付や陰氣な病室が息詰まるやうなので戸外でばかり暮した。近所に誰れもゐない時には遊び友達の居さうな空地と云ふ空地を片つぱしから捜して歩いた。お城の跡や常燈の寄場に行つて見ると、誰か屹度仲間が居た。終日遊び暮らして歸つて母には家に行つてゐたのだと嘘をついた。そして家の樣子を訊かれると道々考へておいた出鱈目をまことしやかに話した。

その時分まだ家では酒を造つてゐた。父は忙しいので己が行つても相手にならなかつた。己が酒藏の中に入つて傭人共と遊んでゐるのを見つけると「早く病院に行かんか」と叱つた。たゞそれだけで一度だつて優しい言葉を懸けたり母の事を訊ねたりはしなかつた。病院へも滅多に來なかつた。偶に顔を見せても母に對して打解けたやうな所はなく、双方とも非度く眞面目な顔のままで側にゐる己達の目にさへ飽氣ないと思ふ位いさつさと歸つてしまつた

するうち己は家の方に引きとめられたまま今度は病院に行くのを禁じられるやうになつた。母が死んだのはそれから間もなくであつた。

葬ひの時にはいろんな人が集つて陽氣に騷いだ。皆で己を大事にするので大へん得意であつた。海の上を五里ばかりはなれた日良島と云ふ所に住んでゐる祖父母も知らせを受けてやつて來た。葬ひがすんだ後でも一ばん永く家に殘つてゐたが祖母はその間己を抱いて寢た。そして自分達が日良島に歸へる時には己も一緒につれて行くと云つてゐたが何故かその時になつたら約束を反古にしてわざわざ己を戸外に出しておいてそのあとでゐなくなつた。

家には慣れた老婢がゐて若い下女と二人で家事の始末をやつてゐた。季節が暖かくなると酒造期も一時終るので家の中はさびしかつた。藏の中に遊びに行くと閑暇で困つてゐる藏男がいろんな玩具を拵へて與れた。己は何よりも母が死んで此れまで始終監視されてゐるやうであつた窮屈さがなくなつたのがうれしかつた。父もその當座は優しかつた。

その內八つになつた。父はまだ學校が始まらない前から己に本を買つて宛合つた。文字に親しませるために黑板を拵へたり教育畫を室內に懸けたりした。夜は眠むがる己を前において忠臣孝子の美談やら苦學して貧困の境遇から成功した人の話やらを聞かせた。父は自分が以前教員をしてゐた人だけに教育を忽せにしなかつたのである。己が一向學問に興味を持たないのを心配して見たところ全然馬鹿では無ささうだが何故記憶が惡いのかとよく老婢にこぼした。物ごころのつく大事な時期を病院に放つたらかしておいたのが惡かつたのだらうと云つた。

己はもう勝手に遊びに出るのを許されなかつた。今まで持つてゐた玩具も取り上げられた。淋しい時に老婢と寢たり藏の中に遊びに行つたりするのを禁められた。學校に通ふやうになつてからは一そう酷しかつた。家に歸るとその日の復習を完全に終つてからでなければ父の前を動く事が出來ないので親子二人のものが日が暮れるまで机を挾んで對ひつ

合たまでゐる事は珍らしくなかつた。たつた二つか三つの字が覺えられないのでよく折檻された。老婢が間に入つて詫びてくれてやつと夕飯に有りつくのであつた。

「お婆あ、己ら腹が痛くてならんがなあ」と訴へると老婢は、

「さうかな、そつちや寢とんなはり。お父さんには私がそげん云ふときますけん」と云つて寢床を延べて呉れる。勉強させられるのが厭さに學校から歸つた時さひはひ父の姿が家の中に見えないと己は假病を使つては一時逃れの工夫をするのである。そしては父のためにわけもなく裘を搔れて却つて非度い罰を受けるのであつた。

そんな日が何れ位ゐつゞいたのであらうか。しかし己に引つ係つて腹を立てたり暇を潰したりする事が父に取つても一通りでない損失だと云ふ事が分つて來ると父が一生懸命に怒るのがさほど怖くもなくなつて非度い仕打をされればされるほど己は心の内に父を侮るやうになつた。打たれても飢じい目に會はされてもこらへさへすれば己の方が勝ちになるのだと知つてゐたからぢつと我慢した。

とうとう父は己を見放してしまつた。今までの嚴しい躾をきつぱり廢めてしまつたばかりでなく己と顏を會はすのさへ避けるやうになつた。己はそれをよい事にして終日外を遊び歩いた。飢じい時だけ歸つて來て自分で台所に入つて行つて婢に宛合はれたものを喰つた。誰れも居ない時はそこらに見つかつた有り合せのものを頰張つて外に飛び出した。

二

家の者から介意はれなくなつてから己が餘り見すぼらしい身裝をしてゐるせいか親戚の者までが己を疎んずるやうになつた。たゞ修二の母だけが、（死んだ母の妹に當るのであるが）見兼ねるかして時々呼び寄せて着物の綻びを繕ろつてくれたり草履を買つてくれたりした。

二年目に己はやはり一年生であつた。その年の酒造期には父は自分で藏に入つて指圖したので例よりも忙しかつた。

それで己達は一層顔を合せる事がなくなつた。父は夜更けてゞなければ蔵を出て來なかつた。その時分から彼は床に就く前に屹度酒を飲んだ。傭人等を先きに寢かしてしまつて自分一人で六ケしい本を傍において讀みながら夜明け近くまで飲んでゐた。そして己が學校に出かける時刻にはまだ眠つてゐた。己は一日遊び歩いて日が暮れるか暮れないかに寢てしまふので、同じ家に住んでゐ乍ら殆んど父を見なかつた。たゞ時々夜中に眼を醒すと父がまだ起きてゐて低い聲で何かを朗讀してゐるのを聞くことがあつた。

己は佛間に寢かされた。或る晩思ひがけない時刻に父が呼んでゐるからと云つて起された。何うしたのかと眠いのをこらへて行つて見ると父は己の本包みから本を取り出してぢつとそれを見てゐた。己が坐つた時己の前にそれをつきつけて今何處を習つてゐるかと訊いた。聲は低くて穏やかであつたけれども己は父の目の色が普通でないのを見て取つた。默つたまゝではすみさうにないので本を取つて好い加減な所を披くと、

「本當か。本當にそこか」

と父は念を押した。そして、

「そこぢや無かぢやろ」と又云つた。

二人が默り合つてゐる所に老婢が入つて來た。

「だんだ」と云つて「お燗がつきましたばい。持つて來まつせうか」

「ウン、宜か」と父は一生懸命押し出したやうな聲で云つた。「そこに持つて來て置いとけ。そつからみんな起こしとくことはいらんけん。寢かしてしまへ、お前も寢ろ」

老婢はもじもじしてゐたが父

「旦那、とんとの學問は明日んことにしちや惡かつかな。今日はもう晩う御座すけん」

「お前が知つたこつぢや無かぢやなつか」と父は叱つた。老婢は立ちかけたが又思ひ切り惡く己の側に來て、

「とんと、何處を習うて來なはつたつかな。早よ云ひなはり」と一段聲を低くして、「さ、お婆にだけ聞えるごつ、そつと云ふち見なはり。」と云つた。

己は老婢に寢てしまはれては心細いので又出鱈目の所を披いて此處だと云つた。

「その何處から何處までじや」と父の聲は尖つて來た。

己は好い加減な處に指をおいた。するとその途端に己の體は仰向けに轉んだ。父がその上にのし懸つて來て本でもつて滅茶苦茶に己の面部を叩いた。

「此げんな奴は病氣すつか怪我すつかして死んで吳れりや宜かつに生憎な事には體まで強くありあがつて……」

老婢に引分けられて呼吸をはづませながら父は切れ切れに此んな事を云つた。涙が頰を流れてゐた。己は父が泣くのを始めて見て怖いよりも珍らしく思つた。

その時分學校の同じ級仲間のうちに安雄と云ふ生徒があつた。

町の大きい商家の息子で己が落第する時はいつも落第するので三年つゞけて一緒であつた。二人とも先生から出來の惡い生徒として特別扱ひにされて一ばん教壇に近い机に並ばされてゐた。落第生と云ふ所から他の者ともあまり親しくせず自然二人だけ皆から離れたやうになつてゐたが己達は仲の良いやうな惡いやうな妙な間柄であつた。己の方が體は大きく腕力も強かつた。そして己は何の理由もないのによく虐めてばかりゐた。己とちがつて彼は家で大そう大事にさ

れてゐるやうであつた。學用品でも小使錢でも豐富に持つてゐた。己は相手が少しも逆らはないのを好い事にして何でも彼でも容赦なく卷き上げた。色の白い下顎の尖つた三角面の口は女の樣に小さい奴であつた。何處と云ふ事なく締つたところがなくそれが己にむづ痒いやうな抵しさを感じさせた。己の前に出るといつも脅えたやうな媚を見せて絶えず機嫌取つて自分の家から己の好きさうな物を取つて來て與つたり、今度は何々を買つて貰ふはずだから君にも上げようと約束したりした。己は帽子でも履物でも自分がろくなものは持たないものだから安雄のを取り上げて家に歸る時の外は平氣で自分の身につけてゐた。欲しいものがあると彼を家に強請りにやつてその金で何でも買つた。そんな時己はいつも門の前に隱れて彼が金を持つて出て來るのを待つてゐた。或る時は待つても待つても當人は出て來ないでその代りにその家の大人が現れて己をぢろつと睨めつけた事があつた。

日露戰爭の最中であつた。町に緣故のある出征軍人の戰死者がある度びに己たちは先生に引率されて會葬した。花々しい最後を遂げて金鵄勳章を貰つた勇士は何んな由緒ある家に生れた人かと思つて行つて見ると半日がかりの山を越えて行つた淋しい部落の百姓家であつたりした。その度びに校長は燒け付くやうな炎天の下に生徒を立たせておいて長たらしい追悼演說をした。

或る時五年生の生徒の父親が戰死した。生徒は例に依つて講堂に集まつて悲壯な戰場の模樣を聞かされたうへ遺族に對して金を集めて贈る事になつた。歸宅つて家の人にその話をして幾らでも出して下さるだけ貰つて來いと云はれた。

生徒はすつかり有頂天になつた。その日一日學校ぢゆうその話で持ちきつた。教場に入つてからも授業はそつちのけにして戰爭の話を先生にねだつた。休み時間になつても運動場を驅け廻るものはなかつた。彼方此方に群れを作つてその話に飽かず耽つた。だが己は一人で金の事を屈託した。己は安雄に君は幾ら貰つて來るのかと訊ねた。安雄は家の者

が幾ら呉れるか分らないと答へた。

翌る朝も己は彼が學校に來るのを待ちかまへて幾ら持つて來たのかと訊ねた。安雄は十錢銀貨を二つ紙入の中から出して見せた。

授業時間になつて皆んな持つて來た金を先生に納める事になつた。そのとき安雄の金がそつくり失くなつてゐる事が分つた。云ふまでもなくみんなは己達二人の平生の間柄を知つてゐたから嫌疑は己に集まつた。取調べが始まつて金を誰れに貰つて來たかと一々訊された。己は父からだと白々しく答へた。調べは大げさになつて今のうちに白状しなければ巡査を呼んで警察に渡してしまふと威された。人氣の無い薄暗い室に一人一人連れて行かれて聞く曲つた冷たい物を握らされた。それは今思つて見ると磁石だつたのである。先生に云はれる通りそれを釘の傍まで持つて行くと釘は自りでに動いて來てピタリと密着く。すると先生は「もう分つた」ときつぱり云つて仔細らしく手帳に何か書きつけるのである。

己は餘つぽどその場で白状してしまはうかと思つたが、するとそれよりも先きに先生の方から、

「歸つてよし。向うに行つてから此處であつたことを云つちやいかんぞ」と云つた。

教場に歸つてそれとなく調べのすんだものに聞いてみるとみんな己と同じやうな事を云はれたり威されたりしてゐるのでほつとした。その日はとうとう一時間も授業はせずに正午を大分過ぎてからやつと家に歸された。

晝食をそこそこに濟ますと己はすぐに戸外に飛び出した。己の懐ろにはまだ學校で出した十錢の殘りがあつた。町に出て見たが平生から欲しいと思ふものは幾らもあつたはずだのに何に使つて好いのか見當がつかなかつた。で、その半分の五錢で菓子を買つて常磐の台場に行つて喰べたが何故かよけい腹に入らないので殘つたのを石垣の中に押し込んで

おいた。

家に歸へると婢がお父さんは先刻學校から呼び出しがあつて行つたきりまだ歸らないと云つた。己は急に不安になつて宛合はれた飯が喉を通らなかつた。また台場に行つて先刻の菓子を取り出して見たら蟻が一ぱい集つてゐた。己は腹が立つてそれを海の中に投り込んでしまつた。すつかり暗くなるまで何うか彼うか外で暮して父に氣づかれないやうに台所口からそつと入つて自分で床を敷いて寢た。そして次ぎの朝は途方もなく早く起きて父が眼を醒まさないうちに家を出た。

その日最後の時間が終るとき己だけが先生に引きとめられて控室に連れて行かれた。すると思ひがけなく叔母がそこに來てゐるのであつた。先生は二人をそこに置いて行つてしまつた。

己達は永いこと待たされた。叔母は初め己が入つて行つた時己の顏をちらと見たがそれきり何も云はなかつた。懐から小さい烟管を取り出して烟草を吸つたり己の着物の綻びを一つ一つ調べたりしながら所在なさを紛らせた。自分でも一つの椅子を引寄せて己にも腰を懸けないかと云つた。けれども己は依然立つたまま彼女にうしろ向きになつて窓の外ばかり眺めてゐた。庇際の南天の枝に雀が戯れてゐるのが硝子越しに見えてゐた。人影のない運動場に日か照りつけてゐた。それはあと數日で夏休みになると云ふ七月の末であつた。やつと呼びに來られて叔母だけが教員室に行つたが暫らくして歸つて來た時彼女は泣いて眼のふちが赤くなつてゐた。何にも云はずに、

「もう歸つて宜かげなばい」と云つて己の帶を締め直してくれた。そして先きに立つて石段を降りた。己が草履がそこにないので教室の方に取りに行かうとすると叔母はあたりを見廻しく誰れかゞ置き忘れていつた上草履を見つけた。そしてそれを素早く袋の中から出してぐすぐすしてゐる己の前におき並べた。廣場を横ぎつて門を出る時己は誰れかに見

られてゐるやうな氣がして背後を振り返つた。校舍は硝子窓がすつかり閉つてそれに傾いた日ざしが當つてゐた。それが學校の見おさめであつた。己は家には歸らずに直ぐに叔母の家に連れて行かれた。暫らくして日良島の祖父母の許に引取られたのであつた。

三

その小さな漁村で祖父母は酒を賣つてゐた。酒は父が造つたのを舟便で少しづゝ取り寄せてゐた。多分それが父から祖父への宛合扶持だつたのであらう。父と祖父母とはそんな風にして隨分前から別々に暮してゐたのであつた。

己は祖父母に養はれるやうになるまでは彼等の關係が何う云ふ風になつてゐるのか少しも知らなかつた。それほど双方は疎々しくしてゐた。母が死んだ時二人は家に來て十日餘り泊つて歸つたがその時始めて己は自分の近親にもこんな老人がゐたのかと知つた位ゐであつた。

父は養子だつたのである。そして祖父は初めの祖母が死んで後添ひ（今度の祖母）が出來ると間もなく若干の財産と一緒に家を出て日良島に移つたのであつた。

祖父は小店の外に金貸もしてゐたやうであつた。家は小さく傭人はゐず生家と比べると總べての暮しがつゝましいので行つた當座は家の中が非度く貧乏臭く見えたがだんだん樣子が分つて來るとなかなか村でも勢力があるやうであつた。ずつと後になつて知つたのであつたが彼等は此の部落に來てから大分財産を殖やしたのであつた。それには餘り村の人に喜ばれないやうな手段も取つたらしい。例へば不斷は酒を幾らでも貸しで飲ませておいて年末になつて支拂ひが出來ないとそれを貸金同樣の低當づきの證書にし更へてしまつて利子を取る。又漁期になると漁業家は孰れも仕込みの

金が要るので彼等の唯一の財産である漁區の權利を抵當に借金する。二年も不漁がつゞくと抵當流れになつて網代は金主の手に入つてしまふのである。こんなにして祖父は一寸の間に村の大半を雜作なく手に入れたのであつた。

己は彼等に可愛がられた。祖母の實家の身寄りだと云ふ兵助と云ふ子供が祖父母の家に養はれてゐたが己達は會つた最初の日から友達になつた。兵助は得意になつて早速己を村ぢゆう連れて廻つた。自分の遊び仲間にも紹介した。年は己と同じ位ゐだつた。力は己より弱かつたけれども自分の方が古參だと云ふ所から家の中でも事ごとに己を抑へつけやうとした。とうとう或る日どうかしたはずみに己は怒り出して兵助に組みついた。晝飯の膳に向つてゐる時であつたが己達は室ぢゆうに食器を引つくり返して轉げ廻つた。己は兵助を組み伏せてその上に馬乘りになつた。その時祖父母が現はれた。祖父は何とか怒鳴つてそこにあつた蠅叩きを逆さに振り翳して己達をめがけて突き進んで來た。己は自分が的切り打たれるものと思つて表へ遁げ出した。が、痛い目に遭はされたのは己でなくて兵助であつた。兵助の泣き喚く聲は裏の山まで響いた。それぱかりでなく彼はそのあとで祖父母から己の前に手を突いて謝罪らせられたうへ此後どんな事があつても己に逆はないと云ふ事を誓はせられまでした。

その後兵助はすつかり己に對して從順になつた。己はそれをよい事にして兒分のやうに連れ歩いて下役に使つた。兵助は機嫌の惡いと云ふ事のない氣さくなおどけの上手い子で誰れにも好かれた。

しかし一緒に暮したのは半年足らずであつた。兵助は何う云ふ事情が有つたのか突然自分の家に歸つてしまつたのである。別れる時彼は女のやうにめそめそ泣いた。

己は直ぐに村の餓鬼大將になつた。體が大きく力が強いばかりでなく舟を漕ぐ事にも泳ぎにもすぐ上手になつた。漁夫の子供等と一緒になつて曳船にも出れば納屋の手つだひもした。學校が休みの時には沖漁にも出た。岸に打寄せられ

た木片を焚いて鮨を焼いて喰つたりした。そんな事が面白くてならなかつた。祖父が少しも八釜しく云はないので學科は全然放つたらかしてしまつた。それでも奇妙に落第しなかつた。そのうち町では父に新しい母が出來たと云ふ事を或る時聞かされた。以前郡長をしてゐた人の妹に當る人だと云ふ事であつた。その人は一度祖父母に會ひに島に來た。

或る日濱邊で遊んでゐると毎日一回町に通つてゐる郵便船が歸つて來て中から此のあたりで見られぬ服裝をした女が二人上陸(あが)つたのが己達の目を引いた。よく見るとその内の一人は家に使つてゐた若い方の姉であつた。餘り姿が變つてゐたためか直ぐそこにゐる己には氣がつかずに人家の方に行つてしまつた。そのも一人の女の人が新しい母だつたのである。

祖母が直ぐに己を呼びに來た。彼女は己を母の所に連れて行く前にそこらの家に連れ込んですつかり着物を取り更へさせた。

繼母は先の母と違つて肥つた奇麗な人であつた。

夏であつたので麥稈帽子を土産に貰つた。歸つたら又海水浴着を送らうと約束した。己はその人を村ぢゆう案内して廻つた。景色の好い金比羅樣や天狗岬にも連れて登つた。別れる時は金を貰つた。

そのうち尋常科が終るので中學に入るかどうかを決めねばならなかつた。そのために或る時父が祖父に呼ばれてやつて來た。強い風の吹く日であつたが祖母は酒を温めて父にすゝめた。父は用件がすむと直ぐ歸へる支度を始めた。祖父も祖母も海が荒れてゐるからと云つて引留めたけれども父は今酒の糀(こうじ)を仕込(しこ)んであつて一日も家を留守に出來ないからと云つて肯かずに村の若い者を傭つて日暮れから漕ぎ出した。己は祖母と見送つて行つたが濱邊は立つてゐられない位ゐる風が吹いてゐた。やがて舟は岬を廻つて見えなくなつた。逆風(さかかぜ)だから夜なかでなくては町に着くまいと祖母は云つ

た。己は父が久し振りに會つたのにろくろく口も利いて呉れなかつたのが物足りなかつた。體が丈夫になつたとはめたゞけであつたがそれだけでもあの時分の父よりは大そう優しくなつてゐるやうな氣がしてなつかしかつた。

祖父と父との間にどんな話があつたのか己は此れまで通り祖父母の所にゐて村の學校をつゞけて行く事になつた。祖父母は前にも倍して己を可愛がつた。彼等には己がずんずん大きくなるのが嬉しくてならないやうすであつた。十五にもなる己を毎晩眞ん中に挾んで寢て八つや九つの小兒ででもあるやうに、「長くなれ、長くなれ」と云ひ乍ら二人で己の體を摩つたり揉んだりするのであつた。學問なんぞはどうでも好い。町に行つて頭の要る商賣人になるよりも此處で漁夫相手に暮した方が樂だとよく二人で己に云ひ聞かせるやうにして話し合つた。

祖父はその時六十三であつた。喘息病みで非常に瘦せてゐた。機嫌伺ひに來る村の者を相手に談しをしたり借金のことわりに來た者を叱つたりする時は大へん元氣が良かつたがさうでない時はいつも火鉢にくつゝいてゐるか寢てゐるかであつた。夏でも帽著をしてゐた。その毛の一本もない頭には鳥打のツバのなくなつたやうな妙な恰好の帽子を被つて夜寢る時も除らなかつた。仕事と云へば貸金の證書の整理をする外にはなかつたが死ぬ少し前から己の不用になつた歷史の教科書を勉强し出した。それは非常な熱心さでそれを始めてからは却つてどうかすると金の用件で來た者を煩さがる位ゐであつた。使ひ古した己の筆記帳の少しでも白い所を集めて綴ぢたのに矢立の墨で克明にいろんな事を記してあつた。ずつと後になつて思ひがけない處からその一冊が見つかつたがそれには先づ御歷代の皇室の系圖を書いてその下に歷史に現はれた事跡やら人物やらを擧げてあつた。その事跡は多分彼が日頃愛讀してゐた「弓張月」とか「眞田三代記」とか然う云つたやうな稗史から材料を取つたのであらう。大へん詳細なものであつた。衰弱が非度くなつて筆を取るのが大儀になつても彼はそれを廢めなかつた。年寄りの癖に信心嫌ひで祖母が觀音様のお守札を貼るのさへ叱つた彼

が死に際になつてからあんなものに何故あんな凝り方をしたのだらう。

　秋が終りに近づく頃から床に就き切りになつた。その冬はどうかかうか越して翌る年三月此れからやつと暖かくなると云ふ時になつて或る日喉に啖が引つ懸つて呆氣なく死んでしまつた。

　それは己が村に住んでゐた最後の冬であつた。その年は大漁で村中大へんな景氣であつた。それに引きかへて己の家は非度い慘めさであつた。祖父の容體が思はしくない所に持つて來て村の者から絶交されたのである。ことの起りは借金のことわりに來た男の耳を祖父が寢床の中から打つたのであつた。それが運惡くも鼓膜を破つた。打たれた男は直ぐに舟で町の病院に連れて行かれた。診斷書を取つて告訴するらしいと云ふ話しが耳に入つたので祖母が彼方此方仲裁を賴んで廻つて金づくですまさうとしたけれども效目はなかつた。だんだん形勢が惡くなるばかりであつた。その時はもう己の家に對する憤りは相手の男の家の者だけでなく村ぢゆう一帶に擴がつてゐたのであつた。祖父に對する日頃の鬱憤が爆發したのである。何でも彼でも己達一家を村から追ひ出さうとかゝつたのであつた。平生から懇意にしてゐた村長や學校の校長も間に入つたが駄目だと云ふので手を引いた。それどころでなくさう云つた村の重立つた者が蔭になつて村民に智惠を貸してゐるのかも知れないのであつた。己たちは不安な日を送つた。飼つてゐた猫がむごたらしく殺されてゐたり[illegible]して。けれども何うにもしやうはなかつた。己は學校にも行けなかつた。でも一人や二人は內應する者が有つて敵方の情報を探つて來て呉れたがそれはたゞ猫を殺したのは誰らしいとか、誰れと誰とが主謀者になつてどんな企てをしてゐるさうだとか、又は村ぢゆうで金を出し合つて町から三百代言を傭つて來てゐるとか、そんなことを知らせて來るだけで少しも己たちの氣を強くさせる役には立たなかつた。それでも祖母は夜なかに彼等が裏木戸からこつそり忍んで來るのを待つてゐて酒を飮ませたり御馳走をしたりして下にもおかずもてなした。祖父はすつか

り惰けてしまつて己をちよつとも傍からはなさなかつた。
父がそのために町からやつて來た時は助け船に會つたやうな氣持ちであつた。その時くらゐ父が偉く賴母しい人に見えた事はなかつた。父が何んな風に談しをつけたのか兎も角も一旦は圓く納まつたのである。有りだけの酒が村民のために飲まれた。しかし祖父は程もなく死んだ。父は再びやつて來て跡の整理に幾らか暇取つてから己と祖母とを連れて島を引き揚げて町に歸つた。

四

その四月に己は町の中學校に入つた。人數が少ないので試驗はなかつたのであつた。みんな十三か十四の年頃の者ばかりで己のやうに十六にもなつてゐるものは稀らしかつた。小學校で同じ仲間だつた者は既うずつと上の級である。今まで漁夫の子供等ばかり相手にして彼等と同じやうな生活をして來た己は何かにつけて町の者に引け目を感じた。でもあの弱蟲の安雄が町に居ないのは幸であつた。己が日良島に居る間に家族と一緒に何處かへ越して行つてしまつたのであつた。何でも彼の家はほんの短い間に主人が死に若主人（安雄の父と兄）が死にして不幸が續いたので商賣が寂れてしまひその上あとに殘つた母親の不行跡から町にも居づらくなつて逐轉同樣に他所に移つたと云ふ事であつた。
己は小學校の時と違つて勉强に精を出した。父は依然己の事にはまるきり介意はなかつた。繼母は一人で何も彼も氣をつけて與れた。學校の事も誰れよりも彼女が一ばん熱心であつた。それもしかし父のやり方とは違つてゐて決して勉强を强うるのではない。毎日己が學校から歸るのを待つて、「今日は六ケしい箇所はなかつたか」と尋ねるだけである。どんなに忙しい時でもそれだけは缺かさない。そして己が何か分らない學科に就いて質問すると大へん詳しく解い

て吳れる。

母は實際何でもよく知つてゐた。女でも此んなに學問に通じた人がゐるのかと驚くほどであつた。それに元來學問が好きな人であつたらしい。自分でも己と一緒に勉强するのが面白いのだと云つてゐた。兎に角己がどうかこうか一年から二年二年から三年と進む事が出來たのは何よりさうした母の心づかいのお蔭だつたのであつた。

母屋から椽側傳ひになつた八疊と四疊の二室つゞきの離房に己達は祖母と二人暮してゐた。祖母は祖父が亡くなつてかからスツカリ變つた。よく似合ふと云つて人からほめられ自分でもそれが自慢で年中崩した事のなかつた小さな蛤のやな丸髷を散切にしたせいか急に樣子が老けて見えた。涙もろく愚痴つぽい老婆になつて煩はしいほど己に倚り懸るやうになつた。お祖母さんはお前一人を賴りに生きてゐるのだから然う思つてゐてくれの、お祖父さんが死んだ時すぐ生家に歸るはずだつたのをお前と別れ度くないばかりに此處に來たのだのとそんな事を口癖のやうに云つた。祖父の位牌を佛壇に据えて朝夕拜んでゐたがどうかすると己まで自分の側に坐らせてお勤めの突合ひをさせる事がある。母家の者に恥かしくて厭でならなかつけたれ共彼女の云ひつけに逆らふ事は出來なかつた。

祖母はその時五十五であつた。吾儘でむら氣で父が外出して家にゐない時等には自分の方から母家に出かけて行つて母や婢共を相手に陽氣に笑ひばなしなどするのであるがどうかすると塞ぎ込んでしまつて二日でも三日でも離れに引込んだまゝ家の者に機嫌の好い顏を見せない。そんな時己を捉へて執こく口說いたり位牌の前で泣いたりするのである。

かと思ふと今度は頻りと外出するやうになつた。また大そう粉飾をし出した。秘して持つてゐる臍繰金でいろんな道具を貰つてそつと化粧した。口達者でお世辭が上手な彼女は町の彼方此方の親類と懇意になつて稽古にかこつけて方々に立寄つては茶話に時間を消すのを樂しみにしてゐた。偶に己も同行する事があつたが彼女は己を傍に置いて餘りと思

なれるやうな出鱈目を平氣で云つて散々己を詰め立てるのであつた。己がどんなに祖父のお氣入りで彼に孝行したか、今でもどんなにか自分を慕ふかなど丶行く先々で吹聴するので己はいつも厭な思ひをした。

祖母は蝋の浦と云ふ可成り遠い島から來た人であつたので町のうちに自分の身寄と云つては一軒もなかつた。たゞ何とか云ふ小さい荒物屋の内儀が同じ村から嫁入つて來てゐる縁故からその家によく出入りした。何の話があるのかそこへ行くと夕方になつても歸らなかつた。己はその荒物屋を餘り好かなかつた。己が行きさへすれば下にも置かずにもてなしてくれるのだけれ共どうも夫婦のおべつかが厭やらしくて却つて親しみを持てないのである。それに己は口の多い祖母がそんな家と懇意にするのを家の者が快く思つてゐない事を知つてゐた。それで彼女の外出が餘り劇しい時には己は自分の事のやうに父や母に氣まづい思ひをした。

祖母は初めの頃のやうに矢鱈と愚痴は云はなくなつたがその代り今度は目下の境遇の不自由で窮屈な事をこぼすやうになつた。それは己にも無理ではない事に考へられた。二人が住んでゐる所は祖父がずつと以前日良島に移らない前に自分の隱居所に拵へたので母屋にも可成りはなれて居り二人住みには手頃であるけれども炊事場がないので三度の食事はもとより茶飲み道具まで一々母屋から運ばねばならない。祖母はまた外出の度毎に必ず母屋の土間を通らねばならないのを何よりも苦にした。だからいつでも父が火鉢の側に頑張つてゐるかどうかを幾度も覗いて見て一寸でも姿が見えない時に急いで出て行くと云ふ風にしてゐたのである。以前は離房用の出入口が別にあつてちよつとした門が土蔵の横に開いてゐたのだけれども今は杭だけが殘つて扉の代りに粗末な板が打ちつけられてゐた。扉の裾には木片や竹材が亂雑におかれてあつた。庭の跡の祖父が手入れした築山や植木が非度く虐待されたまま殘つてゐた。父と云ふ人はそんな事に全然趣味を持つてゐなかつたのである。己は荒れ果てた庭を自分の手で修繕して祖母のために門を開けてやらうと

思ひ立つた。丁度父が一週間ばかり旅行をしたのでそのあとで取り懸つた

梅雨上りの時候であつたが褌一つになつて毎日毎日働いた。庭が一通り出來上つたので門を塞いであつた板を外して扉を藏の中から搜し出して箝めた。門を開ける事だけは一應父に訊いて見てからにしないかと母が注意したけれども己はそれまで待つてはゐられなかつた。それに庭が見違へるやうに奇麗になつたのを父だつて喜ばない筈はないと思つたのである。蝶番は祖母に貰はせた。閂は失なつてゐたので有り合せの丸太の切端を削つて挿した。此れで祖母の出入口が出來たばかりでなく二人の住居からの見晴らしがすつかり新しくなつた。序に己は一寸した流しも縁先に拵へた。祖母は喜んで己の器用をほめた。すると或る日學校から晝食に歸ると祖母が待ち構へてゐて父が歸つて來て門を開けた事に就いて何か文句を云つてゐるやうだとこつそり敎へた。己は悄氣てしまつた。學校でも午後の課業が耳に入らない位ゐであつた。その日父は早速下男に命じて門を舊どほり塞いでしまつた。祖母は外出して終日家にゐなかつた。己は學校から歸つていつものやうに机に向つたが心は本の上に留つてゐるどころではなかつた。障子の直ぐ外に父が指圖して庭を壞させてゐる。流し台も外して持つて行かれてしまつた。己はぢつと咳一つしないで机に顏を突俯してゐた。

婢が夕飯を呼びに來たけれども己は返事もしなかつた。すると今度は母が自分で迎ひに來ていろいろに云つて己をなだめようとした。門を開けると藏男共が夜晩く出入りしていけないのでそのために塞いである事、又庭の隅に石や材木を積んであるのは屏の裾が腐つて無用心なためわざわざあんなにしてあつたさうだと云つて聞かせた。

己は母を先にやつてそのあとで涙で汚れた顏を洗つて母屋の方に行つた。すると丁度その時父の怒氣を含んだ聲が聞えたので思はずそこに悚んだ。

「食はん云うならそのまゝ放つとけ」と家ぢうに響く聲で母だか婢だかに向つて、

「もう呼び行く事はならんぞ」
と云つたがその柏子に己の姿が目につくと口を噤んだ。己は何時の間に母屋に入つて行つたのか自分でも分らなかつた。己の目は釘づけされたやうに父の顏に止つたまゝ動かなかつた。
「さ、早よ食べなはらんか。どげん為た云うこつかな」と己の見幕のたゞならぬのを見て母が己の側に立つて來て云つた。
が、己はやはりそのまゝ立つてゐた。體ぢゆうががたがた震へた。
「構はんぢおけ云うぢやなつか。そげんな奴」
と父が己の顏は見ないやうにして又云つた。
「あんたは默つとんなはり」
と母はそれを制して己を飼寮の側に連れて行かうとした。
しかし己は母の體を押し退けた。そして父の胸倉に武者ぶりついた。そこへ母が背後から己に抱きついた。
根太も摧けるやうな騷動に驚いて飛び出して來た藏男共に引き分けられて離房に歸つたが力は確かに己の方が強いと分つてゐるのに大勢に邪魔されて十分な働きが出來なかつたのが口惜しくつてならなかつた。いつか怨みを晴らしてやると心に誓つた。
面部が紫色に脹んで體の節々が痛むので學校は二三日休んだ。床に就いたきりで祖母が看護した。母は非常に氣を採んで父に秘して御馳走を拵へて來たり菓子を運んだりして己の機嫌を取つた。が祖母はいつもの調子で可笑しい位ゐ

大げさに己の容體を云ひ立てゝ、むくんだ個所に米の粉を塗つたり蒟蒻で關節を温めたりした。己は己でわざとうんうん呻いて寢返り一つするのも祖母の手を借りてやつとのやうにした。そして誰れも四邊にゐなくなると祖母と二人で此れから先きの相談をし合つた。此んな窮屈な所にゐては壽命が短くなるから何處かに移つて二人で氣樂に暮さう。それにはたゞ遊んでゐても詰らないから慣れた商賣の酒の小賣をやらうと云ふのが彼女の思ひつきであつた。父が許さないならば許さないで好い。酒は他の酒屋から仕入れてゞも始めやうと決めた。その時己は始めて祖父が己に財産を殘して行つて呉れたことを知つたのであつた。

祖母は泣きながら、お前のお父さんのやうな不人情な親が又とあるものではない。女親のない兒を小さい時分から追ひ出して賴る所がなくなつたからと云つて歸つて來たのに又出て行けがしな仕打ちをすると憤つた。祖父と氣が合はなかつた事や死んだ生母に冷淡であつたことまで持ち出して以前教員なんぞしてゐた人だからあんなに偏屈で薄情で氣位ゐばかり高いのだと云つた。

だが己はもう悄々しなかつた。たつた一度の事件が父に對する己の態度を更へてしまつた。毎日母屋の土間を通り過ぎるのに今までのやうに氣兼ねしたり外から歸つた時、先づ父が居るかどうかを覗いてからそつと入るやうな事はやめた。「己の體に少しでも觸つて見ろ」父の側を通る時己はいつも心の中でかう云つてゐた。「今なら以前のやうにチツとして打たれてはゐないのだぞ」怨みこそあれ親としての恩なぞは少しもないのだと己は信じてゐた。

己は母親にも前のやうに從順でなくなつた。何う考へてもあの時背後から抱き止めたのは父に十分の動作をさせるために故意にあんな事をしたのだとしか思はれないのである。思へば思ふほど腹が立つてならなかつた。自然己が横着になるにつれて母の己に對する態度も變つて行くのが分つた。家の中が居づらくなるにつけて一日も早く祖母と別居の計

畫が實現されるのが待ちどうしかつた。

日良島で幼な馴染みの兵助が突然鰯の浦から訪ねて來たのはその時分であつた。町に電燈が始めて出來たのでその見物旁々祖母に會ひに來たのである。

或る朝學校に行かうとしたら祖母に「今日兵助が來るはずだからあとで荒物屋に來い」と云はれて學校の歸りに急いで立ち寄つて見ると兵助はそこにゐた。祖母も來て居たが彼女は己が側にゐるのも氣にとまらない樣子で兵助の前で泣いてばかりゐた。己達は幼な馴染とは云つても一緒に暮したのは五ケ月か六ケ月でそれから十年近くも會はないのだから殆んど忘れてしまつてゐた。で最初は打ち解けなかつた。兵助は己と同じ年だのに既う一人前の若者を氣取つて己をまごつかせるやうな老せた口の利きやうをした。頭を前の方を少し長くして巾の廣い白帶を腰のあたりに卷いてゐた。祖母に秘して卷煙草までも吸つた。だが脊は相變らず低かつた。己は學校から歸ると毎日荒物屋に出懸けて彼を誘ふて町を見せて廻つた。何故か祖母は己が兵助を家に連れて行く事を許さなかつた。で或る時前を通つた時此處がさうだと敎へたら兵助は感嘆して、君の家がこんなに大きいとは思はなかつた。君のお親爺さんも定めし豪い人だらう。一度見度いものだと云つた。しかしその次ぎに會つた時彼は父の事を、

「非度う狷介か人ちばいな」と云つた。乾度祖母が家のことを例の癖で洗ひ浚ひ云ひ聞かせたに違ひない。左樣思ふと厭やな氣がした。目下の己達の慘めな狀態を彼に知られたのは恥しかつた。で、近い內祖母と二人きりで他へ移るはずになつてゐる事を話して、さうしたら是非又一度遊びに來いと云つた。

五日ばかり滯在して兵助は歸つた。祖母はいろんな土産物を風呂敷に一杯持たせてやつたが何故かその內容を己に見せやうとしなかつた。

「お祖父さんの位牌も一緒に持つて行かうばいな。おばあさん」

と己は或る日祖母に相談した。己の頭は新しい生活の空想で一ぱいであつた。まつ先きに兵助を呼び寄せやうと思つた。町に友達を一人もつてゐないのでそれが何より樂しみになつた。

祖母は相變らず頻繁に外出した。己はそれを己達の計畫のために忙しいのだらうと考へてゐた。すると何も彼も一時に當が外れてしまつた。祖母は急に蠣の浦の生家に歸る事になつたのである。

一體何時の間に又どんなにしてそんな話になつてしまつたのか己は少しも知らなかつた。流石に祖母は頻りに己の機嫌を取つて云ひ分けをした。二人で別居して商賣する事を父がどうしても許さないからだと云ふのであつた。それ位ゐの事は初から分つてゐたのではないか。然しそれがたとひ空々しい言葉であるにせよ一度傾いてしまつた彼女の心を引戻さうとするのは無駄な骨折りだと云ふ事は己にも分つた。現に彼女はその話が決定つてからは目に立つて母屋の者と親しくするやうになつた。計畫がふいになつたことを惜しがつてゐる樣子は少しもないのである。

己は始終怒つたやうな顏ばかり彼女にして見せた。その癖近い内に別れねばならないとなつてからは學校にゐても氣も漫ろな位ゐ一圖に彼女が慕はしくなつてならない。急いで家に歸つて彼女の姿が見へないとがつかりしてしまつて何も手に着かない。ちつとしてゐられなくて日頃行きつけてゐる所を一軒々々尋ねて廻つた。そして彼女と一所にゐさへすれば何の彼のと矢鱈にぷんぷん怒つていろんな難題を持ち出して彼女を手固摺らすのであつた。さうした揚句に或る時たうとう祖母が泣き出してしまつた。すると己も悲しくなつて二人共離房の障子が暗くなるまで一緒になつて泣き合つた事があつた。

いよいよ別れる時が來た。

その日學校に行かうとすると母が今日は早く歸つてお祖母さんを見送らねばなるまいと云つた。が己はわざとおそくまで學校から歸らなかつた。祖母の乘つて行く汽船が沖に繫つてゐるのを人のゐない台場から眺めて年甲斐もなくおいおい泣いた。

それが最後の別れであつた。その後一度も會つた事もなく手紙のやり取りさへしなかつた。それから間もなく町の中學校をやめて東京に出たので自然彼女の消息にも遠ざかつたのである。しかしそれで無くとも己は祖母との關係をつゞけて行く事はしなかつたであらう。最後の別離は堪へ難い痛手であつた。己はそれを忘れる事に努力した。

己は殆んど十年東京で暮したがその間いつも孤獨で金の不自由ばかりした。けれどもどんなに淋しくても苦しくても一度だつて祖母に對つて思慕の心を寄せた事はなかつた。十才から十六まで母子のやうに生活を共にして來たのに別れてからの己の心にはたゞ遺恨だけが殘つた。それがいつ迄たつても消えなかつた。

學校を卒へて郷里に歸つた時どうしてそれを知つたのか男文字の代筆の手紙が彼女から來た。出世して歸つてゐると聞いて直ぐにも會ひに行き度いけれども老體で思ふに委せないと云つたやうな事が書いてあつた。母が己の方から會ひに行つてはどうかとすゝめたけれども己は肯かなかつた。返事さへ出さなかつた。人のはなしでは祖母はこのころ大へん困窮してゐると云ふことであつた。父から取つて行つた手切金は養子にしてゐた例の兵助に放蕩されてすつかり失くしてしまつたのであつた。

その後も一度彼女の方から町にやつて來たことがあつた。二日ばかり滯在してゐたが父を憚つてか家にはたゞちよつ

と挨拶に來ただけで荒物屋に泊つてゐて幾ら呼びにやつても來なかつた。そして彼女が家に來た時生憎己は留守だつた。でも己の方から荒物屋に會ひに行けば會へたのである。祖母もそれを待つてゐたに違ひない。だが己は依然たうとう片意地を通した。

祖母の話は此れで終りである。

己一人になつてから離房を使ふのは無用心だからと云ふので雨戸を閉めてしまつた。母屋の二階が己の勉强部屋になつた。そのうち十八の正月を迎へた。急に脊丈が延びて父よりもずつと高くなつた。恐ろしく無口で腕力が强いので學校でも他の者に懼られた。

三年生になつたが己はその時分から急になまけ出した。てんで本を覗いて見ようともしないので教場で何を訊かれてもろくな返答は出來ず宿題が宛合はれてもやつて行つたためしはなかつた。氣が向かない時には教場には出ないで學校の裏の杉林のなかで時間を過ごした。まるで自暴氣味になつてゐたのである。

杉林はどこまで行つても果てがなく城跡だから昔なにに使つたか分らないやうな廢墟が所々にあつて氣味が悪るかつた。けれ共あたりの世ばなれた靜かさが己の心を落ちつかせた。草木の氣息がしつとり漂ふてゐた。老ひた杉の木が幾重にも枝を差しかはして少しばかり透いて見える高い空に雲の去來するのが仰がれた。いろんな小鳥が啼いてゐた。日が傾くと木の幹をやつと洩れる光が一筋か二筋矢のやうに射して來た。運動場の方から時々球の音が聞こえて來た。己は家に歸る事を忘れて日が落ちてしまふまでそこで暮すことがあつた。

今考へて見ると然うした棄鉢な心持ちのうちには家の奴等に對して拗ねてやれと云つたやうな氣もあつたのである。

己は母が己のことを一通りでなく氣にしてゐるのを知つてゐた。己の片意地に怒りもしないで心くばりをつゞけて呉れる彼女の心を思つて見て自分までも淋しい氣がすることがあつた。けれどもそれかと云つてその好意を素直に受け入れるには己の心はひがんでしまつてゐた。第一父に對して癪であつた。

一所に住むやうになつたことがかへつて己達の間のへだたりを深くしたのであつた。口を利かないばかりか飯も同じ時刻には食はなかつた。己が父を避けるやうに父も己さへ見れば不機嫌であつた。家の者と話してゐる時にでも己が行くとぱつたり口を噤んでむつちりした顔になつて外方を向いてしまふ。母が己をいたはるやうな口を利いたりすると露骨に苦々しい顔をする。そんな風だから母が己によくして呉れるのを父がよろこぶはずはなかつた。そのために二人が絶へず衝突してゐるのを己は知つてゐた。

云ふ迄もなくその學期の試験は散々であつた。母は非常に心配した。試験の間ぢゆう彼女は晩になると菓子を持つて來てくれてそれとなしに己を勉强させようとした。食事には屹度卵を添へてくれた。己はたゞ心ぐるしかつた。

或る晩彼女が己の所から降りて行つてから間もなく階下で父と云ひ合ひが始まつた。己はそつと登り口まで行つて耳をすました。母が己のことに氣をもむのを父が叱つたらしいのである。既う小供ではあるまいし自分のことは自分で知つてゐるやうではないか。それに彼奴見たいな低能に側からどんなに力を添へたつて駄目だ。どうせ卒業する見込みはありはしないのだからと父が云ふのを己ははつきり聞き取つた。

成績が發表されたけれども己は見にも行かなかつた。父も母も何とも云はなかつた。學期が更つてもやはり相變らずであつた。

學校は上級生の權力が非常に强かつた。往來で行會ふと下級生の方から敬禮することになつてゐてそれを怠ると團體

の制裁を受けた。上級生と云つても體は己の方が大きい位なので彼等に頭を低げるのは馬鹿々々しかつた。それに己は彼等が始終己を輕蔑してゐることを知つてゐたから餘計横着に出てやつた。警告なんか受けても肯かなかつた。

すると或る日

「今日制裁がある」と云ふ風聞が物の匂ひの様に學校ぢゆうに擴まつた。みんな不安な顔をしてゐた。己は自分が眞つ先きて呼び出されるのを覺悟した。

制裁は放課後に運動場で行はれた。十月の始めで秋晴れの好い天氣であつた。教員も全部立ち合つた。四角い列を作つて五年の級長がその眞ん中に出て四年以下に向つて訓戒を與へる。質素を守れ。教師を尊敬すべし。上級生に對して從順であれ。缺禮するな。飲食店て近寄るな。それがすんでから兼ねて睨らまれてゐるものが指名された。己の外に七人ばかりゐた。列の前て呼び出された者は青くなつて震へてゐた。級長が何か二言三言云つたか云はないかに四年生と五年生の全部が雪崩を打つて押し寄せた。己は先頭になつて己を目懸けて來た奴の顔を熟く見ることが出來た。そのあとのことは少しも分らなかつた。いつの間にかすんでしまつて氣がついた時は地面て倒れてゐた。教員や小使等が引起しに來た。不思議なことにその時は體の疼痛は少しも覺えなかつた。

學校で制裁を受けたことを己は家の者に秘した。服のボタンが外れたり肩が破れたりしたのは自分で繕ろつた。體が痛むのを我慢してその翌る日からいつものとほり通つた。するとどんなにして知つたのかそれから餘程たつた或る日己が學校から歸つて二階に昇らうとすると母が呼び止めてそのことを云ひ出した。體は何ともないか。何故直ぐ云はなかつたのだと云つた。父は側で何かを見てゐたがその時默つて突立つてゐる己の顏をチラと見て、

「なぐられる奴の方が悪るかつたい。日頃の心得が間違ふとるけん。そげんな目に遭ふんぢや無つか」と云つた。上目づかひの顔に好い氣味だと云つたやうな冷笑さへ浮んでゐる。

「へん」と己は馬鹿にしたやうな笑顔で太太しく父を見返した。「要らん心配ぢやなつか。痛いのは己の體ぢやけん」と云つた。そして父が立ち向つて來るかと思つたので包みを側において身がまへした。二三歩己の方から詰め寄つた。母が間に入つて片手で己の口を塞ぐやうにしながら己を押し戻した。母の顔は青かつた。手が慄へてゐた。

二階の自分の室に獨りになると己は仰向けに寢ころんで氣拔けしたもの丶やうに天井をみつめたま丶何時までもぢつとしてゐた。

動悸がいつ迄も靜まらなかつた。

己は洋服のま丶そこに眠つてしまつた。目が醒めた時は障子の明るみは消えて既うすつかり夜になつてゐた。己は暗の中に何時間も動かなかつた。

十一時が鳴つてから婢が呼びに來た。降りて行つて見ると階下には親類の者が集まつて來て居た。己はそこに坐らされた。父が己の顔は見ないで皆に云つた。今後己の身について自分は一切關係しないのだからとその時宣言したのである。己はその晩から親戚に預けられた。間もなく學校はやめて町をはなれた。

それ以來父との交渉は實際に絶えてしまつてゐたのである。己が東京にゐる間の學資金は親戚の名で送つて來たのであつたが己はそれが何處から出るのか知らなかつた。知らうとも思はなかつた。家の方のことは考へないやうに考へないやうにと心がけてゐたのであつた。そんなにして周圍の總てからはなれて一人きりでゐることが出來さへすれば己に

取つてはそれが一ばんよかつた。

今度學校がすんで歸省することになつた時己はまた家の者と接觸しなければならないのを何よりも苦に思つた。殊に母との關係の煩はしさが思ひやられた。父の方は却つて何でもなかつた。どうせ二人の間は依然不和のまゝでつゞくであらうしそれは己に取つて氣易くこそあれ少しも苦痛ではないからである。しかし母の方はさう行かない。彼女のことだから此方が望む望まないに係らず己との間を沒交渉のまゝではおかないにきまつてゐた。

果して郷里に歸つてからの成行は豫期した通りであつた。以前と變らぬ彼女の行きとゞいた心遣ひに己は引きずられるやうに一歩一歩束縛されて行つた。その揚句にとうとう結婚問題にまで押し詰められて身動きも出來ないやうになつたのであつた。

五

己がはつきり返答したわけでもないのに結婚問題はどしどし進行して何時の間にか相手の女も決められてしまつた。喜久子と云ふ繼母の生家の娘でその時まだ女學校に通つてゐるのを年廻りがよいからと云ふのでその年の暮に學校を廢させて家に呼んだのであつた。

己にして見れば相手が誰れであらうとそんなことに意見が有らうはずはないのである。まるで他人ごとのやうな氣でみんなが頻りと談を進めるのを眺めてゐた。その女を己はまるで知らなかつたのであつた。繼母の生家にそんな娘がゐたのかとその時始めて氣がついた位であつた。

たゞあと何ケ月かで學校を卒ると云ふのに何もわざわざ退かせてまで今直ぐ引取らなくともと思つたがそれにしても

己が彼れ此れと口を出して通ることでもないので默つてゐた。

本式の婚禮や何かは追つてすると云ふ事にして、或る晩母が自分で行つて兎も角も連れて來た

喜久子はその時十六であつた。引き取られて來た當座は始終浮かぬ顏をしてふさぎ込んでばかりゐた。それを家ぢゆう總がゝりで大事にした。父までが彼女が家に來てからはまるで人間が變つてしまつたかと思はれるほど機嫌が好く喜久子喜久子と云つて夜など彼女が沈み込んでゐるのを見ると晩酌もそこそこに切り上げて通りに連れ出して買物をしてやつて歸る。又生家にでも行つてゐれば自分で迎ひに行つたりして丁度始めて子供と云ふものを持つたものでゞもあるかのやうに可愛がるのであつた。それがをかしいと云つて母や家の者は蔭でよく笑つた。

己達は二階に寢かされたが二人共どちらも口を利かなかつた。喜久子は何故か己の顏さへ見れば非常によそよそしい怒つてゞもゐるやうな素振しか見せないのであつた。毎晩自分の布團を室の隅つこに引張つて行つて自分だけさつさと彼方向いて寢てしまふ。それはいゝのだけれどもどうかすると既う十分眠つたものと思つてゐる時分になつてしくしく歔欷出されるのには弱つた。己には彼女が泣く理由は分つてゐるのだけれども何と云つて慰めやうもないのである。「こんなではこのお嫁さんも永つゞきはしまい」と己は考へた。氣の毒だとは思ふけれども己の力でどうにもなる事ではなかつた。

母にすゝめられて喜久子を連れて旅に出たのは三月の下旬であつた。云ふまでもなく母は二人きりで旅にでも出せば喜久子が少しでも己に馴染むやうになるかと云ふつもりだつたのであつた。

或る凪いだ日に汽船に乘つた。喜久子は醉ふのを恐れて最初から終ひまで船室の隅に横になつたまゝ少しも身動きしなかつた。船が長崎の港に入つたのは夜明け前であつた。窓から覗くと薄暗の中に黑い船體が彼方此方に浮んでゐるの

が見えた。汽船はその間を縫うて緩り進んだ。時々懶げに汽笛を鳴らした。

町はまだ眠つてゐた。疎らな灯が後ろ上りになつて山の頂の近くまで延びて行つてその一つ一つが長い影を水の面に落してゐた。船が棧橋に着くと客引の男たちが印入りの提灯を高く持つてめいめい宿屋の名を呼んだ。その一人に荷物を渡した。

汽車の時間にはまだ間があるので己は宿屋で夜具を借りて汽船の上の寢不足を補つた。お前もちよつと休んだらどうかと喜久子にもすすめると彼女は何も云はずにたゞ頭を振つた。そして硝子窓の側に立つて外を眺めてゐた。そこには強いアーク燈ががらんとした廣場を照らしてゐた。波止場の隅には屋臺店が淋しい明りを見せてゐた。

朝飯に起された時には家の前を電車がガンガン走つてゐた。廣場には物賣り店が地べたに並んで港の中を目まぐるしいほどの小蒸氣が引つきりなしに行き來してゐた。外國通ひの大きい汽船の側には石炭積みの人夫が蟻のやうに蠢いてゐるのが見えた。對岸からいろんな音がごつちやになつて響いて來た。喜久子は依然窓の所に立つてゐた。

「あれが三菱のドツタばい」己は彼女の傍に行つて大きい起重機のあたりを指して教へた。

「そつから此方の白い建物が税關あれがホテル……西洋人の宿屋。な、知つとつか」

喜久子は何と思つたのか微笑した。己の指の動く方を見るには見るけれども別に身を入れて聞いてゐるやうでもないので己は説明を止めた。喜久子の目はすぐ前を走つてゐる電車や波止場の雜沓に餘計引かれるらしかつた。

「此處が最つち賑やかでせうか」

と暫らくして云つた。此れが彼女が己に口を利いた始めての言葉であつた。己はそれに力を得て少し大げさに、

「いいや。どうして此げんもんか」

と云つて濱町通りのことやお諏訪樣の話をして聞かせた。

そして、

「お前がまつと此方に遊び度かなりば溫泉は後にして二三日暇取つても宜かつばい」

と云つた。どうせ的のある旅ではなし溫泉は何方だつて好いのだから彼女さへその氣だつたらまだ一度も見物した事のないと云ふ長崎の市中を歩かせたら悅ぶかと思つたのであつた。しかし喜久子は相變らず進まぬ顏をした。で結局俥で停車場に向つた。

三時間ばかりで島原半島廻りの輕便に乘り換へた。淋しい驛で降りてそこから小濱溫泉行の乘合自動車に乘つた。自動車は非度い唸りを立てながら坂を登つた。登り詰めた所は崖の頂であつた。千々岩灘が眼の下に擴がつた。自動車は險しい坂をノロノロと降つたが曲り角ではみんな息を吞んだ。喜久子ははと見ると顏をタオルで押へて自分の膝の上に突伏してゐた。小濱についたのは電燈がつく頃であつた。

溫泉場は寂しかつた。弓なりに曲つた海ぞひの岸壁にならんだ澤山の宿屋はいづれも四階三階の大構へのものばかりであつたが今は空室が多いらしかつた。一段低くなつた埋立地に草が一ぱい生えてゐた。此の狹くるしい土地に僅かでも空地と云つてはたゞ此處だけであつた。町の背後には直ぐにもう山が覆ひかぶさつて來てゐた。空地は平で浴客の散步場でもあり村の子供等の遊び場所でもあつた。西洋人が時に規則正しい足取りで步いてゐた。身をもの妻をいたわるやうにして夕暮れの定つた時刻を睦ましげに散步する若い西洋人の一對があつた。喜久子はそれを珍らしげに眺めた。

己達は此處に來てから幾分親しみを感ずるやうになつてゐた。周圍が變つたので二人きりで居てもぎこちなさを感じなくなつたのであつた。己を避けるやうな喜久子の態度も少くなつた。

「またあの西洋人が通るばい」と己が椽側から聲をかけると室から出て側の椅子に來て坐る。そしてその夫婦はどこの國の人だらうかとか西洋人はどんなのが美人なのか自分には分らない。などゝ隔てない談しをする。暫らくそんなにして好い機嫌でゐるかと思ふとヒッと眞面目に己の顏を見て何日家に歸るのかと訊ねた。己は、

「何日歸る云うて決めとるわけぢや無かつばい」。と云つて、

「急ぐことは要らんとぢやけん。もつとゆつくり遊んで行こぢやなつか。また何日こげんして來られつか分らんこつだな」

「でも家で心配しとんなさりやせんでせうか」

彼女は何か思ひ出した時にする憂ひを帶びた顏で己を見た。

「そげんことは無かろばい」と己が云つてもなかなかもとの機嫌には返らない。で談はそれきり杜絶へて二人は別々の心を抱いたまま默つて海の面を眺めた。下の草原には子供等が日の暮れるのを惜しむやうに騷いでゐる。急はしげに共同浴場の方に行く人がある。夕凪ぎの海はどんより曇つてゐた。

喜久子が室に入つた後も己は欄干に凭れて海を見てゐた。何だか瞭りしないいらいらしさを己は始めて感じた。

宿屋の同じ二階には己達の外には客はゐないやうであつた。偶に見えても一日か二日で歸つてしまつた。喜久子は貧食ひが過ぎたので腹をこわした。風の強い晩には浪の音が近くて眠つかれないと云つて己までねむらせなかつた。そんな我儘を云ふほど彼女は已に馴れたのであつた。

或る時雲仙嶽登りを誘つて見ると應じたので次ぎの日馬車を借り切つて出かけた。

頂まで通ずる縣道は幾度も曲り曲つて勾配を登るのは容易でなかつた。馬はハッハッと喘いだ。登るにつれて寒氣が

加はつて四邊は淋しかつた。道の兩側から木の枝が覆ひ被さつて來て道路の面には椿の花が落ち散つてゐた。そんな所を拔けると又一度に眼界がひらけた。片方は深い谷底でその向ふ幾つかの重なり合つた山の向ふに遙かに廣い海水ででもあるやうに浮き上つて見えて來た。天草灘の方角であらうか。喜久子は毛布でしつかり膝をつゝんで無心に窓の外を眺めてゐた。顔が青かつた。宿屋を出る時には大へん機嫌が好かつたのであるが馬車の動搖で氣持ちを惡るくしたのか途中から默り込んでしまつたのであつた。

とある曲り角の立茶屋に來た時馭者は車臺を降りて馬糧を買つた。藁の切屑と芋の皮とが混ぜてあつた。茶屋の中から娘が盆の上に茶を載せて來てすゝめた。喜久子は遠慮して手を出さうとしなかつた。何うしたら好いかと云つたやうに當惑して己の方を向いた。己は茶を飲んで盆の上に小銀貨をおいた。娘は何も云はずに初めのやうにお辭儀をして家の中に入つた。まんまるい顔の喜久子と同じ年頃であつた。結び立てらしい桃割れの鄙びた鹿の子の赤い色があたりの淋しい景色の中に際立つた。

馬車は又動き出した。娘の顔が己の頭から離れなかつた。少し行つてから己は喜久子に

「お前に似とりやせんぢやつたか」

と云つて見た。喜久子はちよつと首を傾げたが何も云はなかつた。

山の上は一そう淋しかつた。夏になると客が一ぱいに雜沓して幾らあつても足りないと云ふ大きな宿屋がみんな雨戸を閉めて所在なささうに軒をならべてゐた。此處はむかし名高い僧が拓いた跡だと云つて至る所の道ばたや崖の上にさまざまな恰好をした石佛が立つてゐた。目にうつる限りの景色は荒涼としてゐた。土に生えたものと云つては低い小松と地面を這つたつゝじだけであつた。その外の草木は此の寒氣の強い土地には育たないらしかつた。丁度洪水のあとの

河原のやうた黄味を帯びた白い地肌の處々に大地獄小地獄の湯氣が濛々と舞ひ昇つてゐた。

或る日その地獄廻りの案内を頼みに人家を少しはなれた大きな寺に二人で行つた。非常に口の達者な梵妻が出て來てくれた。二人はそのあとについて歩いた。

梵妻の説明が始まつた。噴湯と云ふ噴湯には佛教の傳説に因んだ地獄の名があつた。途々その由來を節をつけて唄ふやうな調子で説明するのであるが己達には分らない所が多かつた。白い湯氣の立ちこめた中に熱湯が沸つてゐた。崖の上からそれを見下ろした時喜久子は「オヽ怖い」と云つて己の手に縋つて後ろに退つた。梵妻がそれを見て笑つた。

宿には己達二人の外に客はなかつた。婢も暇な間は歸してあると云つて顏の優しい主婦さんが用を足してくれた。その人は二人を兄妹だと思つてゐてそんな呼び方をするのであつた。喜久子はそれが可笑しいと云つて後で舌を出して笑つた。

室の内にばかり引籠つてゐるのが厭やになると戸外に出た。

喜久子は二度とあの怖ろしい地獄を見に行かうとは云はなかつたがその代り好んで新湯の方に足を向けたがつた。西洋人のために拓かれた土地の一區劃である。こゝには競馬場やテニスコートや倶樂部の設備があつた。それは今は人影一つ見えないけれ共盛り時の賑やかさが思はれた。喜久子は異人の見られないのを惜しがつた。

五日居てそこの暮らしにも飽いたので山を降りた。

小濱の宿屋には手紙が持つてゐた。喜久子の母親から二人に一枚づゝ來てゐた。己のは勿論一通りの挨拶だけであつたが喜久子へは旅行中のことがこまごまと案じてあつた、虚弱な吾が兒に對する女親一人の心づかひが文面に溢れてゐた。己は何だか妬ましかつた。喜久子はそれを讀むと終日その日はふさいでしまつてろくろく晩餐も取らずに己に氣を

採ませた。

「明日の朝發つことに爲うばいな」と云つて己は慰めた。それでも機嫌が直らないのでそのまゝにして一人で外に出た。

波打際の岸壁には今日も浴客がしやがんでゐる。釣を垂れてゐる人もあつた。己は廣場のはづれまで行つてそこに轉がつてゐる石に腰を掛けた。暮れかゝつた海を眺めながら女と云ふものはみんなあんなものだらうかと己はつくづく思つた。機嫌の取りにくい喜久子の心が己にはまるで見當がつかないのである。

六

旅から歸ると己達のために別に家が用意されてあつた。人に貸してあつた家作の一つを空けたのであつた。當座の入用な世帶道具が分けられた。更めて喜久子の物が彼女の生家からそこに持ち込まれた。

が新しい住居は戸の閉まつたまゝの時が多かつた。己が會社に出勤したあとは喜久子は大概生家に行つてゐるからであつた。己の晝食の辨當もそこから持たせてよこした。終日そこで暮らして己が會社を退ける時分に女中に送られて歸つて來るのであつた。どうかするとタ飯をすましてから又出かけて己が眠るまでは歸らない。そんな事がつゞく事もあつた。

「己ら會社で食ふけん。食事の支度はせんち宜かばい」

と己は或る時喜久子に云つた。そしてそれからは工場の近で食事をしたり風呂に入つたりした。毎晩會社の宿直で時間を消して家には夜寢る時の外かへらなかつた。

會社では己はやつと父の傍を解放されて事務室に移された。恰度欠員が出來たのでそのあとに据わつたのであつた。

定まつた仕事が宛合はれたので張合ひが出て來た。己は仕事に身を入れてなるべく喜久子のことを思はないやうに心掛けた。己達の間は旅から歸ると同時に又以前のやうなよそよそしい二人に返つてしまつたのである。己は自分が彼女を少しも憎んでゐないのを知つてゐた。それどころか旅行中のことがなつかしく思ひ返されて何故彼女があの時だけあんな親しみを自分に見せたのだらうと悩ましい氣分になることさへあつた。けれども吾儘な彼女の心をもう一度引戻さうと云ふ根氣は己にはもうなかつた。いつ迄こんなどつちつかずの關係をつゞけねばならないのだらうと思つた。自分の力でどうにもならないのが忌々しかつた。今更叔父叔母の所に持ち込んで行くわけには行かなかつた。

己は或る日早く會社を出て本宅に立ち寄つた。幸い父はまだ歸つてゐなかつた。母が一人ゐて珍らしく顔を見せた己に何の用事で來たのかと尋ねもしないで毎ものやうに何や彼やと取り止めない話しをしかけたが不圖思ひ出したやうに、「さうさう」と云つて、

「私しはあゝたに見しうち思ふて取つといたもんが有つとですばい」と云ひ乍ら立つて古びた布呂敷包みを取り出して來た。見るとそれは祖父が持つてゐた小說本だの暦の寫しだのである。喘息の賣業の效能書もある。が己はそれを一々手に取つて見る氣はしなかつた。何か固い物が喉のあたりに込み上げて來るやうな氣がした。

「此れを見ち見なはり」と母がその中から選り出したのは祖父が死際まで懸つて丹念に書き入れた歴史の筆記帳であつた。己は少しめくつたゞけで中をよく見ようともせずに母の方に押しやつた。

「あゝたがしまつときなはり」と母が云ふのを己は

「此げんもん持つとつたけんち何にもなりまつせんもん」

と云つてことわつた。そんな事よりも己は喜久子のことを云ひ出す機會がないのに氣を焦らつた。どう切り出したものかと愚圖々々してゐる所に父が歸つて來たのでそこそこに歸つてしまつた。

喜久子は今日も生家に行つてゐて家は閉まつてゐる。西日を一杯に受けて中は蒸すやうな暑さであつた。雨戸を開け放つて風を通した。それからいつもするやうに井戸端に行つて水を浴びた。幾らか心が輕くなつたので枕を出して晝寢をした。まはりの木立ちに蟬が鳴いてゐた。

「おまへ己んところにゐるのが厭やなりば一と思ひに歸つたらどうか」

己はその晩喜久子が歸るのを待つてさう云つた。「お前さへ何處まんでも厭やだつち云ひ通せばそれで通るけん。な。そげんした方がどつちも宜かぢやなつか」

喜久子はびつくりしたやうに目を擧げて己を見たが又默つてうつむいた。己は穩かにつゞけた。

「己はちつともおまへを惡つかなんち思とらんばつてん。そつだけ此げんして何日までも辛抱して貰うとんのが氣の毒でならんとばい。良う考へちおまへ一人で分らんなりばお母さんにも話して良かごつせい。己はどうでも構はんけん」

云ひおいて己は外に出た。どこと云つて訪ねる所を持たない己はやはり會社に行くより外はなかつた。その晩も宿直の者と酒を飲んで氣を晴らした。

己の云つたのが何う云ふ風に效いたのか喜久子はそれ以來生家に行くのを控へるやうになつた。晝間行つてゐても夕飯時には乾度支度して待つてゐた。それでも己はやはり毎晩會社に遊びに行つた。おそくなつて歸ると喜久子は雨戸を

明けたまゝの家の中に讀みさしの本を投げ出して轉寢してゐた。

或る晩思ひがけなく彼女の母親が來てゐた。親子はさし向いで前屈みになつて何か食べてゐた。己が入つて行くと母親はさり氣ない風で迎へて何でもない話をして暫らくゐて歸つて行つた。

「お母さんは何しに來たつか」

と己は足音が消えるのを待つて云つた。己の頭には今飮んで來た酒の醉があつた。喜久子は己の見幕におびえたやうにちよつとは返事も出來なかつたがやつと今夜はあまり淋しいので生家に行つたら歸りにお母さんが送つてやると云つてついて來たのだと辯解した。さう云ひ乍ら己の顏を見上げた。睫の多い大きい目が泣き腫れてゐるのを己は見た。己は自分でも何故か分らぬむづ痒さを感じた。いぢらしさとそしてそれとは反對の感情がごつちやになつて己を何處にか押し出さうとするのを何うする事も出來なかつた。

「お母さんには先日の話はしたつか」と己は訊ねた。喜久子は俛いたまゝ何も云はなかつた。

「したつか、せんのか」と己はつゞけて問ひ詰めたが自分乍ら餘り語氣が荒らいのに氣がついてそのあとから少し穩かに、

「いつ迄こげんしとつたけんち、どつちも辛らかばつかりぢやなつか。早くどうかせにや」

と云つた。喜久子は偸み見るやうに己を見た。そして體を前に伏せたかと思ふと聲を揚げて泣き出した。

思ひ掛けない成行きに己は面食らつてしまつてしばらく呆然として彼女の肩のあたりの揺れるのを眺めてゐた。餘り非度いことをしたと後悔したけれ共どう手の著けやうもなかつた。己も一緒に泣き度いやうな氣持ちになつた。己は又家を飛び出してその晩は會社に泊つた。

翌る朝家には歸らないでそのまゝ仕事に懸つてゐると父の所から給仕が呼びに來た。己は的切り昨夜のことだと覺悟した。そして今度こそは差し向いでよく話して喜久子とのきまりをつけてしまはうと決心した。父は怒つてゐるだらう。しかし己には己の云ひ分がある。それに今のやうになるまでに己がどれだけ苦しんで來たかそれを訴へたら父だつて一概に責めはしないだらう。己は寧ろ希望を抱いて父の室に行つた。此れまでにない親しみさへ彼に對して覺えた。

が己のひとりぎめの豫想はすつかりはづれた。父は己が行くと座に就くか就かないにいきなり、

「お前はもう會社に居らんでも宜かけん歸れ」

と云つた。己は立ちすくんでしまつた。やつと口を開いてその理由を説かうとすると彼は又、

「明日から來んでも宜かぞ。本宅にも寄りつくな」と云つた。さう云ひ渡しておいて誰れかを呼ぶために鈴を押した。

己はその落ちつきはらつた横顔をにらみながら唾液を呑み込んだ。が思ひかへして室を出た。自分の卓へ戻つて帳簿を片つけて家に歸つた。その晩己が床に就いてゐる所に母が來た。己は起きようともしなかつた。布團の中から顔を出さなかつた。母は己の枕許に坐つて喜久子のことを何分まだ子供なものだから吾儘で困る。今のやうにしてゐてはあなたに世話を燒かせるばかりだからもつと何彼に慣れるまで生家に預けておかうと思ふがどうだらうと云つた。己が何も返答しないでゐると彼女はそのまゝ立ち上つて家の中を隅から隅まで見廻つて歸つた。その晩遲くなつてから喜久子の荷物は全部持つて行かれてしまつた。

がらんとなつた家の中に己は結局氣樂な氣持ちで自棄半分の日を送つた。本宅から朝晩食事を運んで來る婢に酒を買ひにやつて晝も夜も飲んだ。

あの時の事を振り返つて見るとよくもあゝ體がつゞいたと思ふより外はない。その間の日数がどれほどだつたのか何十日だつたのか又何ケ月だつたのか自分にも見當がつかないのである。その間と云ふもの己は丁度日のさゝない窖に閉ぢ込められた人間と同じに世間と云ふものから全然はなれて生きてゐた。まるで自分の體が仇敵(かたき)の借り物でゞもあるかのやうに自分で自分をいぢめずにゐられないやうな心持ちになつてゐたのであつた。そして頭が疲れてゐるせいかよく夢を見た。何故か夢にはいつもきまつて繼母が現はれるのであつた。或る時は己が昔の見すぼらしい子供の時に返つて父の前に坐らされて折檻されてゐる所であつた。父は己を打つ時にいつも使つた古洋傘の骨を握つてゐた。一つ打たれて己がわあつと泣き出す毎に父は周圍の者を見まはしてからからと豪傑笑ひをする。不思議なことには死んだ生母(はは)がそこに坐つてゐる。己は一生懸命になつて救ひを乞ふた。すると母は助けてくれようとはしないで横を向いた。本當の母なら此んなはずはないのだがとよく見なほすと繼母に變つてゐた。それが平生の親切な彼女とは似もつかない。此れこそ繼母の本性だと思はずにゐられないやうな冷酷な顔をして己が泣くのを面白さうに笑ふのであつた。

自分の泣き聲に驚いてやつと目が醒めた時には人氣(ひとけ)のない墓場からのがれて來たやうにうれしかつた。そんな時は直ぐに雨戸を開けて外の風に頭を冷やした。黒く聳えた木立ちの上に眞夜中の星が瞬いてゐるのをなつかしいものでゞもあるやうに眺めた。思ひがけない明月で荒れた庭の草むらにいろんな虫が雨の降るやうに鳴いてゐることもあつた。

どうかして本宅との交渉を絶たねばならないと思ひ乍ら己はやはりそのまゝの日をつゞけて行くより外なかつた。今になつて母に食事の糧を仰ぐのを此の上ない屈辱とは知つてゐてもそれを拒めばその日から困つてしまふのである。

いろいろ思ひあぐんでゐる内に己は不圖日良島にある祖父の遺産に氣がついた。祖母がよく己に云ひ聞かせた、お前はお祖父さんに譲られたものがあるのだからお父さんの厄介にならなくとも好いのだと云ひ云ひした言葉を思ひ出し

た。己はこんな所にゐてみじめな日を送るよりは一と思ひにそれでも處分して何處かに行つてしまはうかと思ひ立つた。が決心はついても己一人では何うしてその手續きをして好いのか分らない。第一その遺産がどれ位ゐあるのか今どんな風になつてゐるのかそれを知るてだてが己にはないのである。人に訊かうにも父の思惑を憚つてかあれ以來誰れ一人己の所に出入りする者はなかつた。修二の家の者までが己を見放してしまつたのか寄りつかないのであつた。

己は折角見つけ出した活路を前にして途方に暮れた。その時正木周平と知り合ひになつたのであつた。

正木は四十を越してゐるのに獨身で此れと云ふ職業も持たず町の者から忌み憚られてゐる男であつた。それは彼が絶へず賭博をして警察に揚げられたり酒を飲んであばれたり時には三百代言みたいな好からぬ事もするからであつた。しかし己に取つては彼がどんな男であらうと問題ではなかつた。己と同じに仕事を持たない人間で酒好きであると云ふ事だけが己達を結びつけたのである。

その時分彼は目星しい儲口もない所から得意の鰻釣りで小遣錢を稼いでゐたのであつた。彼は何處で己の事を聞いたのか或る日鰻を買つて呉れと云つて持つて來た。それが二人の交際の機緣になつた。彼は二度三度つゞけて來た。その內たがひに口を利くやうになつた。己は一人で困つてゐる時であつたので彼に遊びに來ないかと云つて見た。彼は初め辭退したが或る晩他所行きの更つた身裝ひをしてやつて來た。己達は忽ち懇意になつてしまつて殆んど一日一度會はないことはない位ゐになつた。己は彼に賴んで飯焚女を傭つて貰つた。そして兎も角も本宅との交渉を絶つた。金が要れば何時でも自分が調達するからと正木が引受けたのであつた。

或る日二人で晝間から愉快に飲んでゐる所に玄關に人聲がした。己を訪ねて來る者がある筈はないので初めは誰れだか見當がつかなかつたが取次に出た老婢に何か云つてゐる聲でそれが榮造と云ふ己と同姓の從兄であると分つた。脈や

な奴が來たと思つたけれ共のがれやうはなかつた。正木は直ぐに己の顔色から大略事情を察して、

「大將。大丈夫ですかな」と己の醉ひ加減を氣づかつた。然しその時もう來客は案内も待たずにつかつかと上つて來て閾際から取り亂した室の中を一と目に見て取つた。あわてゝ出て行く正木を胡散さうに見送つてから老婢があたりを片づけるのを待つて己の前に坐つた。その落ちついた態度が癪に觸ると同時に己を威壓した。四つばかり年上だが己などは及びもつかない商賣上手世渡り上手の拔目のない男で親戚の評判もよく父や母にも取り入つて本宅へもよく出入りするけれ共己とは別に親しい間柄ではなかつた。一體何の用で來たのかと不安に思つてゐると彼は、

「あの男は何日でも此家に來んのか」

と正木のことを云ひ出した。——早くから附き合つてゐるのかとか何んなにして知り合になつたのかとか丁度あんなものを出入りさせては世間體が惡いではないかと云はんばかりに根堀り葉堀り訊かうとするので己の方から遮つて肝心の用件を催促した。すると榮造は、

「イヤ。なに別に」と相變らず落ちついて、

「此の頃お前がさつぱり本宅に出入りせん云うことを聞いたもんけんな。一體何げんした云うのか理由があれば聞かせて貰ふち己達の力に及ぶことなりば双方も宜か工合に爲うち思ふて來て見たつばい」

今更己にそんな事を訊ねないでも事情は知つてゐる癖にと己は相手の潛越な差出口を心の中に憤つたが辯の達者な此の男に對つては何も云はない方が安全だと思つたのでだまつてゐた。榮造は小兒でもあやすやうにへんに優しく

「ね。云うち見んか。」と己の顔をのぞき込んで、

「そつとも理由云うて別になかつか。そんなりば明日でも行くとつしうちやなつか。お前一人で行くのが具合惡かなり

ば己が一緒に行つてお父さんの方には己の方からあやまつちやるばい」

「行くになればお前の世話にならんでも一人で行くたい」と己は云つたがふと思ひついて祖父の遺産のことを此の男に訊けば分るかも知れないと思つて、

「それよりも己はお前に訊くことがあつとぢやが」と態度を變へて、「死んだお祖父さんが己に殘してくれたものが日良島にあるはずぢやが今どげんなつとるかお前は知らんか」

榮造は暫らくは己の顔を默つて見てゐるだけであつたがやつと

「己はそげん事は知らん。有ればどげんするつもりか」と云つた。そして己が何も云はないでゐると又、

「つまらん考へを起すなよ」と正木が引込んだ奥の方にちらと目をやつて、「それよりも本宅に行かうぢやなつか。同じ行くなりば一日でも早か方がお前のためばい」

己はもう相手にならなかつた。榮造は、

「今日生憎お前が醉ふとる時に來たのは惡かつた。又その内來るけん。よう考へとけ」

と云ひ殘して歸つた。

そのあとで一旦引込ませたものを取り出して正木と飲み直ほした。正木は榮造が何の用事で來たのかは訊かなかつたが大がい察してゐるやうな顔で、

「私がゐたのが惡かつたつぢや無かつですか」

と云つた。

「いゝや」と己は云つたがその時己の頭に此の男に助力を頼んで今の窮地を脱け出る方法を講じようかと云ふ考へが浮

んだ。で今度は己の方から今の事情や此の間からの決心を打ち明けて話した。すると正木は
「成るほどそげんわけなりばあゝたが仰有るごつするより外無かですな」
と考へ深さうに云つたがそのあとから何と思つたのか、
「大將。私んごたるもんでもお役に立つことがあつたら使うち見て下はり。どげんでも働きますばい」
「宜かごつたのむ」と己は始めて味方を得たのがうれしくて、「何云うても己ひとりで何げんして宜かゝ分らんもんけんな」と云つた。己達はあらためて盃のやりとりをした。正木は酒を飲み乍ら
「まあ。私しんごたるもんでも可愛がつて附き合ふち見て下はり」としんみりと
「私がどんげな奴か云ふ事はその上で分つて戴きますけん。此つで世間の奴等には何の彼のと云はれますばつてん。自分の心にやましか事はしたこと無かつもりですばい」
と云つた。
その日の從兄の訪問が思ひがけず己の心に決斷を與へたのであつた。己達は次の日から取りかゝつた。正木が己の代理で役場に書類をしらべに行つた。すると意外にも祖父の遺産は己が東京に行つてゐた間に父の手ですつかり處分されてしまつてゐると云ふのであつた。
「ばつてん。此の方が却つてあゝたのために好かつたかも知れませんばい。」とがつかりしてしまつた己を力づけるやうに正木は云つた。「あれだけのものを今あゝたの手で金に替へよう云うたつて右から左に片つくもんぢやありまつせんけんな」
父の取つた手段は明らかに非法なのだからそれを問題にして代價を請求する事にしようと云つた。彼の意見に從つて

辯護士を傭つて交渉させた。

　何んな返答があるだらうと待ちかねた。あの傲慢な父が平生馬鹿にし切つてゐる己のために不意打を喰つて狼狽することだらうと想像するのは愉快でならなかつた。

　が、何日經つても沙汰はなかつた。その間に一ヶ月以上も經つた。

「己ら財産なんか何うでも好かけん。今他處に行くのに要るだけの金を早く何うかしてくれんか」と己が氣を焦らつて正木に催促すると、

「まあ待ちなはり。大將」と彼はいつも落ちつき拂つてゐて、「私がお引受けした以上は宜か加減のことをしてあゝたに損をかける如たることはしませんけん。もう少し私に委せときなはり」と云つた。

　或る日彼は戸外から入つて來て己に今日明日ぢゆうに誰れか來るだらうからその時はもう事件は告訴する事に決めたからと云つて取り合ふなと教へた。何の事だか己には彼の意中が分らなかつたが果して或る日榮造がやつて來た。

　今日は態度がすつかり變つてゐる。どこ迄も下手に出てもし此れが表沙汰にでもなつては我々が世間に顏向けが出來なくなる。今度のことはお父さんの方も悪いとみんな云つてゐるから親類一同で協議して是非ともお前の顏は立てるやうに計らう。ついては何うか辯護士に頼んだり何かする事はやめてもらひ度いと言つた。

　己はそれが果して親類の意嚮かどうか信じられないと思つた。やはり榮造が母に頼まれたかどうかして出しやばつて來たのだとしか思へなかつた。それに正木の言葉もあるので何でも彼でも告訴せずにはおかないのだと頑張つた。

「お前は氣が狂うてゞも居りやせんか」と榮造は眞面目臭つて氣づかはしげに己の顏を見まもつた。「何處の世界に親を法律に懸けるなんち者が有つか見ち見ろ。お前はこゝに引込んどつて知んみやが世間ぢやそげん云ふて大評判ばい」

「氣が狂はうが何うしうが要らん心配ぢやなつか」己は腹が立つて來て、「お前はお前で精々己ん家の者に取り入つて宜かもんにありつけよ」

「何を」と榮造は憤怒で眞つ青になつた顏に馬鹿にした笑ひを作つて、

「へん。汝がさもしか量見を持つとるもんけん。人までさうだつち思とんのか。人んことを彼此云ふ前に汝がことを考へち見ろ。良か歳しとつて自分で働いて食ふ事も考へんで祖父が高利貸しで貯めた不淨金を的にするなんて何云う汝は見下げ果てた奴か。人より餘計學問しとつて自分の力で食へんのか」

條理立つた相手の辯舌に氣を呑まれて己は一言の口答へも出來なかつた。榮造は尙ほも「汝んごたる奴は生きとつて親類の恥さらしをせんでも人助けち思うて死んでしまへ」と罵つた。

己達はとう〳〵取つ組み合ひを始めた。榮造は己の肩くらゐの高さしかないのであるが引きしまつた體格には意外な力を持つてゐた。別室に隱れてゐた正木が飛び出した時己はもろくも相手の下に組敷かれてゐた。正木は榮造の背後に廻つて彼の兩手を引きはなした。榮造は一生懸命に悶へたが正木には勝たなかつた。

「何ん云うことをあゝたがたは……」と正木は双方を制するやうな風をしながら頻りに己に目配せした。己にもその意味が分つたので急いで立ち上つて飛びかゝつて行かうとしたが榮造が正木に兩手を締め上げられて一生懸命痛さうにもがいてゐるのを見ると可愛想になつて出來なかつた。

正木はそのまゝ彼を出口の方に押して行つて戸外に突き飛ばした。

その晩も正木と酒を飲んだが己の心は引立たなかつた。正木は己が榮造との格鬪に負けたのを殘念がつていろいろけんかの秘訣を敎へた。

「けんかに限らず世の中んことは力よりも氣で勝つもんですばい。」と己に訓戒するやうに云つた。己がいつもに似ずいくら飲んでも沈み込んでゐるのを見て、

「大將どげんしたつ云うんですか。今になつてあゝたに氣を落されちや私の心配し甲斐がありませんけん。しつかりして下はり」

と云つて頻りと酒を飲ませた。

二三日して父の所から辯護士を通して遺産に相當するものを父の財産の內から分割する。但しその手續きは今年はもういくらもないことだから來年早々履行すると云つて來た。

七

十二月の半ばなのに溫かな陽氣であつた。己の居室にも日が當つて時々小鳥の影が障子に動いた。遠くに鵙が啼いた。長閑な小春日和が暫らくつゞいた。

父との交渉が一段落ついてからと云ふもの己は自分の心に大きな空虛が新しく出來たやうに感じた。そしてその原因は自分にも瞭り分らなかつた。己の方が勝つたのだと思つても少しもうれしくは無いのである。却つてあの一國な父が周圍の者から說き伏せられたのか又は自分で自分の不利を認めたのかとうとう屈伏してしまつたと思ふとその心持ちが妙にさびしく己の心に響いて來た。始めの計畫が思はぬ方に外れてしまつていつ迄も土地をはなれることが出來ないのがもどかしかつた。己は退屈に苦しむやうになつた。

正木と二人何日歸るか的の知れない旅に出たのはあと幾日で新年になると云ふ十二月の末であつた。備つてあつた老婢には暇をやり世帶道具は家ぐるみ本宅に返すことにした。たゞ己の身に著ける僅かな物だけを正木が新しく借りて與れた別の家に移しておいて或る朝暗い内に近海廻りの小蒸氣に乘つた。

桃島。赤島。田の浦と汽船は次ぎ次ぎに立ち寄つた。小さい漁村は何れも似たやうな恰好をしてゐた。數へるほどの人家が片側だけに並んで汀には網が干され家の背後には崖が嶮しく迫つて來てゐる。景色を見るのにも飽いたので船室に入つて寢轉んでゐると正木が來て

「大將。日良島ですばい」

と教へた。己は甲板に出た。汽笛が鳴つた。それが穩やかな水の上を渡つて近くの島々に反響した。汽船は岬を廻つて見覺えのある入江に入つた。

が、村はすつかり變つてゐた。瓦葺きの家が大へん殖えてあの時分こわれかゝつてゐた山の上の金比羅樣はいつ改築されたのか新しい屋根の漆喰が林の中に白く際立つてゐた。海だつたあたりが埋立てられて安普請の納屋や飲食店が建つてゐた。

汽船は錨も下ろさないまゝで矢鱈に笛を鳴らした。間もなく艀が來て乘り降りの客が四五人あつた。見知りのある顏は一つも混じつてゐなかつた。旅館の名を白く染め拔いたハッピを着た若い男が艀を漕いで來た。己はあの頃の遊び仲間のうちにそんな名前の子供がゐたかと思ひめぐらして見たけれども記憶には浮んで來なかつた。此處で上陸して一晩位ゐ泊つて見ようかと云ふつもりもあつたのを氣がすゝまないのでそのまゝ乘り過ごしてその午後三時頃に土井の浦と云ふ終點の港で汽船を降りた。

己達は浦々を彼方に渡り此方に渡りして少しも一ヶ所にぢつとしてはゐなかつた。行く先き先きで宿屋に女を呼んで晝も夜も酒ばかり飲んでゐた。村は毎日靜かで小蒸氣が一日に一回定まつた時刻に入つて來るばかりであつた。生簀の上に烏が群つて啼いてゐた。夏の日のやうな澄んだ陽光がたるんだ頭に痛いほど强くしみた。

一ヶ月近くそんなにして暮した。そして新年匆々父が中風の發作に襲はれて大騷ぎしたことなどは夢にも知らずに連日の酒でぼやけてしまつた頭を抱へて或る寒い晩に町に歸つたのであつた。

新しい住居は川をへだてて町と向ひ合つた處の小高い崖の上にあつた。目の下に見える向岸の川端の通りを行く人の顏がはつきり見分けられぬほどの遠さであつた。背後はなぞへに海にとどいて町とは全然區劃を異にしてゐる漁夫の一部落がかたまつてゐた。

二室きりのこぢんまりしたその家は低い石垣の圍ひの中にある離房であつた。母屋には此のあたりで小金持ちだと云はれてゐる獨り者の婆さんがゐた。飯はそこに行つて喰べた。婆さんは氣さくな人でお茶など持つて自分もやつて來て正木と無駄ばなしをしたりした。

やがて舊正月が近づいた。

町は舊暦を主とするので暮れに押しつまつた世間は一日一日と騷しくなつた。それが終日何もすることのない己の心を焦だたせた。耳をすますと町の方から流れて來るどよめきの中に餅搗きの音も聞き分けることが出來た。己は東京で何度も何度も迎へた味も素氣もない正月のことを思ひ出した。とうとう二十八になつたのである。此れから先き己れは一體何うなるのだらうと思はずにはゐられなかつた。

獨りでゐるといろんな雜念が湧いて仕方がないので早く日が暮れて正木がやつて來るのばかり待たれた。正木は一日

に一度顔を見せないことはなかつた。話上手の彼は少しも己を退屈させない。一ばん面白いのは彼自身の身の上ばなしであつた。十六の歳に家を飛び出して方々を流浪して歩いた間の思出話は何度聞いても興が竭きなかつた。理髪床の弟子を振り出しにして職工。土方。鑛夫。船乗りと云ふ風に彼が通つて來た境遇は絶へず移り變つてゐた。さうして此等を通して酒と賭博と喧嘩がいつも彼につきものであつた。無論牢屋に入つた經驗も幾度か持つてゐる。女郎屋の下働きだつたこともあつた。二十前後には悪い病氣をしたので非度く貧乏した。野に寢たり畑のものを食つたりして線路をつたはつて歩いたのもその時であつた。

「夜通し歩いとると足はちやんと動いとるのにいろんな夢を見るもんですばい。時々溝ん中などに落つこつてびつくりして氣持ん好か夢から醒めた時の如る厭やなことは有りませんな」と彼は述懐した。行き當りの家に入つて食を恵まれたこともある。汽船に只乗りしてそのまゝそこの火夫に傭はれたこともある。そんな話をおどけ混じりにぼつりぼつり話して行くのであるがそれがどうかすると昔の武者修行の物語にでもあるやうな凄い妖怪談になつたり勇ましい喧嘩の場面になつたりする。調子に乗り過ぎて途徹もなく大げさなことを云ひ出したあとで他人ごとのやうに自分で笑ひ出すのであつた。

　彼にも以前には女房があつたさうである。しかし何故かその時分の話を彼は口にしなかつた。婆さんの話だと彼の最初の女房と云ふのは親子ほどにも年齢の違ふ女だつたさうである。その娘が町に奉公中に親の分らぬ子を姙んで家にも歸られず困つてゐるのを方々流れ歩いてその時町に歸つてゐた正木が情けごかしに自分のものにしたのであつた。正木はその娘を可愛がりもしたけれども又ずい分非度い目にも遭はせた。殊にむやみと嫉妬して他の家に遊びに行つたとか近所の者と立ち話をしたとか云ふだけのことで狂氣のやうに猛り立つてむごい折檻をした。女の泣き叫ぶ聲が二町も

先きに響いてそら又始まつたと云ふとそのあたりの者は仲裁に行くどころか戸を閉めて頭へ上つたものだと云ふ。女の親が見兼ねて遠い所に逃がしてしまつたのであつた。それから何人も持つたけれども永く辛抱出來る女はゐなかつた。酒癖は年々嵩じて次第に町の者に相手にされなくなつた。

「そつでも大將の前ぢやどげん醉うとつても醉狂せんけん感心ですばい」と婆さんは「あつで本性は正直で利口な男ですけんそのへんの事は良う考へとつとでせうな」と云つて笑つた。

元日は曇つて冷たい日であつた。正木は前の晩から泊り込んで一諸に年越をした。翌朝は一旦家に歸つて着物を着更へてやつて來た。髭も剃り頭髮もきちんと分けてゐた。婆さんも二人の座に加はつた。

「大將。お盃を戴かせち下はり」

と云つて正木は鹿爪らしく手を出した。婆さんの酌でそれを飲み干して己に返した。盃は婆さんにも廻された。

父の病氣はかなり重もい方で一週間ばかりで意識は回復したけれども何時再び發作があるか知れないので體を動かす事を禁じられて今だに床に就ききりになつてゐると云ふのであつた。無論一月になつてから實行するはずになつてゐた例の役所の手續の方はそのままになつてしまつたのである。

流石にもう今となつては誰一人己の所に來る者はなくなつた。たゞ父が危篤に陷つた時にどんなにして今の家を知つたのか迎ひの使が母屋の婆さんの所に何度も來たさうである。然しそれは本宅からではなくて修二の母が自分の一存で計らつたことだつたのであつた。己が旅から歸つた時は何うやら危險期を通り越してゐたのでそれ切り彼女からも何の

沙汰もなかつた。己は父の容體が氣になり乍らも消息を知るてだてが無かつた。

己は父を死なせ度くはなかつた。爭ひながらでも生きてゐた方が好かつた。此のまま死んで行かれては今まで目標にして生きて來たものが失くなつてしまつて此れから先きの己の一生が餘りに寂びしくなるやうな氣がした。實際己は父に對する怨恨を一日だつて忘れた事があつたらうか。滿身の憎惡をそこにこめて一度は復讐せずにおくものかとその誓を絶へず繰り返して自分を勵まして來たのである。苦しい時、頼りない時にはそれが己に生きる力を與へてくれたのであつた。だから己は自分のために父に死なれるのが怖ろしかつた。

正木が時々町に行つてそれとなく樣子を探つて來てくれた。意外だつたのは喜久子が今家に來て父の看護をしてゐると云ふのであつた。

彼の女の消息を聞くのは此れで二度目である。己と別れて生家に歸ると間もなく町をはなれて遠くの親戚の所に行つたと敎へたのも正木であつた。今度は父が自分から望んでわざわざ呼び寄せたのださうである。多分此れから先きもずつと病身な父の側に付き添つてゐて世話するのだらう。彼は何處で聞いたのかそんな詳しいことまで知つてゐた。

己は何も彼も目算が狂つてしまつたので張合ひのない日を送つた。持つてゐた金もその内なくなつてしまつた。正木に話すと彼は雜作なく引受けて、婆さんに相談した。婆さんは快く貸してくれた。

その時己は正木に、

「豫想が外れたもんけん。まだ君にお禮も出來んで」と詫びた。すると彼は、

「お禮なん云うて滅想な」と遮つて、「私は始めからそげん考へでお附合ひしたつちや無かつですばい」と少し不機嫌な顏をした。

「でもあんまり心配ばかりかけるもんけん」

と己は云ひ譯けした。彼は己の言葉には耳を假さないで自分のやうな者を此れ程に信用して附合つて下さると云ふだけで自分としては此れより有り難いことは無いと思つてゐる。却つて大將を今のやうな事情から一日も早くどうかして上げることが自分の力で出來ないのが心苦しくてならないと云つた。

その日己達は午後から家を出て町とは反對の入江を傳ふて石山の方にぶらぶら歩いた。

「實は大將」と正木は汀を行き乍ら、

「私は今まで大將に秘したことが一つあつとですばい」と己の顏色を見て笑ひ乍ら、「一度は知れるこつですけん此處で云ひませうかな」

から前置きして彼は自分が既う夙くから叔母の家に出入りしてゐることを打明けた。それは辯護士を中にして父と交渉してゐる時分からの事だと云ふ。或る晩おそく叔母が一人で正木の家に訪ねて來たのであつた。その時彼女は正木に此れまでの己達親子の事情を話した上で己が今度父に對つて取つた態度を止むを得ない成行だつたのだと云つて今更思ひ止まるやうに勸めた所で肯かなからうしよし又一時は何とか妥協がついたにした所で又後日になつて問題が起きるのは分つてゐるのだから一そ此れを機會に請求出來るものは請求して解決をつけた方が得策だらうと思ふ。多分さうなれば親子の縁は切れてしまふだらうがどうせ今までのやうな關係をつゞけて行くよりは却つてその方が好いのだからそれには介意はないで此方の權利は何處までも主張してくれと呉々も己のことを頼んで歸つたさうである。

「私はそん時始めて小菅の奥さん云う人にお目にかゝつたつですばつてん。なかなか出來た人だと思ひましたばい」と彼は叔母のことを讃めて、「大概の者なら私が此げんして大將とお附合ひしとれば胡麻擦つて何か惡つかことでもしと

泣ゐに従ふのが普通ですばってん。そげんことは迚かちも仰有らんですもんた。そつから私の方からちよいちよいお伺ひしとりますが何時行つても正木々々ふうてよくして下さつとですばい」

己は何も云はなかつた。彼が今までそのことを秘してゐたのが腹立たしくもあり又彼の話を聞いてゐるうちに何かしら温かいものが自分の胸に流れて來るやうな氣もした。

登り詰めた所の地藏堂に腰を掛けて低い雲に覆はれた町の甍を見下ろした。濁つた海に汽船が一艘退屈さうに晩の出帆時刻を待つて浮んでゐる。

正月が過ぎてからはじめじめとした冷たい日がつゞいた。低い空から雨が小止みなく降つて障子も明かないやうな日には外に己の氣分を滅入らせた。炬燵に潜り込んでうとうとしてゐるとへんな夢に襲はれてばかりゐた。

今の生活とは全然何のつながりもない學校時代のことがよく夢に出て來るのは不思議であつた。どこの學校だかははつきり分らないが、何でも非常に廣い試驗場である。そこに澤山の學生が一ぱいに詰つてゐる。みんな俯向きになつて答案を急いでゐる。その中で己だけが一字も書けないでぼんやりしてゐるのであつた。時間が迫つて場内はだんだん人が疎らになつて行く。氣ばかり焦つて泣き出しさうにしてゐる時に目がさめて夢だつたと知る時の嬉しさはなかつた。

それはまだ好いのであるが相變らず父の夢を見るのは辛らかつた。或る時は兇器を持つた己が父を追ひ詰めてゐた。何故か二人共眞つ裸である。父は頻りに手を合せて命だけは助けてくれと乞うてゐる。己は侮蔑の目で見おろしてゐたが、その泣面があまり可笑しいので急に聲を立てゝ笑ひ出した。すると何時のまにかその笑聲がそのまゝ泣聲になつてゐる。眞つ裸の親子が抱き合つておいおい泣いてゐるのであつた。

雨は止んでうらゝかな天氣が還つて來た。梅はもう散つた。桃も散り桃が咲いて世間は忽ちのうちに春の陽氣に變つ

た。日が長くなつた。時候の推移は己の心を焦だゝせた。己は毎日自分の體を持てあました。その頃から町では長崎との間に汽船の競争が始まつて正木は直ぐに一方の客引に傭はれた。己の所にも遠ざかるやうになつた。

やがて長閑な花の時候になつたが己はその頃から何うしたものかさつぱり元氣がなかつた。起きて坐つてゐるさへ大儀で寢轉んでばかりゐるやうな日が何日かつゞいた。

或る日正木が久しぶりでやつて來たが己の氣分が勝れないのを見てあまり家にばかり引込んでゐるせゐだらうと云つて己を野遊びに連れ出した。婆さんに辨當を拵へて貰つて目的は向ふの岡の上と云ふことにして家を出た。直つ直ぐに町の中を行かないで右に田圃を迂廻した。路は麥畑の畦道になつたり田ぶちの土手になつたりした。縣道を横切つてやがて岡についた。

岡は町の背後を區劃つてゐる。崖の家から毎日眺め暮らしてゐる背のやうな恰好の屁べつたい台地がそれであつた。見返ると己の住ゐはずつと遠くに西日を受けて白く光つて見えてゐた。見晴らしの好い場所に坐つて提げて來たものを擴げた。

「へつ、此ら何ん云ううへまな事をしたもんか」

正木は盃を忘れて來たのに氣がついて忌々しげに云つた。「大將。すみませんばつてん一寸待つとつて下はり。私馳け下りて行つて共邊から借りて來ますけん」

正木の妻が灌木の間に見えなくなるのを待つて己は芝生に背を凭せた。此の頃歩きつけないせゐか非度くくたびれたやうで骸體がだるかつた。空は秋の日のやうに澄んで沖には雲の塊が浮んでゐる。波止場から縦に町を貫いた往還が白く輝いてその上を行來する人や車が手に取るやうにはつきり見えてゐた。それだのに町全體は非常に靜かであつた

己は物思ひに沈んだ。此の二年ばかりの間に己の身に起つたさまざまの波瀾や變化を今氣だるい頭で振り返つて見るとまるでもうずつと遠い日の出來事のやうな氣がされた。

己は臉の熱くなるのを感じた。喜久子は今も父の側にゐるのだらうか。

正木が呼吸をはづませて歸つて來た。

「まあ一杯」と云ひながら盃を渡して四合瓶の口から酒を注いだ。自分もゆつくり飲みながら汽船の競爭のことを話し出した。いろいろの理由から自分の會社の方が最後の勝ちになるらしいと云ふのである。それに就いて自分の今度の功勞は重役等にも認められてゐるはずだから競爭が熄んだ曉は何かの用に取り立てゝ貰つて永く會社に使はれ度い。無學の事でどうせ氣の利いた役には立たないけれども荷の配達係か仲仕の取締りかならば勤まりさうだからその方を願つて見ようと思つてゐると話した。

「私も大將。ここいらが考へ時だと思ひますばい。いつまで此げんしとつたつてうだつは揚りまつせんけんな」。

と云つて彼は自分を嘲るやうに笑つたが己が酒も飲まずに浮かぬ顏をしてゐるのに氣がついて氣分が惡いのではないかと氣づかつた。己は

「お前が今日に限つて妙な事を云ひ出したもんけん。己まで氣がめいつたつばい」

と云つてわざと笑ひに紛らせた。

二人は立ち上つて家路についた。傾いた日光を背に浴びて田圃を歸つた。

家に着いた時は非常にぐつたりなつてゐた。餘りパッとした戸外の景色を通つて來たせゐか家の中が妙に侘びしく障子の色までがまだ夕方には間のある時刻だのに黄色つぽく見えた。體の中を惡寒が時々掠めて氣持が惡いので直ぐ布團

を被つて寢てしまつた。

翌る日も氣分が勝れなかつた。度々下痢をして矢鱈に水を欲しがつた。一人でゐると心細くてならないので婆さんに頼んで正木を呼びに行つて貰つた。正木は汽船の方を都合して終日己の傍にゐた。果物を買つて來たり町まで氷嚢を買ひに行つたりした。氷が喰べ度いと云ふと町ぢゆうを詮議して歩いて魚問屋が冷藏用に持つてゐたのを配けて貰つて歸つた。その次ぎの日も次ぎの日も同じであつた。そんな容體が四五日つゞいた。

或る日不圖したはずみに便所の中が眞紅になつてゐるのに氣がついた時己は打ちのめされたやうに、呆然としてしまつた。何でもない下痢だと思つてゐたのはチブスの腸出血だつたのである。何故それを知つてゐたかと云ふと東京の下宿屋で止宿人のうちにそれと同じ病氣に罹つた男があつた。やはり便所からそれが分つて避病院に入れられたが間もなく死んだと云ふことであつた。

己は永いことそのまゝぼかんとしてゐた。婆さんと正木は己がそんなに暇取つた上に眞つ青になつて出て來たのを見て驚いた。己は何も云はずに床に就いたが暫らくして正木に突然入院すると云ひ出した。正木も反對しなかつた。そして自分で行つて病室を取り極めて來た。私立の小さな病院であつた。己がそんな所ならば避病院に行かなくてもすむかも知れないと思つたのであつた。

婆さんと正木は直ぐに入院の支度にかゝつた。己は積み上げた布團に倚り懸つて二人の仕事を默つて見てゐた。今日も西日が障子に一ぱい射してゐる。何故か今日に限つてその光が強く惜しまれた。己は障子の桟をぢつと見つめて熱い息を吐いた。

夜になつてから俥で出かけた。婆さんが途中までついて來た。別れるとき「早よ癒つてお歸んなはり」と云つた。己

は借金の事を何とか云はねばならないと思ひ乍らとうとう云ひ出す機がなかつた。

正木が傍に寄りそつて伜は凸凹の道を出來るだけ靜かに行つた。病院ではざつと診察しただけであつた。大へん無愛想な醫者で明日よく見るから取敢へず氷で冷やしておけと云つた。熱は四十度に近かつた。

正木はその夜はとうとう徹夜した。病室は陰氣な三疊で壁は一面に樂書とシミに汚れてゐた。煤ぼけて不透明な窓硝子は半分以上新聞紙で繕ろつてあつた。電燈もつかないと云ふので小さいランプを借りて來た。あたりは靜かであつた。

夜が明けて醫者が來たが診察は極く大ざつぱで流感の熱ででもあるやうな事を云つてゐた。己は自分の方から思ひ切つて出血のあつた事を云つた。すると醫者は急に狼狽て出して何故最初からさう云はなかつたのだと強く責めた。そして體を動かしてはいかない食事も此方から決めてやる外には宛合う事はならないとまるで腹を立ててでもゐるやうに嚴しく正木に立ひ渡した。正木はひたすら恐縮してしまつた。

それからいろいろな注射器を取り揃へるのに一と騷ぎした。醫者は氣を焦らつて助手や看護婦を無闇に叱つた。玩具の水鐵砲ほどある器械で兩股に注射した。口からは膠の溶液のやうなものを矢繼早に流し込んだ。さうして兩手を組んでヂツと己の顏を見まもつてゐた。助手や看護婦が去つたあとも醫者はそこを動かなかつた。

「此つで少しは熱が退きまつせうかな。先生」と正木は此の二三日の氣苦勞ですつかりやつれたやうに見える顏に媚びるやうな笑を作つて醫者に云つた。彼は餘りに重くるしい此の場の空氣を何うかしてかへたいと考へたらしかつた。しかし醫者は返辭もしなかつた。その内己はウトウトして眠つてしまつた。目がさめた時正木は顏を寄せて、

「些とは宜か如るですか。氣を落しちやいけませんばい。先生はたいした事は有んみや云うとりますけん」

と云つた。

醫者がまたやつて來て股に注射した。そして多分此れで出血は止まるだらうと云つた。正木はそれを聞くと同時に大仰に頭を低げた。そして

「宜かつたですな。大將」と半分は醫者に聞えるやうに、

「先生があげん云ふち下さつとですけん。もう大丈夫ですばい」と云つた。彼は己の病氣が意外に急轉してからと云ふものすつかり度を失つてしまつて毎もは妙に氣取り度がる癖のある彼がたゞもう醫者の顔色ばかり覗つてゐるのであつた。

己はまた眠つた。目を醒ますと枕許に母が一人坐つてゐた。己は顔に血があがるのを感じた。身のまはりの見すぼらしい有様を彼女に見られたのが恥かしくも有り腹立たしくもあつた。で何を云はれても目を瞑つて聞えぬふりをしてゐた。そこへ修二の父と母がやつて來た。己の容體についてひそひそ話してゐるやうであつたが叔父がどつちにしても此の家はあまり非度い。他に何うかした所が無いものだらうかと云つた。そして兎も角も醫者に會つて見ようと云つて出て行つた。

「眠つとんのか」

と云つて叔母が顔を寄せた。己は微かに目を開いて彼女を見た。何か云はうとしたけれども胸がせまつて口が利けなかつた。

醫者の住居の離れに移されたのはその日の夕方であつた。叔父親子と正木と藥局とで布團のまゝ擔架で運んだ。そこには本宅からいろんな物が持つて來てあつた。寢具もすつかり取り換へられた。叔母を一人殘してみんなは一旦引取つ

た。叔母は筆の穂先で己の唇を潤ほしてやりながら、

「おつつけお父さんがこゝに見えなはるけんな。もう何も云はんで仲なほりせんならんばい。分つたか。非度う心配しとんなはるんぢやけん」

と云つた。己は頷いた。その時夕日の光が今一度ぱつと障子に映つた。己は昨日まで暮してゐた崖の上の家がなつかしくなつた。

「正木は……」

と云つて室の中を見まはした。

「今氷買いに行つたつばい。何か用か」

と叔母がたづねた。何も云ふ事がないので己はそのまゝ目をつぶつた。

父が不自由な體を杖と母とに支へられて入つて來たのは灯がついてからであつた。暫らく見ない内に父はすつかり變つてしまつてゐた。むくんだやうに肥つて頭を坊主に刈つてゐる。唇が子供のやうに反り返つて息づかいが苦しげであつた。

「やれやれ歩きつけんもんけん、どうも……」

と縺れる舌で云つて座布團に不器用にあぐらを搔いた。

「旦那。始めまして」

と正木は室の隅に飛び退つてしやちこ張つたお辭氣をした。

その時母が「正木さん」と側から耳語いた

「あゝ。あゝたが正木さん」
さう云つて父は輕く頭をさげて丁寧に、「今度は非度う御心配かけた云ふこつで」
それからやつと己の方に目を向けて、
「何げんちや。加減は」と云つた。己は何も答へることは出來なかつた。父の目が己の顔に注がれるのと一緒に己は耐らへ切れなくなつて泣いてしまつた。
「大將。大將」
と正木が枕許に廻つて來て宥めた。
「泣いちやいかん。泣いちやいかん」と父は叱るやうに云つたがしかし彼も聲が詰つてそれ以上は云へなかつた。母も叔母も泣き出した。

熱はそれからも依然退かなかつた。別に苦しいほどの事はないのだけれ共たゞ急に氣落ちがしてしまつて眼を開いて物を見たり人の話聲を聞いたりするのが非度く臆劫でならない。仰向けになつたまゝぢつとしてゐると何うかした拍子に自分の中から自分が脱けて行つてしまひさうでそれが次第に遠い所にでも誘はれて行くやうに恍惚と好い氣持になる。何だか先きの方に今まで知らなかつた平和な世界が有りさうに思はれる。するとそんな時きまつて何處かで己の名を呼ぶ聲が聞えて來るのである。始めは遠くからのやうに幽かに聞えるのが次第に近くなつてやがてそれが母や叔母の聲だと分る。己にはそれが煩さくてならない。折角己が向ふへ行かうとするのにそんなにして呼び返されるのが忌々しかつた。けれどもしつこい呼聲には勝てない……。
我に返つて周圍を見るとみんなの目が己の顔を覗き込んでゐる。醫者が急いでやつて來て注射をした。
フト己は人々の背後に喜久子の泣き濡れた顔を見出した。

をはり



耳

宮地嘉六

その青年は最初に柳之助を訪れて來た時は美喜子の情人であるとは名のらなかつた。美喜子の情人の友達で、須田と云ふ者だとしらをきつた。然し柳之助は、多分美喜子と同棲してゐる男に相違ないと思つたので、『かくさなくつても好いでせう……』と輕い調子で云つて、とう〳〵相手に頭巾を脫がせた。

『ようござんすよ。私だつて出來るだけのことはしませう。今此所に五圓ばかりしかありませんが、とりあへずこれだけでも持つて行つて產婦に滋養分でも買つてやつて下さい。』

柳之助はなるべく事件を圓滑にかたづけたがよいと思つて最初から努めて正しく出た。それだけ相手に弱味を見せたことにもなるが、最初からそれほど惚れてかゝつた女でもなく、女房にするには不足を感じながら獨身の寂しさから、つい關係した女であつたから難題を持ち込まれるのが當然のやうにも思はれたのである。逆に出れば、自分の情婦を橫取りして置いて、どうしてくれるもあつたものかと高飛車

に云へないこともなかつたが彼にはさうも出來なかつた。
『折も折だ……今日はこれでいやなことが二つ重なる……』と彼は内心うんざりした。
それは見合ひまでしてすつかりこちらで乘り氣になつてゐた女が、大へんな、いはくつきであることが分り、彼は悄げきつて、此の男が訪ねて來る少しまへに歸宅したばかりであつたのだ。
青年は五圓のばら錢を直ぐには受けようとはしなかつた。思ひの外、柳之助の方で穩かな態度を見せたので少々恐れ入つたのか、それとも『これんばかりの金でうまく逃げられては……』と云ふ用心からであつたか、女の出産の爲めに一圓の金にも困つてゐるやうなことを最初にほのめかしながら妙にもぢ〳〵した。
『今此所にありさへすればもつとあげても好いんですが、あいにく持ち合せがないんです。たつた今外出さきから歸つたばかりで、そのつかひ殘りなんです。私だつてこれだけですまさうとも思ひませんが……』
『いえ、それは……』青年は云つた。そして受け取つた。
それから二人は暫くくつろいで話した。生れた赤ん坊は女の子だと云ふのであつた。
『誰に似てるやうですか。』
『まだ生れたばかりで分りませんよ。』と青年は云つた。
『貴男は何大學です。』
『△△大學にゐます。』
『何科の方です。法科ですか。』
『法科です。』

『法律的にはこんな事情の問題はどう解決すべきですかね。』柳之助は微笑で云つた。

『さうですね。僕等はまだ學生ですからよく分りません。』

『結局徳義上の問題でせうからねえ、まあお互ひに讓り合つて話をつけたいもんですねえ。大體のそちらの要求はどうなんですか。』

『まだ具體的には美喜子の兩親も考へてゐないやうです。たゞ今日は貴男に會つて樣子を聞いて來てくれと云ふもんですから……實は美喜子の母がこちらへ來る筈でしたが、僕に行つてくれと云ふもんですからその代理で來たわけです。美喜子の父は今病氣で寢てゐますし……』

青年は柳之助の問ひにはあまりはつきりした答へをしなかつた。いづれ美喜子の兩親と相談した上でのことにしたいからと云つた。

二度目に來た時の靑年の態度は最初よりも少し横柄であつた。それに夜の十一時近い頃に戶を叩いた。柳之助はひとり蚊帳の裡でうつら〳〵眠りかけてゐたが、早速蚊帳の吊りを一隅はづして靑年と對座した。彼もその後幾日かの間に二三の友人達に打ちあけて、事件の解決方法については略ぼ自信を得てゐたので、この前よりも落ちついて相手を迎へた。

靑年の云ふには、いつまでも産婦を産院に置いては費用が嵩むばかりであるから一日でも早く自宅へ引きとりたい。それには今までの産院の費用をどうかして支拂はねばならぬ。今夜はそのことで來た……と云ふ意味であつた。

『では、あんたの方の要求をはつきり云つて見て下さい。』柳之助は煙草に火をつけた。そして、相手をまともから見ずに煙を吹きながら答へを待つた。青年は少し間を置いてから、先づ、子供を引きとつてくれるかどうか、そのことを定めて貰ひたいと云つた。

『子供が確實に私の子供であるならば、そりや引きとつても好いが。然し……』

『僕の方ではどちらでも好いんです。唯貴男が自分の子であると承認して下されば好いわけです。』

『さあ、それはちよつと困難な問題で、貴男と云ふ情人と彼女が同棲してゐないのなら……つまりです。彼女が私との關係の間に姙娠して今もつて獨身で親もとででも暮してゐてお産をしたのなら私として絶對にその子供を承認しないわけにもゆくまいが、今の場合は少し事柄が違つてゐるのですからね……私だつて君の見る通り妻子があるわけではなし、彼女に貴男と云ふ情夫がなかつたら母子共に引きとることは當然でもあるし、むしろ私にとつては幸福でもあるんだが今の場合でどうしろと云はれるのは少々そちらが勝手過ぎると思ひますねえ。』

青年もさう云はれると直ぐには返答が出ない様子であつた。

『……然し貴男の子供には相違ありませんよ。それは醫者に血精の檢査を請へば分かることですよ——僕だつて境遇が許すなら貴男に兎や角云ひたくないんです。僕の手もとで育てたいんですが、僕もまだ學生の身だもんですから困るんです。美喜子も産後の身體が良くなり次第にどこかに勤めて働きたいと云つてゐます。さうしないと僕が學校を卒業するまでの生活費に困るもんですから……貴男の方で子供を引きとつて貰へなければ誰かにやるより外ありません。然しやるにしては金がいりますからねえ。』

『さう……』柳之助は寄りついた蚊をピシリと打つた。

『貴男が承認したからと云つて是非共子供を引きとつて下さいと云ふんぢやありません。それは引きとつて貰ふに越したことはありませんが、僕の友達は貴男に引きとつて貰ふよりも誰かにやつた方が好いと云ふんです。』

『そりや私が承認する以上は他所へやるやらぬはその子の親の意思で定まることでせうからねえ……』柳之助は此所でちよつと相手の言葉をひねつて『それで、私が子供を承認しないとしたら君の方ではどうしやうと云ふんです――いやそんな理屈はぬきにして私が子供を引きとるとすれば君の方では文句はないわけですか。』

『それはさうですとも……さうなれば産院の費用だけ負擔して貰へば好いです。』

『いくらくらゐの金額ですむんですか。』

『三百圓貰へばどうにか形がつきます。』

『ぢや、ついでに承つて置きたいですが、子供を私の方で引きとらぬとすれば、つまり承認問題は別としてです。』

『さうですねえ、今後の養育料を貢いで貰へば好いわけです。勿論産院の費用を貴男が負擔して下さつてです――然しかう云ふ條件でなら解決が早いと思ふがどうでせう。此の際一時にまとめて五百圓だけ貴男から貰へば私の方で子供を引きとることにして、全然貴男との關はりがなくなると云ふことに……さうして貰へば僕は美喜子に何か小店を出させたいと思ふんです。』

『さあ、五百圓と云ふ金は私にとつて非常な大金ですからね、それはとても……』柳之助はかすかな苦笑を顔ににじませながら云つた。彼は相手の書生風な卒直さには好感を持つことが出來ても要求の金額については不快を覺えた。それは自發的な良心を不必要にされたと云ふ意味の不快感であつた。然し、それだけ彼の氣持は自由さを得た。その當否を論ずるだけの相手に對する誠實さをも捨て得た。そして今即答する限りでないと云ふ風に急に話頭を變へた。

五

『貴男は美喜子といつ時分から同棲したんですか。』

『今年の一月からです。』青年は答へた。

『一月の幾日頃から……』

『四日からでした。』

『ぢや、美喜子が私のところへ訪ねて來て、それから間もなくですね。彼女が最後に此の家を訪ねて來たのは大晦日の晩でした。その晩はお友達と除夜の鐘を聞くと云つて長くはゐずに歸りましたよ。』

『えゝ大晦日の晩、美喜子が此所へ來たと云ふことは美喜子からも聞きました。その晩、彼女は貴男に對して、嫉妬したから結婚してくれるかと云つたさうですが、その時の貴男の答へが曖昧だつたと云つてゐました。』

『いや、その晩彼女が結婚してくれるかと云つたから、即座にしようと云つたが、妙なことを云ひ出したのです。實はこれ／＼で或青年が、それは無論貴男のことだつたのです——その人が自分と結婚してくれとしきりに强要すると云ふんです。若しあくまで拒むならばどんな手段を講じても復讐せずには置かぬと云つて脅かすから弱つてしまひます。と云ひ出したから、それは困る。貴女はその人と關係があるのではないのか、關係がなくつてその人がそんなことを云ふわけはないと私は云つただけです。それつきり、私のところに寄りつかなくなつたんです。つまりそれから三日か四日目に君と同棲したわけですね。』

『僕は美喜子に結婚してくれと云つたのは事實ですが脅かしたりしはしませんでした。』青年は云つた。

『で、君と彼女との關係はいつから始まつたんですか。』

『同棲してからです。同棲するまでは全然關係はありませんでした。』

女の方ではその時柳之助に姙娠を打ちあけて結婚してくれるかと云つたけれど彼の返答が煮えきらなかつたから須川青年に馳つたとの云ひ分であつた。柳之助と美喜子との關係は僅かで終つてゐた。彼女は一月に一度か二月に一度くらゐ柳之助のひとり住居を訪れて來るに過ぎなかつた。彼女はダンスホールや音樂會などを飛びあるいて近代かぶれのした若い男女と交際してゐることが得意さうであつた。絶えず氣持のぐらついてゐると云ふ女で、桃割れに結つて舞扇や三味線の撥を袱紗に包んで稽古歸りの下町娘らしい裝ひで、ぽつくりを履いてやつて來ることもあつたが、またお下げに結つてフエルトの草履をはいて、オペラバツクを提げて來ることもあつた。そしてはどこそこの音樂會に出たことや、それに忙殺されてゐることや、會のために夜を更かして自働車で小石川の宿へ歸ることが毎晩つゞいたことやを語るのであつた。年は二十三であつたが柳之助を訪ねて來る時はいつもおはねらしく浮々した調子で小娘のやうな笑ひをした。兩親は本郷邊で女學生の下宿屋をしてゐたが、彼女は小石川の方にひとりで間借りをして氣まゝ放題に日を暮してゐた。父は退役將校であること、彼女はそのひとり娘であること、兩親が本郷で下宿屋を始める前までは一家の生活を助けるために一時タイピストをしてゐたことなど、柳之助は彼女の友達に聞いて知つてゐた。

柳之助は青年に尋ねた

『君は美喜子が姙娠であることを承知で同棲したのですか、それとも……それを承知で彼女と同棲したとすれば君としてはもつと早くその胎兒についての交渉を私にして置く必要があつた筈ぢやありませんか。今日まで默してゐて、彼女がお產をしたからと云つて私に難題を持ち込むのはおかしいと思ふ。』柳之助は相手の急所をつき得たつもりで云つた。

『僕は彼女が姙娠してゐることは同棲する時も知りませんでした。同棲してからも知りませんでした。それは實際なん

です。お腹もそれほど目立つて大きくないもんですから分らなかつたんです。ところが急にこんなことになつたので美喜子に尋ねて見たんです。生れた子はたしか十ヶ月經てゐると産醫が云ひますから彼女と僕とが同棲してからの月數と合致しないのがおかしいと思つて僕は强硬に美喜子の告白を迫つたんです。そしてやつと貴男との前關係を打ちあけたのでした。』青年はどもりながら辯解した。

『さうであつたにしてもですなあ……』

『そりや僕にも缺陷があります。』青年は云ひつゞけた『ですが貴男も全然無關心ではすむまいと思ひます。』

『そりや私もさう思ふ。』と柳之助は云つた。『だから出來るだけ最善の方法を私だつてとりたい。』

『では、どう云ふ條件でたらば貴男は好いんですか。』

それには柳之助はもう四五日考へさせて貰ひたいと云つた。青年はそれを承知した。もう夜は十二時近かつた。或はそれ以上の時刻であつたかも知れぬ。青年は電車がなくなるからと云つて立ち去つた。

柳之助は青年を送り出してから直ぐに寢た。そして獄中に於ける罪人のやうにひとり寢ながら長い間考へに耽つた。電車のない暗い夜更けの町を何をか考へながら胸をはつて歩いて行く青年がふと途中からとつて返し再び戶を叩きはしないかとわけもなく氣になつた。然しそれは夏の眞夜中の靜寂が促す不安であつた。彼はやがて夢をさへ見ずにぐつすりと夜明けまで眠つた。

翌日青年から手紙が來た。いろ〳〵の事情に迫られてゐるから五日間は待ちきれぬ……若し五日間後にこちらの要

通りの答へを得ない場合には甚だ困るから大至急そちらの思ふところを答へて貰ひたい……昨夜の要求が全部容れられないとすれば交渉の方法を變更する……と云ふ意味のことが書いてあつた。柳之助には相手の態度がだん〳〵强硬の度を加へて來るやうに思へた。彼は人道上の問題であると云ふ意味で一應は愼重に考へはした。然し嬰兒について疑ふ餘地があると云ふ點から、女が現在青年と同棲してゐると云ふ點からも彼はこの問題から逃げる道をば相當に考へ得た。が彼は昨夜の腹案が最も妥當であることを信じて早速返事をしたゝめることにした。嬰兒の父が確實に自分であるならば自分が嬰兒を引き取ることが最善の道だと思ふ……然し嬰兒は母親がなくては完全に成長しないと思ふから、此の際母子共に引き取ることを主張する……嬰兒を承認する以上はそれが自分としては正當な主張であると信ずる……貴下は私の情婦を奪つて現に同棲してゐながらその同棲中に生れた嬰兒を楯に金錢を要求するは大いなる間違ひであると思ふ……忌憚なく云へば貴下が美喜子側の代表者としてそのやうな要求を以て直接小生に迫る權利はないと信ずる――然しながら貴下が折角現在同棲してゐる美喜子を取り戻さねばならぬと主張するのではない……嬰兒を承認して引き取る場合の最善の道として主張するまでだ……嬰兒が果して自分の子であるかどうかについては充分疑ふ餘地がある……然し自分としては前情人の美喜子の出產に對する見舞金として金百圓を贈りたい……それで萬事が終結するならばよし、不承知ならば自分は決然として、一切を拒絕する……承知ならば來る二十五日までに受取りに來て貰ひたい……と云ふ意味のことを彼は一氣に書いてポストに投げ込んだ。

百圓と云ふ金子でさへも彼には大金であつた。その意味で彼は先方が不承知だと云つて拒否してくれる方が却つて一方に於て救はれるやうな氣がした。彼は先方の不承知を敢て望まないまでも、その場合は動じないつもりであつた。

二日ほどして先方から來た手紙は次のやうであつた。

『貴方のお手紙を手にして私共が如何に御返事に惱むだかをお察し下さい。私共は貴下の御答書が無茶であるとは思ひません。もともと私共は貴下の弱みにつけ入つて申し出た要求ではなかつたのですからこの場合兎や角云ひたくありません。眼を閉ぢて貴下の御答書通りに承知しました。唯此の上の願ひ出は、二十五日までに御調達下さるべき金子を二十日までに願ひたいことです。郵便爲替でお屆け下さるとも。また受け取りにまゐつてもよろしいのです。小生は急用のため歸郷致すことになりましたので代人を差し上げます。御都合の如何を折り返し御一報下さい――』

柳之助は二十日までに百圓の金子をとゝのへねばならぬと思つた。然し初めに五百圓と云ひ出して遂に百圓で承知するに到つた先方の存意を想像すると安心は出來なかつた。此の際後來の面倒を避けるに充分な手形が必要だと思つた。

『金子は二十日までにとゝのへる……直接手渡ししたいから念のため嬰兒を連れて金子を受け取りに來て貰ひたい……受け取り人は確實なる代人であればよろしい……』と柳之助は返事を出した。彼はその赤ん坊を一目見たかつたばかりでなく、事柄の性質上見る必要を感じた。

代人として須田の弟だと云ふ二十一二の青年が二十日の夜に嬰兒を抱いて來た。それを見ると柳之助は云ひやうのない氣持に迫られた。むしろ嬰兒を連れて來てくれない方がましであつたとも此の時彼は思つた――無論女がその附近まで抱いて來たらしかつた。

『どうぞ、あがつて下さい。御苦勞でした。』

『兄からよろしくと申しました。』

赤ん坊は皺だらけの顔をして額のあたりに汗ぼを出してゐた。柳之助は一場の悲劇のやうでもあり、また運命の惡戯のやうにも感じた。小さきものに對する可憐さの情が彼をして瞬間だけでも自分の子だと信ぜしめずには置くまいとした。嬰兒に對してさう信じなければすまぬやうな氣がした。自分の子でないと強いて全然否認することは出來ても此の小さな客に對するいとほしさの情に變りはなかつた。彼はいつしか信疑の迷ひから超越してしまつた。

『おつぱいはよく出ますか。』

『えゝよく出るやうです。』

柳之助は金を渡した。そして青年が受取證を書く間赤ん坊を抱いた。近所で尺八が鳴つてゐた。その尺八の音がからした場面にしつくりとはまつてゐた。柳之助は赤ん坊を抱いて眺めてゐる間に唯一つ感じた『耳朶が似てゐるやうでもある……』と思つた。それはぽつちりと白隱元のやうに垂れ下つた小さな耳朶であつた。と赤ん坊は何を思つてか急に泣き出した。

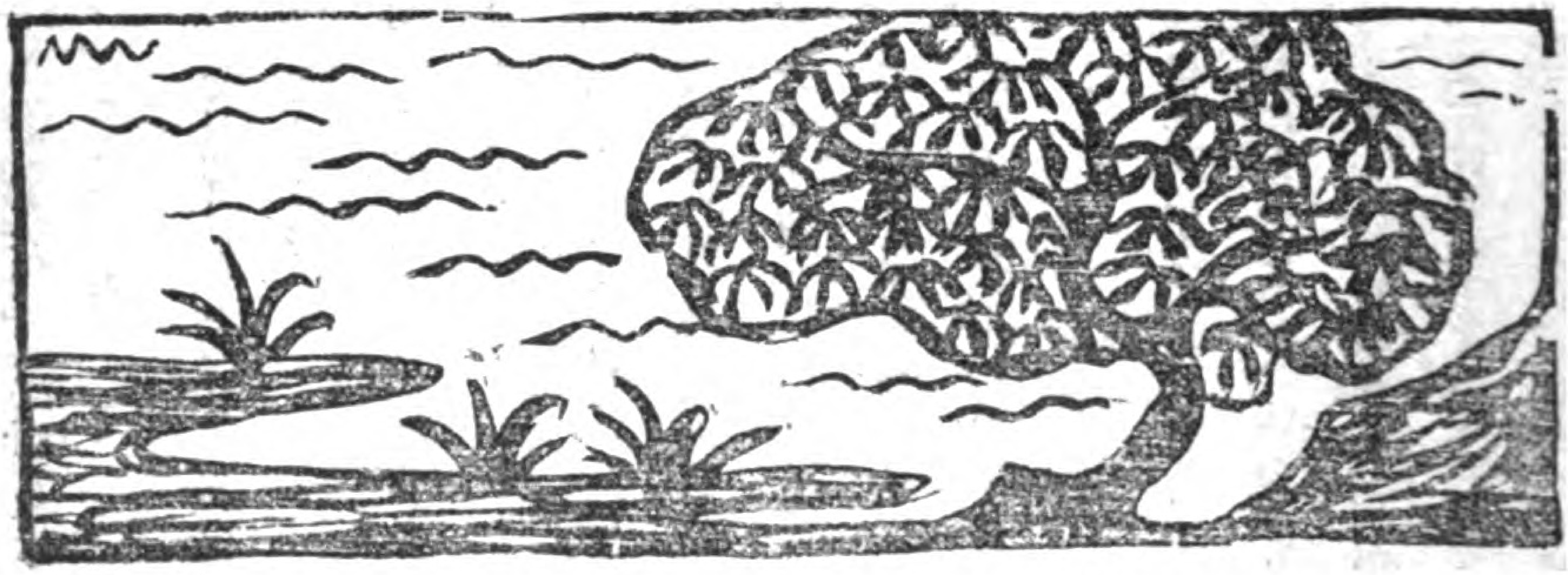
青年は柳之助の文案通りに受取證をしたゝめた『金子一百圓正に受取候――關係事故は全く終結したものと認めます。』と證文の終りは結ばれてゐた。柳之助はこれで後日の面倒は尠くも免れ得ると思つて安心した。青年は嬰兒が泣きつゞけることゝ附近に待たせてある嬰兒の母のことが氣がゝりらしく間もなく去つた。柳之助はほつとした。

その後柳之助は一人の友達に逢つた時から話した。

『唯赤ん坊の耳朶が僕のと似てゐたやうにも思ふ……』と。

『そして、その後先方からは何とも云つて來ないかね、無論一旦解決した以上は……』友達は云つた。

『いや、その後一度脅迫的な手紙が來るには來た。脅迫の手紙には恐れないが自責の念には恐れてゐる――。』



海濱小景

廣津和郎

主要人物

立花　青年
三好　同
池上　同
みね子　少女
しづ子　若き未亡人
其他、釣竿を持つた人、少女二三名

海濱。
海水浴小舍が立ち、砂丘、松林など見ゆ。
夏の終り。
夕方。晩食後の散步時。

幕開く。青年立花、三好兩人散歩してゐる。

立花。毎日毎日海も寂れて來るね。何といふ事なく荒凉とした感じになつて來るぢやないか。見給へ、波の色まであんなに違つて來たよ。

三好。さうだね。淋しくなつたね。

立花。君はいつ頃東京に歸るね。

三好。未だ決めてはゐないんだけれど、二三日中には歸らなければならなくなるだらうと思つてゐるんだけれど……

立花。實際毎日毎日顏馴染の人間が歸つて行つてしまふといふのは、やり切れなく寂しいね。町を歩いてゐると、停車場の方へ、陸續として俥を走らせて、見覺えのある連中が歸つて行くからね。――あれも歸る、ああ、あの女も歸る、さう云つた氣で見てゐると、妙に澄まして、お前さん方は、未だ殘つてゐるの、氣の利かない人達ねえ、つていふやうな顏付で、乘つて行くからね。

三好。……

立花。併し又一方から云ふと、海岸といふものは、今頃が趣があるとも云へない事はないよ。僕は毎年九月にならないと東京に歸らないが、いつでもこの取殘されて行く佗しさといふ奴に、一種の魅力を覺えるよ。

三好。……(無言のまま、何かじつと考へてゐる。)

立花。(三好の樣子を橫眼で見て、皮肉でない薄ら笑ひ)相變らず考へてゐるね……で、君の彼女はいつ頃東京に歸つて行くんだね?

三好。明後日らしいんだよ。

立花。明後日。……成程ね。………で、君は未だ一歩も進まないといふわけかね？

三好。ああ、進まないんぢやない、進めないんだよ。

立花。困つたな、そいつは。

三好。（初心な青年の一本氣で、）ああ、ほんとうに困つたんだよ。どうしていいか解らないんだ。君、どうすればいいのか、敎へてくれ給へ。

立花。そんな事はどうすればいいかつて、他からどうする事も出來やしないよ。結局、君は彼女を尊敬し過ぎるんだな。もつとも、俺だつて、つい女を尊敬し過ぎてしまふんだけれども。……どうも尊敬してしまふ事がいけないらしいんだ。

三好。さうかも知れないね。でも仕方がないんだもの。

立花。女といふものは、我々が天使だと考へると、即ち天使になるわけで、我々が天使だとも何とも思はなければ、つまり天使でも何でもないわけなんだからね。——ついその所を錯誤に陷つてしまふんだよ。もつとも、この錯誤には誰だつて男は一度や二度、いや、五度も十度も陷るわけなんだがね。——陷るまいと思つても、つひ陷つてしまふんだがね。

三好。だけれど、さうか知ら。

立花。それはさうなんだよ。と云つたからつて、別段女を輕蔑する事にはならないんだよ。女が我々男と同じに情慾を持つてゐるといふ事は、何も女を輕蔑した事ではなくつて、男だつて女だつて同じ心持で動いてゐるといふ事實を認

めるに過ぎないんだからね。

三好。……

立花。はははは、君がこの說に不服なのは解るよ。僕だつて、うつかりすると、自分のこの說を認めない事になつてしまふんだからね。……だが、君のやうに尊敬してしまつてゐては、どうともかうとも仕方がないからね。

三好。それは、ほんたうに仕方がないんだよ。

立花。そこで、君も思ひ切つて、女も男と同樣に情慾を持つてゐるといふ事を、忘れないで、ぶつかるんだな。

三好。だつて……

立花。いや、君が接吻したい衝動を感じた瞬間は、彼女も亦同じ衝動を感じてゐる瞬間だと思ふんだよ。

三好。そんな事思へやしないよ。

立花。(おつかぶせるやうに)それを思ふんだよ。

三好。さうかなあ。

立花。どうもその一手の外はないな。やりにくい一手だが、その一手の外にはないな。

三好。……(首をひねつて考へてゐる。)

立花。併しもうそろそろ君の彼女の現れる時刻だね。一つ勇氣を出すんだね。今日と明日の外ないんだからな。明日の夕方雨でも降れば、今日の外ないんだからな。――どれ、僕も僕の彼女……僕の「未亡人」でも探しに行くかな。

三好。君、居てくれ給へ。僕ひとりぢや……

立花。ははは、勇氣だよ。今日と云ふ時を除いたら、もう時が過ぎ去るんだよ。……理想化しないで、天使(エンヂエル)と思ひ込ま

ない。

(右手より退場。)

三好おちつかぬ樣子で歩き、おちつかぬ樣子で海水浴小舍の腰掛に腰かける。

三好。(獨語。)エンジエルと思はないで……(首を振る。)

みね子。小聲にて歌を歌ひながら、左手より登場。十八九の快活な少女。夕方の散歩にふさはしき派手な浴衣姿。

みね子。(三好を認め、歌を止める。)まあ、そんなところに腰かけていらつしやるの。お一人?

三好。ええ。

みね子。海もすつかり淋しくなりましたわね。あたしかうして歩いてゐると、何ですか心持が遠い遠い沖の方へ、妙に引き込まれて行くやうな氣がしてしまひますの。

三好。……

みね子。まあ、何か考へ事をしていらつしやいましたの。お邪魔?

三好。いいえ。

みね子。さう、そんならいいんですけれど。(小舍の腰掛に腰かける。)

三好。みね子さん。

みね子。なあに?

三好。(呼びかけて置きながら、もじもじする。間。)あのうやつぱり明後日東京にお歸りですか?

みね子。ええ、多分明後日になりますの。母が迎へに來ると云つてまゐりましたの。

三好。(次第に興奮して來る樣子。顏を上げ、又そのまま顏を下げる。)……

みね子。三好さんは、いつお歸り？

三好。僕は未だはつきりしないんですけれど、併し二三日中には歸らなければならないんです。……(決心したやうに)みね子さん。

みね子。なあに？

三好。ねえ、みね子さん。(間。立上る。頭を兩手で抱へる。)みね子さん、僕がお話しする事を聞いて下さい。ああ、僕はこんな事は云はないつもりだつた。默つてゐるつもりだつた。僕はこのままあなたとお別れするつもりだつたんです。でも駄目です。さうです。僕は云ひ出してしまつたんです。今の今まで迷つてゐたんです。いえ、僕には到底云ひ出せる筈がないと思つてゐたんです。それだのに、僕は云ひ出してしまひました。僕はどうして云ひ出してしまつたのか、自分でも自分が解りません。ああ、……

みね子。まあ、どうなさいましたの？(好意ある微笑。)何ですの？

三好。僕はあなたよりもずつと年が上です。それだのに、あなたの前では、まるで子供です。何と云つたらいいんでせう。あなたがどんなにお怒りになるか解りません。あなたがどんなにお驚きになるか……でも、僕は云ひ出してしまひました。僕はたうとう云ひ出してしまひました。ああ、僕はあなたにどんなに輕蔑されても、仕方がありません……

みね子。あら、あたしがどうしてあなたを輕蔑などするもんですか？　どうなさいましたの、三好さん。

三好。僕はあなたを愛してゐたのです。あなたにお目にかかつた時から愛してゐたのです。(その邊を歩きまはる。)あな

たは明後日お歸りになる。――僕はじつとしてゐられません。

みね子。まあ。

三好。みね子さん。僕を愛して下さい。（突然みね子の側に近寄り、みね子に接吻しようとする。）

（途端に人の足音聞える。）

みね子。誰か來ましたわ。（つと立上り、三好の手をすり拔けて、てれ隱しに歌を歌ひながら、左手に退場。）

（三好ぼんやりその後を見送つてゐる。○釣竿を持つた男、別莊の人らしく、髭など生えてゐる。魚籠を腰にぶら下げながら、暢氣な樣子で、右手から現れ、左手へ退場。）

三好。ああ、飛んでもない事をしてしまつた。もう取返しがつかない。――何だつて接吻などしようとしたらう。――あんな事さへしなければ。……みね子さんは俺を不良少年だと思ふだらう。みんなに云ひつけるだらう。みんなが俺を輕蔑するだらう。……ああ、俺は破滅だ。

（三好頭を掻きむしり、しよんぼりした足取りで、正面海水浴小舍の背後に退場。）

（立花、しづ子と共に右手より登場。しづ子、若く美しき未亡人。二十六七。淸楚な樣子。物ごし、言葉つきなど、すべて愼しまやか。）

しづ子。此處の海も、昔と較べますと、隨分違つてまゐりましたわ。わたくし未だほんの子供の時分から、一年の半分以上は此處で暮して居りましたの。病身だつたものでございますからね。――ほら御覽遊ばせ、向うに山が見えますわね、あの山がこの近邊では一番高い山なんださうでございますが、あの頂邊に松の木が一本生えて居りませう。あれが昔は五本もございましたの。それが、嵐の都度に、一本一本と折れて、たうとう今では唯の一本きりになつてし

まつたんでございますよ。

立花。ほう、さうですかね、五本もあつたんですかね。僕も三本あつた事は覺えてゐますよ。――たしか五年前でしたかね、あの大暴風雨のありましたのは。何でもあの前までは確に三本ありましたのが、あの嵐の翌朝起きて見ましたら、一本きりしかないので、改めて嵐の大きさを見せられた事がありましたよ。あれでも遠くから見ると小さな木のやうですけれど、側に寄ると、隨分の大木ですね。

しづ子。さうさう、立花さんもこの海岸は隨分前から御馴染でいらつしやいましたわね。――ほんとうにわたくし此土地が好きですわ。亡くなりました良人がよくさう申したんでございますよ。「お前は俺よりもこの土地が好きなんだ」なんて。おほほほほ。

立花。奥さんは……(もじもじして)僕、あなたを何と呼んでいいか解らないので、困るんですよ。よく。……ほんたうはしづ子さんて呼びたいんですが、どうもそいつも狎れ過ぎた感じがあるし、奥さんといふと、どうも、氣分にそぐはないし。……

しづ子。おほほ。何とでも宜しいやうにお呼び下さいまし。でも、お若い方から、しづ子さんなんてお呼ばれしますと、お婆さんにはそぐはない氣がいたしますわ。――わたくし、もうすつかり世捨人なんでざいますもの。

立花。世捨人なんて。……こんなにお若いのに。(再びもじもじして)あなたはこの海岸では、何と云つたらいいかな、僕こんな事云ふのは下手なんですが、つまり一口に云ふと、僕等の仲間で、あなたの事を、白百合と云つてゐるんですよ。

しづ子。まあ、嬉しうございますわ。……こんなお婆さんの白百合なんて。……でも白百合なら世捨人には、似合ひかも

知れませんわ。おほほほ。

立花。困るな、どうも。……しづ子さん、やつぱり僕からお呼びしたいんですが……、困るな、どうも。……(頭を掻き、併し勇氣をふるひ起したやうに、熱心になつて)しづ子さんは、いつ東京にお歸りです？

しづ子。わたくし……未だよく解りませんの。このまま秋まで此處にゐようかとも思つてゐるんでございますよ。――良人が生きて居りました時分には、九月になりますと、早々迎へに來てくれましたけれども、今は、東京に歸りましても、別段用事もございませんし。

立花。あなたが此處においでなら、僕も此處にゐようか知ら。……別段お邪魔ぢやないでせうか？

しづ子。何で邪魔な事がございますものですか。

立花。しづ子さん。困るな、どうも……未だ僕には呼びにくいんですよ、あなたのお名前が……僕は空想してゐたんですよ。若しあなたが最近に東京にお歸りになるやうですと、九月五日の音樂會にお伴願へるかと……

しづ子。音樂會ですの……近頃は音樂會にも行つて見たいと云ふ氣がしなくなりましたの、良人が生きて居りました時分には、良人がそれは音樂が好きだつたものですから、よく一緒にまゐりましたけれども。……良人は子供の時分から、外國に居りましたので、音樂といふと氣違のやうでございましたの。

立花。しづ子さん、僕……(次第に苛々して來る。)やつぱり、どうも……

しづ子。何でございますの？

立花。いえ、なに。(苦笑)……あなたは今何の御趣味もないんですか？

しづ子。ええ、別に、これと云つて。……勸められて、謡曲を少しやつてゐるんですけれども、でも、それはそれは

けものなんですの。

立花。謠曲を。……

しづ子。ええ、ほんの少しばかり。やつてゐると申すのは恥しい位。……それから繪も習ひたいと思つてゐるんでございますけれども、やつぱり駄目ですわ。才のないものは。

立花。繪はよござんすね。僕も繪は少しはやるんですよ。……西洋畫ですか、日本畫ですか？

しづ子。西洋畫ですの。

立花。西洋畫！それは素敵だ。これからはそろそろ自然の景色も色の變化が出て來ていい時分です。夏の間は、色がひと色で單調でしたけれど。……おまけに、この海岸は山と云つても、そんなに高くない丘陵が多くつて、變化に飛んでゐますよ。あなたが若し繪をお描きになるやうでしたら、僕も秋まで此處にゐて、御一緒に描いてもいいな。

しづ子。でも、わたくし學校時分に一寸描いたといふだけなんですの。とても御一緒に描けるやうなものぢやございませんの。

立花。いや僕だつて極初歩です。描くといふのが恥しい程度なんです。

しづ子。でも、男の人にはとても敵ひませんわ。——良人（たく）はフランスに居りました時分、大分習つた事があるらしいので、その中暇が出來たら、手解きをしてやる、などと申して居りましたんですけれど。……會社などに出て居りましたけれども、一體藝術が好きでございましてね。

立花。しづ子さん。（困惑した表情。）僕はあの……

しづ子。何ですの？

立花。いや、その……（頭を掻く。）僕はあなたがそんな風にして、いろいろな事から、つまり何ですな、世の中から離れていらつしやるのが、惜しくつて、惜しくつて仕方がないんです。あなたはもう一度世の中に出て行かなければならない方だと思へて、仕方がないんです。

しづ子。おほほほ。世の中の方で、もうわたくしなどに何の用もないと申しますわ。何の才能もない女は、良人の菩提を弔つてゐるのが相當だと申しますわ。

立花。直ぐあれだ。……いや、何と云つたらいいでせう。僕はあなたが惜しいんです。あなたが世捨人のやうな氣持でいらつしやるのが惜しいんです。（急き込んで）そのお美しさで、そのお若さで……

しづ子。おほほほ。立花さんは、見かけによらないお世辭のお上手な方ですわ。

立花。お世辭！……（ぎこちない調子で）僕はお世辭の云へる人間ではないつもりです。

しづ子。それはさうですわ。あなたはお世辭の云へる方ではありませんわ。ですから、そんな風なお世辭らしい事を被仰る時は、そんなに苦しさうな顏をなすつていらつしやるんでせう。

立花。しづ子さん、あなたは……あなたは……

少女Aの聲。（舞台に姿は見えず）しづ子さあん。

少女Bの聲。（同じく）お姉さまあ。

みね子の聲。（同じく併し近づいて來る。）しづ子さあん。

しづ子。はあい。（聲の方を振向き、一二歩きかける。）

立花。あの……（何か云ひかける。が、しづ子が振向くと何も云はない。もどかしさうに一人で舌打をする。）

（少女A、B、みね子、手を繋ぎ合はせて、左手より登場。少女Aはみね子と同年配。Bは十五六。）

少女A。まあ、此處にいらつしやいましたの。

少女B。お姉さま、貝を拾ひに行きません？

みね子。この方（少女Bを指さす）はあなたをお姉さまのやうな氣がして仕方がないんですつて。今もさう云つていらつしやつたんですよ。あんなお姉さまがあつたら、どんなに嬉しいだらうつて。

しづ子。まあ、（にこにこ笑ひながら、少女Bの手を取る。少女B、てれて、含羞みながら笑つてゐる。）あなたのやうに可愛らしい妹があつたら、わたくしだつてどんなに嬉しいか解りませんよ。かうして、かうして上げてよ。（少女の身體を抱へる。）

少女A。しづ子さんなら、あたしだつてお姉さんに欲しいわ。

みね子。あたしもこんなお姉さんを持つて、精いつぱい我儘が云つて見たいわ。

しづ子。おほほほ、大變な人氣ですことね。そんな事みなさんで被仰ると、すつかり自惚れてしまひますよ。

少女B。お姉さま、貝を拾ひに行きません？

少女A。昨夜波が高かつたものですから、今日は綺麗な貝が澤山流れついてゐますの。

しづ子。ええ、行きませう。（立花の方を振向き、にこやかに會釋し、少女達に手を取られながら、左手に退場。）

（間）

立花。（女達の後を見送り、その邊を四五歩歩く。）ああ、又「良人」だ。一言毎に「良人が生きて居りました時分」だ。そんな「良人」なんかに呪はれてあれだ！

（間、暮色少しづつ迫り來る。立花ぐつたりして、海水浴小舍の腰掛に腰を下ろす。）

立花。（苦笑しながら吐き出すやうに）何といふ不器用な何といふぶざま加減だらう。――ああ、俺の喋つてゐた事は、何といふ間の拔けた退屈な事ばかりだらう。――あんなに何も蚊も解つてゐながら、ああなればかうなるといふ事が解つてゐながら、どうしてその思ふ壺に這入つて行けないのだらう。（間。自嘲）エンジエルは俺達が作るのだと三好に云ひ聞かせて置きながら、自分の作つたエルジエルの前で、身動きもならないんだ。（間。）「良人」が……「良人」が……か。はははは。

（三好、悄然として、右手より登場。失心したものの如く、俯向いて、しづかに歩いて來る。）

立花。一分前には大丈夫だ。一分後には又大丈夫だ。といふ瞬間があれば、その大丈夫な一分と次の大丈夫な一分との間……さういふぶざまな合間ばかりを撰んで、俺は鍬を打ち込むのだ。解つてゐながらさうなるのだ。喋る側から失策つた。失策つたと思つてゐる阿呆らしさと云つたら……俺は子供の時分からさういふ一人角力ばかり取つてゐるが、ああ、ああ、俺はつくづく自分の氣質に飽々してゐるんだ。

（立花、頭を抱へて、思ひに耽り始める。

三好、立花に氣がつき、その側に近づく。）

三好。（力ない聲で）君は此處にゐたのか。

立花。（顏を上げる。）どうした。莫迦に悄然としてゐるぢやないか。

三好。ああ。僕は取返しのつかない事をしてしまつたんだ。僕はもう破滅だ。

立花。（三好の顏をじつと見つめる、苦笑に顏がゆがむ。）やつぱり君も失敗したのか？

三好。ああ、もう僕は誰とも合はせる顔がない。(ぐつたりして、立花と並んで腰を下ろす。) 僕は明日の朝東京に歸らうと思ふ。みね子さんは、僕を不良少年と思つたに違ひない。

立花。(頬笑む。) 君を不良少年などと思ふ筈はないよ。寧ろ君には不良少年の分子が、少しはあつた方がいいかも知れないんだ。

三好。(情なさうに) 君、君は飛んでもない事を教へてくれたよ。自分が接吻したいと思ふ瞬間は、彼女も同じく接吻したがつてゐる瞬間だなんて。

立花。ぢや、君はそれを實行しようとしたのか。

三好。ああ。僕は何だつてあんな事をしたらう。あんな事さへしなければ、未だ取返しがつくんだ。みね子さんは、僕を輕蔑してゐるに違ひない。僕の事を不良少年だとみんなに云ひ觸らしてゐるに違ひない。——ああ、僕は默つて今まで通り、心の中だけで思つてゐればよかつたんだ。——僕は彼女の輕蔑を招かずに濟んだのだ。(うつむく。)

立花。まあ、さう一圖に悲觀してしまふものぢやないよ。(三好の肩を叩く。)して、君がそれを實行しようとした時、みね子さんはどうしたんだい?

三好。(悲しき聲で、溜息をつくやうに) 立上つて行つてしまつたんだよ。

立花。立上つて。(間。突然笑ひ出す。)あつははは。それは併し考へ方の間違ひぢやないよ。僕が君に勸めた事の間違ひぢやないよ。さうぢやなくて、要するに君が不器用なんだよ。そこは僕と同じ事なんだ。

三好。……

立花。お互に時が掴めないんだ。ね、ピントが合せられないんだよ。君も僕もね。決して理論の誤まりぢやないよ。あ

つははは。(空虚な笑。)――決して悲觀する事はないよ、君。みね子さんが君を輕蔑するなんて、そんな事はあり得ないよ。根氣よくぶつかるんだな。めげずにぶつかるんだな。女といふものは、結局、己れに對する好意ばかりを探してゐるものだよ。

三好。(首を振る。)いや、僕はもう明日の朝歸る。僕はこれ以上輕蔑を招くやうな事はしたくないんだ。(頭を上げて、稍敵意を持つた感じで、)僕はもう君の理論なんか信じられないんだ。

立花。(一瞬間三好の顔を見つめる。が、間もなく眼をそらす。)それはそうかも知れない。君に信じられないのは無理がないかも知れない。(自嘲的に笑ふ。)僕自身だつて、實行にかかると、直ぐ理論を失ふんだから。

(間。二人の青年そのまま沈默してしまふ。)

(みね子登場。)

みね子。立花さん、あなたもいらつしやいつて。お一人でぽつねんとしていらつしやるのも可哀さうだから、呼んで來てお上げつて、しづ子さんの命令なのよ。(近づいて來る。)おや、三好さんも御一緒なのね。

(三好、うつむいてゐる。)

立花。どうも貝拾ひの仲間入もぞつとしませんね。かうしてゐた方が氣が樂でよござんすとしづ子さんに云つて下さい。

みね子。折角呼びに來て上げたのに、意地惡ね。

立花。貝を拾つたつてやる人もなし。あんなものは與る人でもなければ、男には拾へませんよ。

みね子。あたしにみんな下さればいいのに。

立花。あなたには拾つて上げたがつてゐる人が他にありますよ。

みね子。(蓮っ葉に) それぢやあなたになんか頼みませんよ。(三好に向つて、あどけなく) そんな事、三好さん、あなた一緒に來て下さらない？

三好。……

みね子。さあ、みんな待つてゐますの。御一緒にまゐりませう。つむじ曲りの立花さんの側なんかにゐると、あなたまでつむじが曲つてしまつてよ。(三好の手を取つて、無理に立上らせる。) さあ、まゐりませう。

三好。(手を取られて、不器用に立上る。何か胸の迫るやうな表情。引つぱられるままに三四歩引きずられるやうに歩きながら) みね子さん。僕をゆるしてくれますか。僕は魔がさしてゐたんです。僕は自制を失つたのです。僕はあんな事をするつもりはありませんでした。どうしてあんな事をしようとしたのか、自分で自分が解らないのです。ああ、僕を許して下さい。さつきの無禮をゆるして下さい。

みね子。(一寸立止つて、三好の顔を見る。) 何を云つていらつしやるの？

三好。僕はあれから煩悶してゐるのです。僕はどうしたら自分の罪がゆるされるかと、さつきから苦しんでゐるのです。――みね子さん、あなたがどんなに、お驚きになつたか、あなたがどんなにお怒りになつたかと、それぱつかり考へて……

みね子。あたしちつとも怒つてなどゐやしませんの、少しは吃驚はしましたけれど、でもちつとも怒つてなんかゐませんの。

三好。ああ、みね子さん、ほんたうですか。ほんたうに怒つてはいらつしやらなかつたのですか。

みね子。ええ、ちつとも。――(につこりして) でもあぶなかつたわ。人が來かかつて。

三好。ああ、ほんたうですか、ほんたうですか。

みね子。（突然飛びつくやうに、三好の耳に口を近づける。）そしてね、あたしほんたうは瞞しかしたのよ。（身をひるがへして小走りに退場。）

三好。（興奮し切つて）ああ、みね子さん、ああ、みね子さん！（後を追つて退場。）

立花。（見送つて、苦痛の表情、言葉は嘲笑的に）自由畫だ！自由畫の勝利だ！（小さき間。）遠近法を知らない人間の勝利だ！　あゝ！

（間。立花、立上つて、うつむき加減に、その邊を、一足一足考へ込むやうに歩きまはる。少女達の笑ふ聲など遠くに聞える。）

立花。俺には一里も二里も先から解つてゐる。遠くの方から解つてゐる。併し結局解らないと同じ事だ。一寸先が見えないと同じ事だ。手も足も出ないのだ。

（間。尙も歩きまはる。）

立花。やり直さう。始めからやり直さう。――相手の心を考へずにやり直さう。始めつから、始めつから。

（尙も無言で歩きつづけるが、やがて右手から退場。）

（遠く別莊の灯など見え始める。）

（青年池上、しづ子を伴ひて登場。池上は如何にも健康さうな青年で、恰幅もよく、センチメンタルな分子なし。）

しづ子。何の御用ですの？

池上。何の御用といふ程の事もありませんがね、それよりも、あなたこそ非常にお急ぎで、何の御用があるのです？

しづ子。何の御用つて、向うでお嬢さん方が待つていらつしやつたぢやありませんか。

池上。(笑ふ) 貝拾ひですか?

しづ子。(きつとなる。)そんなに頭から莫迦にするやうな調子をなさるものぢやありませんよ。――わたくしああして無邪氣な方達と一緒になつて、時を過してゐるのが一番樂しみなんですの。

池上。僕は又あなたが嘸退屈なすつていらつしやるだらうと思つて、大いに同情を寄せて、誘ひ出して上げたつもりなんですがね。

しづ子。御深切さまですこと。――お嬢さん方はわたくしを姉さん姉さんと云つて下さいますの。わたくしああして遊んでゐますと、すつかり無邪氣になつて、浮世の事も何もみんな忘れてしまひますの。

池上。そして世捨人は無邪氣な娘さん達のお伽をしながら、亡き良人(りやうじん)の菩提を弔ふのが丁度適當だつて云ふんでせう。

しづ子。わたくしの生活について、何もおせつかいな事は被仰つて頂きますまい。

池上。なるほど、それはさうですね。どうも人間といふものは困つたもので、自分の蚤は自分で取らなければなりませんからね。だがしづ子さん。――法則として人間は自分の蚤は自分で取らなければならないとしてもですね、あなたは御自分で、それを取らうとなさらないんですからな。――待つて下さい。こんなフランスの文學者なんかからの借物の比喩は、却つて物事を面倒にしますよ。もつとはつきり云ふとね。しづ子さん。あなたのお顔、意地張つて、御自分だけでは今のお生活が滿足だとひとり極めに極めようとしてゐらつしやるその意地張つたお顔の中に、(しづ子の額を指さす) どうも幸福はありませんからね。平和はあまりありませんからね。

しづ子。(悄さげに) あなたなんかにわたくしの心持ちがお解りになつて堪るもんですか。

池上。ところが解るのです。手に取るやうに解るのです。あなたは行ひすましたとお思ひになつて、一所懸命自足していらつしやる。ところが、あなたのお心の底では、押しこめられた魂が息切れ喘いで、救ひを求めてゐるのです。——ほら、(再びしづ子の顏を指さす。)ぎよつとしたような表情をなつすたでせう。あなただつてそれに氣がついていらつしやるんです。氣がついてゐるどころか、毎日それと戰つていらつしやるのです。ところが、困つたもんなのだ。何處までへんに間違つて行つてしまふか、實際何とも彼とも云はれない程困つた事なんだけれども、あなたはそれと戰つてゐれば、いつか平和な時が來ると思つてゐるんです。——平和なんか來るもんですか。未だ自分の行ひすまし方が足りないんだ、行ひすまし方が足りないんだとお思ひになつて、ほんたうの心が喘いでゐる事に耳を傾けずに、一所懸命未亡人振つた生活を送つていらつしやつたつて、あなたの心の平和が得られるもんですか。

しづ子。(首を上げて、何か云はうとする。)

池上。(おつかぶせるやうに) あなたのやうな方法で、平和を得ようと思ふなら、その前に、人間が早く年を取つてしまふ方法でも工夫した方が近道ですよ。

しづ子。(又何か云はうとして、そのまま、うな垂れる。)

池上。(笑ふ。)どうです。多少當らない事もないでせう。こんなに惱ましいなら、早く年を取つて、お婆さんになつてしまひたい、と云つたやうな事を、日に一遍や二遍考へない事はないでせう。

しづ子。(弱々しき反抗) あなたはわたくしを侮辱なさるんですの。

池上。いや、どういたしまして。何であなたを侮辱するもんですか。それよりも、あなたの御苦勞樣の御努力――人間がもう少し聰明になれば、誰だつて賞めなどしなくなるあなたの御骨折りが、失敬ながら見てゐられないのです
しづ子。(悲しき聲。)ですけれども、わたくし良人を愛して居りました。亡くなつた良人を愛して居りました。
池上。(しづ子の顏をじつと見つめ、優しく)それはほんとうでせう。ですけれども、御怒りにならないで、よく考へて御覽なさい。あなたは御良人を愛していらつしやつた事を、忘れたいと思ふ瞬間が、始終御心に來る事も、同じくほんとうでせう。
しづ子。いえ、いえ。(突然顏に袂を當てる。)「いえ」「いえ」と云ひつづけようとして身體をゆするが、聲は出ない。)
池上。ねえ、あなたは一番忘れたいとお思ひになる事を始終口にしていらつしやる。忘れたいと思ふ心持が強くなれば強くなるだけ、その事を始終口にしていらつしやる。
しづ子。(身を顫はして泣いてゐる。)……
池上。しづ子さん。僕は明日の朝、東京に歸る日です。そこで僕は大變急いでお話ししなければならないのです。(力を籠めて、壓倒的に。)僕はあなたを愛してゐるのです。
しづ子。えッ。(袂から顏を上げ、池上の顏をじつと見る。が、やがてうなだれる。)
(池上、しづ子の樣子を見つめてゐる。突然しづ子の唇を求める。しづ子弱々しき反抗をし、結局唇をる。池上しづ子を離す。しづ子再び袂を顏に當て、前よりも烈しく泣く。)
(間。)
池上。さあ、向ふに行きましよう。

（池上歩き出す。しづ子尚もじつと立つてゐる。）

池上。さあ、行きましよう。ね、あなたの忘れたいものは、はつきりと忘れるのです。あなたの心を脅かしてゐたものを總て忘れるのです。

（池上、小舍の裏手の方へ歩いて行く。途中で、振返る。）

池上。しづ子さん、結局あなたは來なければなりません。（憐むやうな微笑。）思ひきりよく、歩いていらつしやい。

（池上、海水浴小舍の裏手に歩み去る。しづ子、顏を上げ、海邊の少女達の方を振返る心持で、左手を振返り、躊躇らひ勝な足取りで、池上の去つた方へ、うなだれながらしづかに退場）

（舞台暫く空虚、暮色益々迫り、今まで目立たなかつた月、星など、空に形を表し始む。波の音。遠くで少女達の笑ひさざめく聲。）

（立花、右手より、最前去つた時と同じ心持で、うなだれながら歩いて來る。）

立花。何も彼もやり直しだ。始めつからやり直しだ。

（海水浴小舍の腰掛に腰を下ろす。暫く間。）

立花。相手の心持を顧慮するからいけないのだ。前以て考へてゐた通りに、單刀直入に進むべきなのだ。――しづ子さん、あなただつてそれを待つてゐるのだ。――よし。（立上る。）もう總ての迂廻はしないぞ。勇氣だ。勇氣だ。（左手に向つて歩き出す。舞台のはづれにて、更にもう一度）勇氣だ。（しづかに退場。）

（舞台暮れ切る。十一二日頃の月、暗い空に輝きを増す。幕）

（十五年七月）

定價		
	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

大正十五年七月二十日印刷
大正十五年八月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　高野敬錄
印刷人　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


夏はよし
青葉カルピス
ほとゝぎす
靜思の朝には……美味千金
活動の晝には……凉味萬斛
團欒の夕には……滋味無量
滋強飲料
カルピス
カルピス
CALPIS

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



涼を趁ふて海に山に

避暑旅行の御用意は三越呉服店

海に、山に避暑旅行の好季節となりました。三越では其の御用意の爲め、品が良くて、値段の廉い、携帯に便利な旅行用具を初め、海水浴用品、登山用具、食料品等澤山に取揃へました。何卒御用命の程願上げます

◆御旅行品十種◆

◆服入鞄（尺六）…廿五圓位より
◆バスケット（尺二）…二圓位より
◆登山服（上下）…十五圓位より
◆リユツクサツク（菱形）…四圓位より
◆テント（二人）…三十圓位より
◆海水着（メリヤス製）…二圓位より
◆海水帽（ゴム製）…一圓位より
◆寫眞機（ピコレツト）…十五圓五十錢
◆携帯用食器（五種入）…九十五錢より
◆携帯用薬品（内用八種八）…一圓九十五錢

東京

越

三越呉服店